一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５

沖手遺跡
専光寺脇遺跡

― 中世の大規模集落遺跡と弥生時代の墳丘墓 ―

２００８年３月

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５

沖手遺跡
専光寺脇遺跡

― 中世の大規模集落遺跡と弥生時代の墳丘墓 ―

２００８年３月

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

沖手遺跡遠景（南上空から）

沖手遺跡遠景（北上空から）

沖手遺跡　4 区西側建物群（東から）

沖手遺跡　墓15青磁出土

沖手遺跡　3 区南壁土層

沖手遺跡　丸木舟 1

専光寺脇遺跡　1 号墓

専光寺脇遺跡　2 号墓

序

一般国道９号は、京都府京都市を起点として山口県下関市にいたる総延長約670キロメートルの主要幹線道路であり、山陰地方諸都市を結び、沿線各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所においては、益田市内における一般国道９号の交通混雑の緩和、安全・円滑な交通を確保及び萩・石見空港へのアクセス強化を図ることを目的として、益田道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の協力のもとに平成13年度から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成17年度に実施した沖手遺跡と、平成18年度に実施した専光寺脇遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行なわれていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成20年３月

国土交通省中国地方整備局
浜田河川国道事務所
所長　野村芳包

序

本報告書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成17年度に実施した益田道路建設予定地内の沖手遺跡と平成18年度に実施した専光寺脇遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

益田市は、北は日本海に面して平野が広がり、古くから石見地方西部の玄関口にあたる地域で、埋蔵文化財を含め数多くの歴史的文化遺産が存在します。

今回の沖手遺跡の調査では、中世から近世初頭にかけて大規模な集落跡が存在したことが明らかになりました。出土遺物の中には、中国や朝鮮半島、国内の各地で生産された陶磁器も多数見られ、中世の交易・流通を考える上で重要な遺跡と考えられます。

また、専光寺脇遺跡では弥生時代の方形貼石墓が確認され、この時代の墳墓の様子を知る上で貴重な資料が得られました。

本書が、この地域における人々の暮らしや、それを取り巻く自然環境について後世に伝える基礎資料となり、歴史と文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

終わりにあたり、発掘調査及び本書の作成につきまして、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめ、益田市教育委員会など地元の方々、ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

島根県教育委員会教育長

藤　原　義　光

例　言

1．本書は国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、島根県教育委員会が平成17～18年度に実施した一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査地は以下のとおりである。

沖手遺跡２～４区：島根県益田市久城町60外

専光寺脇遺跡：島根県益田市久城町1264－１外

なお、沖手遺跡１区は、『沖手遺跡　－１区の調査－』（一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３　2006）（以下、「１区報告書」と呼ぶ）として刊行されているが、調査成果について遺跡全体で評価するために再度整理・検討を行なった。

3．調査主体　島根県教育委員会

調査に関する経費は国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所が負担した。

調査組織は本文中に記した。

4．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標Ｘ軸の方向を指す。また、平面直角座標系ＸＹ軸は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。

5．現地調査および報告書作成にあたって下記の方々から御指導、御助言、御協力を頂いた（五十音順、敬称略）。

石橋茂登（文化庁文化財部美術学芸課）、伊東隆夫（京都大学名誉教授）、井上寛司（島根大学名誉教授）、岩崎仁志（山口県教育委員会）、大庭康時（福岡市教育委員会主査）、大山喬平（立命館大学教授）、小野正敏（国立歴史民俗博物館副館長）、古賀信幸（山口市市史編纂室）、榊原博英（浜田市教育委員会）、狭川真一（元興寺文化財研究所）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、中川正人（滋賀県立安土城考古博物館）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、仁木　聡（島根県立古代出雲歴史博物館）、乗岡　実（岡山市デジタルミュージアム博物館副専門監）、原田昌幸（文化庁文化財部美術学芸課）、林　正久（島根大学教授）、藤澤良祐（愛知学院大学教授）、藤田憲司（大阪府立近つ飛鳥博物館）、松下孝幸（土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長）、村上　勇（広島県立美術館次長兼学芸課長）、山本信夫（山本考古学研究所）、渡邊貞幸（島根大学教授）、滋賀県立安土城考古博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、津和野町教育委員会、浜田市教育委員会、益田公民館、益田市教育委員会、益田市立歴史民俗資料館、美東町教育委員会、山口市教育委員会、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

6．第２図は国土地理院発行の1/50,000図「益田」（昭和51年）、「日原」（昭和42年）を使用した。また、第３・151図は益田市都市計画図を使用した。

7．巻頭図版１、図版１・３・４－１・６－１・15・24－１・89・90の写真は国際航業株式会社が撮影した。

8．現地の実測図は調査員、調査補助員が作成した。本書に掲載した遺物の実測は、担当調査員・調査補助員ほかが行なった。現地及び遺物の写真は東山信治が撮影した。

9．本報告書の執筆・編集は、島根県埋蔵文化財調査センター職員の協力・助言を得て東山が行なった。

10. 自然科学分析は下記に委託及び依頼し、その結果については第５章に掲載した。
沖手遺跡出土瓦質土器の胎土分析：白石純（岡山理科大学自然科学研究所）
沖手遺跡出土の中・近世人骨：松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）
沖手遺跡の鍛冶・鋳造遺物の金属学的分析：ＪＦＥテクノリサーチ株式会社
沖手遺跡出土木材・植物遺体の鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社
沖手遺跡の土壌・花粉分析：文化財調査コンサルタント株式会社
沖手遺跡・専光寺脇遺跡の放射性炭素年代測定：株式会社地球科学研究所
11. 本書に掲載した遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

凡　例

１．沖手遺跡の遺構名称は、（掘立柱）建物跡、柱列、溝状遺構、石列、井戸、墓については、「１区報告書」の記載を踏襲し、そこから通し番号でつけている。ただし、挿図中では、「建」「溝」など省略して用いる場合もある。

なお、その他の性格不明の土坑や柱穴については、現地調査時の遺構名の前に調査区の番号を付して表記している（例：２－SK02，２－P216）。

２．本文・挿図・写真図版中の遺物番号は一致する。

３．遺物観察表の色調は『標準土色帖』を参考にした。

４．本書で用いた遺物の分類及び編年観は基本的に下記の各論文・報告書を参考にした。

（弥生土器）

松本岩雄　1992　「石見地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社

（瓦質土器）

岩崎仁志　1990　「防長型擂鉢について」『山口考古』19　山口考古学会
岩崎仁志　1999　「足鍋再考」『陶塤』12　山口県埋蔵文化財センター
岩崎仁志　2007　「山陽西部における中世の土製煮沸具　－周防・長門を中心に－」『中近世土器の基礎研究』21　日本中世土器研究会

（陶磁器）

岡山県教育委員会　2002『山崎古窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告167
重根弘和　2003「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念論文集　近藤喬一先生退官記念事業会
愛知県史編纂委員会編　2006『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』２
上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』２
小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』２

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯（東山信治）…… 1
第２章　遺跡の位置と環境（東山）…… 2
　第１節　遺跡の位置 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　沖手遺跡（東山） …… 7
　第１節　調査の概要 …… 7
　第２節　中世の遺構・遺物 …… 14
　第３節　下層の調査 …… 150
　第４節　総括 …… 168
第４章　専光寺脇遺跡（東山）…… 224
　第１節　調査の概要 …… 224
　第２節　調査の結果 …… 229
　第３節　総括 …… 249
第５章　自然科学分析 …… 255
　第１節　沖手遺跡出土瓦質土器の胎土分析（白石　純・東山）…… 255
　第２節　沖手遺跡出土の中・近世人骨（松下孝幸）…… 282
　第３節　沖手遺跡の鍛冶・鋳造関連遺物（分析資料）の考古学的観察（東山）…… 303
　第４節　沖手遺跡の鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的分析調査
　　（JFEテクノリサーチ株式会社） …… 311
　第５節　沖手遺跡出土木材・植物遺体の鑑定（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 355
　第６節　沖手遺跡出土木製品の樹種（伊東隆夫）…… 366
　第７節　沖手遺跡発掘調査にかかる自然科学分析（文化財調査コンサルタント株式会社）… 369
　第８節　沖手遺跡・専光寺脇遺跡の放射線炭素年代測定（株式会社地球科学研究所）…… 381

挿図目次

第１図　沖手遺跡と専光寺脇遺跡の位置 …… 1
第２図　調査地周辺の遺跡 …… 3
第３図　沖手遺跡調査区配置図 …… 8
第４図　グリッド設定図 …… 9
第５図　沖手遺跡下層調査区位置図 …… 10
第６図　沖手遺跡２区土層図 …… 11
第７図　沖手遺跡３区南壁土層図 …… 12
第８図　４－３・２・４トレンチ土層図 …… 13
第９図　１区西側・２区遺構図 …… 16～17
第10図　１区東側・３区遺構図 …… 18～19
第11図　１区南西部遺構図 …… 20
第12図　建物跡７～９ …… 21
第13図　建物跡10～12 …… 22
第14図　柱列１・２，建物跡13，
　　１区南西部建物跡・柱列出土遺物 …… 24
第15図　１区南側中央部遺構図 …… 25
第16図　建物跡14 …… 26
第17図　建物跡15～17 …… 27
第18図　建物跡18・19，柱列３ …… 28
第19図　柱列４～10 …… 29
第20図　１区南東部・２区北東部遺構図 …… 30
第21図　建物跡20・21 …… 31
第22図　建物跡22～24 …… 32
第23図　建物跡25，柱列11 …… 34
第24図　建物跡22・25出土遺物 …… 34
第25図　建物跡26・27 …… 35
第26図　建物跡26・27柱穴 …… 36
第27図　建物跡28～30 …… 36
第28図　建物跡31・32，柱列12 …… 38
第29図　建物跡33 …… 39
第30図　建物跡28・32・33，柱列12出土遺物 …… 39
第31図　２区東側遺構図 …… 40
第32図　建物跡34 …… 40
第33図　建物跡35・36 …… 41
第34図　建物跡37・38 …… 42
第35図　建物跡39 …… 43
第36図　３区東側遺構図 …… 44
第37図　建物跡40 …… 46
第38図　建物跡41 …… 47
第39図　建物跡42 …… 48
第40図　建物跡43 …… 49
第41図　建物跡44・45 …… 50
第42図　建物跡46，柱列13 …… 51
第43図　溝状遺構３～７ …… 52
第44図　溝状遺構３・４東側 …… 53
第45図　溝状遺構３・４西側 …… 54
第46図　溝状遺構３～７断面図 …… 55
第47図　溝状遺構３・４出土遺物 …… 56
第48図　溝状遺構８全体図 …… 57
第49図　溝状遺構８東側 …… 57
第50図　溝状遺構８西側 …… 58
第51図　溝状遺構８出土土器・陶磁器 …… 59
第52図　溝状遺構８出土石製品 …… 60
第53図　石列２ …… 61
第54図　溝状遺構９ …… 61
第55図　井戸６ …… 62
第56図　井戸６出土木製品 …… 63
第57図　墓７ …… 65
第58図　墓７出土遺物 …… 66
第59図　墓８～11 …… 67
第60図　墓12・13 …… 68
第61図　建物跡１周辺遺構図 …… 69
第62図　１－Ｐ880 …… 69
第63図　１－Ｐ880出土遺物 …… 69
第64図　１～３区土坑・柱穴 …… 70
第65図　１～３区土坑・柱穴・その他の遺構出土遺物 …… 71
第66図　４区西側遺構図 …… 74～75
第67図　建物跡47～49 …… 77
第68図　建物跡50 …… 78
第69図　建物跡51・52 …… 79
第70図　建物跡53 …… 80
第71図　建物跡54 …… 81
第72図　建物跡55 …… 82
第73図　建物跡56・57 …… 83
第74図　建物跡58 …… 84
第75図　建物跡59～61 …… 85
第76図　建物跡62 …… 86
第77図　建物跡63 …… 87
第78図　建物跡63柱穴断面図 …… 88
第79図　建物跡64 …… 90
第80図　建物跡64柱穴 …… 91
第81図　柱列14，溝状遺構10 …… 92
第82図　柱列15，溝状遺構11 …… 92
第83図　柱列16 …… 92
第84図　柱列17～19 …… 93
第85図　溝状遺構12，４－SK87・93 …… 93
第86図　溝状遺構13 …… 93
第87図　４区西側建物跡・柱列・溝状遺構出土遺物 …… 94
第88図　墓14 …… 96
第89図　墓15 …… 98
第90図　墓17～19 …… 99
第91図　４区西側土坑・柱穴 …… 100
第92図　４区東側遺構配置図 …… 102～103
第93図　建物跡65～67 …… 105
第94図　建物跡68・69，柱列20 …… 106
第95図　建物跡70・71，柱列21 …… 107
第96図　建物跡72 …… 108
第97図　建物跡73 …… 109
第98図　建物跡74・75 …… 110
第99図　建物跡76 …… 111
第100図　建物跡66・68・69・72～74・76出土遺物 …… 112
第101図　柱列22・23 …… 113
第102図　溝状遺構14 …… 115
第103図　溝状遺構15 …… 116
第104図　溝状遺構16 …… 117
第105図　４区石列３ …… 118
第106図　石列４～６ …… 119
第107図　墓20～26 …… 120
第108図　墓27～29，墓20～29出土遺物 …… 122
第109図　墓30～32 …… 123
第110図　墓30～32出土遺物 …… 124
第111図　墓33～37 …… 126
第112図　墓38 …… 128
第113図　墓34・35・38出土遺物 …… 128
第114図　溝状遺構17 …… 129
第115図　４区東側土坑・柱穴 …… 130
第116図　４区東側土坑・柱穴出土遺物（１） …… 131

第117図　４区東側柱穴出土遺物 …… 132
第118図　古墳時代～古代の須恵器，中世の土師器（坏・皿） … 133
第119図　土師器・瓦質土器（煮沸具類） …… 135
第120図　土師器・瓦質土器（調理具・貯蔵具・その他） …… 136
第121図　瓦質土器（火鉢） …… 137
第122図　中世須恵器・国産陶器 …… 138
第123図　白磁 …… 140
第124図　青磁・中国青花 …… 141
第125図　中国陶器・朝鮮王朝陶磁 …… 142
第126図　瓦・土製品・石製品 …… 143
第127図　鉄製品・銭貨・銅製品 …… 145
第128図　湖州鏡 …… 146
第129図　鍛冶・鋳造関連遺物構成図 …… 147
第130図　鍛冶・鋳造関連遺物 …… 148
第131図　鍛冶・鋳造関連遺物 …… 149
第132図　２区下層測量図 …… 151
第133図　２区下層杭列 …… 152
第134図　２区下層出土杭 …… 152
第135図　２区４～７層出土遺物 …… 153
第136図　３－１・２トレンチ実測図 …… 155
第137図　３区４～６層出土遺物 …… 156
第138図　溝状遺構22・23 …… 157
第139図　溝状遺構22・23土層図 …… 158
第140図　溝状遺構22東側杭列 …… 158
第141図　溝状遺構22西側杭列 …… 159
第142図　溝状遺構22に伴う杭 …… 160
第143図　溝状遺構22遺物出土状態 …… 161
第144図　溝状遺構22出土遺物（１） …… 162
第145図　溝状遺構22出土遺物（２） …… 163
第146図　丸木舟出土状態 …… 165
第147図　丸木舟１・２，３区８層出土遺物 …… 166
第148図　沖手遺跡中世の遺構全体図 …… 172～173
第149図　沖手遺跡１～４区遺物分布図（１） …… 175
第150図　沖手遺跡１～４区遺物分布図（２） …… 176
第151図　専光寺脇遺跡調査区位置図 …… 224
第152図　調査前地形測量図 …… 226
第153図　調査後地形測量図 …… 227
第154図　調査区土層図 …… 228
第155図　１号墓貼石検出状態（転落石含む） …… 230
第156図　１号墓土層図 …… 231
第157図　１号墓墳丘測量図 …… 232
第158図　１号墓貼石実測図 …… 233
第159図　１号墓墳丘測量図（貼石・盛土除去後） …… 234
第160図　１号墓第１主体 …… 235
第161図　２号墓周辺遺構図 …… 237
第162図　２号墓東溝，貼石列，SX04（１） …… 238
第163図　２号墓東溝，貼石列，SX04（２） …… 239
第164図　２号墓第１主体 …… 240
第165図　２号墓第２～４主体 …… 241
第166図　SK11～13・15，P９ …… 243
第167図　SK01～03 …… 244
第168図　SK04・05・07～10 …… 245
第169図　SK16，SX03 …… 246
第170図　専光寺脇遺跡遺物分布状況 …… 247
第171図　遺構に伴わない遺物 …… 248
第172図　方形貼石墓分布図 …… 251

表　目　次

表１　調査地周辺の遺跡一覧表 …… 4
表２　山陰地方で出土した丸木舟 …… 168
表３　沖手遺跡１～４区遺構変遷表 …… 170
表４　沖手遺跡土器・陶磁器組成表 …… 180
表５　貿易陶磁時期別分類表 …… 181
表６　沖手遺跡建物跡一覧表 …… 184
表７　沖手遺跡建物跡計測表 …… 185～197
表８　沖手遺跡柱列一覧表 …… 197
表９　沖手遺跡柱列計測表 …… 198～199
表10　沖手遺跡井戸一覧表 …… 200
表11　沖手遺跡墓一覧表 …… 200
表12　沖手遺跡土器・陶磁器観察表 …… 201～213
表13　沖手遺跡土製品観察表 …… 213～214
表14　沖手遺跡石製品観察表 …… 214
表15　沖手遺跡出土木製品観察表 …… 215
表16　沖手遺跡金属製品観察表 …… 216
表17　沖手遺跡出土銭貨観察表 …… 217
表18　沖手遺跡鍛冶・鋳造関連遺物観察表 …… 217～218
表19　古墳時代～古代遺物分類表 …… 219
表20　中世土師器・瓦質土器分類表 …… 219
表21　国産陶器・産地不明陶器分類表 …… 219
表22　沖手遺跡瀬戸製品組成表 …… 219
表23　近世陶器分類表 …… 220
表24　近世磁器分類表 …… 220
表25　白磁分類表（大分類） …… 220
表26　白磁分類表（細分） …… 220～221
表27　青磁分類表（大分類） …… 221
表28　青磁分類表（細分） …… 222
表29　中国青花・五彩分類表 …… 223
表30　中国陶器分類表 …… 223
表31　朝鮮王朝陶磁分類表 …… 223
表32　瓦・土製品・石製品分類表 …… 223
表33　鍛冶・鋳造関連遺物分類表 …… 223
表34　方形貼石墓一覧表 …… 251
表35　専光寺脇遺跡遺構計測表 …… 254
表36　専光寺脇遺跡土器・陶磁器観察表 …… 254
表37　専光寺脇遺跡石器観察表 …… 254
表38　専光寺脇遺跡金属製品観察表 …… 254

巻頭写真図版

図版１－１　沖手遺跡遠景（南上空から）
　　－２　沖手遺跡遠景（北上空から）
図版２－１　沖手遺跡　４区西側建物群（東から）
　　－２　沖手遺跡　墓15青磁出土
図版３－１　沖手遺跡　３区南壁土層
　　－２　沖手遺跡　丸木舟１
図版４－１　専光寺脇遺跡　１号墓
　　－２　専光寺脇遺跡　２号墓

本文中写真

写真１　丸木舟上面検出状況 …… 164

写真図版

図版１－１　沖手遺跡遠景（南東上空から）
　　－２　沖手遺跡俯瞰写真
図版２－１　２区南壁土層
　　－２　３区南壁土層
図版３－１　１区全景
　　－２　１区南側遺構群
図版４－１　２区全景
　　－２　２区近景（南西から）
図版５－１　建物跡26・27
　　－２　建物跡32・33
　　－３　建物跡34・35
図版６－１　３区全景
　　－２　３区近景（東から）
　　－３　３区東側遺構群
図版７－１　溝状遺構３　西側検出
　　－２　溝状遺構３　土層
　　－３　溝状遺構８　石検出
図版８－１　井戸６　石・木材検出
　　－２　井戸６　竹箍検出
　　－３　井戸６　井筒検出
図版９－１　墓７
　　－２　墓７　人骨出土
　　－３　墓７　棺外遺物出土
図版10－１　墓７　卒塔婆（58－８）出土
　　－２　墓８　墓壙上部集石
　　－３　墓８　棺検出
図版11－１　墓９
　　－２　墓10　墓壙上部配石
　　－３　墓10　歯・土師器出土
図版12－１　墓11
　　－２　墓13
　　－３　墓13　人骨出土
図版13－１　建物跡１周辺の遺構
　　－２　１－Ｐ880
　　－３　２－SK10
図版14－１　柱列12　２－Ｐ943
　　－２　建物跡39　２－Ｐ216
　　－３　２－Ｐ684
図版15－１　４区全景
　　－２　４区西側遺構群（真上から）
図版16－１　４区西側遺構群（東から）
　　－２　建物跡47
　　－３　建物跡53周辺
図版17－１　建物跡58・59周辺
　　－２　建物跡64
　　－３　４－SK86・93
図版18－１　墓14　墓壙上部集石（西から）
　　－２　墓14　墓壙上部集石（北から）
　　－３　墓14　掘り方検出
図版19－１　墓14（北から）
　　－２　墓14（東から）
　　－３　墓14　遺物出土
図版20－１　墓15（北西から）
　　－２　墓15（南西から）
図版21－１　墓15　青磁出土
　　－２　墓16
　　－３　墓17
図版22－１　墓18
　　－２　墓19　人骨出土
　　－３　墓19　棺外遺物出土
図版23－１　柱列16　４－Ｐ3672
　　－２　柱列19　４－Ｐ3508
　　－３　４－Ｐ3610
図版24－１　４区東側遺構群（真上から）
　　－２　４区東側遺構群（東から）
図版25－１　溝状遺構15
　　－２　石列５・６
　　－３　墓20
図版26－１　墓22
　　－２　墓24
　　－３　墓25
図版27－１　墓25　人骨出土
　　－２　墓26　棺蓋・棺外遺物検出
　　－３　墓26　棺底検出
図版28－１　墓27
　　－２　墓28
　　－３　墓29
図版29－１　墓30
　　－２　墓30　棺蓋の桶検出
　　－３　墓30　人骨出土
図版30－１　墓32
　　－２　墓32　棺蓋検出
　　－３　墓32　人骨出土
図版31－１　墓33
　　－２　墓34・35　切り合い関係
　　－３　墓34　人骨出土
図版32－１　墓35　人骨出土
　　－２　墓36
　　－３　墓37
図版33－１　墓38
　　－２　墓38　人骨出土
　　－３　墓38　木製品（113－４）出土
図版34－１　４－SK26
　　－２　４－SK27
　　－３　４－SK28
図版35－１　４－SK30
　　－２　４－SK31
　　－３　建物跡66　４－Ｐ2574
図版36－１　建物跡68　４－Ｐ2736
　　－２　柱列22　４－Ｐ1631
　　－３　柱列22　４－Ｐ1608
図版37－１　２区下層調査区
　　－２　２区４層土師器出土
　　－３　２区下層杭列
図版38－１　２区下層杭列
　　－２　３－１トレンチ　溝状遺構18
　　－３　３－２トレンチ　溝状遺構19～21
図版39－１　溝状遺構22　検出
　　－２　溝状遺構22　遺物・流木検出
　　－３　溝状遺構22　木製品・流木出土
図版40－１　溝状遺構22　完掘
　　－２　溝状遺構22　杭列（南から）
　　－３　溝状遺構22　杭列（北から）
図版41－１　丸木舟１・２出土
　　－２　丸木舟１（舟首側から）
図版42－１　丸木舟１（舟尾側から）
　　－２　丸木舟１（西から）

図版43－1　丸木舟1　礫除去後（舟尾側から）
－2　丸木舟1　舟尾
図版44－1　丸木舟2（舟首側から）
－2　丸木舟2（舟尾側から）
図版45－1　丸木舟2（舟首側から）
－2　丸木舟2（西から）
－3　丸木舟2　舟尾
図版46　丸木舟取り上げ作業
図版47　古墳時代～古代の須恵器
図版48　土師器　坏・皿類（1）
図版49　土師器　坏・皿類（2）
図版50　土師器　坏・皿類（3）
図版51－1　土師器　坏・皿類（4）
－2　土師器　鍋
図版52　土師器・瓦質土器　鍋
図版53　土師器・瓦質土器　羽釜・湯釜・鉢・擂鉢
図版54　瓦質土器　鉢・擂鉢
図版55－1　瓦質土器　甕・その他
－2　瓦質土器　火鉢
図版56－1　中世須恵器（東播系）
－2　備前焼　擂鉢
図版57　備前焼
図版58　備前系陶器、瓷器系陶器、瀬戸
図版59　肥前系陶磁器
図版60　墓14出土白磁
図版61　墓15出土青磁
図版62　墓15出土青磁、白磁・青白磁
図版63　白磁
図版64　青磁（1）
図版65　青磁（2）
図版66　青磁（3）
図版67　中国青花
図版68　中国陶器
図版69　朝鮮陶磁
図版70　瓦類
図版71－1　土製品
－2　滑石製石鍋
図版72　石製品（1）
図版73－1　石製品（2）
－2　鉄製品（1）
図版74　鉄製品（2）
図版75－1　銭貨・銅製品
－2　湖州鏡
図版76　井戸6　木製品
図版77　井戸6・墓7　木製品
図版78　墓7　木製品
図版79－1　墓19　漆器椀
－2　墓34　櫛
－3　墓38　木製品
図版80－1　墓32　棺桶蓋
－2　墓34　棺底板
図版81　鋳造・鍛冶関連遺物（1）
図版82　鋳造・鍛冶関連遺物（2）
図版83　2区下層出土土器
図版84　3区下層・溝状遺構22出土土器
2・3区下層・溝状遺構22出土石器
図版85　溝状遺構22　弥生土器壺
図版86　2区下層・溝状遺構22に伴う杭
図版87　溝状遺構22　木製品
図版88　溝状遺構22・3区8層　木製品
図版89－1　専光寺脇遺跡周辺地形（真上から）
－2　専光寺脇遺跡遠景（北西から）
図版90－1　専光寺脇遺跡遠景（南東から）
－2　専光寺脇遺跡遠景（北東から）
図版91－1　専光寺脇遺跡　調査前近景（東から）
－2　1号墓　調査前（北西から）
－3　仮称「2号墳」（調査前）
図版92－1　1号墓東溝検出
－2　1号墓西溝（貼石の転落石検出）
図版93－1　1号墓東溝土層
－2　1号墓東斜面貼石（転落石含む、東から）
－3　同　（南東から）
図版94－1　1号墓西溝　貼石の転落石検出（東から）
－2　同　（北から）
－3　1号墓西溝断面
図版95－1　1号墓（東から）
－2　1号墓（西から）
図版96－1　1号墓東斜面貼石（南東から）
－2　1号墓東斜面北側貼石（南東から）
－3　同　（東から）
図版97－1　1号墓東斜面貼石断面
－2　1号墓南斜面貼石（南から）
－3　同　（南西から）
図版98－1　1号墓（盛土・貼石除去後）
－2　1号墓西側墳裾
－3　1号墓　第1主体
図版99－1　2号墓全景（転落石含む）
－2　2号墓東溝・貼石列（転落石含む、東から）
－3　同　（北東から）
図版100－1　2号墓全景（転落石除去後）
－2　2号墓東溝・貼石列（転落石除去後、東から）
図版101－1　2号墓東溝・貼石列（北から）
－2　2号墓東溝断面
図版102－1　2号墓東溝・貼石列（北東から）
－2　同　（土層ベルト除去後）
図版103－1　2号墓全景（東溝完掘後）
－2　2号墓全景（SX04完掘後）
－3　2号墓東溝・SX04完掘
図版104－1　2号墓　第1主体
－2　2号墓　第3主体
－3　2号墓　第4主体土層
図版105－1　2号墓　第4主体完掘
－2　SK12
－3　SK13土層
図版106－1　SK13礫検出
－2　SK15
－3　P9
図版107－1　SK01
－2　SK03土層
－3　SK04
図版108－1　SK05
－2　第154図A－A'ライン土層
－3　SX03完掘
図版109　出土遺物

第 1 章　調査に至る経緯

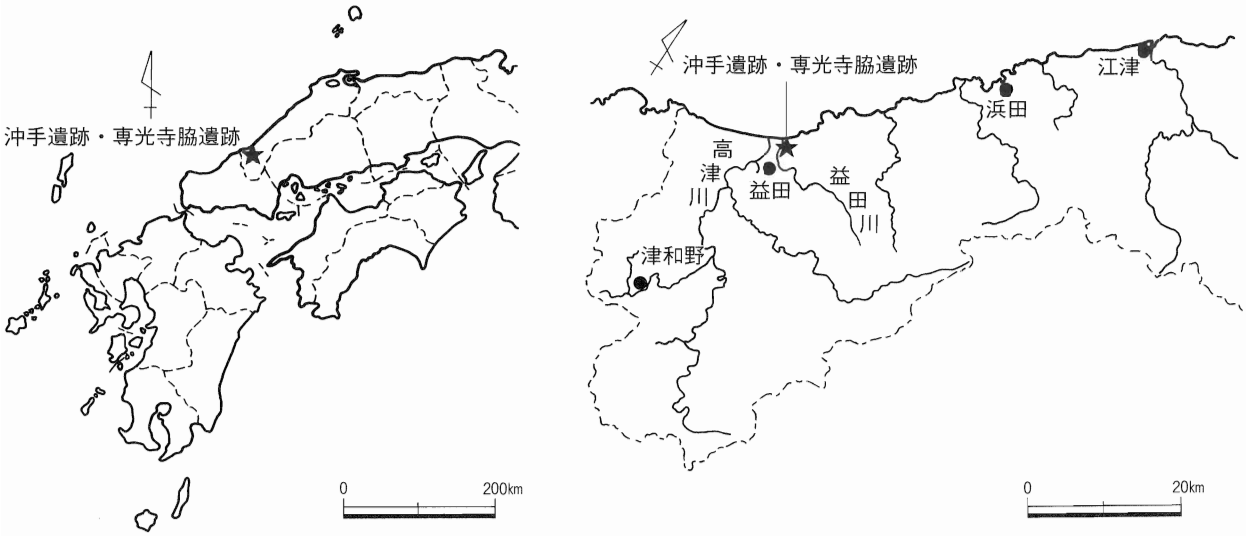
一般国道９号は、京都府京都市から山口県下関市にいたる総延長約670㎞の主要幹線道路である。この道路はまた、山陰地方の諸都市を東西に結ぶ唯一の幹線道路であり、経済的活動・文化的活動に重要な役割を果たしている。

しかし、近年は交通量の増加と沿線の市街地化の影響により、都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境に支障が生じている。このことは益田市においても例外ではなく、一般国道９号及び191号が市内中心部で交差するという地理的要因もあり、交通混雑が慢性的に発生し、都市機能に悪影響を及ぼしている。こうした状況のもと、交通混雑を緩和して円滑・安全な交通を確保し、地域社会の発展に資するために、平成８年度に建設省（現　国土交通省）により、益田市遠田町～益田市須子町にいたる延長7.8㎞の区間で、益田道路の建設が計画・事業化されることとなった。

この計画・事業化にあたり、建設省から島根県教育委員会に対して、益田道路建設予定地内の遺跡の有無について照会があり、これを受けて益田市教育委員会の協力のもと、平成10年度に予定地内における遺跡の分布調査が実施された。この結果、建設予定地において24か所の遺跡及び遺跡推定地を確認するとともに、建設省に遺跡の取り扱いについて協議が必要な旨を回答した。

その後、建設省と島根県教育委員会との協議を経て、平成11年11月25日付で建設省浜田河川国道事務所長名で文化財保護法第57条の３（現第94条）に基づく、道路予定地内遺跡における土木工事の通知が島根県教育委員会教育長に対して行われ、これに対して島根県教育委員会は工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。

上記の法的手続きに基づき、島根県教育委員会は平成13年度から建設予定地内遺跡の発掘調査を開始し、平成16年度までに高津川以西の廿子Ⅰ遺跡、廿子Ⅲ遺跡、浜寄・地方遺跡などの現地調査を終了した。平成16・17年度には益田川東岸の沖手遺跡の発掘調査を実施し、平成18年度以降は益田川東岸の丘陵地帯に位置する専光寺脇遺跡、久城西Ⅰ遺跡、久城西Ⅱ遺跡、若葉台遺跡、原浜遺跡などを調査している。また、これまでに廿子Ⅰ遺跡、廿子Ⅲ遺跡、浜寄・地方遺跡、沖手遺跡１区の報告書が刊行されている。



第 1 図　沖手遺跡と専光寺脇遺跡の位置（S＝ 1/10,000,000、S＝ 1/1,000,000）

第 2 章　遺跡の位置と環境

第 1 節　遺跡の位置

沖手遺跡と専光寺脇遺跡は、ともに島根県益田市久城町に所在する。

益田市は島根県西部（石見地方）に位置し、北は日本海に面し、西は山口県境と、南側の山間部は広島県境と接している。

益田市の地形は、北側の平野部（益田平野）とそれを取り囲む周辺の丘陵部・山間部からなっている。益田平野は、中国山地から北流して日本海に注ぐ２つの河川、益田川と高津川の沖積作用によって形成された複合三角州で、石見地方では最も広い平野である。古地理・古環境の研究によれば、約6000年前に「古益田湖」と呼ばれる潟湖が形成されたが、両河川の堆積作用により徐々に陸地化し、江戸時代中期以降は「古益田湖」はほぼ消滅したと考えられている[1]。

益田平野の周辺部では、中国山地から派生する丘陵地帯が広がっているが、谷や尾根が入り組んでおり、丘陵の間をぬって流れる河川やそれに伴う氾濫原・河岸段丘が見られるなど、複雑な地形になっている。

沖手遺跡は、益田川右岸の平地（地表面の標高約1.8m）で、益田川河口から約1.3km遡ったところに位置しており、現況は主に水田として利用されている。

専光寺脇遺跡は、益田平野の東側に広がる久城地区の丘陵地帯から北西にのびる尾根上に立地している。遺跡の標高は20～35mで、沖手遺跡を西南西に見下ろす位置にある。

第 2 節　歴史的環境

益田市は石見地方で最大規模の平野部を有し、また古くから交通の要衝として栄えたところで、石見地方の中でも数多くの遺跡が存在する地域である。以下に、益田平野周辺の各時代の歴史的環境についてふれておきたい。

旧石器時代

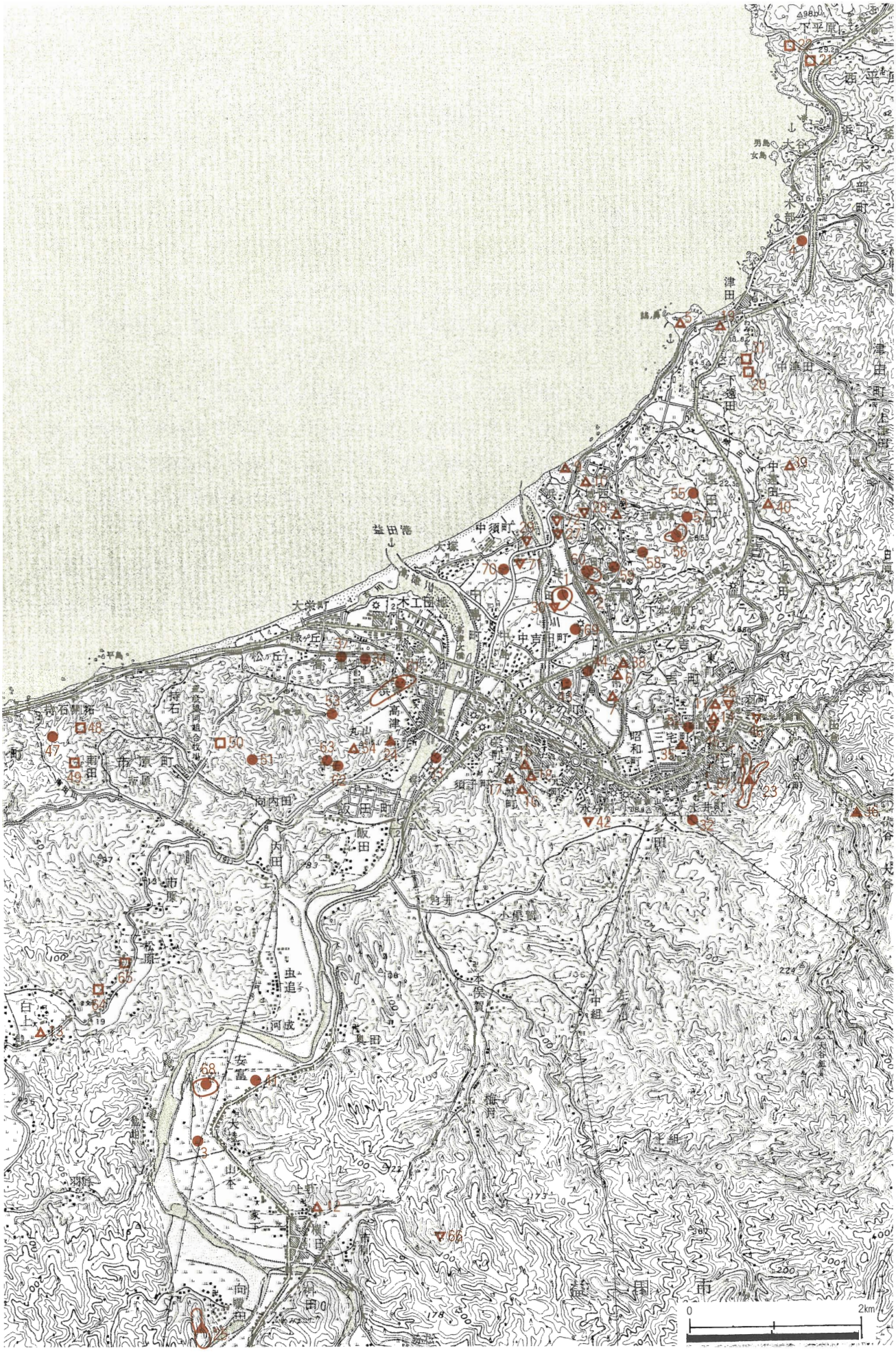
久城町の丘陵地帯に位置する久城西Ⅱ遺跡では旧石器時代末～縄文時代草創期の尖頭器が出土した。また、堂ノ上遺跡では縄文時代草創期のものとみられる有茎尖頭器が確認されている。

縄文時代

後期～晩期の遺物が、安富王子台遺跡や、三宅御土居跡、土井後遺跡で出土するなど、横田盆地や益田平野の南側に遺跡の存在が知られる。また、久城町の丘陵地帯では、若葉台遺跡で縄文時代中期頃のものとみられる落とし穴が確認されている。なお、沖手遺跡では丸木舟が２艘出土しており、放射性炭素年代から縄文時代後期末～晩期初頭頃のものと推測される。

弥生時代

安富王子台遺跡や羽場遺跡、井元遺跡、安福寺跡などで前期の土器が発見されている。横田盆地にある羽場遺跡では、全長50mにもわたる弥生時代中期の環壕や土坑墓が確認され、中小路遺跡で



第 2 図　調査地周辺の遺跡（S＝ 1/60,000）

表１　調査地周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	種　類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸以降	参考文献等	遺跡地図
1	沖手遺跡	集落								本書掲載、7・24	Q271
2	専光寺脇遺跡	墳墓								本書掲載	Q 23
3	安富遺跡	散布地								10	Q 1
4	井元遺跡	散布地									Q 2
5	鶏ノ鼻古墳群	古墳								9・12	Q 9
6	小丸山古墳	古墳								16	Q 17
7	叶屋上山古墳群	古墳									Q 20
8	スクモ塚古墳	古墳									Q 24
9	高浜古墳群	古墳									Q 26
10	小池古墳群	古墳									Q 27
11	秋葉山古墳群	古墳									Q 32
12	上野横穴	横穴									Q 38
13	白上古墳	古墳									Q 39
14	片山横穴群	横穴									Q 44
15	北長迫横穴群	横穴									Q 46
16	南長迫横穴群	横穴									Q 47
17	小堤横穴群	横穴									Q 48
18	日赤裏横穴群	横穴									Q 49
19	大道古墳群	古墳									Q 51
20	朶ヶ迫窯跡	窯跡									Q 54
21	芝窯跡群	窯跡									Q 55
22	中塚窯跡群	窯跡									Q 56
23	七尾城跡	城跡								18～21・24	Q 57
24	高津城跡	城跡									Q 67
25	向横田城跡	城跡									Q 77
26	勝達寺跡	寺院跡									Q 90
27	真如坊跡	寺院跡									Q 91
28	妙福寺跡	寺院跡									Q 92
29	安福寺跡	寺院跡									Q 93
30	専福寺跡	寺院跡									Q 94
31	本片子窯跡	窯跡								11	Q 99
32	万歳山遺跡	散布地									Q100
33	須子遺跡	散布地									Q106
34	長者原遺跡	散布地									Q107
35	三宅御土居館跡	館跡								17・21・24	Q136
36	大谷土居跡	館跡									Q137
37	松ヶ丘遺跡	散布地									Q142
38	四塚山古墳群	古墳									Q143
39	木原古墳	古墳								11	Q145
40	大元古墳群	古墳								13～15	Q149
41	羽場遺跡	集落跡								2	Q150
42	水分経塚	経塚									Q153
43	日赤敷地遺跡	散布地									Q191
44	中世今市船着場	集落跡								22	Q200
45	万福寺	寺院									Q202
46	医光寺	寺院									Q203
47	大溢遺跡	集落跡								3	Q204
48	仁右エ門山遺跡	窯跡								3	Q205
49	相生遺跡	窯跡								3	Q206
50	北ヶ迫遺跡	窯跡								3	Q207
51	根ノ木田遺跡	散布地								3	Q208
52	土井後遺跡	散布地									Q215
53	サガリ遺跡	集落跡									Q259
54	研石横穴	横穴墓									Q261
55	原浜遺跡	集落跡									Q265
56	久城西Ⅰ遺跡	集落跡									Q266
57	久城西Ⅱ遺跡	集落跡									Q267
58	若葉台遺跡	集落跡									Q268
59	久城東遺跡	集落跡									Q269
60	堂ノ上遺跡	集落跡									Q270
61	浜寄・地方遺跡	集落跡・水田跡								6・8	Q274
62	廿子Ⅰ遺跡	集落跡他								5	Q283
63	廿子Ⅲ遺跡	集落跡他								5	Q285
64	野田窯跡	窯跡									Q318
65	次金原窯跡	窯跡									Q320
66	石塔寺権現経塚	経塚									Q342
67	中世七尾城下町遺跡	城下町								23	Q344
68	中小路遺跡	集落跡								24	
69	平田遺跡	集落跡								26	
70	中須西原遺跡	集落跡									
71	福王寺石造十三重塔	石造物								24	
72	櫛代賀姫神社	神社									

（第２図 凡例）　● 集落・散布地　△ 弥生墳墓・古墳・横穴墓　▽ 古墓・経塚・社寺　▲ 城館　□ 生産遺跡

は弥生時代後期～末の竪穴住居跡、土器棺墓、環壕の可能性のある溝状遺構などが検出されている。このほかに高津川左岸の丘陵部にある廿子Ⅰ遺跡（後期）、廿子Ⅲ遺跡（中期、後期末～古墳時代初頭）、サガリ遺跡（後期）や、益田川右岸の丘陵地帯にある原浜遺跡（後期初頭）、久城西Ⅰ遺跡、（後期）、久城東遺跡（後期）、堂ノ上遺跡（後期）で竪穴住居跡が見つかっている。浜寄・地方遺跡では中期以前の水田跡が発掘され、この地域における稲作の伝播を考える上で注目される。また、専光寺脇遺跡では弥生時代中期後半頃とみられる方形貼石墓などが確認されている。

古墳時代

この地域は、石見地方の中でも数多くの古墳が存在しており、しかも前期から後期を通じて有力な首長墳が継続的に築造されている点で特徴的である。前期古墳には、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳群や、全長88ｍの前方後円墳である大元１号墳がある。中期には、久城地区の丘陵上にスクモ塚古墳が築造されている。埴輪列や葺石を伴う二段築成の墳丘をもつもので、墳形はこれまでは墳長57ｍの造り出し付き円墳という見方が有力であったが、最近行なわれた測量調査によって墳長約100ｍの前方後円墳となる可能性も指摘されている。後期古墳では、墳長49ｍの前方後円墳で、周囲に壕や外堤を伴う小丸山古墳や、全長８ｍの横穴式石室を持つ白上古墳、４基の前方後円墳を含む50基以上の古墳で構成された鵜ノ鼻古墳群などが知られている。また、北長迫横穴墓群や南長迫横穴墓群、片山横穴墓群などの横穴墓群が、益田平野南東部の丘陵を中心に造られている。

このように数多くの古墳が存在する一方、集落遺跡で様相の分かるものは少ないが、近年徐々に調査例が増えている。浜寄・地方遺跡では、古墳時代前期後葉～中期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されたほか、古墳時代前半期の遺物が多量に出土している。また、久城地区では、久城西Ⅰ遺跡で古墳時代中期～後期の竪穴住居跡や加工段が、若葉台遺跡では古墳時代中期の竪穴住居跡が検出されており、これらの集落の形成とスクモ塚古墳の造営との関連性が注目される。

生産遺跡は、芝窯跡、中塚窯跡など後期の須恵器窯跡が北東部に点在している。

古代

大溢遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物跡や加工段が検出されており、出土遺物には焼塩用の製塩土器も出土している。中小路遺跡では、直径約１ｍの柱穴をもつ、規則性に基づいて建てられた大型の掘立柱建物跡が確認されており、官衙関連の施設が存在したと考えられている。原浜遺跡では小型の炭窯が10基程度検出され、放射性炭素年代測定から７～８世紀頃のものと推定されている。本片子窯跡は古墳時代終末期～奈良時代前半の窯跡で、須恵器とともに瓦も生産されていたことから、この時期に益田市周辺に古代寺院が存在した可能性も推測される。

染羽天石勝命神社や久城地区にある櫛代賀姫神社など、５社が延喜式の式内社として記載されている。また、この地域には、益田川下流域にあった安福寺、妙福寺、福王寺、蔵福寺、専福寺の５ヶ寺が、万寿３年（1026年）の大津波によって流失した、という伝承も残る。

中世

平安時代末期には益田荘、長野荘といった荘園が成立し、鎌倉時代以降は益田氏の拠点として発展しており、益田氏に関連する遺跡が数多く存在する。三宅御土居跡は益田氏の居館で、東西が最大190m、南北が最大110ｍもある屋敷地をもち、川や堀、土塁によって周囲の防御を固めている。七尾城跡は、三宅御土居跡から益田川を隔てた対岸の丘陵上に位置しており、本丸や二の段の発掘調査では礎石建物跡や庭の跡などが確認され、出土遺物から16世紀中頃～後半には居城として機能

していたことが明らかとなった。七尾城下から三宅御土居跡の周辺は益田氏と関わりのある社寺が数多く見られ、中世の城下町に由来する地割りや地名も残されている。

益田川の下流域では、沖手遺跡で平安時代末～近世前半にかけて大規模な集落が営まれており、貿易陶磁などが多数出土している。また、中須西原遺跡は中世後半を中心とする集落遺跡で、船着場跡とみられる礫敷き遺構が検出された。これらの遺跡から、益田川下流域が中世の交易・流通に密接に関わる地域であったことが窺われる。戦国期には、益田川支流の今市川沿いに今市船着場が成立し、益田氏の貿易港や市場として機能したと考えられている。

高津川左岸の浜寄・地方遺跡で中世の遺物が出土しており、このうち木造仏手は平安時代末～鎌倉時代のもので、この地における仏師の活動を示すものとして注目される。高津川をやや上流に遡った横田地区では、羽場遺跡で12世紀頃の集落跡が確認されており、また、石塔寺権現経塚では越州窯系青磁や中国産褐釉四耳壺を用いた経筒が出土している。

近世以降

益田氏は関ヶ原の戦いに毛利氏に属して西軍側に加わったため、敗戦後、長門国須佐へ移ることとなった。その後の益田は高津川を境に、東部が浜田藩、西部が津和野藩に分かれて治められ、商業都市として発展している。また、近世以降、窯業が盛んに行われ、仁右ヱ門山遺跡や相生遺跡など石見焼の窯跡が多く存在し、磁器を焼いた白上焼の窯跡も知られている。

1　林　正久　2006　「益田平野の成り立ちと沖手遺跡」『沖手遺跡 －１区の調査成果－』島根県教育委員会

参考文献

（１）益田市誌編纂委員会　1975　『益田市誌』上巻
（２）木原　光　1992　「益田市・羽場遺跡出土の陶磁器」『松江考古』第８号　松江考古学談話会
（３）島根県教育委員会　1992　『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
（４）島根県教育委員会　2002　『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』
（５）島根県教育委員会　2006　『廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡』一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１
（６）島根県教育委員会　2006　『浜寄・地方遺跡－１Ａ・１Ｂ・１Ｃ・１Ｄ・１Ｆ・２Ａ・２Ｃ・２Ｆ・２Ｇ区の調査－』
一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２
（７）島根県教育委員会　2007　『沖手遺跡－１区の調査－』一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３
（８）島根県教育委員会　2007　『浜寄・地方遺跡　－１Ｈ・１Ｉ・２Ｂ・２Ｄ・２Ｅ・２Ａ各区の調査－』一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書４
（９）増野晋次　2001　「益田・鵜ノ鼻古墳群について」『松江考古』第９号　松江考古学談話会
（10）益田市教育委員会　1981　『安富王子台遺跡発掘調査概報』
（11）益田市教育委員会　1982　『国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書　本片子遺跡・木原古墳』
（12）益田市教育委員会　1984　『鵜ノ鼻古墳群発掘調査概報』
（13）益田市教育委員会　1986　『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅰ』
（14）益田市教育委員会　1987　『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅱ』
（15）益田市教育委員会　1988　『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅲ』
（16）益田市教育委員会　1990　『小丸山古墳発掘調査報告書』
（17）益田市教育委員会　1991　『三宅御土居跡Ⅰ』
（18）益田市教育委員会　1993　『益田市関連遺跡群Ⅰ－勝達寺・七尾城跡－』
（19）益田市教育委員会　1994　『益田市関連遺跡群Ⅱ』
（20）益田市教育委員会　1995　『益田市関連遺跡群Ⅲ』
（21）益田市教育委員会　1998　『七尾城跡・三宅御土居跡　益田市関連遺跡群発掘調査報告書』
（22）益田市教育委員会　2000　『中世今市船着場跡文化財調査報告書』
（23）益田市教育委員会　2001　『身近なまちづくり支援街路事業　歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う暁音寺発掘調査報告書』
（24）益田市教育委員会　2003　『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ（七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査）』
（25）益田市教育委員会　2004　『中小路遺跡－平成15年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
（26）益田市教育委員会　2007　『益田市中吉田平田土地整理区画整理事業に伴う平田遺跡発掘調査報告書』

第３章　沖手遺跡

第１節　調査の概要

１　遺跡の概要

沖手遺跡は、益田道路・県道久城インター線・市道中吉田久城線の建設などの大規模な開発事業計画に伴い、益田市教育委員会が実施した分布調査（平成８年度）と範囲確認調査（平成10・11・14年度）により中世を中心とする遺物・遺構が確認され、その存在が明らかとなった（益田市教育委員会2003）。遺跡の範囲は東西270ｍ、南北270ｍの範囲に広がり、総面積は約45,000㎡に及ぶものと推測される。

平成16年度から益田道路・県道久城インター線・市道中吉田久城線建設に伴う発掘調査が開始された。発掘調査は、益田道路本線部分（１～４区）を島根県教育委員会が、県道久城インター線部分（５～10区）及び市道中吉田久城線部分（11区）を益田市教育委員会が実施した（第３図）。益田道路建設予定地のうち、１区は平成16年度に調査され、翌平成17年度に２～４区が発掘調査されている。

調査にあたっては、島根県教育委員会・益田市教育委員会の両者で共通するグリッドを設定した。平面直角第Ⅲ座標系（座標系ＸＹは世界測地系）にのる基点（Ｘ＝－14810，Ｙ＝－29930）を１Ａとし、東へ10ｍ間隔で１，２，３…、南へ10ｍ間隔でＡ，Ｂ，Ｃ…Ｚ，Ａ’，Ｂ’…という基準点を調査区全体に設け、一辺10ｍのグリッドを北西側の交点の名称（例えば６Ｐ）で呼称することとした（第４図）。

２　調査組織

益田道路建設に伴う沖手遺跡の埋蔵文化財発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成17年度　現地調査（沖手遺跡２～４区）

〔事務局〕　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務グループ課長）、
宮澤明久（同調査第２グループ課長）

〔調査員〕　東山信治（同文化財保護主事）、都田敬樹（同講師兼主事）、
清山慎哉（同講師兼主事）、渡辺　聡（同調査補助員）、世良　啓（同調査補助員）

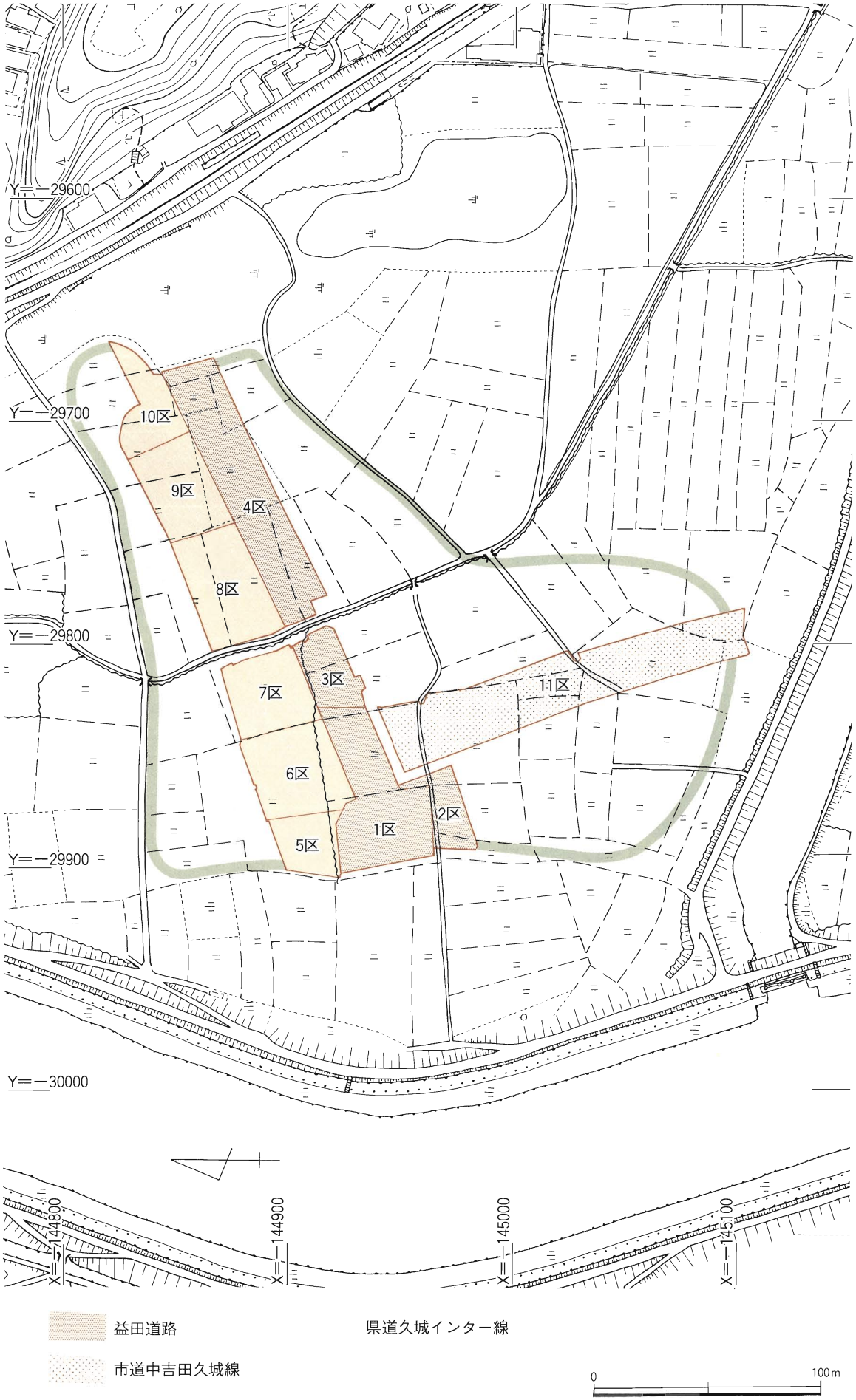
平成19年度　報告書作成

〔事務局〕　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（同総務グループ課長）、
丹羽野裕（同調査第４グループ課長）

〔調査員〕　東山信治（同文化財保護主任）、竹下浩充（同教諭兼文化財保護主任）

発掘作業員の雇用など現地での発掘作業については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は以下のとおりである。

社団法人中国建設弘済会島根支部

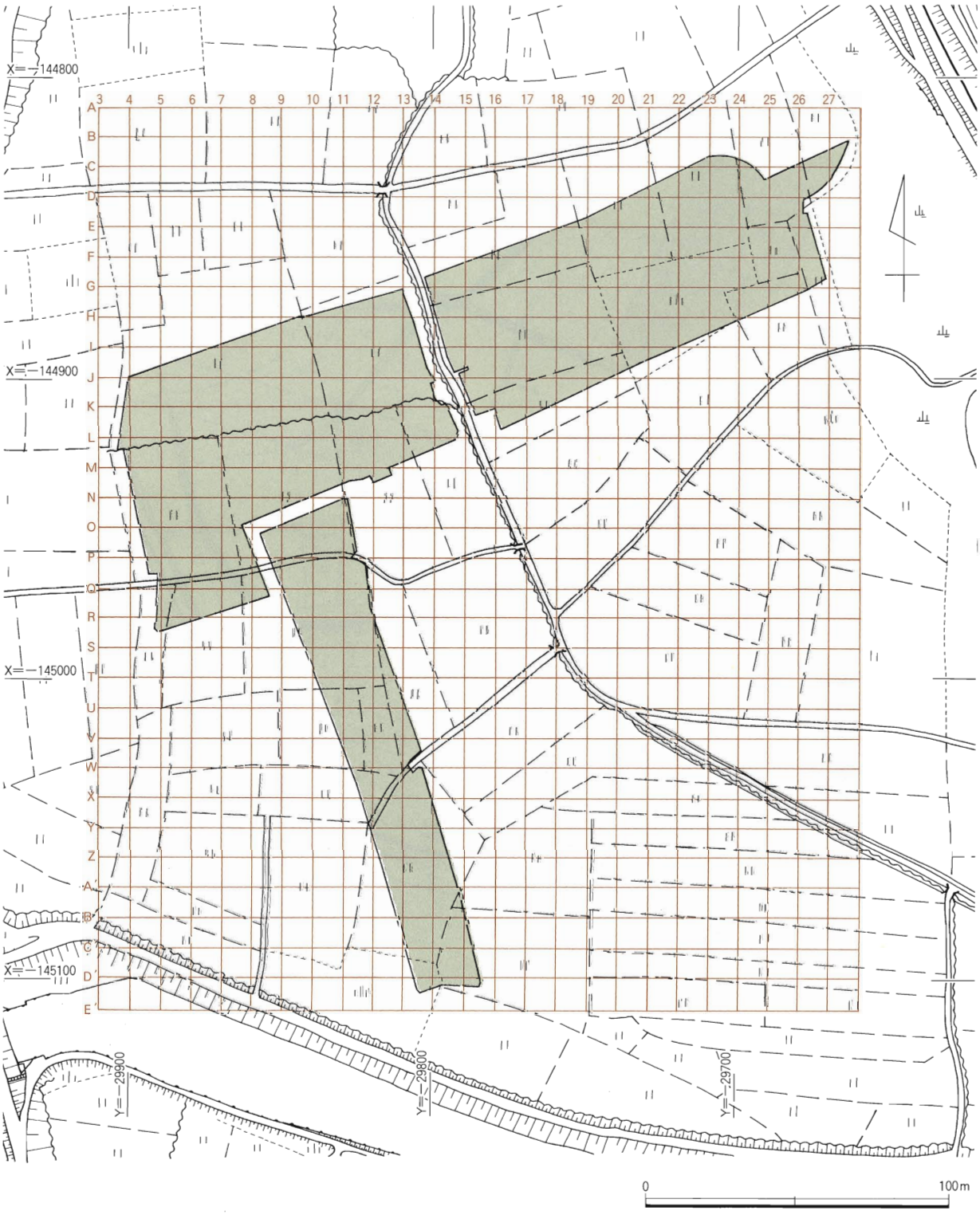


第 3 図　沖手遺跡調査区配置図（S＝ 1/2,500）

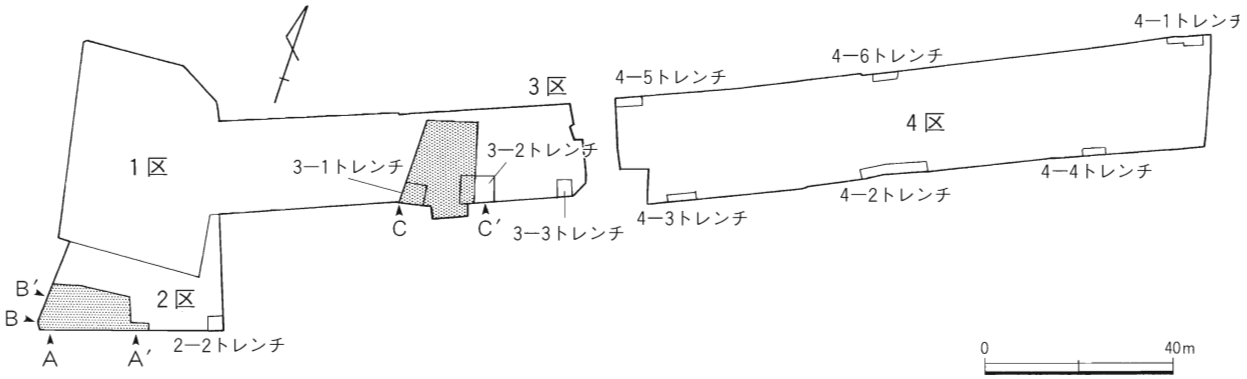
平成17年度

〔現場担当〕　松下芳久（技術員）

〔事務担当〕　池野真由美（事務員）



第 4 図　グリッド設定図（S= 1/2,000）



第５図　沖手遺跡下層調査区位置図（S＝ 1/1,600）

３　調査の経過

２区は１区の南側に位置する。平成17年４月22日から掘削作業を開始し、６月中旬までのところで中世の遺構を掘り終え、７月15日には空中写真撮影を行なった。調査面積は600㎡で、遺構は、建物跡や溝状遺構、井戸１基、墓５基、約1000の柱穴が検出された。

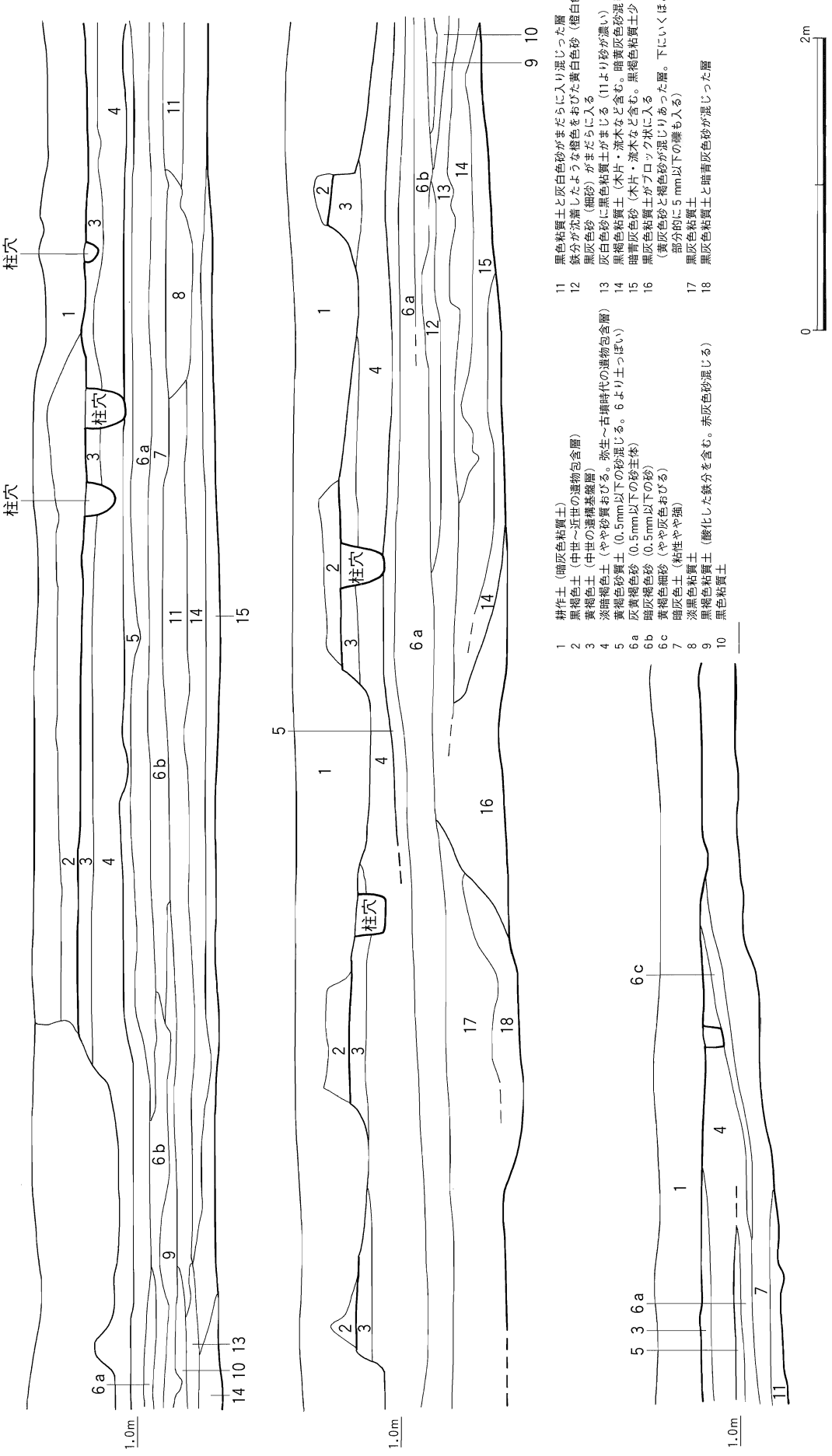
３区は１区の東側に隣接している。６月６日から開始し、８月初旬には中世の遺構を完掘し、８月４日に空中写真撮影を行なった。３区の調査面積は700㎡で、建物跡や溝状遺構、墓２基、柱穴約500を検出した。７月17日には、益田市教育委員会と共同で、２・３・11区の現地説明会を開催し、約160名の参加者があった。

なお、２区の調査において土層確認のために南壁に沿ってサブトレンチを入れたところ、４層で古墳時代前期の土師器がまとまって出土し、さらに下層の14・15層では杭列が確認されたため、２区の南西側を面的に掘り下げて調査した。また、３区西側で、７層上面で杭列を伴う弥生時代中期中葉の溝状遺構を検出し、さらにその下層の８層では丸木舟２艘が出土した。10月29日に３区で出土した丸木舟について現地説明会を開催し、約130人が見学に訪れた。その後、丸木舟を11月10日に取り上げ、３区下層の調査は完了した。

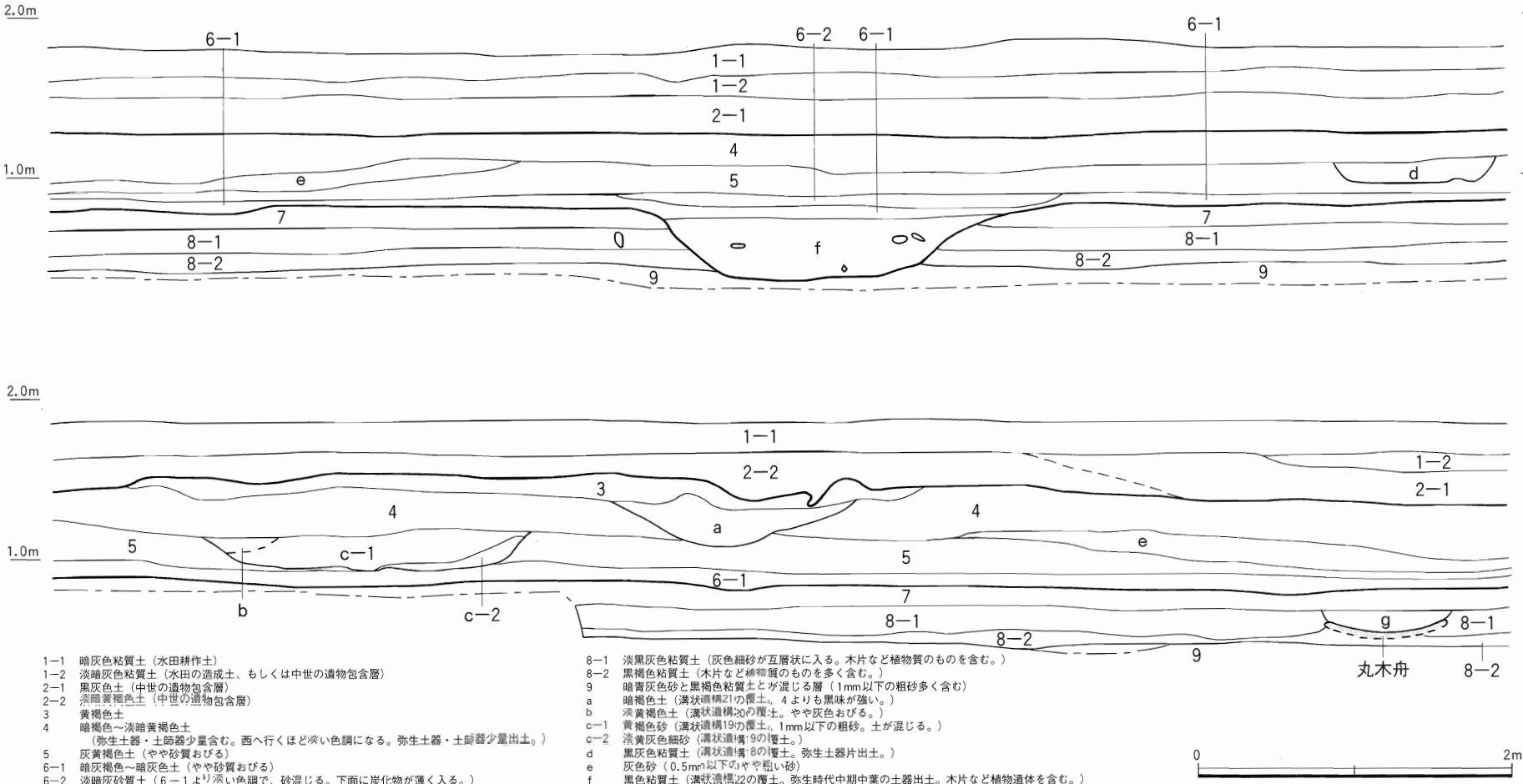
４区は、１～３区とは水路を隔てた東側に位置している。９月２日から掘削を開始し、2,700㎡を調査し、中世を主体とする建物跡や柱列、溝状遺構、墓25基、柱穴約2000を検出した。なお、下層における遺構・遺物の有無を確認するため、４－１～６トレンチを設定したが、摩滅した弥生土器・土師器片がわずかに出土したのみであるため、下層の面的な発掘はしていない。11月26日に空中写真撮影を行った。12月18日には益田市教育委員会と共催で、４・７・９・10区の現地説明会を開催した。前日の積雪が残る中で約30名の参加者があった。その後、掘り残した遺構の掘削と記録を行い、12月27日に全ての現地調査を終了した。

なお、調査箇所現地は発掘終了後、道路建設工事が行われたため、遺構は残存していない。

整理作業は、遺物の洗浄・注記は現地調査と並行して行い、平成19年度には報告書作成作業を実施した。１区については平成16年度に2,200㎡が発掘調査され、平成17年度に報告書が刊行されているが、遺跡全体の評価をするため、今回、再整理をした。

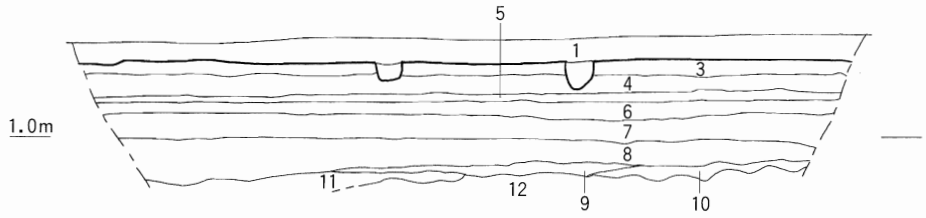


第６図　沖手遺跡２区土層図（S＝ 1/40）



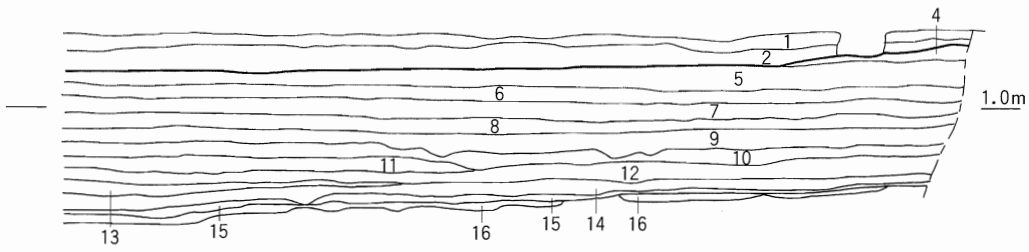
1−1　暗灰色粘質土（水田耕作土）
1−2　淡暗灰色粘質土（水田の造成土、もしくは中世の遺物包含層）
2−1　黒灰色土（中世の遺物包含層）
2−2　淡暗黄褐色土（中世の遺物包含層）
3　黄褐色土
4　暗褐色〜淡暗黄褐色土
（弥生土器・土師器少量含む。西へ行くほど淡い色調になる。弥生土器・土師器少量出土。）
5　灰黄褐色土（やや砂質おびる）
6−1　暗灰褐色〜暗灰色土（やや砂質おびる）
6−2　淡暗灰砂質土（6−1より淡い色調で、砂混じる。下面に炭化物が薄く入る。）
7　淡青灰色砂質土（黒色有機質分を含む土壌が互層状に入る。）
8−1　淡黒灰色粘質土（灰色細砂が互層状に入る。木片など植物質のものを含む。）
8−2　黒褐色粘質土（木片など植物質のものを多く含む。）
9　暗青灰色砂と黒褐色粘質土とが混じる層（1mm以下の粗砂多く含む）
a　暗褐色土（溝状遺構21の覆土。4よりも黒味が強い。）
b　淡黄褐色土（溝状遺構20の覆土。やや灰色おびる。）
c−1　黄褐色砂（溝状遺構19の覆土。1mm以下の粗砂。土が混じる。）
c−2　淡黄灰色細砂（溝状遺構9の覆土。）
d　黒灰色粘質土（溝状遺構8の覆土。弥生土器片出土。）
e　灰色砂（0.5mm以下のやや粗い砂）
f　黒色粘質土（溝状遺構22の覆土。弥生時代中期中葉の土器出土。木片など植物遺体を含む。）
g　黒灰褐色粘質土（丸木舟内部の覆土。8−1よりやや黒味が強い。）

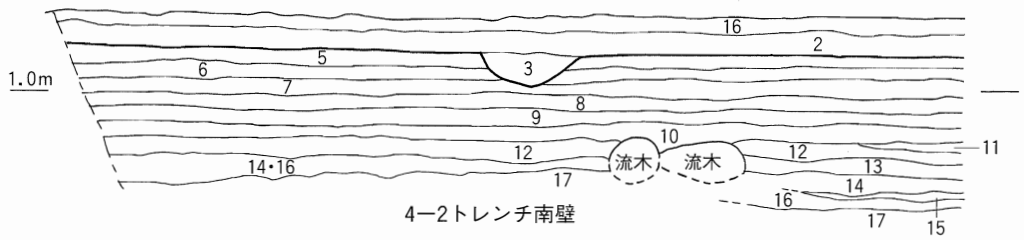
第7図　沖手遺跡3区南壁土層図（S＝1/40）



4－3トレンチ南壁

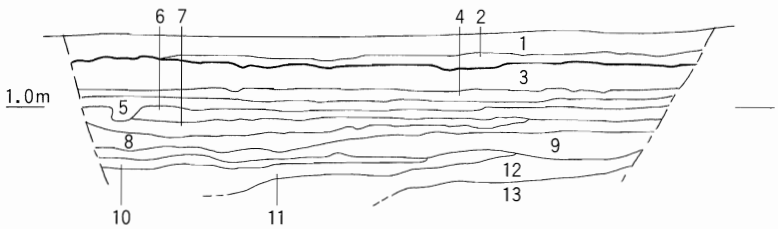
1　耕作土（暗灰褐色土）
3　黄褐色土
4　淡暗褐色土
5　淡暗灰黄褐色土
6　暗褐色土（やや砂質おびる）
7　灰黄褐色砂質土（0.5mm以下の砂混じり、2cm以下の礫少し含）
8　淡暗灰褐色砂（0.5mm以下の砂）
9　淡灰色砂（7より粒径細かい）
10　淡黒灰色砂（淡黒色粘砂質土混じる）
11　淡暗灰色砂（黒色有機質がうすく層状に入る）
12　淡青灰色砂礫層（0.5mm以下の礫入る。1mm以下の粗砂主体。10cm以下の礫も少し見える）





4－2トレンチ南壁

1　暗灰褐色（耕作土）
2　淡黒灰色土（遺物包含層）
3　暗橙灰褐色土
4　褐色土
5　橙灰色土（4よりやや暗い色調）
6　黄灰色土
7　淡暗褐色土（やや灰色おびる）
8　淡黒灰色粘質土
9　黒灰色粘質土
10　灰色細砂と暗灰色粘質土が混じる層
11　青灰色砂（黒色有機質土がうすく層状、あるいはまだらに入る）
12　黒色粘質土
13　黒褐色有機質（青灰色砂がうすく層状に入る）
14　青灰色細砂
15　黒褐色有機質と青灰色細砂が互層状に入る
16　青灰色細砂（やや黒色泥混じる）
17　黒褐色有機質と青灰色細砂が互層状に入る



4－4トレンチ南壁

1　暗灰色土
2　黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　黄灰色土（0.5mm以下の砂混じる）
5　淡黄灰褐色砂質土（1mm以下のやや粗い砂入る。5mm以下の小礫もわずかに入る）
6　暗褐色砂質土（0.5mm未満の5と比べ細かい砂入る）
7　暗褐色土（6と比べると砂がほとんど入らない。）
8　暗灰色細砂（黒色粘質土まだらに入る）
9　黒色粘質土（暗青灰色砂まだらに入る）
10　灰色粗砂（1mm以下の粗い砂主体で、2mmこえるものも少しあり。流木入る）
11　灰褐色粘質土（灰色・青灰色砂がうすく互層状に入る。流木入る。）
12　青灰色粗砂（1mm以下の重い砂。流木入る。暗灰褐色粘質土がうすく層状に入る）
13　暗灰褐色粘質土（青灰色砂がうすく層状に入る）

第８図　４－３・２・４トレンチ土層図（S＝ 1/60）

第 2 節　中世の遺構・遺物

沖手遺跡の益田道路部分は、前述したように１～４区に分けて調査を実施した。現況では、遺跡の中央には南北に伸びるかたちで水路が通っており、水路の西側では、１区南側に２区が、１区東側に３区がそれぞれ隣接して位置している。一方、４区は水路の東側にある東西に長くのびた調査区で、１～３区とは隔たりがある。また、遺構の分布状況を見ると、１～３区と４区、また４区の西側と東側で違いが見られる。このことから中世の遺構については、１～３区と、４区西側、４区東側にそれぞれ分けて記述することとする。なお、本報告では可能な限り建物跡・柱列を復元し、掲載するように努めた。これらの中には現地調査時点では認識できなかったものも多く、特に遺構密度の高いところでは復元の困難なものもあったが、建物跡の可能性のあるものとして提示することとしたい。なお、「１区報告書」で記載されている遺構については、本書では割愛する。

1　１～３区の遺構とその伴出遺物

（１）遺構の分布状況（第９・10図）

遺構はいずれも３層上面で検出している。１～３区で確認、復元できた主な遺構は、建物跡46棟、柱列13条、溝状遺構８条、井戸６基、墓13基である。１区の溝状遺構２の南側から２区にわたる範囲と１区東側、３区東側で遺構密度が高く、１区北西側と３区西側では遺構のあり方は希薄である。なお、３区西側は標高が1.25ｍと、１区東側（標高1.4ｍ）や３区東側（標高1.5ｍ）と比べて低くなっており、窪地状になっていたと考えられる。

（２）建物跡・柱列

建物跡７（第11・12・14図）

１区南西部で、逆Ｌ字形に延びる溝状遺構１と溝状遺構３に囲まれたところに位置し、建物跡10・12と重複する。２間（6.32ｍ）×３間（7.12ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－73°－Ｅである。１－Ｐ210から柱状高台の土師器皿（14－１）が、１－Ｐ277から土師器坏（14－２）が、１－Ｐ1099から土師器皿（14－３）が出土している。出土遺物から12世紀頃の建物跡と考えられる。

建物跡８（第11・12・14図）

１区南西部で、建物跡７の南側に位置し、井戸２、建物跡９と重複する。１間（2.56ｍ）×２間（3.72ｍ）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－81°－Ｅで、南側を走る溝状遺構３とほぼ平行する。１－Ｐ92から中国陶器の茶入（14－４）が出土している。

建物跡９（第11・12図）

１区の南西部で、建物７・10の南側、溝状遺構３から約１ｍ北側に位置する。１間（1.90ｍ）×２間（3.44ｍ）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－87°－Ｅで、溝状遺構３とほぼ平行する。

建物跡10（第11・13・14図）

１区南西部で、溝状遺構１・３に囲まれたところに位置し、建物跡７・11と重複する。２間（4.1ｍ）×２間（4.2ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－74°－Ｅである。１－Ｐ197から土師器坏（14－５）が出土した。体部が直線的に立ち上がる器形で、底部には回転糸切り痕が見られる。14－

５から13世紀頃の建物跡と考えられえる。

建物跡11（第11・13・14図）

１区南西部で、溝状遺構１の北東角の付近に位置する。１間（2.98m）×２間（6.22m）の掘立柱建物跡である。建物跡の主軸方向はＮ－12°－Ｗで、溝状遺構１とほぼ平行する。１－Ｐ354から土師器坏（14－６）が出土している。体部がやや丸みを持ちながら大きく開く器形で、器高に対して口径の割合がかなり大きくなっている。

建物跡12（第11・13・14）

１区南西部で、建物跡７と重複している。１間（2.26m）×２間（4.12m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－20°－Ｗである。１－Ｐ280から土師器擂鉢（14－７）が出土している。

柱列１（第11・14図）

１区南西部に位置する。１－Ｐ460・465・464・471からなり、長さは5.32mである。主軸方向はＮ－75°－Ｅで、溝状遺構２とほぼ平行し、一部でこれと切り合っている。溝状遺構２との前後関係は確認できなかった。

柱列２（第11・14図）

１区南西部で、溝状遺構１と建物跡11との間に位置する。柱間は３間（6.82m）、主軸方向はＮ－79°－Ｅで、建物跡11の梁行き方向とほぼ平行している。１－Ｐ359の中には15㎝大の礫が入っていた。また、１－Ｐ356 は、建物跡14の柱穴である１－Ｐ355に切られている。１－Ｐ211から土師器皿（14－８）が出土した。

建物跡13（第14図）

１区の西側で、溝状遺構２から北へ１ｍのところに位置する。１間（2.88m）×２間（4.60m）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－14°－Ｗで、溝状遺構２とほぼ直交する。

建物跡14（第15・16図）

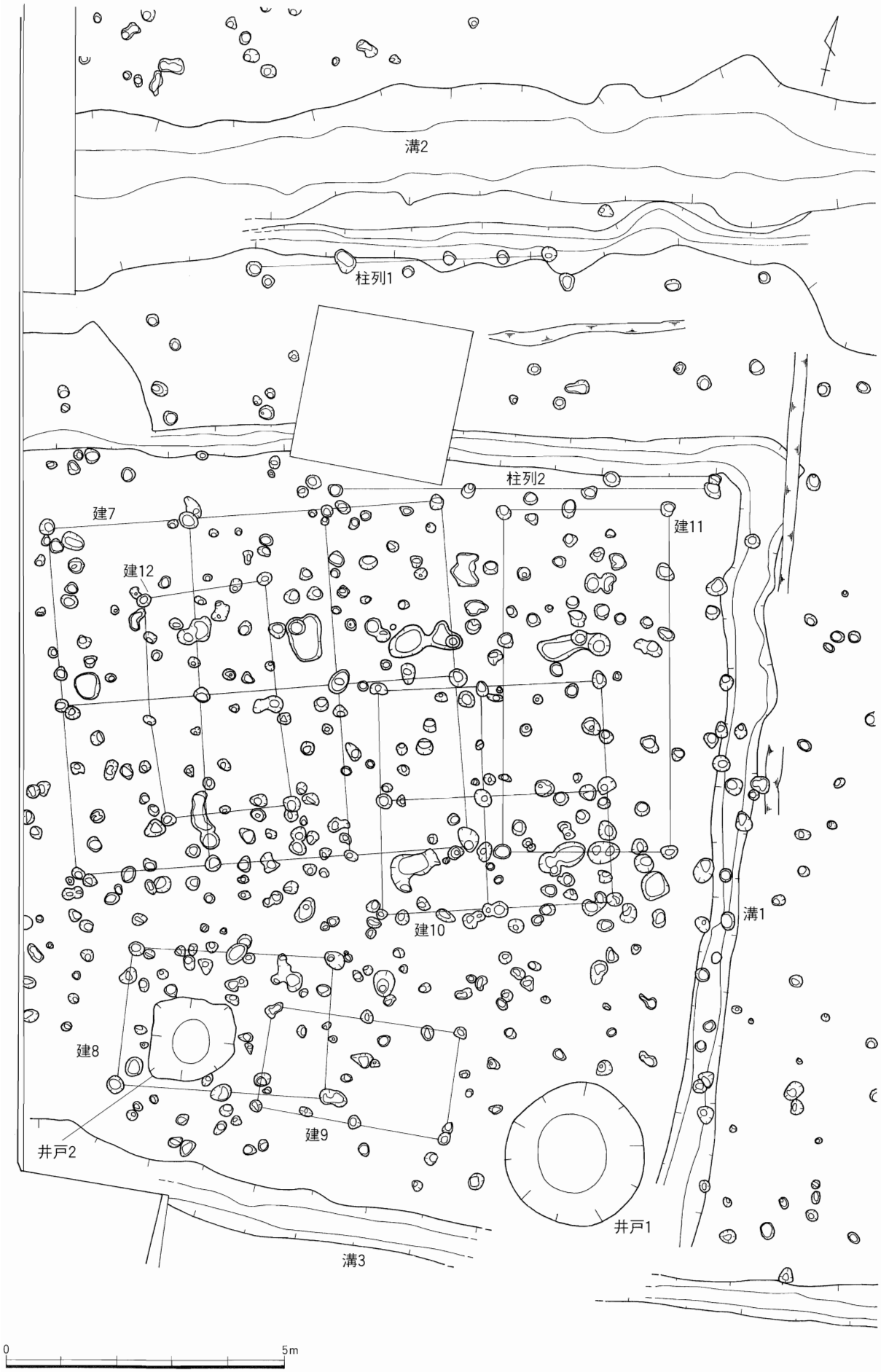
１区南側中央部に位置し、建物跡15～18、柱列３と重複している。また、建物跡18とは、１－Ｐ768を共有しあっている。切りあい関係から、柱列２、１－SK14・15よりも新しいことが明らかである。また、建物跡19や溝状遺構１とも切り合いが見られるが、前後関係は確認できなかった。東西６間×南北５間の掘立柱建物跡で、東西長は10.68mであるのに対し、南北長は西辺で10.72m、東辺で11.22mとなっており、平面形はややいびつな方形となっている。床面積は117.15㎡で、沖手遺跡で確認された建物跡の中でも特に大きいものである。一見、総柱建物のように見えるが、建物中央の１－Ｐ1109と１－Ｐ814、１－Ｐ814と１－Ｐ697の間ではそれぞれ柱穴が確認されていない。主軸方向はＮ－10°－Ｗで、北辺と南辺はそれぞれ溝状遺構２・３とほぼ平行している。

建物跡15（第15・17図）

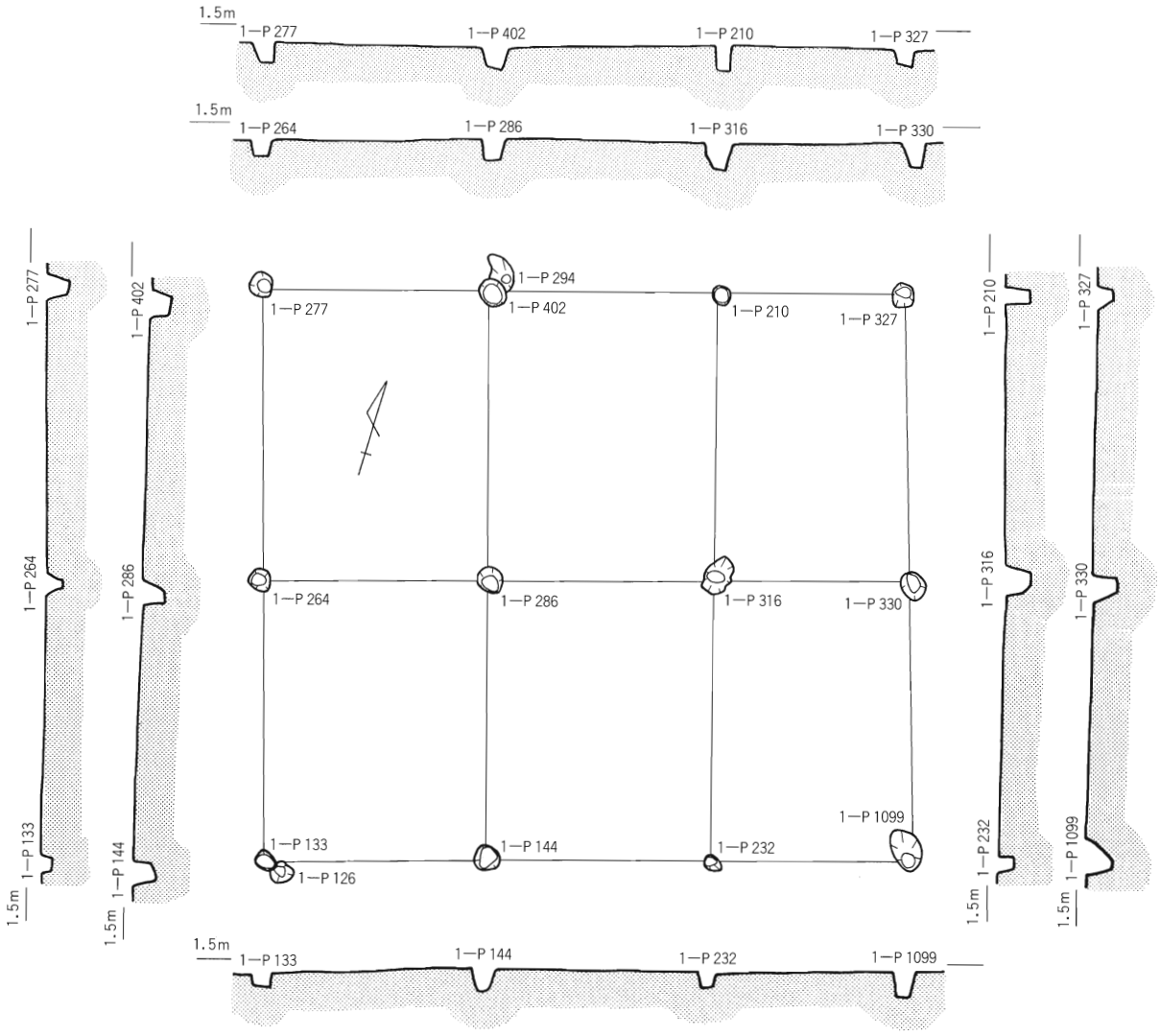
１区南側中央部で、溝状遺構３から北へ約3.5mのところに位置する。建物跡14・16・18、柱列３・９、井戸３、１－SK13・16と重複する。また、建物南東隅の柱穴である１－Ｐ664を柱列８と共有しあっているが、本来は２つの柱穴が切りあっていたものと考えられる。建物跡15と柱列８との前後関係は不明である。２間（5.18m）×３間（6.28m）の総柱建物跡と考えられるが、建物の北東隅にあたる部分では柱穴を確認していない。このことから、２間×２間の総柱建物の東辺南側に１間四方の付属施設が取り付けられたものか、１間×３間の掘立柱建物の北辺の西側に付属施設

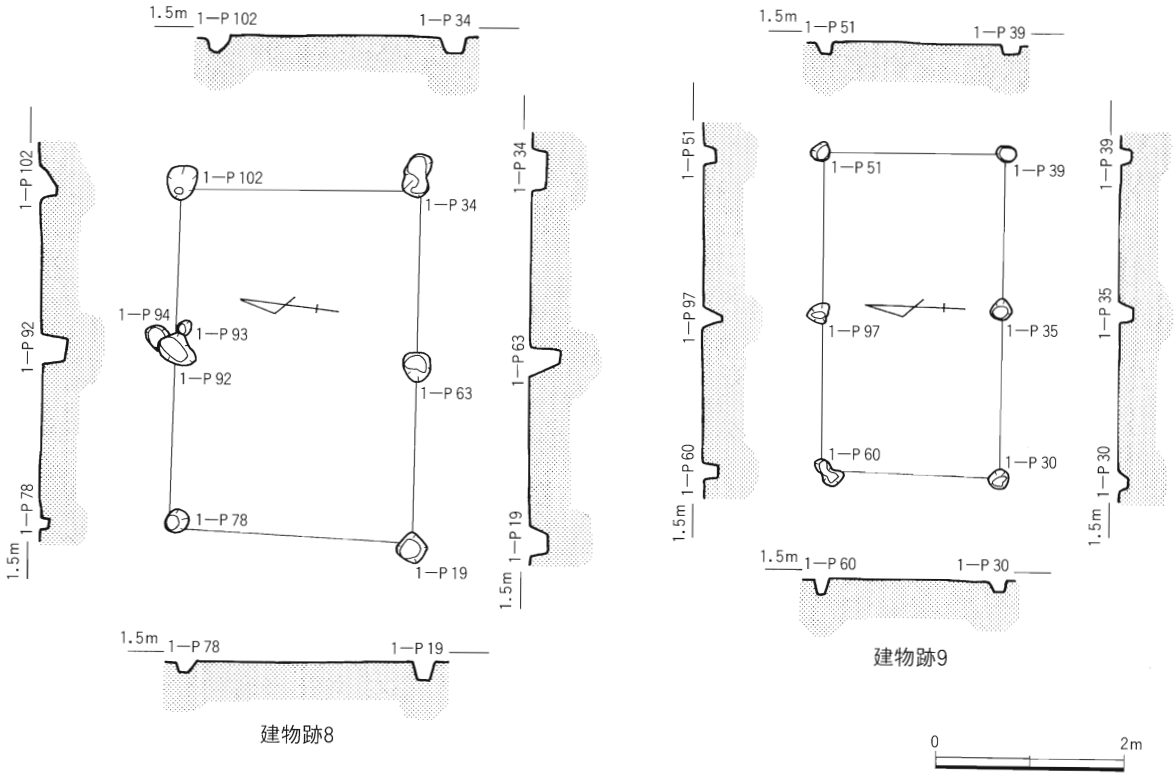
第 9 図　1 区西側・2 区遺構図（S＝ 1/200）

第 10 図　1 区東側・ 3 区遺構図（S＝ 1/200）

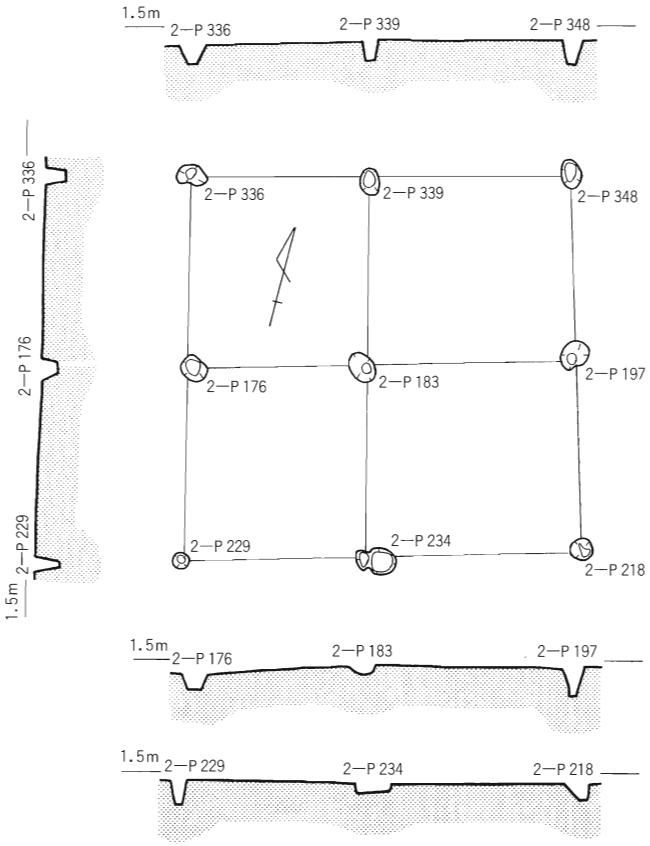


第 11 図　１区南西部遺構図（S＝ 1/100）

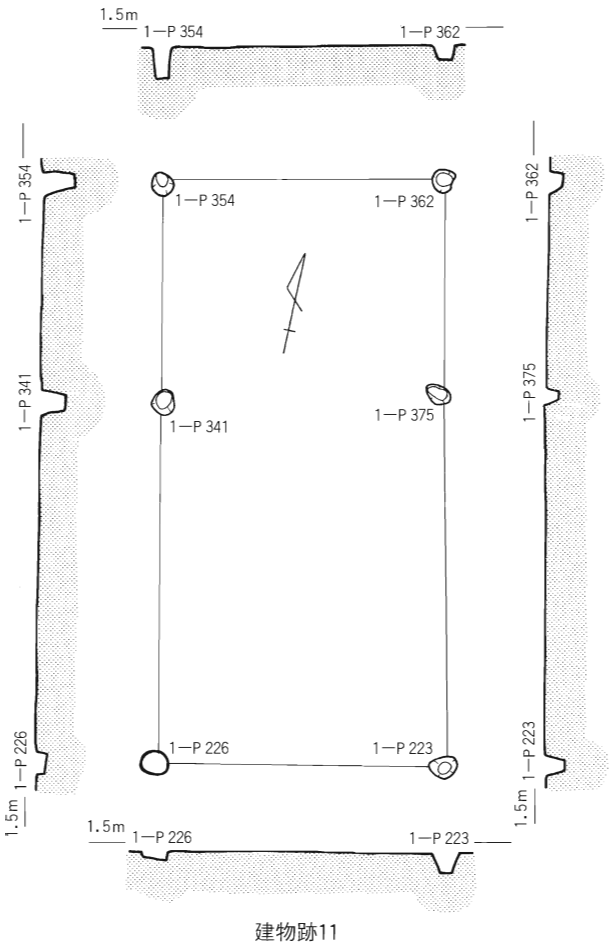




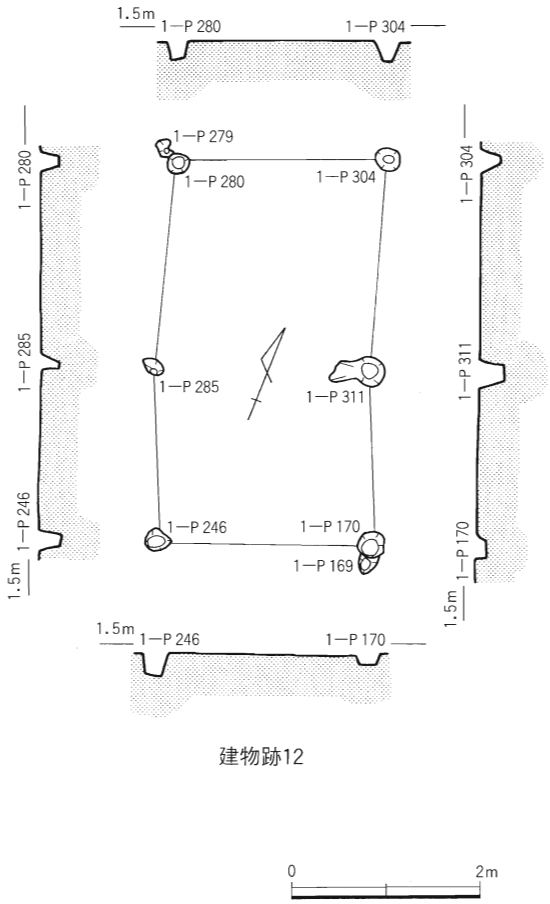
第12図　建物跡7～9（S＝ 1/80）



建物跡10



建物跡11



建物跡12

0　2m

第 13 図　建物跡10～12（S＝ 1/80）

が取り付けられた可能性も考えられる。主軸方向はＮ－80°－Ｅで、溝状遺構３とほぼ平行する。

建物跡16（第15・17図）

１区南側中央部に位置し、建物跡14・15・18、柱列３と重複する。建物南西隅の柱穴、１－Ｐ708は、１－SK16を切っている。１間（1.86m）×２間（3.58m）の掘立柱建物跡で、柱間距離はいずれも1.8m前後あることから、１間＝６尺を指向したものと考えられる。主軸方向はＮ－88°－Ｅである。

建物跡17（第15・17図）

１区南側中央部で、溝状遺構２から南へ約３mのところに位置し、建物跡14・19と重複している。１間（2.42m）×２間（3.48m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－80°－Ｅであり、溝状遺構２とほぼ平行する。

建物跡18（第15・18図）

１区南側中央に位置し、建物跡14～16、柱列８・９、井戸３と重複している。また、建物南西隅の柱穴である１－Ｐ622は、１－SK12を切っている。３間（4.64m）×４間（6.10m）の掘立柱建物跡であるが、西辺にある１－Ｐ778と、東辺にある１－Ｐ661とを補助的な柱穴ととらえ、２間×４間の総柱建物とするべきかもしれない。主軸方向はＮ－77°－Ｅである。１－Ｐ661から土師器坏の口縁部片（18－１）が出土している。

建物跡19（第15・18図）

１区南側中央部で、溝状遺構２から南へ2.6mいったところに位置し、建物跡14・17と重複する。建物北西隅の１－Ｐ448は、建物跡14の柱穴、１－Ｐ449と切り合っているが、両者の前後関係は明らかにできなかった。１間（3.54m）×２間（5.04m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－76°－Ｅであり、溝状遺構２とほぼ平行する。

柱列３（第15・18図）

１区南側の中央部に位置する。逆Ｌ字形の柱列で、東西は１間（1.72m）、南北は３間（4.66m）の柱間をもつ。主軸方向はＮ－８°－Ｅである。１－Ｐ450はこの柱列の角にあたる柱穴で、埋土中から白磁碗Ｖ類（18－２）と土師器皿（18－３）が出土している。これらの遺物から、11世紀後半～12世紀前半頃の遺構と考えられる。

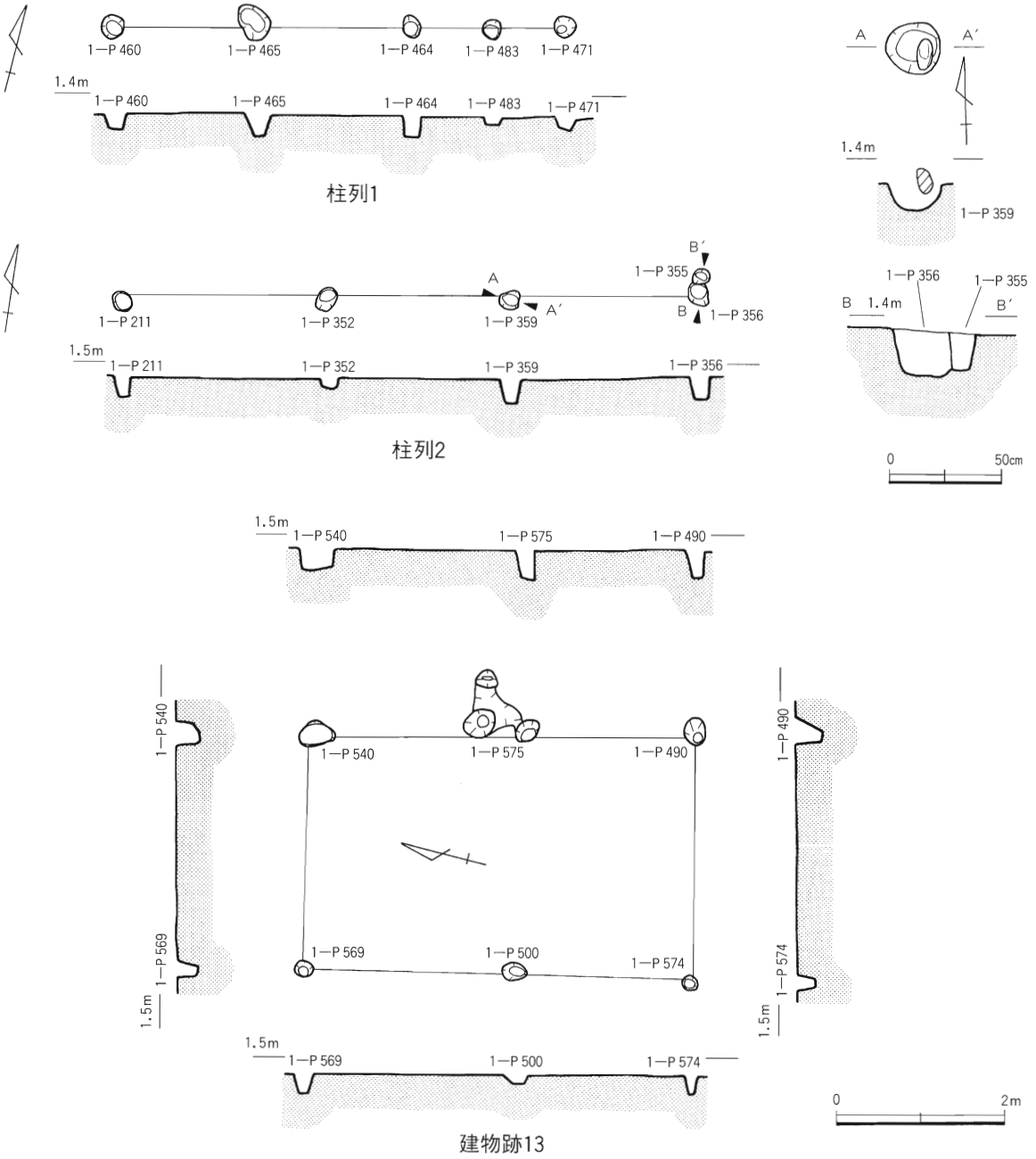
柱列４・５（第15・19図）

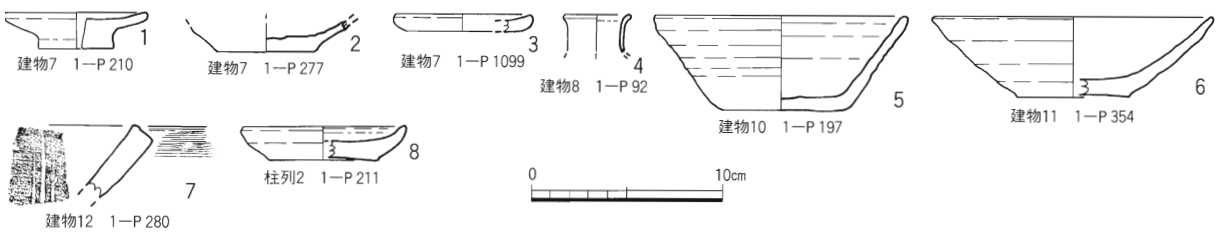
柱列４は、１区南側中央部で、溝状遺構２の上端付近に位置する。部分的に溝状遺構２と切り合うが、前後関係は明らかにできなかった。柱間は４間（5.26m）で、主軸方向はＮ－82°－Ｅで、溝状遺構２とほぼ平行する。

柱列５は、柱列４と建物跡14の中間に位置する長さ10.78mの柱列である。主軸方向はＮ－73°－Ｅで、柱列４や建物跡14と平行する。位置関係からみて、建物跡14に伴うものと考えられる。

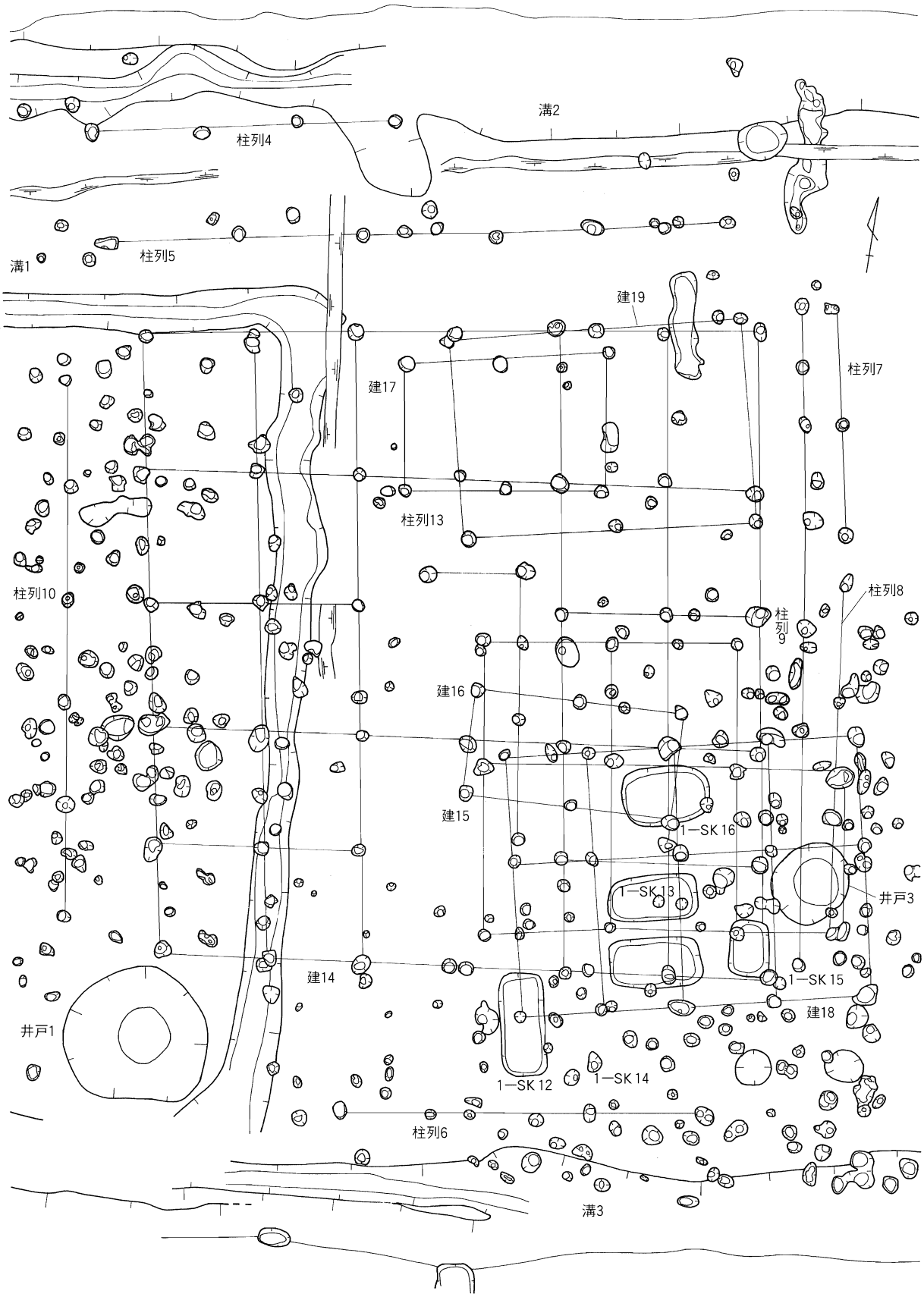
柱列６（第15・19図）

１区南側中央部で、溝状遺構３から北へ１m、建物跡14から南へ2.5m離れたところに位置する。柱間は３間（6.32m）で、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。位置関係から建物跡14に伴う可能性がある。

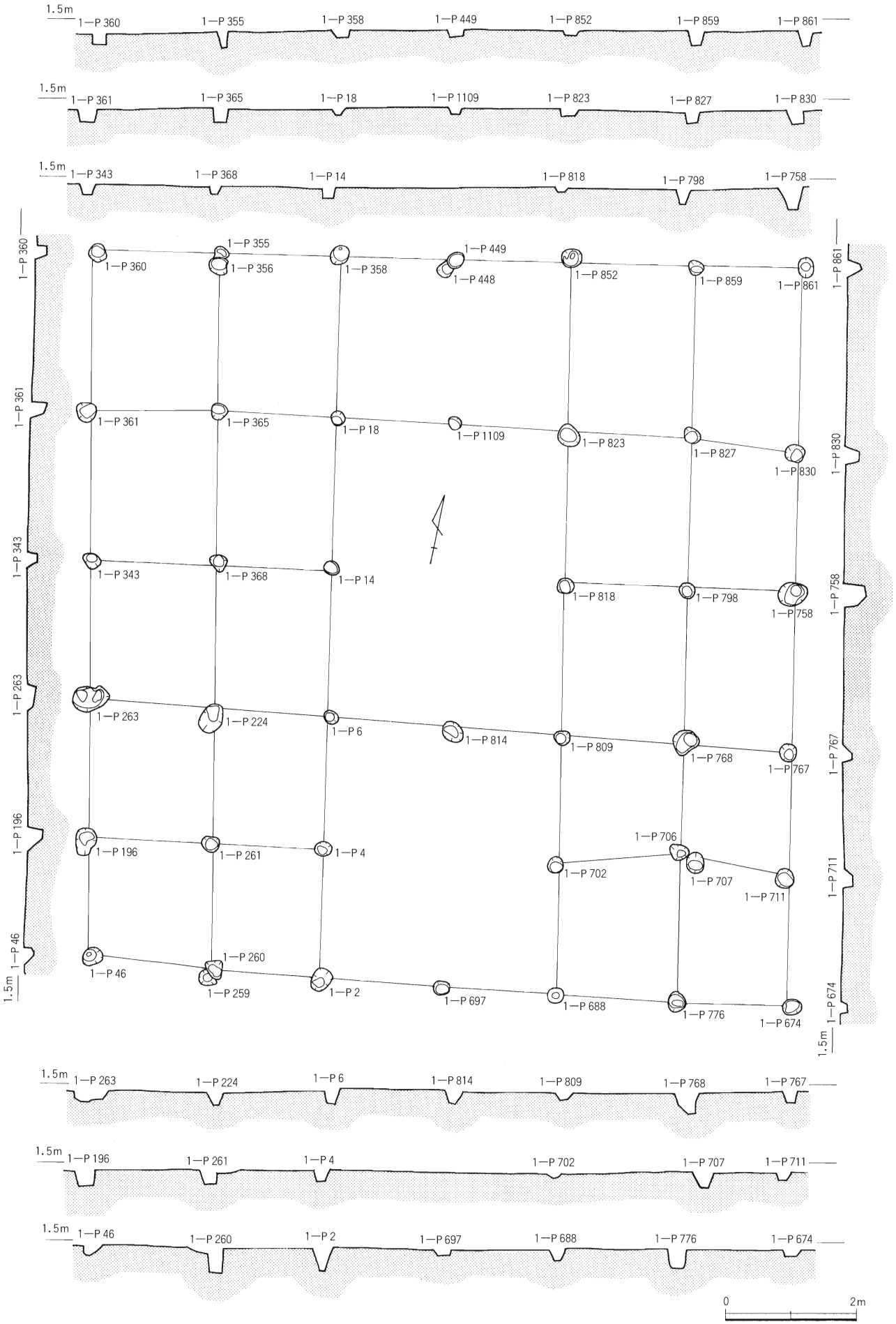




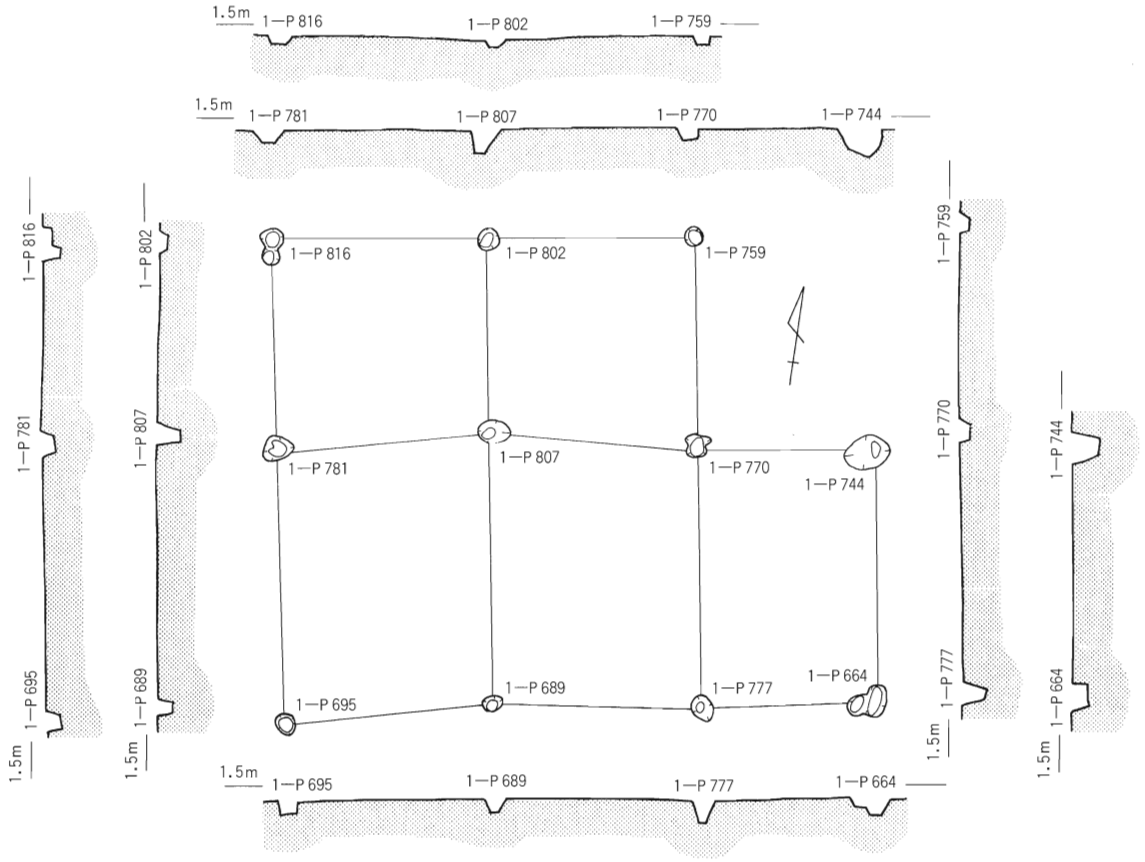
第 14 図　柱列１・２，建物跡13（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）
１区南西部建物跡・柱列出土建物（S＝ 1/4）



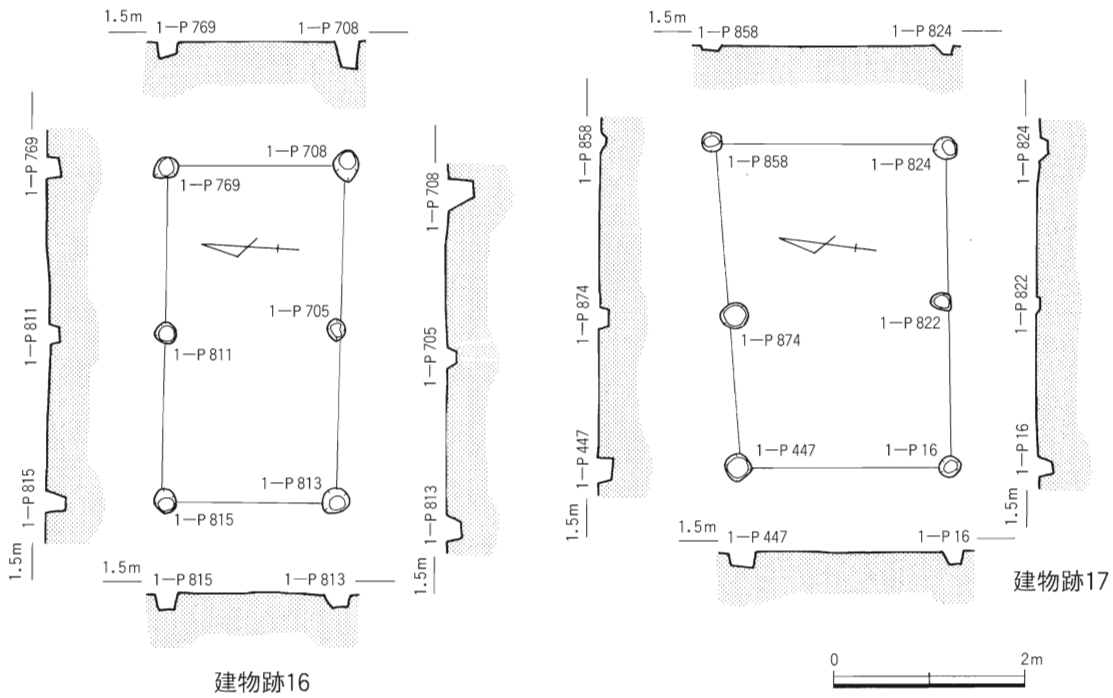
第 15 図　１区南側中央部遺構図（S＝ 1/100）



第 16 図　建物跡14（S＝ 1/80）



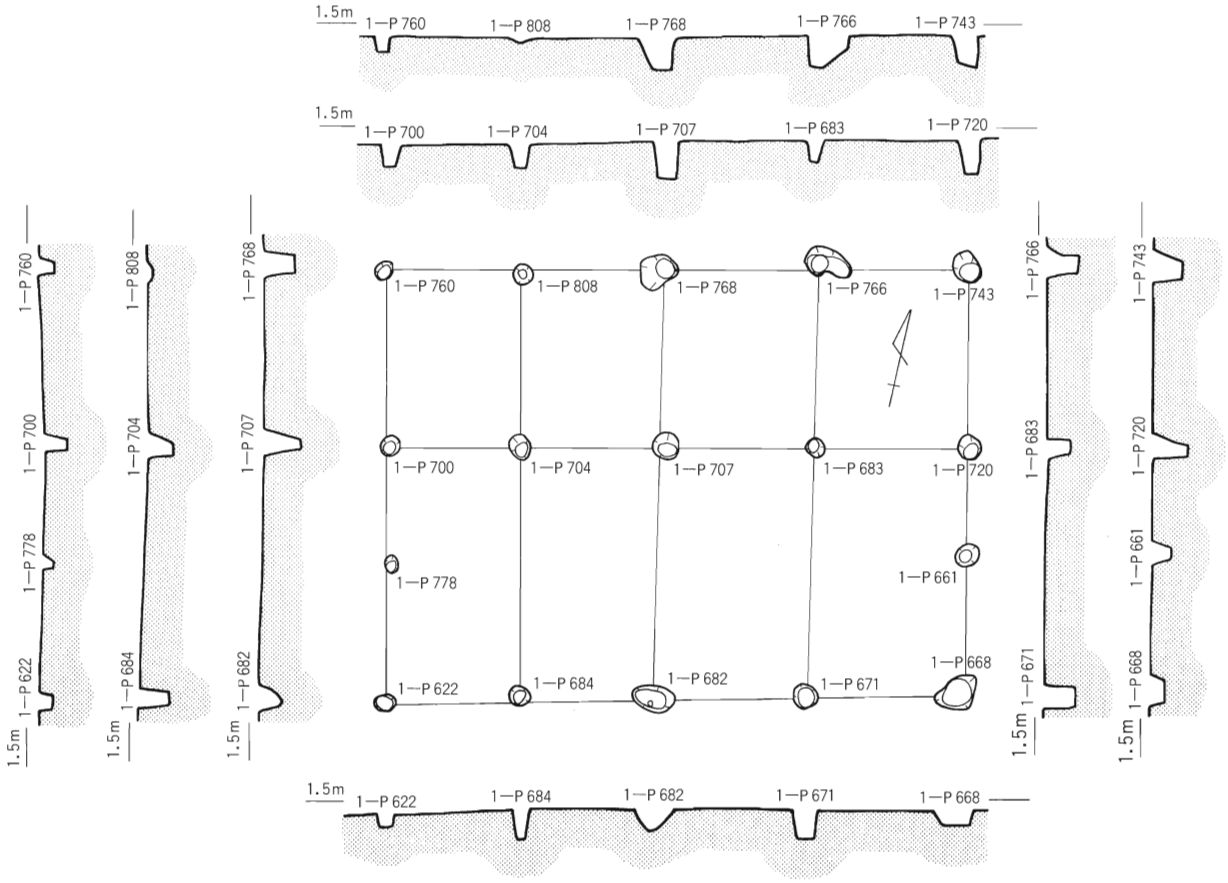
建物跡15



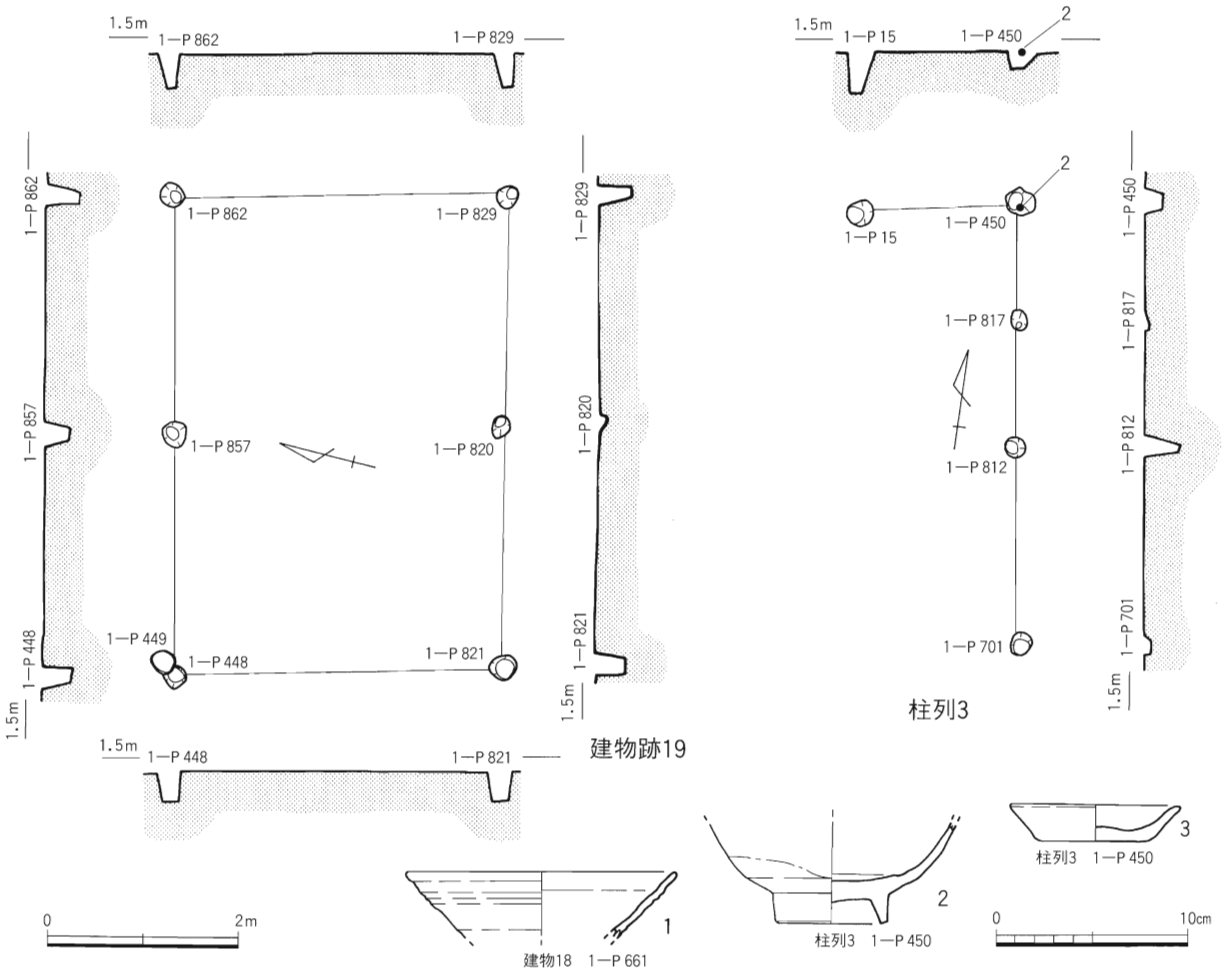
建物跡16

建物跡17

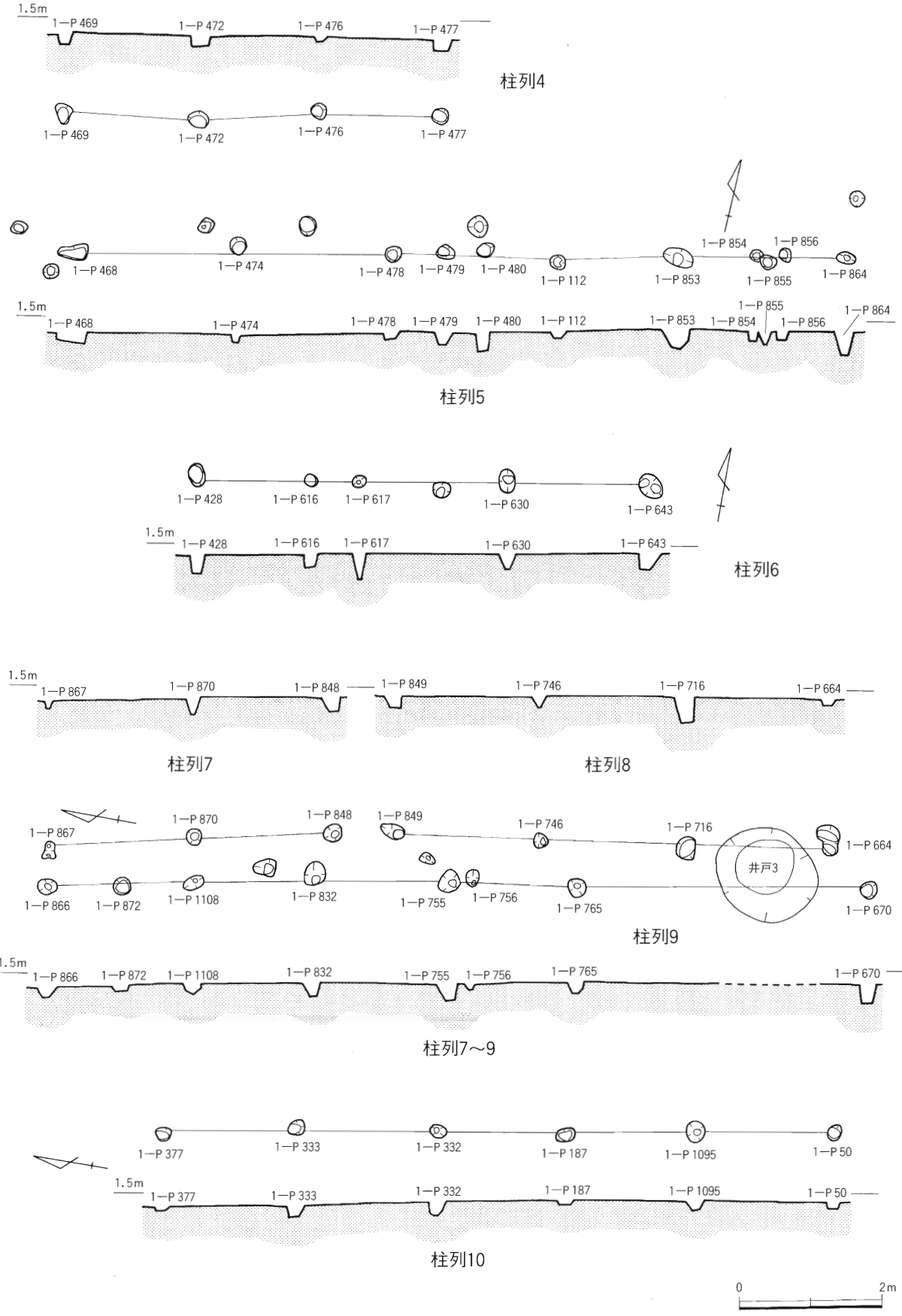
第17図　建物跡15～17（S＝ 1/80）



建物跡18



第 18 図　建物跡18・19，柱列３（S＝ 1/80，建物：S＝ 1/4）



第 19 図　柱列 4 ～10（S＝ 1/80）

柱列７～９（第15・19図）

柱列７は建物跡14から東へ1.5m離れたところにある。柱間は２間（4.0m）で、主軸方向はＮ－12°－Ｗである。位置関係から建物跡14に伴う可能性がある。

柱列８は、柱列７を南へ延長した位置にある。柱間は３間（6.04m）で、主軸方向はＮ－７°－Ｗである。柱列７からみて主軸が若干東にふれていることから別の遺構として表示したが、柱列７と一連のものであった可能性もある。

柱列９は、建物跡14と柱列７・８との中間に位置する。柱間は５間（11.42m）であるが、本来は１－Ｐ765と１－Ｐ670との間に柱穴が存在していたが、井戸３によって切られた可能性もある。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。

柱列10（第15・19図）

１区南側中央部で、建物跡14から西へ約1.5mのところに位置する。また、建物跡10・11と重複する。柱間は５間（9.88m）で、主軸方向はＮ－９°－Ｗである。主軸方向は建物跡14の西辺の方

第 20 図　１区南東部・２区北東部遺構図（S＝ 1/80）

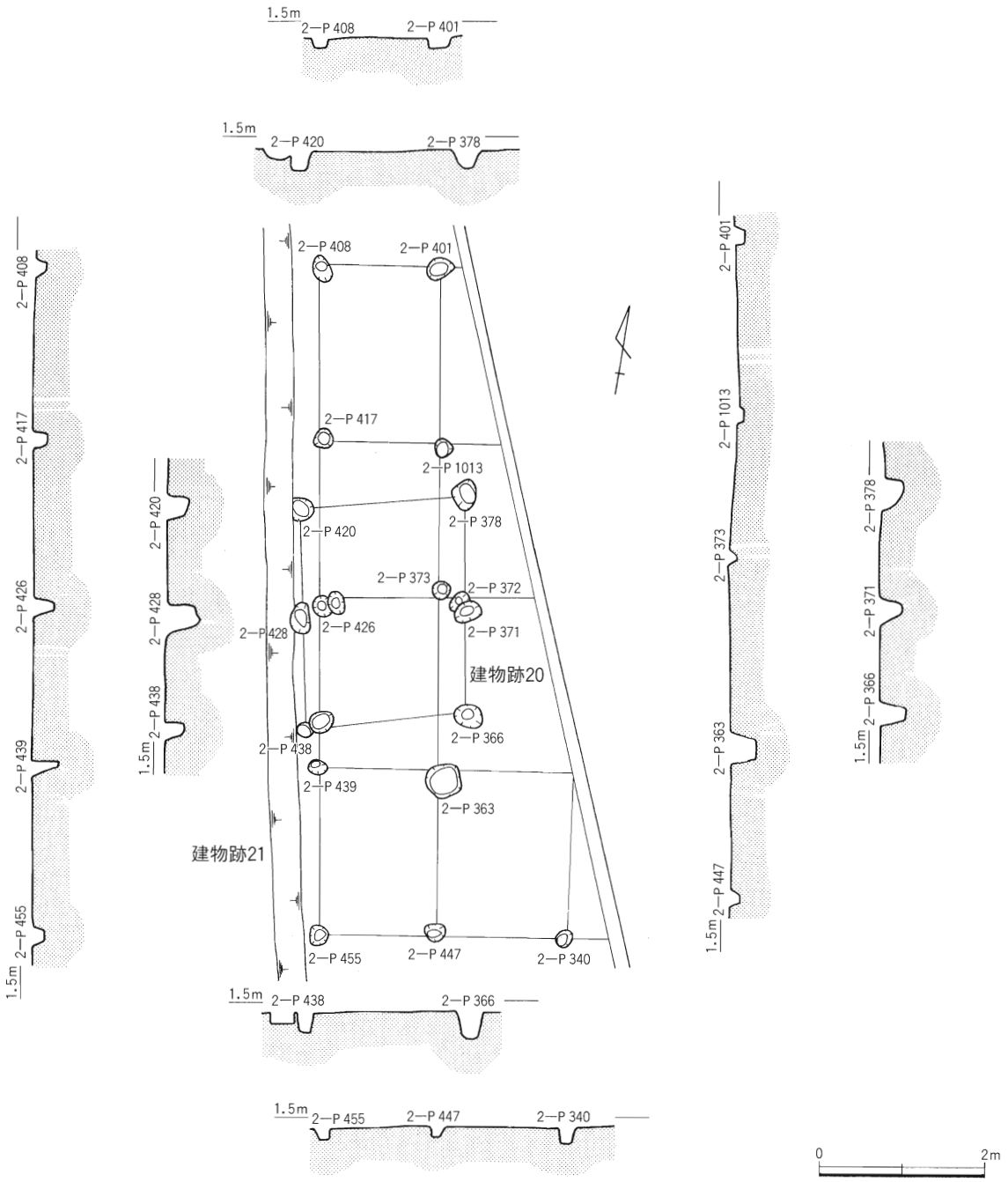
向と若干ずれるが、位置関係から建物跡14に関連したものとも考えられる。

建物跡20（第20・21図）

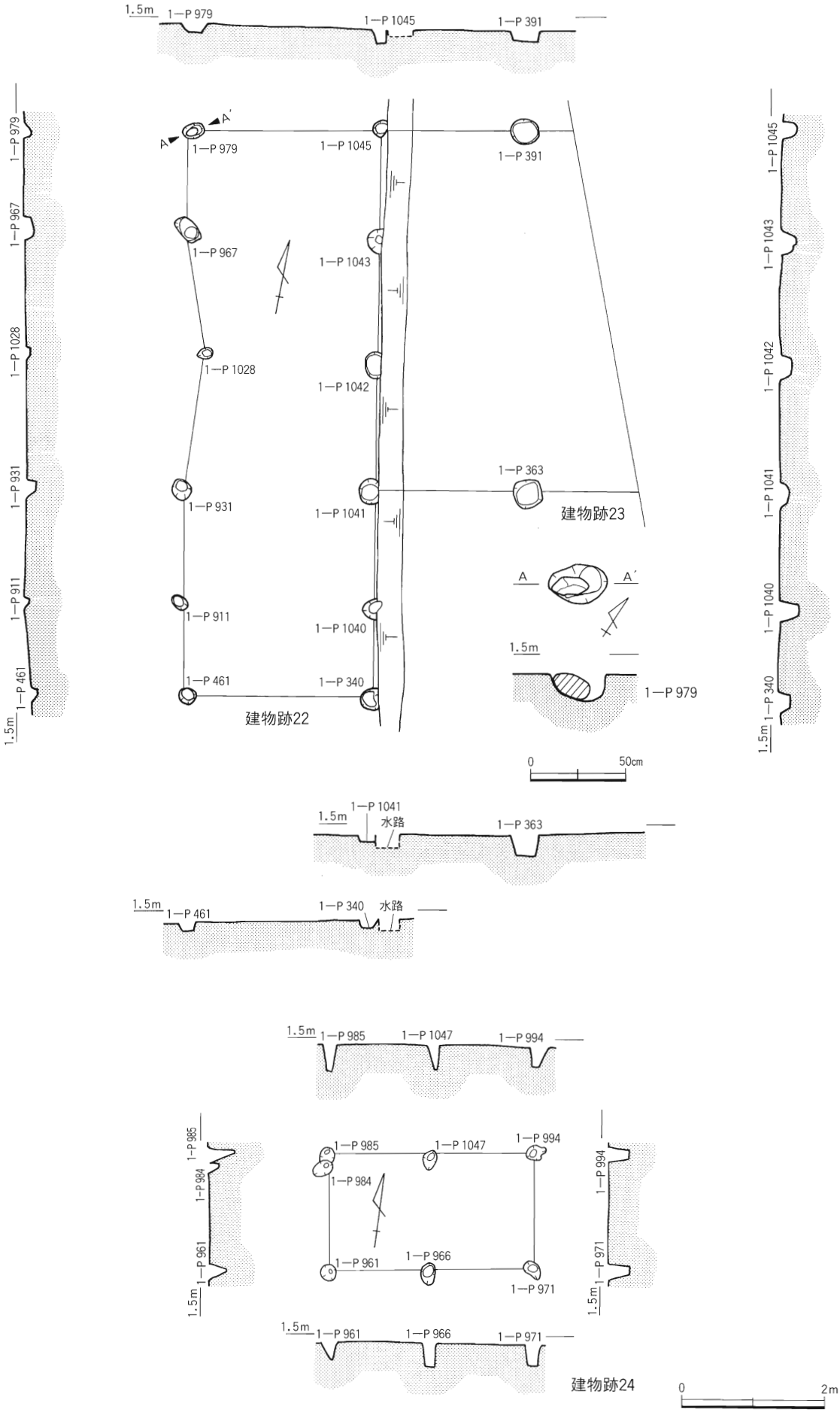
２区北東部で、溝状遺構３から北へ４m行ったところに位置し、建物跡21・23・25と重複する。１間（2.0m）×２間（2.6m）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－10°－Ｗで、溝状遺構３とほぼ直交する。

建物跡21（第20・21図）

２区北東部で、溝状遺構３から北へ1.6mのところに位置し、建物跡20・23・25と重複する。確認できた部分で見れば東西２間（2.94m）×南北４間（8.08m）の総柱建物跡で、東辺の北側は調査区外にのびている。現状で見れば、南北方向（桁行き）に対して、東西（梁行き）がかなり短い



第 21 図　建物跡20・21（S＝ 1/80）



第 22 図　建物跡22～24（S＝ 1/80）

ことから、さらに東側に広がっていた可能性も考えられる。主軸方向はＮ－９°－Ｗで、溝状遺構３とほぼ直交する。

建物跡22・23（第20・22・24図）

１区南西部・２区北東部で、溝状遺構３の北側に位置する。両者は、１－Ｐ1041～1043・1045を共有しており、２棟の建物が別々に存在したと考えるには難があるが、２つの建物跡の復元案という意味で提示しておく。

建物跡22は、建物跡20・24・25、柱列11と重複しており、１－Ｐ340・461は溝状遺構３と切り合うが、前後関係は不明である。１間（2.72m）×５間（8.02m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－10°－Ｗで、溝状遺構３とほぼ直交する。１－Ｐ979には柱穴内に20cm大の礫が入っていた。また、１－Ｐ1028から土錘（24－１）が、１－Ｐ1043から青磁碗（24－２）の破片が出土している。24－２は、体部に鎬のない片彫連弁文を有するもので、龍泉窯系青磁碗Ⅱａ類に分類される。

建物跡23は、建物跡20・21・25と重複しており、建物跡20とは２－Ｐ363を共有する。東西１間（2.0m）以上×南北３間（5.18m）の掘立柱建物跡で、東側は調査区外にさらに広がるものと考えられる。主軸方向はＮ－10°－Ｗで、溝状遺構３とほぼ直交する。

建物跡24（第20・22図）

１区南西部で、溝状遺構３から北へ5.5mのところに位置し、建物跡22・25と重複する１間（1.66m）×２間（2.88m）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－82°－Ｅで、溝状遺構３とほぼ並行している。

建物跡25（第20・23・24図）

１区南西部・２区北東部で、溝状遺構３から約５m北側に位置する。２間（3.34m）×３間（5.24m）の総柱建物跡と考えたが、北側の柱間が狭いことから、１間×３間の身舎の北側に廂の付く建物であった可能性もある。主軸方向はＮ－81°－Ｅで、溝状遺構３とほぼ平行する。遺物は、１－Ｐ948から口縁端部に平坦面をもつ土師器擂鉢（24－３）が出土している。

柱列11（第20・23・24図）

１区南西部で、溝状遺構３から0.6m北側に位置する。柱間は３間（5.34m）、主軸方向はＮ－83°－Ｅで、溝状遺構３とほぼ平行する。１－Ｐ917の埋土中に石が入っていた。

建物跡26（第25・26図）

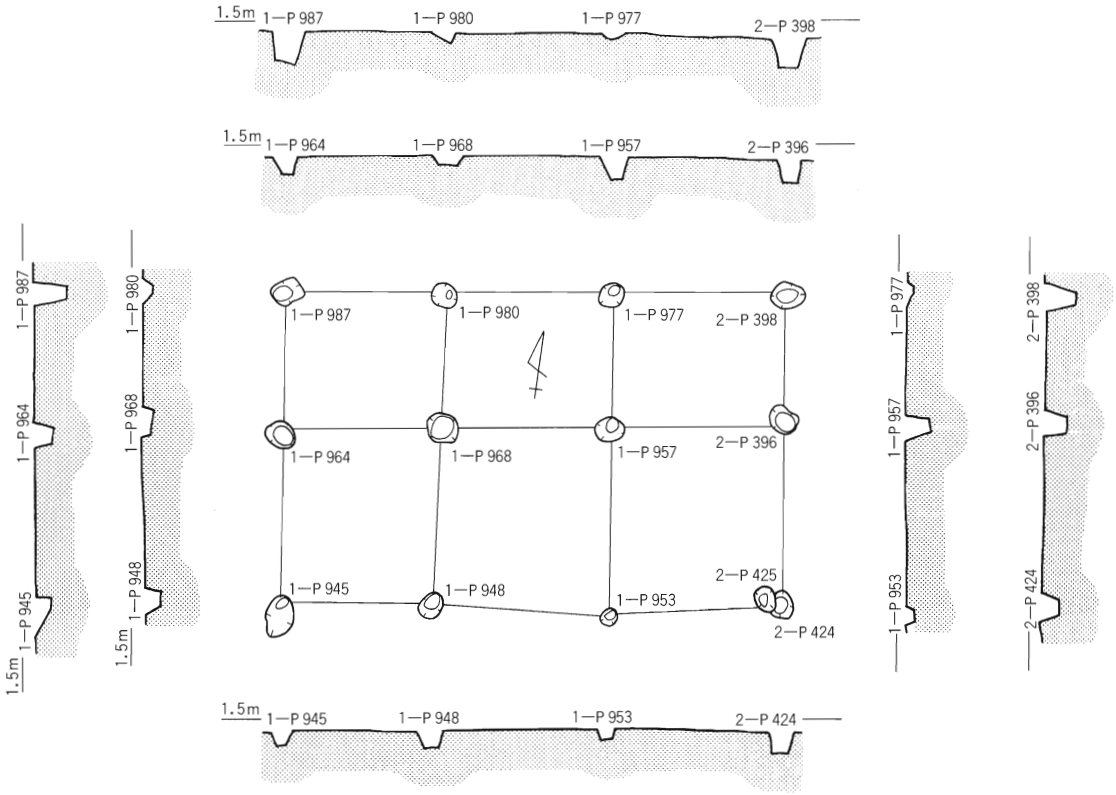
２区の西側で、溝状遺構４から約６m南に位置し、建物跡27・28、溝状遺構５～７と重複する。２間（4.2m）×３間（6.16m）の総柱建物跡である。主軸方向はＮ－83°－Ｅで、溝状遺構４とほぼ平行する。２－Ｐ710と２－Ｐ531には埋土中に石が入っていた。

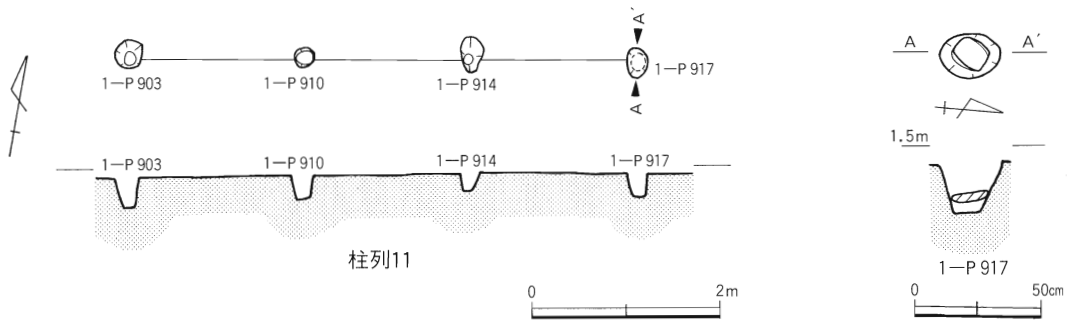
建物跡27（第25・26図）

２区の西側で、溝状遺構４から約３m南に位置し、建物跡28・30、溝状遺構６・７と重複する。２間（4.24m）×３間（8.08m）の総柱建物跡で、北西隅の柱穴は、調査区外に位置するものと考えられる。若干のずれは見られるものの、梁行きは７尺－７尺、桁行きは９尺－9.5尺－９尺を指向しているものと考えられる。主軸方向はＮ－85°－Ｅで、溝状遺構４とほぼ平行する。２－Ｐ625の埋土中には長さ約20cmの石が入っていた。

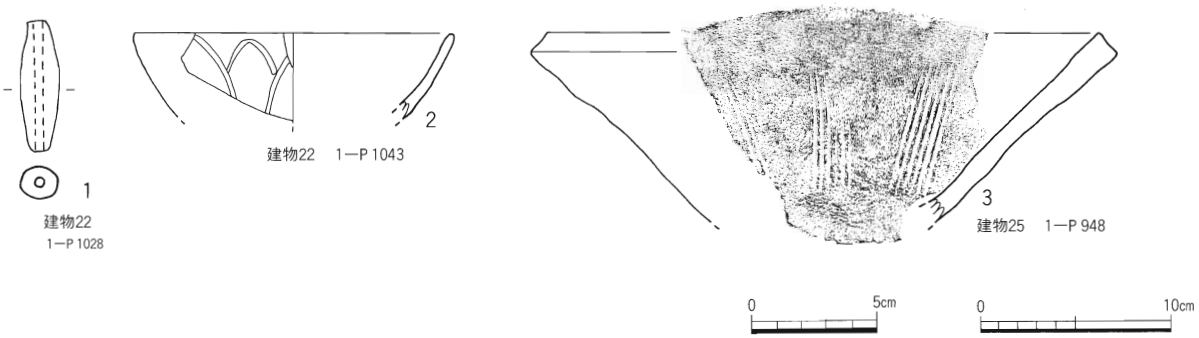
建物跡28（第27・30図）

２区の西側で、溝状遺構４から約６m南に位置し、建物跡26と重複する。また、北西隅の柱穴で

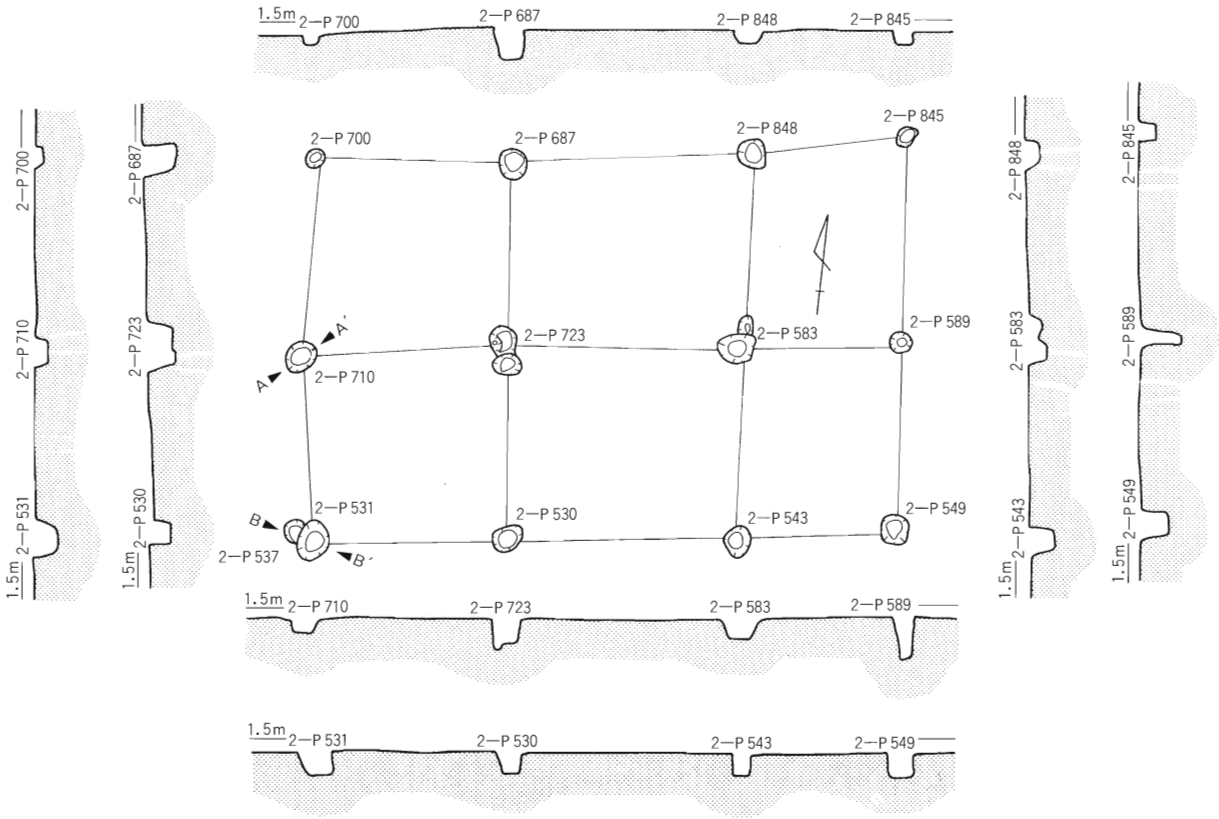




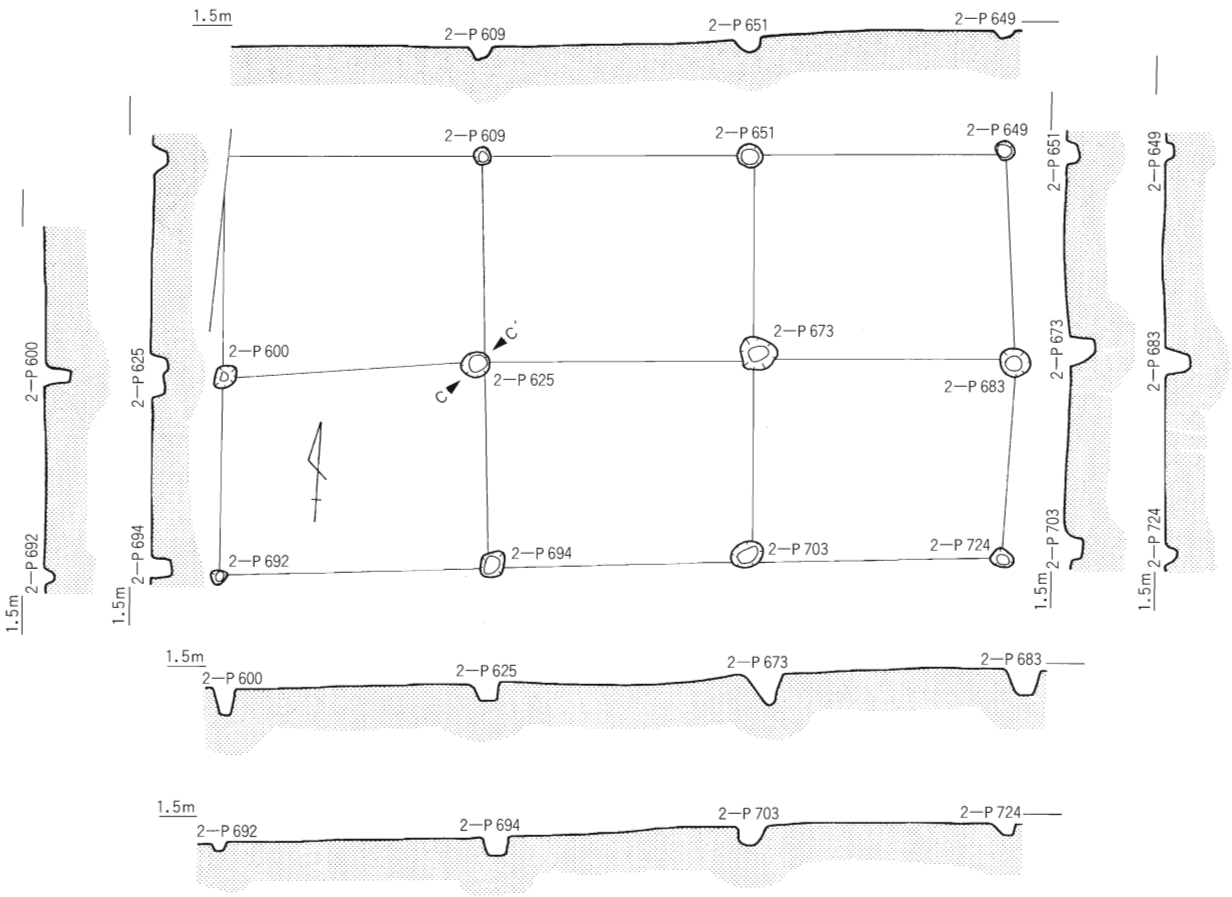
第 23 図　建物跡25，柱列11（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第 24 図　建物跡22・25出土遺物（１：S＝ 1/3，２・３：S＝ 1/4）



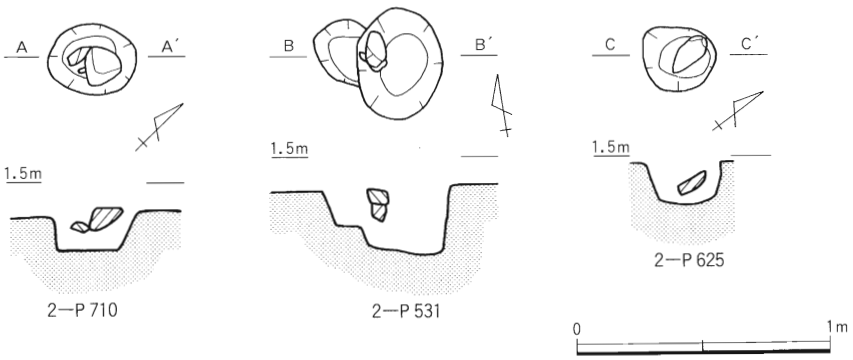
建物跡26



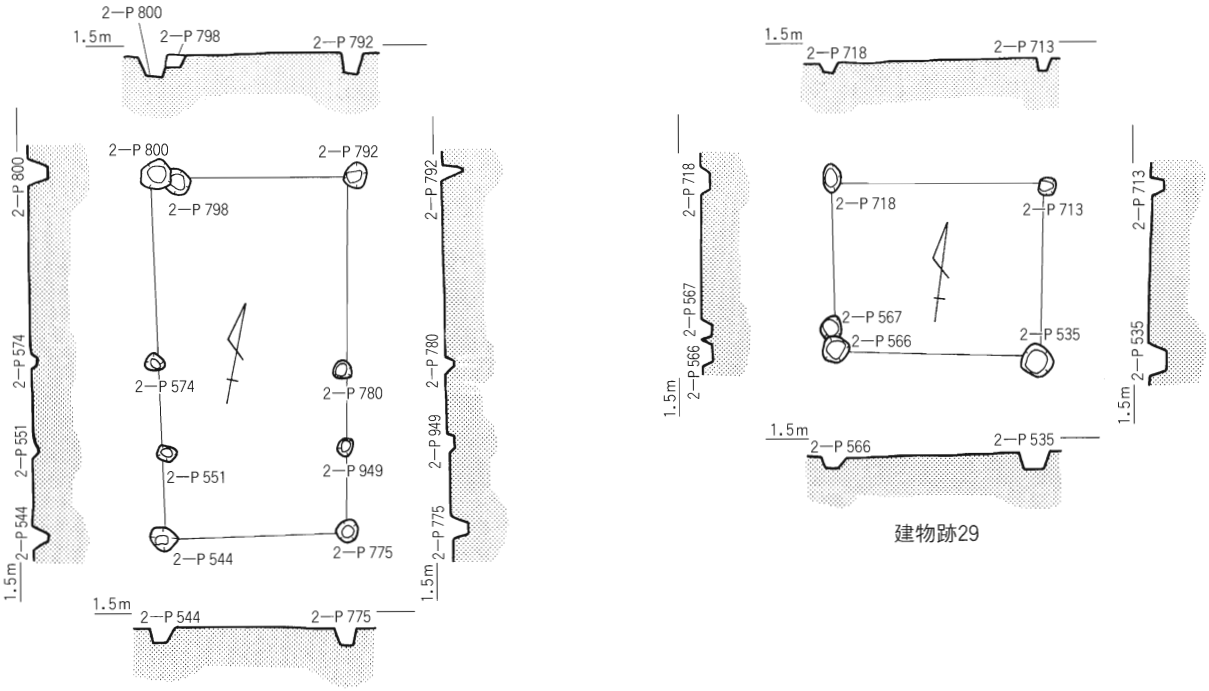
建物跡27

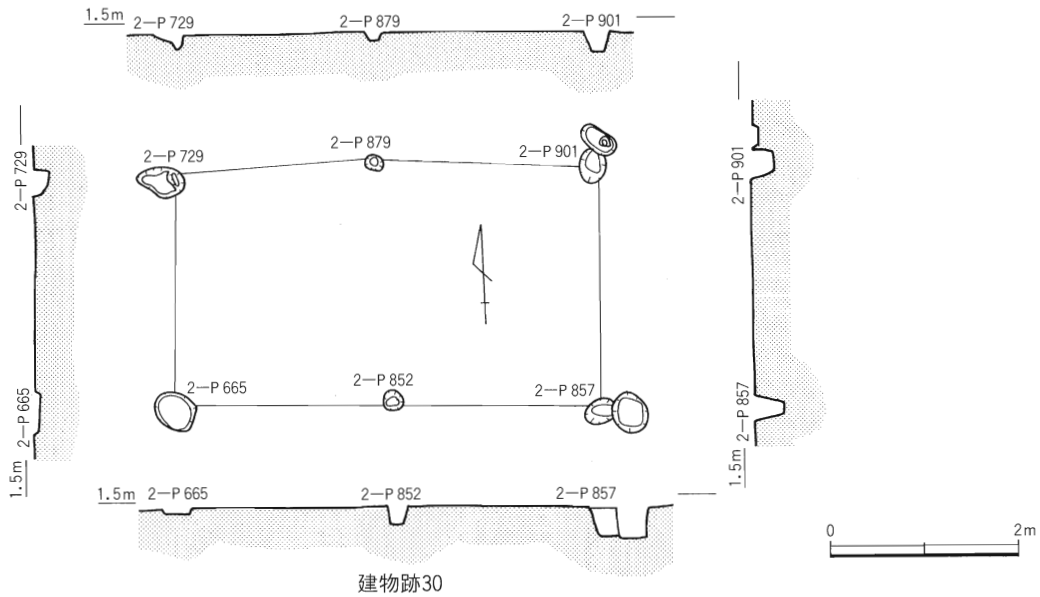
0　2m

第 25 図　建物跡26・27（S＝ 1/80）



第 26 図　建物跡26・27柱穴（S＝ 1/30）





第 27 図　建物跡28～30（S＝ 1/80）

ある２－Ｐ800は溝状遺構６と切り合っているが、前後関係は明らかにできなかった。１間（2.08ｍ）×２間（3.84ｍ）の掘立柱建物跡で、２－Ｐ574と２－Ｐ544との中間に２－Ｐ551が、２－Ｐ780と２－Ｐ775との中間に２－Ｐ949があり、補助的な柱が建っていたとも考えられる。主軸方向はＮ－10°－Ｗで、溝状遺構４と直交し、溝状遺構５とほぼ平行する。２－Ｐ949では、体部に鎬連弁文を持つ青磁碗（30－１）が出土している。

建物跡29（第27図）

２区の西側で、建物跡26の西、建物跡27の南に位置し、溝状遺構７と重複する。１間（1.88ｍ）×１間（2.16ｍ）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－84°－Ｅで、建物跡26・27とほぼ同じである。

建物跡30（第27図）

２区の西側で、溝状遺構４から約１ｍ南に位置し、南西隅が建物跡27と重複している。１間（2.38ｍ）×２間（4.46ｍ）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－87°－Ｗで、溝状遺構４とほぼ平行している。

建物跡31（第28図）

２区の中央部で、溝状遺構４から約３ｍ南に位置し、建物跡33、柱列11と重複する。１間（3.28ｍ）×２間（4.18ｍ）の掘立柱建物跡である。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。

柱列12（第28・30図）

柱間が２間（5.34ｍ）の柱列である。主軸方向はＮ－83°－Ｅで、溝状遺構４とほぼ平行する。２－Ｐ943から肥前系陶器の皿（30－３）が出土した。見込みには３か所の胎土目跡が見られる。２－Ｐ230の上部や埋土中には石が置かれていた。

建物跡32（第28・30図）

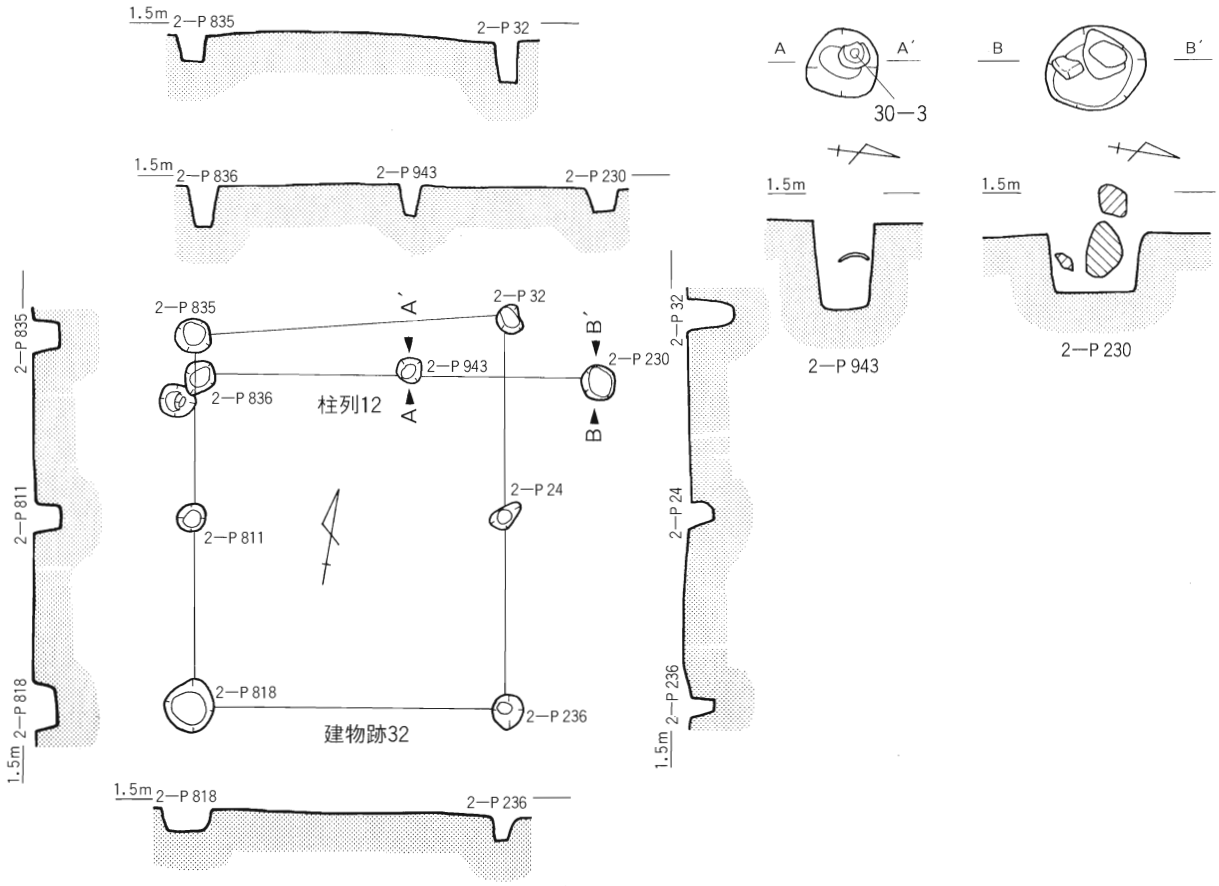
２区の中央部で、溝状遺構４から1.2ｍ南側に位置し、建物跡33、柱列11と重複する。また、南西隅の柱穴２－Ｐ20は建物跡33と共有しあうかたちになっているが、２つの建物の柱穴が切りあった結果と考えられる。１間（3.86ｍ）×２間（5.64ｍ）の掘立柱建物跡で、北西隅の柱穴である２－Ｐ278の埋土中には石が入っていた。主軸方向はＮ－８°－Ｗで、溝状遺構４とほぼ直交する。２－Ｐ30 を切って掘り込まれた２－Ｐ31から中国銭（30－５）が出土している。景祐元寶で、初鋳年は1034年である。

建物跡33（第29・30図）

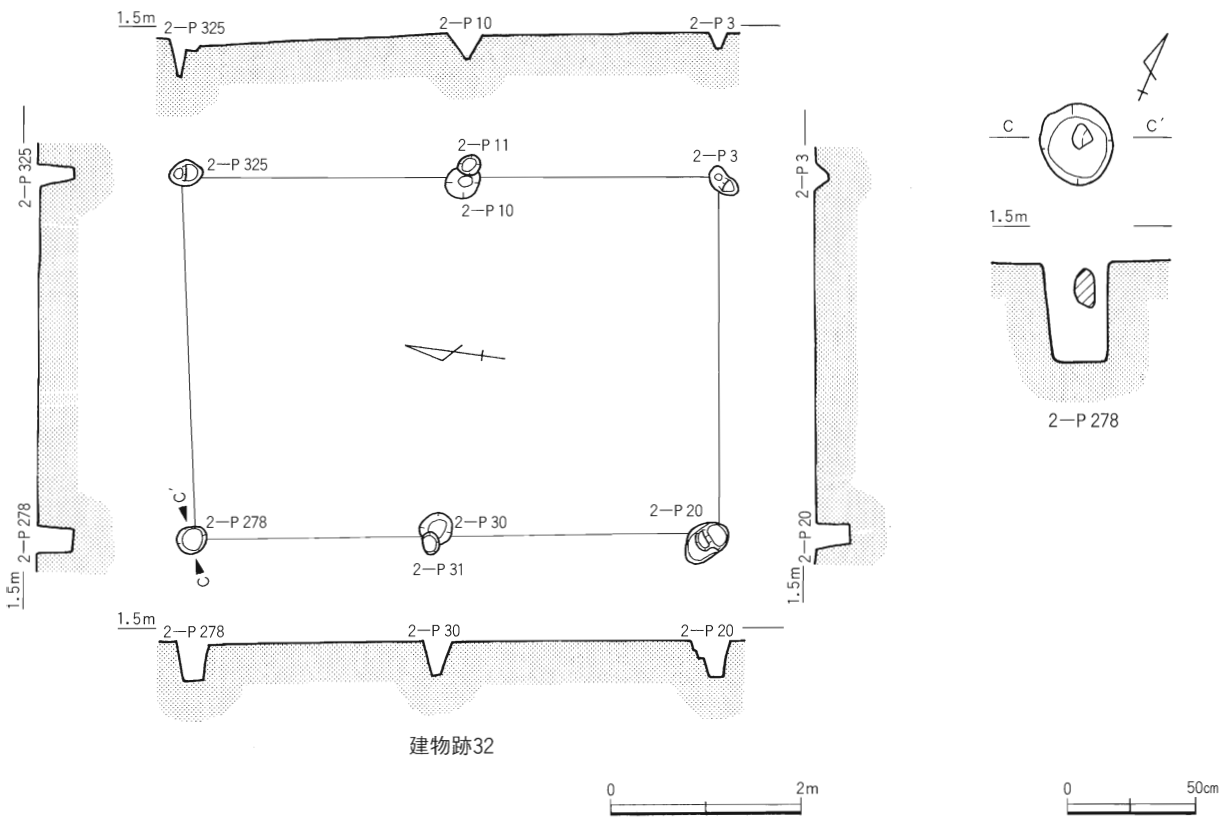
２区の中央部で、溝状遺構４から約４ｍ南側に位置し、建物跡31・32と重複する。２間（3.88ｍ）×３間（7.12ｍ）の総柱建物跡であるが、桁行き３間の柱間のうち、東側の柱間が他と比べで広くなっていることから、この部分は土間面であった可能性も考えられる。主軸方向はＮ－83°－Ｅで、溝状遺構４とほぼ平行する。２－Ｐ８・819 の埋土中には石が入っており、２－Ｐ４・27・830には柱根が残っていた。柱根の樹種は、２－Ｐ４・27はクスノキ科、２－Ｐ830はマツ属複維管束亜属と同定されている。２－Ｐ８では、円形木葉状の印刻文を持つ瓦質土器甕の胴部片（30－２）や、土錘（30－４）が出土している。

建物跡34（第31・32図）

２区東側で、溝状遺構４から約４ｍ南に位置し、建物跡35～39と重複する。また、２－Ｐ116を建物跡38と共有する。２間（3.76ｍ）×４間（5.58ｍ）の側柱建物跡で、建物跡の南西側は調査区



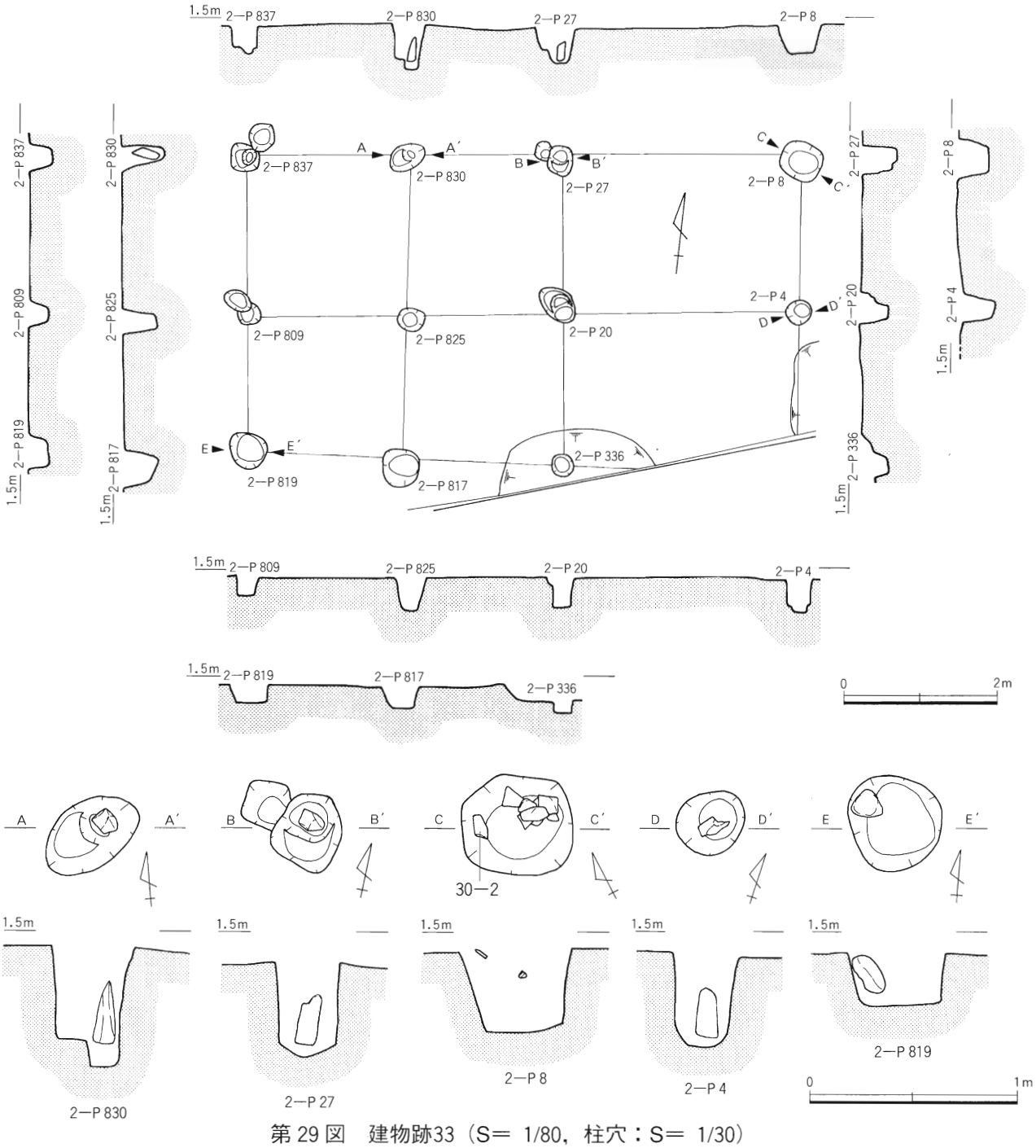
建物跡31，柱列12



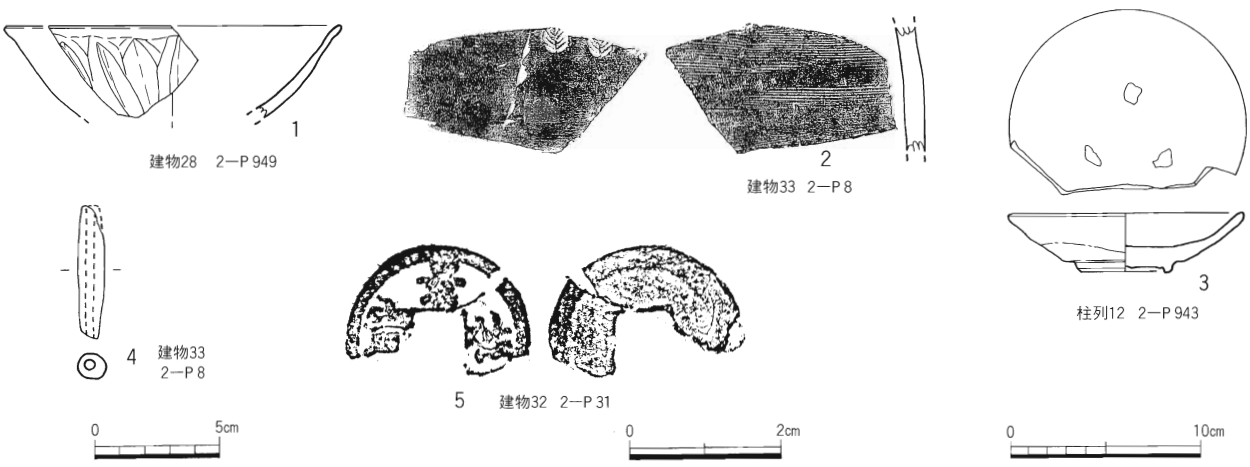
建物跡32

0　2m　　0　50cm

第 28 図　建物跡31・32，柱列12（S＝ 1/80，柱穴：1/30）

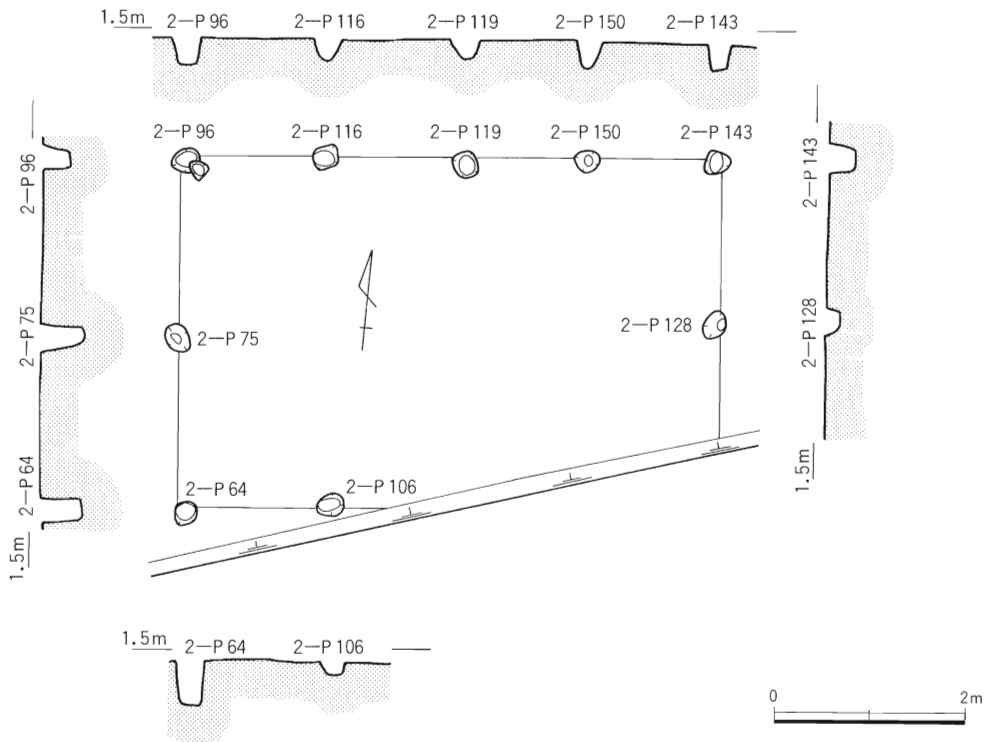


第 29 図　建物跡33（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）

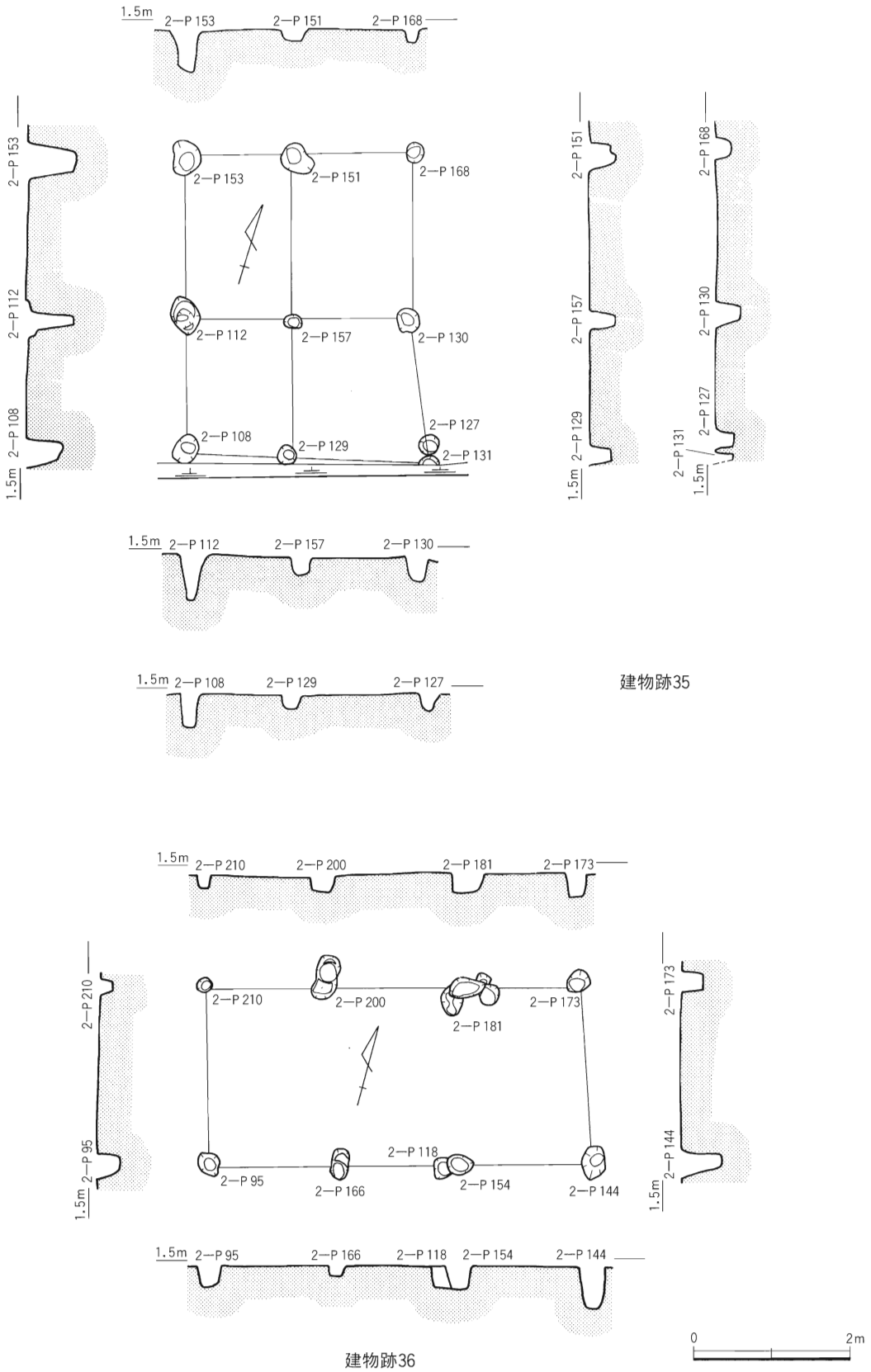


第 30 図　建物跡28・32・33，柱列12出土遺物（１～３：S＝ 1/4，４：S＝ 1/3，５：S＝ 1/1）

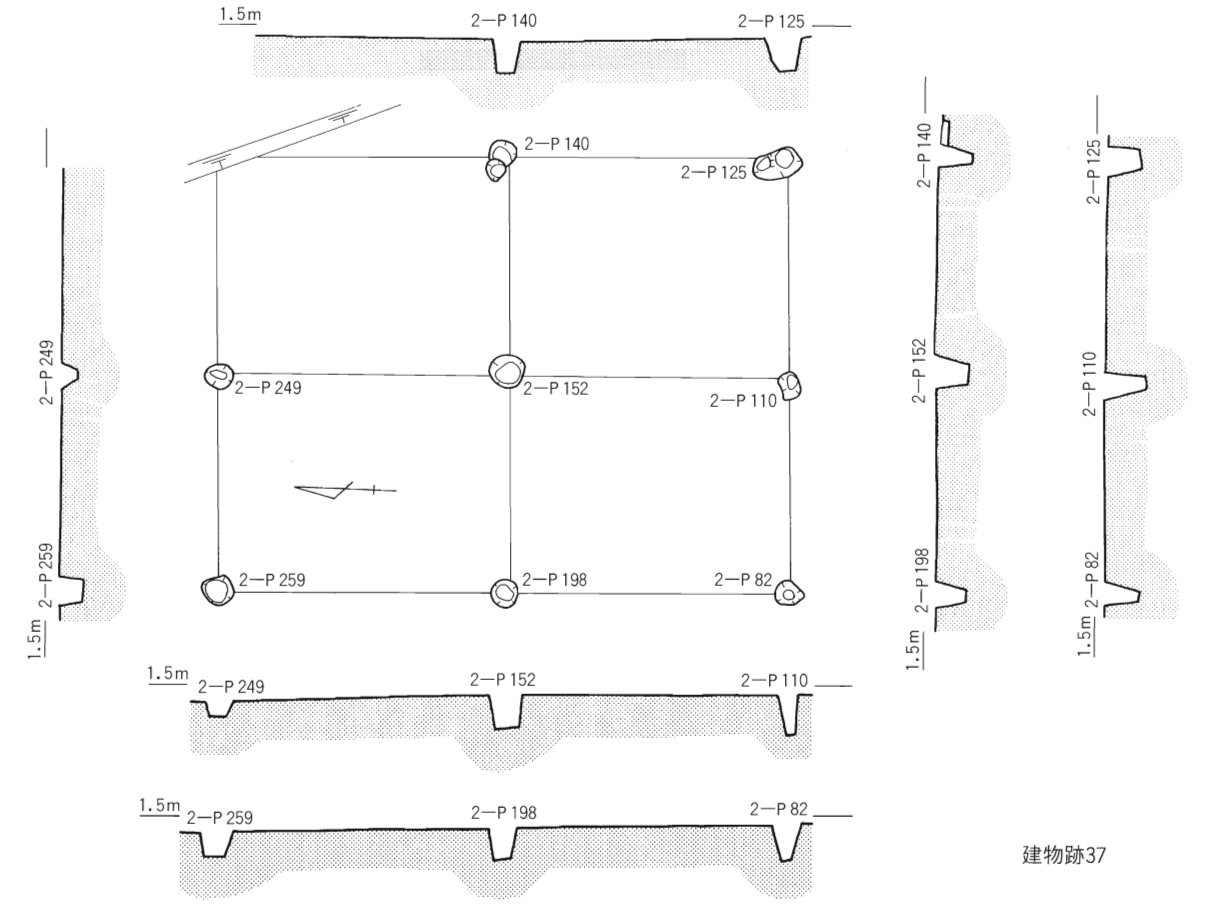
第 31 図　２区東側遺構図（S＝ 1/80）



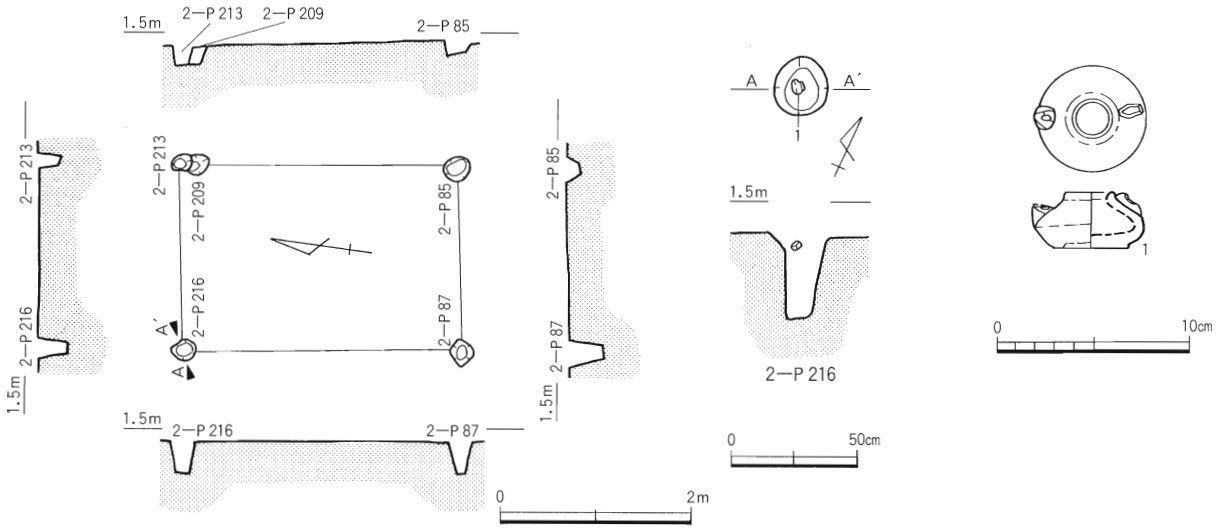
第 32 図　建物跡34（S＝ 1/80）



第 33 図　建物跡35・36（S＝ 1/80）



第 34 図　建物跡37・38（S＝ 1/80）



第 35 図　建物跡39（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30，遺物：S＝ 1/4）

外にのびる。主軸はＮ－85°－Ｅで、溝状遺構４とほぼ平行する。

建物跡35（第31・33図）

２区東側で、溝状遺構４から約４ｍ南に位置し、建物跡34・36～38と重複する。また、南西隅の柱穴である２－Ｐ108を建物跡38と共有する。２間（2.9m）×２間（3.7m）の総柱建物跡である。主軸方向はＮ－18°－Ｗで、建物跡34とは若干ずれる。

建物跡36（第31・33図）

２区東側で、溝状遺構４から2.3m南に位置し、建物跡34・35・37～39と重複する。２－Ｐ200・154は建物跡38と共有し、２－Ｐ181は、建物跡38の柱穴である２－Ｐ180を切っている。１間（2.28ｍ）×３間（4.76m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－76°－Ｅである。

建物跡37（第31・34図）

２区東側で、溝状遺構４から１ｍ弱南に位置する。２間（4.66m）×２間（5.98m）の総柱建物跡で、建物跡北東隅の柱穴は調査区外に位置するものと考えられる。主軸方向はＮ－20°－Ｗで、溝状遺構４とほぼ直交する。

建物跡38（第31・34図）

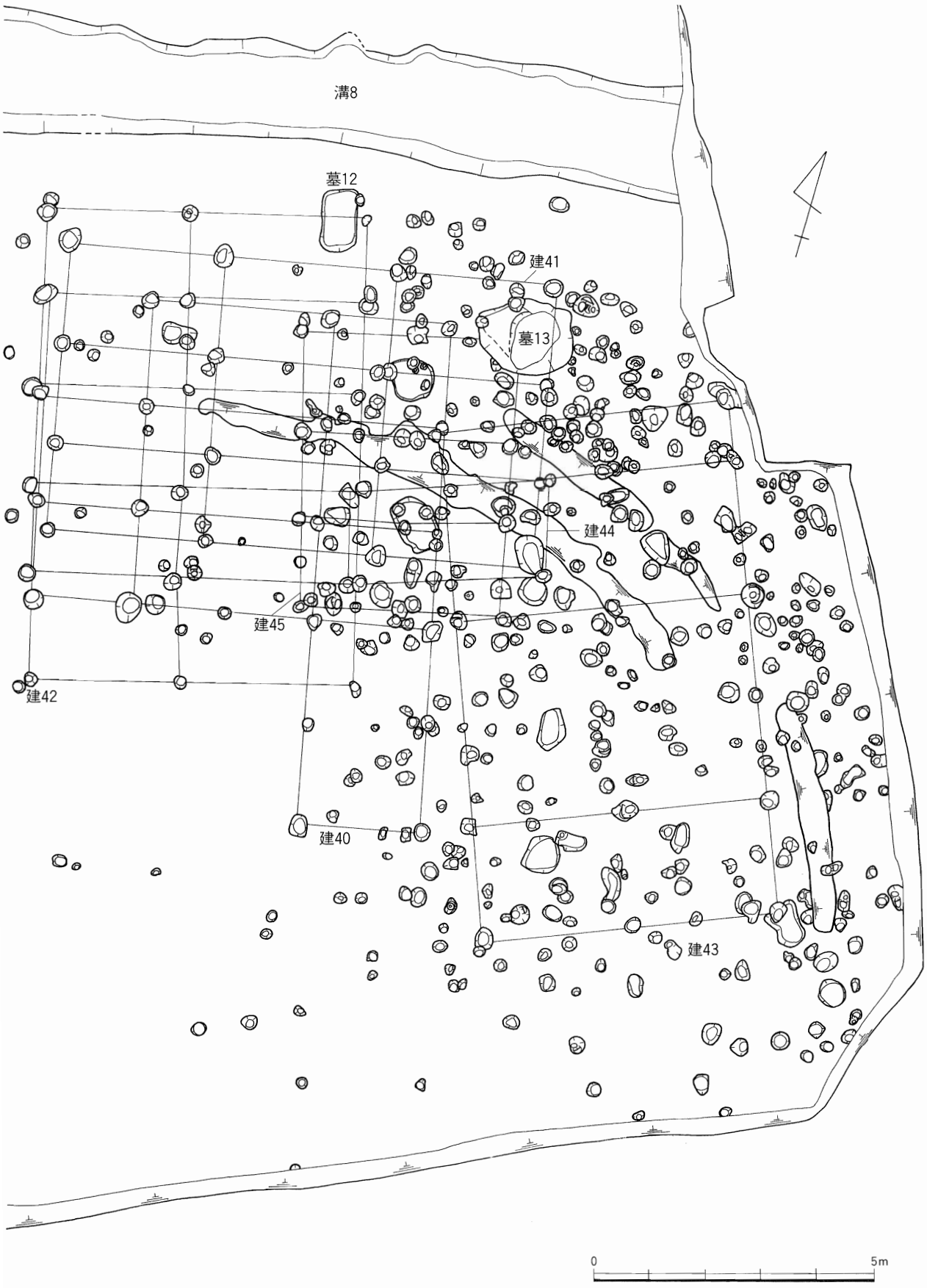
２区の東側で、溝状遺構４から約２ｍ南に位置し、建物跡34～37・39と重複する。２間（5.38m）×３間（6.26m）の掘立柱建物跡と考えたが、北西隅の柱穴は確認できなかった。北側の柱間は南側の柱間と比べて狭いことから、１間×３間の建物の北辺東側に１間×２間の付属施設を伴うものだったのかもしれない。主軸方向はＮ－81°－Ｅである。

建物跡39（第31・35図）

２区の東側で、溝状遺構４から約２ｍ南に位置する、１間（1.98m）×１間（2.94m）の掘立柱建物跡である。北西隅の柱穴、２－Ｐ216の上部からほぼ完形の瀬戸水滴（35－１）が出土した。古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ期のものと考えられる。この遺物から、この建物の時期は14世紀末～15世紀前半と考えられる。

３区東側建物群（第36図）

３区東側では柱穴が密集して検出されており、その中から建物跡40～45が重複しながらも復元す



第 36 図　３区東側遺構図（S＝ 1/100）

ることができた。後述するように１つの柱穴を複数の建物が共有しあうこともあり、これらの復元が正しいという確証はないが、建物跡の可能性のあるものとして提示しておく。なお、詳細は個別の遺構でふれるが、柱穴検出時に柱穴の切り合いを確認しており、そこから建物跡の前後関係は、古いものから、建物跡41→建物跡44→建物跡42→建物跡40→建物跡43、という順序が考えられる。ただし、この順序は、建物跡の復元が正しく、検出時の認識に誤りがないことを前提とするものであることを断っておく。

建物跡40（第37図）

溝状遺構８から約３ｍ南に位置している。東西３間（7.14ｍ）×南北３間（5.38ｍ）の掘立柱建物の南東に、南北２間（3.66ｍ）×東西１間の付属施設が伴うものとして復元した。建物の中央の柱間に対して東西両側の柱間が狭いことから、東西１間（3.22ｍ）×南北３間の身舎の東西両側に廂が付く構造とも考えられる。主軸方向はＮ－13°－Ｗで、溝状遺構３とほぼ直交する。３－Ｐ1477を建物跡42と共有しており、また、３－Ｐ1470は建物跡42の３－Ｐ1469を切り、３－Ｐ1439は建物跡43の３－Ｐ1386に切られている。なお、主屋南辺の３－Ｐ1494と３－Ｐ1562との間には３－Ｐ1447があるが、掘り込みが浅いことと北側に対応する柱穴が見られないことから、これは補助的な柱穴と考えた。３－Ｐ1414・1439の上面や埋土中には石が置かれていた。また、３－Ｐ1429から滑石製石鍋の破片（１）が出土した。体部が内弯しており、鍔の突出は比較的大きい印象を受ける。

建物跡41（第38図）

溝状遺構８から約２ｍ南に位置する、３間（5.2ｍ）×３間（8.64ｍ）の総柱建物跡である。主軸方向はＮ－78°－Ｅで、溝状遺構８とほぼ平行する。３－Ｐ1401は建物跡44の柱穴（３－Ｐ1391）に切られている。３－Ｐ1524の埋土中には石が入っていた。

建物跡42（第39図）

溝状遺構８から1.5ｍ南に位置する。２間（5.72ｍ）×５間（8.52ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－14°－Ｗである。西側の柱間と比べると東側の柱間がやや広くなっている３－Ｐ1420は建物跡44の柱穴（３－Ｐ1421）を切っている。

建物跡43（第40図）

溝状遺構８から約3.5ｍ南に位置する。２間（5.34ｍ）×５間（9.28ｍ）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－21°－Ｗである。３－Ｐ1530を建物跡44と共有している。柱穴は深く掘り込まれているものが多く、深さ50㎝を超えるものもある。３－Ｐ1573には、残存する太さが約10㎝の柱根が残っていた。３－Ｐ1275から土師器鉢（40－１）が、３－Ｐ1172から青磁小椀（40－２）が出土している。２は龍泉窯系の小碗Ⅳ類もしくはＤⅡ類のものと考えられる。

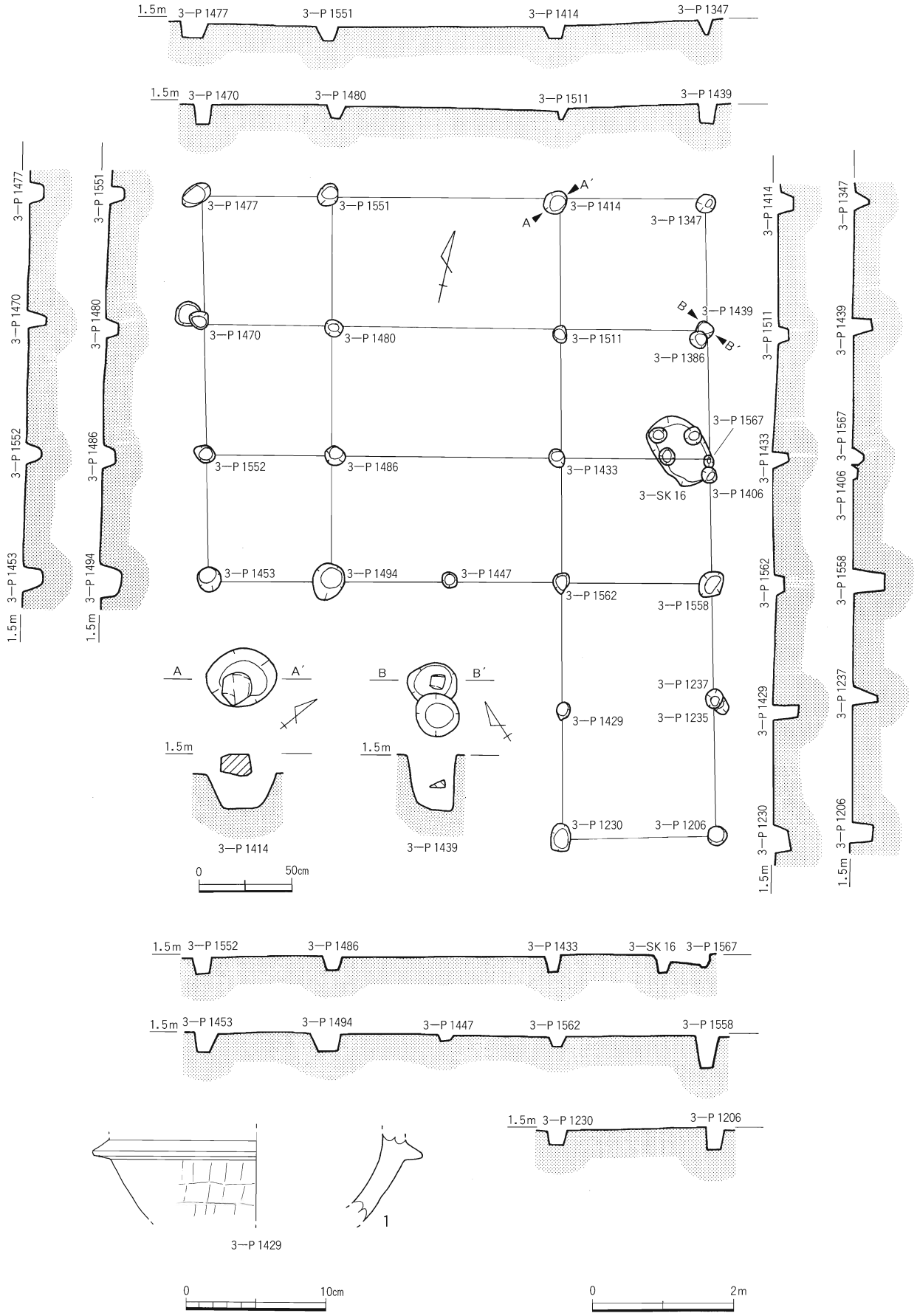
建物跡44（第41図）

溝状遺構８から約６ｍ南に位置する、１間（1.68ｍ）×２間（3.58ｍ）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－71°－Ｅである。

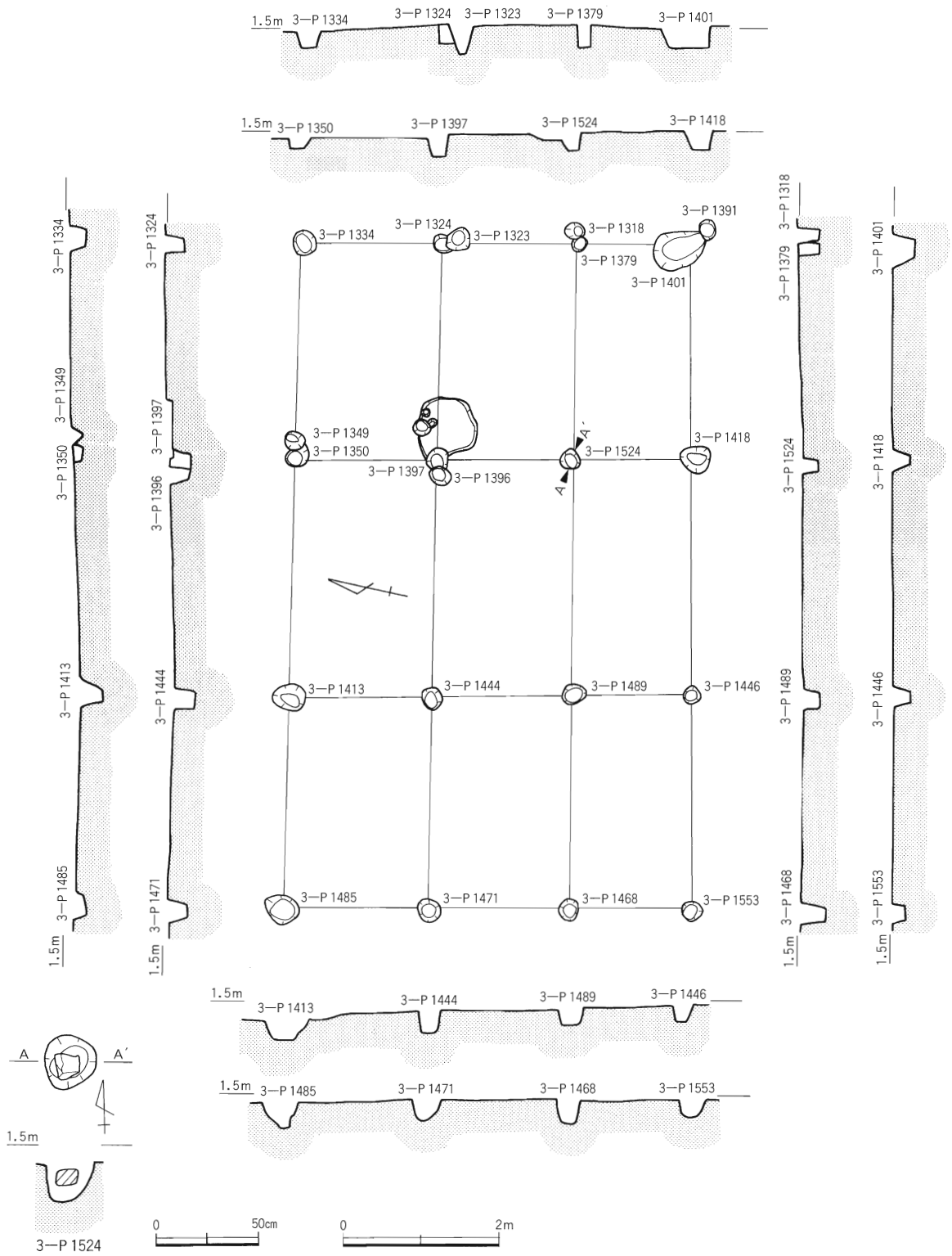
建物跡45（第41図）

溝状遺構８から約3.5ｍ南に位置する、２間（3.58ｍ）×３間（5.04ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－13°－Ｗである。北東隅の柱穴は、墓13と重複していた（切られていた）と考えられ、検出できなかった。

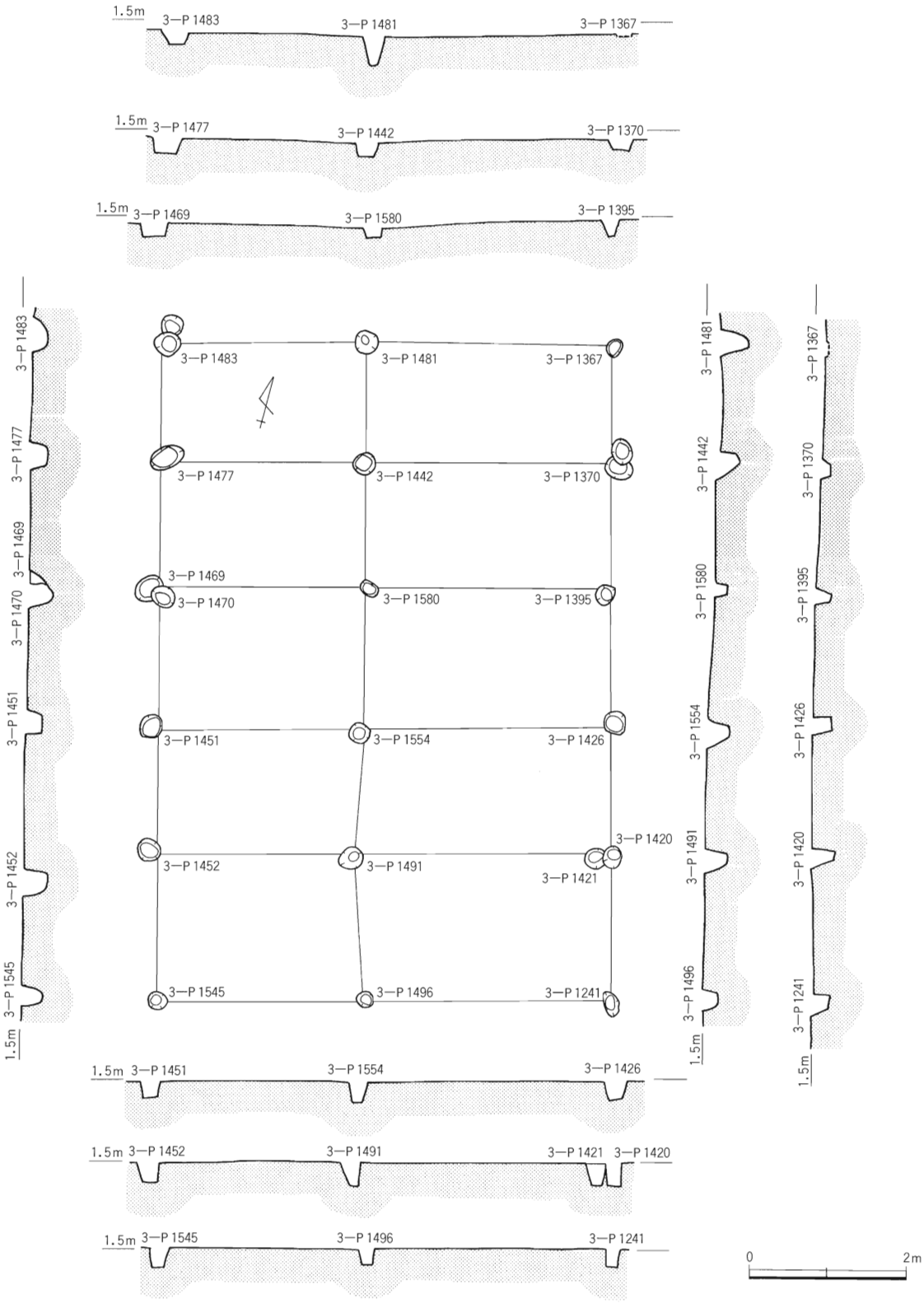
建物跡46（第42図）



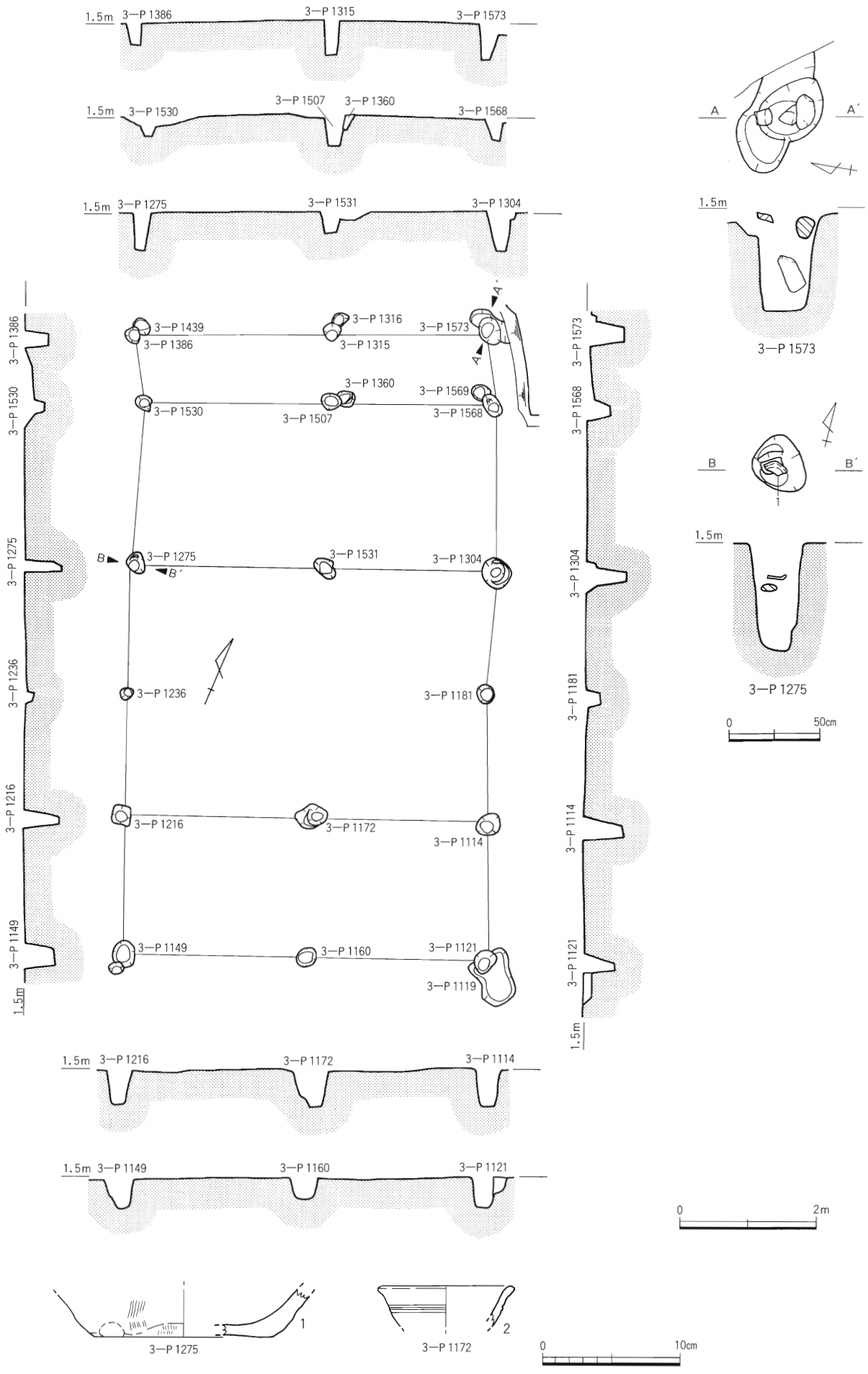
第 37 図　建物跡40（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30，遺物：S＝ 1/4）



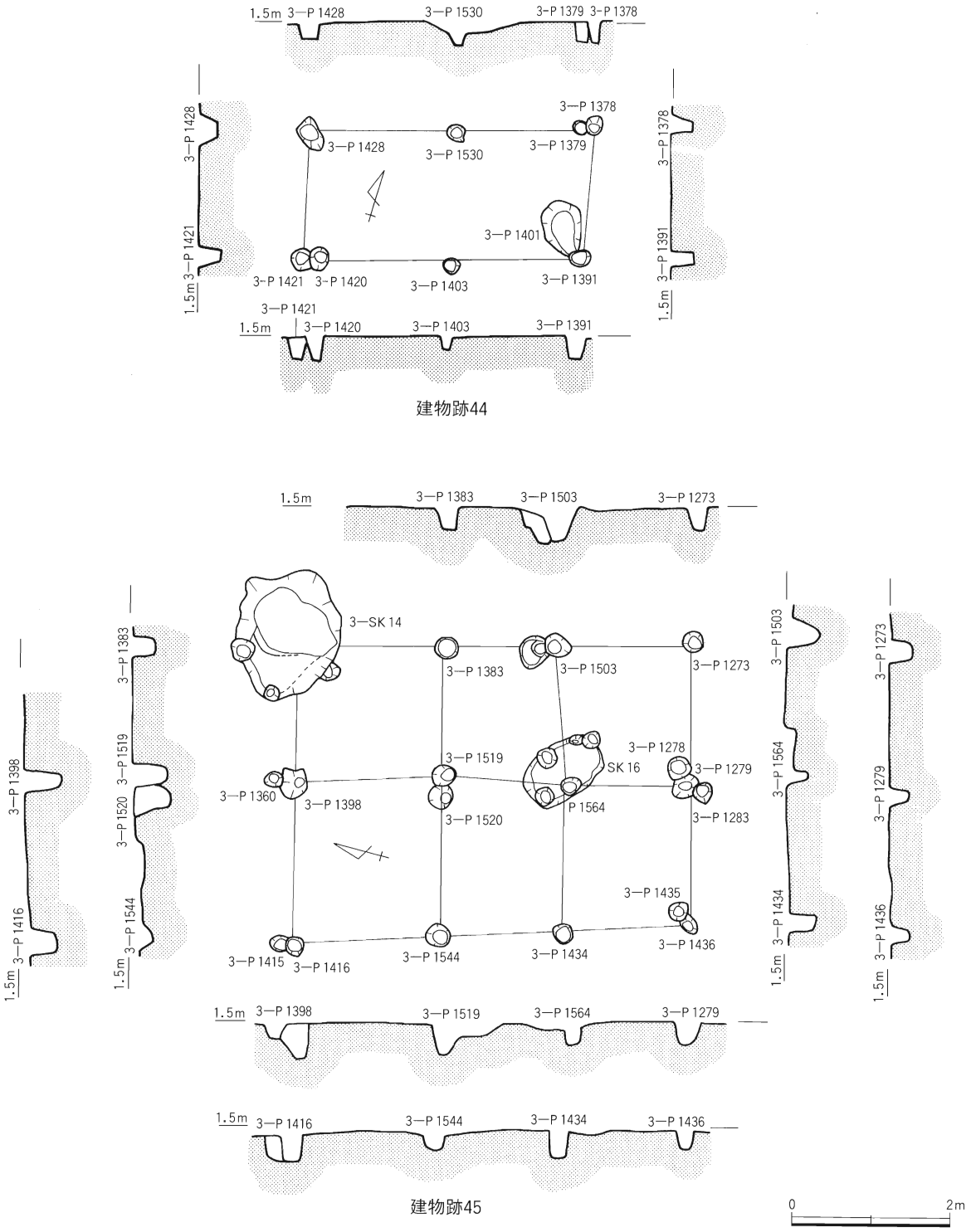
第 38 図　建物跡41（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第 39 図　建物跡42（S＝ 1/80）



第 40 図　建物跡43（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30，建物：S＝ 1/4）



第 41 図　建物跡44・45（S＝ 1/80）

３区の中央部で、溝状遺構８から約4.5m南に位置する、１間（3.7m）×３間（7.8m）の掘立柱建物跡である。若干のずれはあるものの、梁行きは12尺、桁行きは７尺－14尺－５尺を指向しているものと考えられる。桁行き方向の南側の柱間が狭くなっていることから、ここの部分は廂など付属的な施設だったのかもしれない。主軸方向はＮ－７°－Ｗである。

柱列13（第42図）

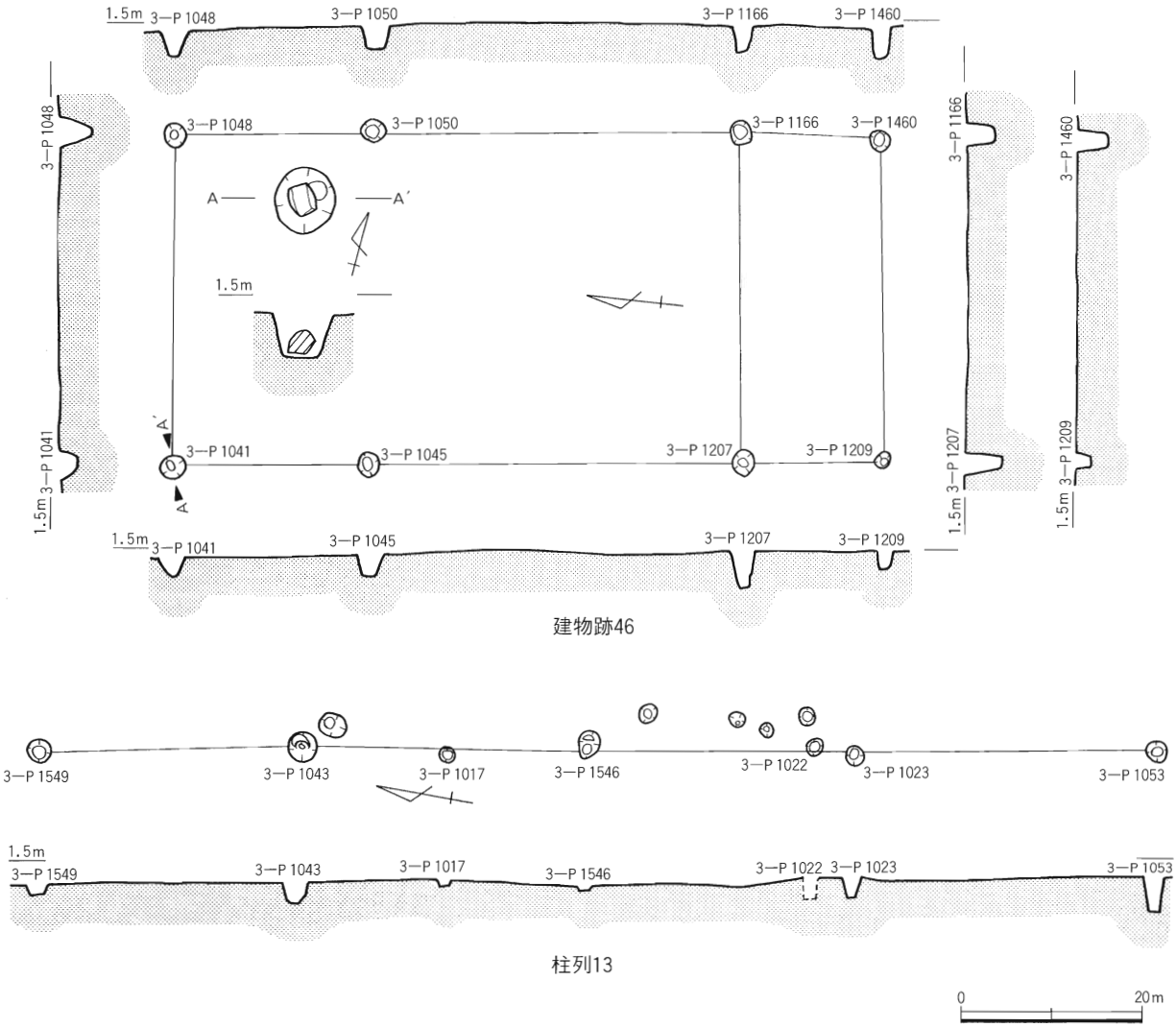
３区の中央から西に向かって下ったところにある下端の傾斜変換線からさらに西に行ったところに位置する。柱間は４間（12.22m）で、主軸方向はＮ－９°－Ｅである。

（２）溝状遺構・石列

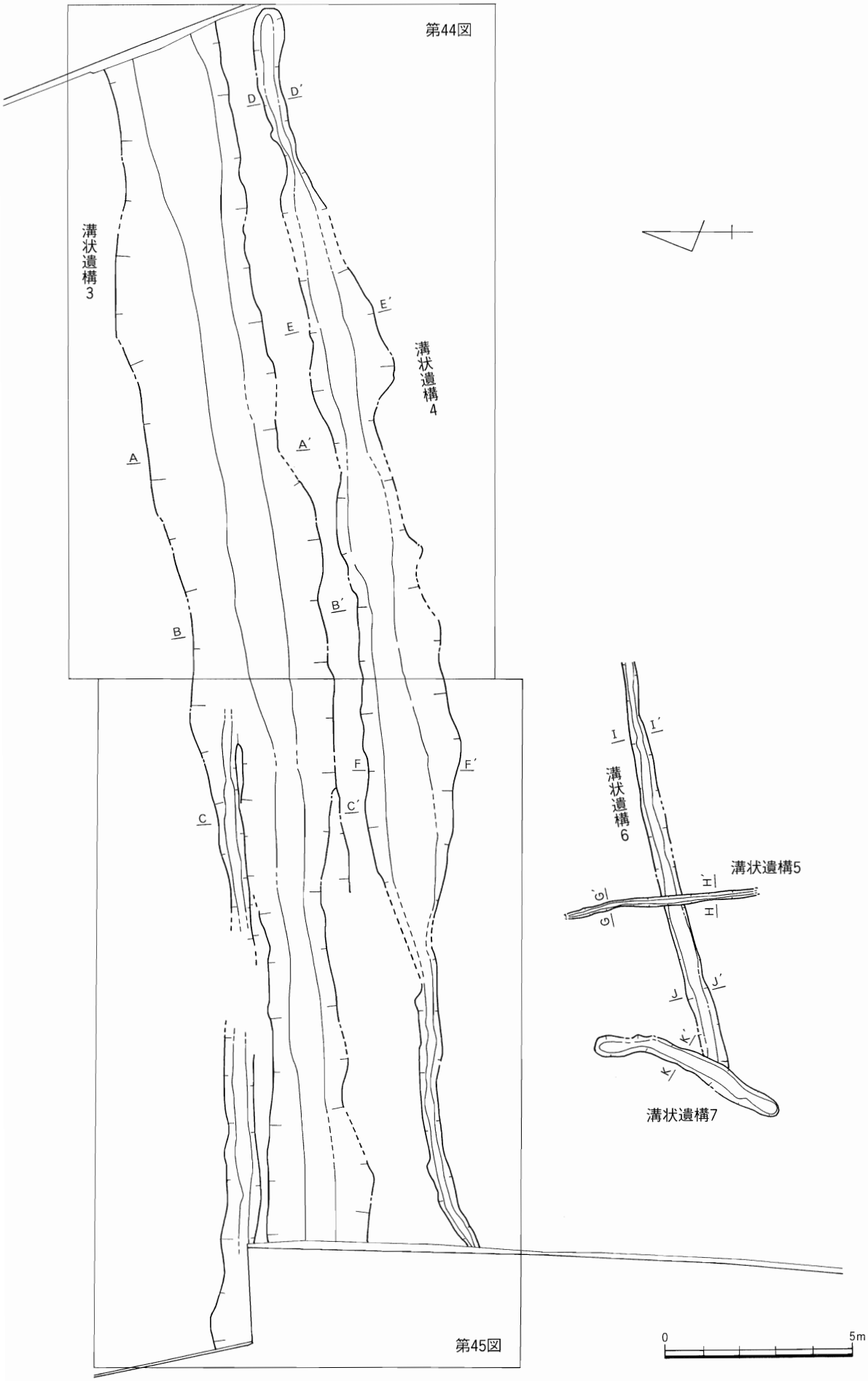
溝状遺構３（第43～47図）

溝状遺構３は、１区と２区の境界に沿って東西方向に直線的にのびている。東西とも調査区外へさらに続いており、東側については益田市教育委員会によって発掘調査された11区でその続きが確認されている。１区で検出された溝状遺構２とは17m前後間隔があるが、ほぼこれと平行しており、両者の関連性がうかがわれる。

幅は上端で2.5～４m、深さは30cm前後で、西側では二股に分かれている。断面形は浅い皿状に

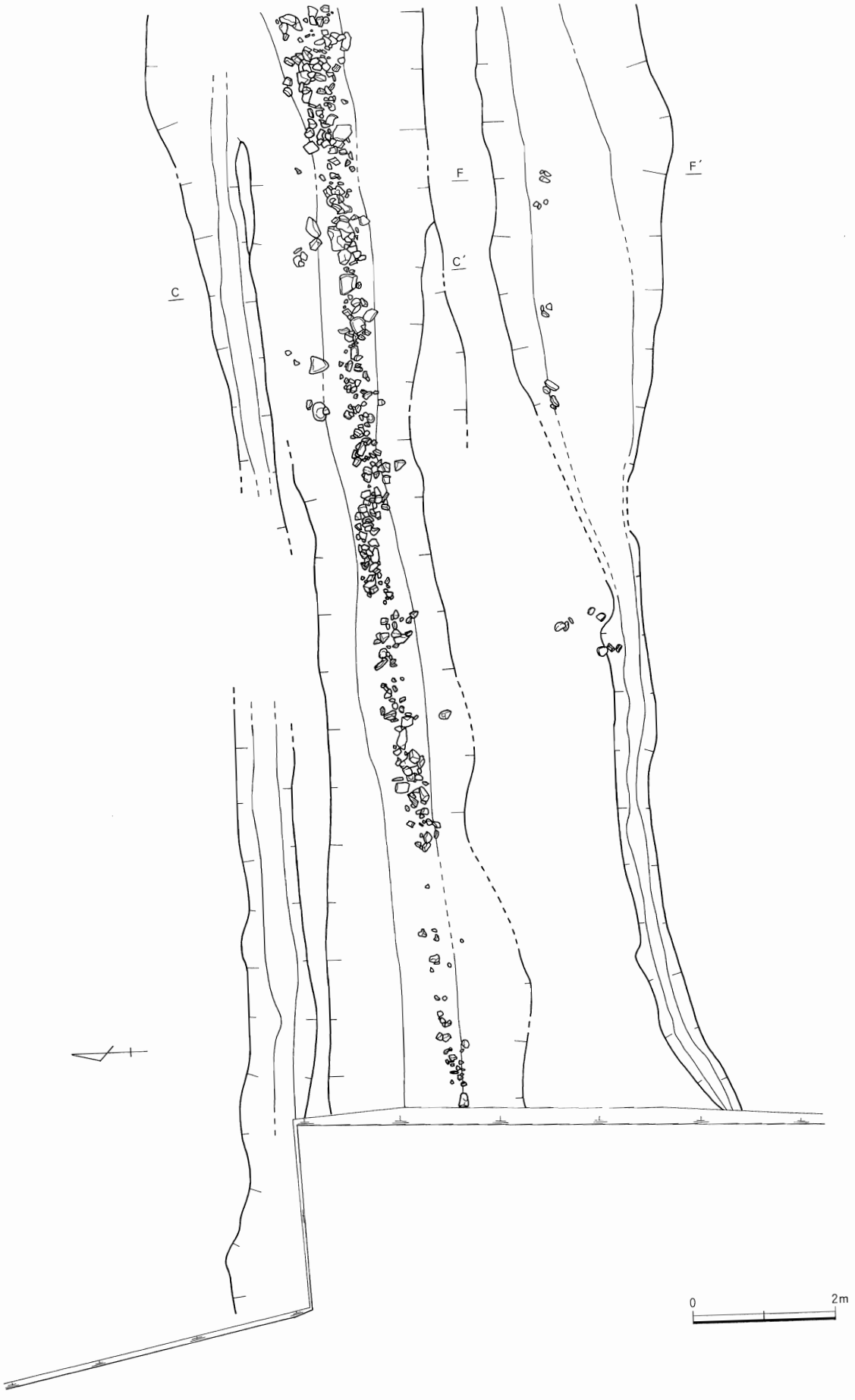


第 42 図　建物跡46，柱列13（S＝ 1/80）

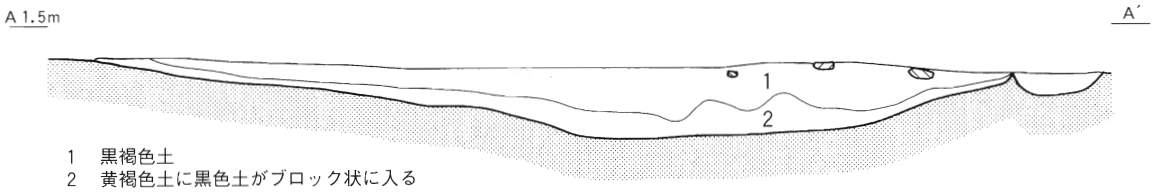


第 43 図　溝状遺構 3 ～ 7 （S＝ 1/150）

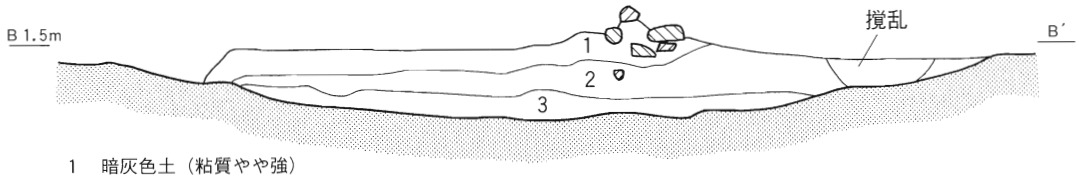
第 44 図　溝状遺構 3 ・ 4 東側（S＝ 1/80）



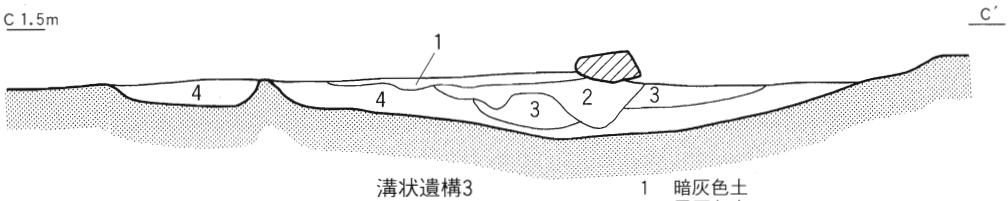
第 45 図　溝状遺構 3 ・ 4 西側（S＝ 1/80）



1　黒褐色土
2　黄褐色土に黒色土がブロック状に入る

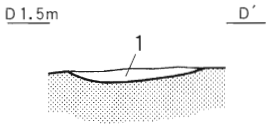


1　暗灰色土（粘質やや強）
2　黒褐色土（粘質やや強）
3　黄褐色土に黒灰色土がブロック状に入る

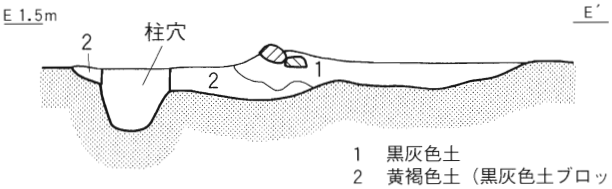


溝状遺構3

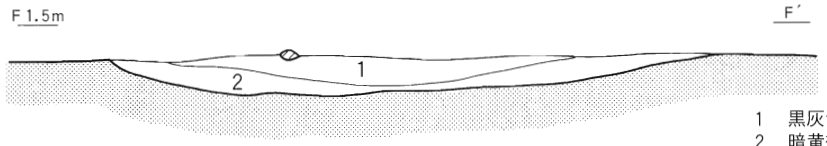
1　暗灰色土
2　黒灰色土
3　暗黄褐色土（黄褐色土ブロックと黒灰色土ブロックが入り混じる）
4　黄褐色土（黒灰色土ブロック若干混じる。やや灰色をおびる）



1　黒灰色土

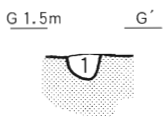


1　黒灰色土
2　黄褐色土（黒灰色土ブロック混じる）

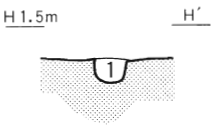


1　黒灰色土
2　暗黄褐色土（黒灰色土ブロック含む）

溝状遺構4

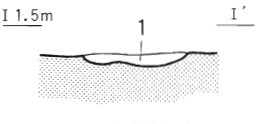


1　暗褐色土

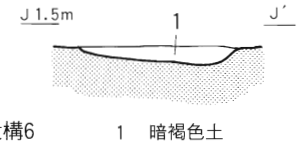


溝状遺構5

1　暗褐色土

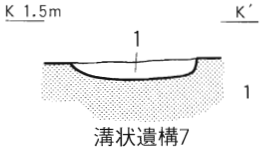


1　淡暗褐色土



溝状遺構6

1　暗褐色土



1　暗褐色土

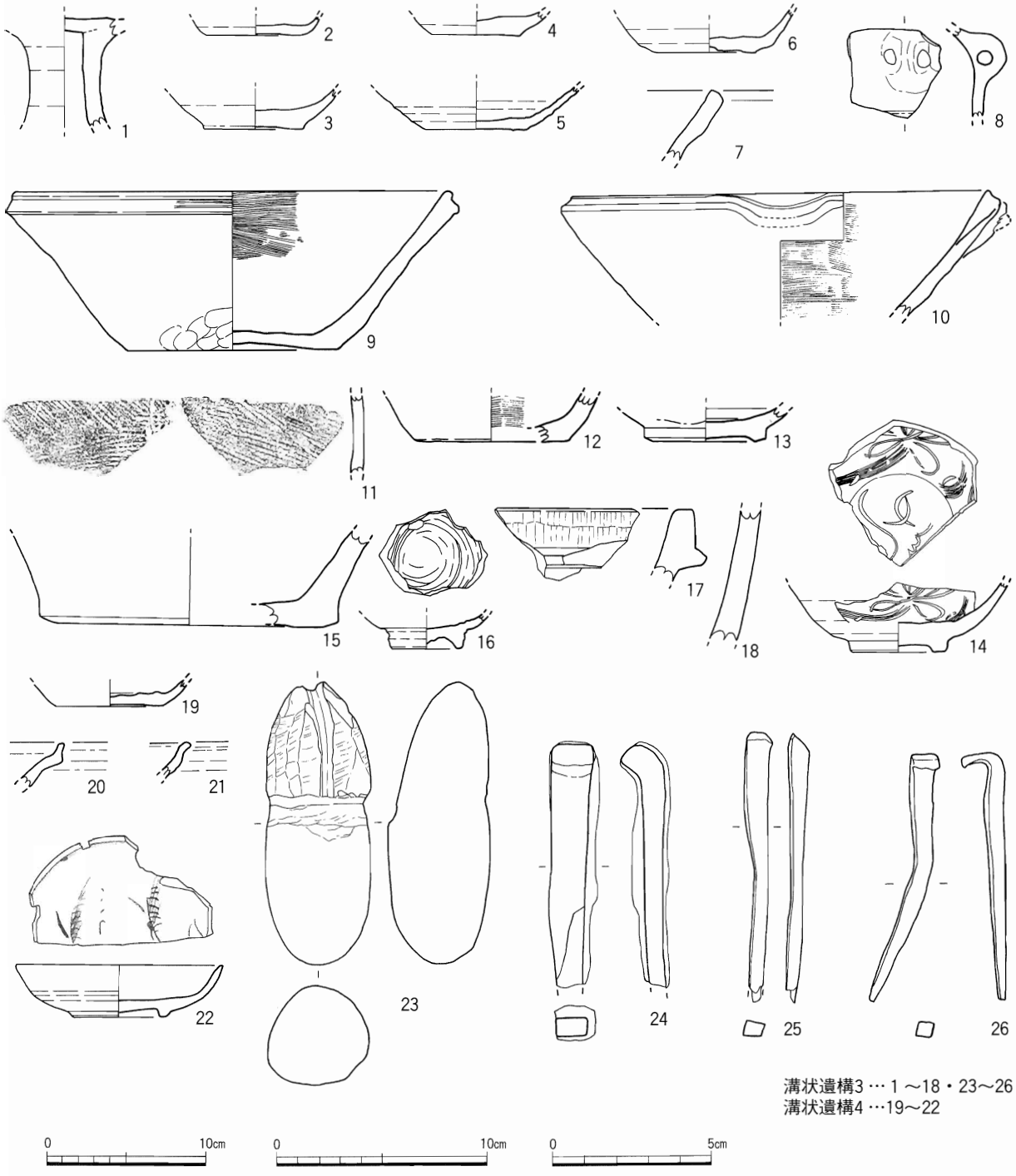
溝状遺構7

第 46 図　溝状遺構 3 ～ 7 断面図（S＝ 1/30）

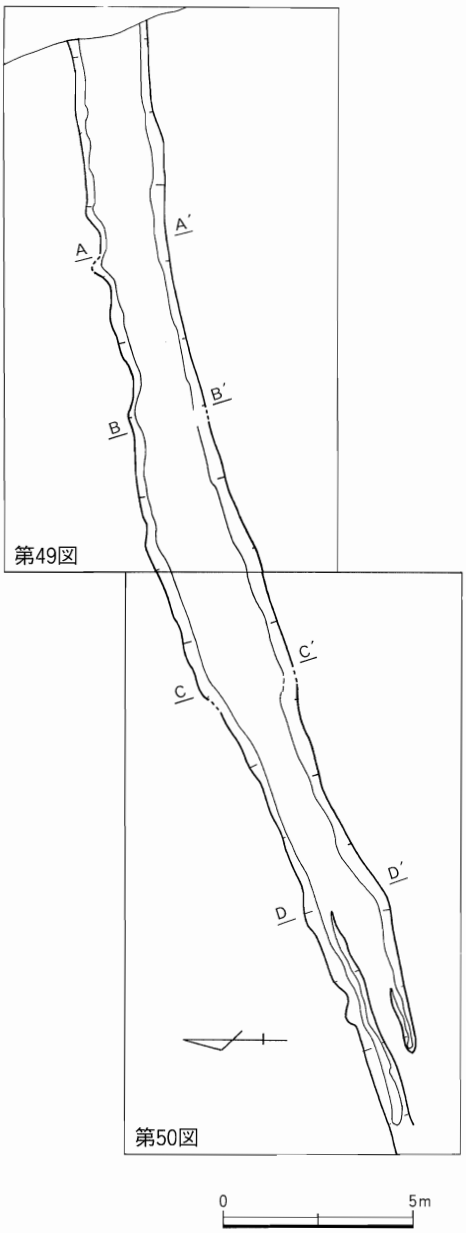
なっており、底面には硬化面などは確認できず、点々と黒褐色土が嵌入する部分が見られた。

検出面やそれよりも若干高いレベルでは石列が検出された。石は５㎝程度のものから最大で40㎝前後のものがあり、東側では意識的に石を敷き並べている様子が見てとれた。発掘調査する以前には、この石列と重なる位置に水田の畦畔（農作業道）が通っていたことから、畦畔の基盤として造られた可能性がある。

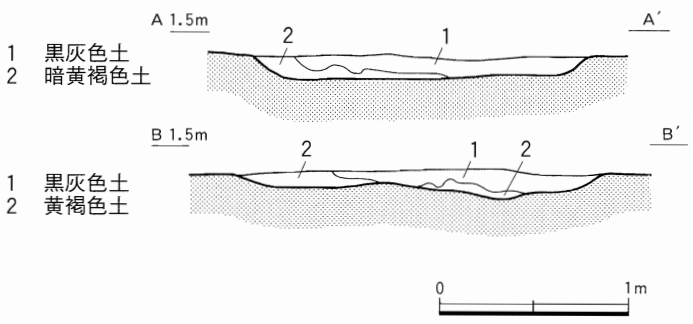
47－１～18・23～26は溝状遺構３から出土した遺物である。１は須恵器高坏で、古墳時代後期のものと考えられる。２～６は土師器の坏・皿で、いずれもロクロ成形されたものである。２～５は底部に回転糸切り痕が残る。７・９・10は瓦質土器鉢で、７は口縁端部が平坦なもの、10は端部に



第47図　溝状遺構３・４出土遺物（１～22：S＝ 1/4，23：S＝ 1/3，24～26：S＝ 1/2）

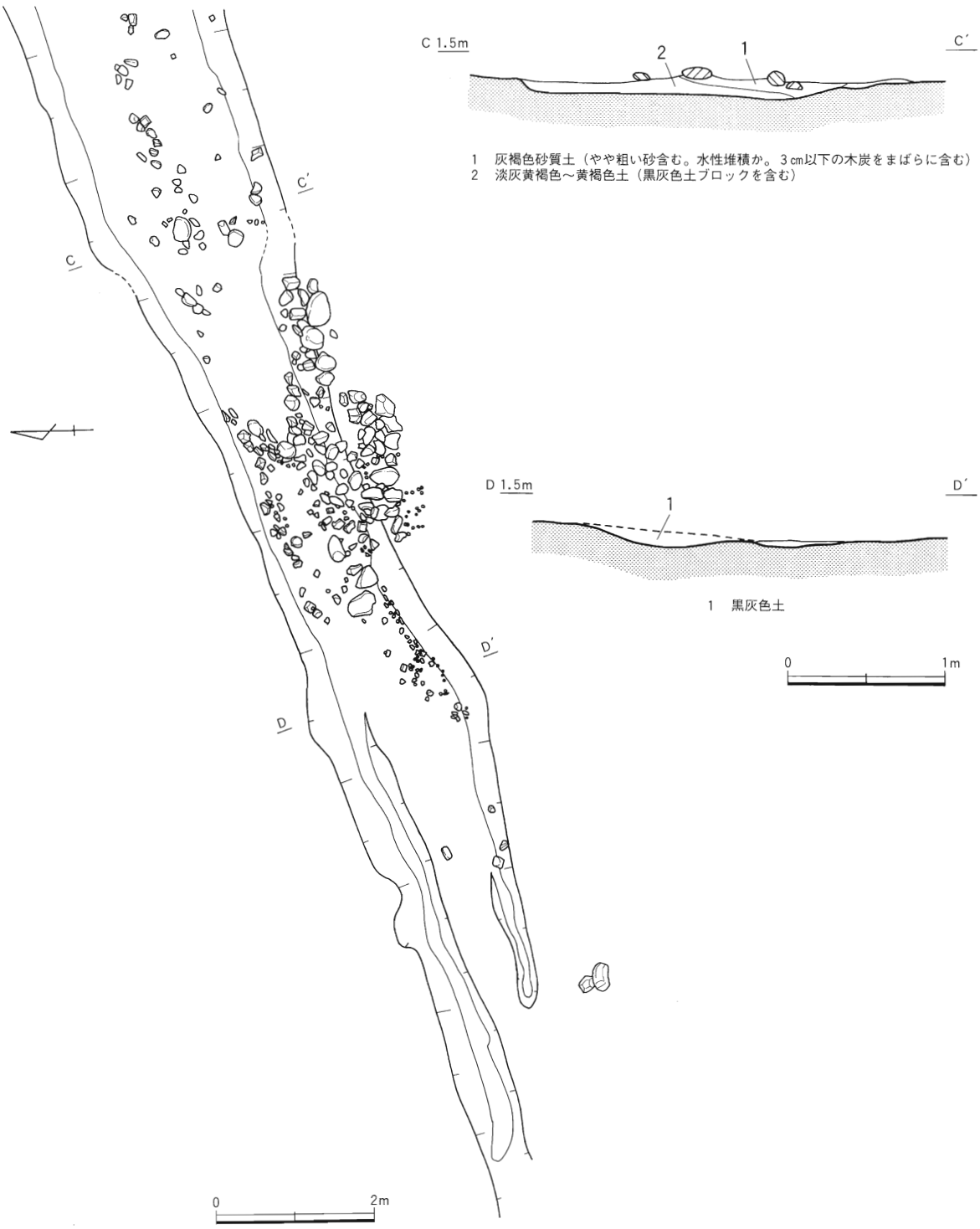


第 48 図　溝状遺構 8 全体図（S＝ 1/200）

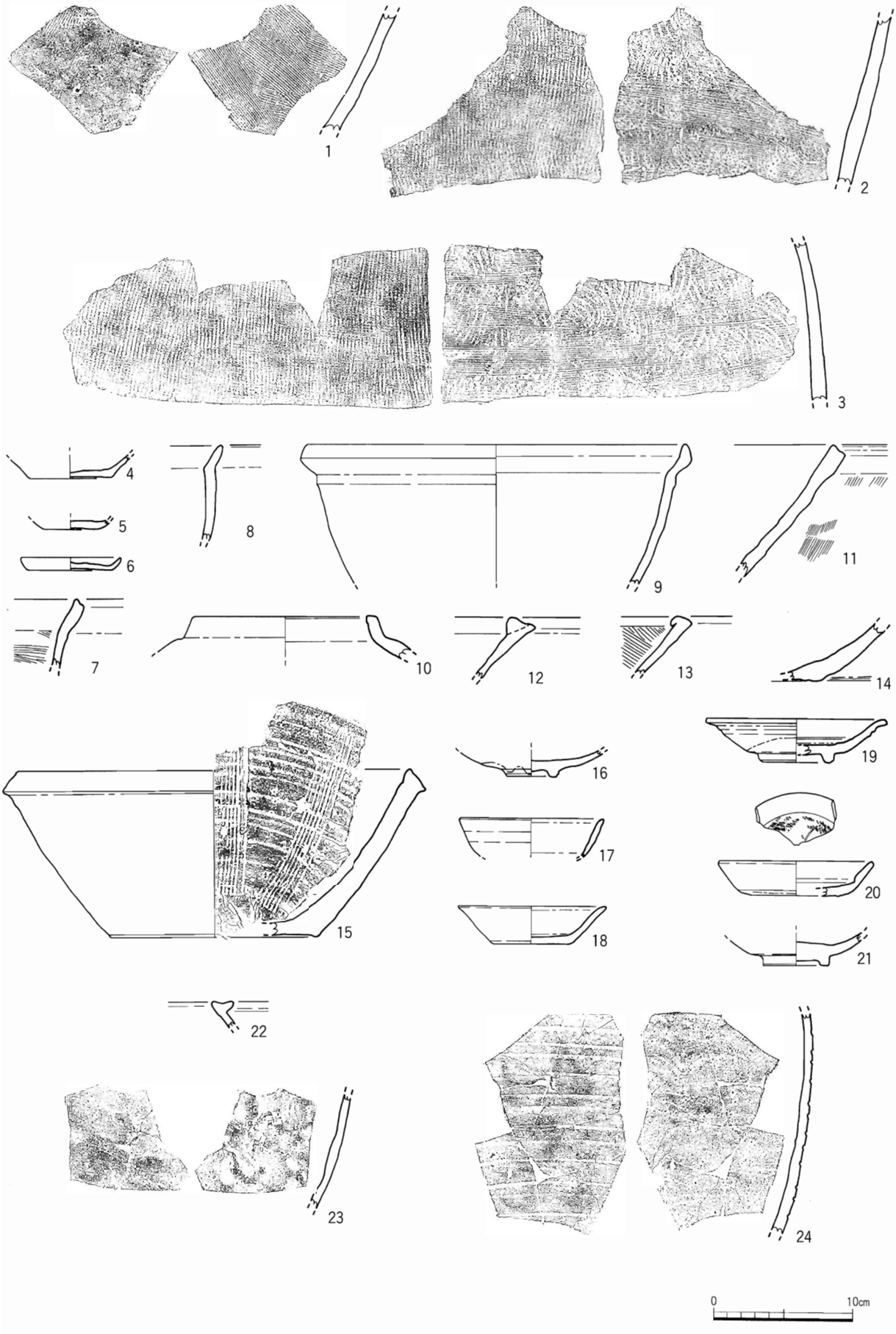


第 49 図　溝状遺溝 8 東側（S＝ 1/80，断面：S＝ 1/40）

凹面をもつもの、９は口縁部端部下半をハケ目原体で強くなでられたため、端部に段差をもつものである。なお、実測図に掲載していないものも含めて、口縁端部が肥厚する防長系の瓦質土器擂鉢は出土していない。８は瓦質土器湯釜の吊手部分である。11は土師器甕の胴部片で、外面には平行タタキ目が、内面にハケ目が見られる。12は備前焼の壷底部辺である。13は白磁碗Ⅳ類、14は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。15は中国陶器甕で、白色の大粒の砂を含む。16は朝鮮陶器の碗で、内面には櫛状の工具によってかかれた円弧状の線の上に白土が塗りこまれている。17・18は滑石製石鍋である。23は紐掛けのための溝が施された石錘で、中世の遺跡で同様のものは島根県隠岐郡西ノ島町



第 50 図　溝状遺溝８西側（S＝ 1/80，断面：S＝ 1/40）

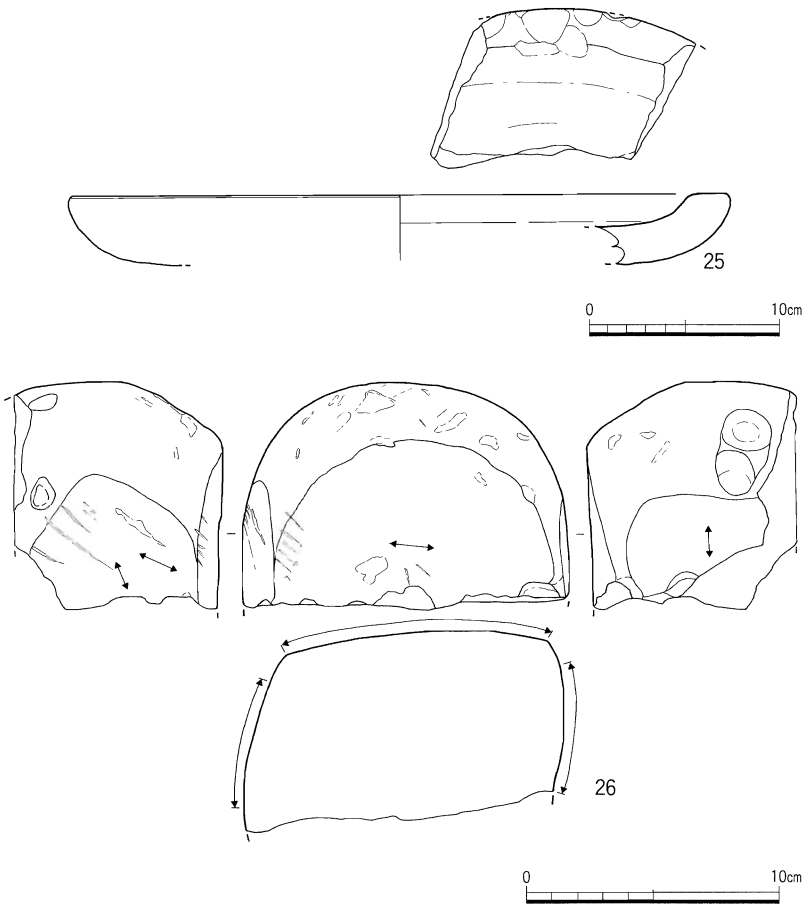


第 51 図　溝状遺構 8 出土土器・陶磁器（S＝ 1/4）

外浜遺跡で出土している。24～26は鉄製品で、24は釘もしくは楔、25・26は釘である。

溝状遺構４（第43～47図）

溝状遺構３の南側に位置し、これと平行してのびている。溝状遺構３との間は、幅１～２ｍの高まりになっているが、硬化面は認められなかった。溝状遺構４は、幅0.25～2.4ｍ、深さ５～15cm程度で、断面形は浅い皿状である。底面に硬化面は確認されず、黒褐色土が点々と嵌入する部分が見られた。西側と東側で幅が狭くなっており、調査区東端では一旦途切れている。ただし、11区の調査ではこの延長上で溝状遺構が確認されていることから、基本的には東に続いていたと考えられる。また、調査区西端付近では南西に向かって曲がり、調査区外へのびていることから、全体としては方形に巡る溝で、この部分がその北西の隅にあたる、ということも考えられる。覆土は、上層は黒灰色土で、下層は黒灰色土ブロックが混じる黄褐色土であった。



第 52 図　溝状遺構８出土石製品（25：S＝ 1/4，26：S＝ 1/3）

遺構検出時には部分的に石列が確認され、石の間から近世の肥前系磁器皿（47－22）が出土した。17世紀前半の初期伊万里のものと考えられる。溝が最終的に埋没し、石列が造られた時期はこの頃と考えられる。

遺物は、土師器、陶磁器などが出土している（47－19～22）。19は土師器坏、20は東播系須恵器鉢の口縁部である。21は瀬戸の小天目茶碗の口縁部で、大窯４期前半のものとみられる。

溝状遺構５～７（第43・46図）

２区の西側に位置する溝状遺構で、溝状遺構６を溝状遺構５・７が切っていた。

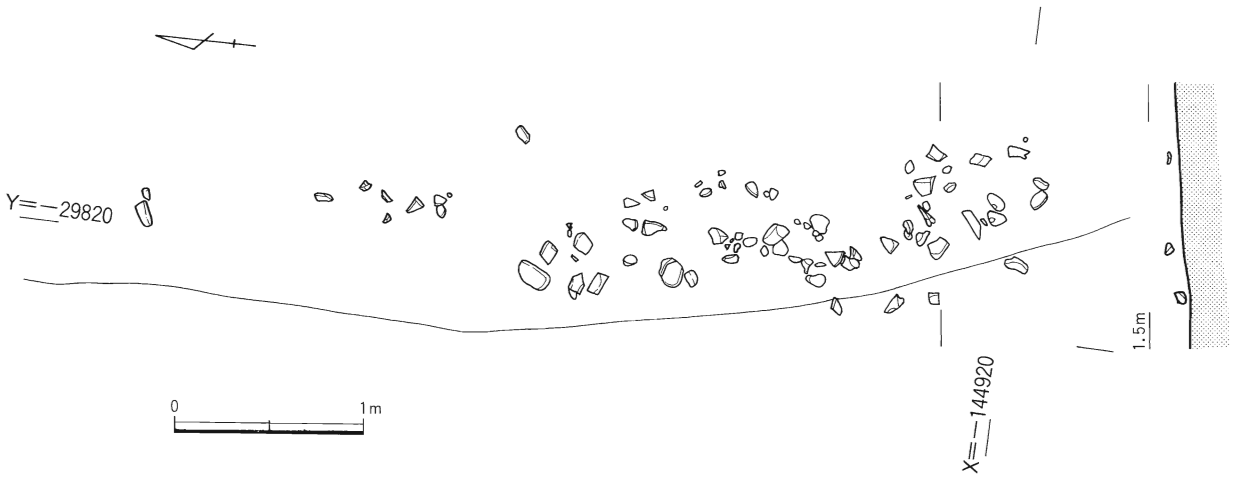
溝状遺構５は、幅が15cm前後、深さが約10cmで、南北方向に直線的にのびている。覆土中には１cm大の木炭片が多く見られた。

溝状遺構６は、幅50～60cm、深さ約７cmで、東西方向に直線的にのびている。

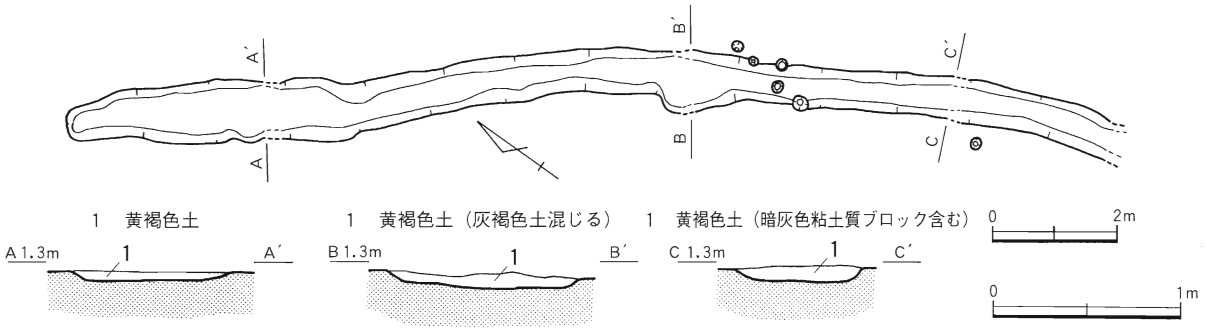
溝状遺構７は、幅約50cm、深さ８cmで、北東から南西方向に若干弧状を呈しながらのびている。

溝状遺構８（第48～52図）

３区と７区の境界上を東西方向にのびる溝状遺構である。幅は1.6～2.6m、深さは10～15cm程度で、断面形は浅い皿状になっている。



第 53 図　石列２（S＝ 1/40）



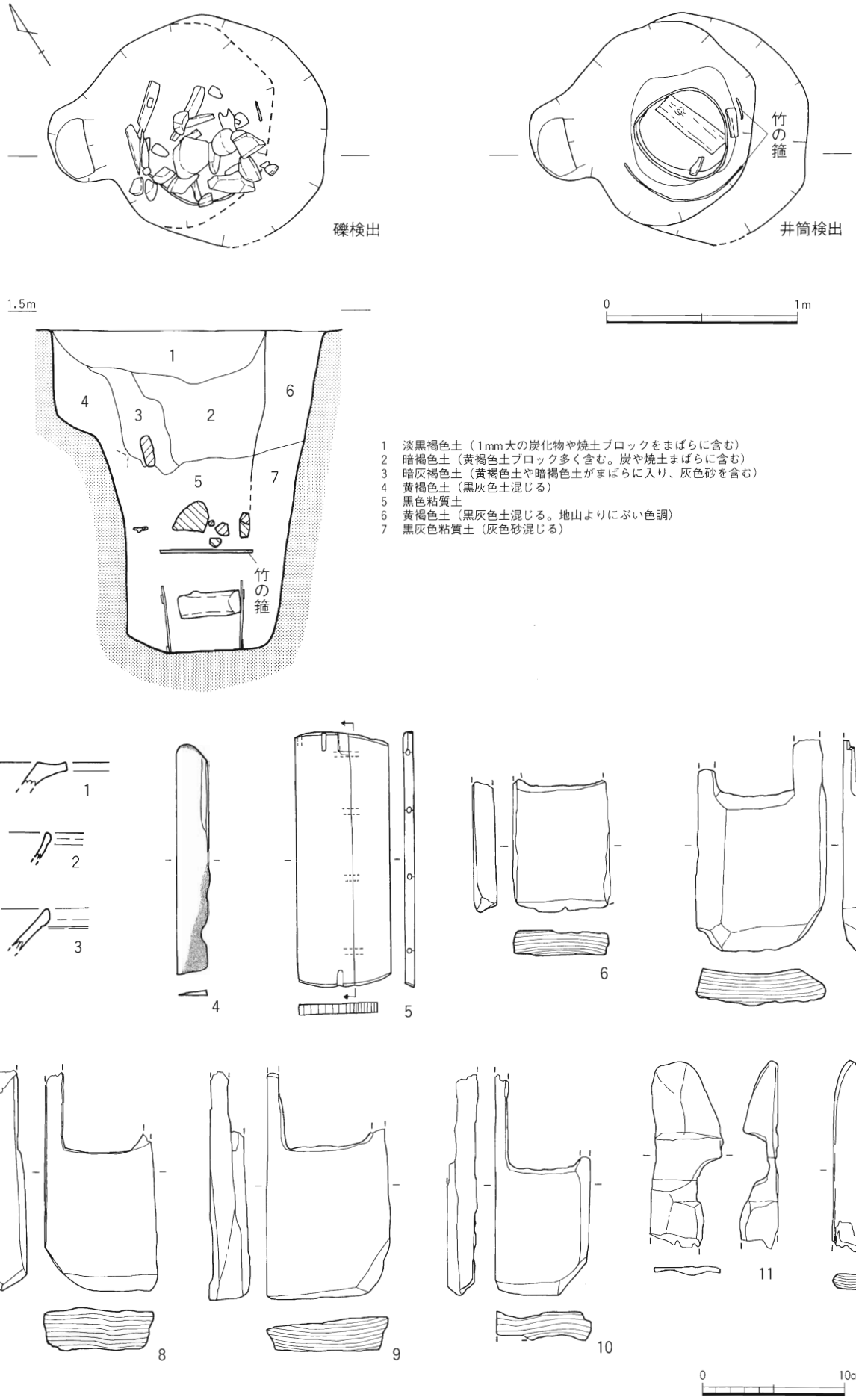
第 54 図　溝状遺構９（S＝ 1/120，断面：S＝ 1/40）

遺構検出面から覆土中にかけて、多数の礫が検出された。溝状遺構８と重なる位置に水田の畦畔（農作業道）が通っていたことから、これらの礫は畦畔の基盤を造るために置かれた可能性がある。溝状遺構８の検出面よりも高いレベルで寛永通寶（127－19）が出土していることから、畦畔は近世以降に造成されたと考えられる。

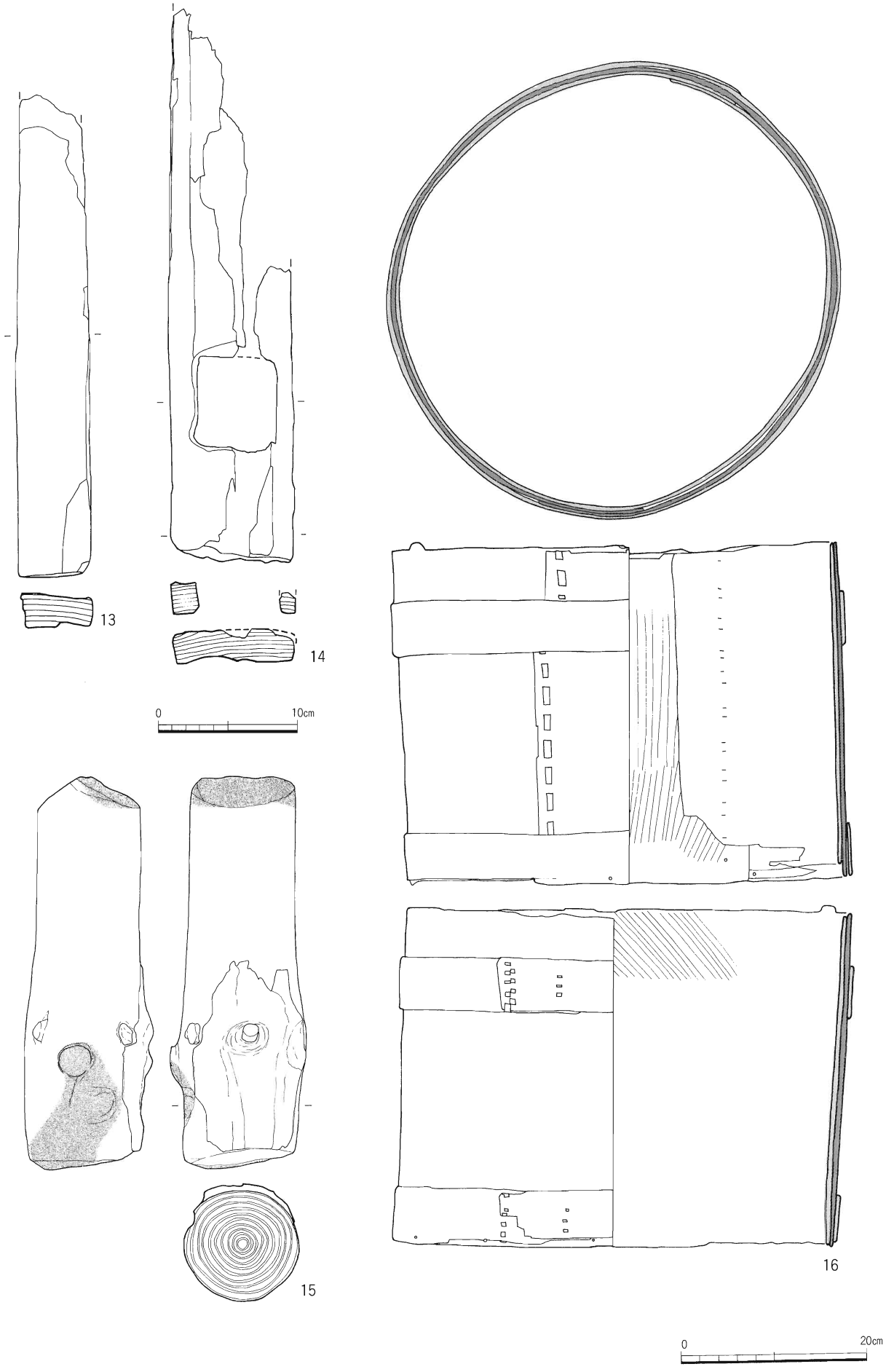
第51・52図は溝状遺構８の出土遺物である。１～３は須恵器片で、１は内面にハケ目、外面にはナデ後にハケ目が入るもので、２・３は内面に同心円当て具痕後にハケ目、外面には平行タタキが施される。４は土師器坏、５・６は土師器皿である。７～９は防長型の瓦質土器鍋で、口縁部の形態から、８はⅠ型式、９はⅢ形式新段階、７はⅥＡ型式古段階に分類される。10は瓦質土器湯釜である。11は土師器鉢、12・13は防長型の瓦質土器擂鉢で、12は口縁端部内側に断面三角形の粘土を貼り付けて幅の広い平坦面をもつもので、近世初頭まで下ると考えられる。14は東播系の須恵器鉢、15は備前焼の擂鉢で、口縁端部が下方に下がっており、ⅣＡ期のものとみられる。16は肥前系陶器皿で、近世初頭～前半頃のものと考えられる。17～19は白磁皿で、17・18はⅨ類、19はＤ群に分類される。20は同安窯系青磁皿Ⅰ類、21は龍泉窯系青磁の小碗Ⅰ類である。22は中国陶器壷で、23・24は朝鮮陶器の壷と考えられる。25は茶臼の受け皿部、26は砥石である。

石列２（第53図）

３区で窪地状になった部分の下端の傾斜変換線付近に位置する。長さ約４ｍ、幅約１ｍの範囲で、５～20㎝前後の石が列状に広がって検出された。ただし、石のあり方はやや散漫で、石の面をそろえるなど、意識して並べた様子は窺われない。



第 55 図　井戸 6（S＝ 1/30，遺物：S＝ 1/4）



第 56 図　井戸 6 出土木製品（13・14：S＝ 1/4，15・16：S＝ 1/6）

溝状遺構９（第54図）

３区西側の窪地状になった部分に位置し、柱列13に切られている。長さ約17m、幅は0.6～１m、深さは５cm前後で、灰色をおびた黄褐色土が堆積していた。

（３）井戸

井戸６（第55・56図）

２区の中央部で、溝状遺構４から約２m南、建物跡31・33の北西に位置する。

掘り方は、遺構全体で見た場合、北東側に段状の突出部をもつ円形で、長軸長は1.47m、短軸長は1.24m、深さは1.72mである。遺構検出時には、掘り方（大）の北西側を、突出部をもつ掘り方（小）が切っている状況が確認できた。

調査当初は、掘り方（小）のみを掘り下げたものの、途中から土層の識別や、遺構の掘削、実測が困難になったため、掘り方（大）も同時に掘り下げることにした。約１mの深さでは、掘り方内に礫や木材が投棄された状況が認められ、さらに礫や埋土を取り除いたところ、深さ約1.2mのところで竹の箍が検出された。礫や木材、竹の箍が検出された範囲は、掘り方（小）の中にほぼ収まるようである。掘り方の底には、直径49cm、高さ37cmの曲物枠（16）が井筒として据え付けられていた。曲物枠は、薄い１枚の板を巻いて、樹皮で綴じあわせて筒状のものを作り、さらにその外側に同様のつくりのものをかぶせ、そしてその外側に、箍として、幅６cmの板を樹皮で綴じて輪状にしたものを上下２段にはめ込んで作られている。

遺物は、土師器や陶磁器片、木製品、木材が出土している。１は口縁部の下部が肥厚した土師器鍋で、西長門型鍋ａと呼ばれるものである。２は白磁碗Ⅱ類、３は白磁碗Ⅳ類に分類される。このほか、青磁の破片も出土している。４は木簡状の木製品であるが、文字は確認できなかった。上下両端に焦げ痕が見られる。樹種はスギである。５は曲物の底板と考えられるもので、２枚の板を木釘でつなぎあわせていたことが分かる。樹種はスギである。６～14は板状に加工された木材である。６～10、14は端部付近に孔があけられているが、１区の井戸５で井側として用いられた組桶板材も上端部が穿孔されており、これらと類似している。15は丸太状の木材で、曲物枠の中から出土したものである。長さは43.4cm、太さ15cm前後の丸太材で、両端は切断されている。部分的に焦げ痕が見られ、一部に樹皮が残る。なお、16についてＡＭＳ測定法による放射性炭素年代測定を行なったところ、補正年代で490±40yrＢＰ（暦年較正年代はAD1400～1450）というデータが得られた。

以上の所見から、この井戸の構造は、掘り方（大）内に井筒として曲物枠を据え付け、組桶を井側に用いたものであったと考えられ、井戸の内部から石が検出されたことから、上部は石組みで構築されていた可能性もある。そして、井戸の廃棄時に掘り方（小）を掘り込んで、組桶板材が引き抜かれ（このとき、井筒や組桶の竹箍は掘り方内に残された）、その後、石や抜き取った組桶板材の一部が投棄され、埋め戻された、と推測される。井戸の時期は、放射性炭素年代から15世紀前半頃と考えられる。

（４）墓

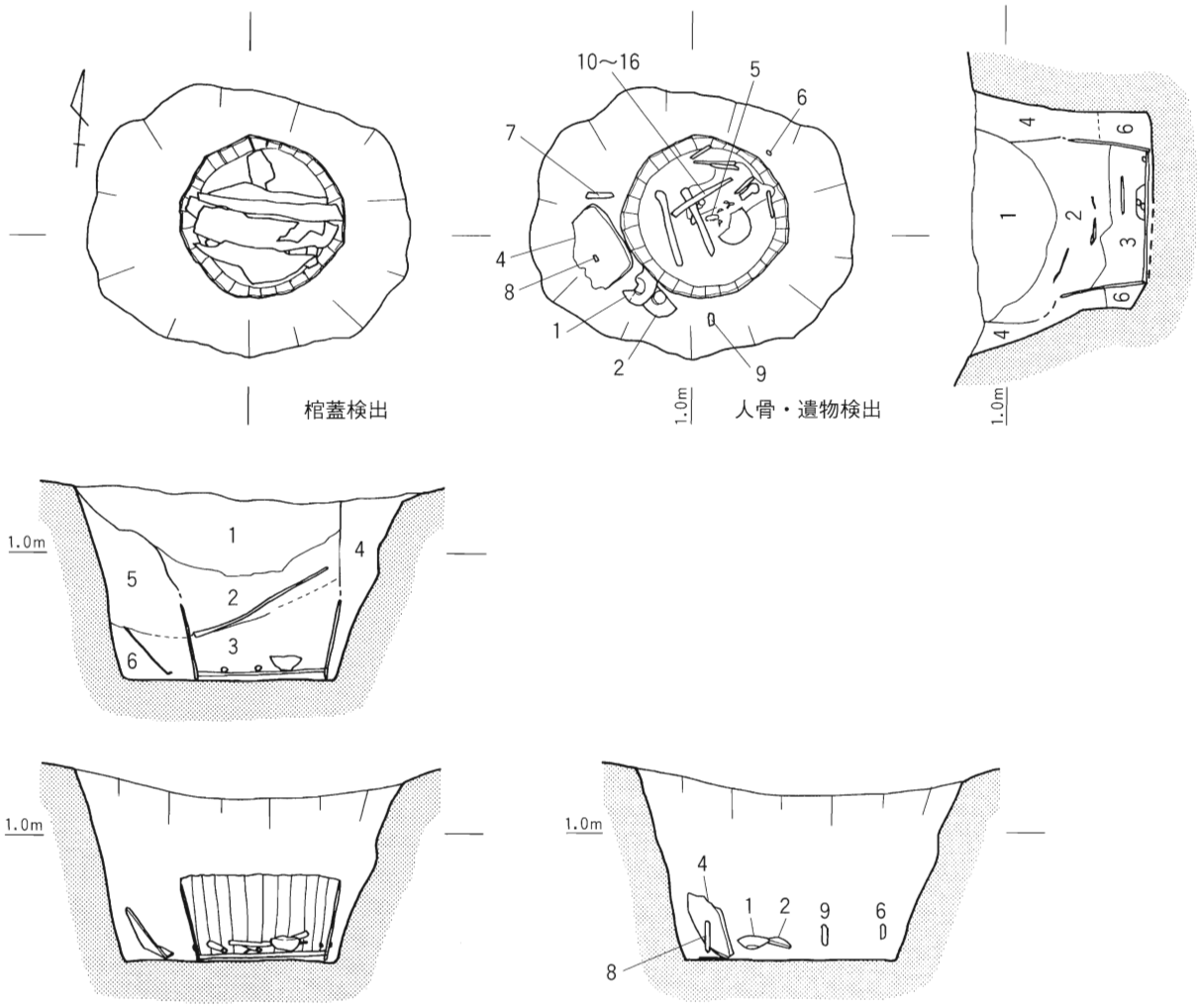
墓７（第57・58図）

２区の中央部で、溝状遺構４の下層を掘り込んで造られていた。

長さ128㎝、幅101㎝、深さ79㎝の墓壙内に、桶棺が埋置されていた。桶棺は基底部径が55㎝、残存高は約30㎝で、棺蓋として板状の木材が被せられていた。棺内では人骨１体分が確認された。出土状態から、埋葬姿勢は、北側を背に、顔を南に向けた坐葬状態であったと考えられる。人骨は成人男性と推測されるが、年齢は不明である。

遺物は、櫛（58－５）、銭貨（10～16）が棺内から、土師器皿（１）、漆器碗（２）、箸状木製品（３）、折敷（４）、卒塔婆（６～９）が棺外から出土した。１～４は棺の南西でかたまって検出され、６・８・９は棺の周囲を巡るように掘り方壁面に沿って立てられていた。７は墓壙底面に倒れた状態で出土したが、発掘時に本来の位置から動かされた可能性もある。

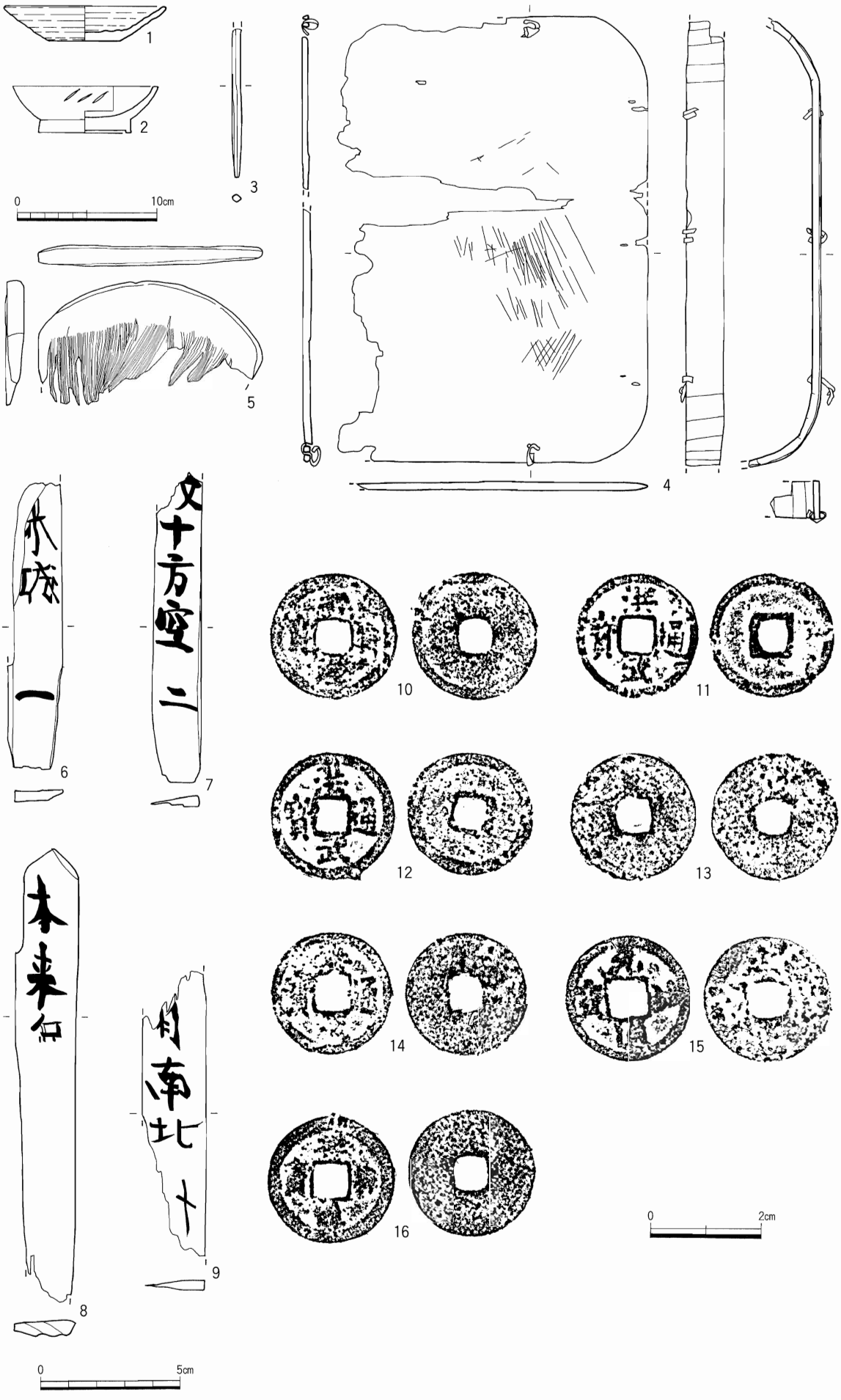
１は、口径11.6㎝、底径5.3㎝、器高2.5㎝のもので、口縁部は直線的に開く。器壁に厚みがあるなど若干の相違はあるが、山口県の大内氏館跡のⅡ期のものと類似している。２は、黒色の地に外面に朱漆により３条の斜線文が施されている。樹種はクリである。３は広葉樹材を加工したものである。４は、底板の上に側板を組み、樹皮で綴じ合わせたものと考えられる。５はイスノキ製のもので、歯の目が細かい梳櫛である。６～９は木製の卒塔婆で、９は上端が山形に加工されている。



1　淡黒灰色粘質土（5㎝以下の黄褐色土ブロックを少し含む）
2　暗灰褐色粘質土（黄褐色土ブロック多く含む。暗灰色細砂含む）
3　青灰色粘質土（やや砂質おびる）
4　暗褐色土（黄褐色土ブロック多く含む。桶棺の裏込め土）
5　黒灰色粘質土（黄褐色土ブロック多く含む。桶棺の裏込め土）
6　灰色～暗灰色粘質土（桶棺裏込め土）

0　1m

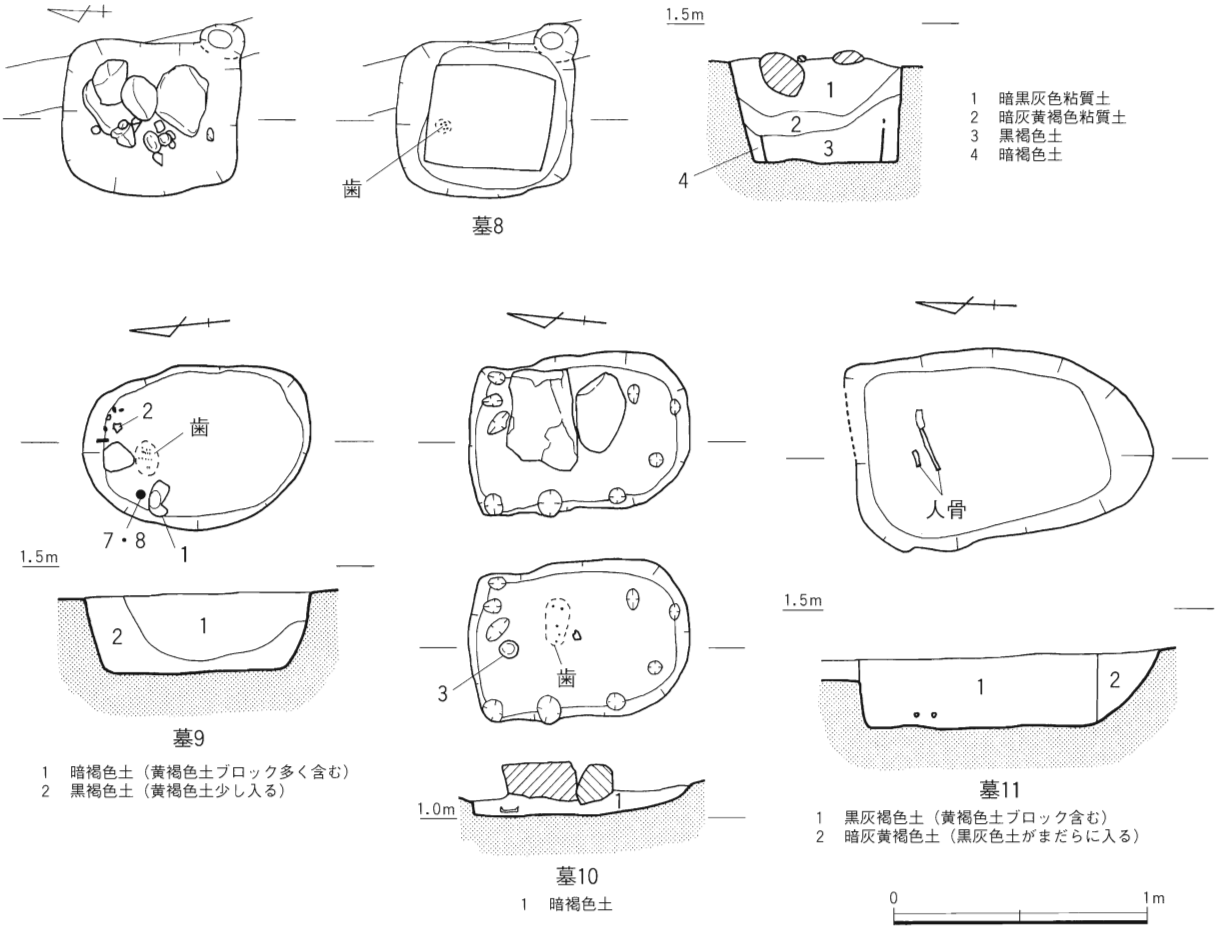
第57図　墓７（S＝ 1/30）

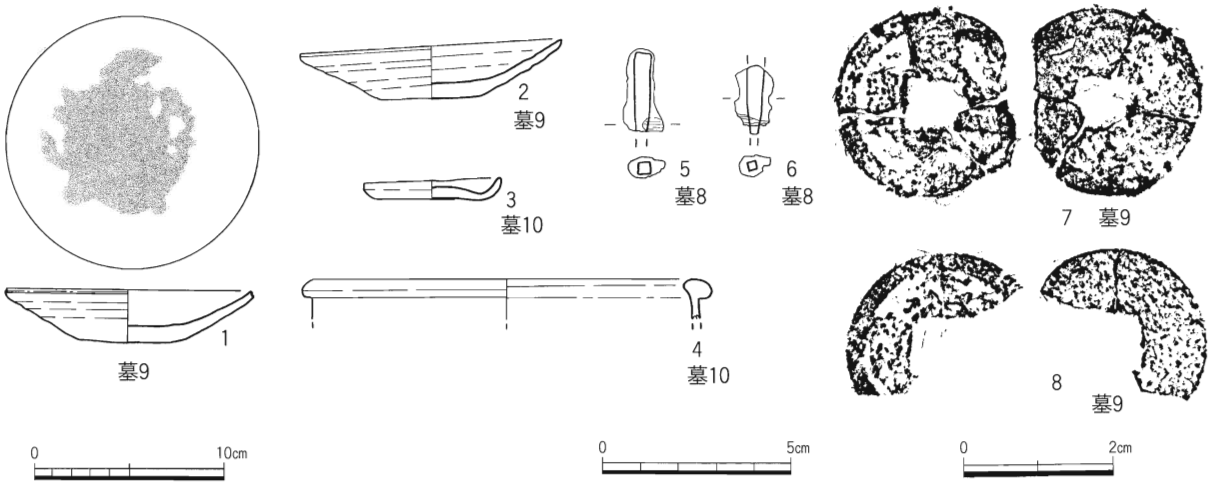


第 58 図　墓 7 出土遺物（1 ～ 4 ：S＝ 1/4，5 ～ 9 ：S＝ 1/2，10～16：S＝ 1/1）

いずれも墨書の文字が見られ、６は「(以上欠損) □城　一」、７は「(以上欠損) □十方空　二」、８は「本来無 (以下不明)」、９は「(以上欠損) □南北　□」と判読できる (□は判読不明)。これらは偈頌の文句で、「迷故三界城　悟故十方空　本来無東西　何処有南北」の１句ずつをそれぞれに書き記したもので、６・７に見られる「一」「二」は、句の順序や葬送儀礼の際に配置する順序を示したものと考えられる。10～16は中国銭で、10・16は祥符通寶、３・４・６は洪武通寶、15は元祐通寶で、13の銭種は不明である。

出土遺物から、15世紀後半頃の墓と考えられる。





第59図　墓８～11 (S＝ 1/30，遺物　１～４：S＝ 1/4，５・６：S＝ 1/2，７・８：S＝ 1/1)

墓８（第59図）

２区中央部で、墓７から１ｍ西に位置し、溝状遺構４の下層を掘り込んで造られている。

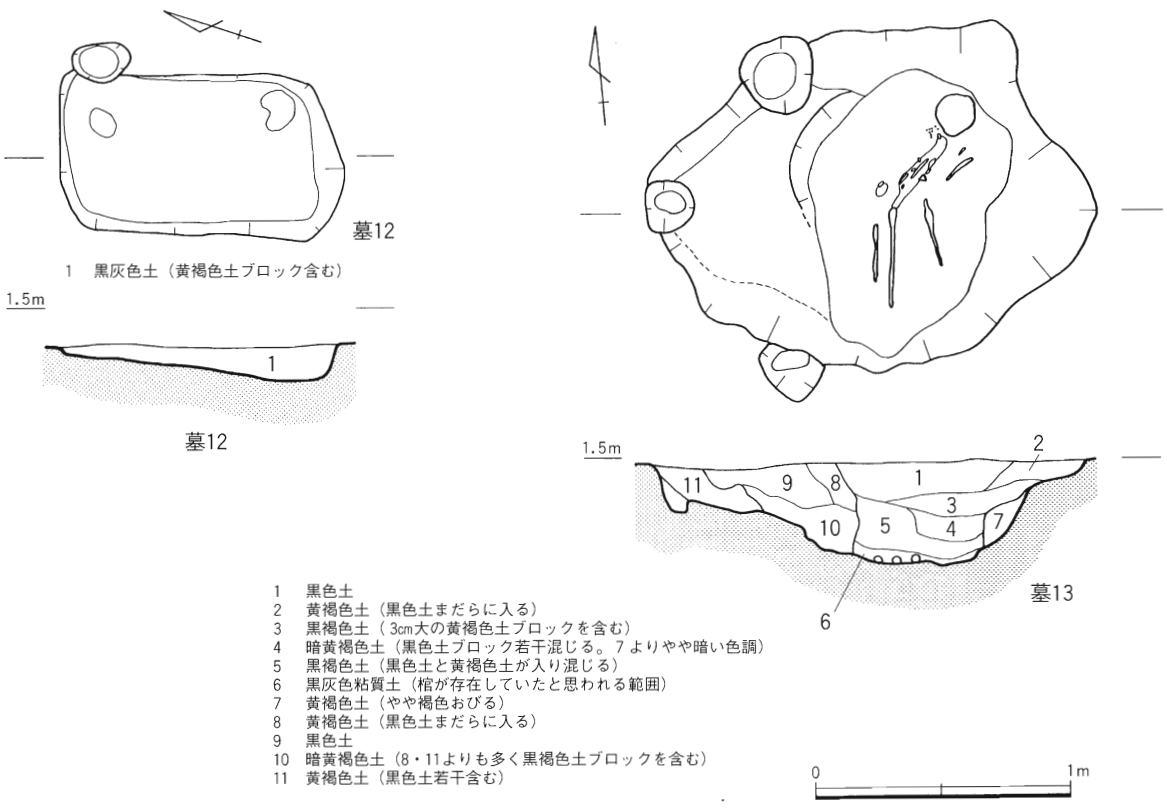
長さ74cm、幅64cm、深さ29cmの墓壙内に箱形の木棺が据え付けられたもので、主軸はほぼ北を向く。墓壙上面には５～30cmの石が集められていた。この集石は、溝状遺構４の石列に伴う可能性も否定できないが、石の並び方が墓壙の主軸と重なることから、この墓に伴うものとするのが妥当と思われる。棺内の北側では歯が出土しており、北頭位の埋葬と考えられる。歯の鑑定から、被葬者は４歳の幼児と考えられる。遺物は、釘（５・６）が出土しており、これらは棺に使用されたものであろう。

墓９（第59図）

２区中央部で、墓１から3.5ｍ南西に位置する。墓壙は、長さ90cm、幅62cm、深さ33cmで、主軸方向はＮ－４°－Ｅである。墓壙内では棺の痕跡は確認できなかった。墓壙の北側で、歯や風化の進んだ頭骨と思われるものが検出されたほか、土師器皿２点（１・２）、銭貨２点（７・８）が出土した。１・２は体部が大きく開く器形で、口縁端部は面取りされている。大内氏館跡のⅢ期のものと類似している。１の内面にはタール状のものが付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。３は開元通寶、４は皇宋通寶である。出土遺物から15世紀末～16世紀前半の墓と考えられる。被葬者は、歯から成人とみられるが、性別は不明である。

墓10（第59図）

２区中央部で、墓８から約５ｍ北西に位置し、溝状遺構３の底面で検出された。墓壙は、長さ87cm、幅63cm、深さ12cmで、墓壙上面には長さ30～40cmの石が２個置かれていた。土層や切り合い関



第60図　墓12・13（S＝ 1/30）

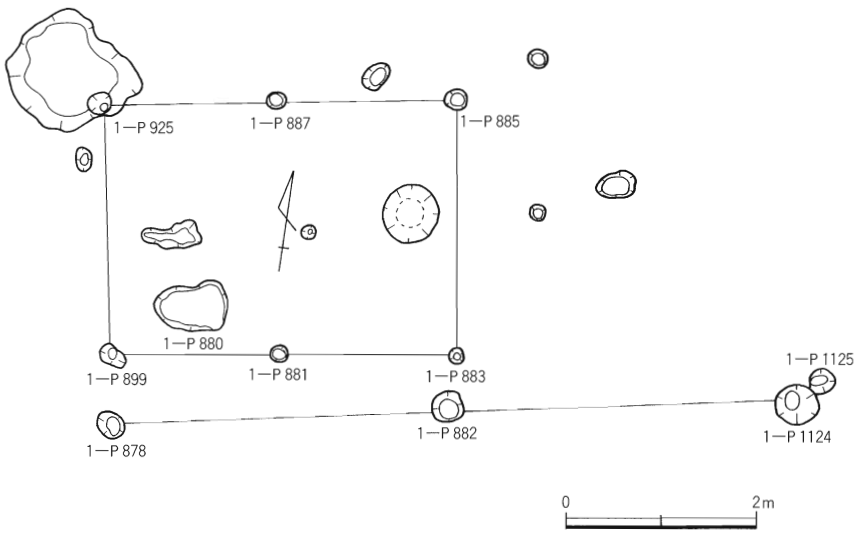
係から溝状遺構８との前後関係は明らかにできなかったが、溝の底面よりも高い位置にあった墓壙上部の石が残されていたこと、検出面から墓壙底面までが浅いことから、溝状遺構８がある程度埋没した段階で、しかも溝状遺構８の上面に石列が設けられる以前に造られたと考えられる。棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙中央に太さ５㎝前後の杭が刺さっていたほか、墓壙内の縁辺に杭跡状の小ピットが見られた。これらがこの墓に直接伴うものか、伴うとすればどのように機能していたのかは不明である。墓壙の中央からやや北よりで、歯や副葬品とみられる土師器皿（３）が検出された。口縁部が短く、体部の途中から屈折して立ち上がる器形をしている。また、埋土中では中国陶器鉢Ⅳ類（４）や、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の破片が出土した。歯の鑑定から、被葬者は幼児であったと考えられる。

墓11（第59図）

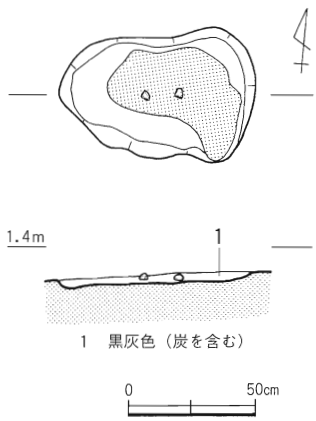
２区中央部で、墓７から約50㎝東に位置し、溝状遺構４の下層を掘り込んで造られている。墓壙は、長さ118㎝、幅75㎝、深さ31㎝の隅円方形のもので、主軸方向はＮ－10°－Ｗである。墓壙内の北よりで、人骨と棺の痕跡と思われる小さな板状の木片が検出された。墓壙の形状もふまえると箱形の木棺が埋置されたと推測される。人骨は脛骨と考えられるもので、太さから女性のものと推定されている。

墓12（第60図）

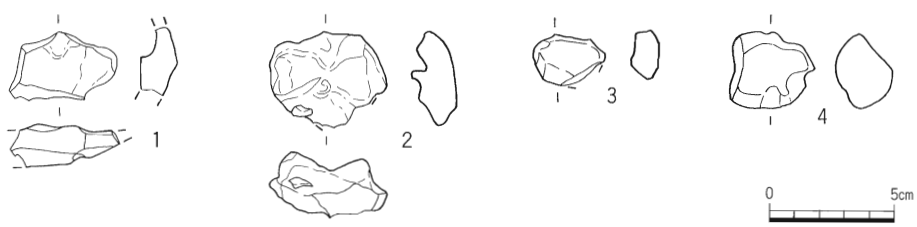
３区の北東側で、溝状遺構８から約１ｍ南に位置し、建物跡42と重複する。長さ111㎝、幅64㎝、深さ７㎝の長方形の墓壙をもつ。深さがあまりないことから、上部が削平された可能性もある。南北の両端付近で人骨が確認されたが、土壌化が著しく取り上げはできなかった。



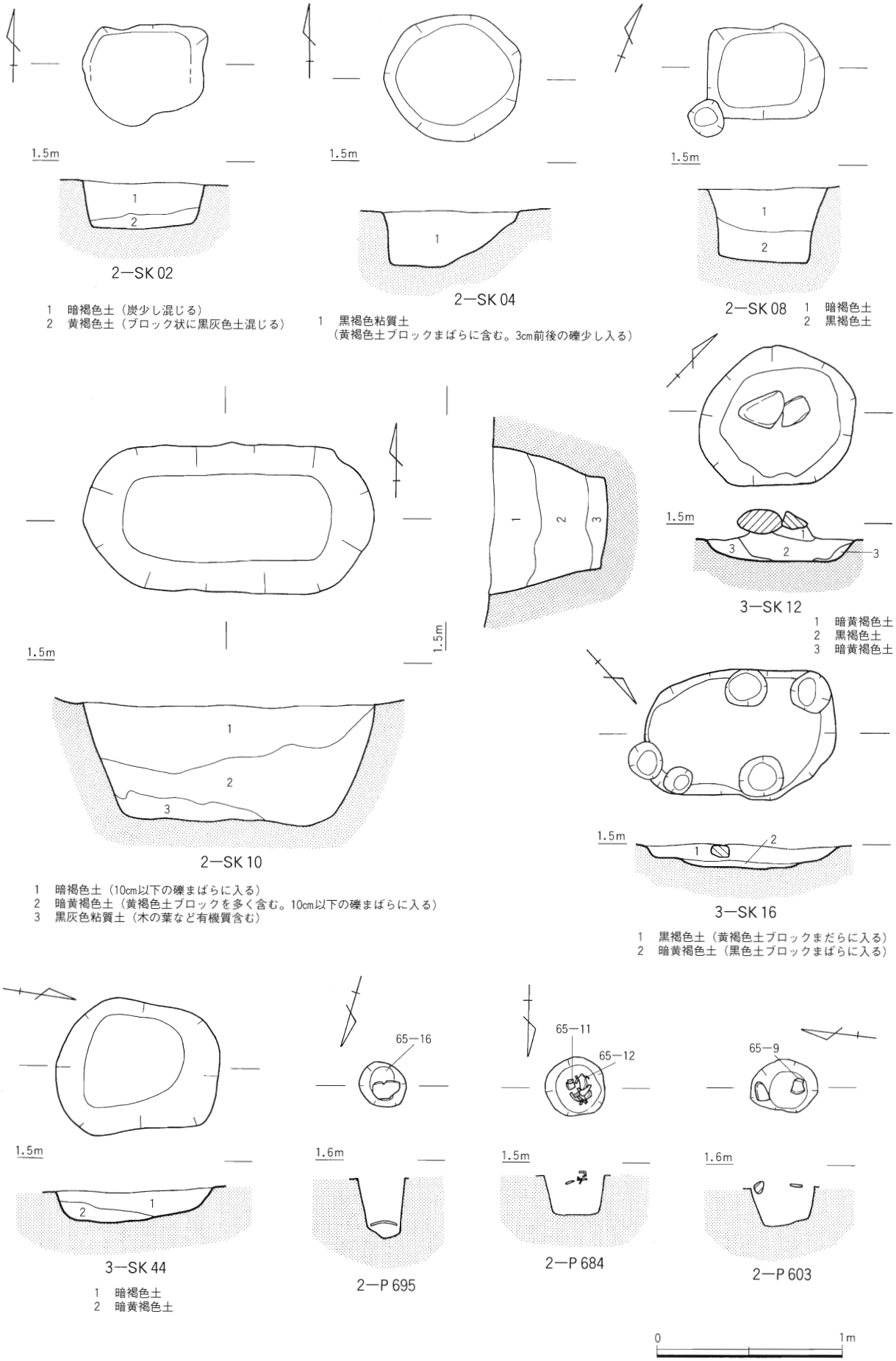
第 61 図　建物跡１周辺遺構図（S＝ 1/80）



第 62 図
１－Ｐ 880（S＝ 1/30）



第 63 図　１－Ｐ 880出土遺物（S＝ 1/3）



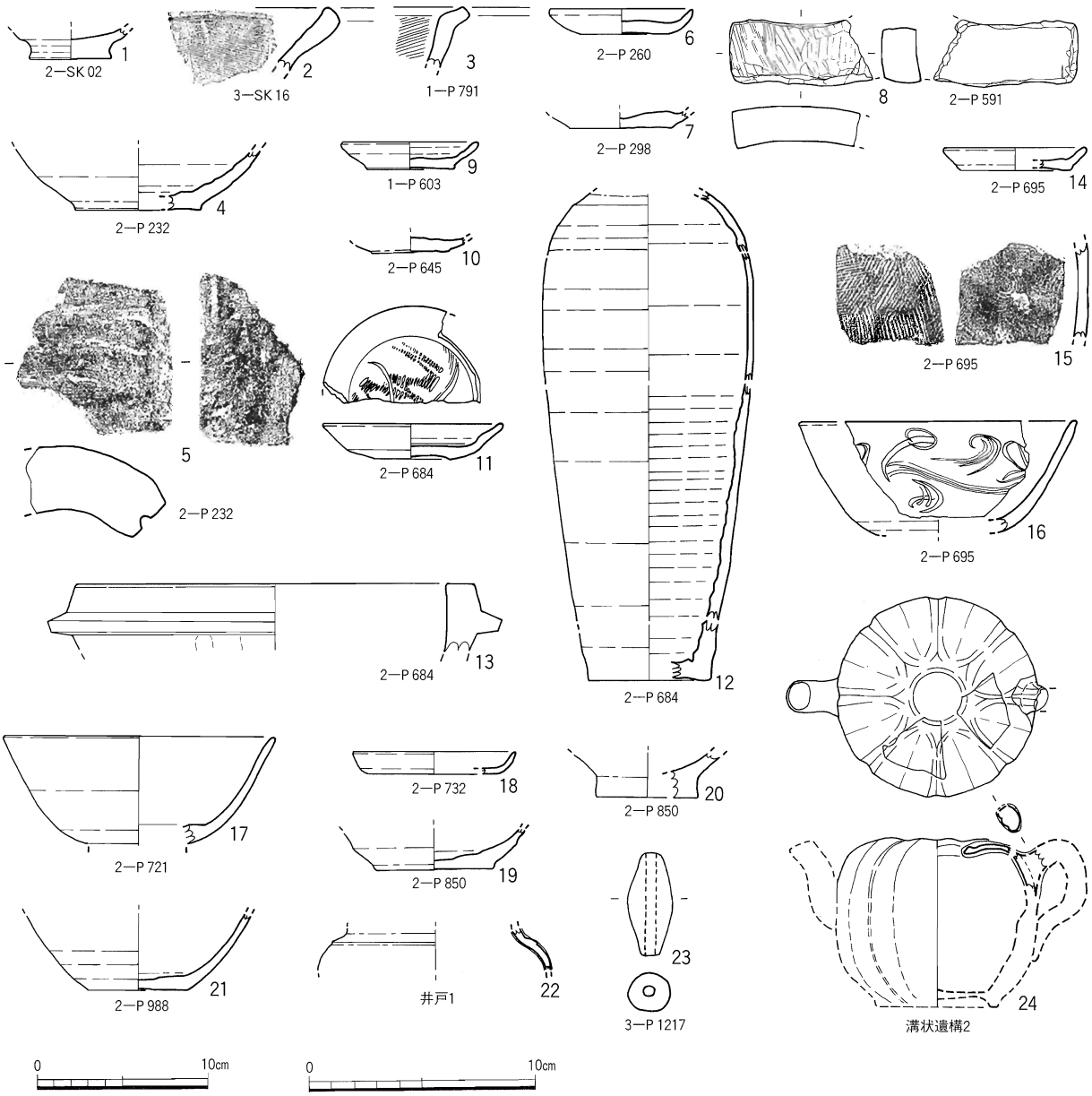
第 64 図　１～３区土坑・柱穴（S＝ 1/30）

墓13（第60図）

３区の北東側で、墓12から約３ｍ南西に位置し、建物跡41・45と重複する。墓壙は、東西185㎝、南北135㎝、深さ45㎝の楕円形のもので、西側には段状の平坦面を持つ。土層の状況から、他の土坑と切りあっている可能性も考えられる。墓壙の東側の深くなっている部分で人骨が検出された。頭位はやや東にふれた北方向で、埋葬姿勢は仰臥で、両肘を強く曲げ、右膝は正座のように脛骨を下にするように曲げていた。人骨は成人のものであるが、性別・年齢は不明である。

（５）鍛冶関連遺構（第61～63図）

１－Ｐ880（第61～63図）は、長さ77㎝、幅53㎝、深さ４㎝の不整楕円形状の土坑で、橙色から茶褐色の焼土面が認められる。１区北側の中央部で、建物跡１の内側に位置することから、これに伴う遺構と考えられる。建物跡１は、井戸１と近接しており、これと同時期に存在した可能性があ



第 65 図　１～３区土坑・柱穴・その他の遺構出土遺物（１～22：S＝ 1/4，23～24：S＝ 1/3）

る。なお、井戸１は出土遺物から14世紀に廃絶したと推定される。

覆土中から椀形鍛冶滓や含鉄鉄滓などの鍛冶関連遺物（63－１～４）が出土し、粒状滓、鍛造剥片といった鍛錬鍛冶作業に伴う微細遺物もわずかながら抽出できた。63－２と粒状滓、鍛造剥片（分析資料１～３）について金属学的な分析を行なったところ、63－２は精錬末期～鍛錬鍛冶初期の生成物で、粒状滓、鍛造剥片は鍛錬鍛冶中期以降の生成物、という分析結果が得られた。遺構の形状のみから鍛冶炉と判断することはできないが、遺物の出土状態や分析結果をふまえれば、この遺構が鍛冶炉であった可能性は強まったといえる。

（６）土坑（第64・65図）

２－SK02・08、３－SK16・44は平面形が隅円方形の土坑である。２－SK02から土師器の柱状高台皿（１）が、３－SK16では土師器擂鉢（２）が出土した。

２－SK04、３－SK12は円形の土坑である。２－SK04の底面は東から西へ下るかたちで傾斜し、西側の土坑壁面は垂直に立ち上がっている。３－SK12は上面に２個の石を伴うもので、断面形は皿形になっている。

２－SK10は、長さ155cm、幅81cm、深さ69cmの長楕円形の土坑である。溝状遺構４と重複していたが、前後関係は不明である。下層には木の葉など有機質のものが見られたが、人骨や棺材のようなものは確認できず、墓であった可能性は低い。

これらの土坑の性格については不明である。

（７）柱穴・その他の遺構の出土遺物（第64・65図）

65－３は１－Ｐ791から出土した土師器鍋である。口縁部の下が肥厚しており、西長門型ａに分類される。４は土師器坏、５は丸瓦で、ともに２－Ｐ232から出土した。６は２－Ｐ260から出土した土師器皿で、口縁部は短くやや内弯する。７は２－Ｐ298で出土した土師器坏、もしくは皿の底部片である。８は温石で、滑石製石鍋破片の外縁を削って再加工したものとみられる。２－Ｐ591で出土した。９は２－Ｐ603 の埋土上部で出土した土師器皿である。10は土師器坏もしくは皿の底部片で、２－Ｐ645から出土したものである。２－Ｐ684では、埋土上部で同安窯系青磁皿（11）と中国陶器壷（12）、滑石製石鍋（13）が検出された。12は長胴の壷で、肩上部に褐色の釉が見られる。２－Ｐ695 では底面付近で青磁碗（16）が出土し、このほか土師器皿（14）、須恵器甕の胴部片（15）が埋土中で検出された。16は内面に片彫りの蓮華文が施されたもので、龍泉窯系の碗Ⅰ－２ａ類に分類される。２－Ｐ721では龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類（17）が、２－Ｐ732では口縁部が短く立ち上がる土師器皿（18）が出土している。２－Ｐ850では、埋土中から土師器の坏（19）と柱状高台皿（20）が見つかった。21は、２－Ｐ988から出土した土師器坏で、体部が緩やかに内弯しながら立ち上がる。22は、井戸１から出土した龍泉窯系青磁の香炉で、厚く釉が施されている。肩部に段をもつもので、そこから口縁部が立ち上がる袴腰形の器形になると思われる。23は紡錘形の土錘で、３－Ｐ1217から出土した。24は瓜形の器形をした青磁水注で、体部外面には蓮弁状の凹凸が見られる。同一個体と思われる破片が溝状遺構２や１・２区の包含層から合わせて３点出土している。胎土は薄く、その上に淡い青緑色の釉が厚く施されたもので、Ｆ期の特徴を持つ。同様の器形のものは、新安海底沈没船などで見られるが、類例は少ない。

２　４区西側の遺構とその伴出遺物

（１）遺構の分布状況

４区は、前述したように遺跡の中心を流れる水路の東側に位置する調査区で、長さ126ｍ、幅22ｍと東西に長くのびている。遺構の分布状況は、西側が比較的まばらであるのに対し、中央部は遺構が全くといってよいほど存在しない空白域となり、その東側ではかなり密集した状態で、柱穴などが重複、切り合う様子が多く見られた。なお、中央部の遺構空白域は、東西の遺構分布域と比べて標高が10㎝程度低くなっている。

４区西側では、建物跡18棟、柱列６条、溝状遺構４条、墓６基などが検出された。他の調査区と比べて遺構密度が低かったため、かえって建物跡の復元は比較的容易にできた。建物群は調査区の北側に偏在し、溝状遺構や柵跡とみられる柱穴列の南側では遺構の分布は極めて希薄である。

（２）建物跡

建物跡47（第67図）

柱列16から約４ｍ南に位置し、建物跡48・49と重複する。２間（6.48ｍ）×３間（6.48ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－11°－Ｗである。

建物跡48（第67図）

柱列16から約７ｍ南に位置する。検出された柱穴から東西１間（2.62ｍ）×南北１間（3.04ｍ）の掘立柱建物跡と考えたが、南辺の延長上に４－Ｐ3727があることから、東西２間×南北１間のものであったのかもしれない。主軸方向はＮ－６°－Ｗである。

建物跡49（第67図）

柱列16から約５ｍ南に位置する。検出された柱穴からは南北１間（2.92ｍ）×東西２間（3.92ｍ）の掘立柱建物跡と考えられるが、南辺の延長上に４－Ｐ3691があることから、南北１間×東西３間のものであったのかもしれない。主軸方向はＮ－74°－Ｅである。

建物跡50（第68図）

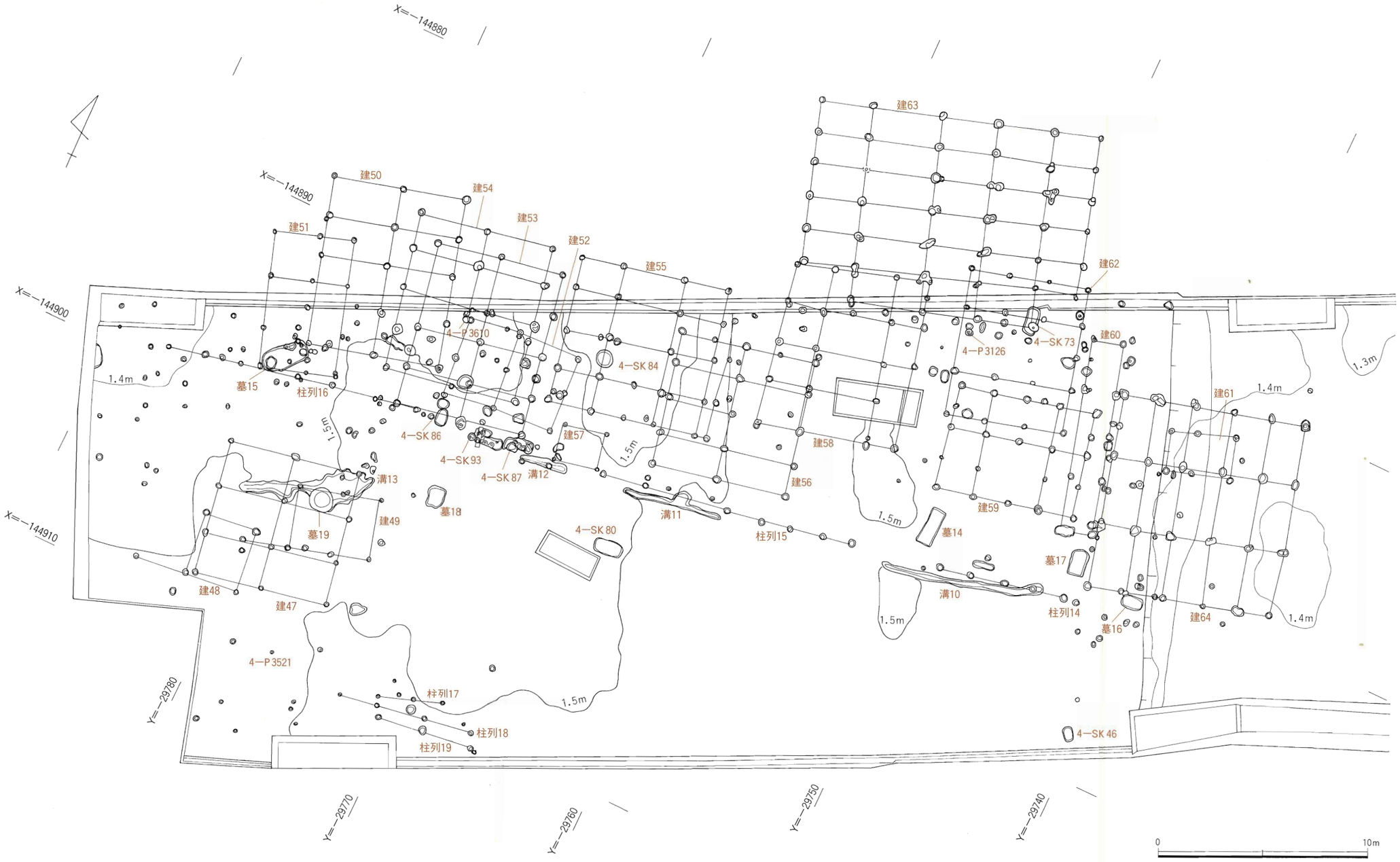
柱列16から約２ｍ北側で、４区と８区にまたがって位置し、建物跡51・53・54と重複している。２間（6.40ｍ）×４間（8.26ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－15°－Ｗである。西辺の８－Ｐ12と４－Ｐ3674との間には柱穴は確認できなかったが、サブトレンチを掘り下げた際に失われたのかもしれない。

建物跡51（第69図）

４区と８区にまたがり、南辺は柱列16とほぼ接している。２間（3.84ｍ）×３間（6.64ｍ）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－17°－Ｗである。

建物跡52（第69図）

４－SK87・93の約１ｍ北に位置し、建物跡53～55と重複する。２間（3.86ｍ）×２間（5.40ｍ）の総柱建物跡で、主軸方向はＮ－85°－Ｅである。建物跡北西隅の柱穴である４－Ｐ3609は、東播系の須恵器鉢が出土した４－Ｐ3610（第91図）によって切られている。91－１は東播系須恵器の第Ⅰ期第２段階（11世紀末葉～12世紀初頭）のものとみられ、建物跡52はこれよりさかのぼるものと考えられる。



第 66 図　4 区西側遺構図（S＝ 1/200）

建物跡53（第70図）

４区と８区にまたがり、建物跡50・52・54と重複する。南辺は柱列16とほぼ重なる位置にある。２間（6.14m）×４間（8.02m）の総柱建物跡と考えられるが、西辺の８－Ｐ241と４－Ｐ3623との間、建物中軸の８－Ｐ250と４－Ｐ3613との間では柱穴は確認できなかった。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。４－Ｐ3579・3613・3586・3590では、上面や埋土中から礫が検出された。

建物跡54（第71図）

４区と８区にまたがっており、柱列16から1.5m北に位置する。２間（6.48m）×４間（7.75m）の総柱建物跡と考えられるが、建物中軸の４－Ｐ3716と４－Ｐ3615との間では柱穴は確認できなかった。主軸方向はＮ－11°－Ｗである。

建物跡55（第72図）

４区と８区にまたがっており、溝状遺構12・13から約３m北に位置し、建物跡52・56と重複する。３間（7.2m）×４間（6.98m）の掘立柱建物跡である。建物中心部と比べると各面の外側の柱間が狭いことから、１間×２間の身舎の四面に廂が付く構造とも考えられる。また、この建物跡から50cmほど東には１条の柱列があり、付属施設の可能性もある。主軸方向はＮ－11°－Ｗである。４－Ｐ3563・3548では土師器坏の破片（87－１・２）が、４－Ｐ3585では銭貨４点（19・20）が出土した。19・20はもともと１つにつながって出土したが、整理の過程で分離し、それぞれ２枚ずつが錆着したかたちとなっている。19は左が紹聖元寶、右が熙寧元寶で、20は左が篆書体の元祐通寶、右は行書体の元祐通寶である。４－Ｐ3671・3548・3569・3596では、上面や埋土中から石が検出された。

建物跡56（第73図）

溝状遺構11から約1.5m北に位置し、建物跡55・58と重複する。２間（6.56m）×４間（6.5m）の総柱建物跡である。北辺の各柱間にはやや小さく浅い柱穴が見られ、補助的な柱が立てられていたと推測される。主軸方向はＮ－12°－Ｗである。４－Ｐ3562で土師器皿（87－３）が出土した。口縁部が短く立ち上がる器形をしている。

建物跡57（第73図）

１間（1.74m）×１間（2.2m）の掘立柱建物跡である。南辺は溝状遺構12の北側とほぼ近接し、また、柱列15のほぼ延長上に位置する。主軸方向はＮ－79°－Ｅである。

建物跡58（第74図）

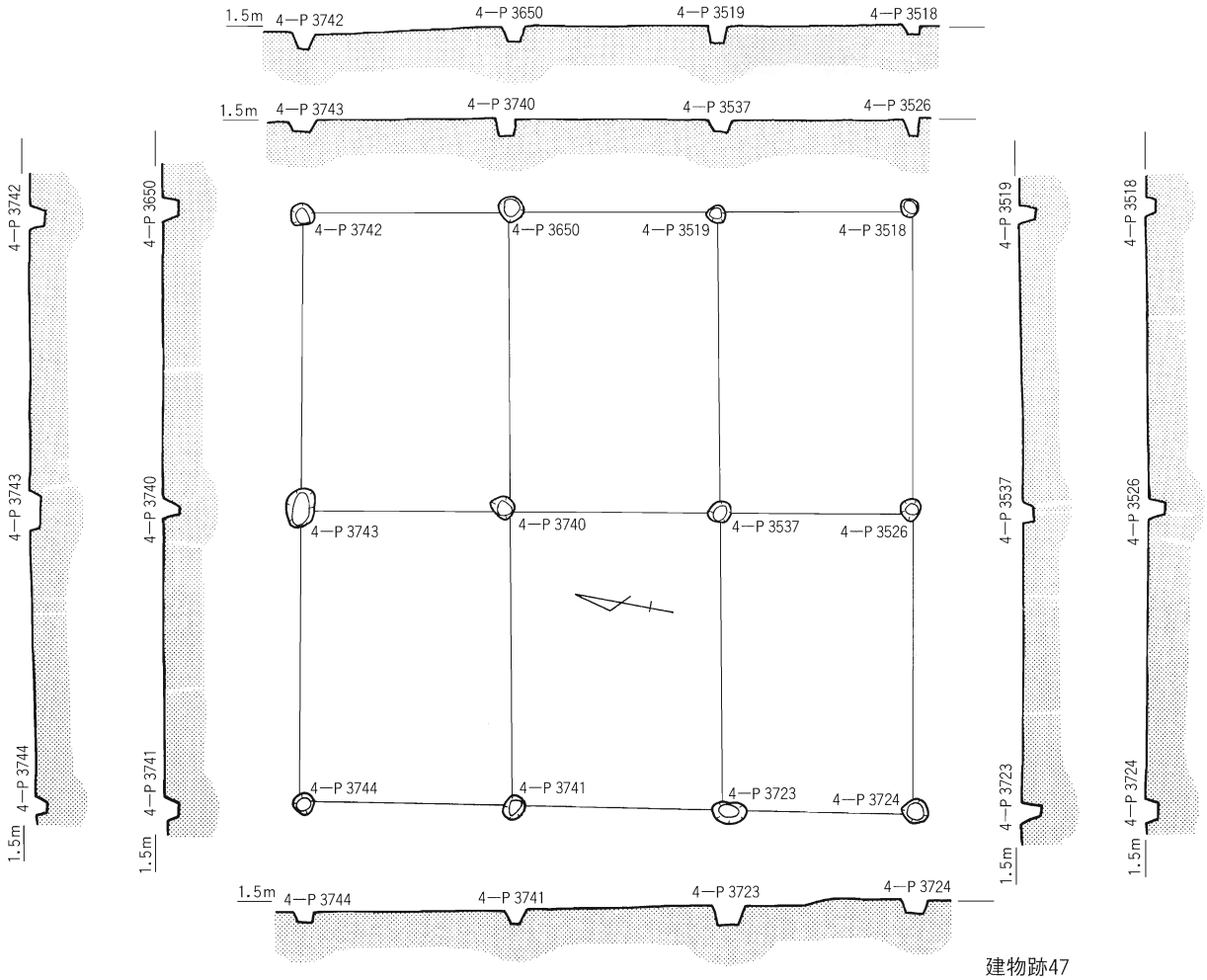
４区と８区にまたがっており、柱列15から約4.5m北に位置し、建物跡56・63と重複する。３間（6.67m）×４間（7.94m）の掘立柱建物跡で、東西２面に廂が付くものと考えられる。主軸方向はＮ－12°－Ｗである。４－Ｐ3155・3150・3167・3164・3170の上面や埋土中で石が検出された。なお、４－Ｐ3170は建物跡56の４－Ｐ3171に切られていたことから、建物跡58は建物跡56よりも古いものと判断される。

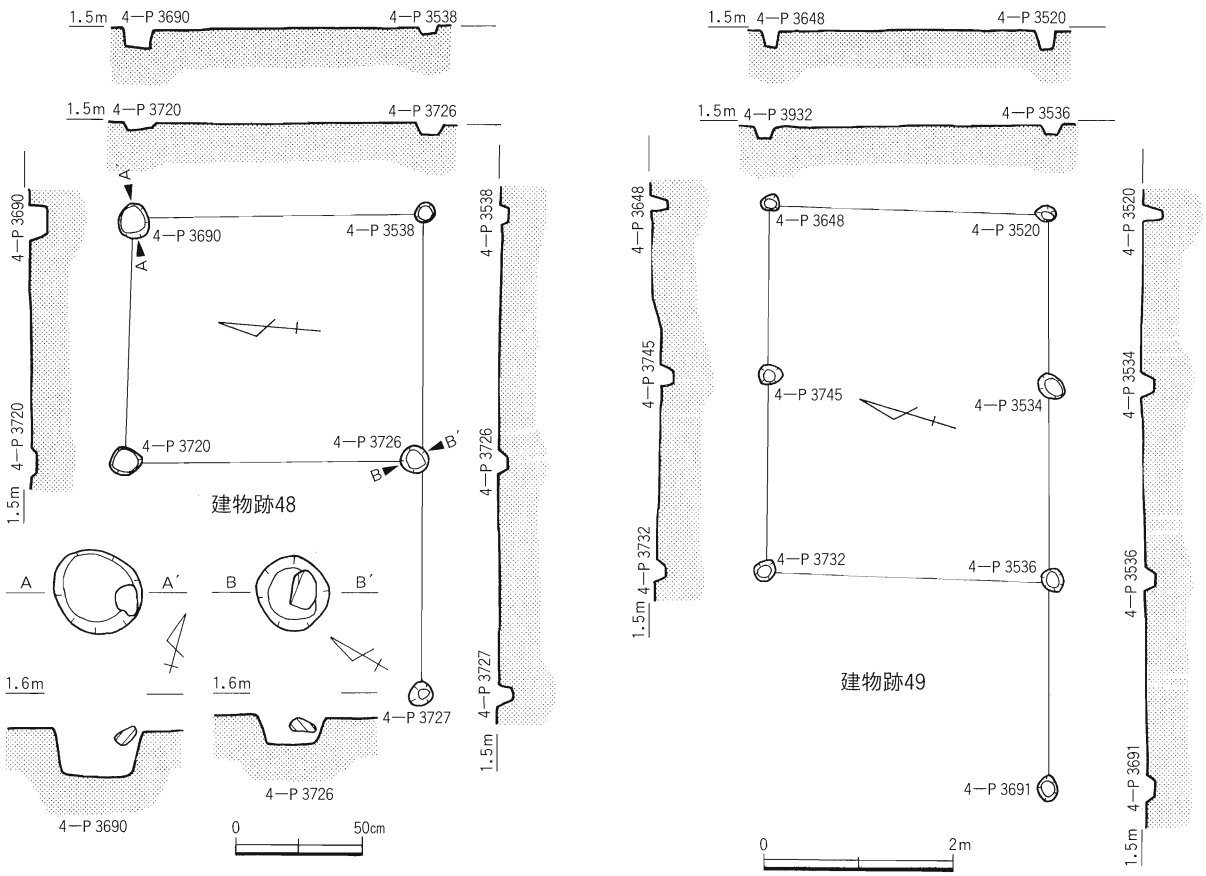
建物跡59（第75図）

柱列14から約４m北に位置し、建物跡60・62と重複する。南北４間（5.02m）×東西４間（6.66m）の掘立柱建物跡で、北側の２間は柱間が狭いことから廂であった可能性も考えられる。主軸方向はＮ－78°－Ｅである。４－Ｐ3131の埋土中には石が入っていた。

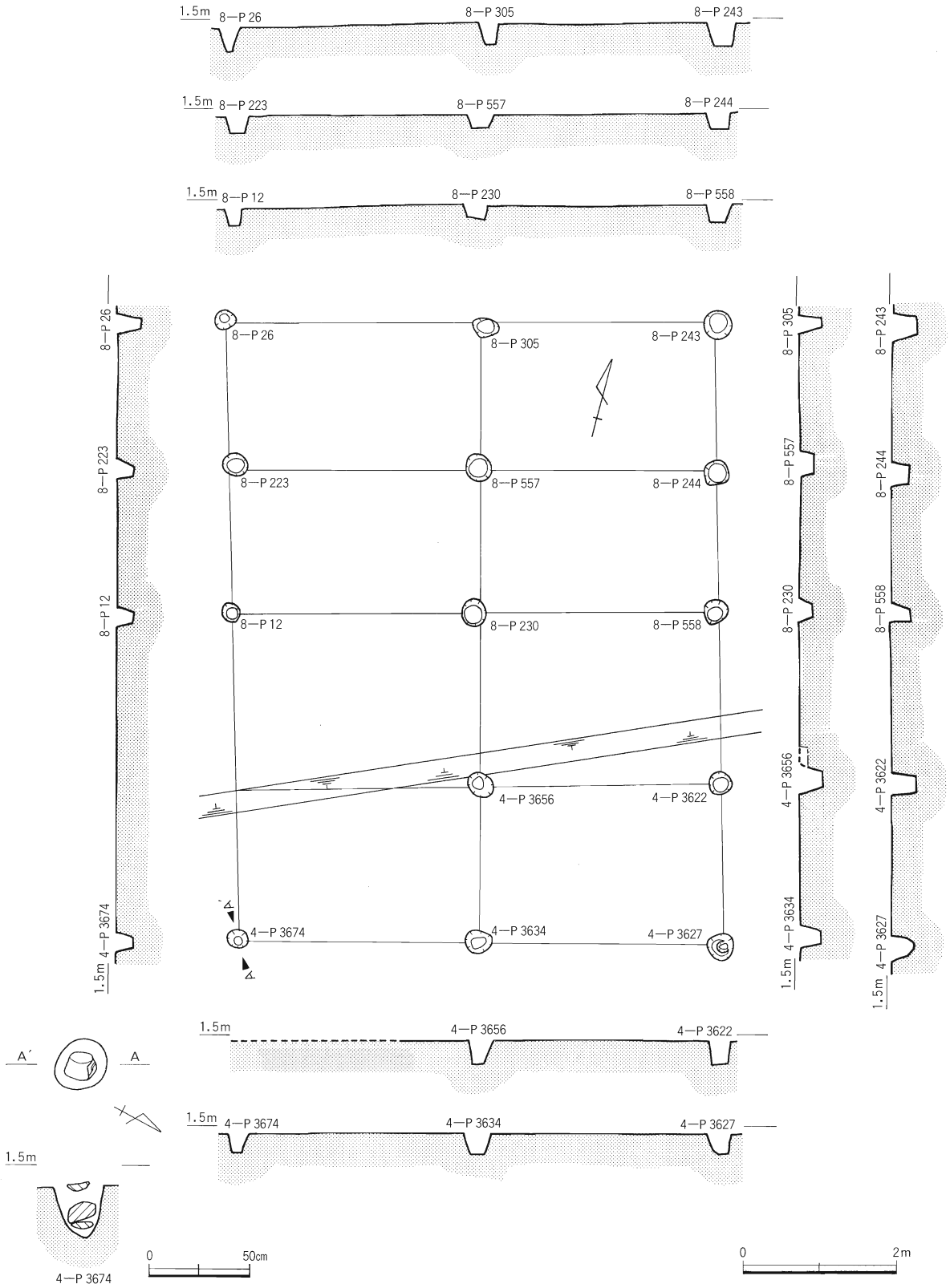
建物跡60（第75図）

柱列14から約３m北に位置する。１間（1.52m）×４間（9.32m）の掘立柱建物跡として復元し

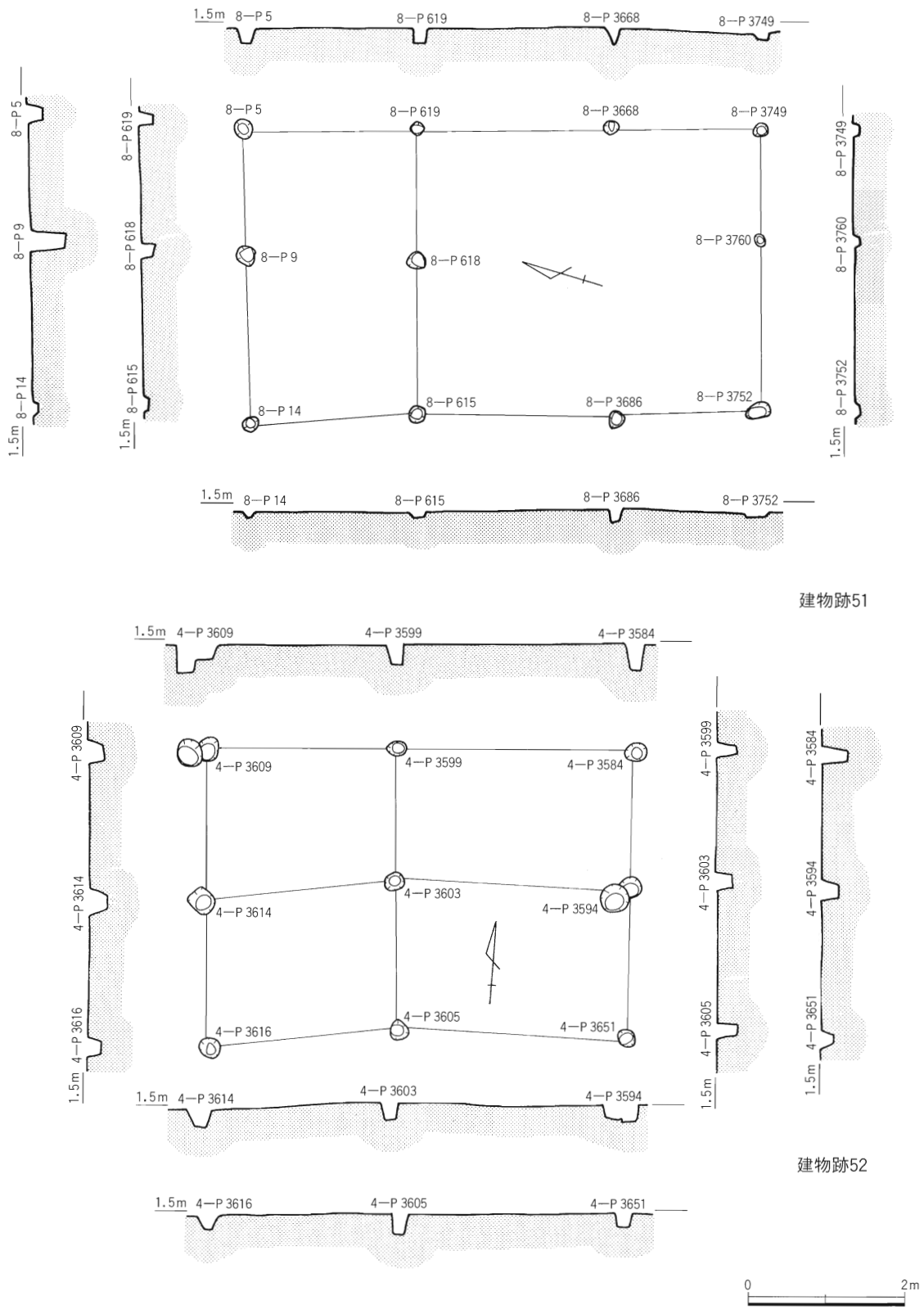




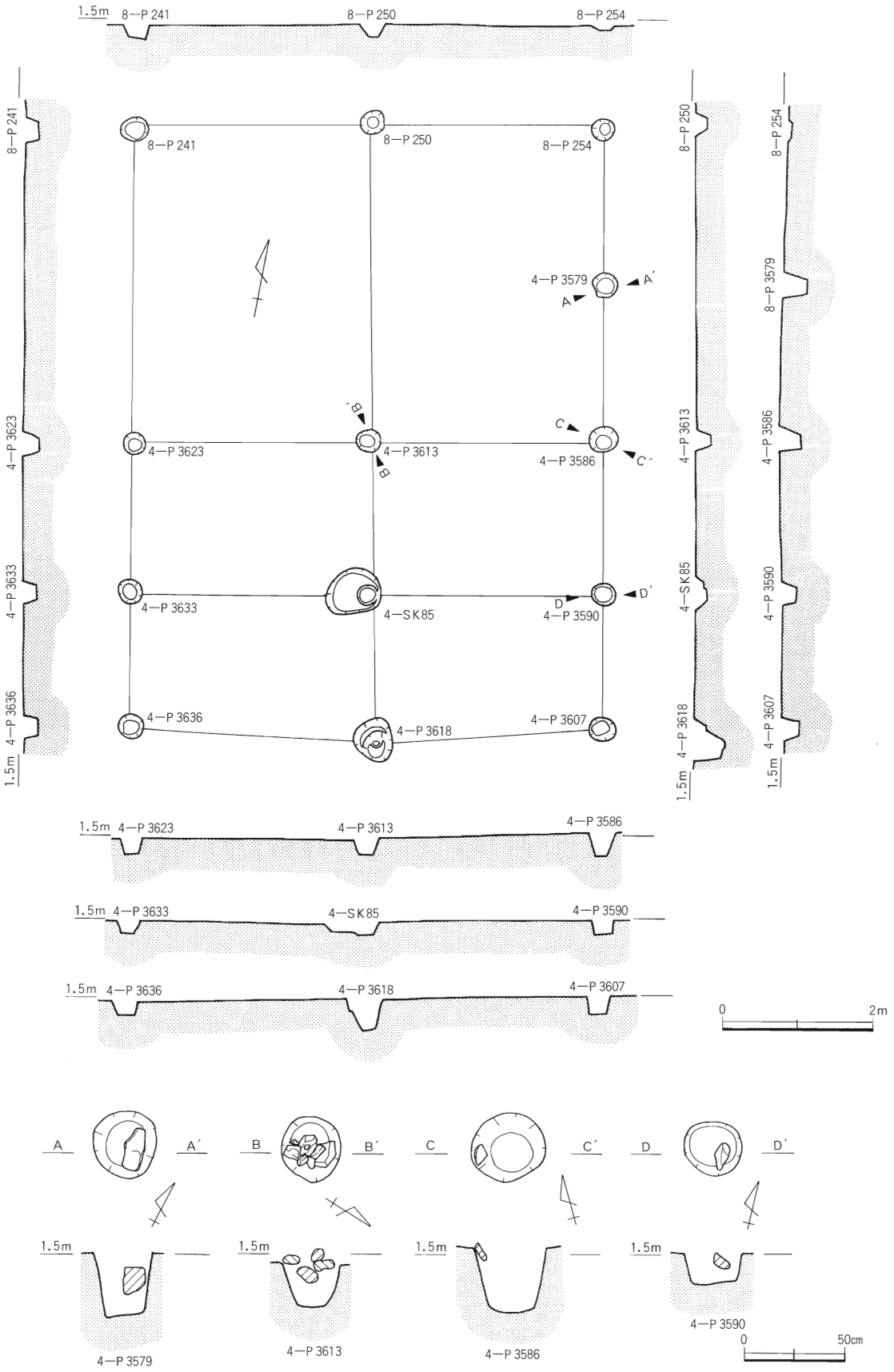
第67図　建物跡47～49（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



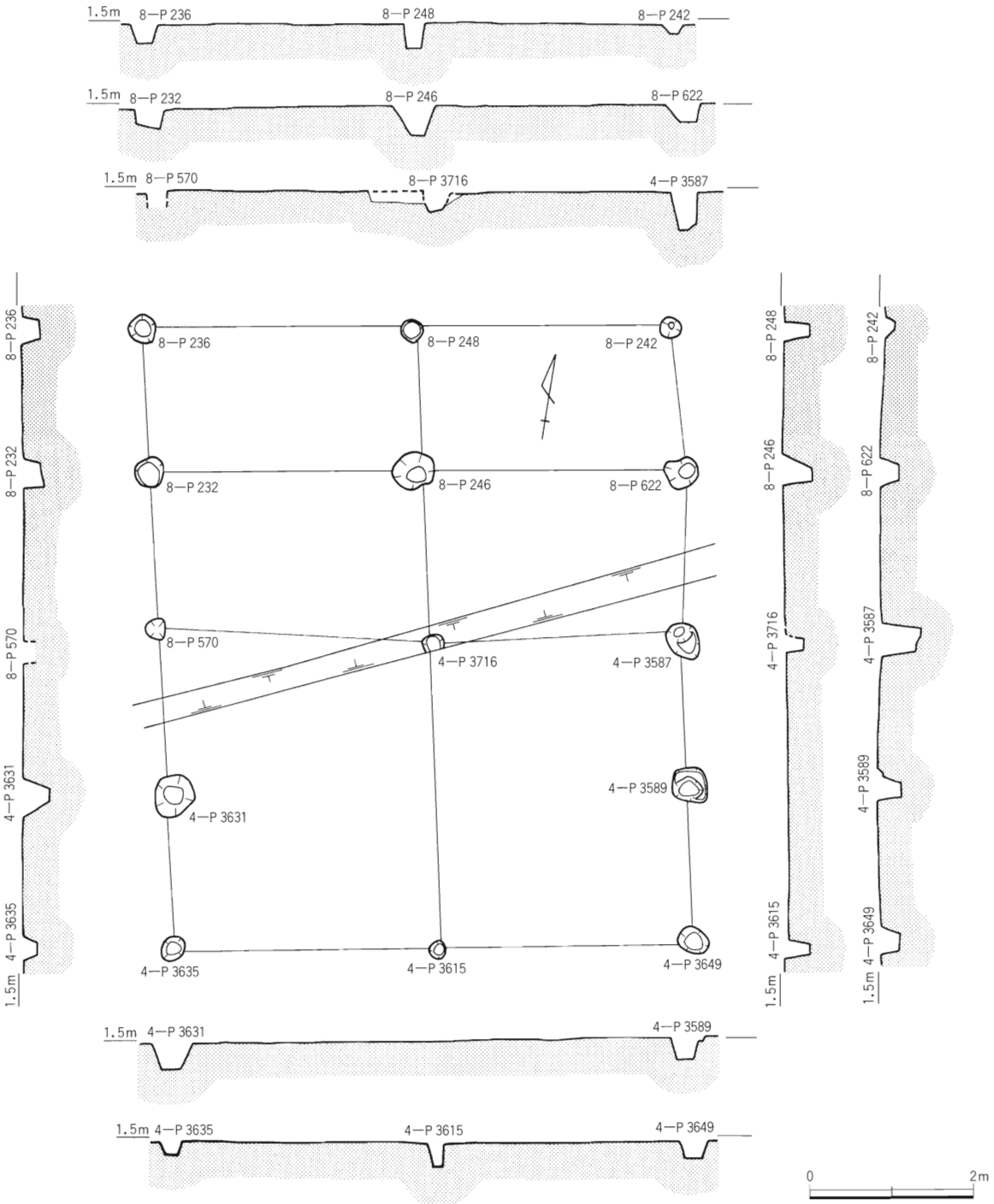
第 68 図　建物跡50（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



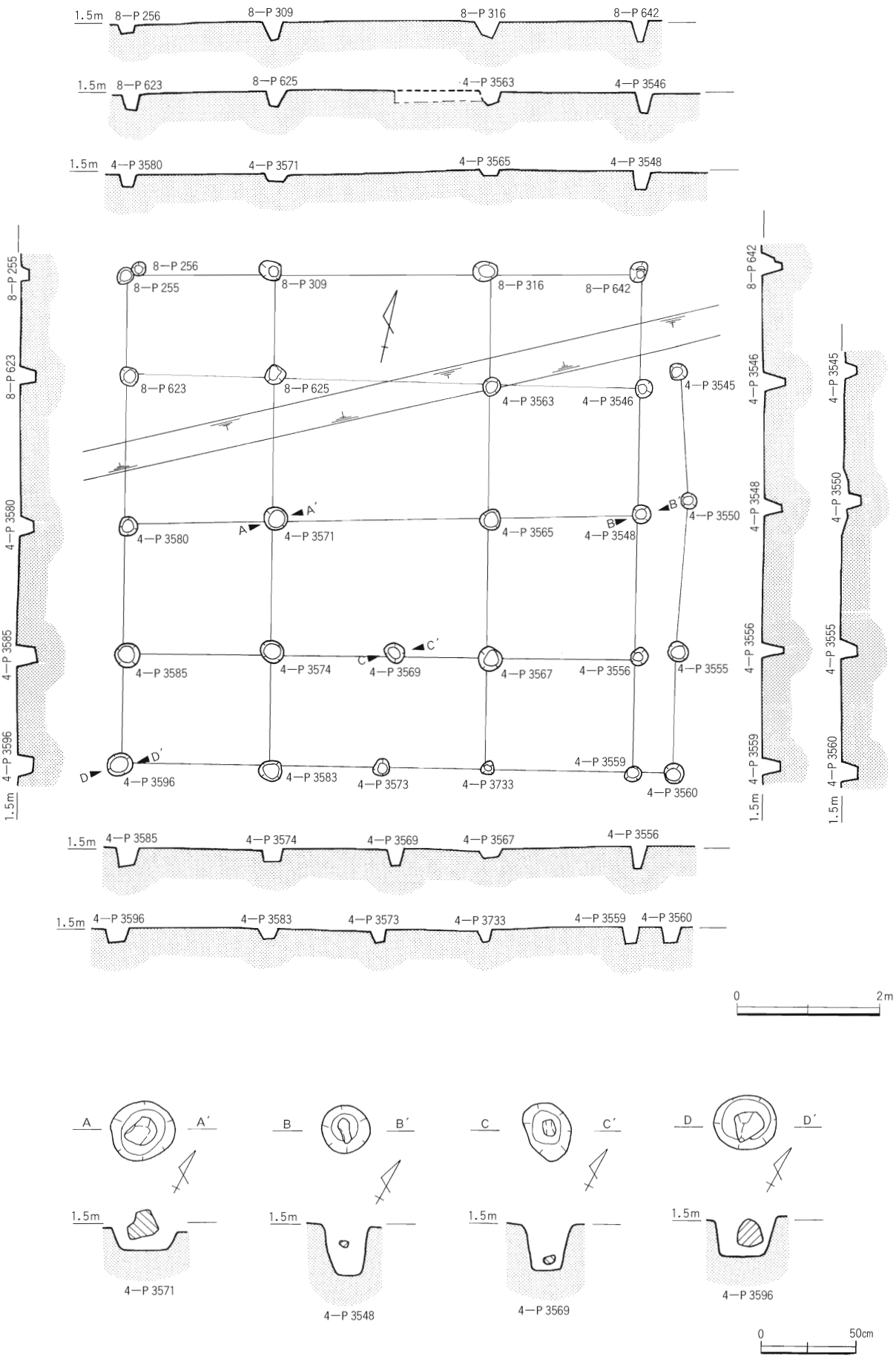
第69図　建物跡51・52（S＝ 1/80）



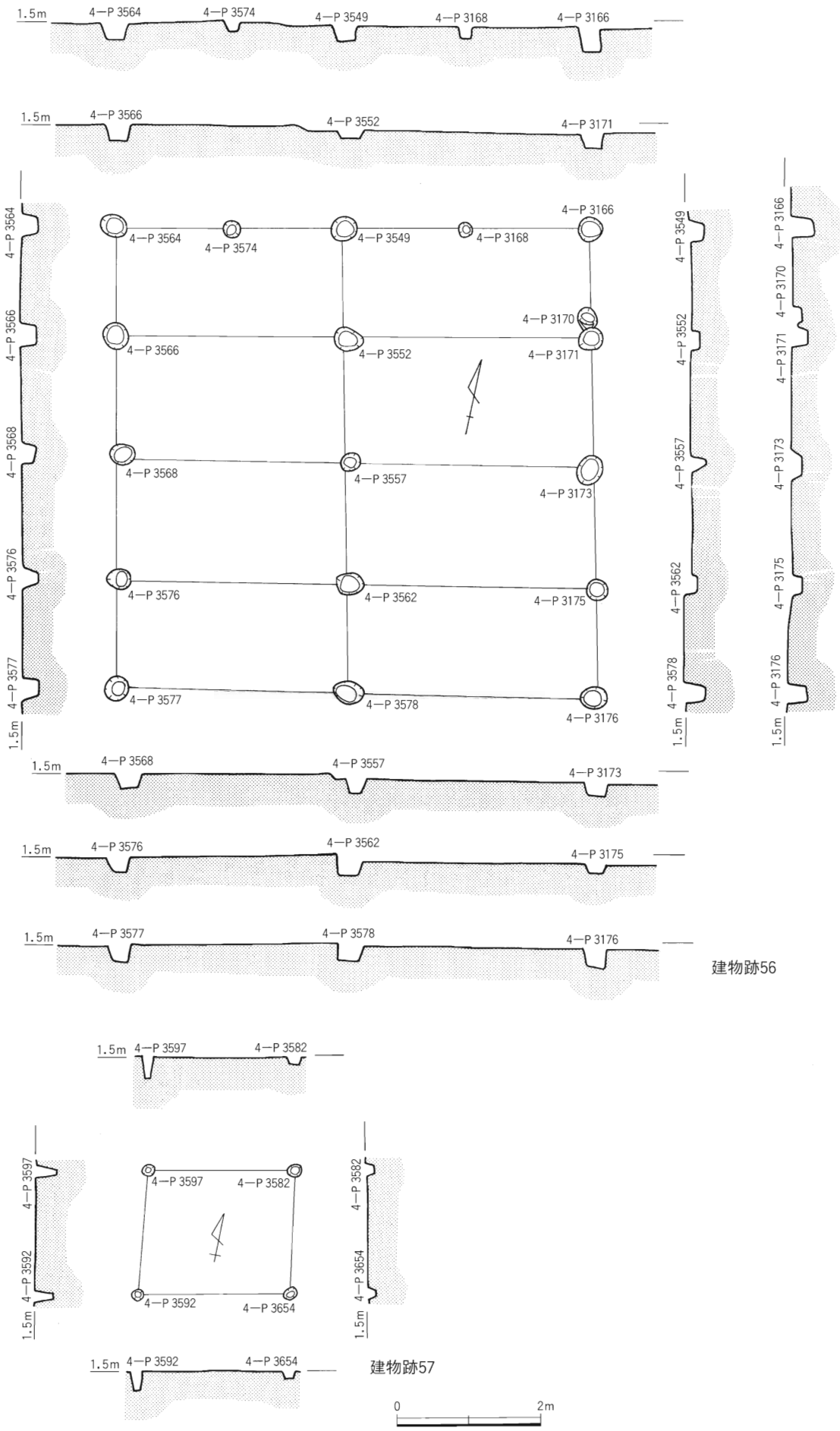
第 70 図　建物跡53（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



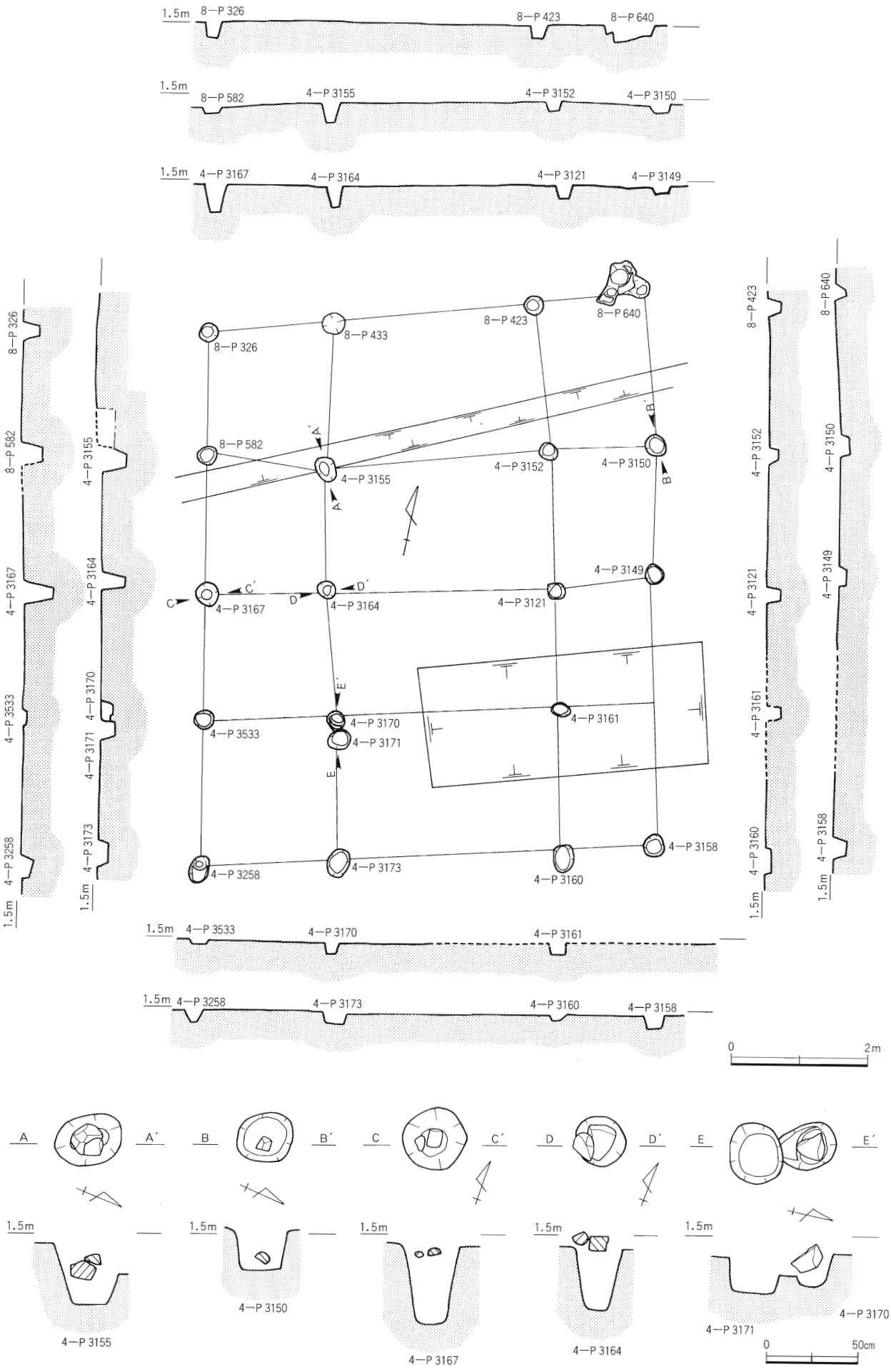
第 71 図　建物跡54（S＝ 1/80）



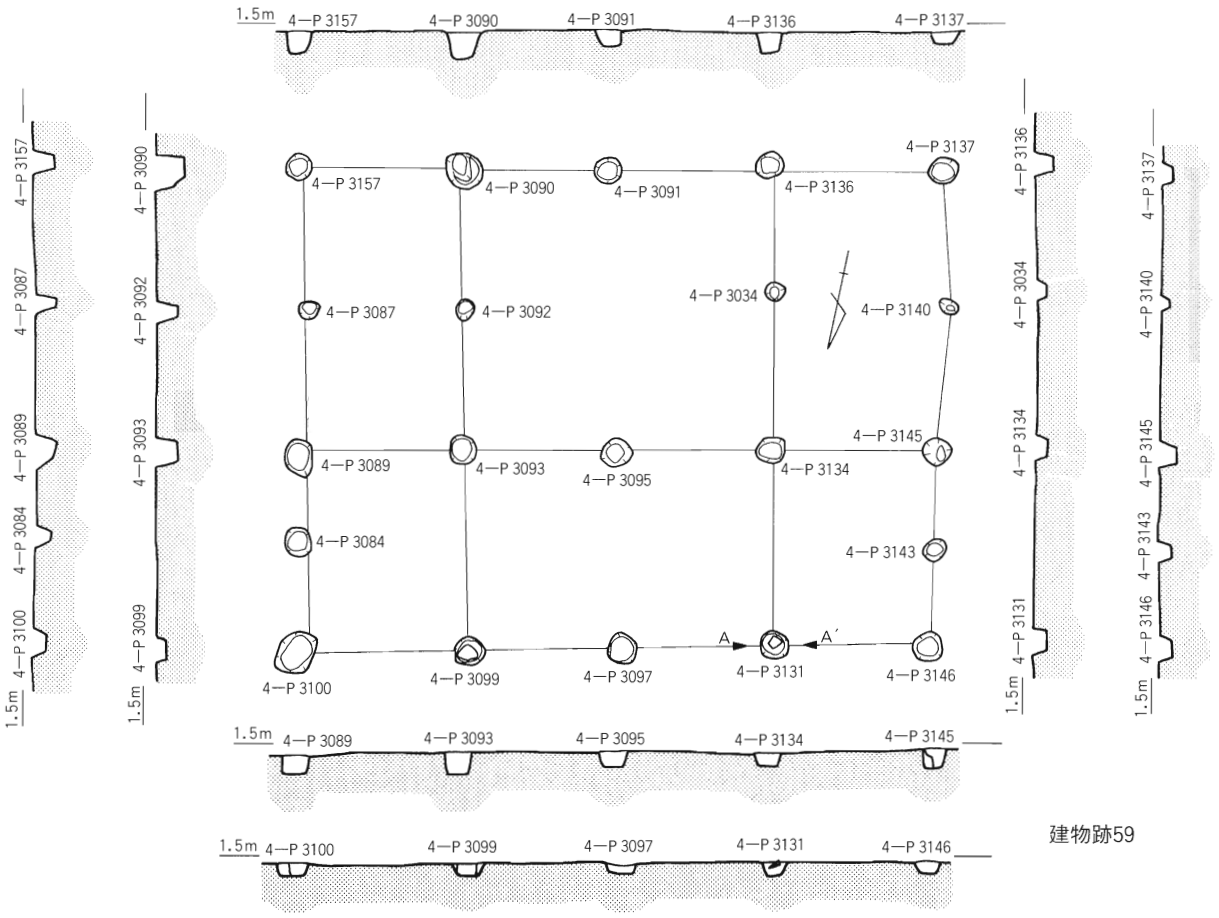
第 72 図　建物跡55（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



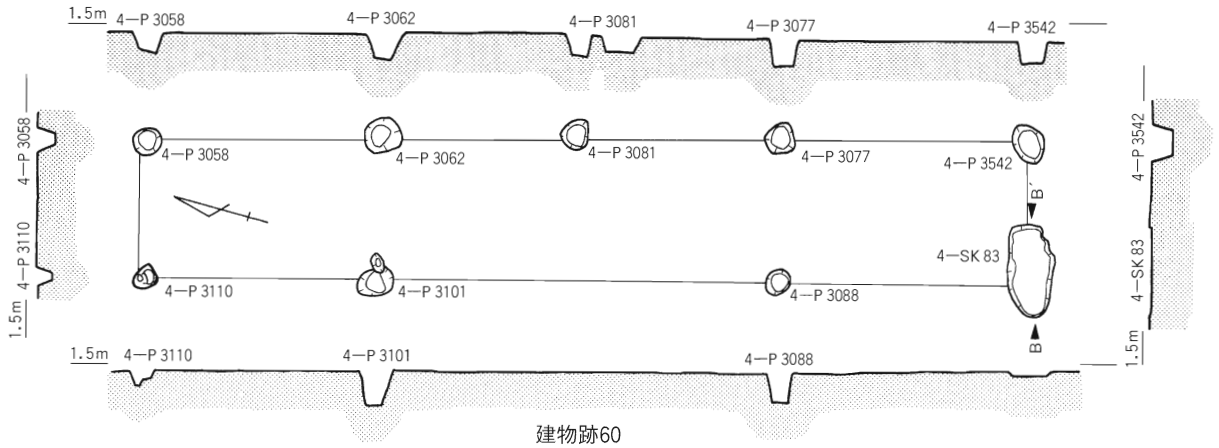
第 73 図　建物跡56・57（S＝ 1/80）



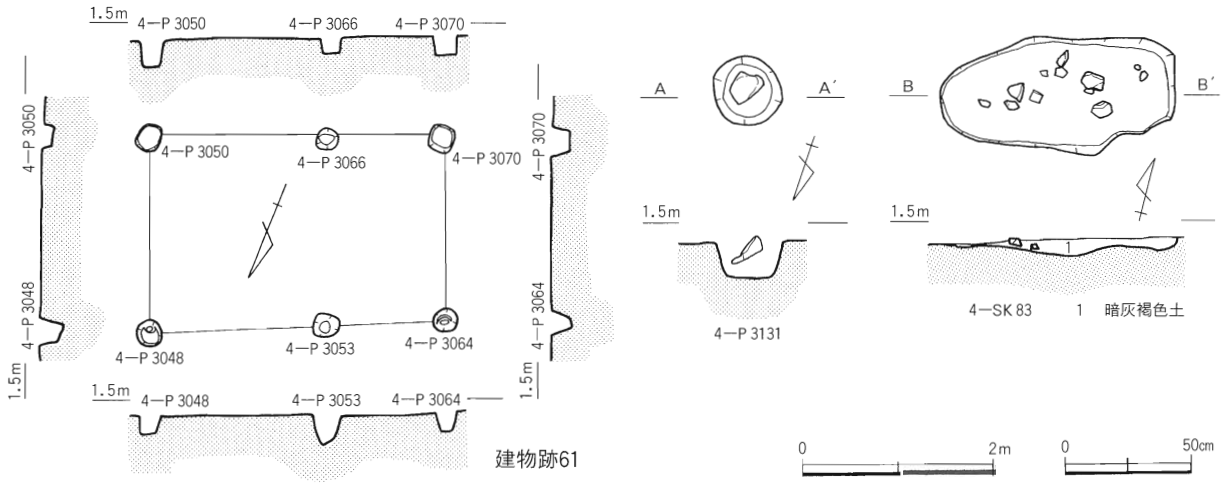
第 74 図　建物跡58（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



建物跡59

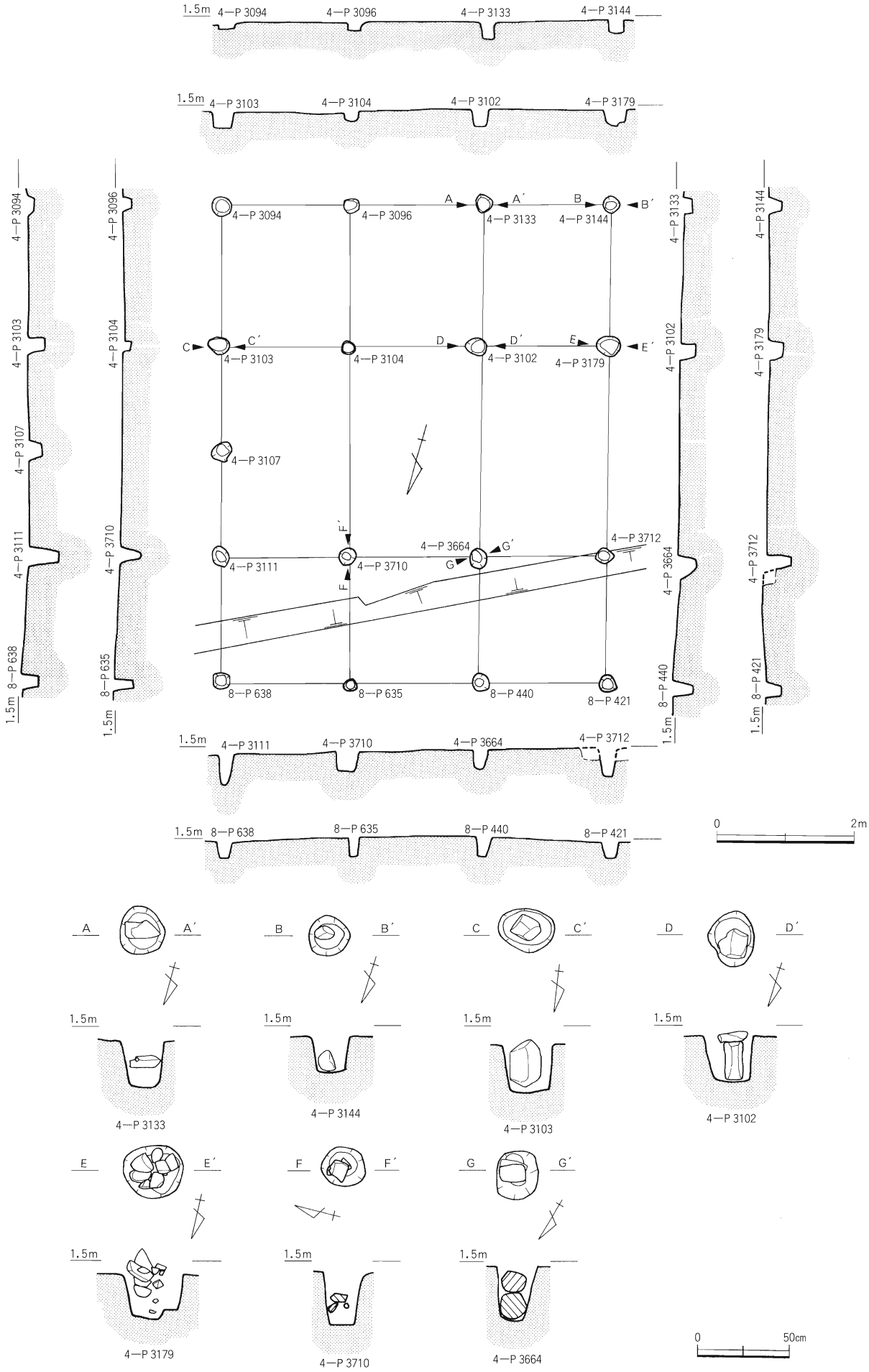


建物跡60

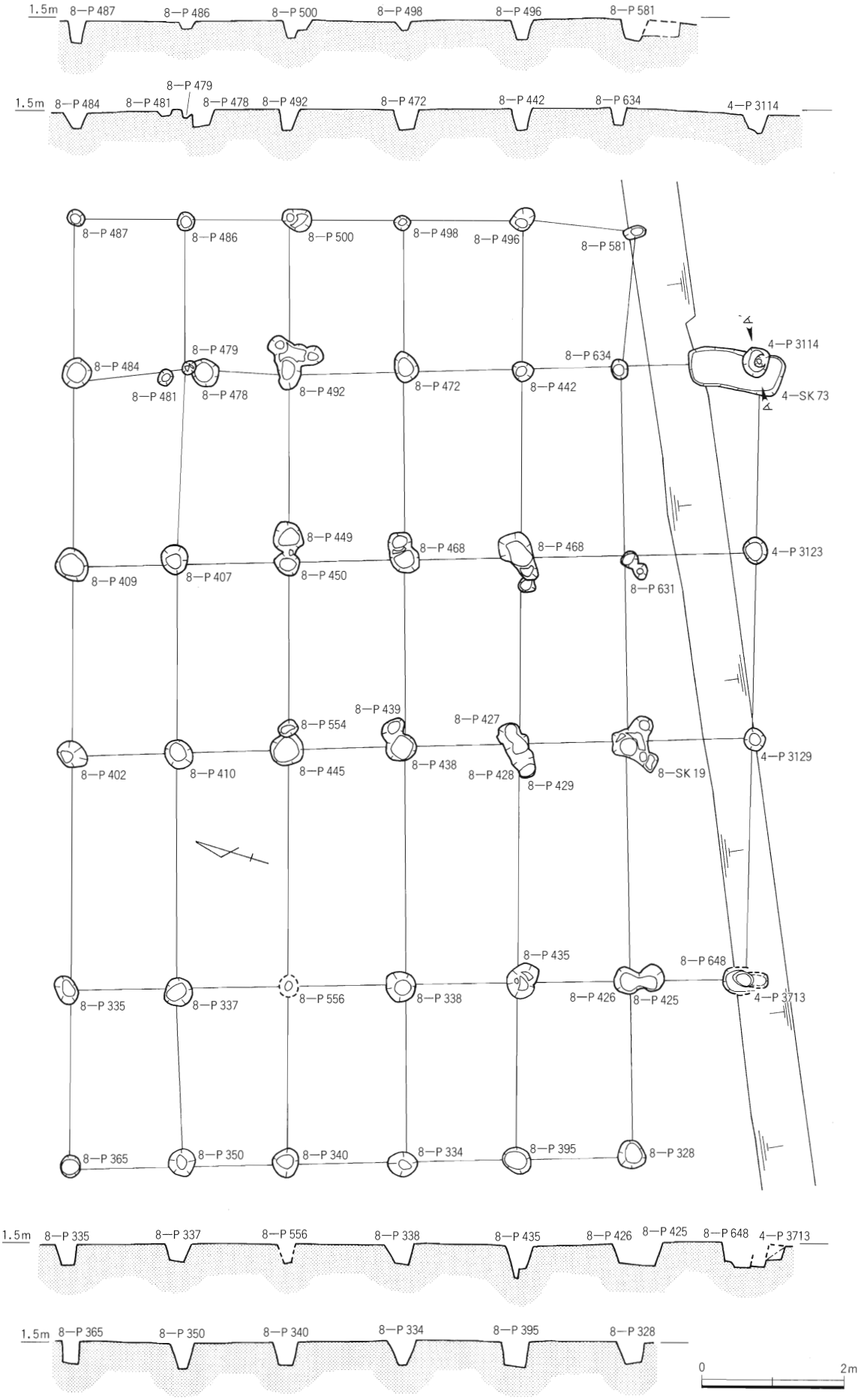


建物跡61

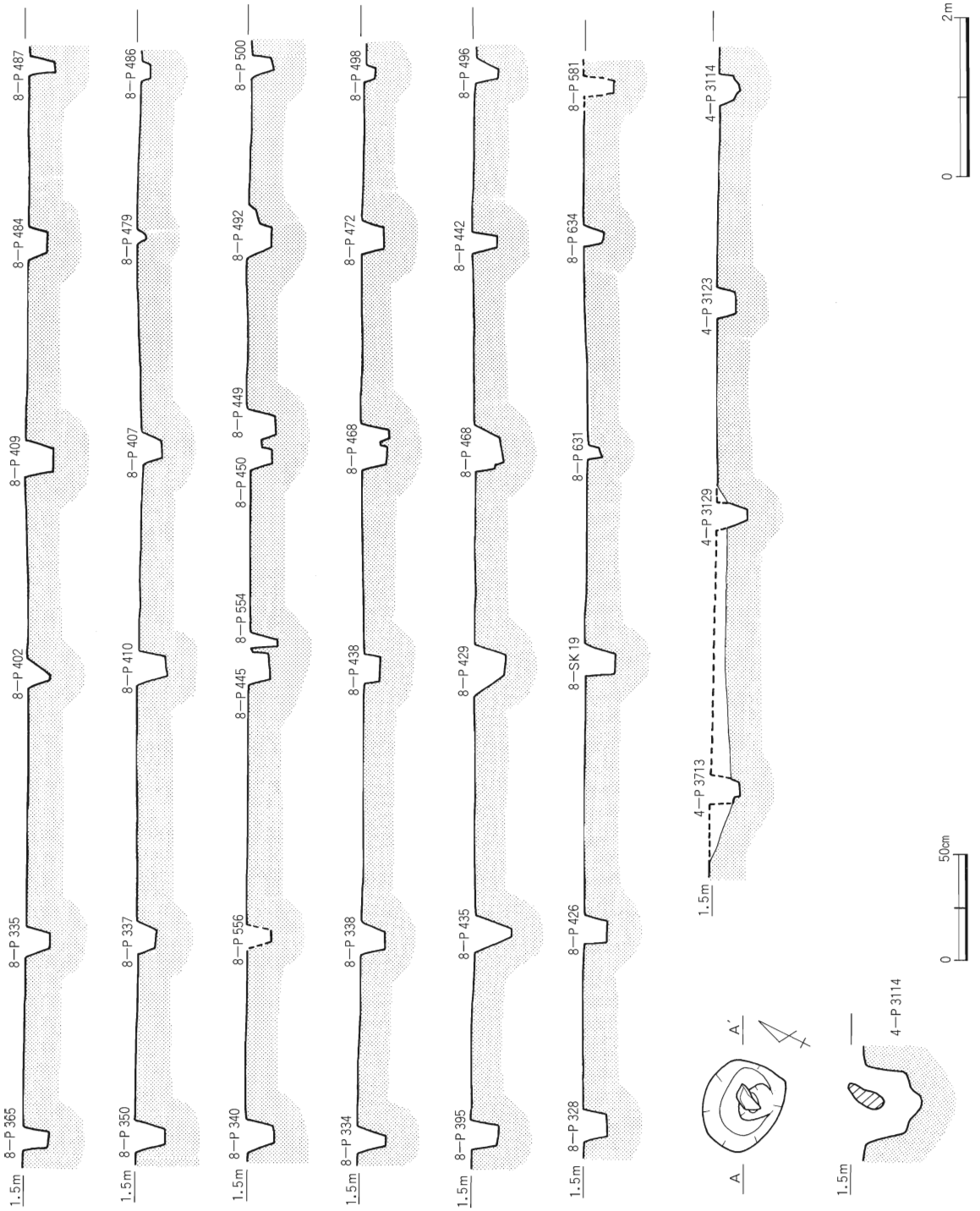
第 75 図　建物跡59～61（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第 76 図　建物跡62（S＝ 1/80，柱穴：1/30）



第 77 図　建物跡63（S＝ 1/80）



第 78 図　建物跡63柱穴断面図（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）

たが、南北に細長い形になっており、建物以外のものと考えるべきかもしれない。西辺の中央部では柱穴は確認できなかった。主軸方向はＮ－15°－Ｗである。

建物跡61（第75図）

４区西側の建物群の中でもかなり東よりに位置し、建物跡64と重複する。１間（2.10m）×２間（3.10m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－74°－Ｅである。柱間は西側と比べ、東側が長くなっている。

建物跡62（第76図）

４区と８区にまたがっており、柱列14から約7.5m北に位置し、建物跡59・60・63と重複する。３間（7.08m）×３間（5.68m）の掘立柱建物跡である。建物中央部の柱間に対し南側と北側はそれぞれ狭くなっていることから、１間×３間の身舎に、南北２面の廂が付く建物と考えられる。建物の主軸方向はＮ－15°－Ｗである。柱穴には石が入っているものもあり、柱の根石として据えられたものかもしれない。４－Ｐ3179では土師器坏（87－４）が出土した。浜田市古市遺跡のⅡ期のものと類似していることから、12世紀頃のものと推測される。

建物跡63（第77・78図）

溝状遺構10から約12m北に位置しており、建物跡の大部分は８区の範囲内であるが、南側の一部は４区にかかる。４－Ｐ3114は４－SK73を切っている。身舎は梁行き３間（8.6m）×桁行き６間（9.42m）で、東西に張り出し部をもつことから、２面廂の建物跡と考えられる。身舎の西側の柱間は約3.3mで、中央や東側の柱間（約2.65m）と比べて広くなっていることから、この部分が土間面であった可能性も想定される。主軸方向はＮ－17°－Ｗである。建物面積は118.52㎡で、本遺跡でこれまでに確認された建物跡の中で最大規模のものである。

建物跡64（第79・80・87図）

４区西側の建物群の中で最も東側に位置しており、建物跡の東半分が４区中央部の窪地状になったところにかかっている。４－Ｐ3034は墓16に切られている。梁行き３間（9.46m）×桁行き５間（8.86m）の総柱建物跡で、梁行きの柱間は10尺、11尺、10尺を指向したものと推測される。西辺の４－Ｐ3072と４－Ｐ3078、４－Ｐ3078と４－Ｐ3061との間にはやや浅い柱穴があり、補助的な柱が立てられていたと考えられる。主軸方向はＮ－13°－Ｗである。柱穴には埋土中に石が入っているものもあり、これらは根石として据えられたものかもしれない。柱穴内から土師器の坏・皿（87－５～11）が出土しており、このほか小片のため図示していないが瓦質土器片も１点検出された。

（３）柱列・溝状遺構

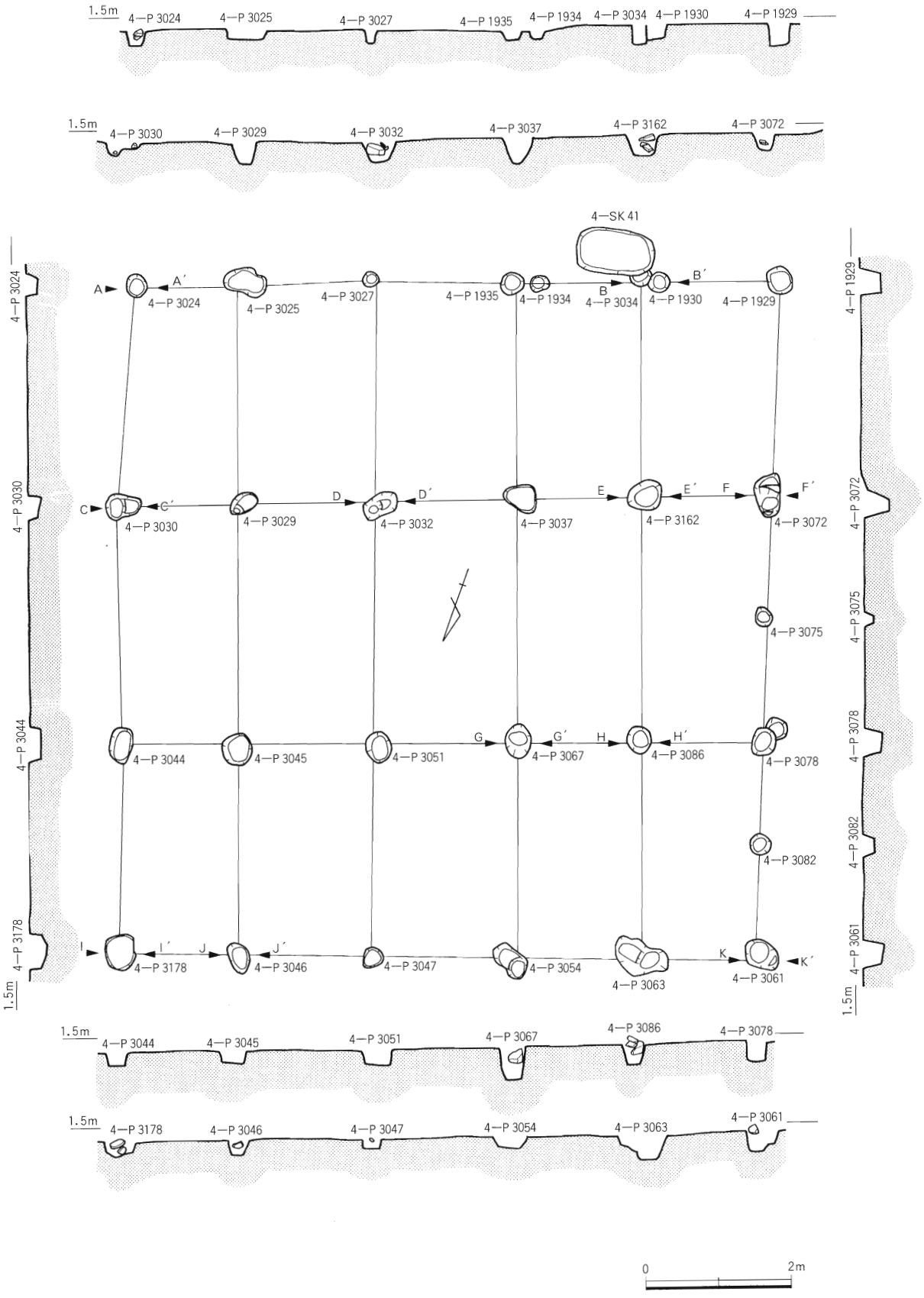
柱列14・溝状遺構10（第81・87図）

両者はともに建物跡59の南側に位置しており、一部で重複し、切り合っている。溝状遺構10を掘り下げ後に柱列14の４－Ｐ3707が検出できたことから、柱列14の方が古いと考えられる。

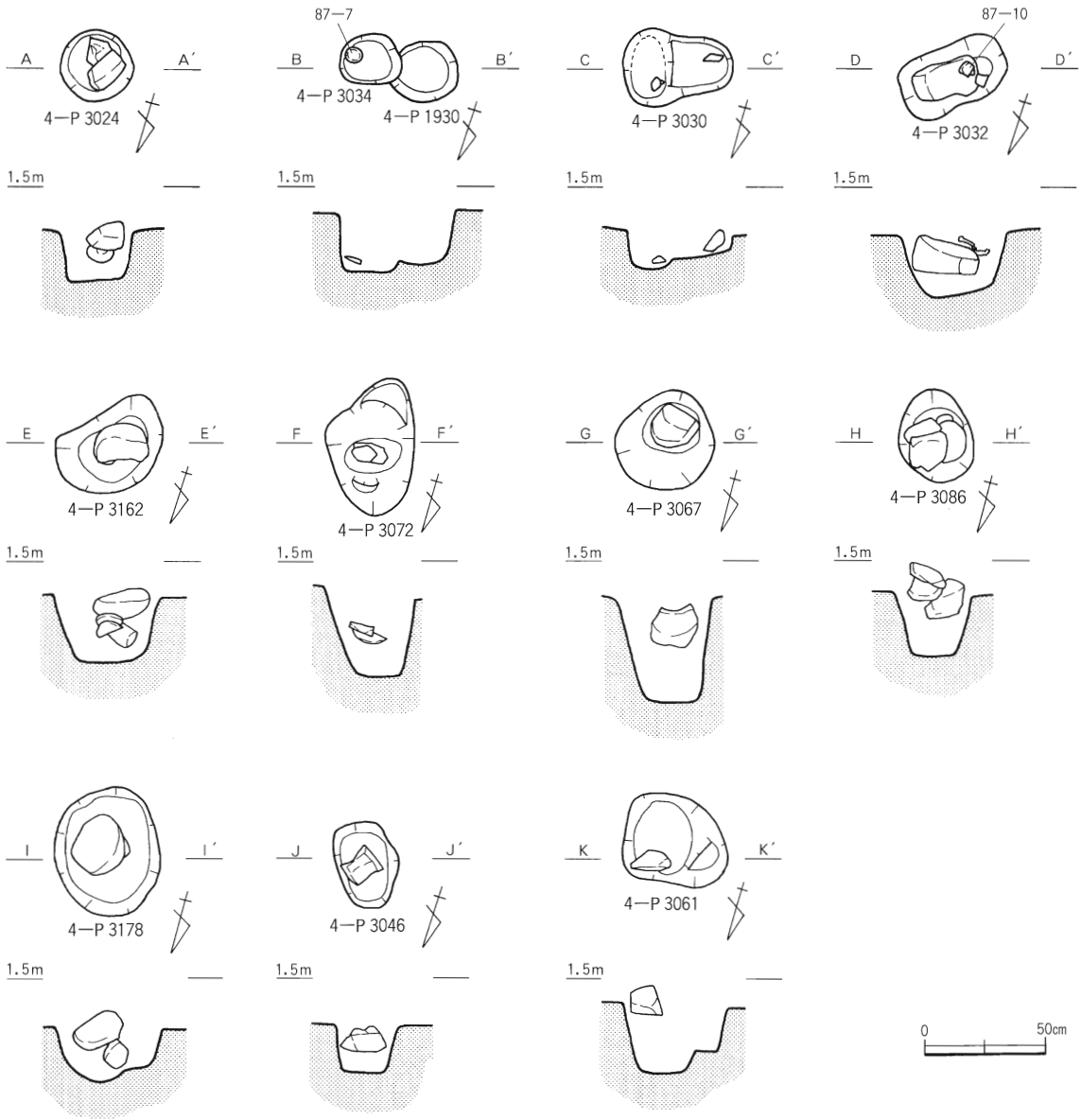
柱列14は、柱間が４間（6.1m）で、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。４－Ｐ3040から須恵器甕の胴部片（87－12）が出土した。外面に平行タタキ目、内面に同心円当具痕が見られる。

溝状遺構10は、長さ約7.8m、幅30㎝、深さ５㎝前後の溝で、横断面形は浅い皿状になっている。柱列14とほぼ同じ方向にのびている。

柱列15・溝状遺構11（第82・87図）



第 79 図　建物跡64（S＝ 1/80）



第 80 図　建物跡64柱穴（S＝ 1/30）

ともに建物跡56の南側に位置しており、柱列15の約30㎝南に溝状遺構11がある。

柱列15は、柱間が６間（12.40ｍ）で、主軸方向はＮ－81°－Ｅである。４－Ｐ3581から土師器皿（87－13）が出土した。

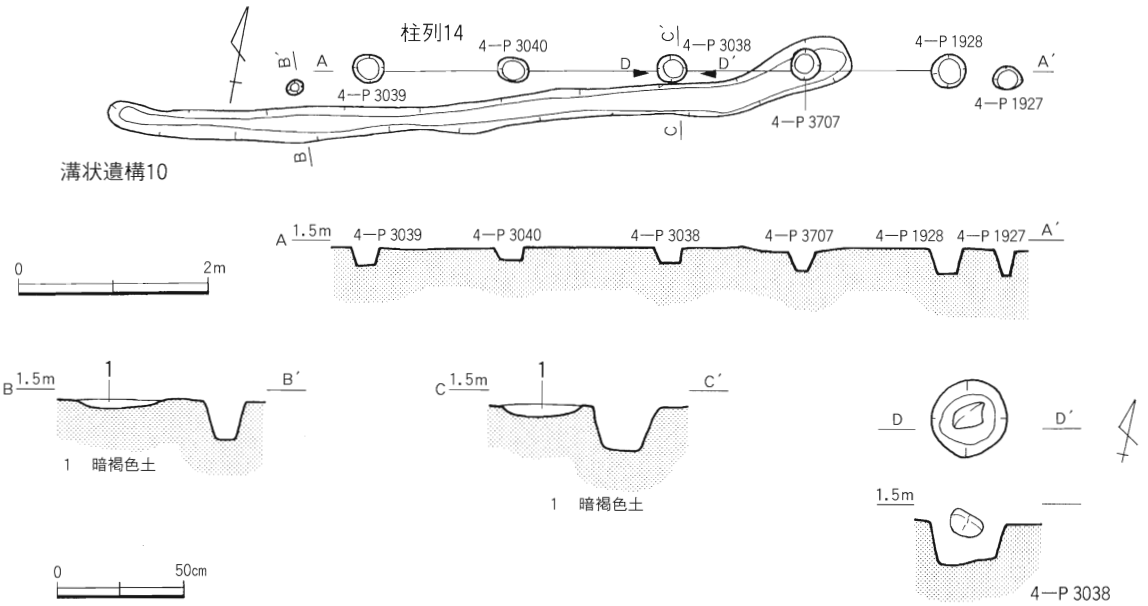
溝状遺構11は、長さ約4.8ｍ、幅25㎝、深さ５㎝前後で、第82図のＢ－Ｂ'ラインのあたりでは北側へ50㎝ほどに張り出したかたちになっている。浅い皿状の横断面形をしており、柱列15とは平行してのびている。

柱列16（第83・87図）

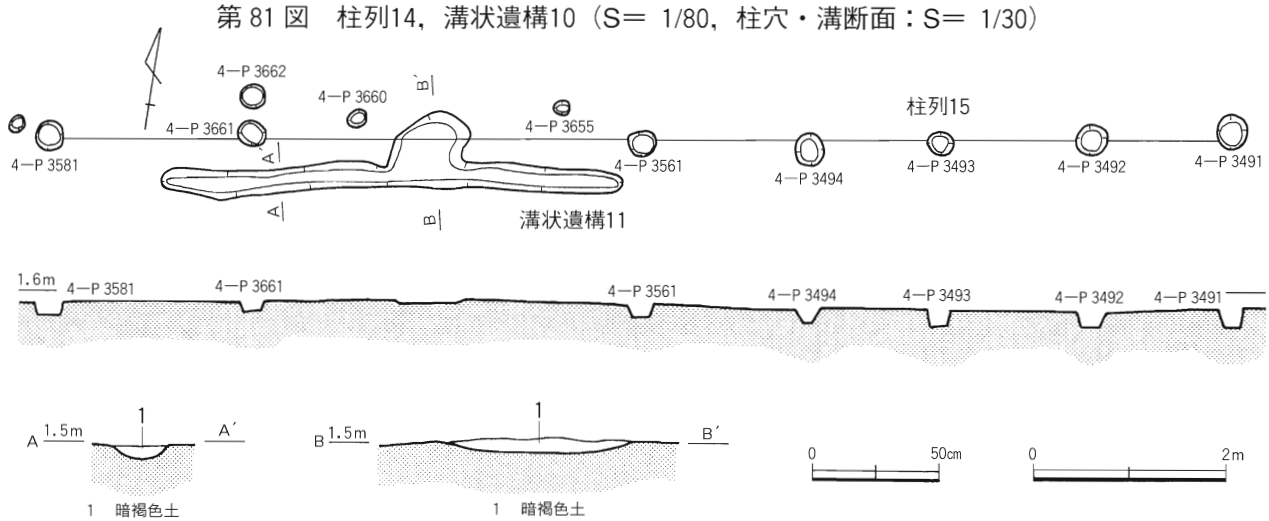
柱間は６間（12.26ｍ）で、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。４－Ｐ3759の埋土上部には石が入っており、それらを取り除くと土師器坏（87－14）が出土しており、廃棄時の祭祀などに伴うものとも考えられる。

柱列17～19（第84・87図）

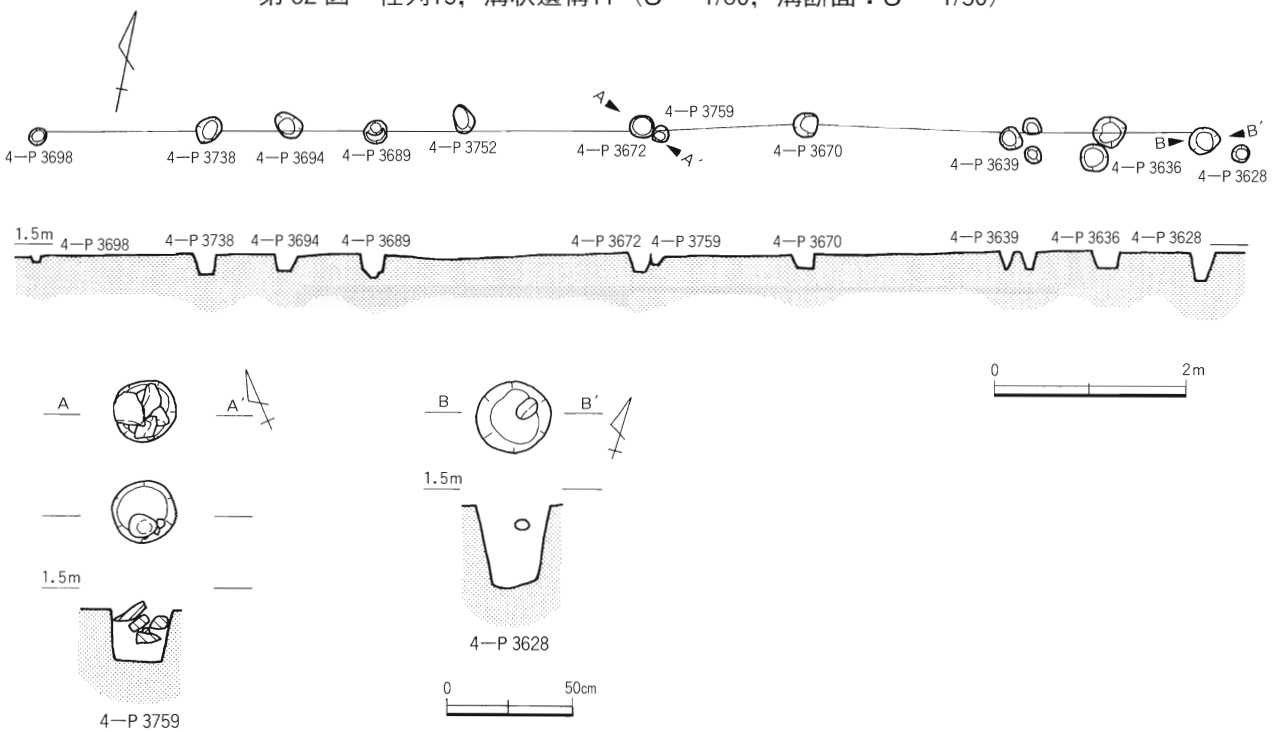
４区の南西側、建物跡47から約５ｍ南東で、それぞれ近接した位置で検出された。柱列17～19の



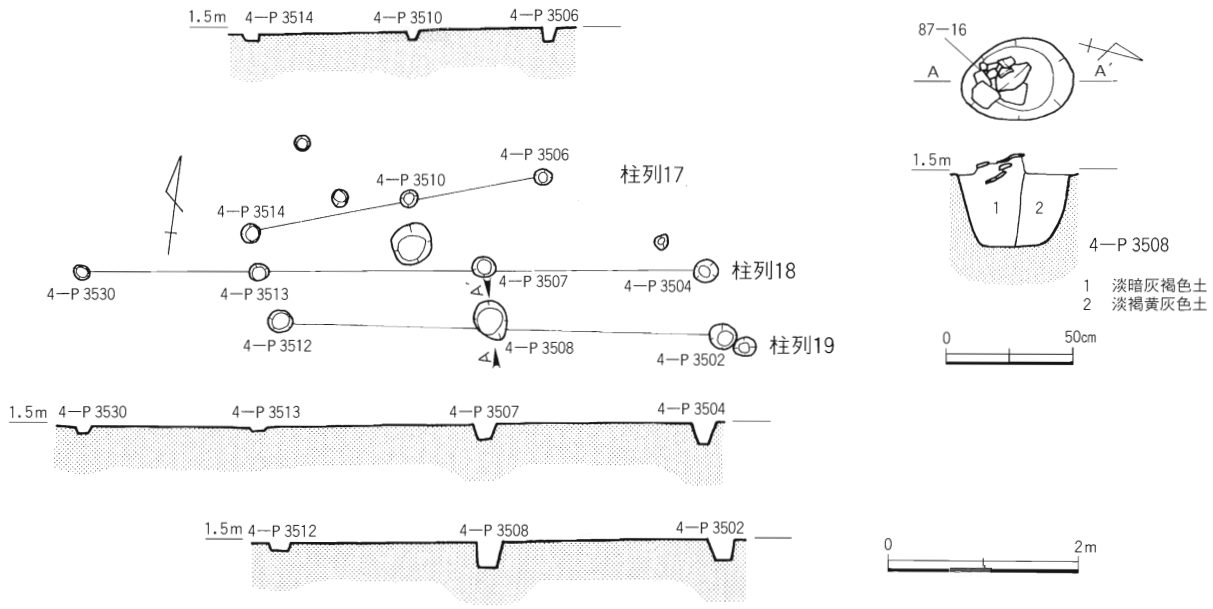
第 81 図　柱列14，溝状遺構10（S＝ 1/80，柱穴・溝断面：S＝ 1/30）



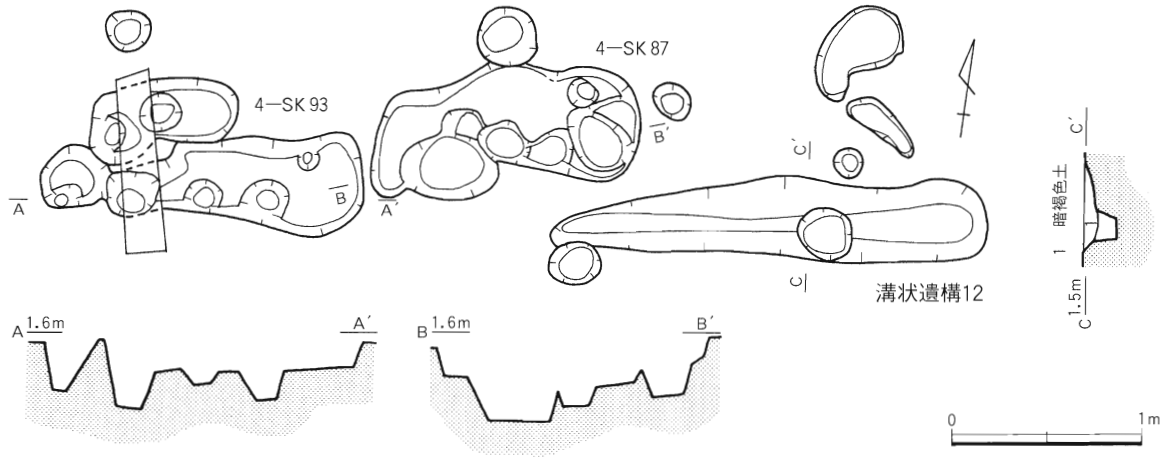
第 82 図　柱列15，溝状遺構11（S＝ 1/80，溝断面：S＝ 1/30）



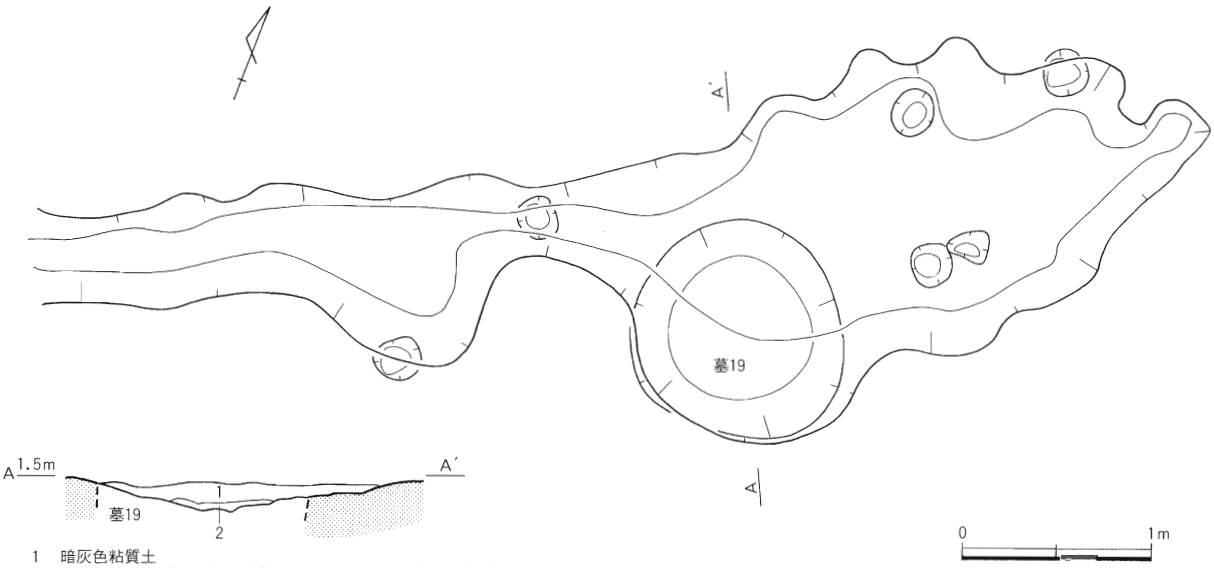
第 83 図　柱列16（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第 84 図　柱列17～19（S＝ 1/80，柱穴S＝ 1/30）

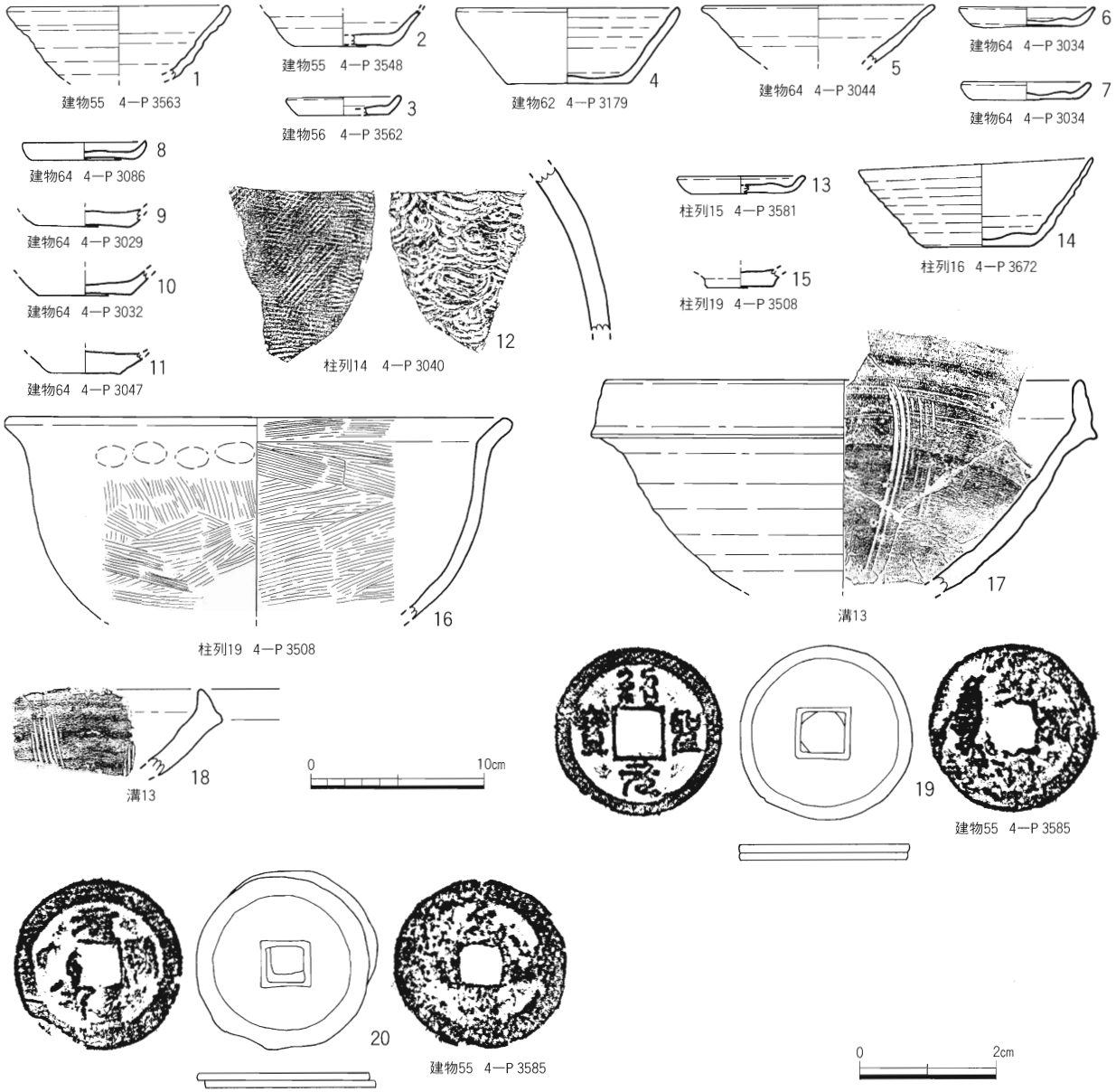


第 85 図　溝状遺構12，４—SK87・93（S＝ 1/40）



1　暗灰色粘質土
2　暗灰色砂質土（やや粗い砂混じる。下部は鉄分が沈殿し赤褐色をおびる）

第 86 図　溝状遺構13（S＝ 1/40）



第 87 図　４区西側建物跡・柱列・溝状遺構出土遺物（１～18：S＝ 1/4，19・20：S＝ 1/1）

北側は遺構がほとんど見られないことから、広場とその南側の調査区外に存在する遺構群を区画するための柵列ではないかと考えられる。

柱列17は、柱間が２間（3.10m）で、主軸方向はＮ－71°－Ｅである。

柱列18は、柱間が３間（6.52m）で、主軸方向はＮ－81°－Ｅである。

柱列19は、柱間が２間（4.66m）で、主軸方向はＮ－84°－Ｅである。４－Ｐ3508の柱抜取り痕の埋土上面では土師器鍋（87－16）や石がかたまって検出され、これらは柱抜き取り後の祭祀などに伴うものの可能性がある。16は12世紀頃のもので、柱列19はこの時期の遺構と推測される。

溝状遺構12，４－SK87・93（第85図）

溝状遺構12は、溝状遺構11から西へ約３ｍの延長線上に位置している。長さ2.3m、幅40㎝、深さ８㎝の直線的にのびる溝状遺構で、横断面形は浅い皿状になっている。

４－SK87は溝状遺構12の北西にあり、その西に連続するかたちで４－SK93が造られている。両者とも、掘り方内部にピット列をもつ布掘状の遺構で、柵もしくは塀の跡と考えられる。

溝状遺構13（第86・87図）

建物跡47・49、墓19と重複する箇所に位置しており、切り合い関係からこれらの遺構より後出するものと考えられる。長さ6.2m、幅は最大で1.7mの不整形な溝状遺構で、西側で途切れるようなかたちになっている。覆土中から備前焼の擂鉢（87－17・18）が出土している。17はⅣＢ－３期、18はⅣＢ－１期に位置づけられる。

遺構の性格については不明であるが、その位置や形状から、建物群とその外部を区画した溝状遺構10～12などとは性格の異なるものであることは明らかである。出土遺物や他の遺構との切り合い関係から、この遺構は15世紀末～16世紀前葉頃のものと考えられる。

（４）墓

墓14（第88図）

建物跡59と溝状遺構10との間に位置する。長さ183cm、幅77cm、深さ21cmの長方形の墓壙をもつもので、棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙壁面付近で鉄釘（６～16）が出土していることから、墓壙内いっぱいに収まるかたちで木棺が埋置されたものと考えられる。

墓壙上部には長さ10～45cmの礫からなる集石が配されていた。礫の間から土師器皿（１～３）が破片状態で出土しており、これらは葬送儀礼において使用後、破砕されたものとみられる。

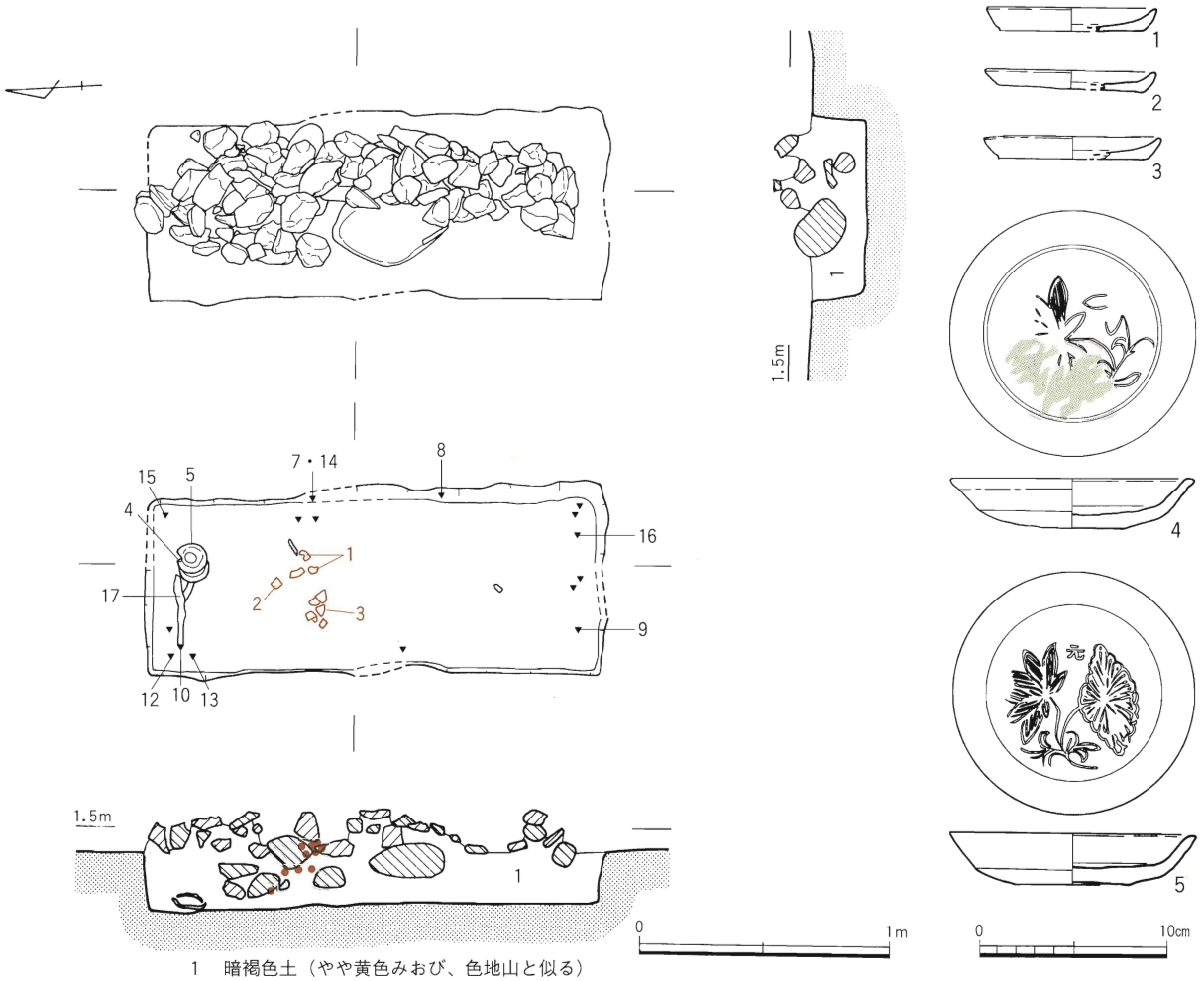
墓壙底面の北側で歯が検出され、北端には白磁皿２点（４・５）と短刀２本（17）が副葬されていた。白磁皿は、５が口縁部を上に向け、４がこれに蓋をするかたちで口縁部を下にして置かれていた。４・５はともに見込みに凹印の草花文が施されたもので、Ⅷ－２ｂ類である。５には「元」の印刻も見られる。４の見込みには灰褐色の付着物が認められる。17は２本の短刀が錆着したもので、１点は完存のもの（Ａ）で、もう１点は刃部が半分程度欠損しているが（Ｂ）、これと接合する破片は出土していないことから、副葬段階ですでに欠けていたと考えられる。Ａは、全長30.9cm、刃部長24.5cm、幅2.7cmのもので、木質の付着は見られない。Ｂは基部側に柄の部分と考えられる木質が残っており、糸を巻きつけた上に黒色塗料が塗装されていた。また、この糸で巻かれた部分にも一部かかるかたちで繊維状のものが付着しているが、その材質は特定されていない。

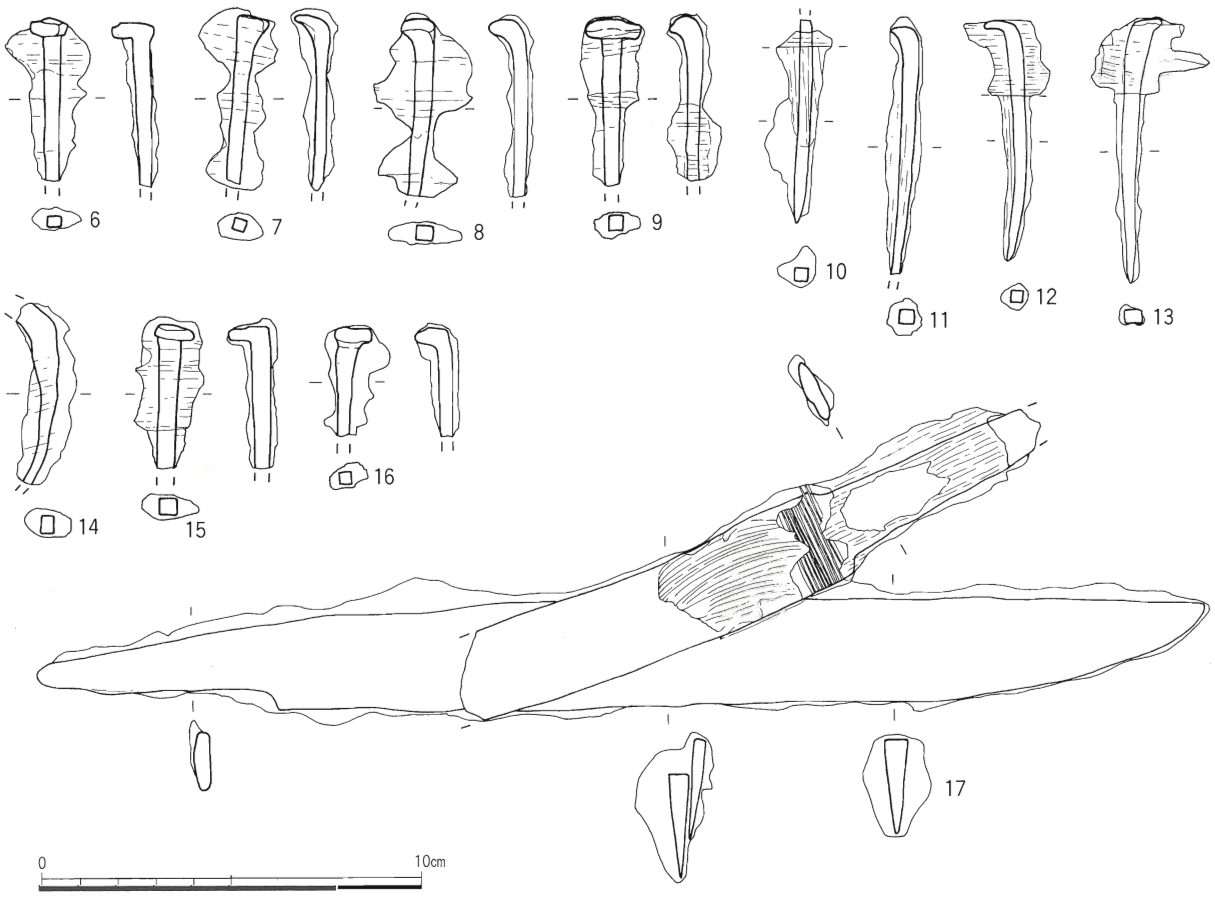
副葬された白磁皿から、この墓は12世紀中～後半頃の遺構と推定される。

墓15（第89図）

建物跡50の南西、柱列16の北に近接しており、建物跡51と重複する位置にある。長さ216cm、幅107cm、深さ21cmの墓壙をもつもので、長さ194cm、幅64cmの木痕跡が検出された。墓壙や木棺の主軸方向は、Ｎ－44°－Ｅである。頭骨から右上腕骨、左右の大腿骨などは棺の中央部からやや北西よりで出土したが、左上腕骨とみられるものは棺の南東辺に近い位置で検出されており、通常の１体の埋葬と考えるには不自然な出土状況であった。①被葬者の左腕が切断されたかたちで埋葬されたものか、あるいは、②北西側の遺体を埋葬する際に、一旦埋葬されていた別の遺体を棺の南西側に合葬（再葬）したものか、２つの可能性が考えられる。人骨は、鑑定の結果、成人男性のものと考えられるが、保存状態が悪いため年齢は不明であり、１体の埋葬であるのか、２体の埋葬であるのかも判断できなかった。

副葬品として、遺体の頭部付近で青磁碗（１）・皿（２・３）と短刀（４）が、左上腕骨付近で短刀（５）が出土している。青磁は、１の外に２が置かれ、１の中に３が重ねられていた。１は龍





第 88 図　墓14（S＝ 1/30，遺物１～５：S＝ 1/4，６～17：S＝ 1/2）

泉窯系の碗Ⅰ－４ａ類で、内面には櫛刀によって縦方向の分割線が入れられ、その間に飛雲文が施されている。２・３は同安窯系皿で、内面には篦状工具や櫛状工具による文様が見られる。２は口縁部から底部まで釉のかかるⅠ－２ｂ類、３は体部上半にのみ施釉されたⅠ－１ｂ類である。１～３はそれぞれ底部外面に墨書が見られる。１は傘形の記号が、２には「*」形のものを２つ連ねたような記号が見られる。３には一筆書きの文字のようなものが記されていたが判読できず、花押の可能性もある。４は刃部の先端から半分程度が欠損しており、５は茎部が欠けているが、これと接合するようなものは出土しておらず、副葬された時点ですでに失われていたと考えられる。

副葬された青磁碗・皿から、この墓は12世紀中～後半頃のものと推定される。

墓16（第90図）

建物跡64の南側に位置し、この建物跡の柱穴、４－Ｐ3134を切って造られている。長さ105㎝、幅61㎝の楕円形の墓壙をもつもので、木棺痕跡は確認できなかった。墓壙の主軸方向はＮ－87°－Ｅで、建物跡64の南辺とほぼ平行する。墓壙の東端で歯が検出されたことから、東頭位の埋葬であることが明らかになった。歯は成人のものと推定されるが、性別・年齢は不明である。墓壙の南東隅では漆器と思われるものが出土したが、木質部分が腐朽したため漆膜しか残存していない。この漆膜の放射性炭素年代測定を行なったところ、610±40yrBP（暦年代AD1290～1420）という年代が得られた。この数値が正しいとすれば、おおよそ14世紀頃の遺構と推定される。

墓17（第90図）

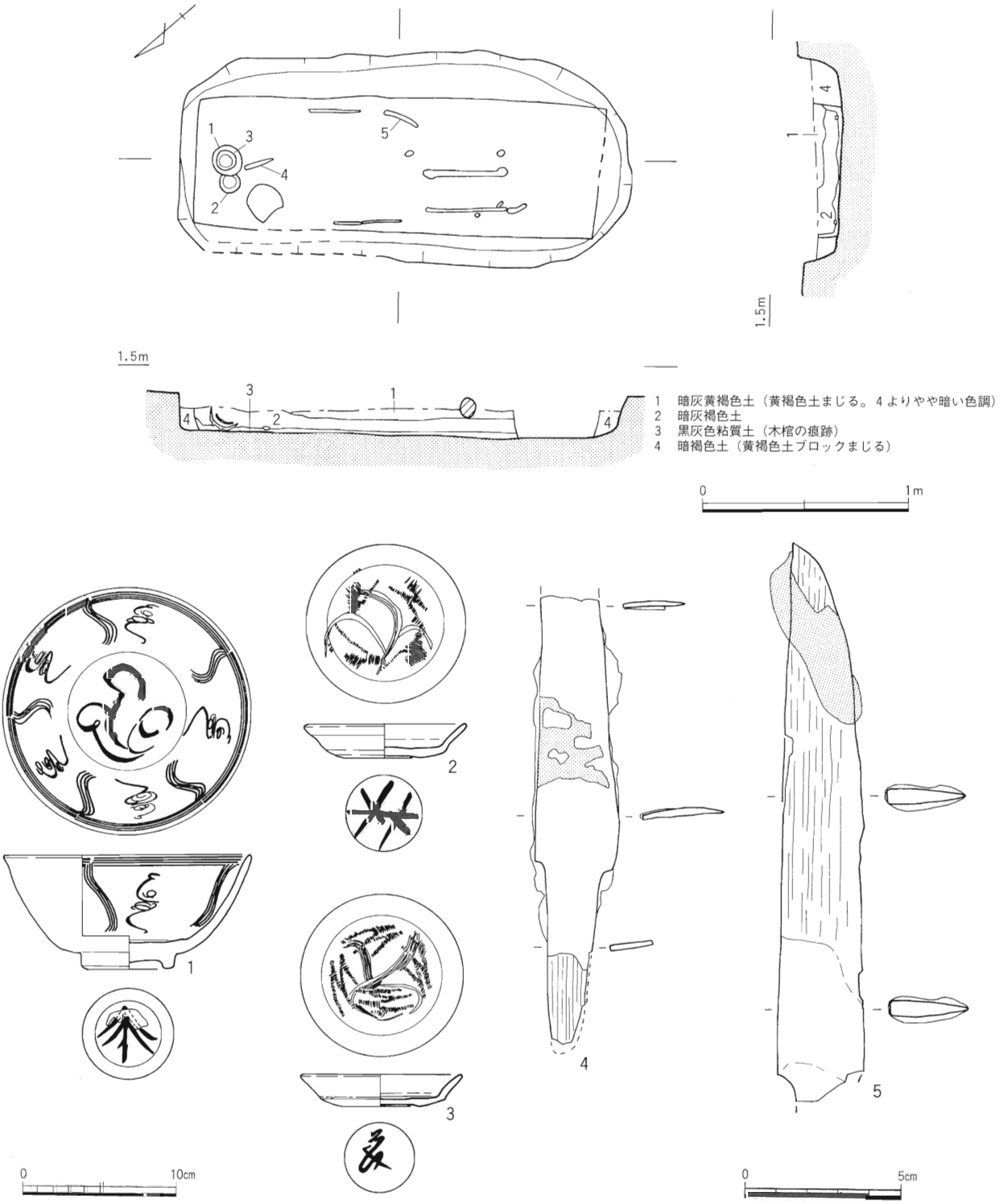
建物跡64の西辺の南側よりに近接している。長さ122㎝、幅71㎝、21㎝の墓壙をもつもので、長さ94㎝、幅47㎝の木棺の痕跡が確認された。主軸方向はＮ－９°－Ｗで、建物跡64の西辺とほぼ平行している。棺の北側で土壌化の進んだ人骨や歯、土師器坏（２）が出土しており、北頭位の埋葬であったことが分かる。被葬者は、歯から成人と考えられるが、年齢・性別は不明である。２は副葬品と推測されるものであるが、風化が著しく全体の器形を復元することができなかった。このほかの遺物には鉄釘（１）があり、棺に使用されたものと考えられる。

墓18（第90図）

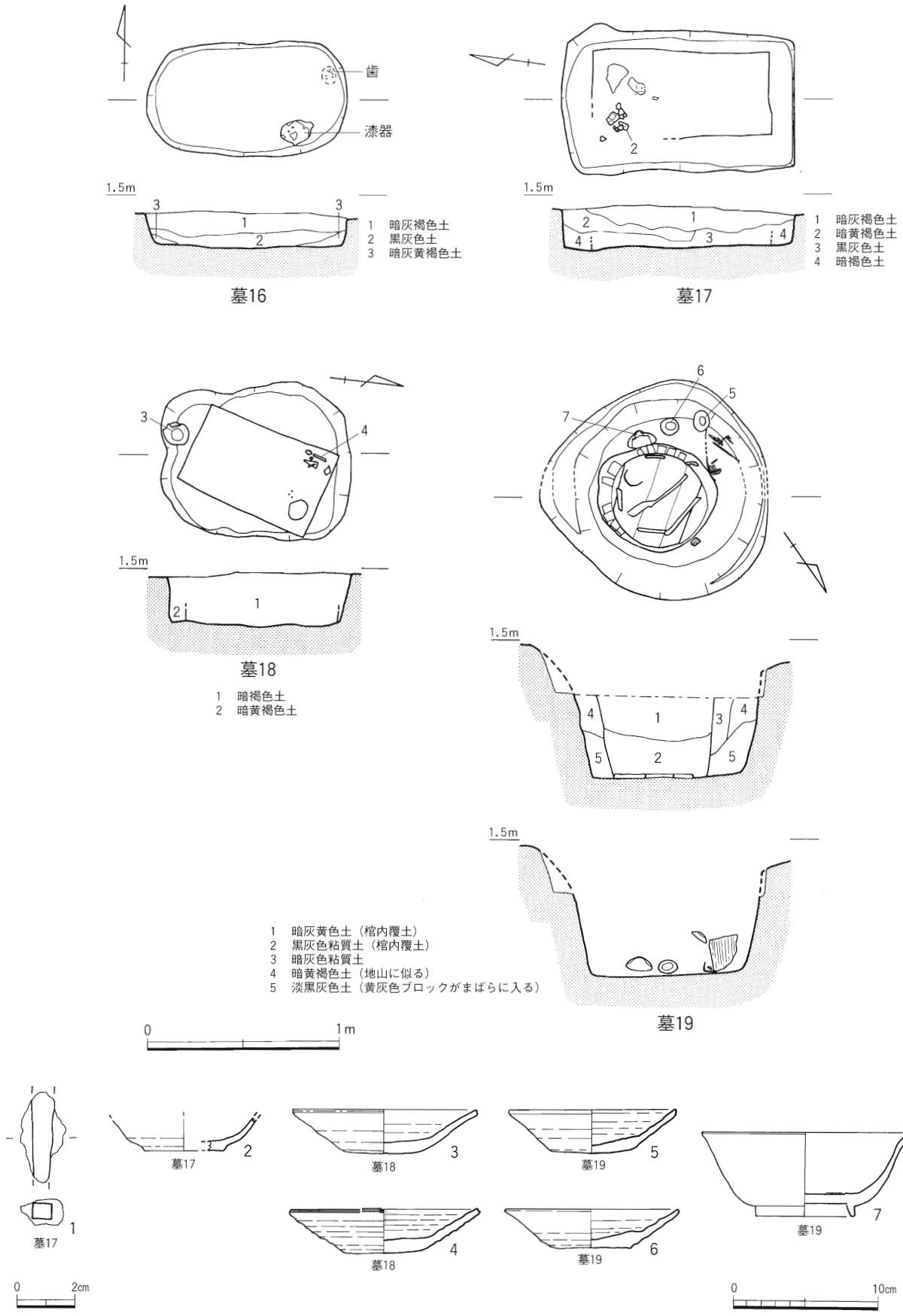
建物跡53から約3.5ｍ南に位置する。長さ98㎝、幅83㎝、深さ27㎝の墓壙をもつもので、長さ74㎝、幅42㎝の木棺痕跡が確認された。墓壙の主軸方向がＮ－９°－Ｗであるのに対し、棺の主軸方向はＮ－14°－Ｅで、ずれがみられる。土壌化した頭骨や歯が棺の北端で出土しており、北頭位の埋葬であったことが分かる。被葬者は歯から、成人と考えられるが、年齢・性別は不明である。遺物は土師器皿（３・４）が出土しており、３は墓壙南側の埋土上部で、４は墓壙北側で底面から10㎝程度浮いたところで検出された。３・４はいずれも口径約13㎝、底径5.6㎝、器高3.1㎝で、口縁端部が面取りされたもので、16世紀前半のものと考えられる。

墓19（第90図）

建物跡47・49と重複し、溝状遺構13に切られている。長径116㎝、短径105㎝、深さ70㎝の円形の墓壙に、径49㎝の桶棺が埋置されていた。棺内から人骨が出土しており、埋葬姿勢は坐葬で、性別・年齢は不明である。棺外の南西では土師器皿（５・６）、漆器碗（７）、折敷、編物（笊か？）が出土したが、折敷と編物については遺存状態が極めて不良であり、取り上げができなかった。５・６は口径12㎝弱、底径5.6～5.8㎝、器高３㎝前後で、５は口縁端部が面取りされていた。これらは15世紀末～16世紀前葉のものと考えられる。



第89図　墓15（S＝ 1/30，遺物１～３：S＝ 1/4，４・５：S＝ 1/2）



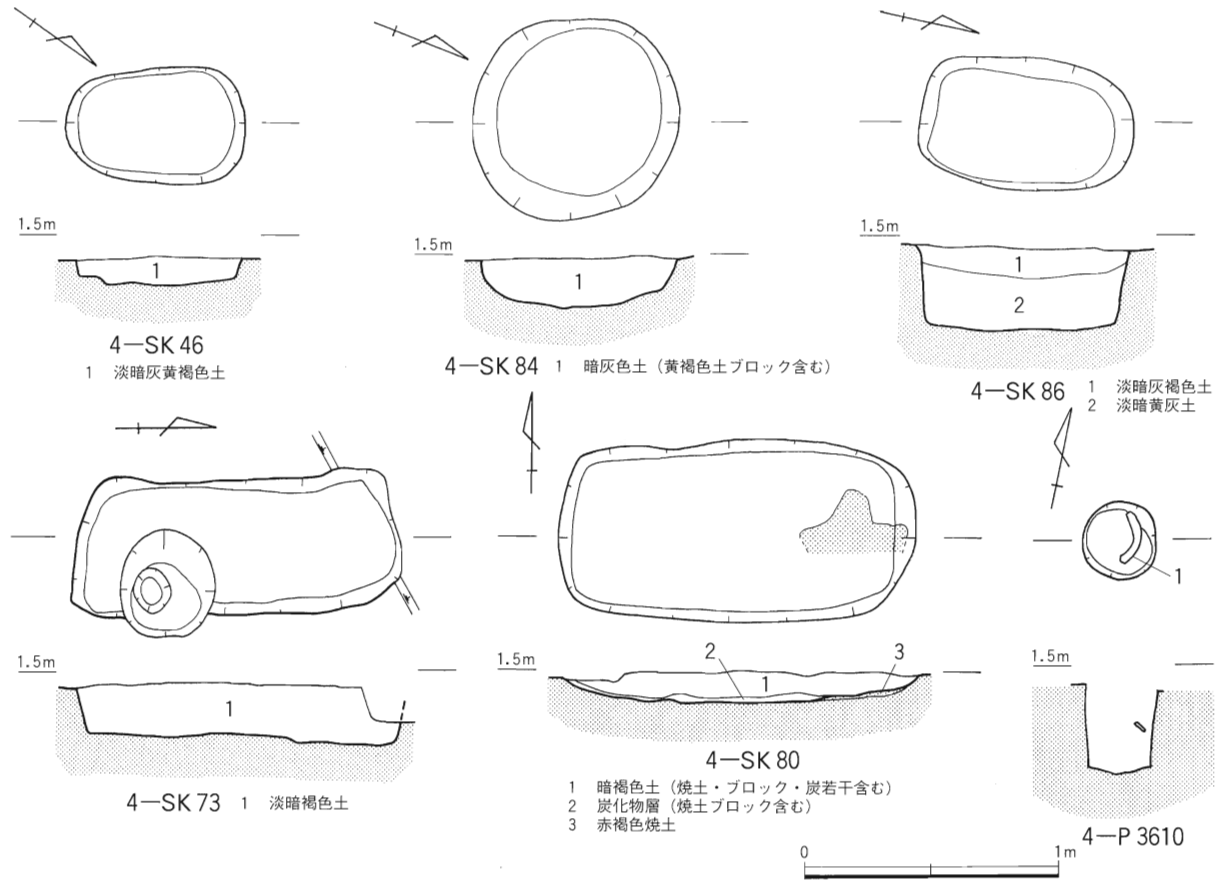
第 90 図　墓17～19（S＝ 1/30，遺物１：S＝ 1/2，２～７：S＝ 1/4）

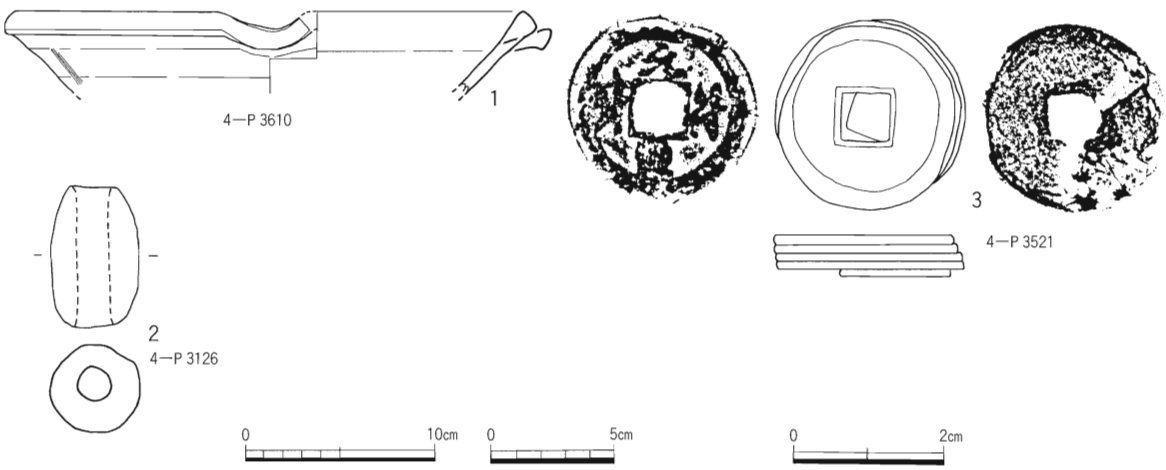
（５）土坑・柱穴とそれに伴う遺物（第91図）

４－SK46・86は平面形が隅円長方形、４－SK84は円形、４－SK73は長方形の土坑で、これらの壁面の立ち上がりは垂直に近い。４－SK73は、建物跡63の柱穴、４－Ｐ3114に切られている。

４－SK80は平面形が隅円長方形で、立ち上がりは緩やかである。覆土は焼土ブロックや炭を多く含み、底面直上には炭化物層が認められる。東側の底面では、赤褐色の焼土面が確認された。

４－Ｐ3610では覆土中から東播系須恵器鉢（１）が出土している。４－Ｐ3126では土錘（２）が、４－Ｐ3521では５枚の銭貨が錆着したもの（３）が検出された。３の左側の拓本は元符通寶で、初鋳年は1098年である。





第 91 図　４区西側土坑・柱穴（S＝ 1/30，遺物１：S＝ 1/4，２：S＝ 1/3，３：S＝ 1/1）

３　４区東側の遺構とその伴出遺物

（１）遺構の分布状況（第92図）

４区東側では、建物跡12棟、柱列４条、溝状遺構４条、石列４条、墓19基が検出、復元できた。

前述したように４区中央部では遺構空白域となっているが、22Ｆ・Ｇ・Ｈ グリッド以東では多くの遺構が存在している。特にこの遺構群の東西両端部で遺構が密集し、中央部は比較的に散漫な分布となっている。この遺構群の東西を横切るかたちで溝状遺構14・15が走っており、これによって遺構群は南北に分けられている。

なお、４区東端付近では旧河道が通っていたため標高が低くなっており（最も低い箇所で0.8m）、この部分には遺構は存在しない。

（２）建物跡・柱列

建物跡65（第93図）

４区東側遺構群の北東部で、溝状遺構14から約8.5m北に位置する。１間（3.09m）×２間（3.98m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－67°－Ｅである。４－Ｐ2986の埋土中には石が入っていた。

建物跡66（第93・100図）

建物跡65の南側で、溝状遺構14から約５m北に位置しており、建物跡67と重複する。１間（2.06m）×２間（4.51m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－73°－Ｅである。４－Ｐ2574には現存径15cm前後の柱根が残存しており、埋土の上部から石臼の破片（100－１）が出土した。樹種鑑定の結果、柱根はクリ材であることが分かった。また、４－Ｐ2917では、埋土中に石が入っていたほか、鉄製のヤス（12）と無文銭（14）が出土している。

建物跡67（第93図）

溝状遺構14から約５m北に位置する。１間（2.18m）×２間（4.06m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－68°－Ｅである。４－Ｐ2592・2944には柱根が残存しており、樹種鑑定から４－Ｐ2592にはクスノキ科の材が用いられていることが分かった。

建物跡68（第94・100図）

建物跡66・67の東側で、溝状遺構14から約６m北に位置し、建物跡69と重複する。１間（3.94m）×２間（5.89m）の掘立柱建物跡として復元したが、北辺と南辺との間にある４－Ｐ2721・2701・2655などはこの建物跡に伴う柱穴かもしれない。主軸方向はＮ－20°－Ｗである。４－Ｐ2736から白磁皿（100－２）と鉄鎌（13）が出土している。２は皿Ｅ群で、15世紀後半～16世紀頃のものである。３は柄から刃部が一体に作られたもので、柄の端部が鉤状に曲げられている。

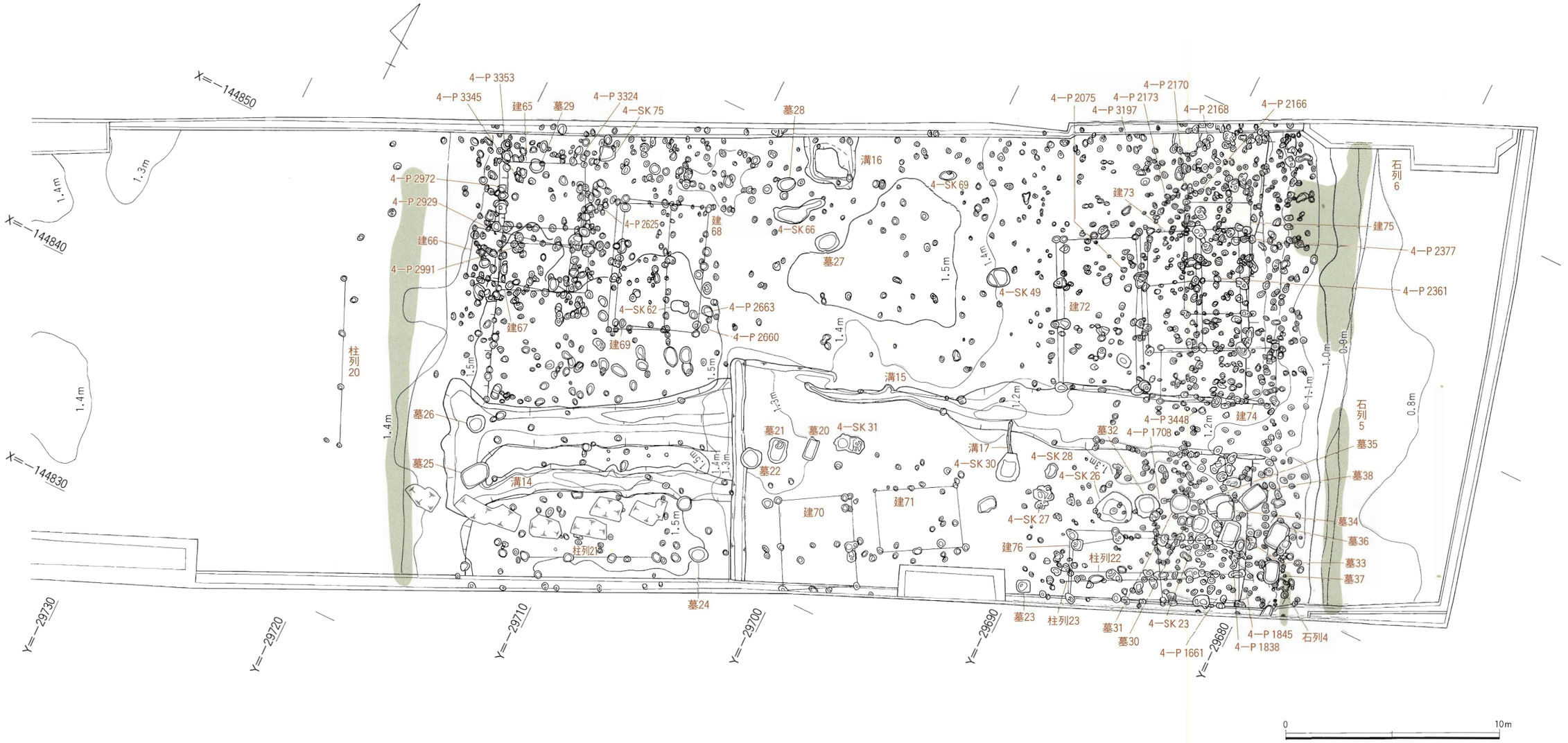
出土遺物から15世紀後半以降の建物跡と考えられる。

建物跡69（第94・100図）

溝状遺構14から約６m北に位置する。１間（2.57m）×２間（5.87m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－22°－Ｗである。４－Ｐ2692 には柱根が残存しており、鑑定の結果、マツ属複維管束亜属に同定された。４－Ｐ2654では容器状の石製品破片（100－３）が出土している。

柱列20（第94図）

４区東側遺構群の最も西側にある遺構で、４区中央部の窪地状の部分の東端付近に位置する。柱間は３間（7.90m）で、主軸方向はＮ－24°－Ｗである。



第 92 図　4 区東側遺構配置図（S＝ 1/200）

建物跡70（第95図）

４区東側遺構群の中央部南側で、溝状遺構15から約4.5m南に位置する。１間（3.4m）×２間（4.3m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－30°－Ｗである。

建物跡71（第95図）

建物跡70から1.2m東、溝状遺構15から約４m南に位置する。１間（3.02m）×２間（3.8m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－62°－Ｅである。

柱列21（第95図）

４区東側遺構群の南西側で、溝状遺構14から約３m南に位置する。柱間は３間（6.18m）で、主軸方向はＮ－64°－Ｅである。現状では１条の柱列と捉えているが、調査区外（南側）に対になる柱穴が存在し、建物跡となる可能性もある。

建物跡72（第96図）

４区東側遺構群の北東側に位置している。建物跡南辺の柱穴、４－Ｐ3413・3764は溝状遺構15と切り合っており、溝状遺構15の覆土を掘り上げた段階で検出された。このことから、この建物跡は溝状遺構15が埋没する以前のものと推測される。１間×３間の掘立柱建物跡で、柱穴はいずれも２穴以上が切りあっているものや、２穴が重複したかのような不整形なものであることから、建て替えが行なわれたものと考えられる。第96図は、４－Ｐ2084・2116・2024、４－SK51、４－Ｐ2004・2032・3764・3413からなる建物跡72Ａ（3.71m×7.21m、主軸方向Ｎ－26°－Ｗ）と、東側に柱穴をずらして建てられた建物跡72Ｂ（3.47m×7.03m、主軸方向Ｎ－28°－Ｗ）を想定したものである。ただし、現地調査時において柱穴の切り合いから前後関係を把握することはできなかったため、これとは異なる柱穴の組み合わせで建っていた可能性も考えられる。

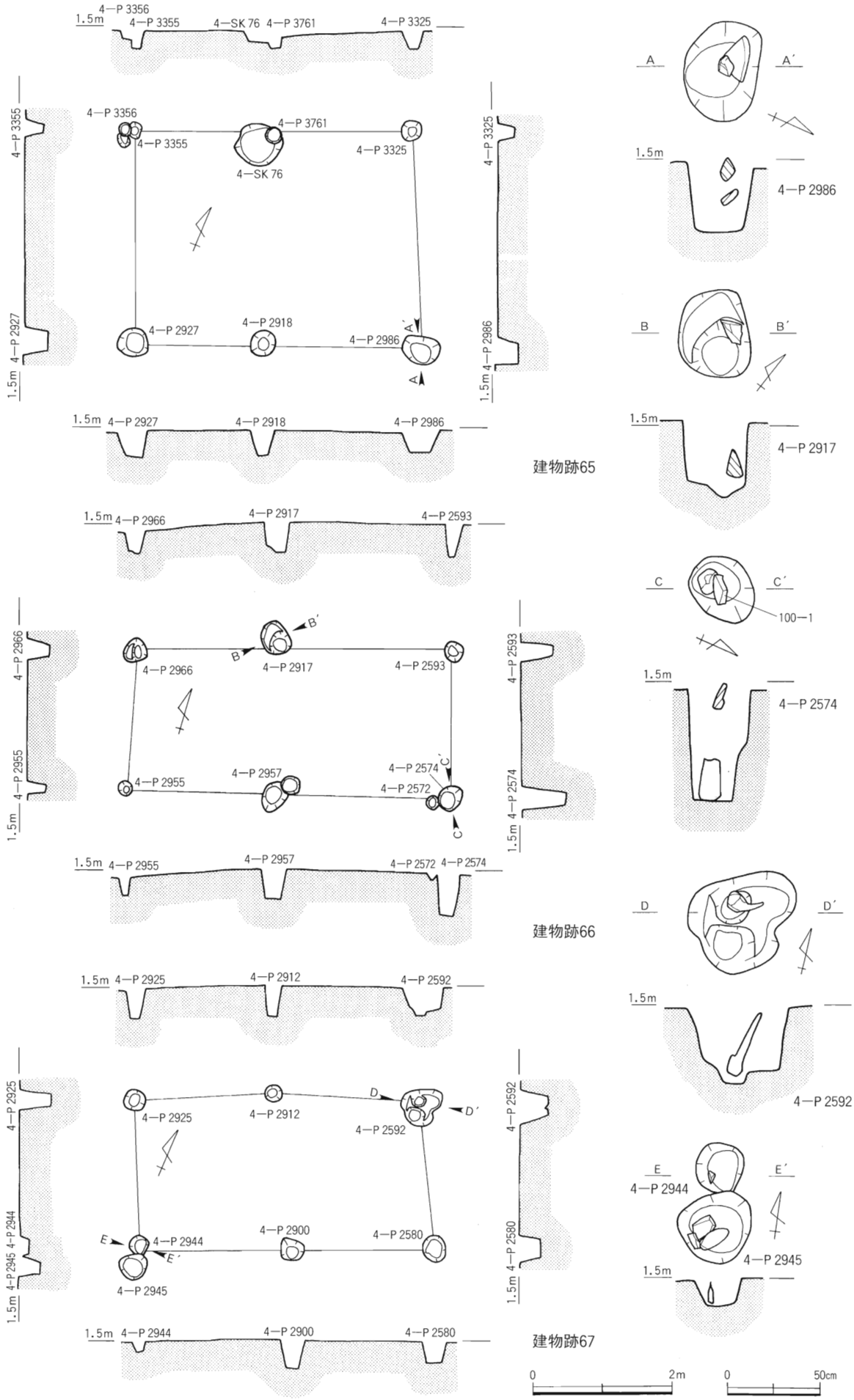
４－Ｐ2041には柱根が残存しており、４－Ｐ2083・2084・2003・3413、４－SK48の埋土中には石が入っていた。また、４－SK51では防長系瓦質土器の擂鉢（100－６）が、４－Ｐ2083では砥石（10）が出土した。

建物跡73（第97・100図）

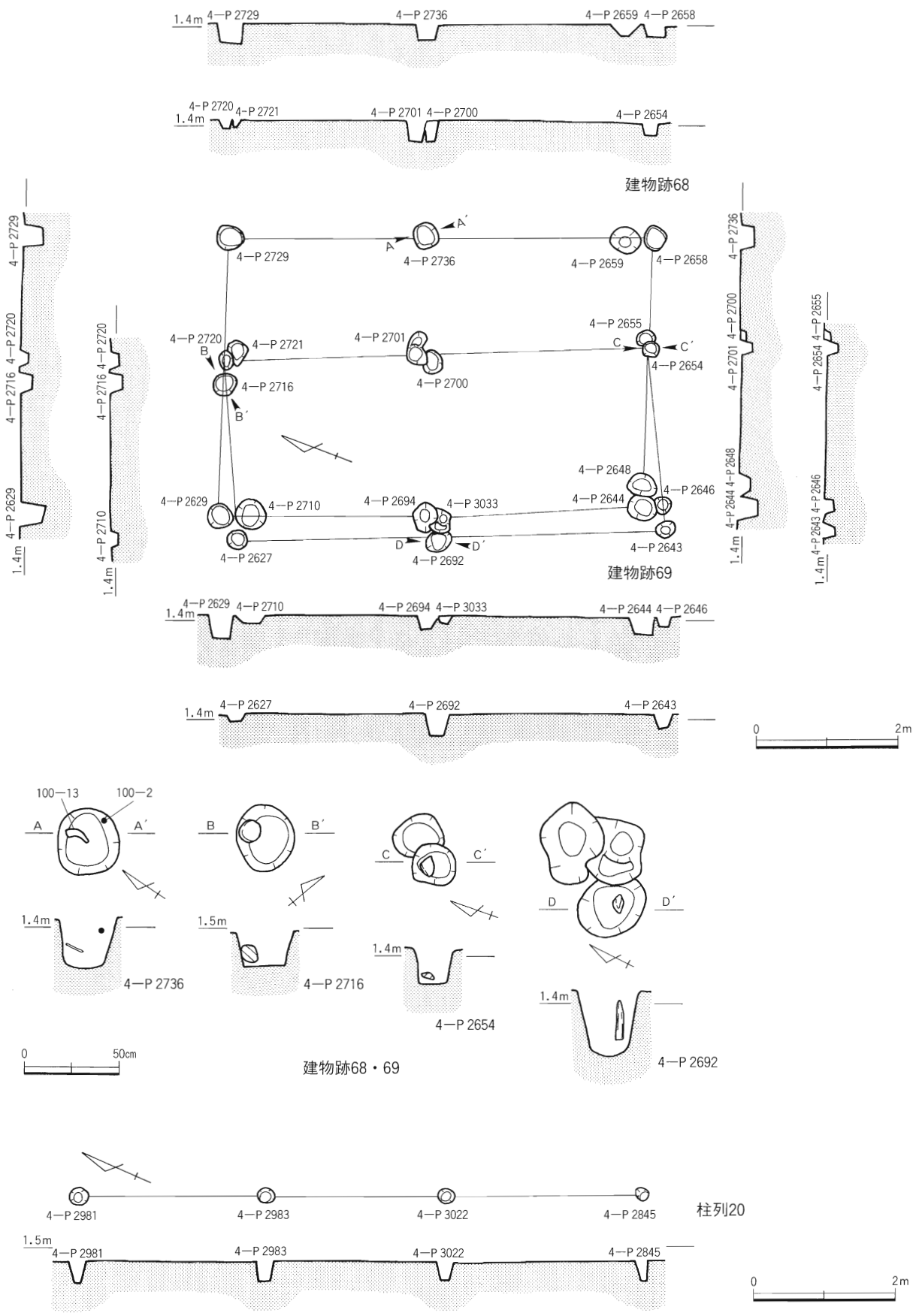
４区東側遺構群の北東側で、溝状遺構15から約２m北に位置し、建物跡74・75と重複している。また、４－Ｐ2529は、建物跡72の柱穴である４－SK51を切っている。

建物跡東側と中央の柱穴の並びは、いずれも２穴が切り合っているものや、２穴が重複しているかのような不整形なものであり、建て替えが行なわれたものと考えられる。第97図では、４－Ｐ2111、４－SK58、４－Ｐ2497・2529・2366・2413・1972・2021、４－SK55からなる２間（4.58m）×２間（5.68m）の建物跡73Ａ（主軸方向Ｎ－28°－Ｗ）と、４－SK58、４－Ｐ2497・2363・2413・2020、４－SK55からなる１間（2.22m）×２間（5.36m）の建物跡73Ｂ（主軸方向Ｎ－26°－Ｗ）を想定したものである。柱穴の前後関係を見ると、４－SK58の土層断面では、西側の柱穴を切って東側の柱穴が掘られており、建物北東隅の柱穴もこれと同様に西側の４－Ｐ2478を東側の４－Ｐ2497が切っていたが、南辺中央の柱穴は、西側の４－Ｐ2021が東側の４－Ｐ2020を切るかたちとなっている。このことは上記の建物の復元と矛盾するものであり、この復元とは異なるかたちで建物が建っていたのか、検出時に柱穴の前後関係について認識を誤った可能性が考えられる。

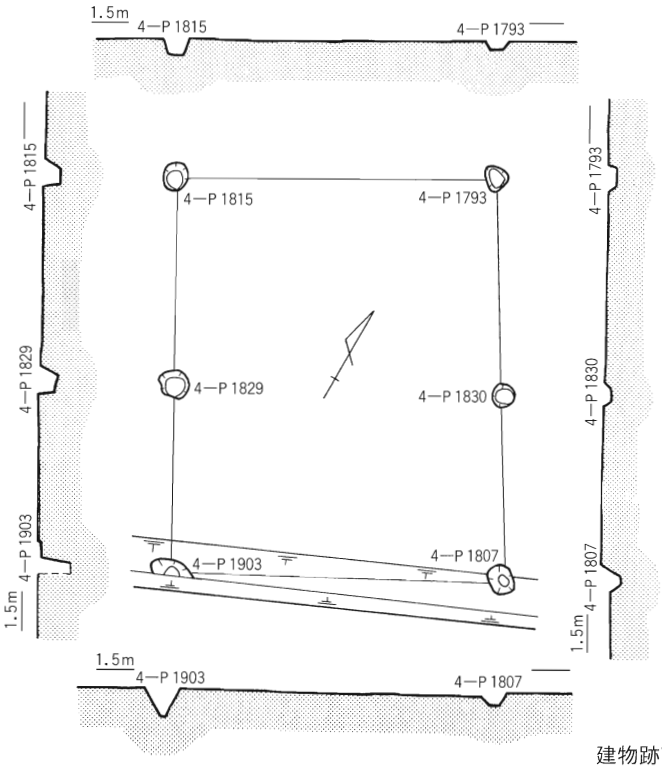
４－Ｐ2021には柱根が残存しており、樹種鑑定の結果、クリと同定された。また、４－Ｐ2021では朝鮮王朝陶磁の青磁皿（４）が、４－SK58では土師器皿（100－５）が、４－Ｐ2366では砥石



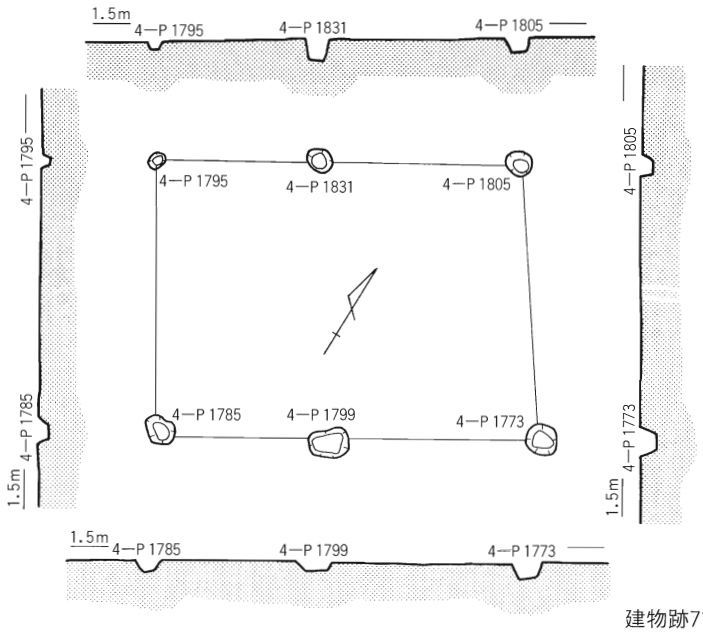
第 93 図　建物跡65～67（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



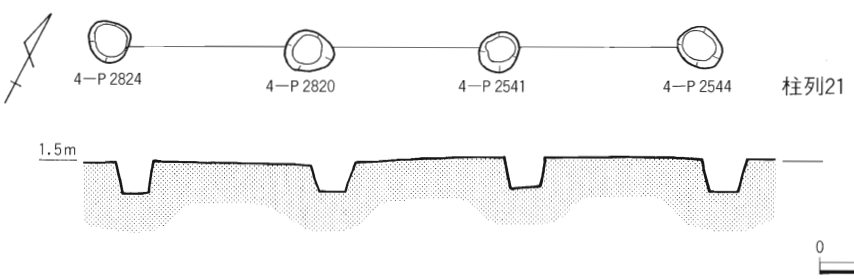
第 94 図　建物跡68・69、柱列20（S＝ 1/80、柱穴：S＝ 1/30）



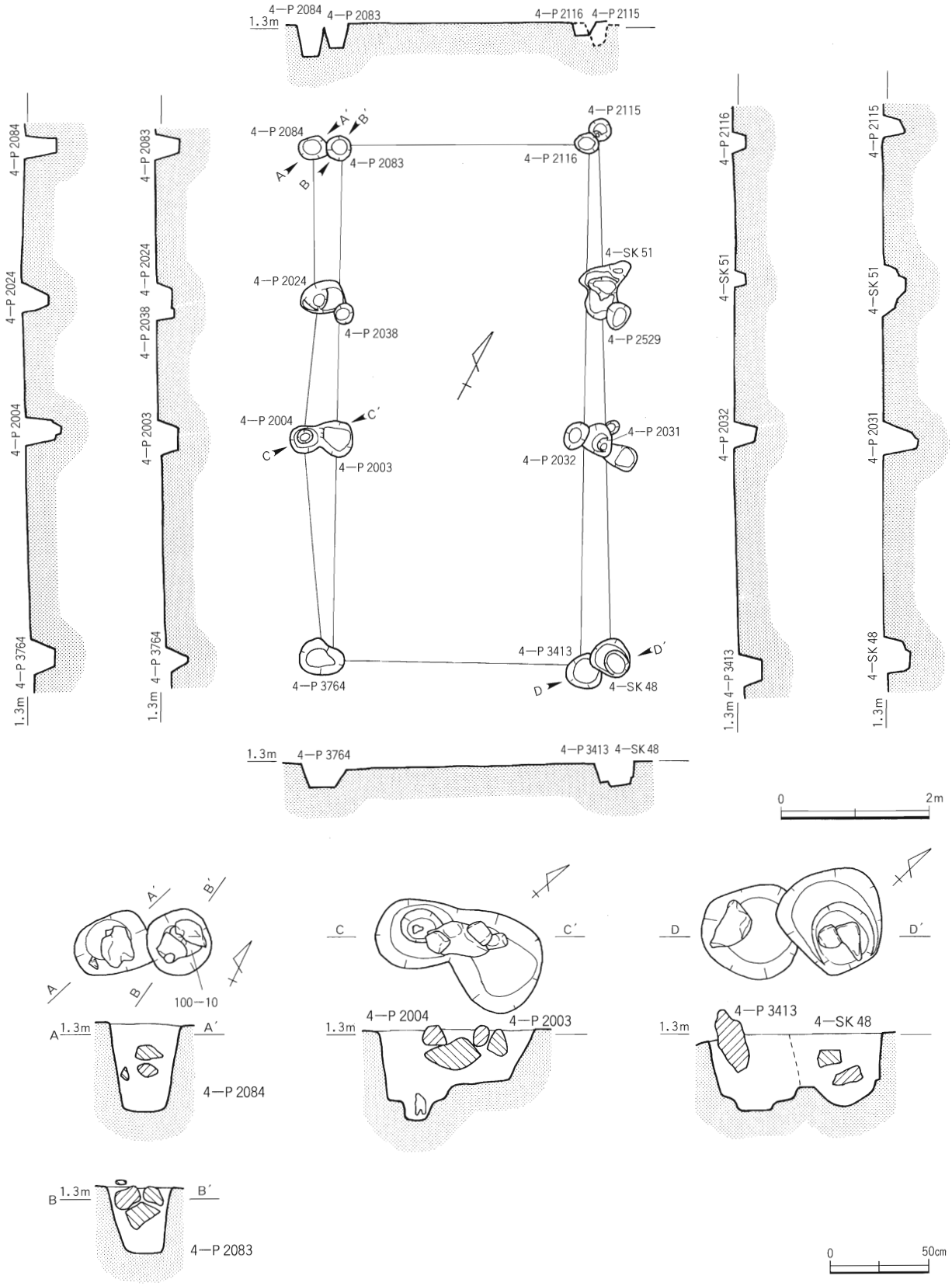
建物跡70



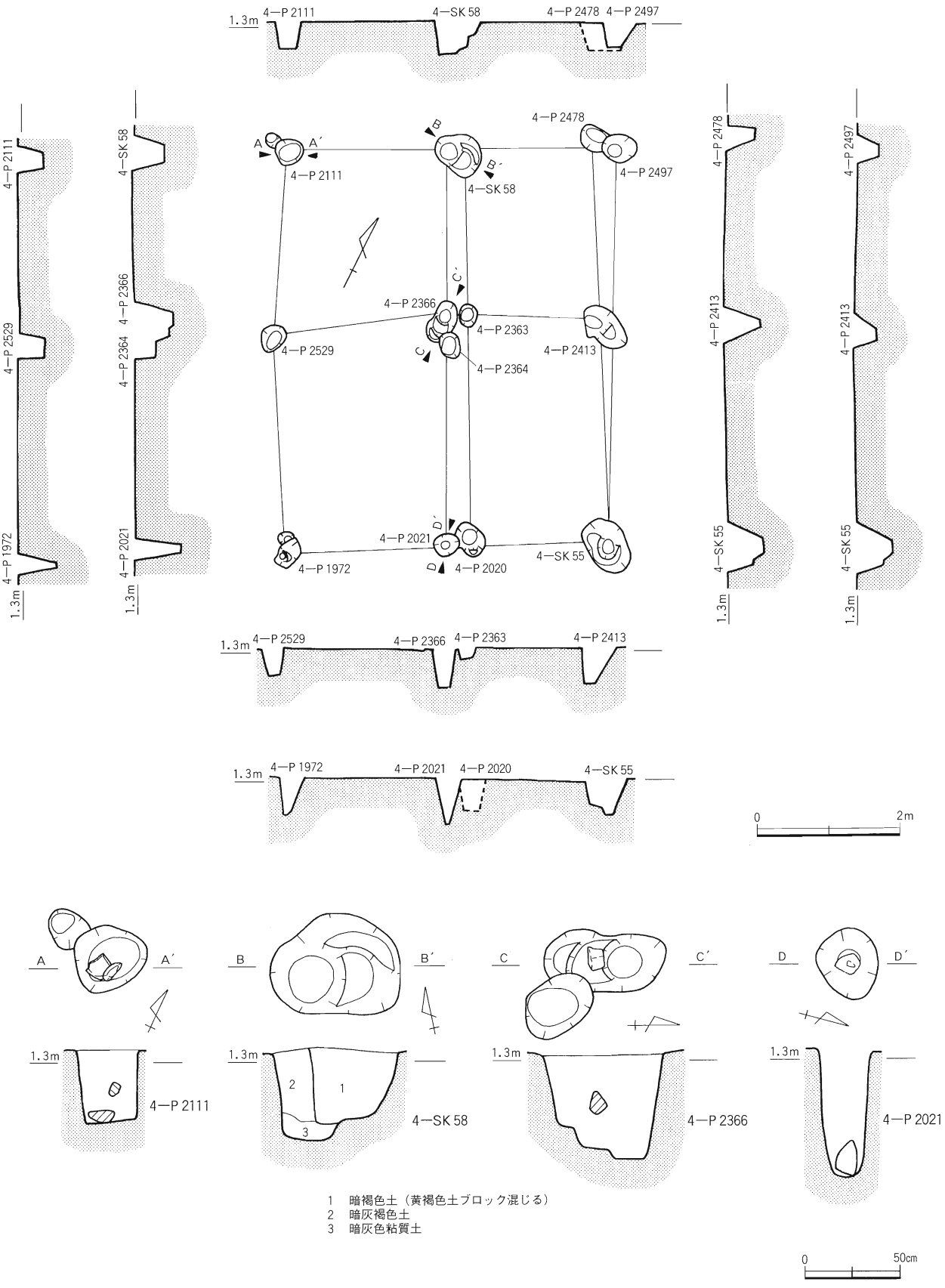
建物跡71



第 95 図　建物跡70・71，柱列21（S＝ 1/80）



第 96 図　建物跡72（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第 97 図　建物跡73（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）

(11) が出土した。４は、見込みに白土の象嵌による３条の圏線が施されている。

建物跡74（第98・100図）

４区東側遺構群の北東に位置する。南辺の柱穴である４－Ｐ3456・2308は溝状遺構15と切り合っており、溝状遺構15の覆土を掘り上げた段階で検出できたことから、この建物跡は溝状遺構15が埋没する以前の遺構と考えられる。１間（2.5m）×２間（5.36m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－64°－Ｅである。４－Ｐ2267では瓦質土器足鍋の破片（100－７）が出土している。

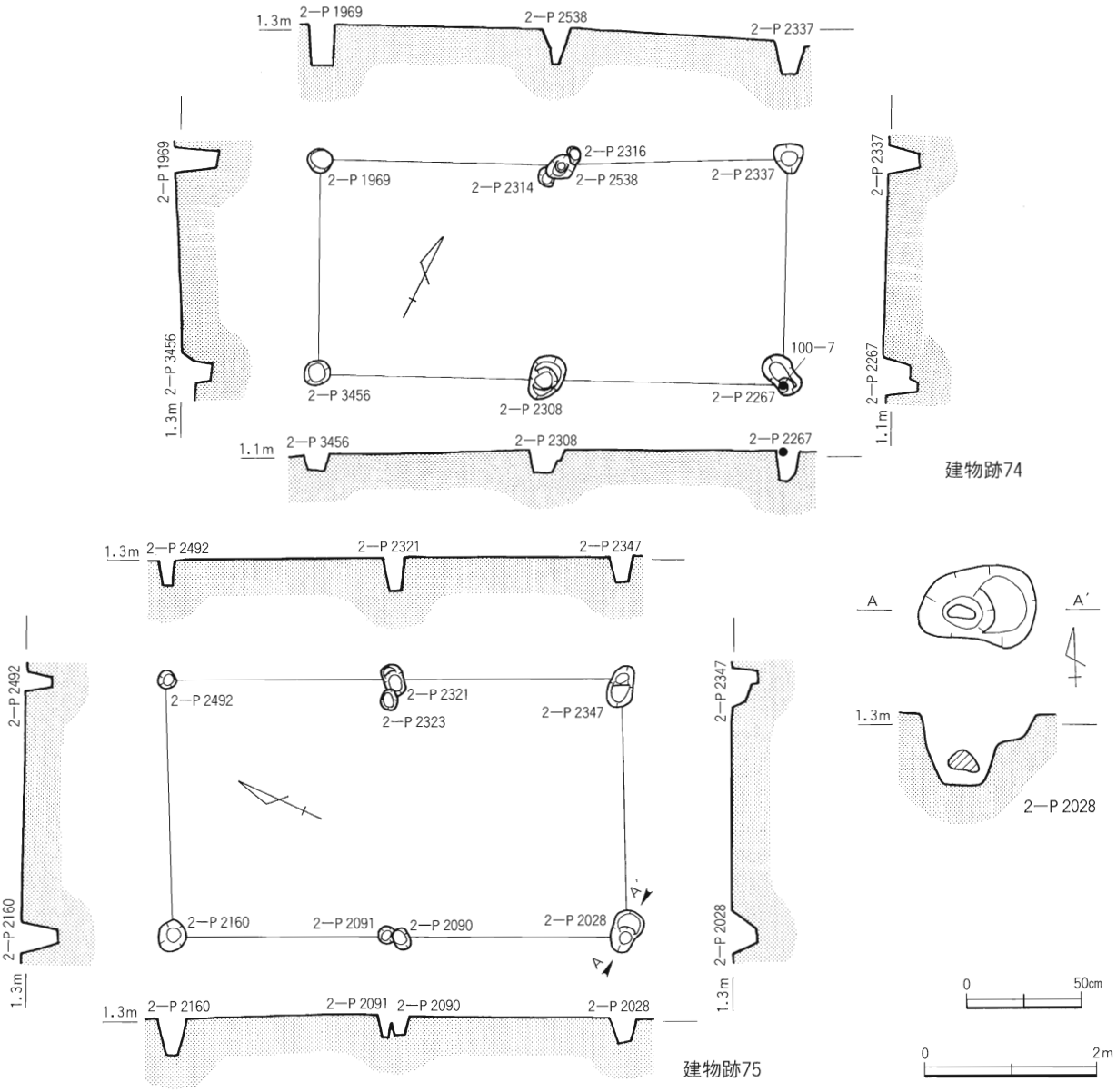
建物跡75（第98図）

４区東側遺構群の北東で、溝状遺構15から約４m北に位置する。１間（3.01m）×２間（5.25m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はＮ－24°－Ｗである。４－Ｐ2028の埋土中には石が入っていた。

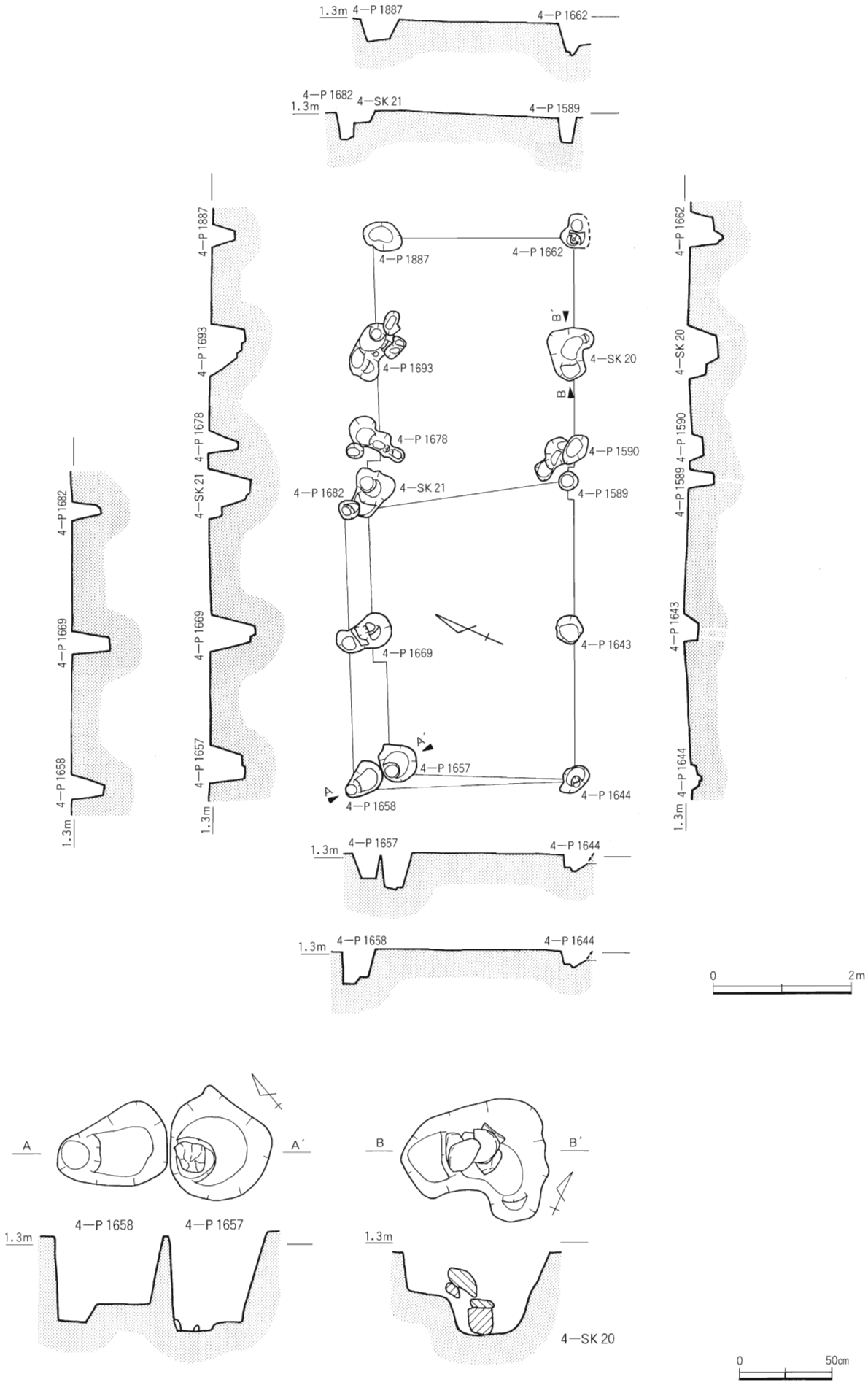
建物跡76（第99・100図）

４区東側遺構群の南西で、溝状遺構15から約４m南に位置し、柱列22・23と重複する。

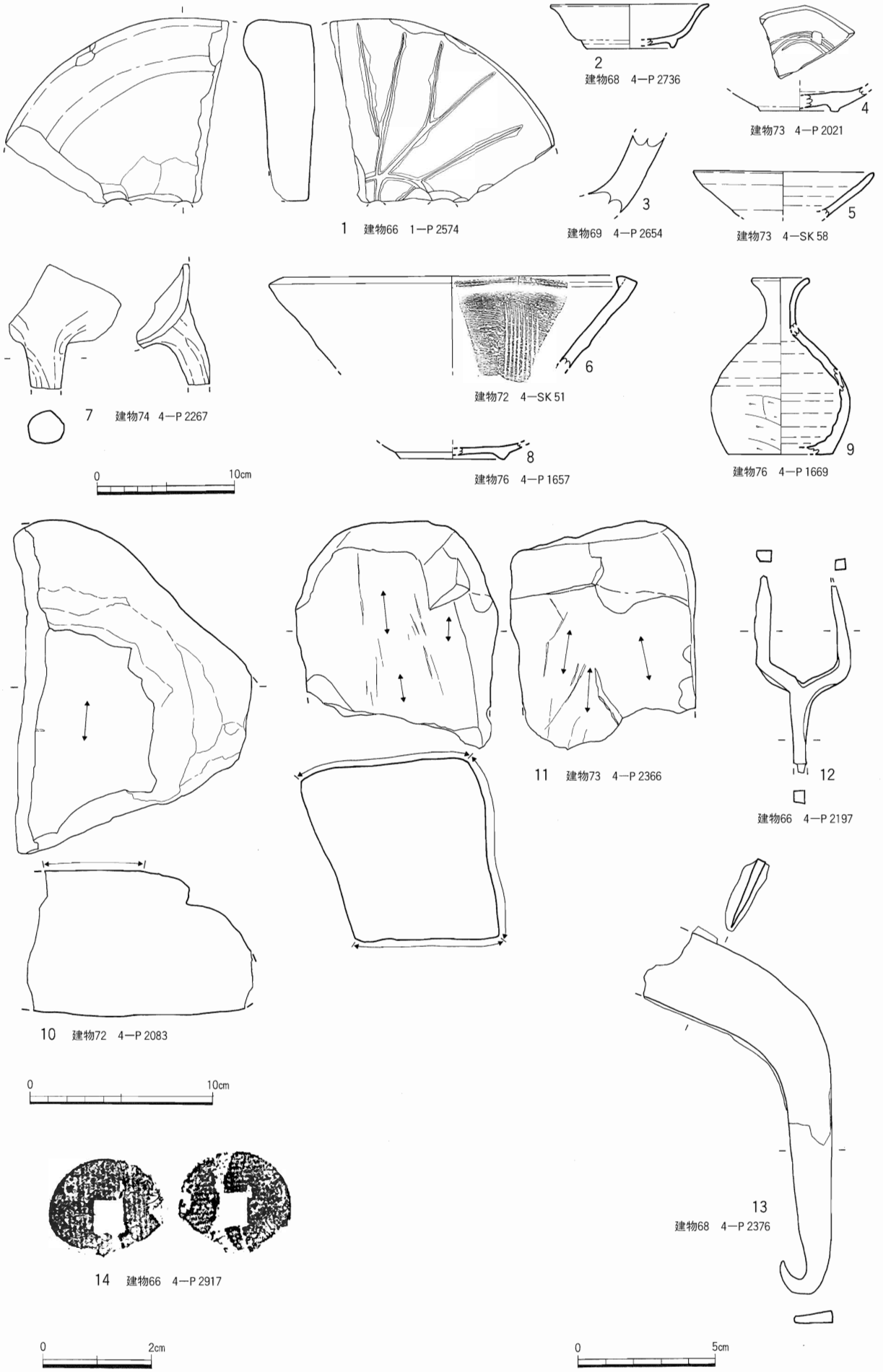
第99図では４－Ｐ1887・1693、４－SK21、４－Ｐ1669南側・1657・1662、４－SK20、４－Ｐ



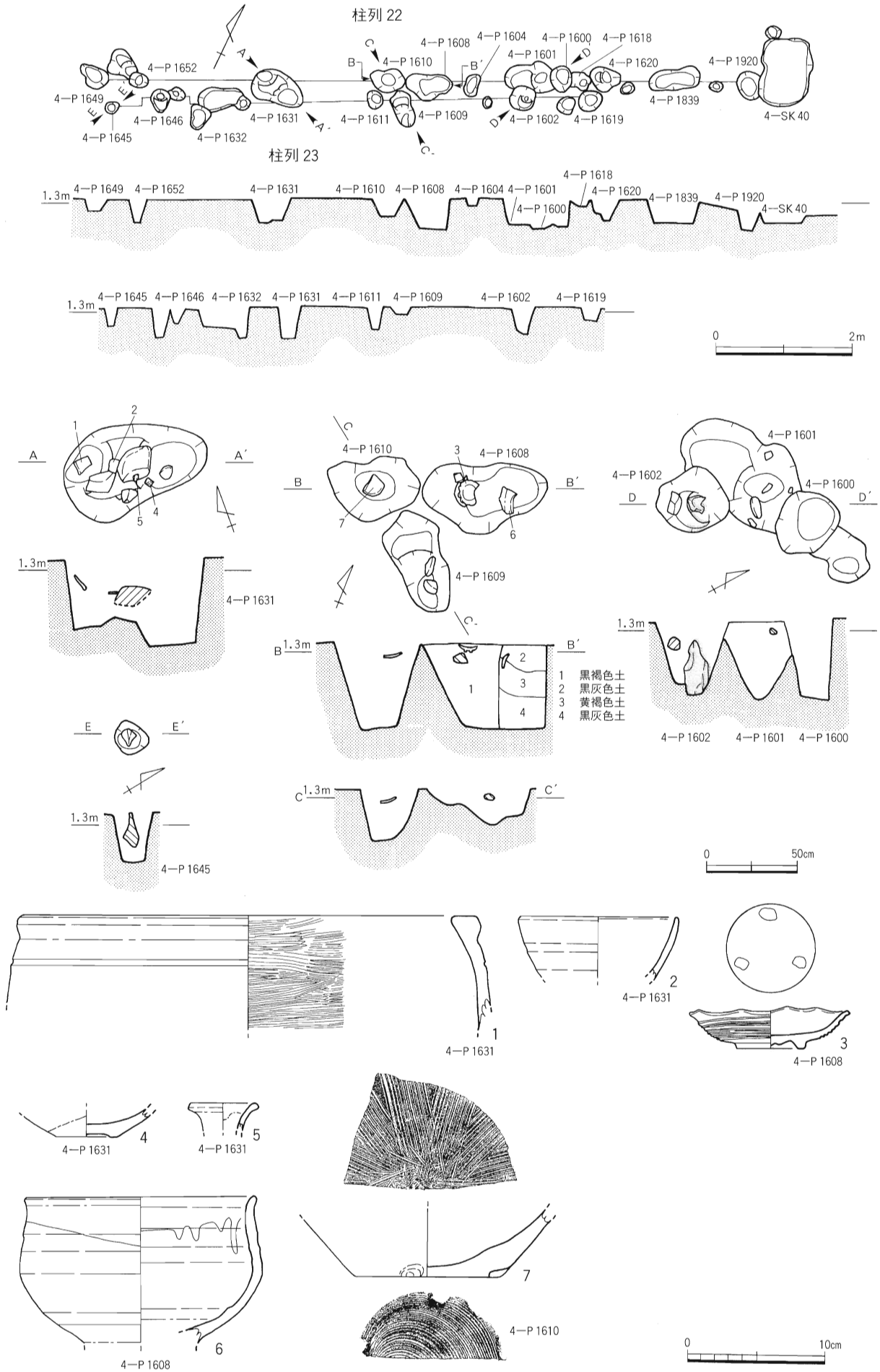
第 98 図　建物跡74・75（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第99図　建物跡76（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）



第100図　建物跡66・68・69・72～74・76出土遺物
（1～9：S＝ 1/4，10・11：S＝ 1/3，12・13：S＝ 1/2，14：S＝ 1/1）



第101図　柱列22・23（S＝ 1/80，柱穴：S＝ 1/30）

1589・1643・1644からなる１間（2.86m）×４間（7.79m）の建物跡76Ａ（主軸方向Ｎ－66°－Ｅ）と、４－Ｐ1682・1669北側・1658・1589・1643・1644からなる１間（3.30m）×２間（3.78m）の建物跡76Ｂ（主軸方向Ｎ－66°－Ｅ）を復元した。柱穴の中には、切り合いや重複しているものもあることから、建て替えが行なわれた可能性もある。

４－Ｐ1657には柱根が残っていた。また、４－SK20の底面及び埋土中で石が検出された。

遺物は、４－Ｐ1657から須恵器高台坏皿（100－８）が、４－Ｐ1669から備前焼の徳利（９）が出土した。

９はＶＢ期のもので、16世紀後半に位置づけられる。

柱列22・23（第101図）

柱列22は溝状遺構15から約5.5m南に位置し、さらにその0.3m南側に柱列23が存在する。

この周辺は柱穴が密集しているために復元に難はあるが、柱穴の規模・深さ、柱間距離をもとに、４－Ｐ1652・1631・1610・1601・1839の５穴からなる柱間４間（7.84m）の柱列22と、４－Ｐ1645・1632・1611・1602の４穴からなる柱間３間（6.04m）の柱列23を抽出した。主軸方向は、柱列22がＮ－65°－Ｅ、柱列23がＮ－64°－Ｅである。なお、これらは現状では柱列と捉えているが、柱穴の規模や深さからみて、調査区外にこれらに対応する柱穴が存在し、建物跡となる可能性が高いと考えられる。

柱列22の４－Ｐ1631では瓦質土器甕（１）や、肥前系陶器の碗（２）、皿（４）、瓶（５）が、４－Ｐ1610から肥前系陶器の擂鉢（７）が出土している。４は見込みに胎土目跡が残るもので、17世紀初頭に位置づけられ、２・５もこれとほぼ同時期のものと考えられる。

柱列23の４－Ｐ1608は、柱列22の４－Ｐ1601を切って掘り込まれたもので、このことから柱列23は柱列22よりも新しい遺構と判断される。柱根が残存しており、樹種鑑定の結果、材はクスノキ科と同定された。

４－Ｐ1608は柱列22と重複するところに位置にする柱穴で、埋土上部から肥前系陶器の皿（３）、鉢（６）が出土した。３は、口縁部が輪花で、体部に沈線が巡るもので、見込みには３か所に胎土目跡が見られる。４と同時期のものであることから、４－Ｐ1631と４－Ｐ1608とは同じ柱列（建物跡）に伴う柱穴であった可能性も考えられる。

（３）溝状遺構

溝状遺構14（第102図）

４区東側遺構群の西側に位置する。西端がヘアピン状に折れ曲がっており、東西方向にのびる溝が南北に並走するかたちになっている。北側の溝と南側の溝との間は幅１m程度の平坦面となっている。東側は水田の造成によって削平されたために、この遺構は途切れたかたちになっているが、北側の延長上には溝状遺構15が存在することから、本来はこれと連続していた可能性もある。溝の幅は、北側で1.9～3.4m、南側で1.2～1.7mで、深さは10～20cm程度である。横断面形は浅い皿状になっている。溝の底面や、溝の間の平坦面には硬化面は認められなかった。

遺物は、土師器坏（１）、瓦質土器鍋（２）、肥前系陶器の皿（３）、肥前系磁器の染付皿（４）、丸瓦（５）が覆土中から出土している。１は底部が厚く作られたもので、２は防長型のⅥＢ型式に分類される。４は内面に染付けによる花文が施されたもので、17世紀後半頃に位置づけられる。こ

れらから、この溝の最終時期は17世紀後半頃と考えられる。

溝状遺構15（第103図）

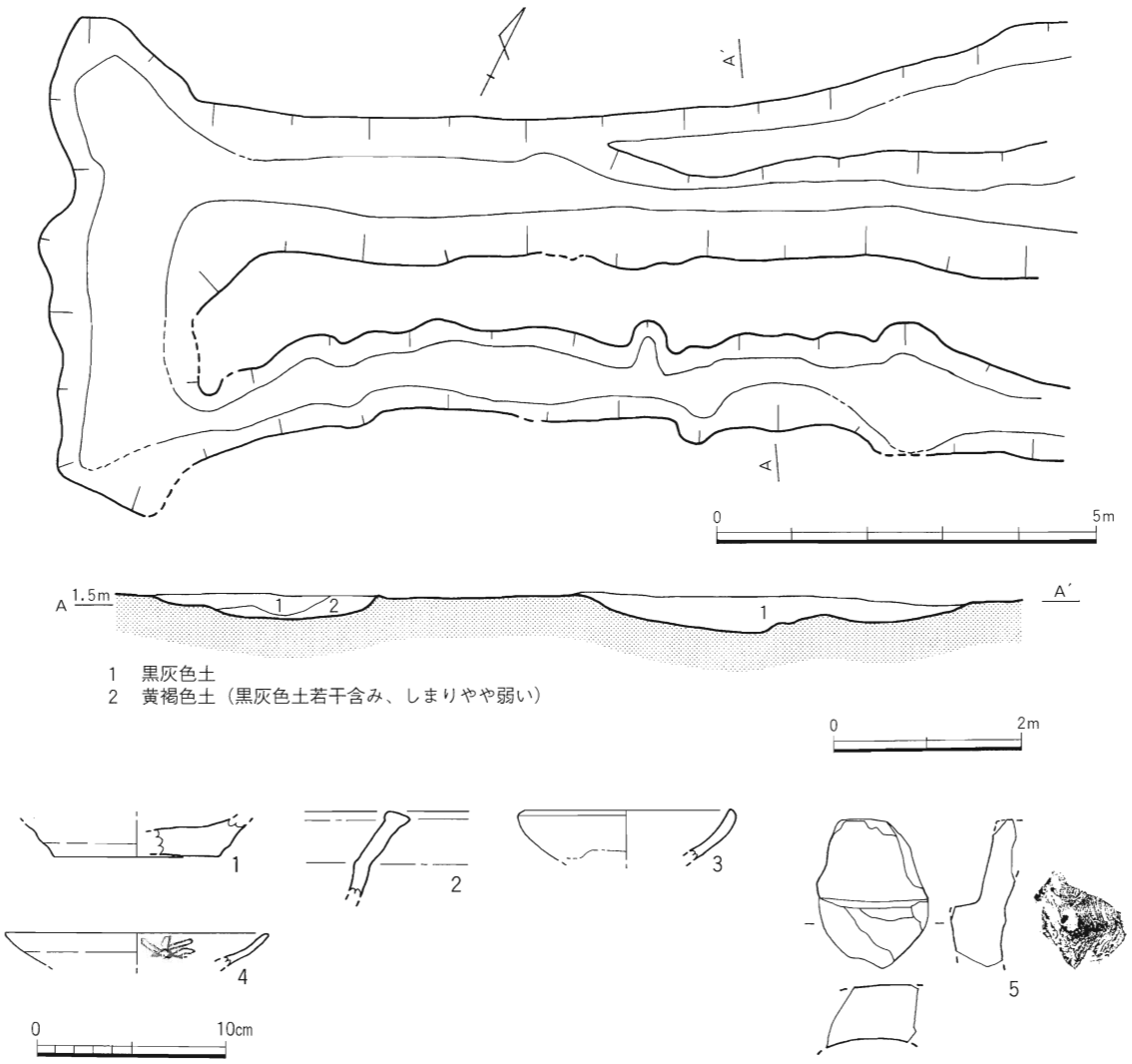
４区東側遺構群の中央部から東側にかけて、東西方向にのびる溝状遺構である。幅は、東側では2.7～3.1ｍの広さがあるのに対して、西側では50㎝程度と狭くなっている。これは、後世に４区東側遺構群の中央部南側が削平されたためと考えられる。深さは最も深い部分でも20㎝程度で、横断面形は浅い皿状になっている。

遺物は、瓦質土器（１）や近世の陶磁器（２～４）、朝鮮王朝陶磁（５）、瓦（６）などが覆土中から出土している。１は防長型の擂鉢で、口縁端部を内側に折り返して肥厚させている。３は肥前系磁器の染付碗で、17世紀後半～末のものと考えられる。４は肥前系磁器の染付皿で、畳付の部分の幅が広い蛇の目高台のものである。17世紀前半に位置づけられる。５は碗で白土の象嵌による界線や、白土と黒土を象嵌した同心円文が施されている。

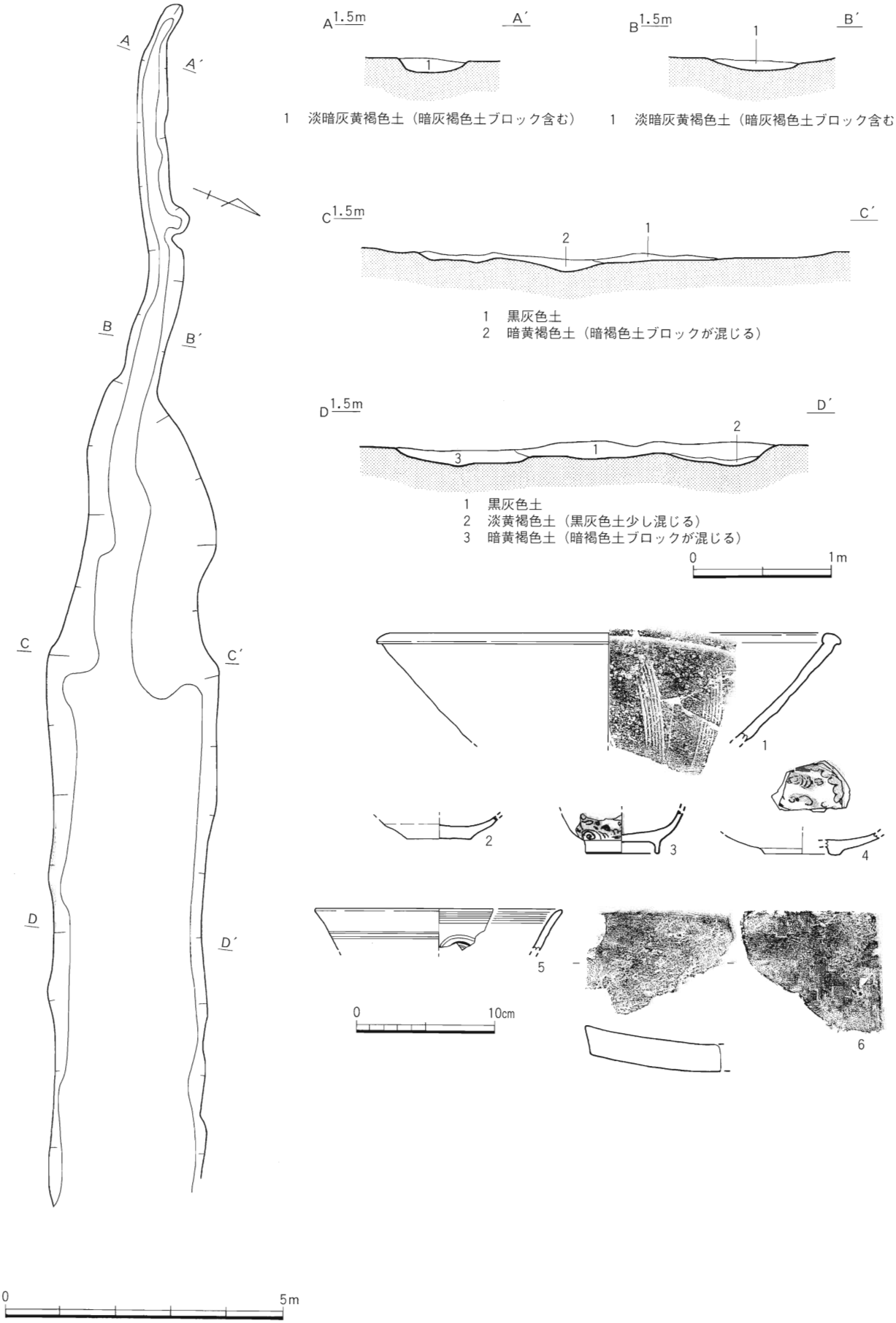
これらから、この遺構の最終時期は17世紀後半～末頃と考えられる。

溝状遺構16（第104図）

４区東側遺構群の中央部北側に位置する。外法で東西約2.4ｍ、南北2.4ｍ以上の不整方形の溝で、北側は調査区の排水用に設けた溝によって切られたため、本来の形が失われている。深さは最大で



第 102 図　溝状遺構14（S＝ 1/100，断面：S＝ 1/40，遺物：S＝ 1/4）



第 103 図　溝状遺構15（S＝ 1/100，断面：S＝ 1/40，建物：S＝ 1/4）

も６㎝と浅く、溝の掘り込みや立ち上がりは不明瞭である。溝の内側は東西1.8m、南北1.4mで、北東側はへこんだかたちになっているが、検出時に削りすぎたためかもしれない。遺構の性格は不明である。

（４）石列

石列３（第105図）

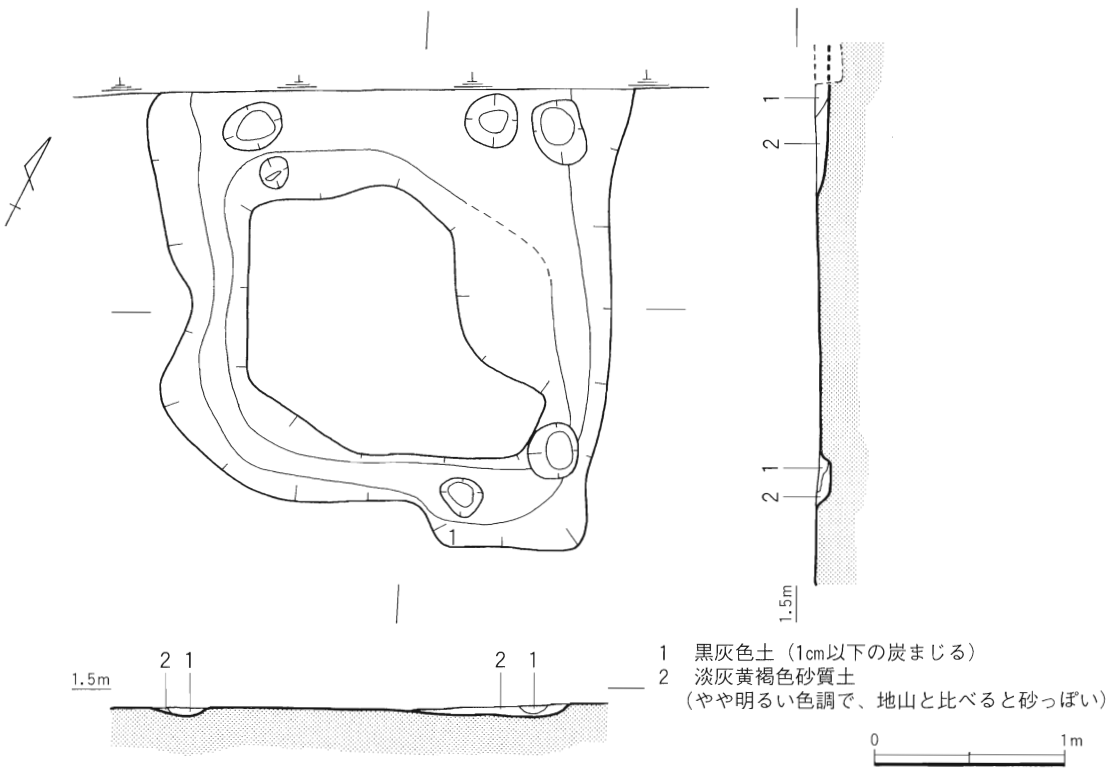
４区東側遺構群の西側で、４区中央部窪地の東側の下端に沿って握り拳大の礫が列状に分布していた。ただし、礫が確認できた範囲は部分的で、密度も散漫であり、意図的に石を並べようとした様子は窺われない。ただし、この周辺の土壌に礫が含まれていないことから、人為的に運ばれたものであることは確実である。なお、益田市教育委員会によって発掘調査された９区にも石列はのびており、こちらの方が礫の密度が高く、面的な広がりをもっていた。

石列４（第106図）

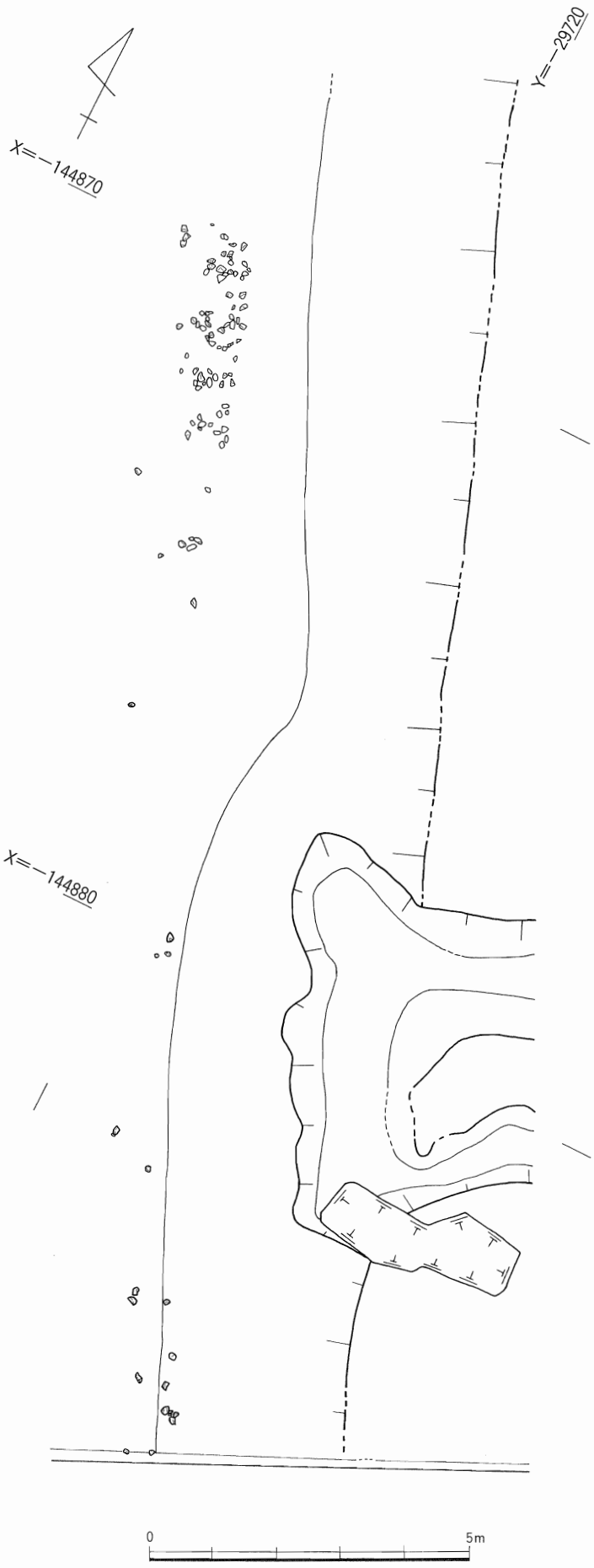
４区東側遺構群の東側で、旧河道の落ち込みの上端から1.5m東に位置する。調査区の南壁から北へ2.8mのびており、長さ20㎝前後の石が面をそろえるようにして並べられていた。石は地山から浮いた状態で検出され、墓37と重複していたことから、これより新しい遺構であることが分かる。

石列５・６（第106図）

４区東側遺構群の東側に位置し、旧河道の落ち込みの下端にほぼ沿って南北にのびている。調査区南壁から北へ向かって約10mの長さで石列５があり、そこから2.8mの間を空けて、石列６が北へ伸張しており、場所によって西は斜面の中ほどまで展開している。石は拳大のものから長さ30㎝を超えるものまであり、地山よりも浮いた高さで検出されている。石列５・６のどちらも石の並び方に規則性は見られず、意図的に並べられた様子を窺うことはできない。



第 104 図　溝状遺構16（S＝ 1/40）



第105図　４区石列３（S＝ 1/100）

これらの石列がどのような性格を持つものか不明であるが、この周辺の土壌には本来このような石は含まれておらず、人為的にもたらされたものであることは確実である。

（５）墓

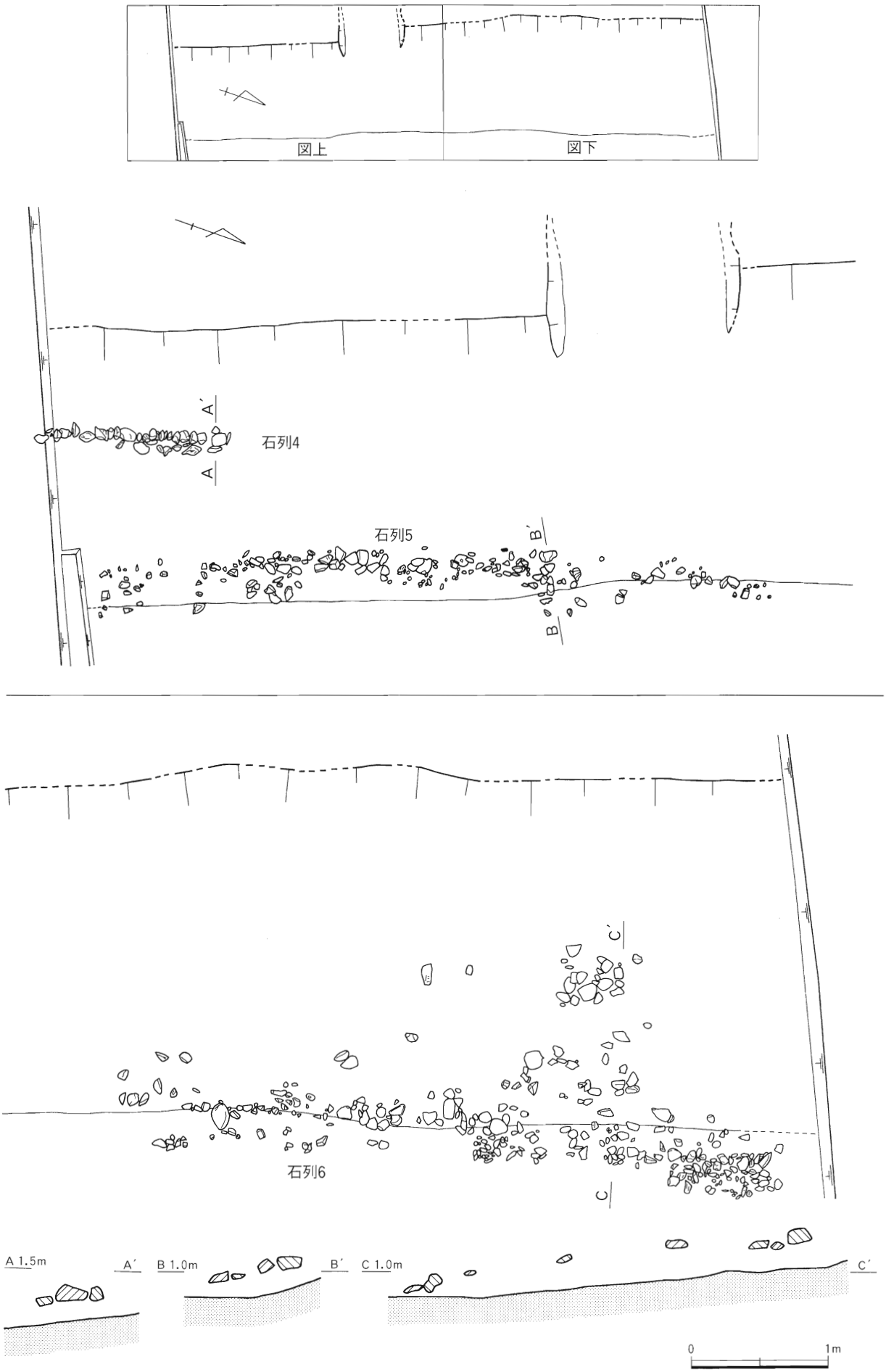
墓20（第107・108図）

４区東側遺構群中央部南側で、建物跡70から約２ｍ北に位置する。墓壙は長さ105㎝、幅49㎝、深さ15㎝の長方形のもので、主軸はＮ－６°－Ｗを向く。墓壙の底面直上に、棺の残片と思われる木質が見られ、また墓壙壁面に沿って鉄釘（108－３～６）が出土したことから、箱形の木棺が埋置されたと考えられる。墓壙の北端付近で歯が出土している。被葬者は成人と思われるが、年齢・性別は不明である。

墓21（第107・108図）

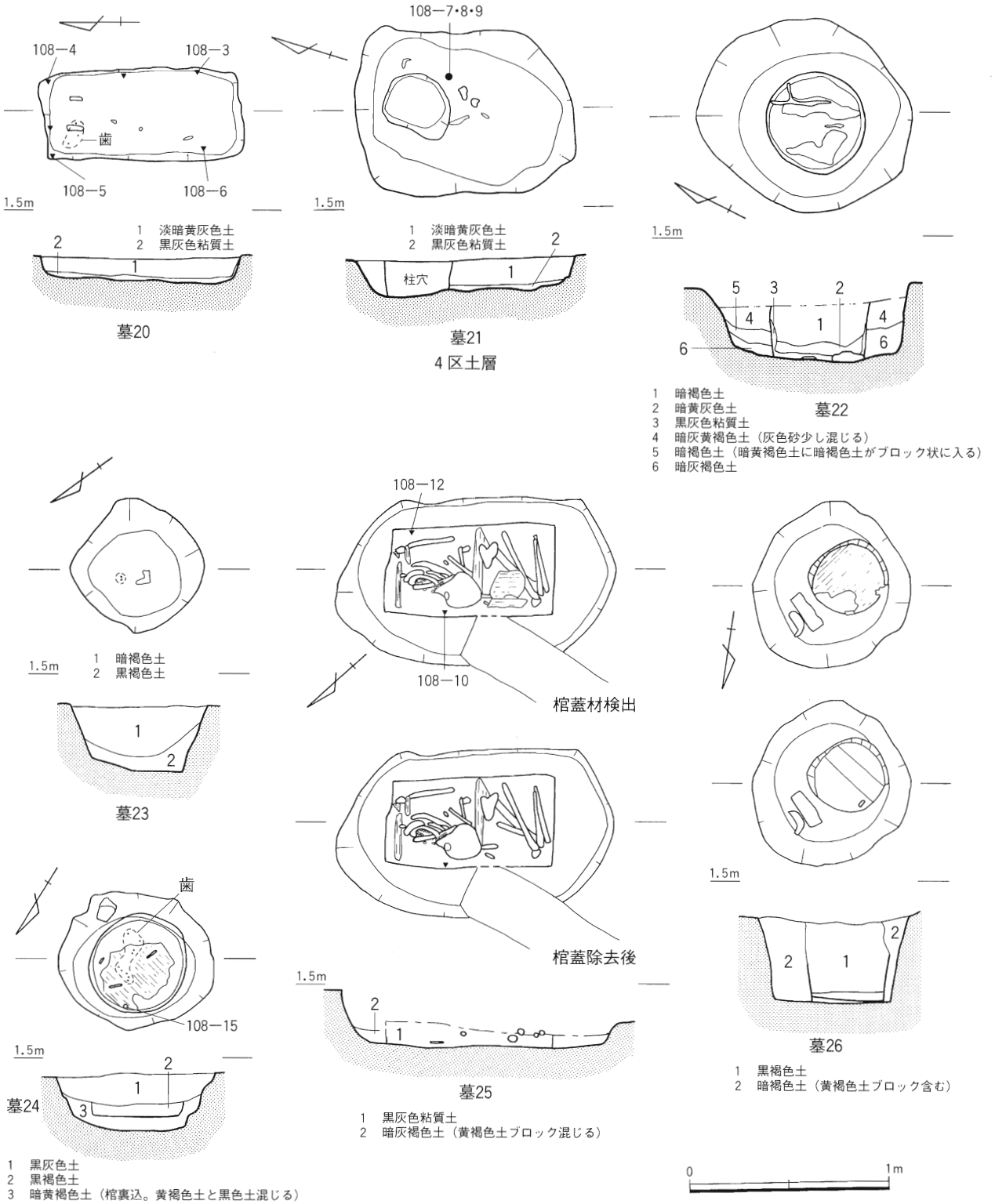
墓20の１ｍ西に位置する。長さ118㎝、幅84㎝、深さ20㎝の隅円長方形の墓壙をもち、主軸はＮ－15°－Ｗを向く。墓壙底面直上では、木棺残片と思われる木質や歯が確認された。墓壙の形状も踏まえると、箱形の木棺墓であったと考えられる。歯は成人のものと考えられるが、年齢・性別は不明である。

なお、墓壙埋土中で、墓壙底から15㎝の高さから鉄製品（108－７～９）が出土した。これらは本来同一個体であったと考えられるが、割れた状態で出土・取り上げをしたため、全体がどのような形状であったのか分らず、その用途や性格も不明である。７は箱状の木製品の内側に貼られたと考えられる板状のもので、図の左側では箱の側板を釘で留めていたことが分る。板状



第106図　石列４～６（S＝ 1/80，断面S＝ 1/40）

の部分には、毛抜き状の金具が、左右２箇所に取り付けられた鎹状の金具によって固定されている。８も箱状の木製品の内側に貼られたと考えられる板状のもので、他の部品がはめ込まれたものか円孔が穿たれている。また、箱の縁にあたる部分には丸い金具が付いている。９は把手もしくは吊手の輪状の金具が打ち付けられた板状のものである。



第107図　墓20～26（S＝ 1/30）

墓22（第107図）

墓21から0.5m西に位置する。長径108cm、短径93cmの円形の墓壙をもつものである。底面径46cmの円形の棺痕跡が検出され、側板もわずかに残存していたことから桶棺墓と確認された。棺の覆土上部から枝状の木材が検出され、棺底部では土壌化の進んだ人骨が出土した。人骨は左右の大腿骨がわずかに残存する程度であったが、棺の中央よりも北側で大腿骨骨頭が確認されたことから、埋葬姿勢は北側に背を向けた坐葬であったと考えられる。被葬者は成人と推測されるが、年齢・性別は不明である。

墓23（第107図）

４区東側遺構群の中央部南側で、溝状遺構15から約７m南、建物跡71から約３m東に位置する。長さ67cm、幅65cmの隅円方形の墓壙をもつもので、主軸方向はＮ－37°－Ｅである。墓壙底面付近で棺材の痕跡と思われる木質がわずかに残存していたが、棺の形態は不明である。歯が墓壙の中央部からやや北よりで出土しており、被葬者は５歳前後の幼児と推定されている。

墓24（第107・108図）

４区東側遺構群の東側で、溝状遺構14から約２m南、柱列21の東に位置する。長さ85cm、幅70cmの楕円形の墓壙をもち、底面径46cmの棺痕跡や底板の一部が確認された。桶棺もしくは曲物棺と推測されるが、側板が残存していないため不明である。歯と人骨がわずかに残存していたが、人骨は遺存状態が悪く、取り上げできなかった。歯から被葬者は成人と考えられるが、性別・年齢は不明である。副葬品として、棺の北側で無文銭（15～18）が６点出土している（このうち１点は遺存状態が悪く、掲載できなかった）。

墓25（第107・108図）

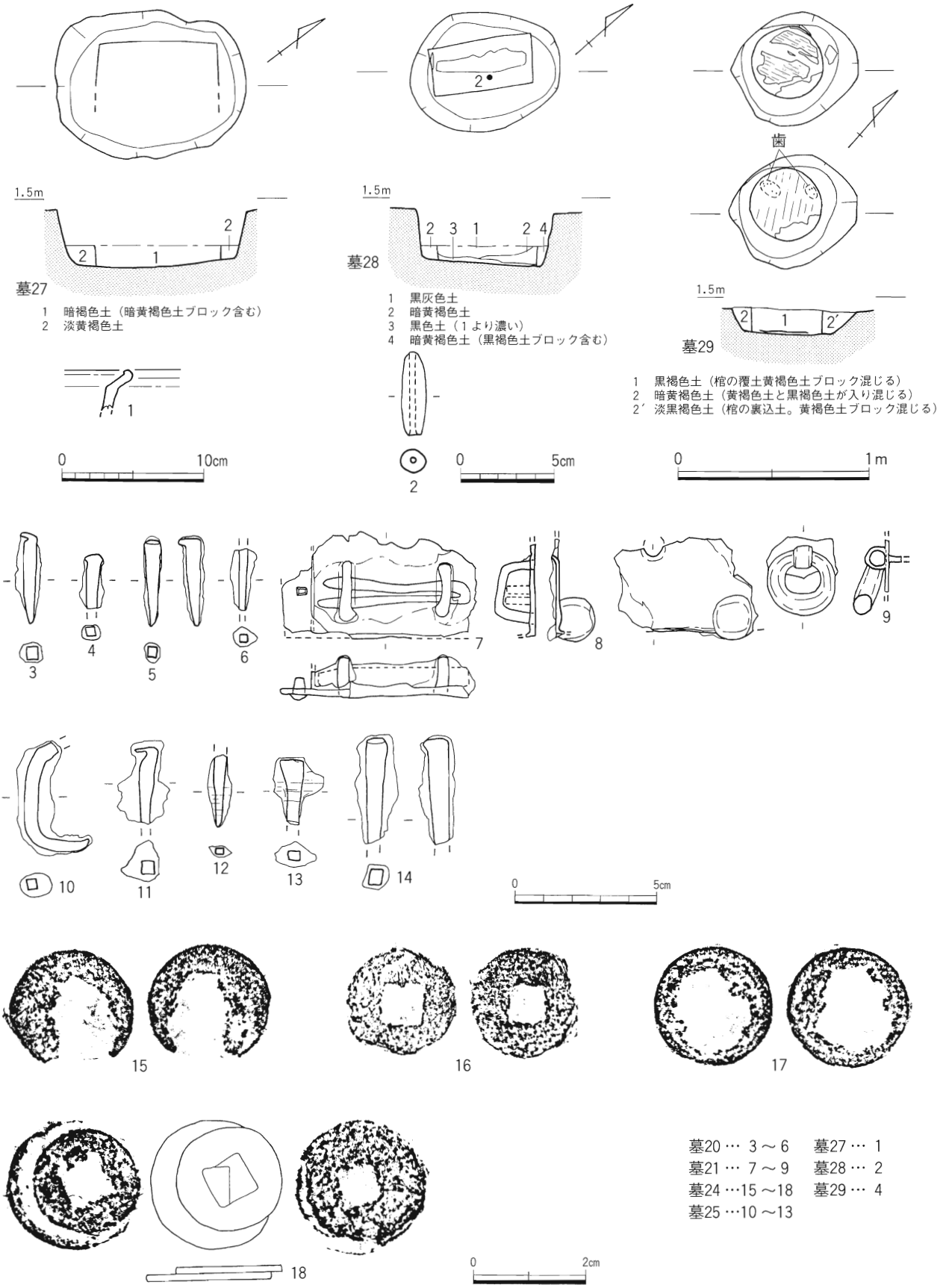
４区東側遺構群の東側で、溝状遺構14がヘアピン状に屈曲する部分に位置する。溝状遺構14を掘り上げたのちに検出できたことから、これより古い時期の遺構と考えられる。長さ140cm、幅85cmの隅円方形の墓壙をもつもので、長さ85cm、幅44cmの箱形棺の痕跡が確認された。棺蓋や棺底板の一部もわずかに残存していたほか、棺に使用されたと見られる鉄釘（107－10～13）も検出された。棺の主軸方向はＮ－32°－Ｅである。棺内では人骨が出土しており、北東頭位で、仰臥姿勢で両膝を折り曲げた状態で埋葬されていたと考えられる。人骨から、被葬者は成人男性と推測されるが、年齢は不明である。

墓26（第107図）

墓25の1.5m北に位置し、溝状遺構14と重複している。溝状遺構14の覆土を掘り上げたのちに検出できたことから、これよりも古い時期の遺構と考えられる。長径83cm、短径80cmの円形の墓壙をもつもので、底径36cmの結桶が棺に使用されていた。棺材は棺蓋や側板の一部、底板が残存していた。棺蓋は厚さ５㎜前後の薄い１枚の板で、検出時には棺内に落ち込んだかたちで検出された。棺内の北側では歯が出土しており、これによって被葬者は６歳前後の小児と推定されている。副葬品は、折敷と漆器椀が棺外の北東側で検出されたが、いずれも遺存状態は悪く、うまく取り上げることはできなかった。なお、漆器椀の内側には朱が塗られていた。

墓27（第108図）

４区東側遺構群の中央部北側で、溝状遺構16から約２mに位置する。長さ98cm、幅78cmの隅円方形の墓壙をもつもので、長さ62cmの箱形棺の痕跡が確認された。棺の主軸方向はＮ－43°－Ｅであ



墓20 … 3 ～ 6　　墓27 … 1
墓21 … 7 ～ 9　　墓28 … 2
墓24 …15 ～18　　墓29 … 4
墓25 …10 ～13

第 108 図　墓27～29（S＝ 1/3），
墓20～29出土遺物（１：S＝ 1/4，２：S＝ 1/3，３～14：S＝ 1/2，15～18：S＝ 1/1）

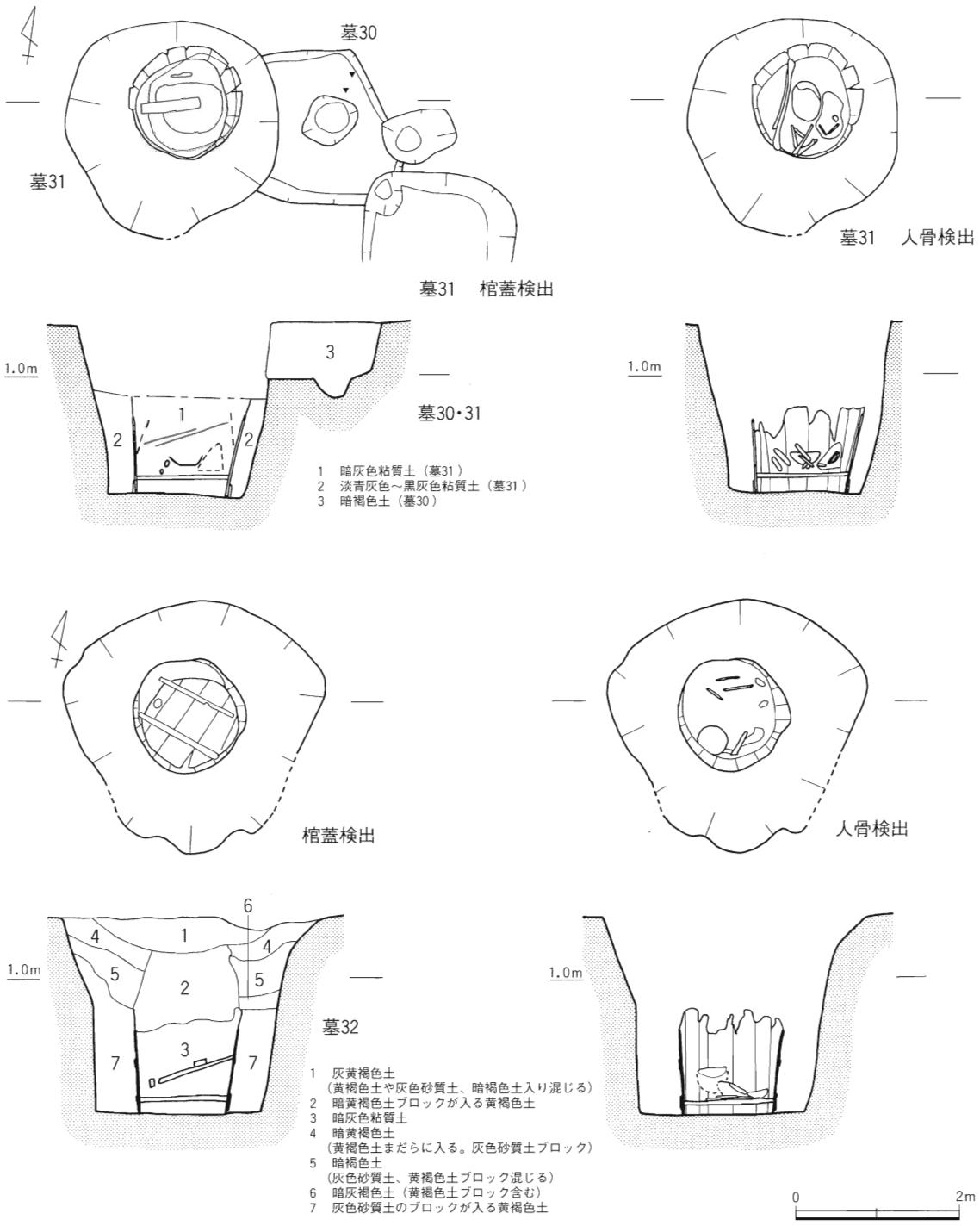
る。なお、人骨や副葬品は検出できなかった。

墓28（108図）

墓27から約３ｍ北西に位置する。長さ71㎝、幅56㎝の楕円形の墓壙をもつもので、長さ52㎝、幅28㎝の箱形棺の痕跡が確認でき、底板とみられる木質も一部残存していた。棺の主軸方向はＮ－40°－Ｅである。人骨は検出できなかったが、棺内中央部で土錘（２）が出土している。

墓29（108図）

４区東側遺構群の北西部で、溝状遺構11から約11ｍ北に位置し、建物跡65と重複している。長径



第109図　墓30～32（S＝ 1/80）

70cm、短径62cmの円形の墓壙をもつもので、棺材の遺存状態は良くなかったが、底板と蓋、側板の一部が残存しており、曲物棺と確認できた。棺内の北東側で歯が出土しており、これにより被葬者は３～４歳の幼児と推定されている。このほかに鉄釘（14）が出土している。

墓30・31（第109・110図）

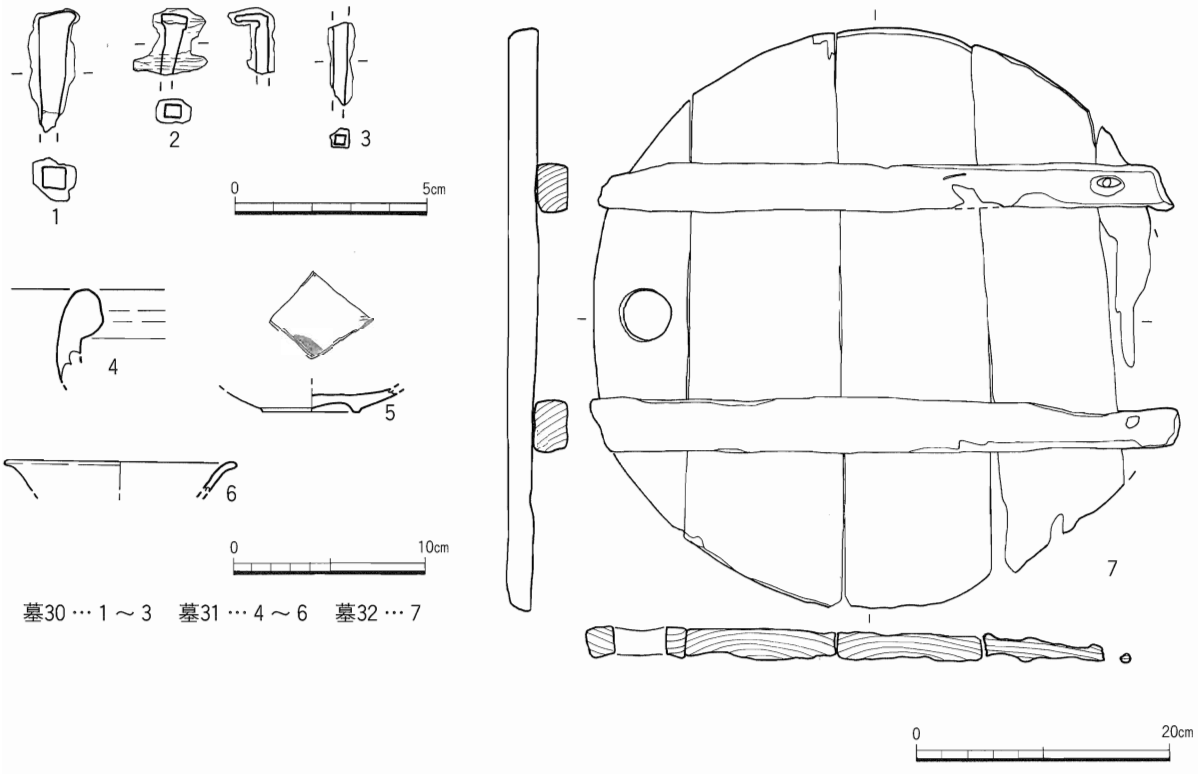
両者は、４区東側遺構群の南東部で、溝状遺構15から約２ｍ南に位置する。

墓30は、その西側を墓31に、南東隅を４－SK23に切られている。長さ72cm、幅60cm以上の方形の土坑で、主軸方向はＮ－８°－Ｗである。棺の痕跡や人骨、副葬品などは確認できなかったが、土坑の規模や形状に加え、土坑壁面に沿って釘（110－１～３）が出土しており、棺の存在が窺われることから、ここでは墓と考えた。

墓31は、長径96cm、短径95cmの円形の墓壙を持つもので、底径46cmの結桶が棺として用いられていた。棺の覆土を掘り下げていく過程で、棺底板から15cm前後の高さで、棺に使用されたものとは別個体の桶の底板や側板が検出されており、側板は上から下に開いた状態で確認された。このことから、棺桶の蓋としてもう１つの桶を合わせ口にして被せていたものが、土圧によって押しつぶされ、棺内に底板などが落ち込んだという状況が推測される。なお、棺桶側板は、樹種鑑定からスギと同定されている。

棺内では人骨が検出されており、出土状態から埋葬姿勢は坐葬で、背を北側にして、顔を南側に向けていたと推測される。被葬者は成人男性で、年齢は不明である。

副葬品はなかったが、埋土中から墓壙の埋め戻し時に混入したと考えられる備前焼の壷（４）、肥前系磁器の染付皿（５）、Ｅ群の白磁皿（６）が出土している。５は17世紀後半頃に属するものとみられ、このことから墓31の造墓時期は、この頃か、それより下るものと推測される。



第 110 図　墓30～32出土遺物（１～３：S＝ 1/2，４～６：S＝ 1/4，７：S＝ 1/6）

墓32（第109・110図）

墓31の約0.5m西に位置する。長径115cm、短径113cmの不整円形の墓壙をもつもので、底径46cmの結桶が棺に用いられており、棺蓋と側板、底板が残存していた。棺桶側板は樹種鑑定によりスギと同定されている。棺蓋（110－７）が棺内に落ち込んだ状態で出土した。５枚の板を木釘で継ぎ合わせた円形のもので、図左端の板材には円形の穴が穿たれていた。上面には２本の角材が把手として鉄釘で打ち付けられている。棺内では人骨が出土しており、埋葬姿勢は顔を南に向けた坐葬状態で、被葬者は９歳前後の小児と推測されている。

墓33（第111図）

墓31から1.8m東に位置し、建物跡76Ａと一部重複する。また、墓壙の北西隅は墓34に切られている。長さ114cm、幅88cmの墓壙をもつもので、長さ91cm、幅62cmの箱形木棺の痕跡が確認され、棺蓋と底板の一部も残存していた。棺底は中央に幅５cmの板が長軸方向に置かれ、その上に底板が載るかたちになっていた。棺の主軸方向はＮ－４°－Ｗである。棺内から掘り上げた土の中から歯が見つかったが、棺内のどの部分にあったのか特定はできなかった。歯から、被葬者は成人と考えられるが、年齢・性別は不明である。

墓34・35（第111・113図）

両者は、墓31の東側、墓33の北西に位置しており、墓35の南東側と墓33の北西隅を切るかたちで、墓34が造られていた。

墓34は、長さ91cm、幅81cmの長方形の墓壙を持つもので、内法で長さ62cm、幅37cmの箱形棺が確認された。棺材は、棺蓋と側板が部分的に残存しており、底板（113－６）はほぼ完存していた。また、棺の北西と南東・南西の各隅には杭のようなものも認められた。底板は、下面外縁に幅約１cmの桟が木釘で打ちつけられたもので、上面には桟の木釘とは別の木釘孔があけられていたことから、底板の上に側板が取り付けられたことが分る。木棺の主軸方向はＮ－４°－Ｗで、墓壙の主軸方向（Ｎ－24°－Ｗ）とのずれが見られる。

棺内では、仰臥屈葬状態とみられる人骨が検出された。頭位は北側で、人骨から被葬者は女性と推測されたが、年齢は不明である。副葬品として、棺の北よりで櫛（５）が出土した。異なる色調の漆を用いて、波状の文様が施されている。このほか、埋土中から瓦質土器の甕（１・２）が出土した。

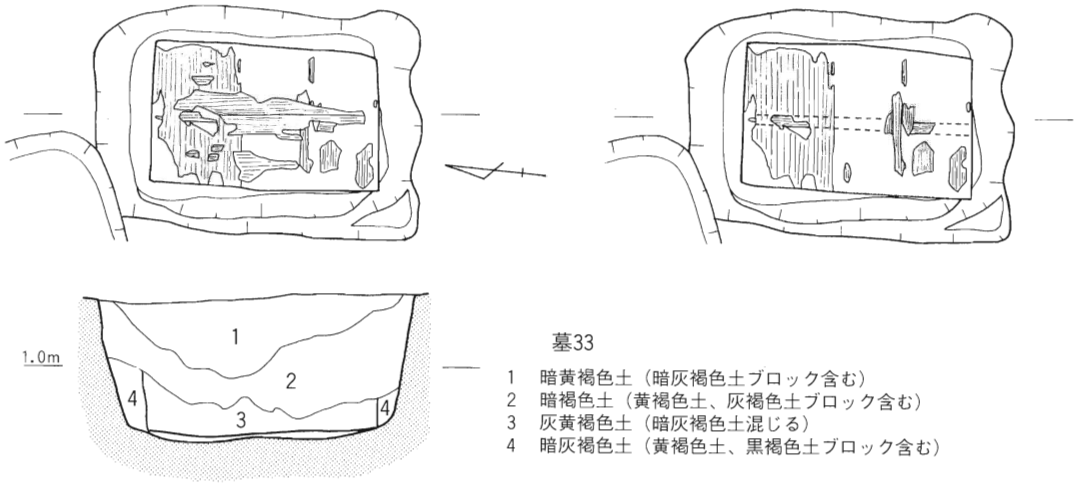
墓35は、長さ123cm、幅82cmの長方形の墓壙を持つもので、長さ82cm、幅42cmの箱形棺の痕跡が確認された。棺材は蓋と側板、底板が一部残存していた。木棺の主軸方向はＮ－46°－Ｅである。棺内では仰臥姿勢で埋葬された人骨が出土しており、被葬者は成人女性と推定されるが、年齢は不明である。埋土中から瓦質土器の擂鉢（３）が出土した。

墓36（第111図）

墓33から1.2m東に位置する。長さ121cm、幅82cmの長方形の墓壙をもつもので、長さ87cm、幅59cmの箱形棺の痕跡が確認され、棺底板の一部も残存していた。棺の主軸方向はＮ－６°－Ｅである。棺内では人骨や歯が検出され、歯の出土位置から北頭位の埋葬と考えられる。被葬者は成人女性と推定されるが、年齢は不明である。

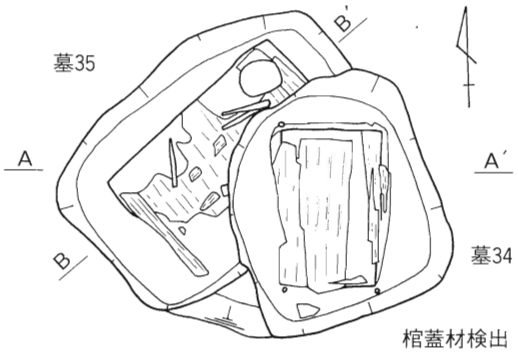
墓37（第111図）

墓36から0.6m南に位置する。長さ108cm、幅76cmの隅円長方形の墓壙をもつもので、長さ75cm、

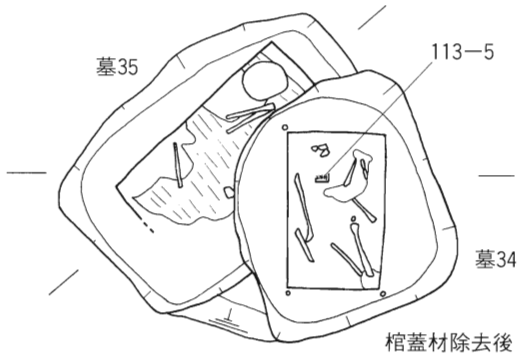


墓33

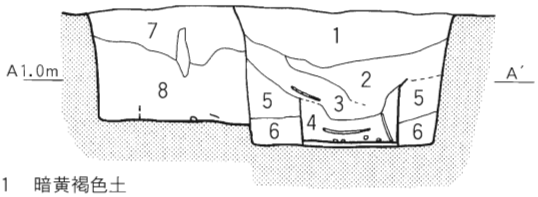
1　暗黄褐色土（暗灰褐色土ブロック含む）
2　暗褐色土（黄褐色土、灰褐色土ブロック含む）
3　灰黄褐色土（暗灰褐色土混じる）
4　暗灰褐色土（黄褐色土、黒褐色土ブロック含む）



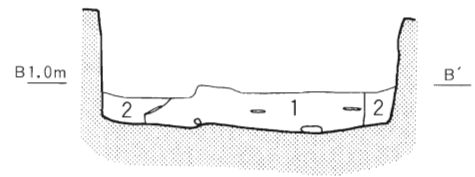
棺蓋材検出



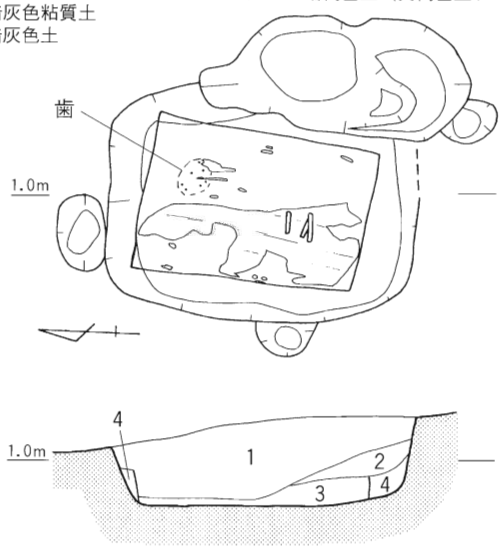
棺蓋材除去後



1　暗黄褐色土
2　暗褐色土
3　暗褐色土
　（黄褐色砂がうすく層状に入る）
4　暗灰色粘質土
5　暗灰色土
6　灰褐色砂質土
7　暗黄褐色土（１よりやや暗い）
8　暗褐色土（黄褐色土ブロック多く入る）

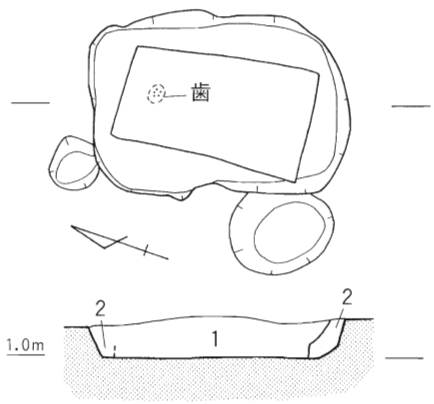


1　暗褐色土（黄褐色土ブロック混じる）
2　黄褐色土（やや灰色おびる）
2´　暗褐色土（黄褐色土ブロック混じる）



墓36

1　暗褐色土（暗褐色土ブロック多く含む）
2　暗灰色土（淡灰色砂がうすく層状に入る）
3　暗灰褐色土（暗褐色土ブロック少し含む）
4　暗灰黄褐色土（黄褐色土や暗褐色土が入り混じる）



墓37

1　暗灰褐色土（黄褐色土ブロック入る）
2　暗褐色土（黄褐色土と暗褐色土が入り混じる）

第 111 図　墓33～37（S＝ 1/30）

幅44cmの箱形棺の痕跡が確認された。棺の主軸方向はＮ－６°－Ｗで、墓壙の主軸方向（Ｎ－19°－Ｗ）とのずれがみられる。棺内の北寄りで歯が出土しており、北頭位の埋葬であったことが分る。被葬者は７～８歳の小児と推定されている。

墓38（第112・113図）

墓33から約１ｍ北に位置する。長さ134cm、幅91cmの長方形の墓壙をもつもので、長さ91cm、幅52cmの箱形棺の痕跡が確認された。棺材は蓋と側板の一部、底板が残存しており、樹種鑑定によりクリと同定された。棺の主軸方向はＮ－12°－Ｅで、墓壙の主軸方向（Ｎ－29°－Ｅ）に対してずれがみられる。棺内には人骨が遺存しており、大腿骨が棺の中央部よりも北に位置していることから、上半身が棺の北側板にもたれかかるような埋葬姿勢であったと考えられる。人骨は成人男性のものと推定されているが年齢は不明である。棺の北西隅では直方体状の木製品（113－４）が置かれ、出土位置から枕の可能性を考えたが、埋葬姿勢から別の用途のものと思われる。

（６）土坑（第114～116図）

４－SK26～28・30・31は内部に石の入った土坑で、いずれも４区東側遺構群の中央部南側から南東部にかけて位置している。４－SK28は土坑の形状や石の入り方から２基の遺構が切り合ったものかもしれないが、土層では判断ができなかった。４－SK30は、北側にのびる幅15cmの溝状遺構17を切っている。４－SK26から平瓦（116－１）が、４－SK28から瓦質土器の擂鉢（２）、肥前系陶器の大皿（３）、４－SK30から瓦質土器甕（４）、４－SK31は肥前系陶器の甕（５）・擂鉢（６）が出土している。３・５・６は17世紀前半のものと考えられる。これらの性格は不明であるが、廃棄土坑の可能性もある。

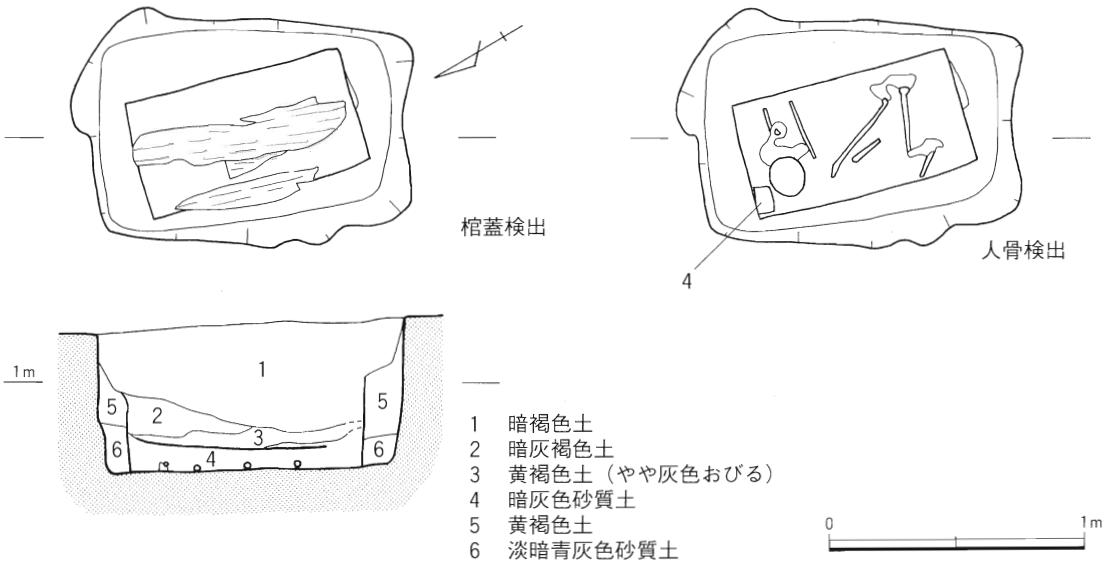
４－SK23は前述したように墓30の南西隅を切っている長さ82cm、幅68cmの隅円長方形の土坑である。検出された位置や、形状・規模から墓の可能性も考えられるが、棺の痕跡や人骨などは確認できなかった。

４－SK49は、長さ103cm、幅82cmの楕円形をしており、西側に段状の平坦面をもつ。４－SK62は明確な掘り込みを持たない不整形なくぼみで、長さ90cm、幅58cmの規模をもつ。覆土は粉炭を密に含むが、底面は被熱していなかった。備前焼の擂鉢（７）が出土している。４－SK66は長さ250cm、幅86cmの不整形な土坑で、４－SK69は長さ73cm、幅52cmの楕円形の土坑である。以上の土坑についても性格は明らかにできなかった。

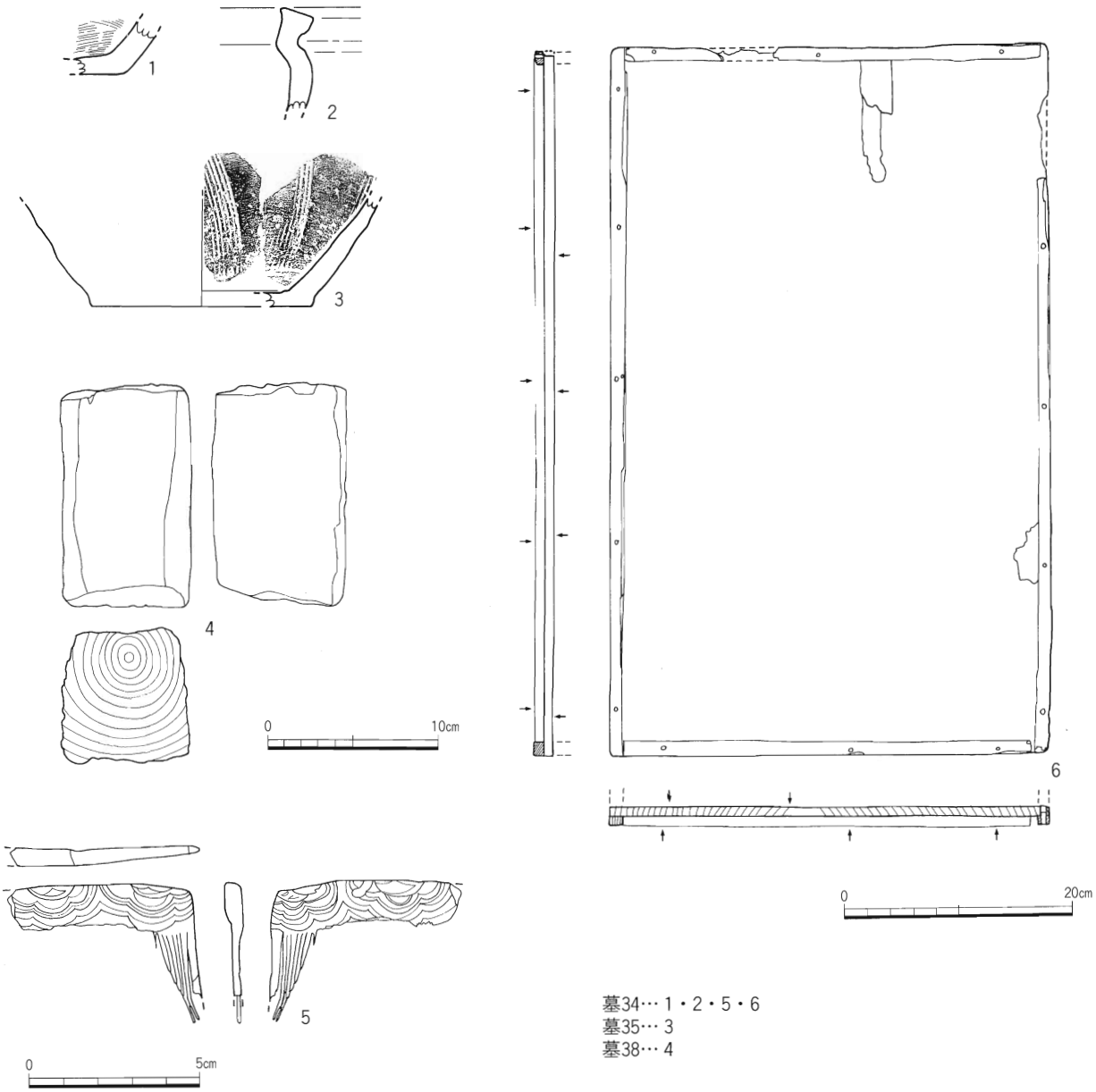
（７）柱穴及び出土遺物（第115～117図）

以下に、遺物を伴う柱穴やその出土遺物についてまとめる。

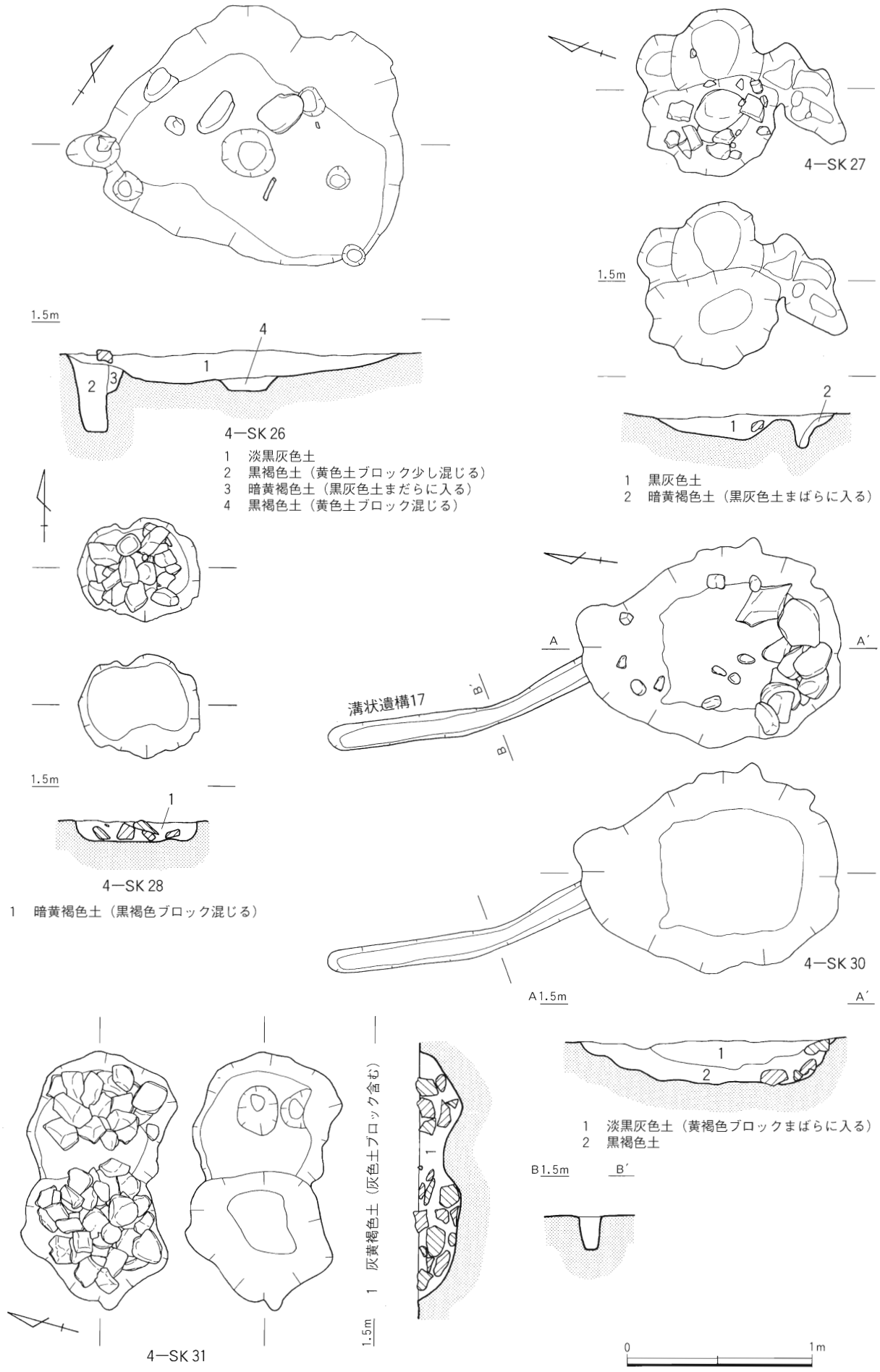
４－SK75には礫や柱根が残っていた。遺物は防長系の瓦質土器擂鉢（116－８）が出土している。９は土師器鍋で、西長門型ａと呼ばれるものである。10は肥前系陶器碗で４－Ｐ1804の埋土上部から出土した。11は土師器の坏もしくは皿の底部である。12は瓦質土器の羽釜で、口縁部の立ち上がりは大きい。13は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類もしくはＢⅡ類と考えられるもので、被熱している。14は土師器坏で、底部から体部が直線的に立ち上がるものと思われる。15は土師器坏の口縁部、16は土師器坏もしくは皿の底部で、ともに４－Ｐ2173の底面付近で出土した。17は白磁碗Ⅳ類の口縁部で、４－Ｐ2546の埋土上部で検出された。18は朝鮮王朝陶磁の白磁皿、19は土師器皿である。20は瓦質



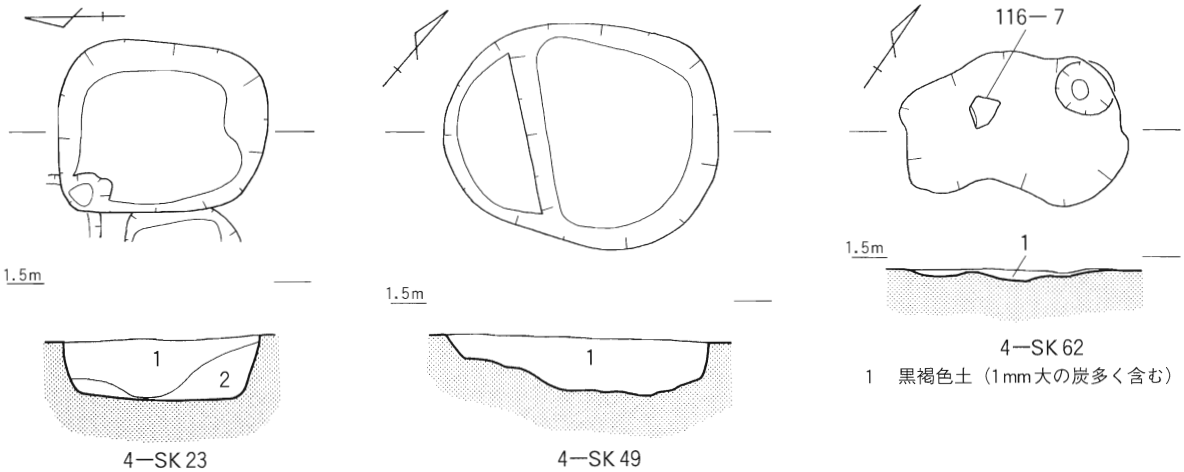
第 112 図　墓38（S＝ 1/30）

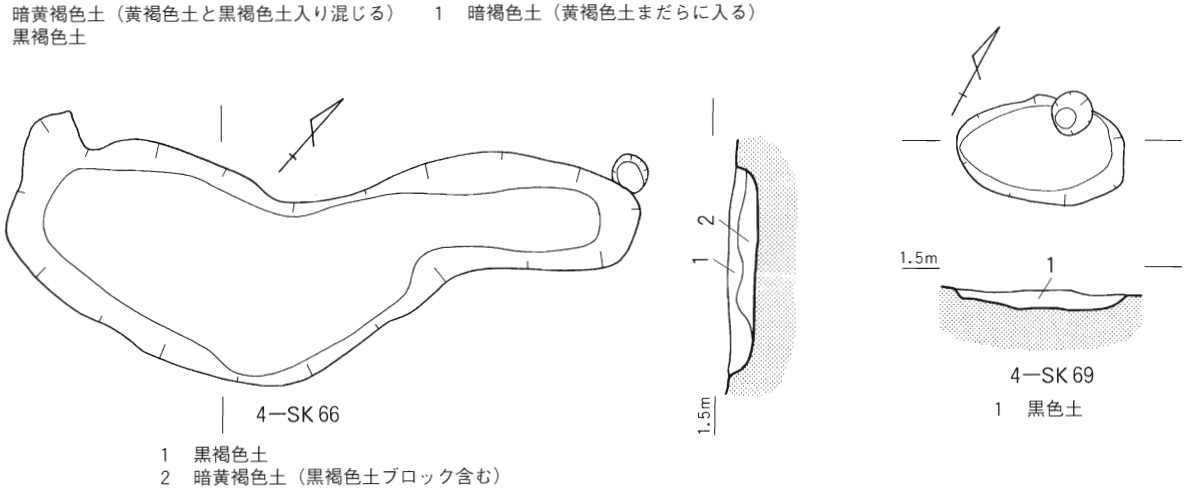


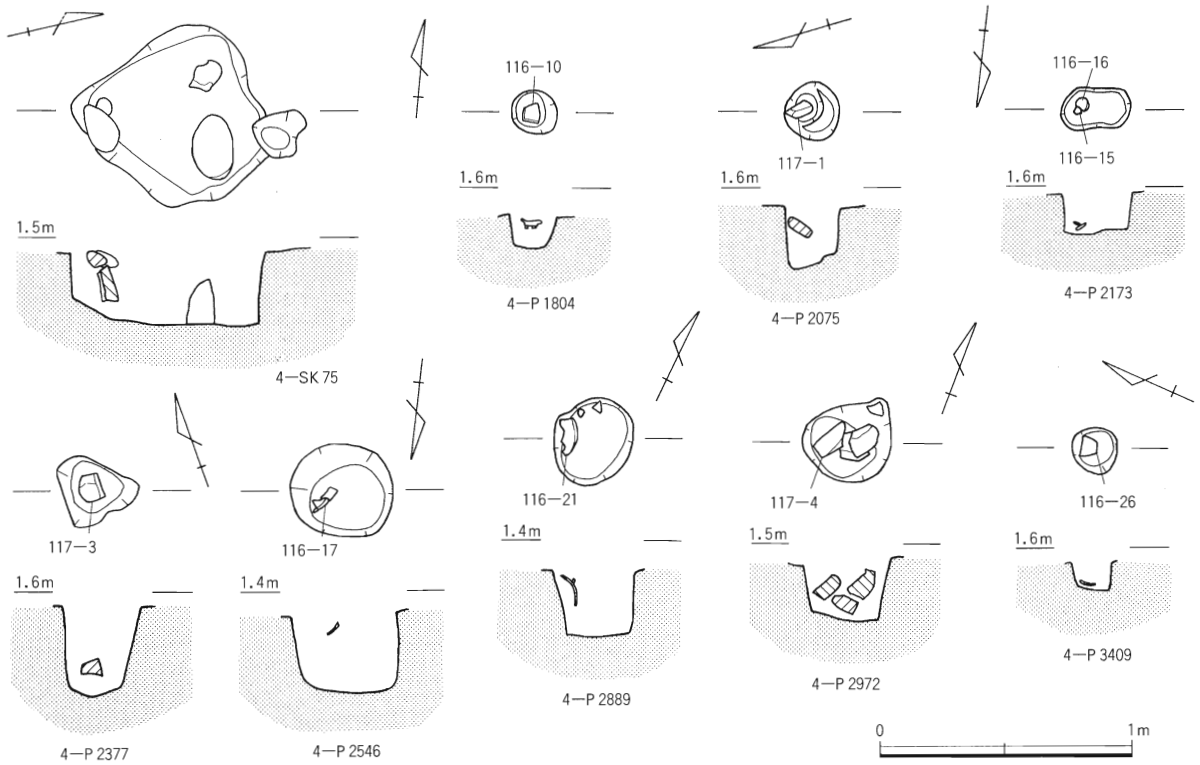
第 113 図　墓34・35・38出土遺物（１～４：S＝ 1/4，５：S＝ 1/2，６：S＝ 1/6）



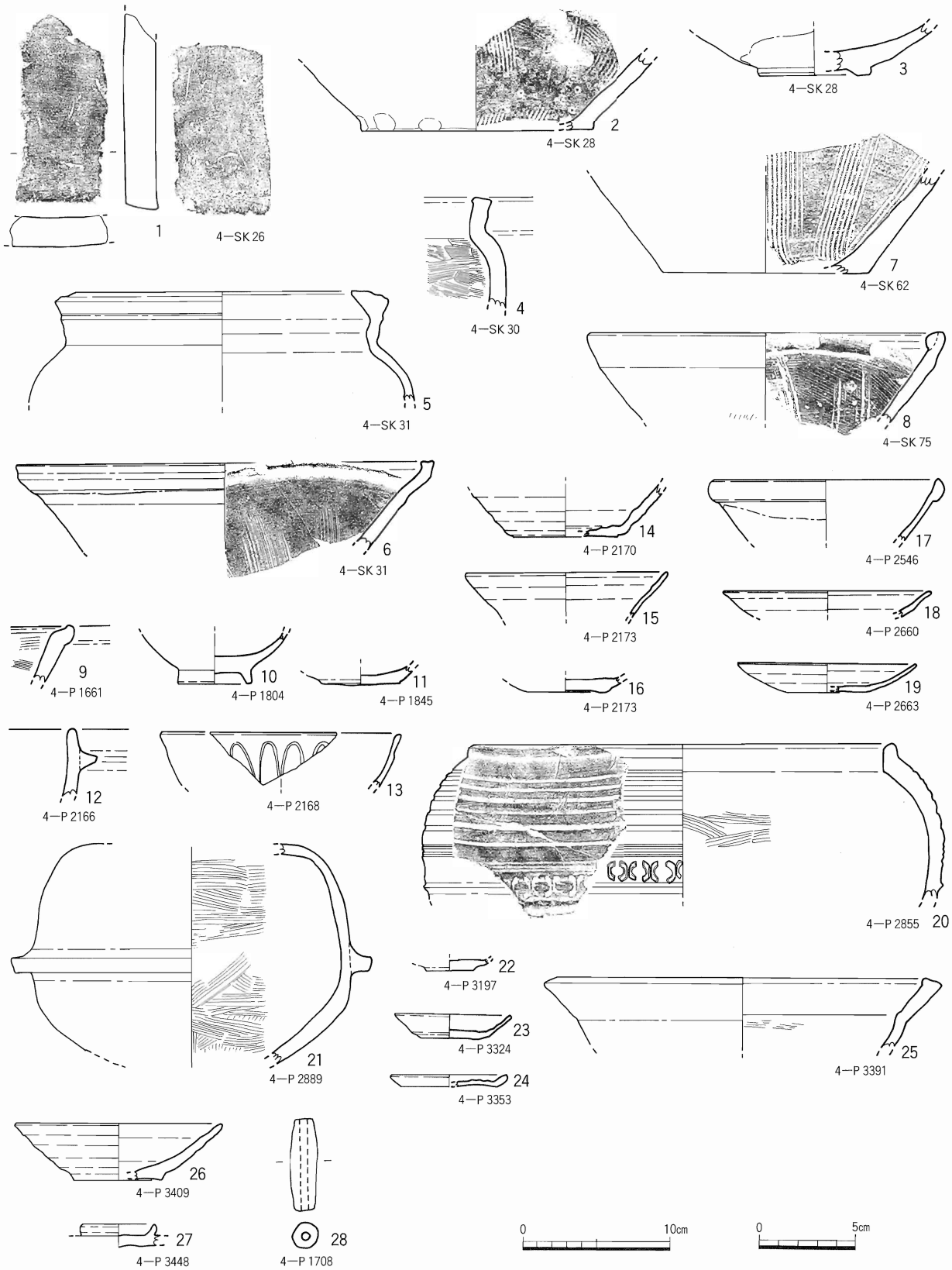
第 114 図　溝状遺構17（S＝ 1/30）





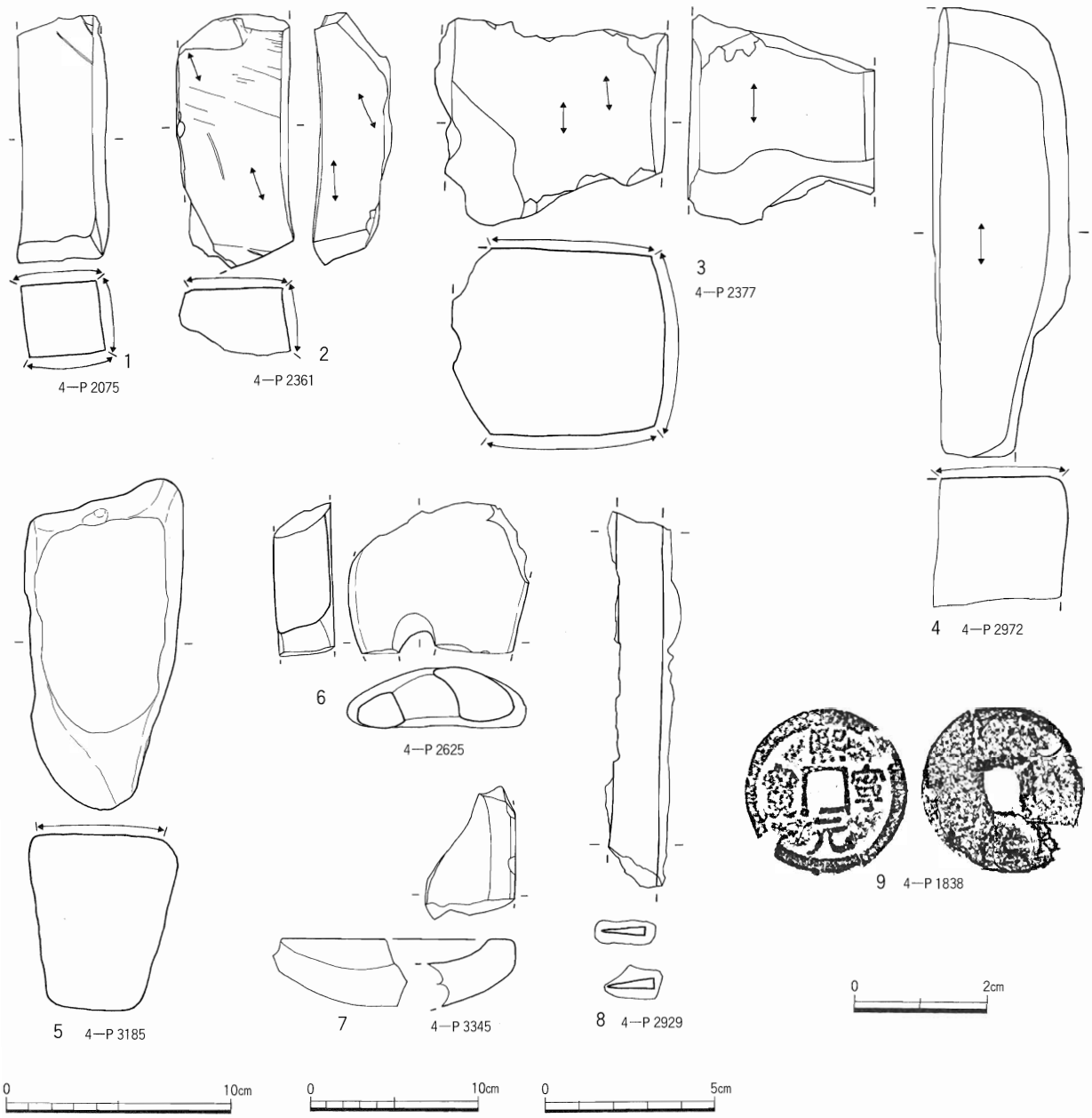


第115図　４区東側土坑・柱穴（S＝ 1/30）



第 116 図　4 区東側土坑・柱穴出土遺物（１）（１～27：S＝ 1/4，28： 1 /3）

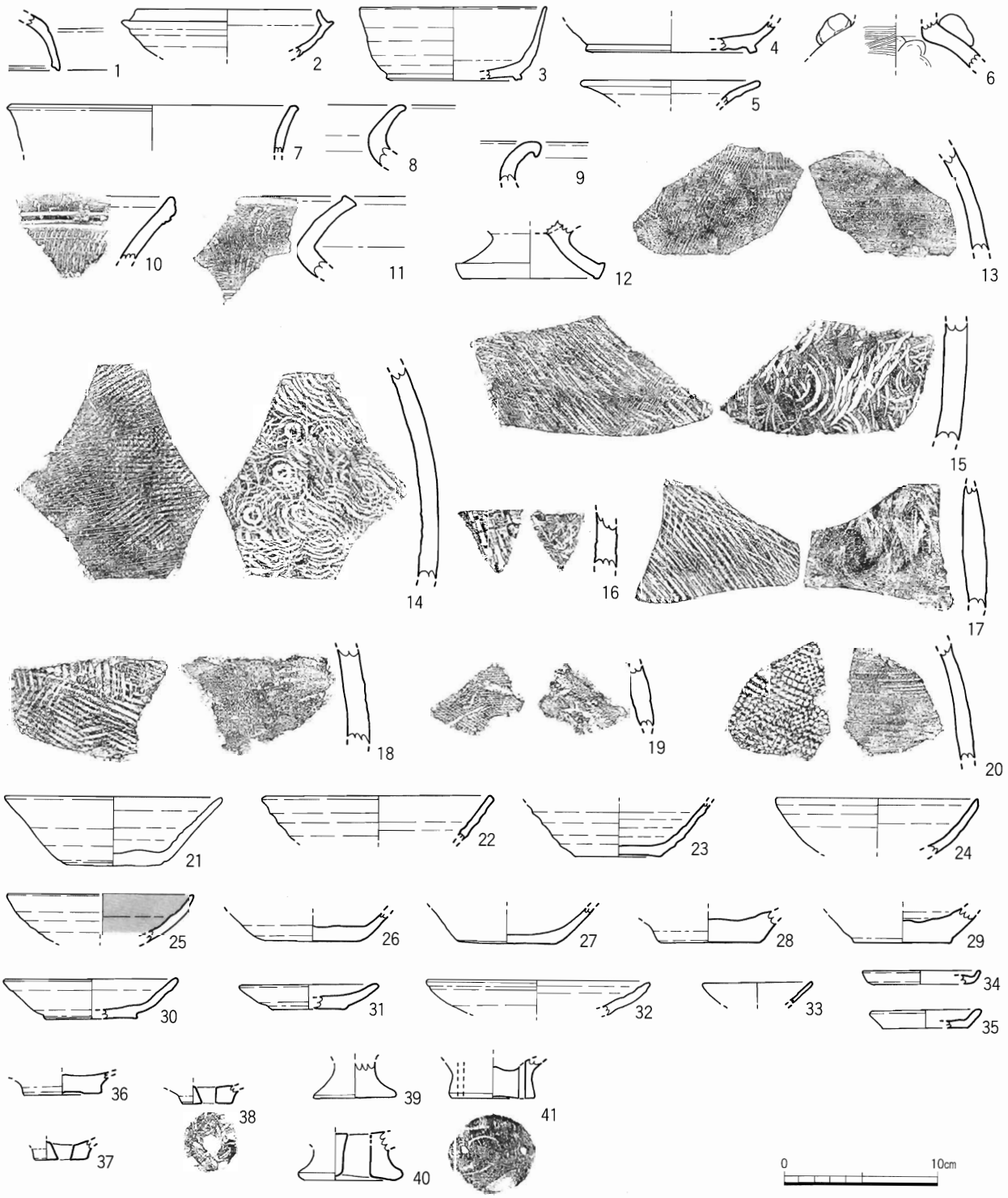
土器の火鉢で、体部には沈線や〔〕形のスタンプ文が施されている。21は瓦質土器の湯釜で、４－Ｐ2889の埋土上部から出土した。22・23・24は土師器の皿で、24は23よりも口縁部が短く、立ち上がりが小さい。25は瓦質土器鍋で、ⅥＢ類に分類される。26は土師器坏で浅く、やや内弯気味に立ち上がる。27は輪状つまみの須恵器蓋で、奈良時代のものである。28は土錘である。117－１～５は砥石で、１・２は凝灰岩製、３は流紋岩、４・５は砂岩製である。４は４－Ｐ2972から礫とともに出土した。６は円形の穴が穿たれた用途不明の石製品である。７は茶臼の受皿の破片で、被熱している。８は刀子の欠損品である。９は中国銭の熙寧元寶で、行書体の文字が鋳出されている。



第117図　４区東側柱穴出土遺物（１～６：S＝ 1/3，７：S＝ 1/4，８：S＝ 1/2，９：S＝ 1/1）

4　遺構外の出土遺物

第118～131図は中世の遺構検出面（３層上面）よりも上層で出土した、遺構に伴わない遺物である。土器・陶磁器類は、古墳時代後期から近世のものまで存在するが、まとまった出土量が見られるのは中世から近世前半までである。また、土器・陶磁器のほかに、土製品や石製品、金属製品も出土している。以下に、遺物種類ごとに説明することとしたい。



第 118 図　古墳時代～古代の須恵器，中世の土師器（坏・皿）（S＝ 1/4）

（１）古墳時代～古代の須恵器（第118図１～20）

１は古墳時代後期の坏蓋で、口縁端部に沈線が施されている。２は古墳時代後期の坏である。３は奈良時代の高台付坏、４は高台付皿で、ともに高台は体部と底部との境よりもやや内側に付くものである。５は瓶で、口縁部が外反しながら大きく開く。６は提瓶で、把手は退化して粘土を貼り付けただけのものになっている。７・８は壷の口縁部で、９～11は甕の口縁部で、10には外面に波状文が施されている。12は壷に付いていた高台部と思われる。13は壷の胴部と思われるもので、外面はハケ目後ナデ調整、内面は横方向にナデ調整がされている。14～20は甕の胴部である。14～19は外面に平行タタキが施されたもので、内面調整は、14・15は同心円当具痕が、16は放射状当具痕が、17～19にはナデが見られる。20は、外面に平行タタキ、内面にナデ調整がされたものである。

このほか、小片のため図示していないが緑釉陶器片が１点出土している。

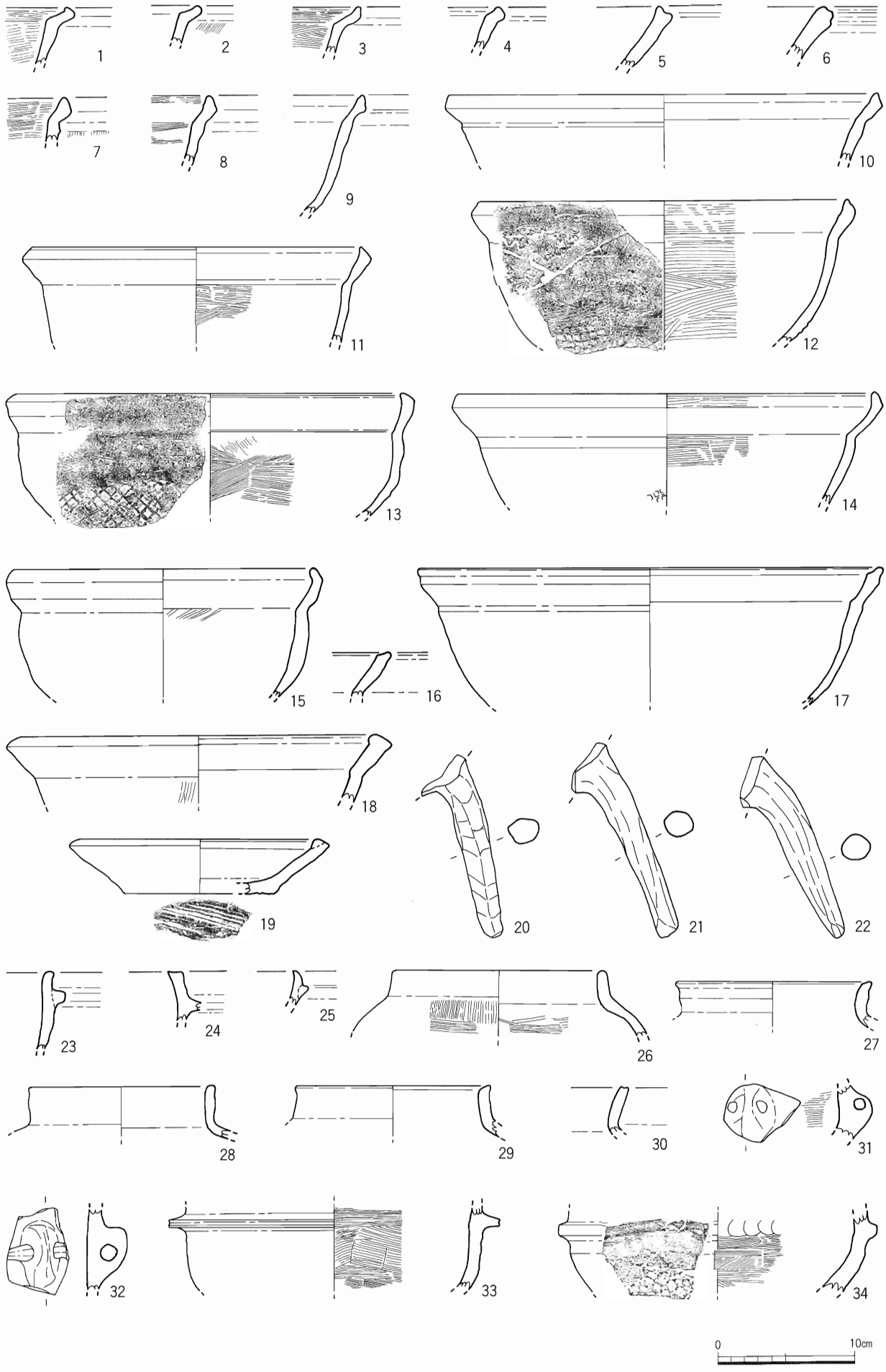
（２）土師器・瓦質土器（第118図21～41・第119～121図）

118－21～41は土師器の供膳具である。21～29は坏である。21～23は体部から口縁部が直線的に開くもので、24は体部が丸く内弯している。25は内面が黒色処理されている。28・29は厚手の底部を持つものである。21・23・26～29の底部はいずれも回転糸切り痕が見られる。30～35は皿で、30・31は口縁部が外反気味にのびるもの、32は口縁部が内弯気味のもの、33は薄手で小型のもので、口縁部はやや内弯気味である。34は短い口縁部が直立気味に立ち上がり、35は口縁部が短く、外に開いている。36～41は柱状高台皿で、37・38・40には底部の中央が穿孔されており、41は底部の左右両端に小さな穿孔が見られる。

119－１～34は土師器・瓦質土器の煮沸具である。１～６は土師器の鍋で、１・４は短く外反する口縁部をもち、口縁部の下が肥厚する西長門型ａに、５・６は口縁部が蓋受状につくられた西長門型ｂになるものと考えられる。11～18は防長系瓦質土器の鍋で、７は口縁部の短いⅢ型式古段階、８～11は前者よりも口縁部が拡張気味になるⅢ型式新段階、13～15は口縁端部が内側に屈曲するⅣ型式、16・17は口縁端部が外側に引き出されたⅥＡ型式新段階、18は口縁部上端で厚みの増すⅥＢ型式にそれぞれ分類される。19は焙烙で、口縁端部内側は粘土が貼り付けられて肥厚しており、底部には板目が見られる。20～22は足鍋の脚部である。23～25は羽釜で、口縁部の立ち上がりが大きく、防長型のものとは形態が異なる。26～34は湯釜である。

120－１～15は、土師器・瓦質土器の鉢・擂鉢である。１～５は土師器で、１・２・４は口縁端部に面をもち、３は口縁部外面側が肥厚するもの、５は口縁端部が丸みを持つものである。１・２・４・５は内面に擂目が入っている。６・７は瓦質土器の鉢で、６は口縁端部に面を持つもので、７は口縁部先端がすぼまるかたちとなる。８は瓦質土器の擂鉢で、口縁端部は面を持ち、内側に若干つまみ出されている。９～14は防長型瓦質土器の擂鉢で、口縁端部を内側に折り返したり、粘土を貼り付けたりして肥厚させている。13・14は粘土の貼り付けによって口縁部に広い平坦面がつくられている。

16～19は瓦質土器の甕と考えられるものである。16は口縁部の断面が半円形のもの、２は口縁部が短く直角に屈折するもの、３は口縁部が外反するもので、それぞれ異なった形態をしている。20は土師器の甕で、外面に平行タタキ目が見られる。21は、口縁部の沈線間に印花文が施されたもので、香炉の破片の可能性がある。



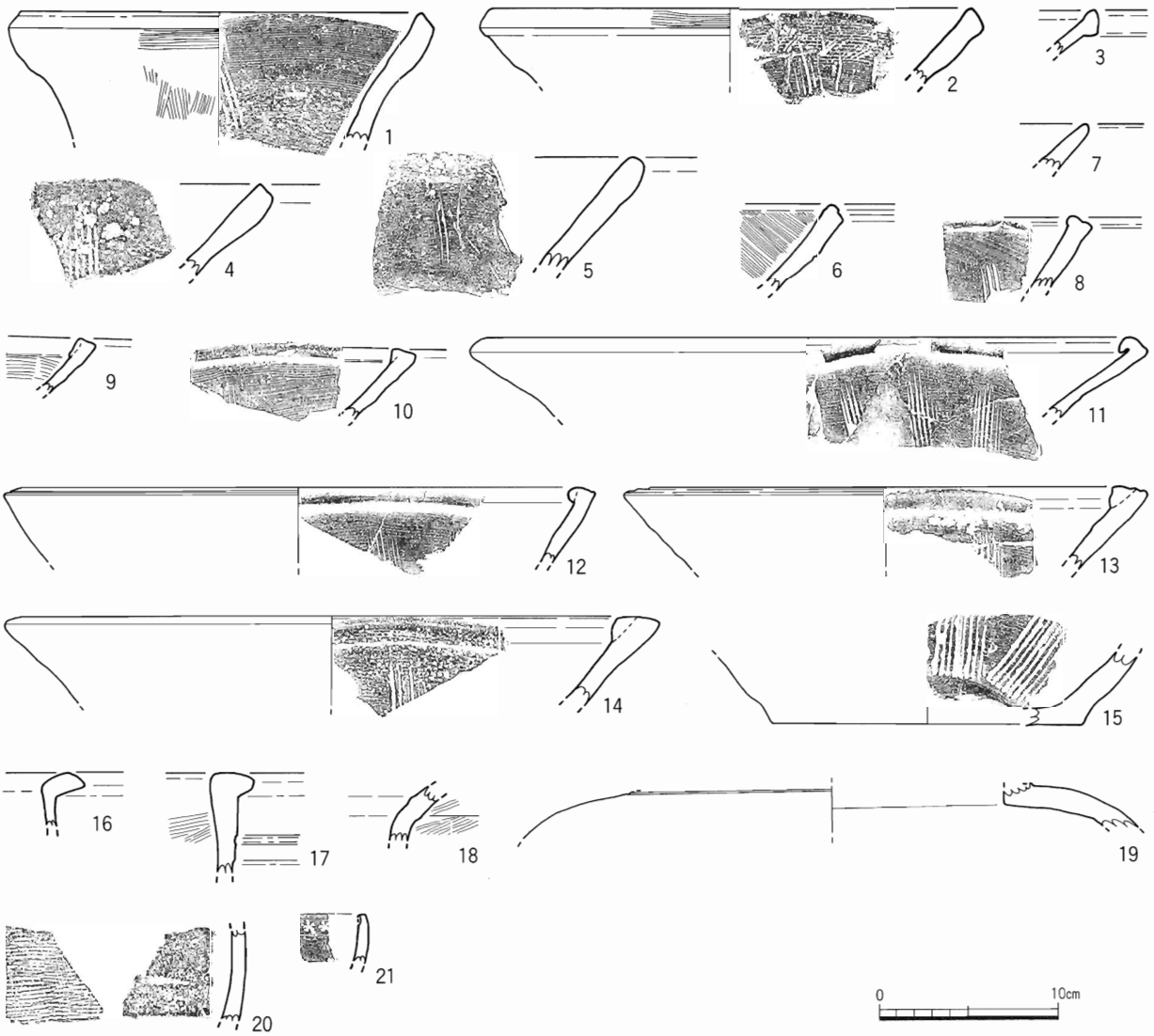
第 119 図　土師器・瓦質土器（煮沸具類）（S＝ 1/4）

121－１～10は瓦質土器の火鉢である。１～４は甕形の火鉢で、１は口縁部に「I」字状の刺突が施されたもので、２～４は体部に沈線が巡っている。５は、体部から口縁部にかけて内弯する器形で、口縁部には沈線と突線との間に連続菱形文が施されている。６は深鉢形の火鉢で口縁端部からやや下がった位置に突帯が付けられ、その下に花形のスタンプ文が施されている。７も６と同様の文様を持つもので、同一個体かもしれない。

（３）中世須恵器・国産陶器（第122図）

１～９は東播系の須恵器鉢である。口縁部の形態は、①口縁端部がやや肥厚し、やや下方に拡張するもの（２）、②口縁端部が上方に強く拡張されるもの（６）、③口縁端部が上・下方に小さく肥厚するもの（１・３・４・５）、④口縁部が上・下方に拡張しており、特に上方への拡張が顕著なもの（７）がみられる。８は底部外面に回転糸切り痕が認められる。①は第１期第２段階に、②は第Ⅱ期第１段階に、③は第Ⅱ期第２段階に、③は第Ⅲ期第３段階に相当するものと考えられる。

10・11は瓷器系陶器の甕で、10は口縁部の断面形が「N」字状になっている。11は緑色をおびた釉がかかり、肩部に沈線が施されている。



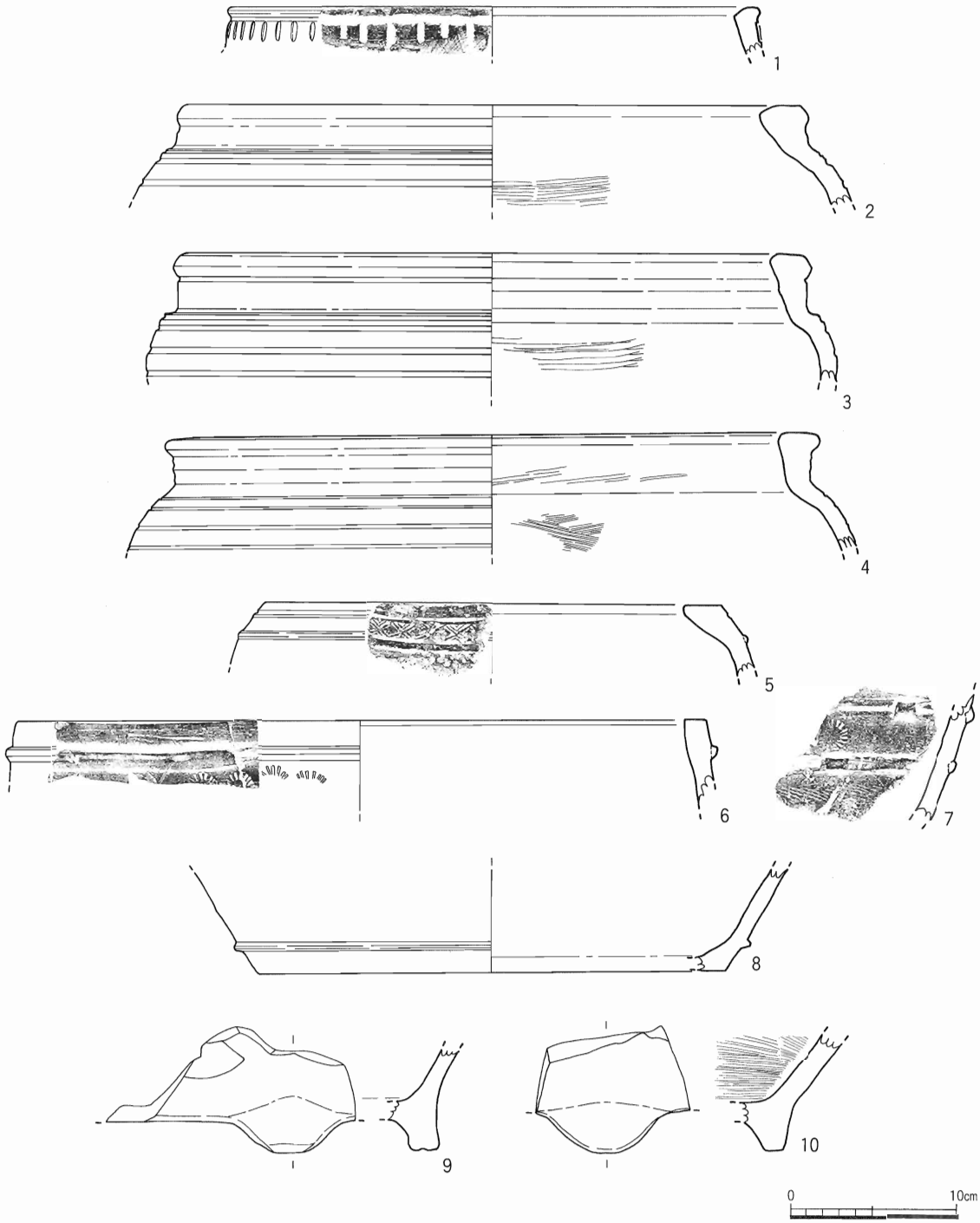
第 120 図　土師器・瓦質土器（調理具・貯蔵具・その他）（S＝ 1/4）

12～23は備前焼の擂鉢である。口縁部形態から12～14はⅣＡ期、16はⅣＢ－１期、15・17はⅣＢ－２期、19・20はⅣＢ－３期、18はＶＡ期、22はＶＢ期、21はⅥ期に位置づけられ、ⅣＡ期以降は各時期のものが見られる。

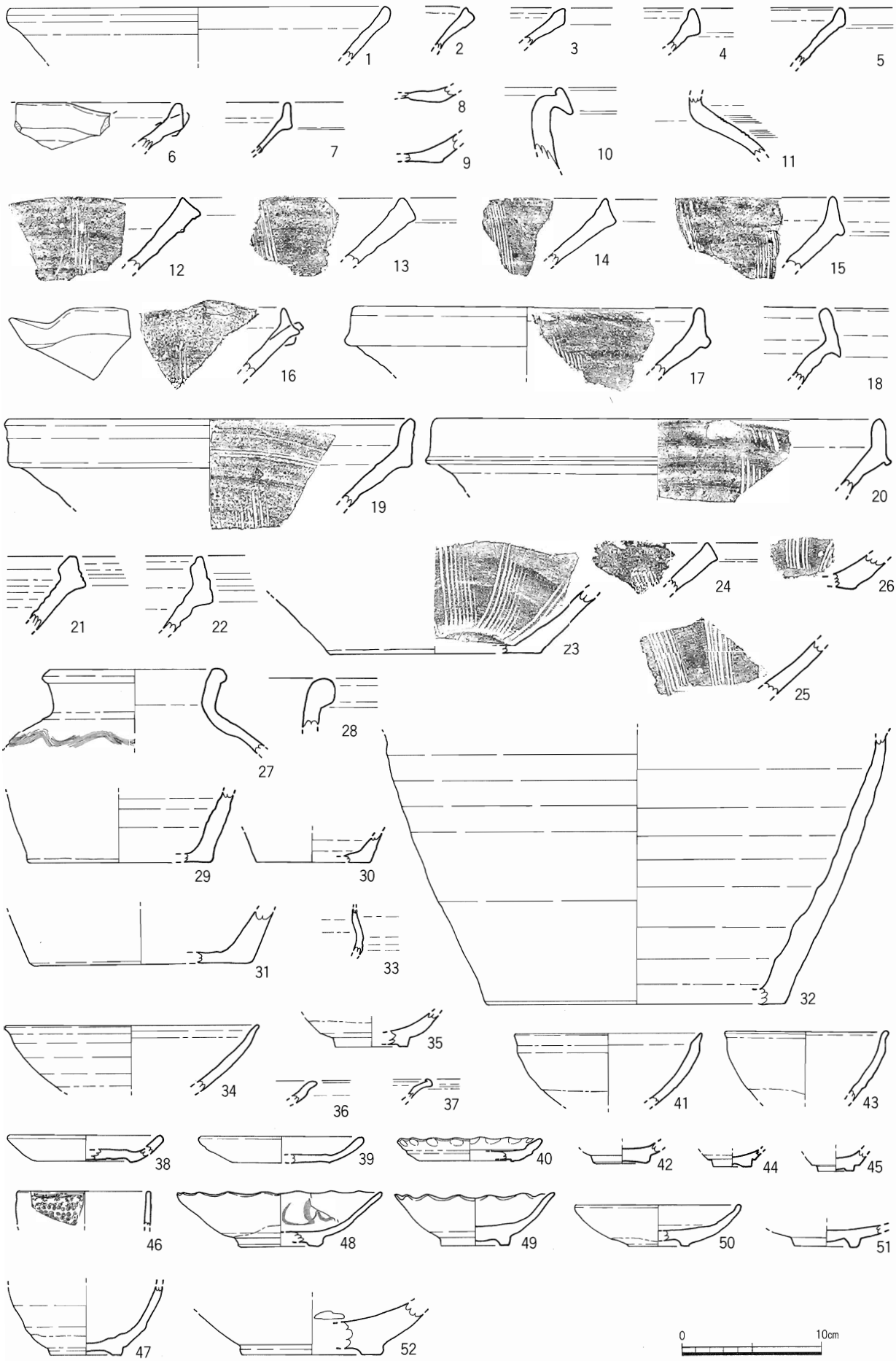
24～26は備前焼を模倣したと思われる陶器の擂鉢である。表面の色調は褐灰色であるが、胎土は灰白色で、備前焼のそれと比べて軟質である。口縁部の形態はⅣＡ期のものと類似している。

27～31は備前焼の壷で、27・28は口縁部が丸く肥厚するものでⅢ期に位置づけられる。27の肩部には波状文が施されている。33は備前焼の茶入である。

34～45は瀬戸の陶器である。34は古瀬戸後期Ⅲ期の平碗で、35は大窯４期前半の丸碗である。36



第121図　瓦質土器（火鉢）（S＝ 1/4）



第 122 図　中世須恵器・国産陶器（S＝ 1/4）

は端反皿で大窯１期、38～40は内禿皿で大窯３期後半、37は折縁皿で大窯４期前半に位置づけられる。41～43は天目茶碗、44・45は小天目である。このほか図示していないが、盤や瓶も出土している（写真図版58）。

46～52は肥前系陶器である。46・47は碗で、46は、白土の象嵌が施された花形や円形の印刻文様をもつものである。48～51は皿で、48・49は見込みに胎土目跡が、51には砂目跡が見られる。48は内面に鉄絵の文様が施されている。52は大皿で胎土目跡が観察される。これらは近世初頭から前半のものである。

（４）白磁（第123図）

１～24は中世前半の白磁碗である。１～３はⅡ類、４～10はⅣ類のものである。４は底部内面に段が付くものでⅣ－ｂ類に、８～10は底部内面に沈線が入るものでⅣ－１ａ類に細分される。11～14はⅤ類のもので、11・12には縦方向に篦描の沈線文が施されており、14は内面に櫛目が入る。17はⅤ類もしくはⅥ類の底部片である。16・18・19は見込みの釉を環状にかき取ったもので、Ⅷ類に分類される。15も見込みの釉がかき取られたⅧ類のもののように見えるが、被熱のため不明瞭である。16・18・19と比べ径が小さいことからⅧ類のものではないかもしれない。20は外反口縁の碗、21はⅩⅡ類のものである。22は広東系の浅形碗で、Ⅱ類のものと比べて上質のようにみえる。23は内面に櫛状工具によるジグザグ文様や二又片刀による沈線文が施されている。24は広東系の小碗である。

25～38は中世前半の白磁皿である。25はⅡ類、26～30はⅢ類で、26～29は見込みの釉が環状にかき取られたⅢ－１類、30は釉がかき取られていないⅢ－２類に細分される。31・32はⅥ類のものである。33～37はⅨ類のもので、33～36は口縁部内面の釉がかき取られている。38はⅨ類の底部とも思われるが、断定はできない。

39は壺Ⅲ類の口頸部、40は水注の把手である。41・42は青白磁で、41は合子身、42は合子蓋である。このほか小片ではあるが、青白磁の小壺も出土している（図版62）。

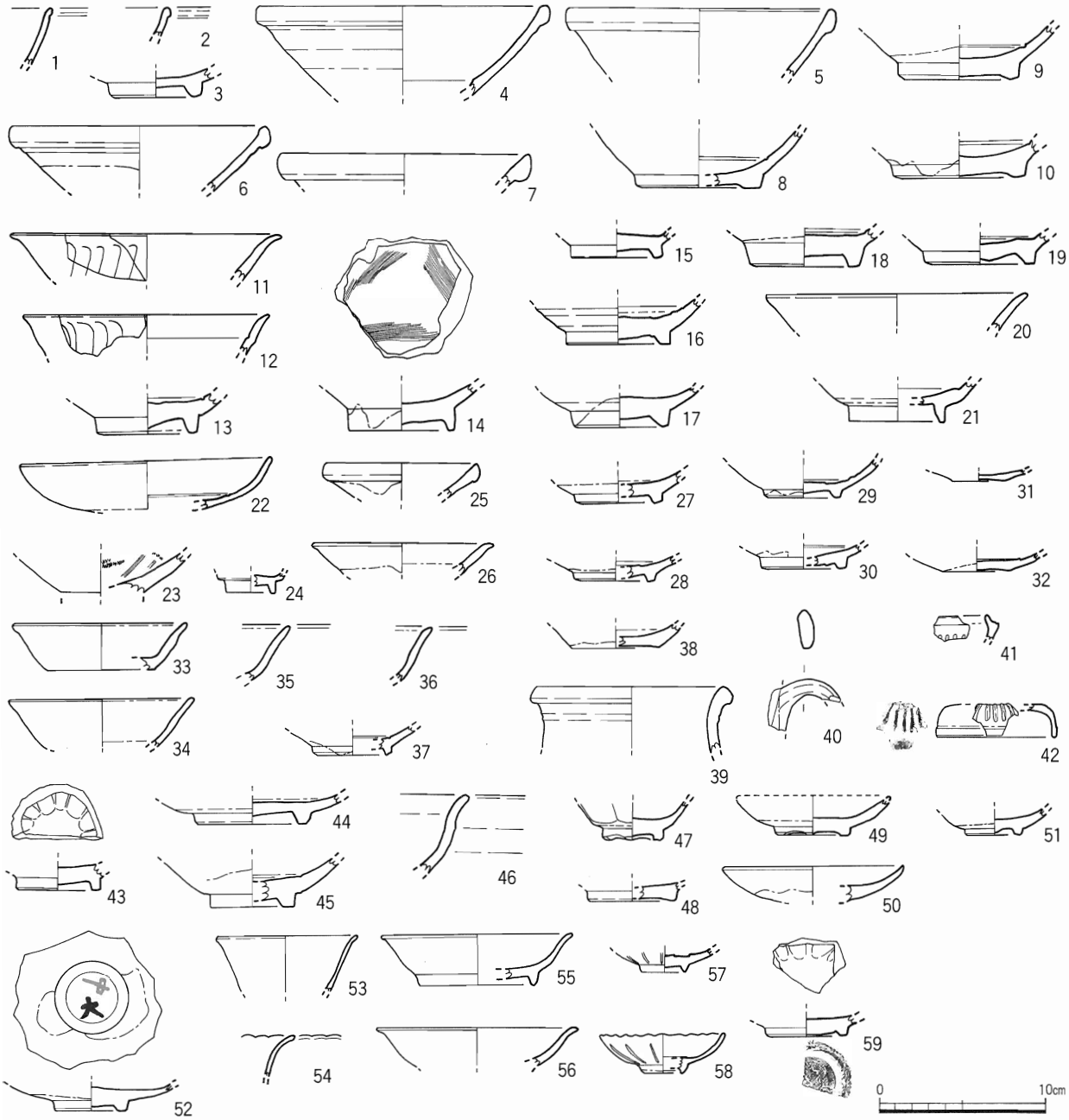
43～59は中世後半の白磁である。43はＢ群の皿で、見込みに花弁状にくぼんだ文様が見られる。44は見込みの釉が環状にかき取られたもので、Ｆ～Ｇ期の碗と考えられる。45・46はＣ群の碗である。47～52はＤ群の白磁で、47は八角坏、48は平底の坏、49～52は皿である。52は高台の内側に墨書による「大」、朱書きによる「中」の文字が見られる。53～58はＥ群のもので、53・54は坏、55～58は皿である。54は口縁部が輪花状のもの、57・58は菊皿である。59は見込みに花弁状にくぼんだ文様が入るもので、時期は不明である。

（５）青磁（第124図１～45）

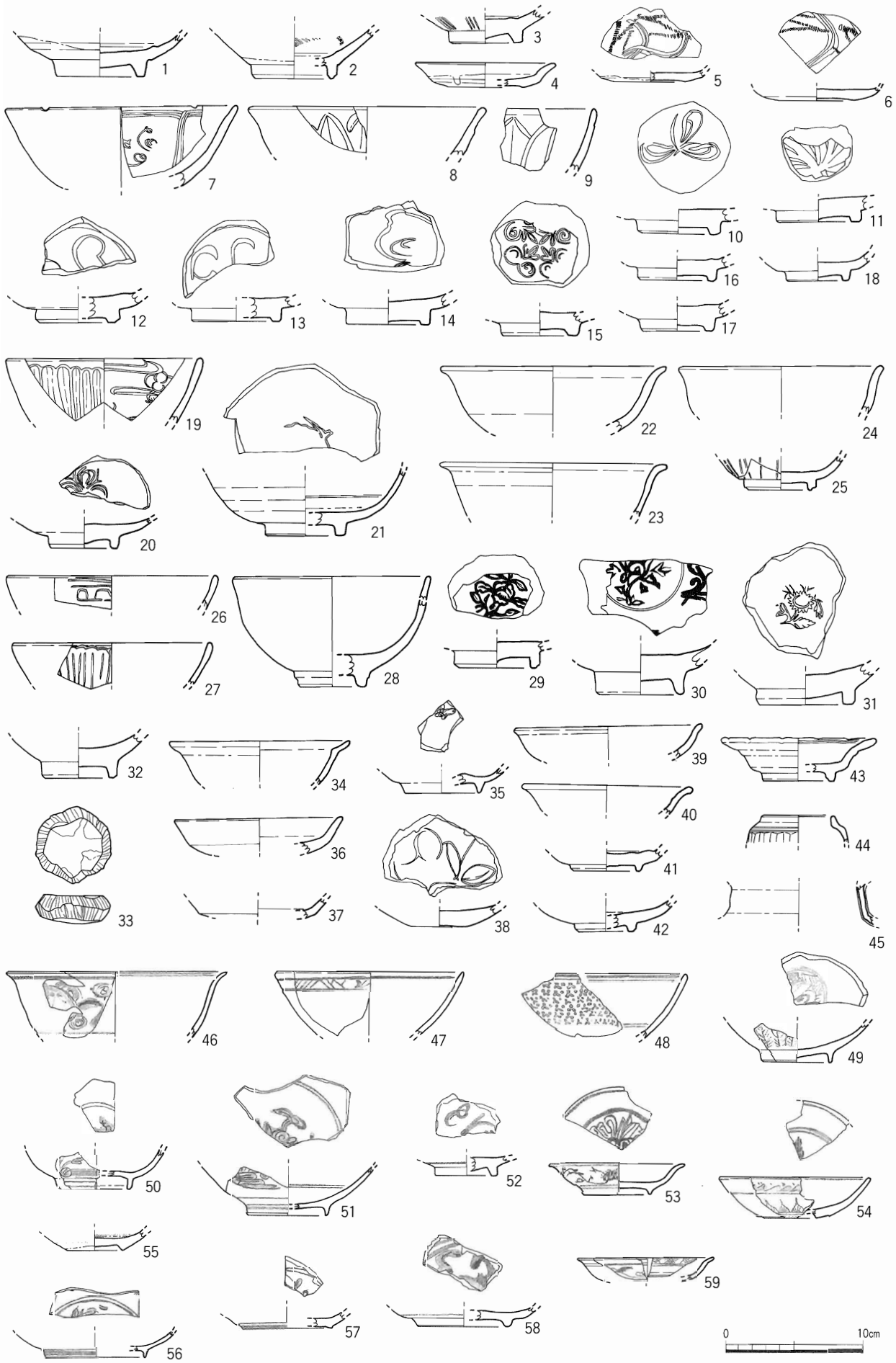
１～３は同安窯系青磁碗である。１・２は見込みの釉がかきとられており、従来の分類ではⅢ－２類とされるものであるが、１は外面に櫛目が見られず、２の内面に櫛目文があるなど、これまでの分類にはない要素も見られる。３はⅠ－１ｂ類である。４～６は同安窯系のⅢⅠ類のものである。

７～33は龍泉窯系青磁碗である。７・10～14は碗Ⅰ類で、片切彫りによる花文などが施されている。８・９は体部に鎬連弁文を持つものでⅡｂ類に分類される。15は見込みに印花文を持つⅡｃ類、16～18はⅠ類もしくはⅡ類の底部で、18は小碗である。19はⅢ類のもので、外面には幅の細い鎬連

弁文、内面には片彫りの草花文が施される。20・21は腰の張った器形のものでⅣ類に、22～24はⅣ類もしくはＤⅡ類に位置づけられる。25は体部に沈線による連弁文をもつもので、Ⅳ類もしくはＢⅡ類、26は口縁部に雷文帯を持つもので、Ⅳ類もしくはＣⅡ類と考えられる。27は幅の細い線描きの連弁文をもつＢⅣ類、28は口縁部の内弯するＥ類のものである。29～31は見込みに印刻による草花文が入るもので、32は見込みの中央部の釉が円形にかき取られている。33は底部片の外縁を削り出して円形に加工したもので、皮なめし具などに転用されたものと考えられる。34・35は龍泉窯系の坏Ⅲ類で、35は見込みに魚の貼付文を有する。このほか、小片ではあるが口縁部が輪花状の坏も出土している（図版65）。34～43は龍泉窯系の皿で、36・37はⅠ類、39～42はⅣ類以降のものである。43は稜花皿で、このほか稜花盤（図版66）も出土している。44は小壺、45は香炉である。



第123図　白磁（S＝ 1/4）



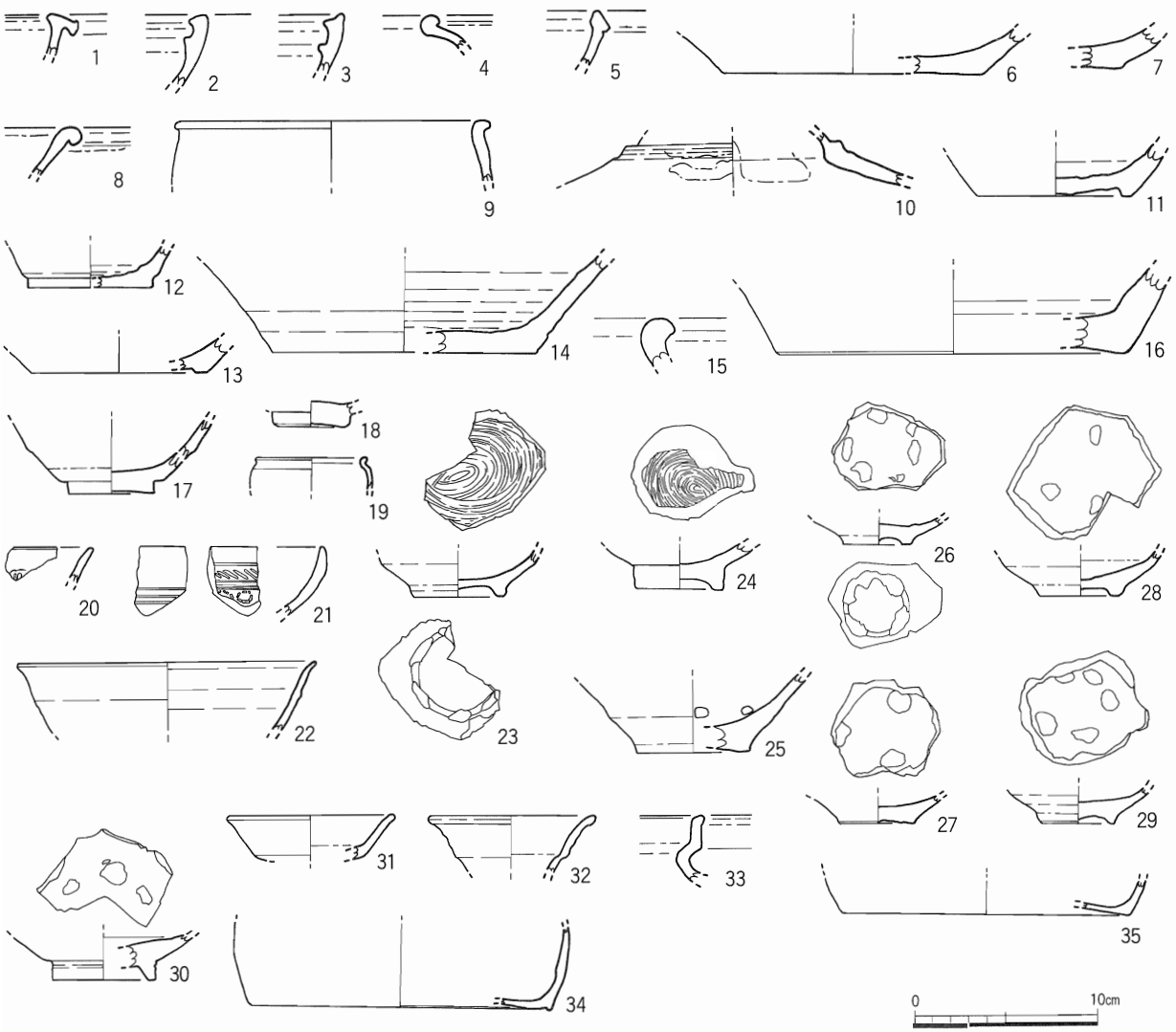
第 124 図　青磁・中国青花（S＝ 1/4）

（６）中国青花（第124図46～59）

46は口縁部が外反するもので碗Ｂ群に分類される。47～48は碗Ｃ群、50は見込み部分が緩やかに盛り上がる碗Ｅ群、51は碗Ｆ群のものである。52は潮州窯系の碗である。53は皿Ｂ１群、54・55は皿Ｃ群、56は皿Ｅ群に分類される。なお、図示していないが、口縁部に四方襷文の施されたＢ２群の皿や、Ｆ群のつば皿も出土している（図版67）。57・58は潮州窯系の皿である。59は中国の五彩皿で、口縁部内面に四方襷文、外面に草花文が施されている。

（７）中国陶器（第125図１～19）

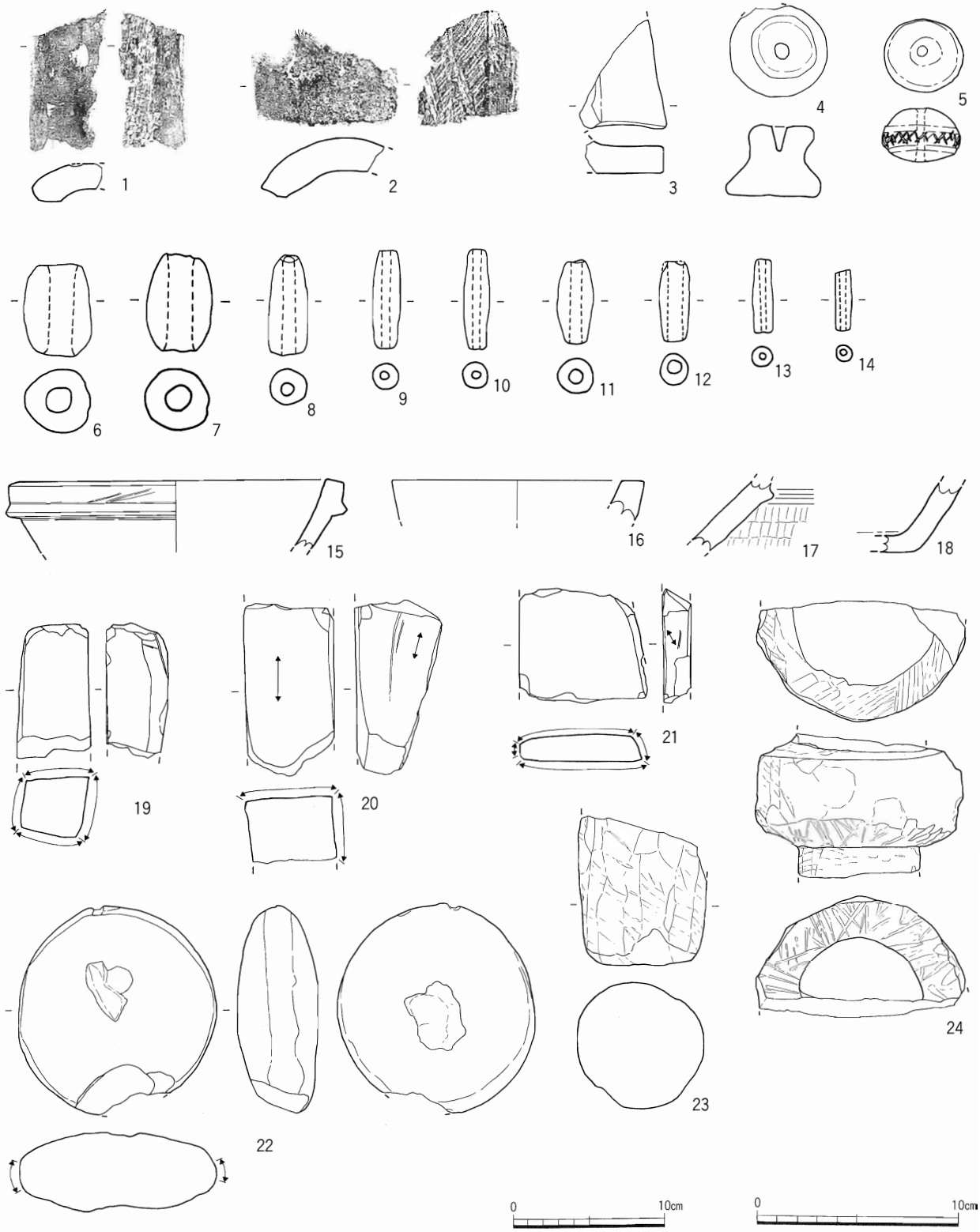
１は口縁部が強く外側に折れる盤Ⅱ類のものである。２・３・６・７は鉢Ⅰ類で、２・３は口縁部内面に２条の突帯が付く。４は鉢Ⅳ－２類、５は鉢Ⅵ類に分類される。８は口縁部が外側に肥厚しており、中国陶器の鉢と思われるものであるが、肥前系陶器の可能性もある。９・10は壷である。11～14は底部の破片で、11・13は壷または鉢、12は水注Ⅴ類、14は壷と考えられる。15・16は胎土に白色の砂礫を多く含むもので、大型の甕の破片と思われる。17・18は天目茶碗で、19は茶入である。このほか、図示していないが体部に稜が入り、褐色の釉が施された大型の壷も出土している（図版68）。この壷の肩部には重ね焼きの目跡が残る。



第 125 図　中国陶器・朝鮮王朝陶磁（S＝ 1/4）

（８）朝鮮王朝陶磁（第125図20～34）

20・21は青磁碗で、沈線や印刻文様に白土を埋め込むなどした象嵌が施されている。22～29は施釉陶器の碗で、23・24は施釉後に刷毛で白土が塗られている。25～29は内外面全面に施釉されており、見込みや高台の畳付に目跡が残る。30は白磁皿で見込み、畳付に目跡が見られる。31は施釉陶器の皿である。32～34は陶器の瓶と考えられる。



第126図　瓦・土製品・石製品（１～３・15～18：S＝ 1/4，４～14・19～24：S＝ 1/3）

（９）瓦・土製品（第126図１～14）

１・２は丸瓦で、１の内面には布目痕が見られる。２の内面には平行した横筋の入るもので、いわゆる「コビキＢ技法」によるものである。３は実測図の上面側が上方に向かって折れ曲がる形状をしており、桟瓦の破片と考えられる。

４は用途不明の土製品で、上面に孔があけられているが貫通していない。５は紡錘車で、最大径となる部分に斜格子目文が施される。

６～14は土錘である。長さに対し直径の太いもの（６・７）、中央部がふくらむ紡錘形のもの（８～12）、管状のもの（13・14）に分類できる。12は最大径に対し、孔径が１cm近くあり、孔径が大きめのものである。

（10）石製品（第126図15～24）

15～18は滑石製石鍋である。15・17は、鍔の断面形が三角形に近い不等辺台形を呈している。16は復元口径が16.8cmのもので、口縁端部から2.5cm下がった位置でも鍔が見られない。鍔を持たないものか、口縁端部とみている部分が実は破片を二次的に加工して作り出された面なのかもしれない。18は底部の破片である。石材は、15・17がやや赤紫をおびているのに対し、16・18は灰色のものである。

19～21は砥石で、19は凝灰岩、20は砂岩、21は頁岩で作られている。22は叩き石で、上下面の中央は使用により窪んでおり、側縁部にも敲打痕が巡っている。石材はデイサイトである。23・24は石造物の破片で、23は石塔の差込部、24は五輪塔の空風輪のうち空輪が欠損したものと考えられる。両者とも砂岩製のもので、鑿状の工具痕が顕著にみられる。

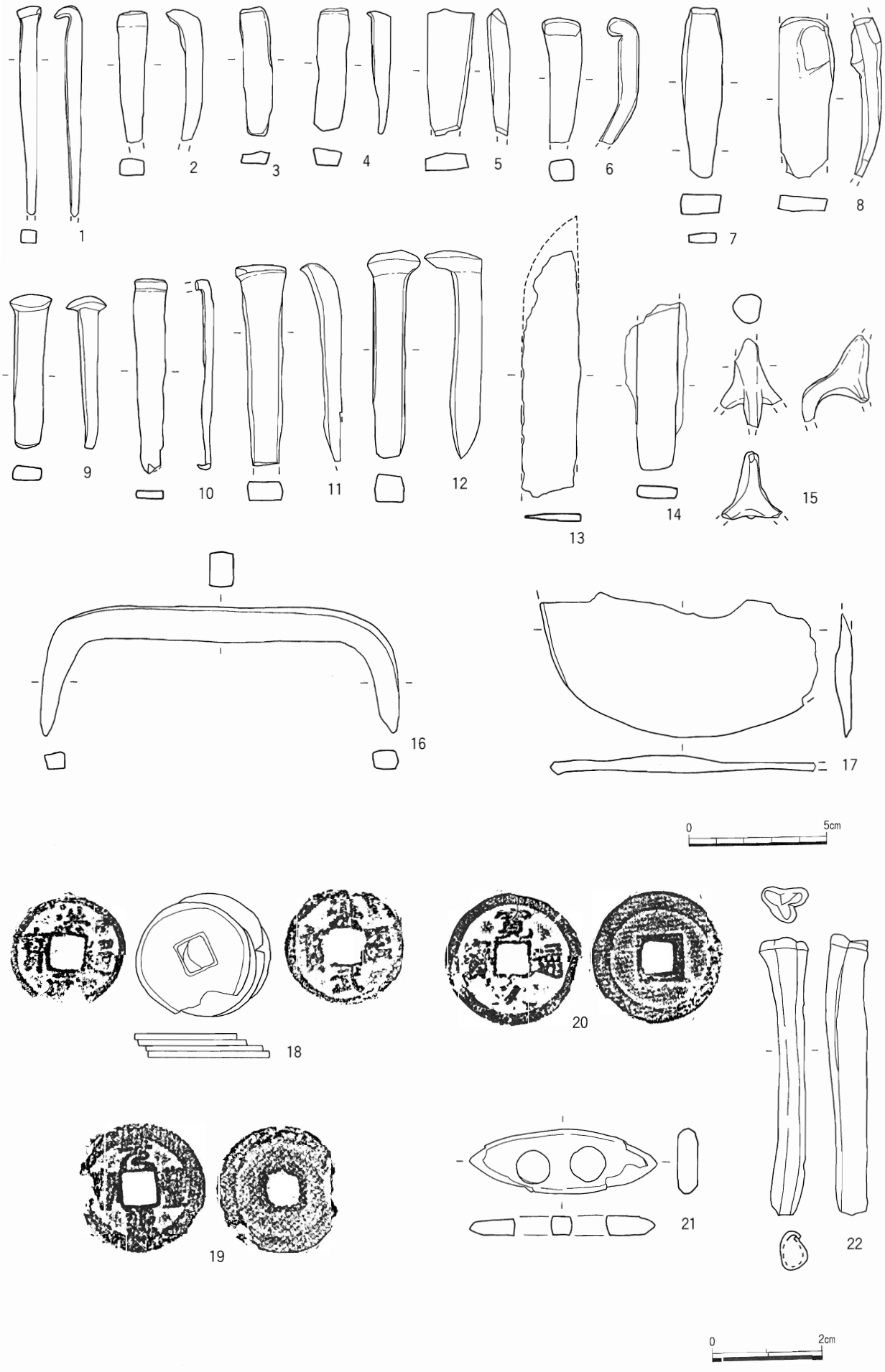
（11）金属製品（第127・128図）

１～17は鉄製品である。１は釘で、頭部が折り返しによって作られている。２～11は楔で、２・６・10は折り返しによって頭部が作られており、９は丸みのある大きな頭部をもつ。12は鑿で、頭部は大きく折り返されており、刃部は厚みのある鑿刃状につくられている。12は刀類の切先に近い部分の破片で、身の幅は2.1cmである。14は刀類の茎の破片と考えられる。15は用途不明の鉄製品で、先端部が鳥足状に３つに分かれている。16は鏃で、長さ13.2cm、厚さ0.9cmのものである。17は鋤先の欠損品と考えられる。

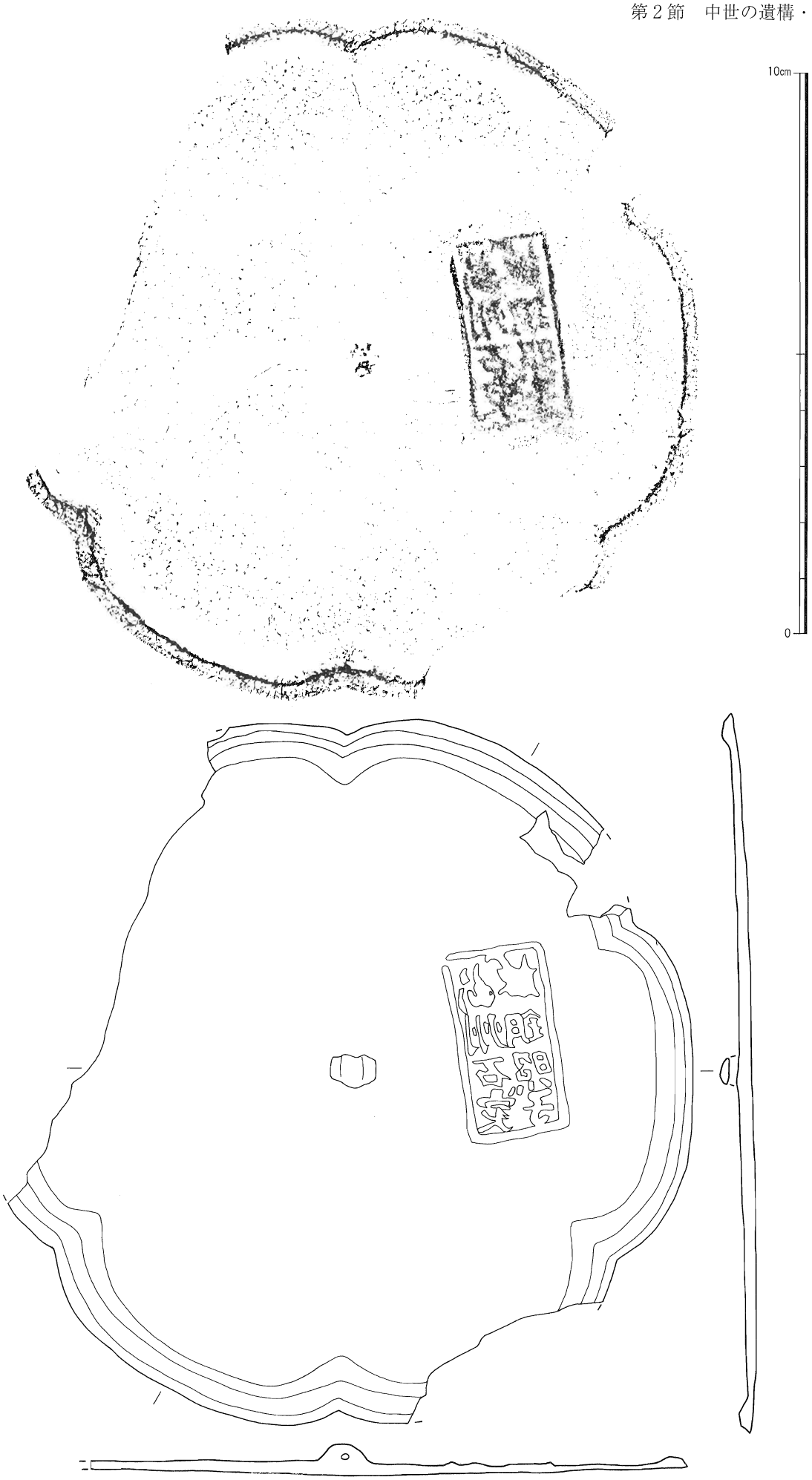
18～20は銭貨である。18は４枚が錆着したもので、表・裏面ともに洪武通寶である。19は元豊通寶で、篆書体の文字が鋳出されている。20は新寛永銅一文銭で、溝状遺構８の上部で出土したものである。

21・22は銅製品である。21は、左右に円孔をもつ杏仁形の平面形をしたもので、甲冑金具である。22は用途不明の銅製品である。薄い銅板を巻いて管状にしたもので、一方の端部は３つの環がつながったかたちになっている。

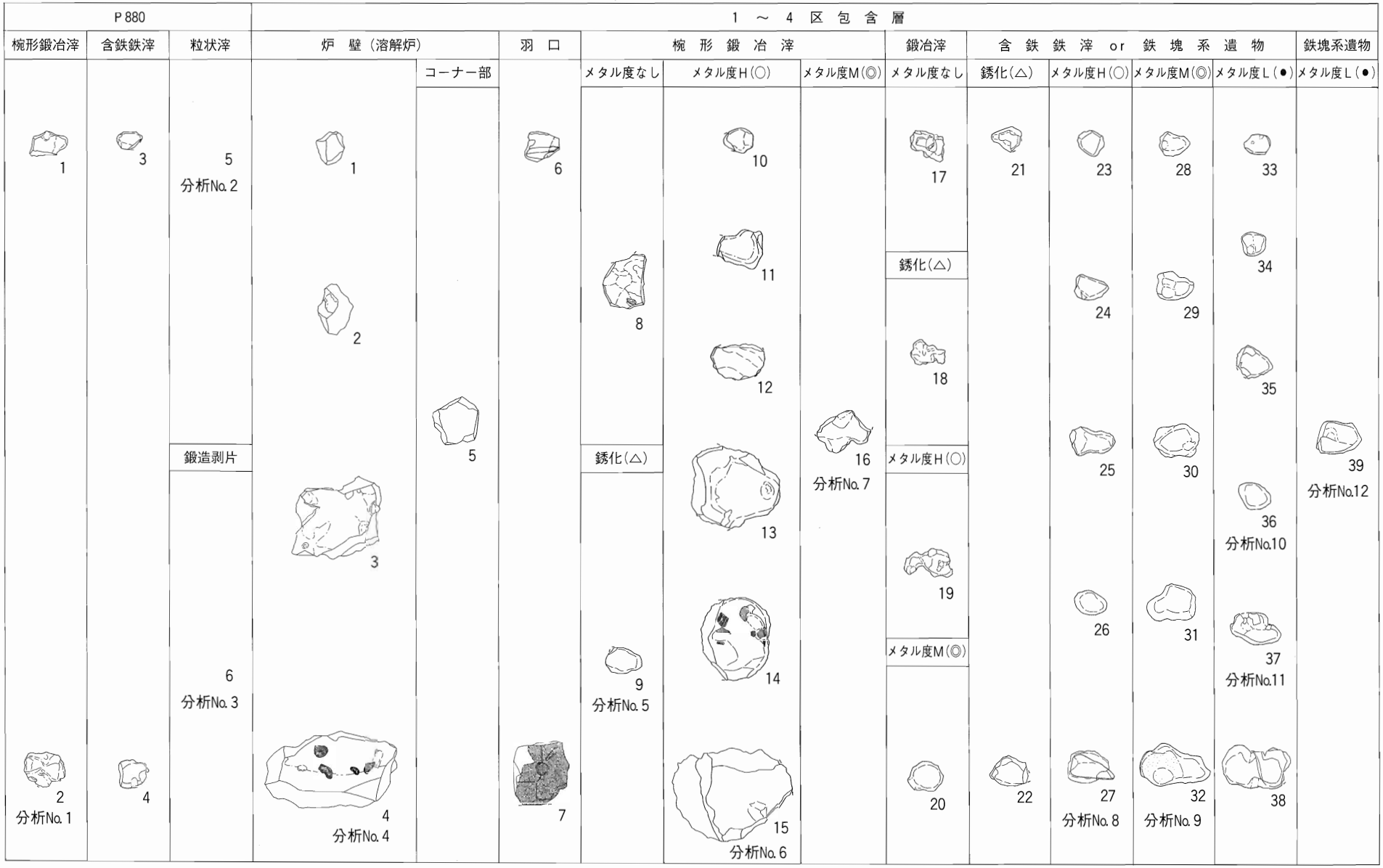
第128図は湖州六花鏡で、３区の12Mグリッドの２層を掘削中に出土したものである。面径は12.8cmで、厚さは鈕を含めて0.65cmある。外縁は蒲鉾形の断面形をしており、鏡背面の長方形の枠内には「湖州石家□銅照子」の銘が逆文字で鋳出されている。



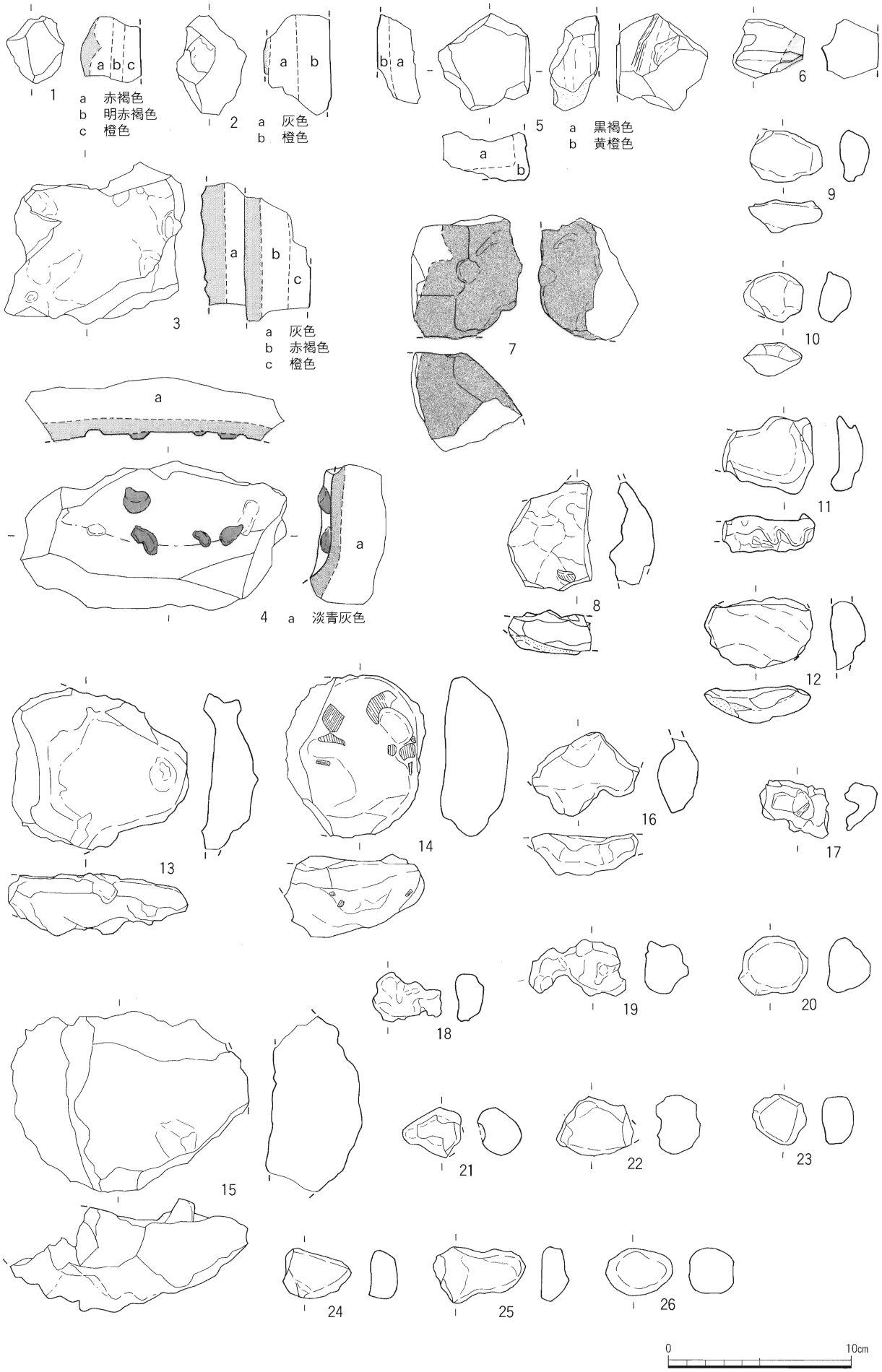
第 127 図　鉄製品・銭貨・銅製品（１～17：S＝ 1/2，18～22：S＝ 1/1）



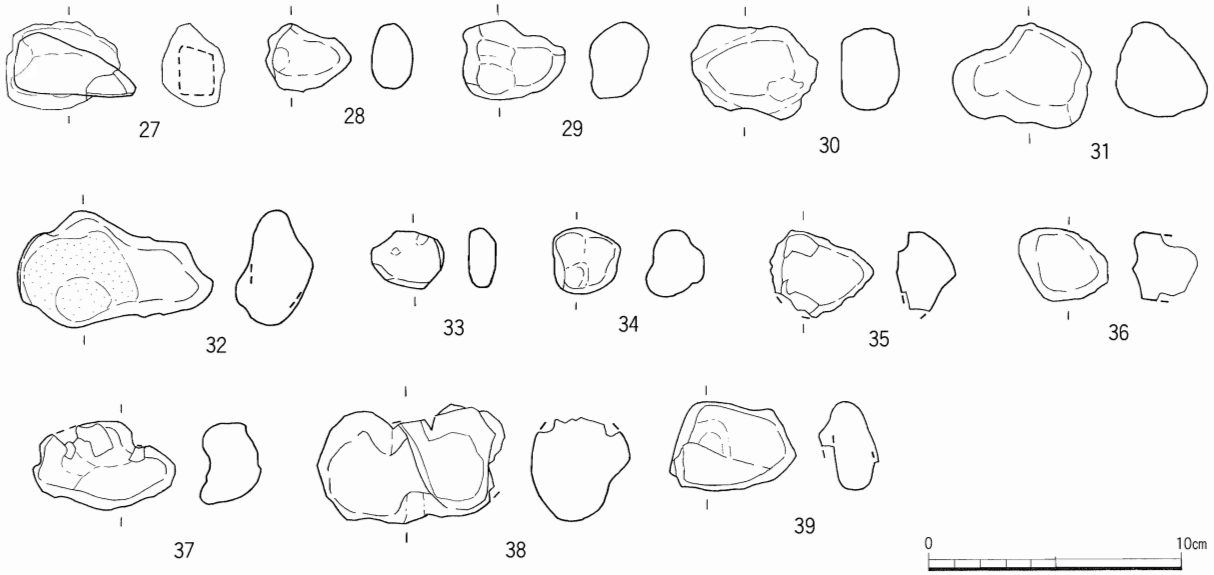
第 128 図　湖州鏡（S＝ 1/1）



第129図　鍛冶・鋳造関連遺物構成図（S＝ 1/6）



第 130 図　鍛冶・鋳造関連遺物（S＝ 1/3）



第 131 図　鍛冶・鋳造関連遺物（S＝ 1/3）

（12）鍛冶・鋳造関連遺物（第129～131図）

１～５は鋳造関連の溶解炉の炉壁と考えられ、１～４は被熱により内面が黒色ガラス質に滓化している。２は内外面とも生きており、厚さは3.7㎝である。３は黒色ガラス質に滓化した部分が２層見られることから、一旦操業を終えた後に補修して、再度使用したことが分る。４は断面形状から、炉の基底部から立ち上がった部分の破片と考えられるもので、内面には鉄塊が付着していた。金属学的分析から、内面の鉄塊は鋳鉄で、炉壁の溶融部には鍛冶滓や製錬滓が見られないことから鋳鉄を溶解した炉と考えられている。５は炉壁のコーナー部の破片と思われるもので、胎土中にはスサを多く含んでいる。

６・７は羽口で、断面形は方形、もしくは隅円方形であったと考えられる。６の送風孔の復元径は3.5㎝である。７は先端部が斜めに溶損している。

８～16は椀形鍛冶滓で、８はメタル度なし、９は錆化（△）、10～15はメタル度Ｈ（○）レベル、16はメタル度Ｍ（◎）レベルのものである。この遺物群の中で見た場合、９・10は小型、11・12は中型、13・14は中型からやや大型、15は大型のものに分類できる。11・16は流動状の外観を持っている。９・15・16については金属学的な分析から、いずれも鍛錬鍛冶の初期に生成したものと推測されている。

17～20は鍛冶滓と考えられるもので、17はメタル度がなく、18は錆化（△）、19はメタル度Ｈ（○）レベル、20はメタル度Ｍ（◎）レベルに分類される。

21～38は、含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物と判断したもので、鍛冶・鋳造の原料鉄塊か、鍛冶工程における生成物と考えられる。この中には、32などのように流動状の質感をもち、鋳鉄の可能性があるものも含まれている。27・32・36・37は金属学的な分析がされており、27は鉄素材もしくは製品化途中の鉄塊、32は鋳鉄塊、36は精錬鍛冶工程で生成した鉄塊、37は鍛冶工程で生成した可能性をもつ鉄塊と推測されている。

39は厚板状の鉄塊系遺物で、外観から鍛冶工程途上の鉄塊か半製品、あるいは板状の銑鉄塊の可能性を想定した。金属学的な分析から、この遺物は砂鉄を始発原料として、炭素量が0.8％程度に調整されたもので、鍛錬鍛冶工程における鉄素材の可能性が高いと推測されている。

第３節　下層の調査

１　２区下層の調査

（１）２区の土層（第６図）

２区の土層は上から、表土（１層）－中世の遺物包含層である黒褐色土（２層）－黄褐色土（３層）－淡暗褐色土層（４層）－黄褐色砂質土（５層）－灰黄褐色～暗灰褐色砂（６層）に分けられ、それ以下では有機質分を含む暗灰色～黒灰色土層やそれに砂が混じった層（７～18層）が不連続的に堆積し、その下は礫層となっている。ただし、４～６層については漸移的に変化しているため、平面的に掘削しながら土層の識別をするのは困難な状況であった。

遺物は、４層では弥生時代～古墳時代前期のものが出土しており、５・６層ではほとんど見られなかったが、７層で弥生時代中期中葉の土器が１点出土している。また、遺構として杭列が14・15層中で確認された。

礫層上面の標高は調査区南壁側では約0.2～0.5m程度（地表面からの深さ120～150cm）であったが、調査区北西側では1.05mと高くなっている。

なお、南壁の14層で枝状の木片を採取し、放射性炭素年代測定を行なったところ、補正年代で2400±40yrBP（暦年代BC740～390）というデータが得られた。

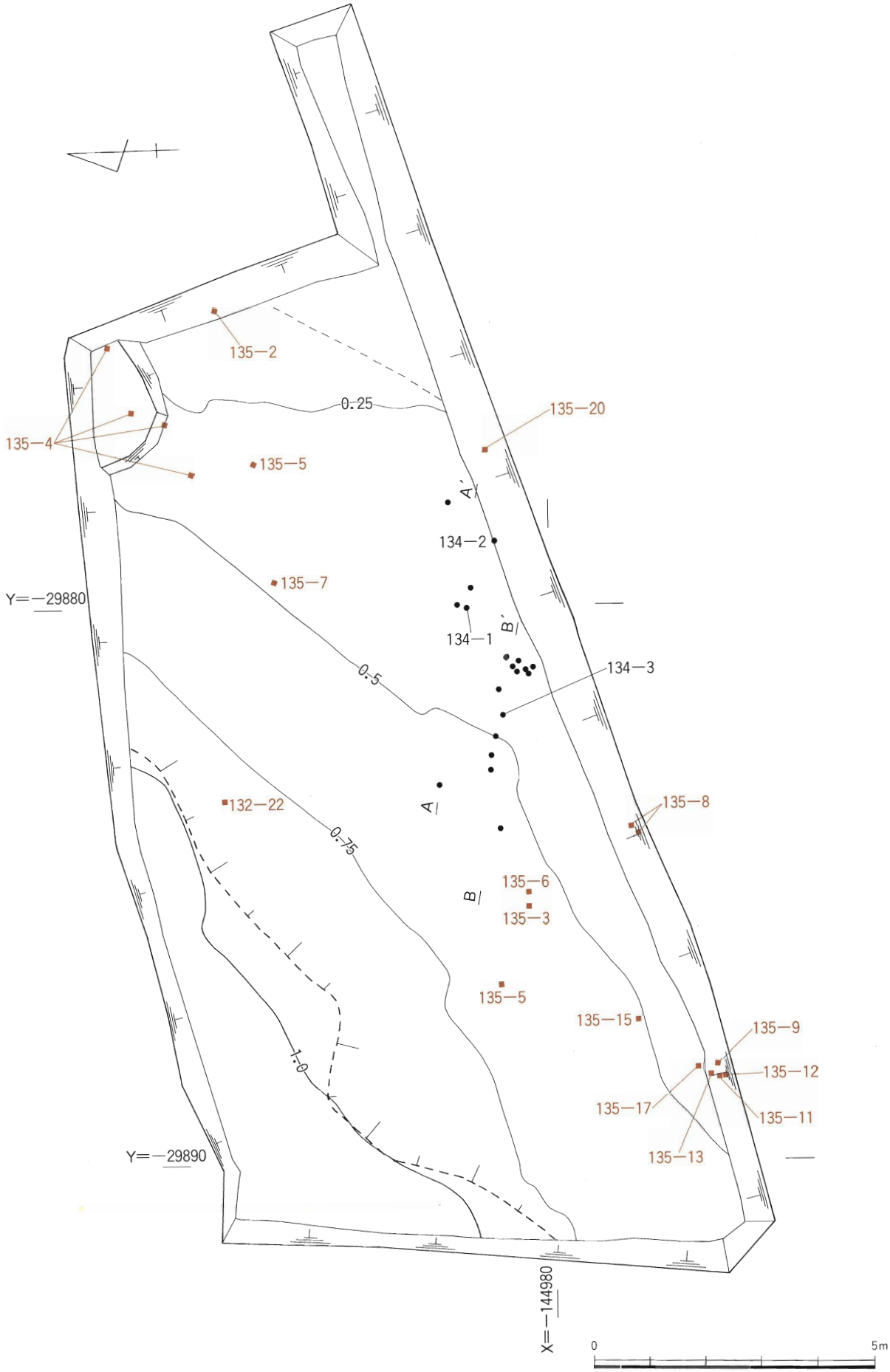
（２）調査経過

１節の３で若干ふれたが、ここで改めて述べることとする。

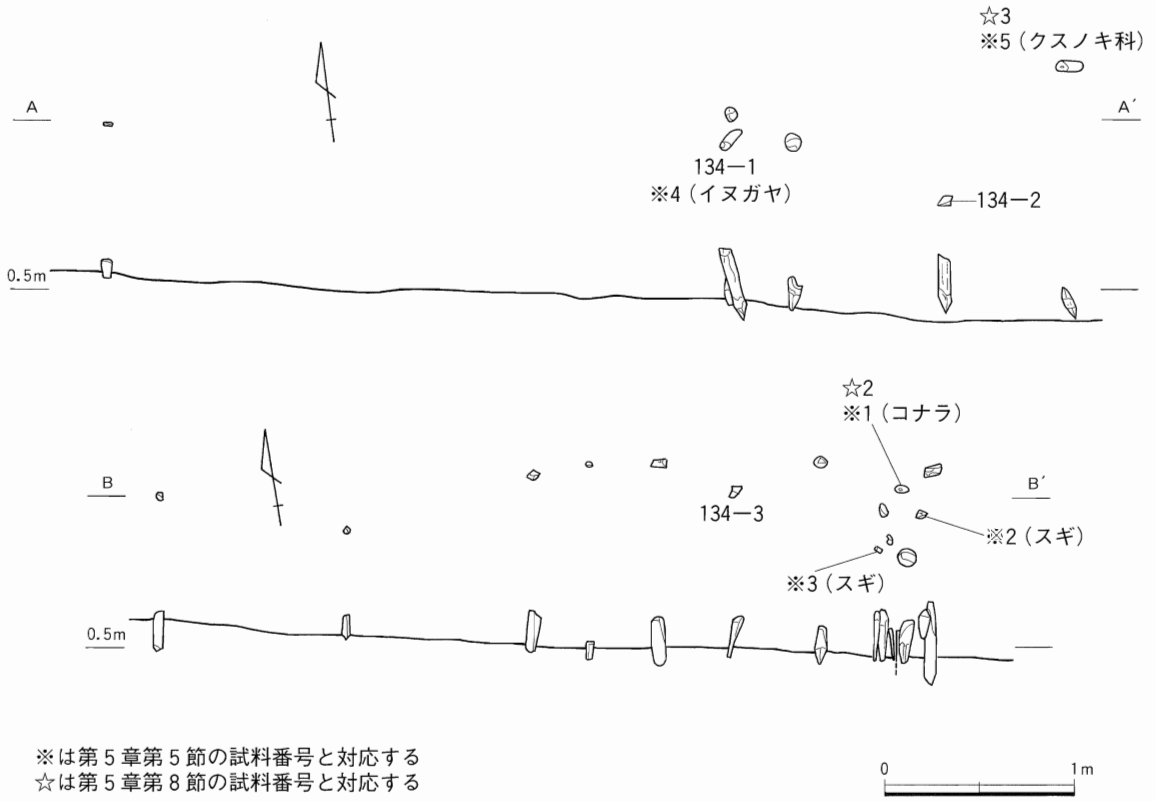
調査当初は中世の遺構検出面（３層上面）の下層に遺構・遺物が存在するとは想定してなかったが、調査区南西側で土層確認のためサブトレンチを設けたところ、４層中から古墳時代前期の土師器がかたまって出土した（図版37－２）。このため、中世の遺構の調査を終えた段階で、２区南東隅から南壁に沿って長さ23m、西壁に沿って長さ９mのトレンチ（２－１トレンチ）を設定して、下層における遺物の分布や遺構の有無を確認した。遺物はトレンチの西側ではまとまりが見られたものの全体的に少なく、東側ではほとんど出土していなかったが、トレンチの中央部で杭が打ち込まれているのが確認された。また、追加で２区の南東隅に設定した２－２トレンチでは遺物・遺構は確認できなかった。このことから２区の南西隅から東へ約20m、北へ約９mの範囲を面的に調査することとした。

（３）杭列（第132～134図）

前述したように、14・15層中で調査区中央部南寄りの位置で東西方向にのびる杭列が確認された。これらは、どの層からか特定できないが、これよりも上層から打ち込まれたものと考えられる。杭列は、Ａ－Ａ'ラインにのるもの（以下、Ａ列）と、Ｂ－Ｂ'ラインにのるもの（以下、Ｂ列）の２列が存在するようにも見えるが、Ａ列については杭の本数が少なく不明瞭である。Ｂ列の東側で７本の杭がかたまって検出されており、この部分だけ見ると南北に長いかたちになっていることからＢ列とぶつかる別の杭列が存在した可能性もある。Ａ・Ｂとも調査区の南東側にさらに続くものと考えられる。



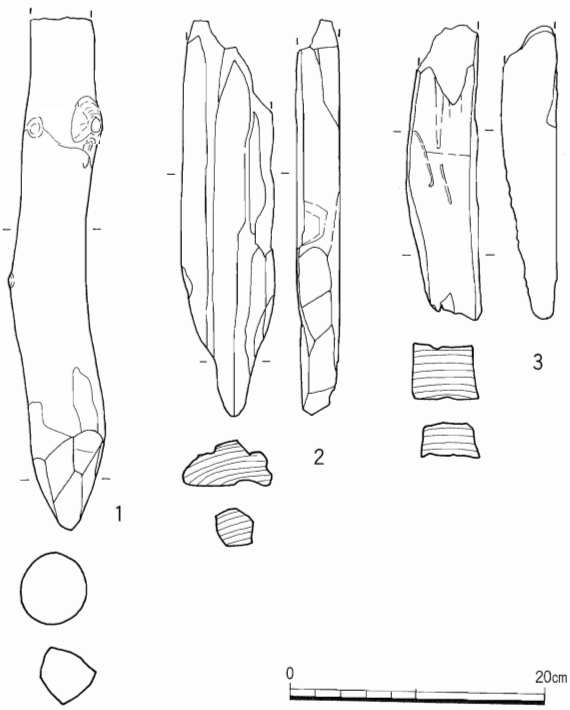
第 132 図　２区下層測量図（S＝ 1/100）



第 133 図　２区下層杭列（S＝ 1/40）

杭の一部については樹種鑑定を行なっており、コナラ、スギ、イヌガヤ、クスノキ科の材が使用されていることが分った。スギ材のものは断面形が角形に加工されているが、その他のものは丸のまま使用されている。

134－１～３は２区下層の杭で、１・２はＡ列のもの、３はＢ列のものである。１はイヌガヤのもので、丸い棒状の材の先端を尖らせるように加工したものである。２は断面形が半円状のもので、先端部は左右両端を切断するようにして作られている。３は断面が角形のもので、先端は楔状になっている。樹種鑑定は行なっていないが、針葉樹材と推測される。



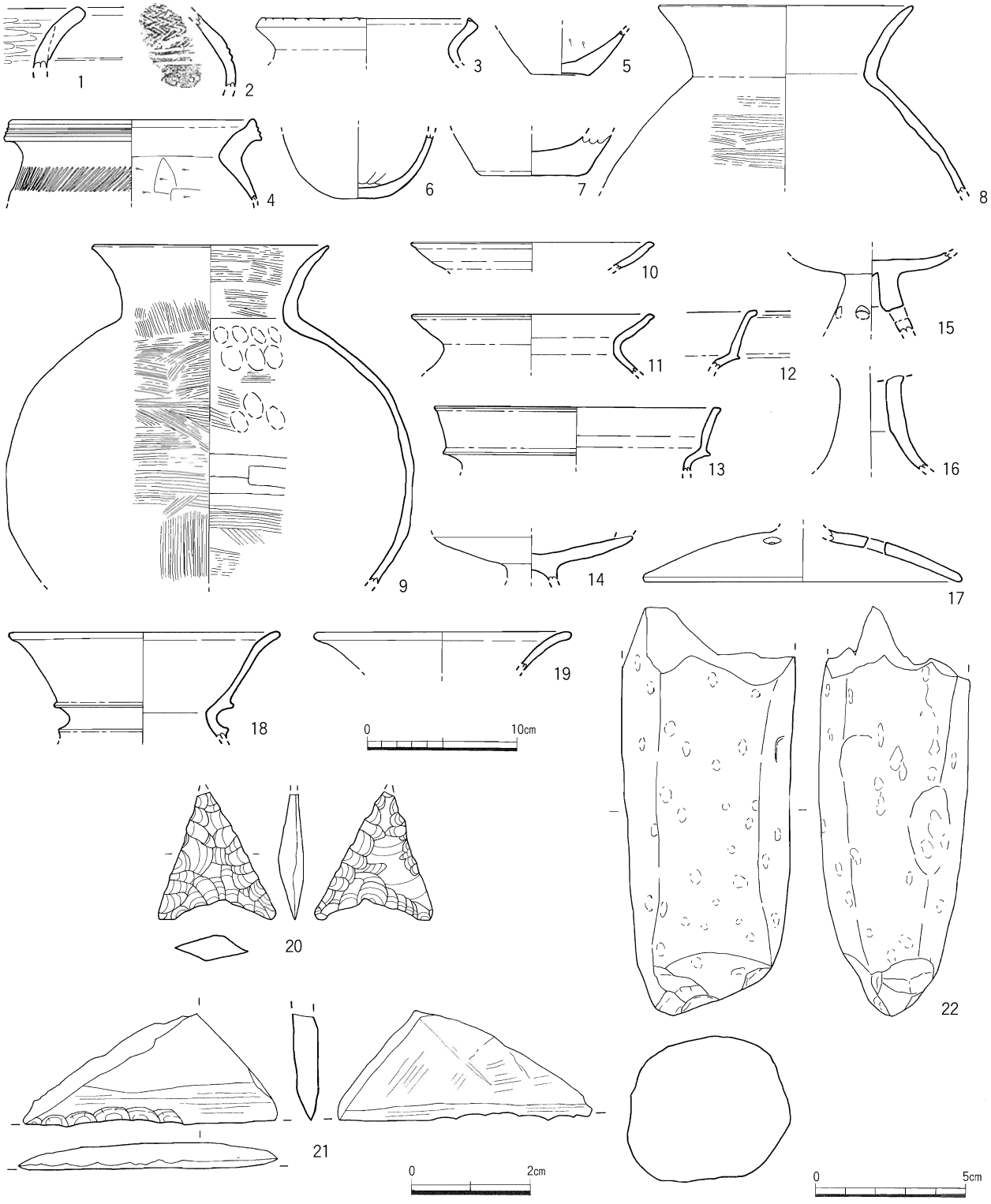
第 134 図　２区下層出土杭（S＝ 1/6）

なお、杭のうちＡ・Ｂ各列から１点ずつ放射性炭素年代測定を行なっている（試料番号２・３）。試料番号２は補正年代で2150±40yrBP（暦年代でBC360～60）という年代が、３は補正^{14}Ｃ年代で2400±40（暦年代BC740～390）というデータが得られた。

（４）出土遺物（第135図）

遺物は大部分が４層から出土しており、ここに掲載したものでは３のみ７層から出土した。

１～５・７は弥生土器である。１は口縁部の外面に段が付くもので、弥生時代前期の壷と考えられる。２は外面に篦描沈線や貝殻腹縁による羽状文が施されたもので、Ⅰ－２様式のものとみられる。３はⅢ－２様式の甕で、口縁端部が上方に拡張し、刻目が施されている。４はⅤ－１様式のもので、口縁部に凹線、肩部に篦状工具による刺突が見られる。５・７は底部片で、５は内面がヘラケズリされたものである。



第135図　２区４～７層出土遺物（１～19：S＝ 1/4，20・21：S＝ 1/1，22：S＝ 1/2）

６・８～19は古墳時代の土師器で、これらのうち８～13・15～19は前期のものと考えられる。なお、９・11～13・17は調査区南壁付近で１か所にかたまって出土したものである。６は鉢と思われるもので、やや退化した平底をもち、体部は丸みがある。８・９は口縁部が外反し、体部が丸みを持った壷である。10～14は甕の口縁部片で、10・11は単純口縁のもの、12・13は複合口縁のものである。14～17は高坏で、17は脚部下半が内弯しながら大きく開くものである。なお、14は墓８の棺底板をはずした際に墓壙底面から出土したものであるが、４層に伴うものと考えられる。18・19は鼓形器台である。

20～22は石器で、20は黒曜石製の石鏃である。21は頁岩製の磨製石包丁で、表面側には刃部の再調整のためか剥離が施されている。22は磨製石斧の未成品で、全面に敲打痕が見られ、研磨された様子はない。

２　３区下層の調査

（１）３区の土層（第７図）

３区の土層は、上から表土（１層）－水田造成土もしくは中世の遺物包含層とみられる淡暗灰色土（１－２層）－中世の遺物包含層である黒灰色～淡暗黄褐色土（２層）－黄褐色土（３層）－暗褐色～淡暗黄褐色土（４層）－灰黄褐色土（５層）－暗灰褐色～暗灰色土（６層）－黒色有機質分を含む土壌が筋状に入る淡青灰色砂質土（７層）－淡黒灰色～黒褐色粘質土（８層）－暗青灰色砂と黒褐色粘質土が混ざる層（９層、下へ行くほど砂が主体となる）が確認された。

このうち４・５層から弥生土器が少量出土しており、溝状遺構19が４層を、溝状遺構18・20・21が５層を掘り込んでいるのが確認された。また、７層上面（標高）では弥生時代中期中葉の溝状遺構22・23が検出されている。そして、さらにその下層の８層中から丸木舟が出土した。丸木舟の内側底面の標高は約0.5mで、地表からの深さは約1.3mある。

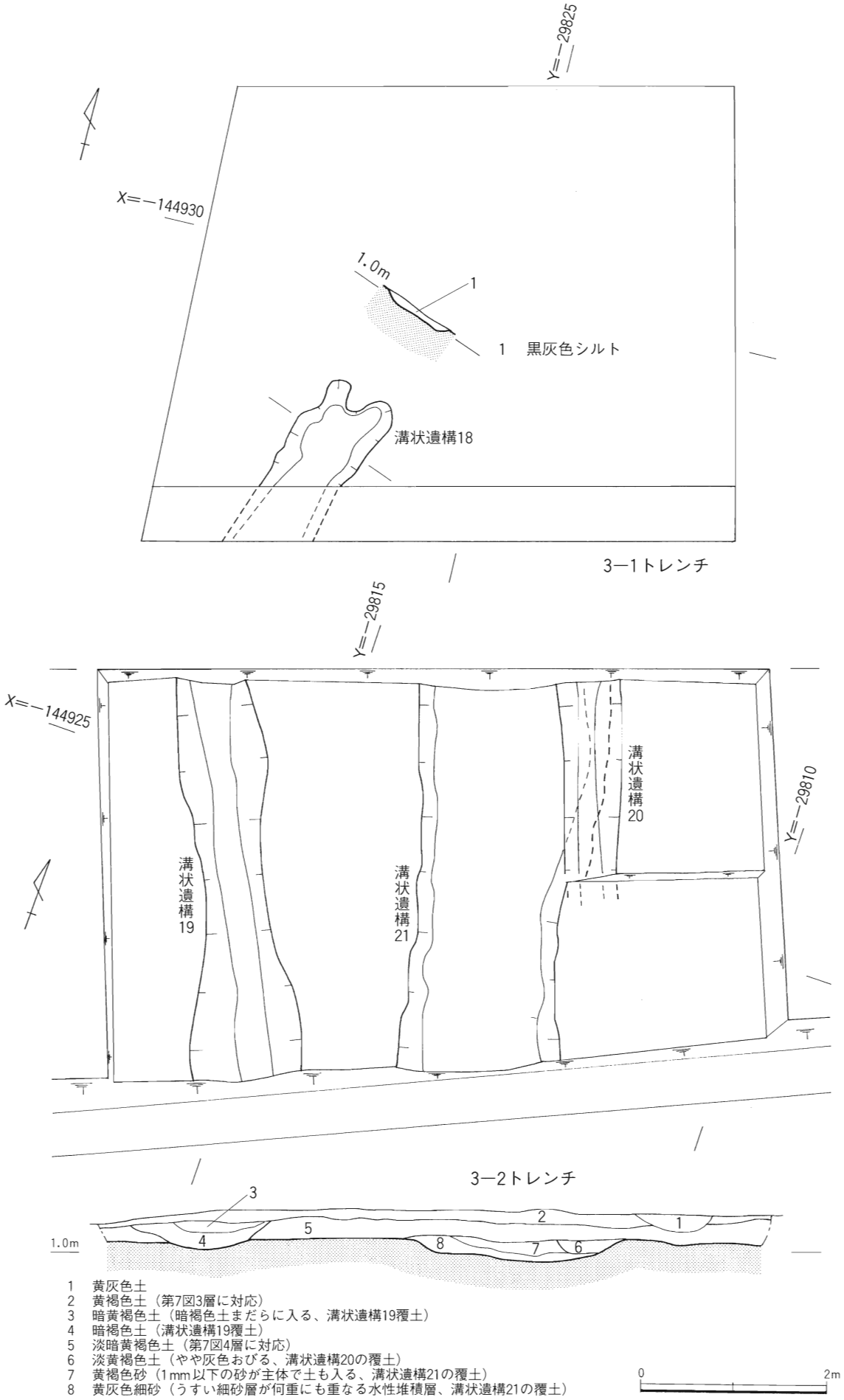
（２）４・５層で検出された遺構・遺物（第136・137図）

２区下層で遺構・遺物が検出されたため、３区においても遺構・遺物の有無を確認するために、３－１～３トレンチを設定し、さらに調査区南壁に沿って１m幅でサブトレンチを掘り下げた。３－３トレンチでは遺構・遺物は確認できなかったが、３－１・２トレンチでは、溝状遺構や弥生土器が検出された。

３－１トレンチは３区の南西隅に設定したトレンチで、４層中から弥生土器が出土し、５層上面で溝状遺構18が検出された。溝状遺構18は南北方向にのびるもので、幅は約80cm、深さ約10cmで、断面形は浅い皿形を呈している。南側は調査区外につづき、北側は調査区南壁から1.7mのところで二又に小さく分かれるが、そこで終わっている。内部には、やや砂質をおびた黒灰色粘質土が堆積しており、弥生土器小片が出土した。

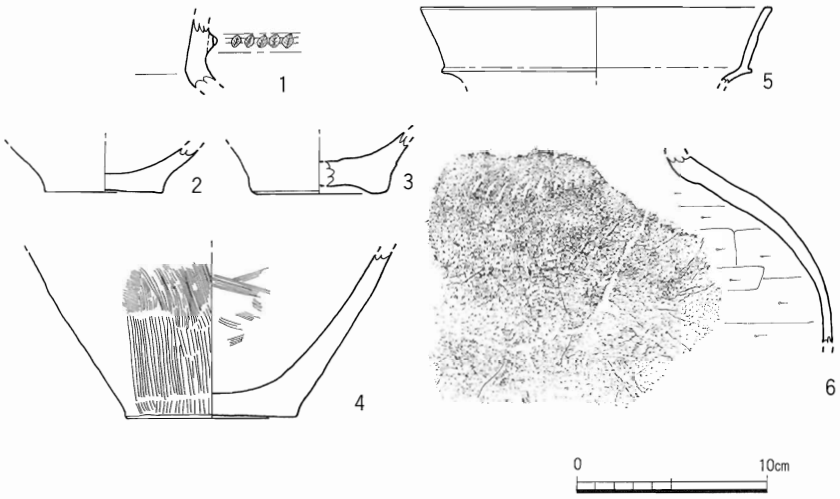
３－２トレンチは３区の南側中央に設定したトレンチである。当初は３m四方の規模で設定していたが、溝状遺構20・21が確認できたこと、この西側で南壁に沿って掘り下げたサブトレンチから溝状遺構19の断面が見られたことから、西側と東側にトレンチを拡張し、東西７m、南北５mの範囲でこれらの遺構がどのようにのびるのか調査することとした。

溝状遺構19は、４層から掘り込まれており、トレンチの西側で南北方向にのびている。ただし、



第136図　３－１・２トレンチ実測図（S＝ 1/60）

覆土が４層と似ているため、４層上面では輪郭を把握することができず、５層上面でようやく検出することができた。溝の規模は、トレンチ北壁で幅1.5m、深さ30cmであった。南北ともトレンチの外側にさらにのびるが、つづきは確認していない。



第137図　３区４～６層出土遺物（S＝ 1/4）

溝状遺構20・21は、トレンチの東側を南北方向にのびる溝で、５層上面から掘り込まれている。両方の覆土は黄褐色系の土色であったため、当初設定した３m四方のトレンチの範囲では遺構の基盤層である５層との区別ができずに掘り過ぎてしまったが、南壁の断面で溝の落ち込みがあることが分かり、その後、トレンチの拡張によって平面的に溝の形状を確認することができた。

溝状遺構20は、幅0.7m、深さ12cmの断面形が浅い皿状のもので、溝状遺構21の東側の肩を切って掘り込まれている。溝状遺構21は、幅２m、深さ30cmの浅い皿状の断面を持つもので、覆土の下層は、黄灰色細砂がうすく何層も重なって堆積しており、水が流れていたと考えられる。

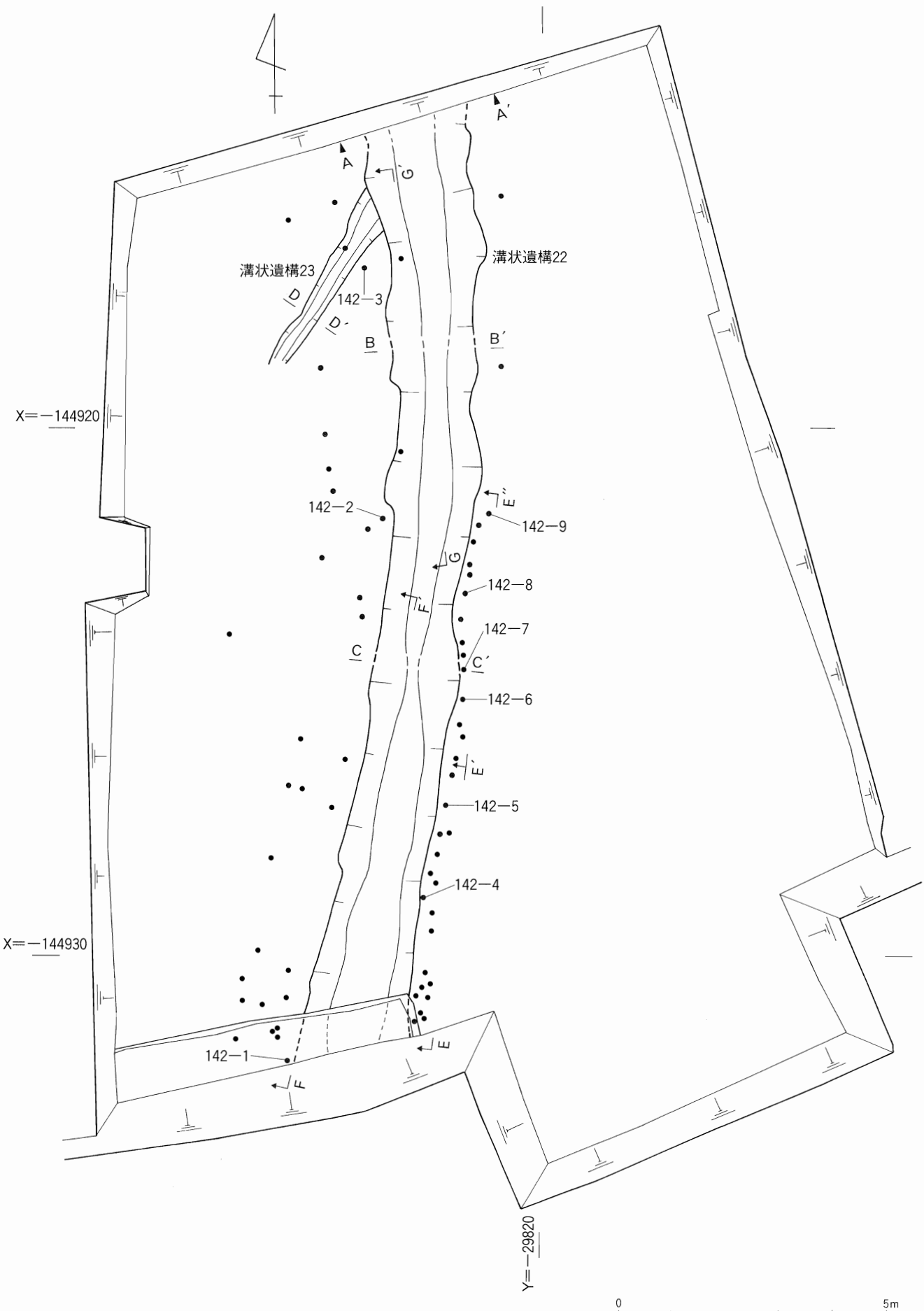
なお、溝状遺構19～22は、いずれもトレンチの北側にさらにのびるが、遺構の覆土が４・５層と類似していること、なおかつ４層と５層も漸移的に変化していることから、土層を識別しながら平面的に掘削し、遺構を検出するのは困難であったため、これらの遺構のつづきを確認するのは断念した。これらの遺構から時期を特定できるような遺物は出土していない。

第137図は、３区４層・５層から出土した遺物である。１は弥生土器の壷で頸部に刻目の施された突帯が巡る。２～４は弥生土器の底部で、３はやや上げ底状になっている。５は弥生時代後期の壷で、肩部に貝殻腹縁による刺突が施されている。６は複合口縁の甕で、口縁端部は面取りがされている。弥生時代後期末のものと考えられる。

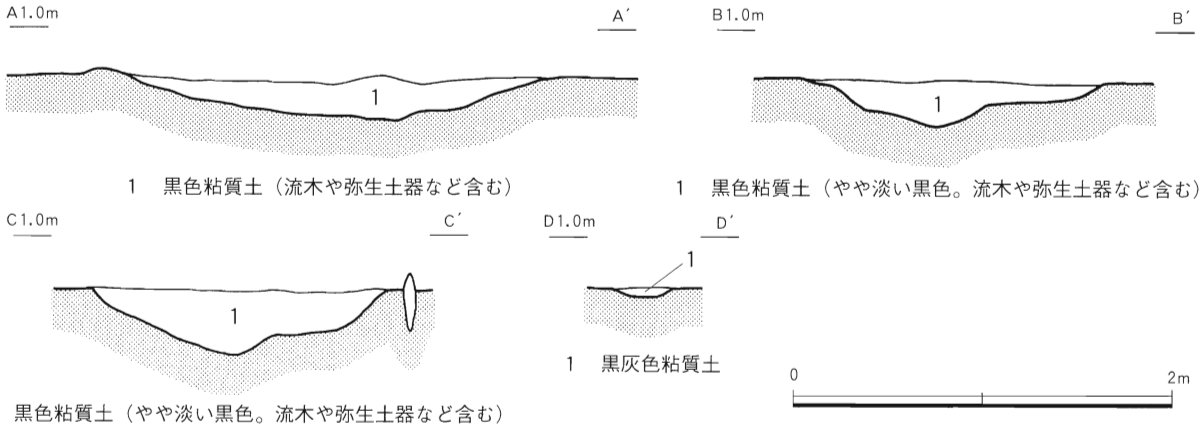
（３）７層上面の遺構（第138～145図）

南壁に沿って設定したサブトレンチから、３区の西側で７層上面（標高0.8m、地表からの深さ約１m）から溝状遺構22が掘り込まれているのが確認できた。この遺構の覆土は有機質分を含む黒色粘質土で、７層（淡青灰色砂質土）とは明瞭な違いがあり、遺構の検出は容易であった。この遺構の平面形を追及するかたちで、最終的に南辺長16m、北辺長11m、南北の長さ17mの台形状の範囲を面的に発掘した。

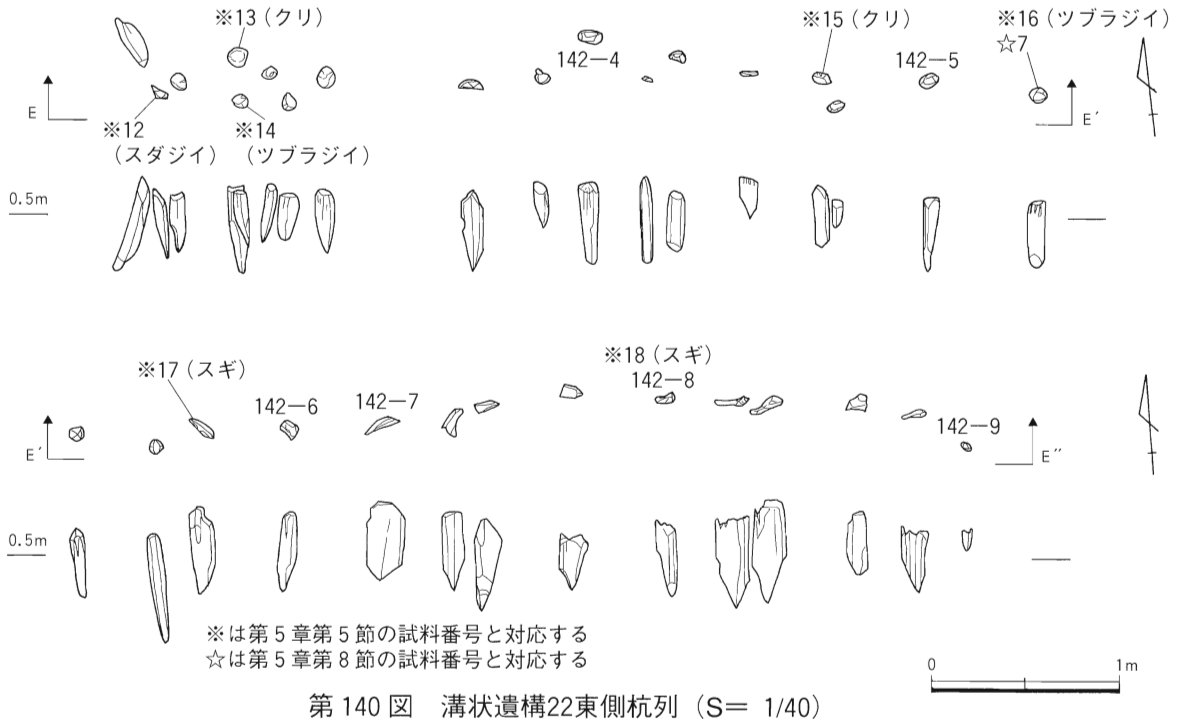
溝状遺構22は、幅1.5～1.8mの南北方向にのびるもので、調査区中央からやや北西側に向かって弧状に反ったかたちをしている。遺構の深さは、調査区北壁側が20cm、南壁側が45cmで、南へ行くにつれて深くなっている。北西側では、南西から北東方向にのびる溝状遺構23がつながっている。溝状遺構23は、幅0.3～0.6m、深さ５cmで、断面形は浅い皿状になっている。



第138図　溝状遺構22・23（S＝ 1/100）



第 139 図　溝状遺構22・23土層図（S＝ 1/40）



第 140 図　溝状遺構22東側杭列（S＝ 1/40）

溝状遺構22は、東西両側に杭列を伴っていた。

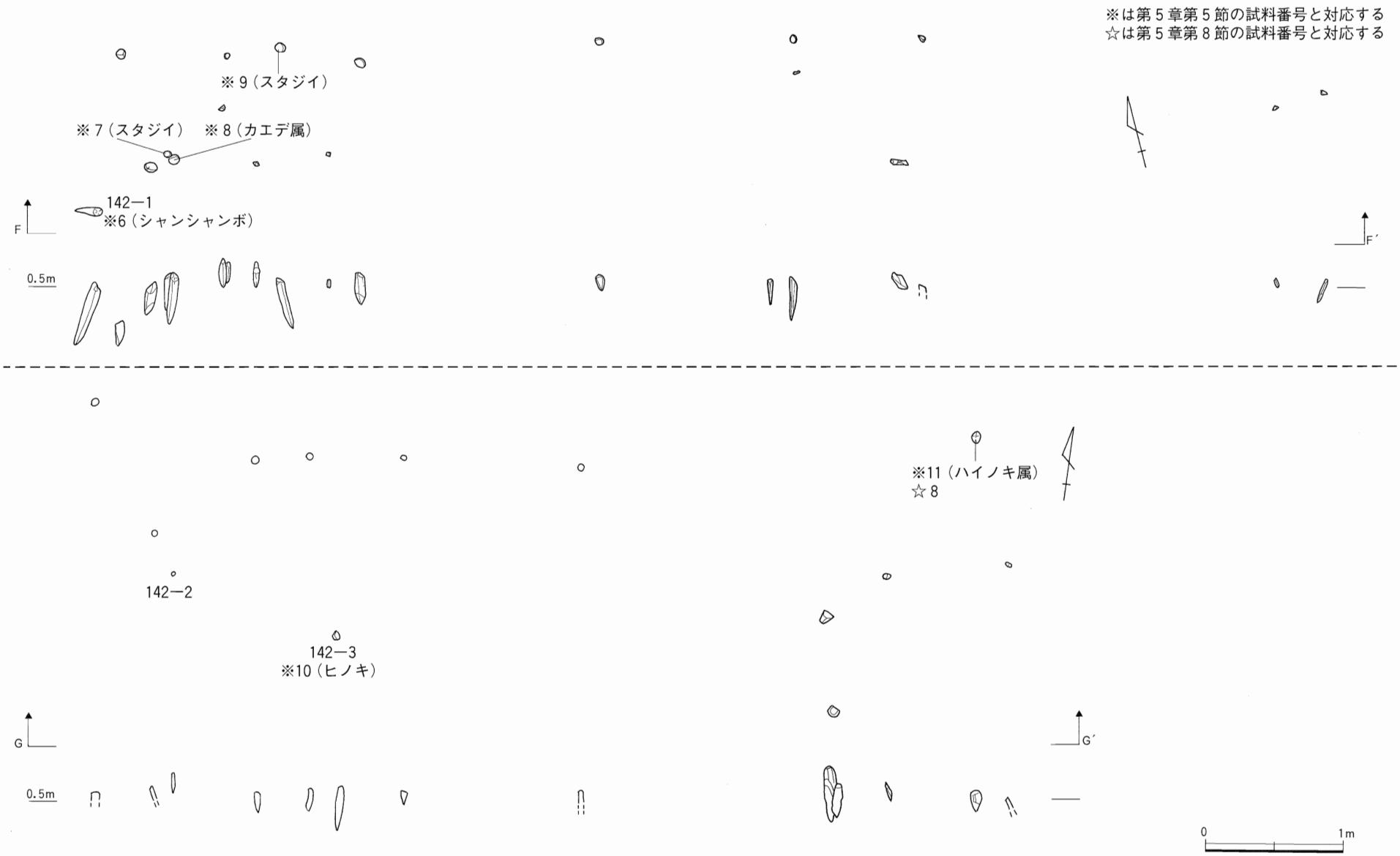
東側の杭列は、調査区南側から中央にかけて杭が１列に間隔を密にして並んでいるが、北側では杭がほとんど見られなくなっている。杭は、断面形が丸いものや、角形に整形されたものなどが見られるが、調査区中央部では、幅の広い厚板状のものが多く用いられている。

一方、西側の杭列は、２条の杭列が調査区中央でやや北西よりに曲がったかたちになっており、また、東側の杭列と比べると杭の間隔がまばらである。杭は、丸い棒状のものや、角形のものが見られるが、東側の杭列のものと比べると全体的にやや細めのものが多く、東側で多用された厚板状のものは見られない。

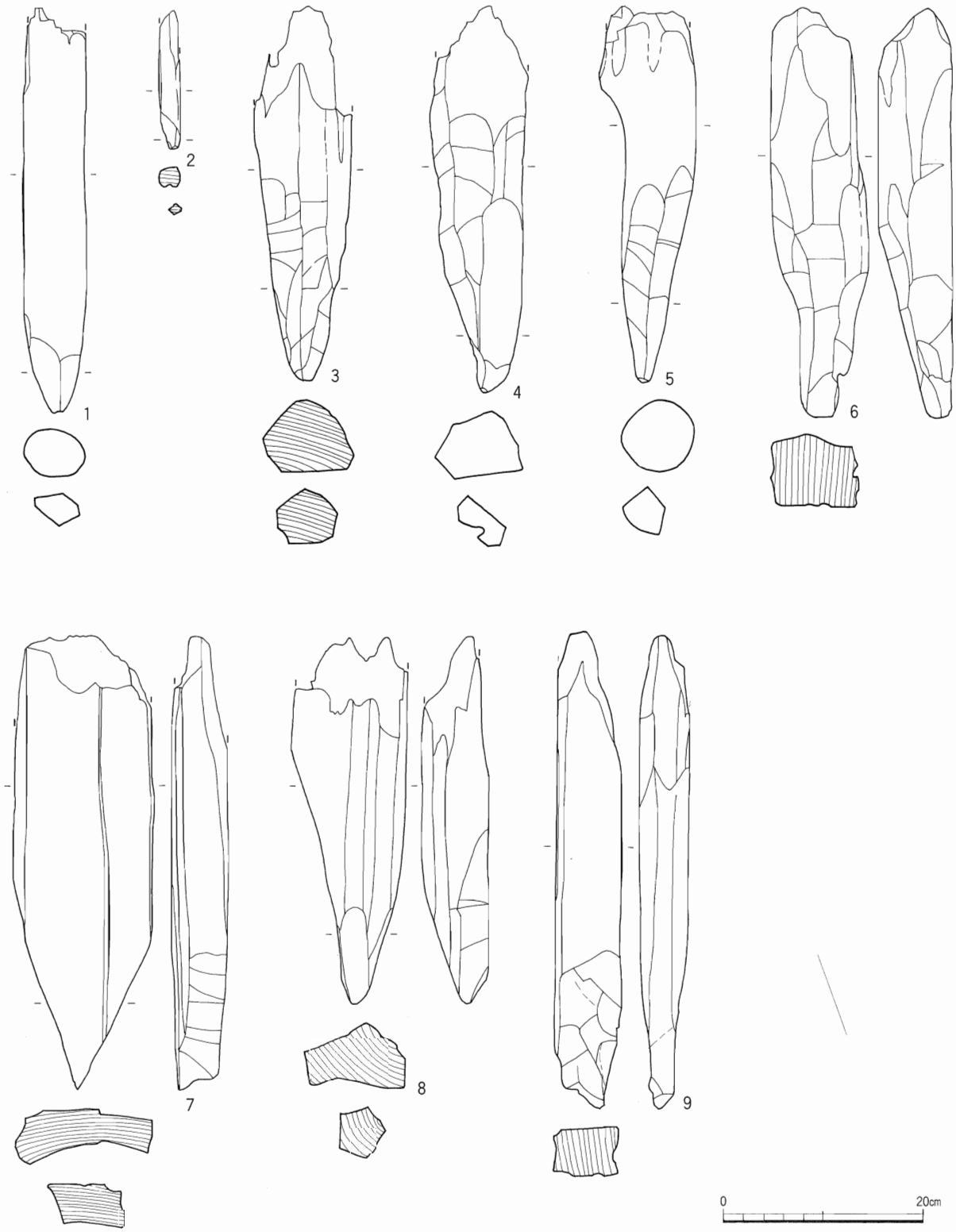
なお、杭の一部について樹種鑑定を行なった結果、シャンシャンボ、スダジイ、カエデ属、ヒノキ、ハイノキ属ハイノキ節、クリ、ツブラジイ、スギが使用されていることが分かった。

第142図は溝状遺構22に伴う杭で、１～３は西側杭列のもの、４～９は東側杭列のものである。

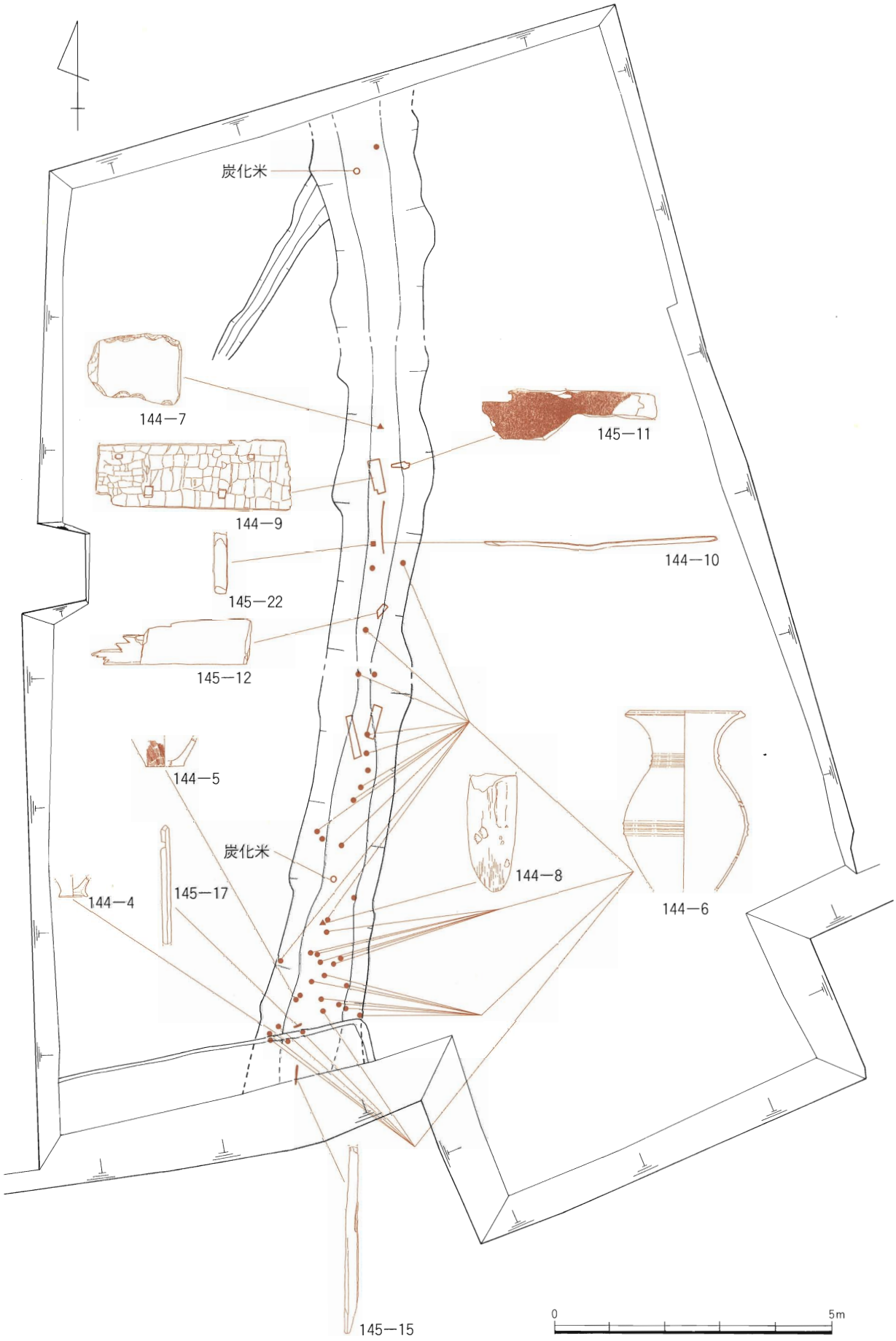
１・２は断面形が丸いままのもので、２・６・９は断面形が角型に加工されたもの、３・４は丸太を分割して加工したと思われるもの、８・９は厚い板状のもので、先端は左右の両側を切り落としてつくられている。１はシャンシャンボ、２はヒノキ、３はスギ材である。



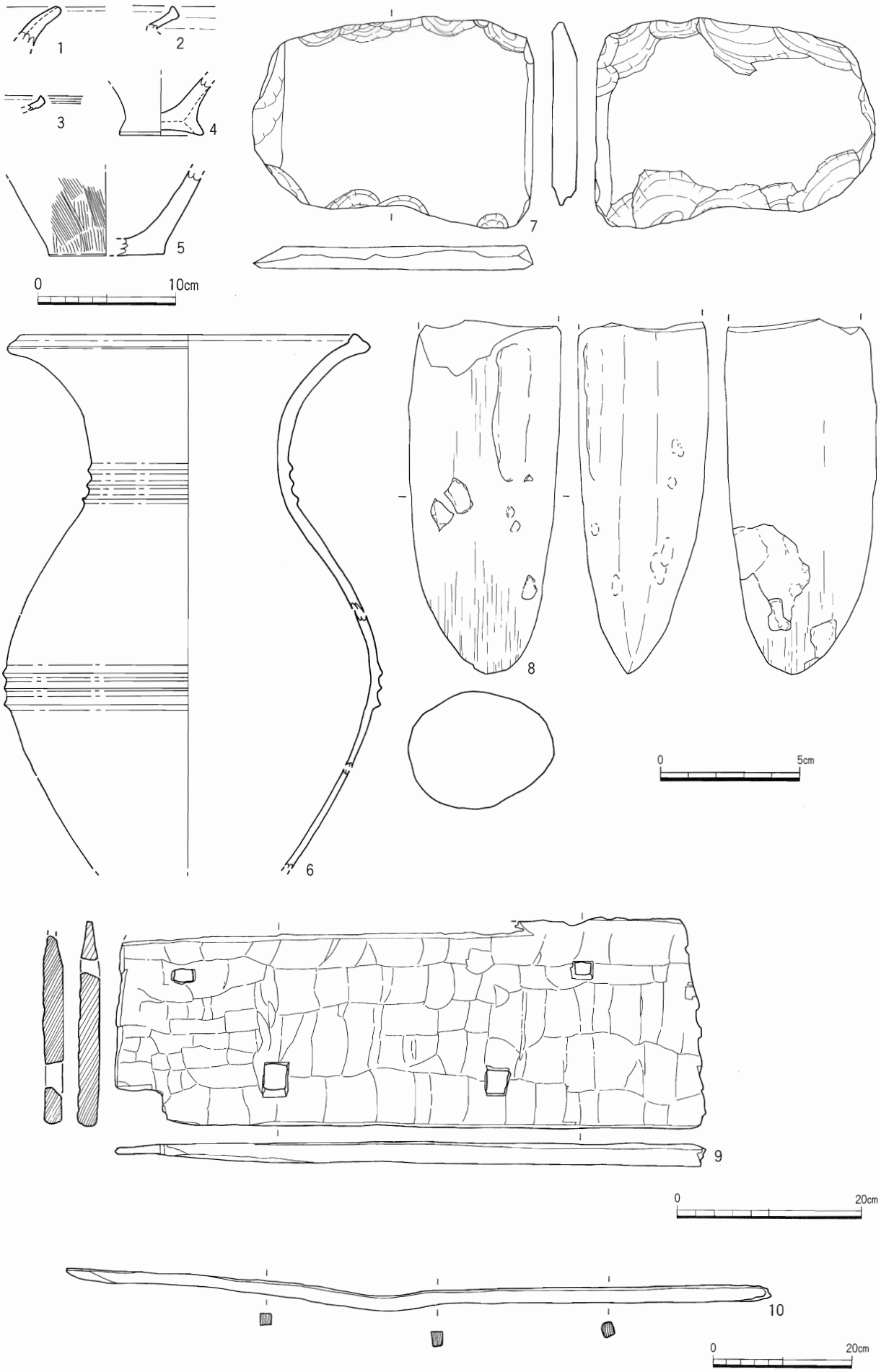
第 141 図　溝状遺構22西側杭列（S＝ 1/40）



第 142 図　溝状遺構22に伴う杭（S＝ 1/6）

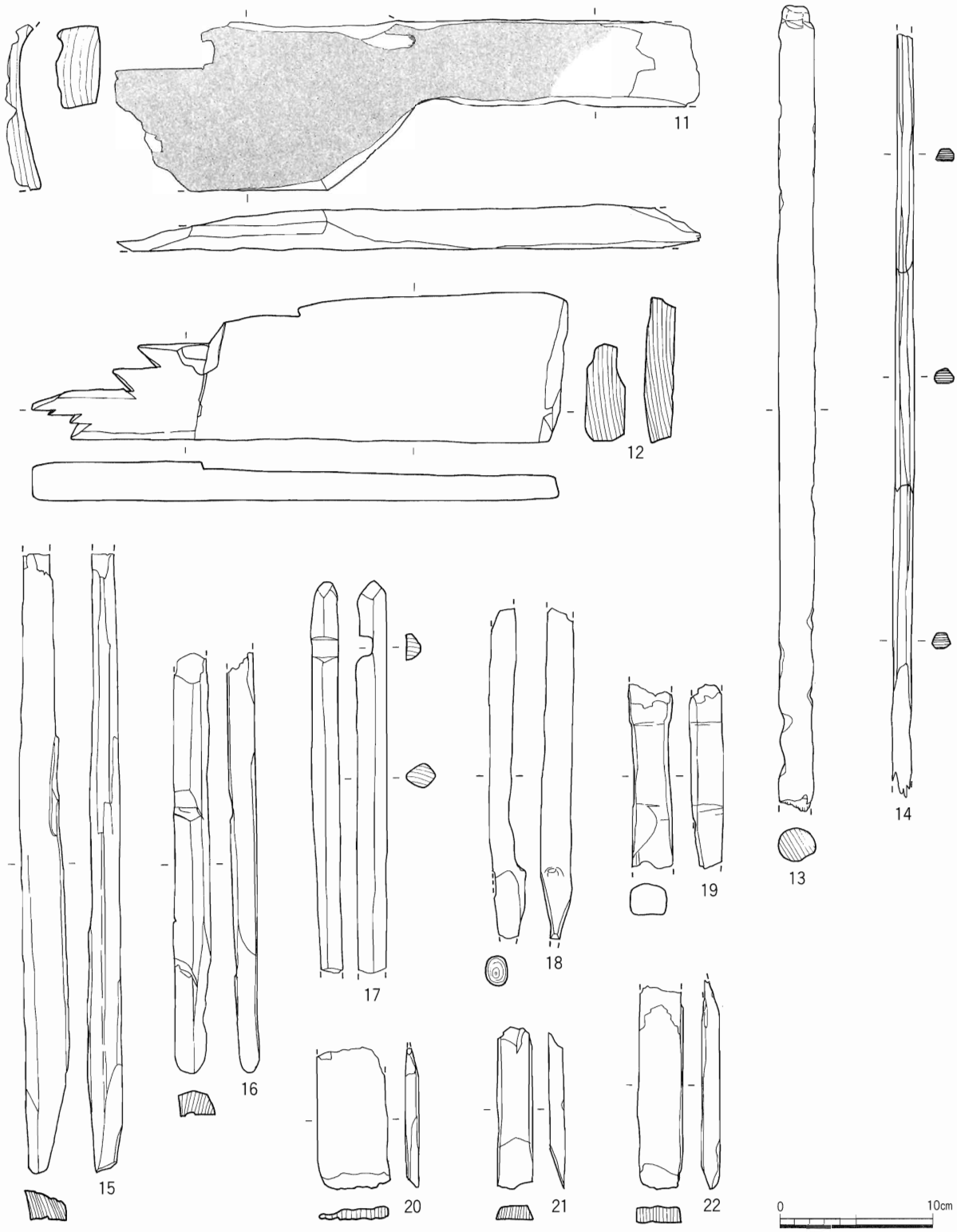


第 143 図　溝状遺構22遺物出土状態（S＝ 1/100）



第 144 図　溝状遺構22出土遺物（１）

（１～５：S＝ 1/4，６・９：S＝ 1/6，７・８：S＝ 1/2，10：S＝ 1/8）



第 145 図　溝状遺構22出土遺物（２）（S＝ 1/4）

溝状遺構22の覆土中から流木のほか、弥生土器や石器、木製品、炭化米が出土した。

１～６は弥生土器で、１は口縁部が外反する壷、２は口縁端部がつまみ上げられたⅢ－２様式の甕である。３は甕の口縁部で、端部に２条の凹線が見られる。４・５は壷もしくは甕の底部である。５はⅢ様式の広口壷で、頸部と胴部に断面三角形の突帯が３条巡る。

７は頁岩製の打製石包丁、８は塩基性片岩の磨製石斧である。

９～22は木製品である。９は板状のもので、４か所に方形の孔が穿たれており、図の左下の隅には、抉りが入れられている。10は断面方形の棒状木製品で、一方の端部は斜めに切断されて、尖っている。11は、図の右側に対し左側が幅広く作られたもので、残存している部分では平面は台形状になっている。12は左側の端部が鋸歯状に加工された板状の木製品である。13～19は棒状の木製品で、13は断面が円形に、14は断面が多角形状に加工されている。17は一方の端部が圭頭状に加工され、側面に抉りが入れられたものである。18は材の節に近い部分で、左右両側を切断し先端を尖らせている。19は断面が方形のもので、中央部は小さな段がつき、わずかに細くなっている。

出土遺物から、溝状遺構22は弥生時代中期中葉の遺構と考えられる。

なお、東西の杭列中から各１点ずつと炭化米１点について、放射性炭素年代測定を行なっており、その結果、東側の杭は補正^{14}Ｃ年代が2180±40yrBP（暦年代BC390～110）、西側の杭は2250±40yrBP（暦年代BC400～200）、炭化米が1930±40yrBP（暦年代BC10～AD140）というデータが得られた。東西の杭については遺物の年代とほぼ矛盾しないが、炭化米については年代が新しく、測定結果に誤りがないとすれば上層に伴うものであったと考えられる。

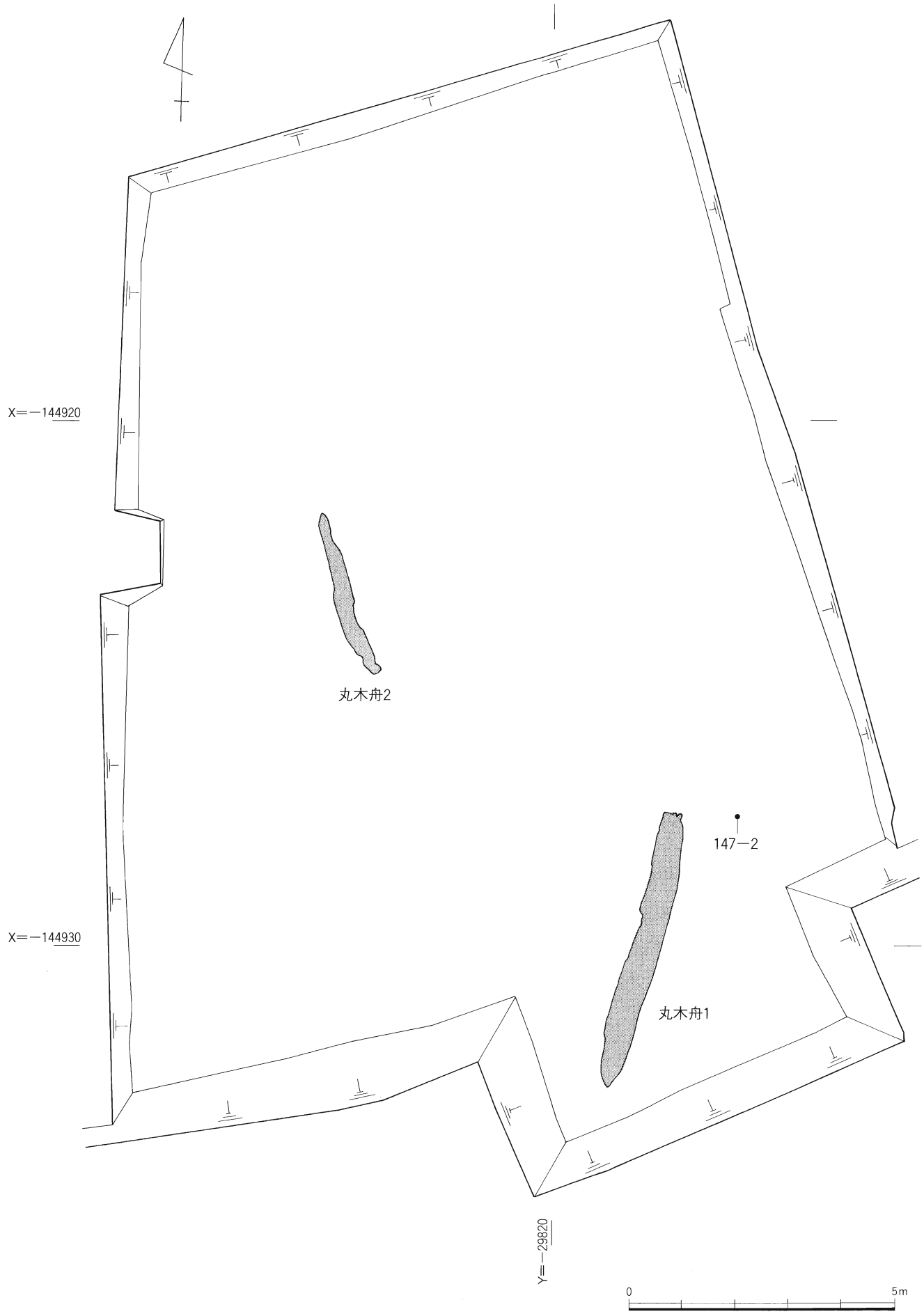
（４）丸木舟

出土状態（第７・146・147図）

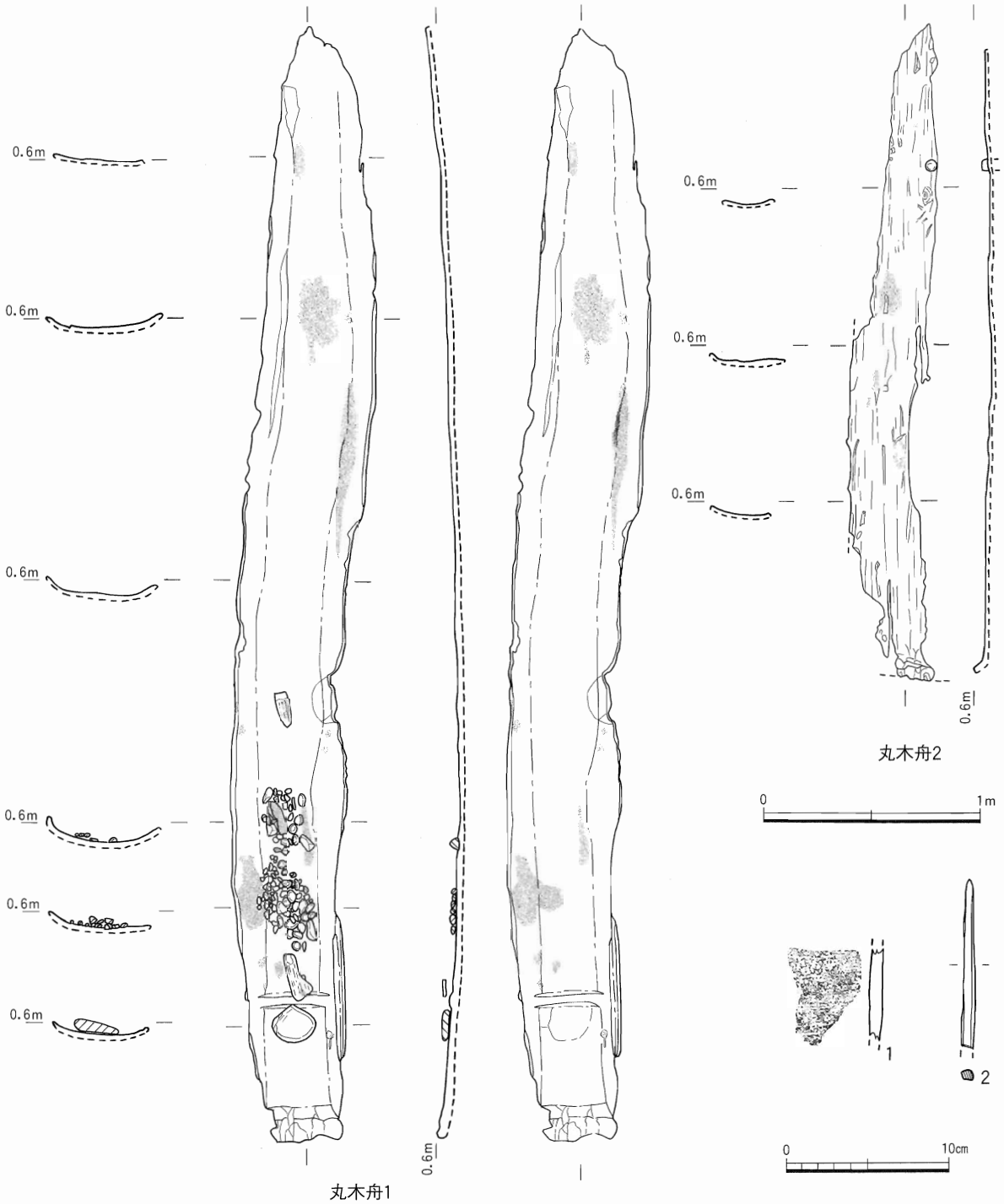
溝状遺構22に伴う杭列を検出するため、８層を掘り下げたところ、調査区南壁に刺さるようなかたちで丸木舟１が検出され、また、そこから約６ｍ北西の調査区中央では丸木舟２が出土した。丸木舟１は舟首を南南西に向けており、丸木舟２は舟首を北北西に向けていた。

調査区南壁の土層を観察したところ８層は細分が可能であり、丸木舟１は８－１層中にあり、舟の底面が８－２層直上に位置していた。８－１層は黒灰色粘質土を主体とするが、灰色細砂が薄く互層状に入っていたことから、丸木舟は汀線付近にあったものと推測される。土層の記録後、調査区を南側に拡張して掘り下げ、丸木舟１の上端を検出したが、このときに舟の上面は８－１層よりもやや黒みの強い黒灰褐色粘質土に覆われているのが確認できた（写真１）。丸木舟１の全体を検出したのち図化・写真撮影をした。その後、発泡ウレタンで丸木舟を梱包して取り上げ（図版46）、（財）元興寺文化財研究所に保存処理を委託した。保存処理は平

写真１　丸木舟上面検出状況



第 146 図　丸木舟出土状態（S＝ 1/100）



第147図　丸木舟１・２（S＝ 1/30），３区８層出土遺物（S＝ 1/4）

成17年11月～平成20年３月にかけて行われた[1]。

８層中からは、丸木舟のほかに土器片（147－１）と木製品が出土した。１は横方向の沈線、もしくは条痕が入るものであるが、小片のために時期の特定は難しい。２はヤスとみられるもので、樹種はヒノキである。丸木舟１の東側で検出された。

８－１層の腐蝕質粘土と、８－２層で採取された枝について放射性炭素年代測定を行なっており、前者は補正^{14}Ｃ年代で3060±40yrBP（暦年代BC1420～1220）、後者は3000±40yrBP（暦年代BC1380～1120）というデータが得られた。

丸木舟１

舟の周縁部が若干腐蝕しているものの、ほぼ完全な形で残存しており、現存長は5.3m、幅55cm、深さは最大で12cmで、厚さは確認できた部分で３cm程度であった。舟の形状は、舟首側が尖るのに対して、舟尾側が角形になっている。縦断面をみると、舟底から舳先にかけてはなだらかに上がっており明瞭な立ち上がりはみられず、舟尾側も立ち上がりが４cm程度しかない。左右の舷の立ち上がりは緩やかで、横断面形は浅い弧状になっている。舟尾から約65cmの部分には、幅７cmの削り出しによる横帯が見られる。内面には、明瞭な工具痕は確認できなかったが、焦痕が数か所で確認された。樹種はクスノキ科である。

なお、舟内部には、舟の欠損部とみられる木片が見られたほか、横帯から20～100cm前側の部分で長さ２～10cmの石がかたまって検出され、横帯の後側に長さ20cmの石が乗っていた。石の総重量は7.3kgになる。石には加工や使用の痕跡など確認できなかったが、検出状況から何らかの理由で人為的に置かれたものと考えられる。

また、舟内の底面では、イネ科の草本類とみられる植物質のものが貼り付いた状態で確認されており、前述した石の下でもあったことから、舟の使用時に敷物として敷かれたものと推測される。なお、この植物遺体について放射性炭素年代測定を行なったところ、補正^{14}Ｃ年代で3020±40yrBP（暦年代BC1400～1130）というデータが得られた。このことから丸木舟の年代は縄文時代後期末～晩期初頭頃と考えられる。

丸木舟２

現存長は3.13m、幅は36cmであるが、全体的に腐朽が著しく、原形をほとんどとどめていない。ただし、南側の端部が角形になっていたことから、こちらが舟尾と考えられる。舟尾の立ち上がりは舟底から５cm程度残っていた。舟首側は現状では先端が尖るかたちとなっているが、腐蝕が進んでいるために、本来の形状をある程度反映しているのか、欠損してこのようなかたちになったのかは判断できない。舟底から舳先への立ち上がりは認められない。左右の舷もかなり腐蝕、欠損しており、左舷側は若干立ち上がりが残るものの、右舷は完全に失われている。舟の内面には焦痕が数か所認められた。なお、舟首に近い部分の右舷側には溝状遺構22に伴う杭がささっていた。丸木舟２の材はセンダンである。

第４節　総　　括

１～４区の調査では、上層で中世の遺構・遺物が数多く検出され、当該期に大規模な集落が展開していたことが明らかとなった。また、下層では弥生時代の溝状遺構や杭列、縄文時代後期末～晩期初頭頃の丸木舟が検出された。

ここでは、下層から上層にかけて検出された遺構・遺物や、発掘調査から明らかになったことについてまとめるとともに、そこから考察されることや今後の課題を述べることとしたい。

１　丸木舟について

３区の８層中から縄文時代後期末～晩期初頭頃の丸木舟が２艘検出された。今回の丸木舟の出土は、島根県内では６例目、石見地方では初例で、破片のみが出土した場合を除けば一遺跡で複数の丸木舟が出土したことは島根県内では初めてである。両者は近接して出土していることから、別々の位置にあったものが偶然この場所に漂着したものではなく、これらが本来使用・保管された場所、もしくはそれに近い場所で埋没したという可能性も考えられる。

丸木舟１は舟首側が尖り、舟尾が角形となる「折衷形」（清水1975）のもので、丸木舟２についても一方の端部が角形になっていることから、「折衷形」あるいは「箱形」のものである。折衷形のものは管見にふれた限りでは、滋賀県長命寺湖底遺跡、鳥取県桂見遺跡２号丸木舟などがあるが、いずれも縄文時代後期のものである。また、丸木舟１の後端寄りには削り出しによって横帯がつくられているが、こうしたものも福井県鳥浜貝塚・ユリ遺跡、滋賀県元水茎遺跡など縄文時代後期以降のものに見られる。丸木舟１の舷側の立ち上がりは浅く、「内水域航行用」（中原1998）のものと考えられる。

舟に用いられた材は、丸木舟１はクスノキ科のもので、丸木舟２はセンダンである。一般に丸木舟に用いられる材はスギが多く、また花粉分析でもこの頃の益田平野周辺にはスギ林が広がっていたと考えられるが、本例ではスギではなく前記の材が用いられている点は興味深い。益田平野は山陰地方でも温暖な地域であり、クスノキ科の材が比較的容易に入手できたのかもしれない。

表２　山陰地方で出土した丸木舟

遺跡名	所在地	形態	樹種	規模			時期	備考
				長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)		
沖手遺跡	益田市久城町	折衷形	クスノキ科	5.3	55	12	縄文時代後期末～晩期初	ほぼ完形
沖手遺跡	益田市久城町	箱or折衷	センダン	3.13	36		縄文時代後期末～晩期初	半分程度？
島根大学構内遺跡	松江市西川津町	（艫節）	スギ	6.04	57		縄文前期初頭～前半	ほぼ完形
佐太講武貝塚	松江市鹿島町			0.93	26.4		縄文後期～晩期	破片
佐太講武貝塚	松江市鹿島町	（艫節）	マツ科モミ属	1.16	24		縄文後期～晩期	破片
三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塩冶町	（艫節）	スギ	5.54	44～60	15.1	縄文後期	ほぼ完形
栗谷遺跡	鳥取市福部町			3.0～	90		縄文後期	未製品
桂見遺跡	鳥取市桂見	艫節形	スギ	7.24	74	35	縄文後期中葉	ほぼ完形
桂見遺跡	鳥取市桂見	折衷形	スギ	6.41	46～70	10	縄文後期中葉	ほぼ完形
東桂見遺跡	鳥取市桂見		スギ	1.05	50		縄文後期中葉～後葉	破片
青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町			4.7			弥生後期	ほぼ完形か
青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	箱？		3.5	40		弥生後期	ほぼ完形
青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	箱or折衷		0.42	31.2		弥生中期～古墳前期初頭	破片
青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	箱or折衷	スギ	0.35	19.8		弥生前期後葉～中期後葉	破片
青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町	箱or折衷	スギ	1.31	20.3		弥生後期初頭～後葉	破片
青谷上寺地遺跡	鳥取市青谷町			1.2	25		弥生後期～古墳	破片
島遺跡	東伯郡北栄町			0.66	55	15	縄文晩期～	破片
井出胯遺跡	米子市淀江町	（艫節）		1.24	13.8		縄文後期～晩期	破片
目久美遺跡	米子市目久美町		スギ	0.76	29	10	弥生前期	破片

※　形態欄の（艫節）、箱or折衷は、舟首あるいは舟尾の一方しか遺存していないもの。

丸木舟１の内面には、敷物に使用されたとみられる植物が確認され、舟の後端寄りには石が乗っていた。これらは舟の使用状況を示すものとして注目される。舟の上面に石が乗る例は、千葉県栗山川流域遺跡群や、静岡県神明原・元宮川遺跡、滋賀県元水茎遺跡第２・３号丸木舟があり、いずれも舟の一方の端部側に偏った位置に石がある。また、京都府浦入遺跡群や島根県三田谷Ⅰ遺跡では、舟の付近で石が出土しており、浦入遺跡群のものは碇石と推測されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター2001）。本例の場合、長さ20㎝の石のほかに、２～10㎝大のものが多数存在すること、石に使用・加工の痕跡がないことから碇とするには難がある。これらの用途ついては推測の域を出ないが、舟バランスをとるための重石や漁に使用された可能性が考えられる[2]。

次に、丸木舟の用途や使用された環境について考えてみたい。

当時の沖手遺跡周辺には日本海との間に発達した砂州によって海跡潟湖が形成され、アシやガマが繁茂した湿地が広がっていた。また、ＣＮＳ分析（土中の炭素・窒素・硫黄の濃度測定）からこの潟湖は海水の影響は受けていることが確認されており、外海にもつながっていたことがわかる。沖手遺跡の丸木舟は舟体が浅いことから、波の高い外海よりも低湿地に適しており、潟湖内部における漁撈活動や、物資の運搬などに使用されたと考えられる。丸木舟１の付近で出土した木製のヤスはこうした活動の一端を示すものである。益田平野周辺の縄文時代後期～晩期の遺跡は、これまでのところ益田平野南部や、高津川をやや遡った横田盆地で確認されており、丸木舟による活動範囲は潟湖にとどまらず、高津川や益田川を遡ったところまで及んでいた可能性も考えられる。

丸木舟は全国的に見て縄文時代前期に出現し、後期以降に増加する（瀬口2006）が、山陰地方でもそうした傾向が見られる。丸木舟の普及は、人々の活動範囲を拡大し、水産資源の利用の活発化させるなど、従来の生活様式に少なからず変化をもたらしたものと推測される。今後、平野部における集落の動向や、生業活動のあり方を踏まえて丸木舟の果たした役割を考える必要があろう。

２　遺跡周辺の環境と人間の活動内容の変遷について

発掘調査とそれに伴う自然科学分析によって、縄文時代後・晩期から現在に至るまでの遺跡周辺の環境変化とその中における人間の活動痕跡を捉えることができたのも、今回の調査成果の一つといえるであろう。

前述したように、縄文時代後・晩期の沖手遺跡周辺には海水の影響を受けた潟湖が広がっていたが、縄文時代の人々は丸木舟などを用いることによって水産資源を獲得していたことが分る。

しかし、その後潟湖の干陸化・淡水化が進んでおり、３区７層が堆積した段階には淡水域になっていたようである。３区７層上面では弥生時代中期中葉の溝状遺構22が検出されており、この両岸では護岸の杭列が確認された。溝の覆土中から大粒径のイネ科の花粉が検出されていることから、平野部の開発が進められ、稲作が行なわれるようになったと考えられる。ＣＮＳ分析では、溝状遺構22の覆土は海水の影響が認められることから、この遺構は水田の排水路であった可能性が高く、もし仮に水田への導水路であったとすれば、海水位が上昇した際に水田や水路は放棄されたと推測される。

弥生時代後期～古墳時代にかけては、洪水による堆積層のためか花粉含有量が少なく、土地利用のあり方については不明確であるが、若干ながらも弥生土器や土師器が出土していることから、平野部の開発が行なわれたと考えられる。古墳時代後期～中世は洪水による堆積層は見られず、花粉

分析からみても、この周辺では安定した農地が営まれたようである。

このように、沖手遺跡は、沖積平野の形成と人間の土地開発の過程を示す事例として注目すべきものと考える。

3　中世の集落について

（1）集落の変遷

3層上面では、掘立柱建物跡76棟、柱列23条、溝状遺構16条、井戸6基、墓38基など多数の遺構が検出された（第148図）。遺構密度は総じて高く、遺構同士の切り合い・重複も多く見られる。また、遺物包含層（2層）中では古墳時代後期～近世にかけての遺物が出土しており、遺構・遺物の両面から複数時期にわたって存続した遺跡であることが分る。

ここではまず、出土遺物や切り合い・位置関係から時期決定の可能な遺構を抽出し、次に時期ごとの遺物の分布状況を見ることで集落の変遷について考察することとしたい。

①遺構の時期（表2）

11～12世紀

古墳時代～古代については遺構の様相は明らかでない。出土遺物などから時期決定が確実にできる遺構は11世紀後半以降に存在する。

1区の建物跡11では柱穴から浜田市古市遺跡Ⅰ～Ⅱ期（浜田市教育委員会1995・榊原2001）に並行する土師器坏が出土しており、11世紀後半から12世紀代のものと考えられる。柱列3では白磁皿Ⅴ類などが出土しており、11世紀後半～12世紀前半に、建物跡7では土師器の柱状高台皿が出土していることから12世紀頃に位置づけられよう。

4区西側の建物跡52の柱穴は、第Ⅰ期第2段階（11世紀末葉～12世紀前半）の東播系須恵器鉢を伴う4－P3610に切られていることから12世紀以前の遺構と推定される。柱列16は古市Ⅰ期の土師器坏を伴っており、この東側でこれとほぼ同一方向に直線的にのびる柱列14・15も同時期に存在し

表3　沖手遺跡1～4区遺構変遷表

	1～3区	4区西側	4区東側
11c	柱列3・16	建物跡52　柱列16（柱列14・15）	
	建物跡11		
12c	建物跡7	柱列19	
		建物跡62　墓14・15	
13c	建物跡22・28		
14c	建物跡40		
	建物跡12・25（建物跡1）井戸4×	（建物跡64）　墓16・（墓17）	
	建物跡43↓		
15c	建物跡39		建物跡73
	建物跡3・4　井戸5・6		建物跡72・74
	墓2・4・5・7	墓19	建物跡68　（↑墓20～23・25・26↓）
	墓1・3・6・9	墓18	建物跡66↓　墓24
16c	↑溝状遺構2↓　井戸1×		
			建物跡76
17c	柱列12		柱列22
	↑溝状遺構4・8×　（↑溝状遺構3×）		4－SK28・31
			↑溝状遺構14・15×　墓31（↑墓30・32～38↓）

※　この表は遺構のおおよその時期を表したものであり、厳密な前後関係や並行関係を示すものではない。
（　）…位置関係等から時期を推測した遺構　　↑↓…前後する可能性　　×…廃絶

た可能性がある。建物跡62は古市Ⅱ期の遺物を伴っており、墓14・15は大宰府編年Ｄ期の白磁・青磁が副葬されていたことから、これらは12世紀中頃～後半の遺構と考えられる。柱列19は出土した土師器鍋から12世紀に位置づけられよう。

13～14世紀

建物跡22・28は、柱穴内で出土した龍泉窯系青磁碗Ⅱ類から13世紀前半頃と推測される。建物跡12・25、井戸４では口縁端部に平坦な面をもつ擂鉢が出土しており、井戸４のものは、井戸の廃棄行為に伴うものと考えられる。このような擂鉢は、11世紀後半～13世紀代を中心とする浜田市古市遺跡では見られず、また一方で防長型瓦質土器擂鉢の出現よりも遡ると推測されることから、14世紀頃に位置づけられよう。よって、前記の遺構はこの時期か、それよりもやや古いものと考えられる。なお、建物跡１では、柱穴内から龍泉窯系青磁碗Ⅰ類（12世紀中頃～後半）の破片が出土しているが、井戸４と近接しており、これと共存した可能性がある。建物跡40は、滑石製石鍋Ⅲ－ｃ類（木戸1993）が出土していることから14世紀前半ものとみられる。なお、柱穴の切り合い関係で見れば、建物跡40以前に建物跡41・44・42が存在したと推測されるが、これらがどの時期まで遡るのか不明である。建物跡43は建物跡40を切って建てられたもので、龍泉窯系青磁の小碗Ⅳ類もしくはＤⅡ類の破片を伴うことから、14世紀～15世紀前半の遺構と考えられる。

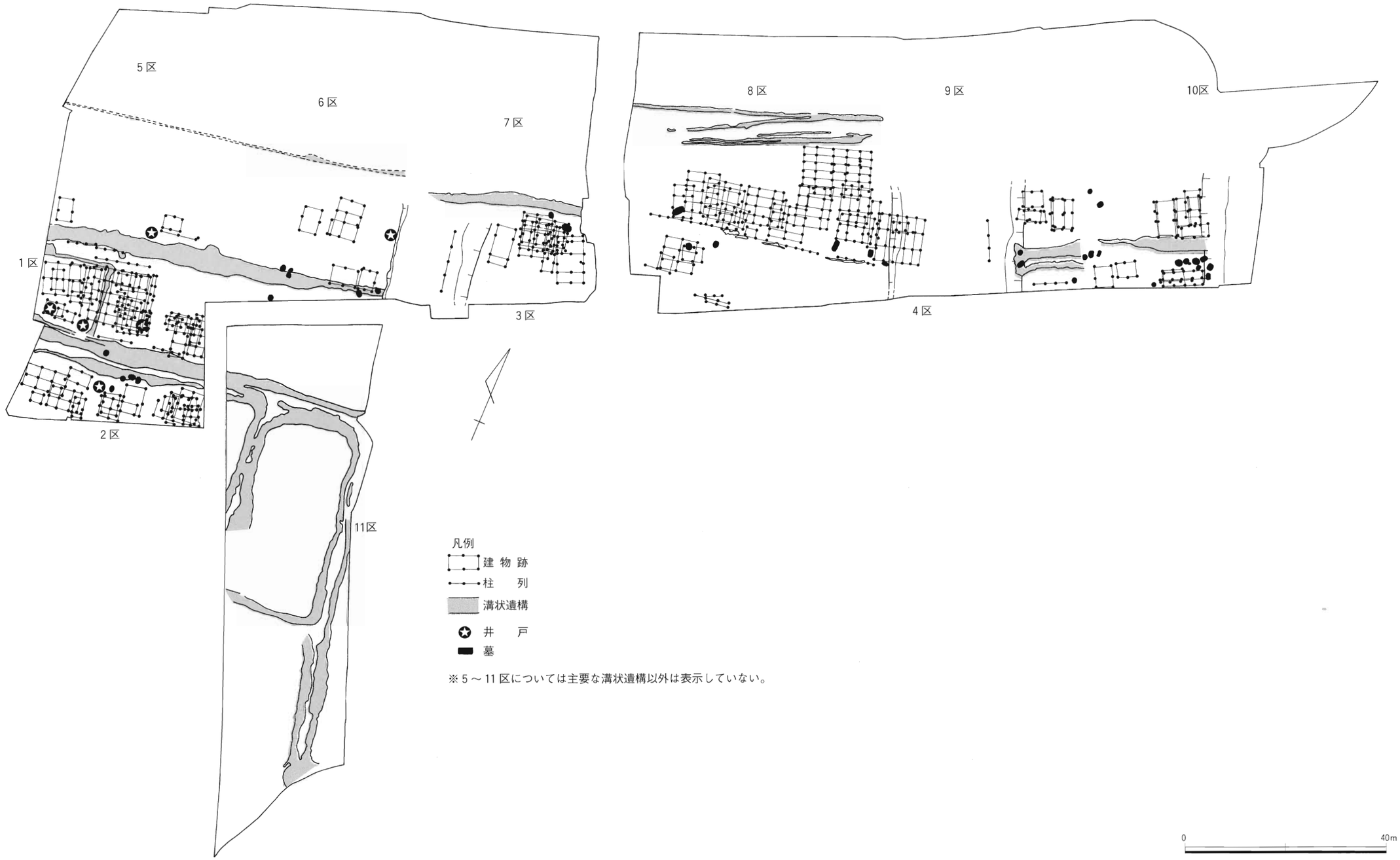
４区西側の墓16では漆器の漆膜が残存しており、放射性炭素年代測定から14世紀前後と推定されている。墓16・17は、建物跡64の南西隅付近で建物の主軸に対して平行、あるいは直交していることから、これらはほぼ同時期に存在し、建物の規制を受けて墓がつくられたと類推される。

15～16世紀の遺構

１区東側の建物跡３・４は、柱穴内から出土した瓦質土器から、15～16世紀の遺構と判断される。井戸５は建物跡３・４の付近に位置すること、瓦質土器の湯釜片を伴うことから、これらと同時期のものとみられる。井戸６は放射性炭素年代から15世紀前半頃と推定される。井戸１では防長型瓦質土器擂鉢の破片が出土しているが、口縁端部の折り返しが退化したもので、16世紀代に下ると考えられる。溝状遺構２では、口縁部が退化した瓦質土器擂鉢や中国青花碗Ｃ群など16世紀の遺物が検出された。２区の建物跡39では古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ期（14世紀末～15世紀前半）の水滴のほぼ完形ものが柱穴上部から出土しており、建物廃棄時の祭祀に伴うものと考えられる。

４区東側の建物跡73では、14世紀末～15世紀頃の朝鮮青磁が出土している。建物跡72は防長型瓦質土器擂鉢を、建物跡74は瓦質土器足鍋を伴っており、15～16世紀の遺構と推測される。建物跡66は無文銭[3]を伴うもので15世紀以降、建物跡68はＥ群の白磁皿を伴い、15世紀中頃以降、建物跡76ではＶＢ期の備前焼の徳利が出土しており、16世紀後半の建物跡と考えられる。

墓１～７・18・19には土師器皿が副葬されていた。このうち墓２・４・５・７・19のものは口径が12㎝前後、器高2.5～３㎝程度で、墓１・３・６・９・18で出土したものは口径13㎝前後、器高３㎝前後のものであり、前者よりも後者の方が器高に対し口縁部が大きく開くかたちになっている。また、前者は口縁端部が丸く収められたり、弱く面取りがされたりしている対し、後者はいずれも口縁端部に明瞭な面取りがされており、沈線状のくぼみが入るものもある。大内氏館跡の編年（古賀1991）と対比するならば、前者がⅡ期に並行するもので15世紀後半に、後者はⅢ期に並行するもので15世紀末～16世紀前半に位置づけられよう[4]。墓20～23・25・26は、土器は副葬されていないが、桶棺墓もしくはそれに伴って検出された墓で、15世紀後半頃か、それ以降のものと考えられる。



第148図　沖手遺跡中世の遺構全体図（S＝ 1/800）

墓24では無文銭が副葬されており、15世紀末以降に下るものと推測される。

17世紀の遺構

2区の柱列11は、胎土目跡のある肥前系陶器皿が出土しており、17世紀初頭に位置づけられる。2区の溝状遺構4は、形成された時期は不明であるが、上部の石列で初期伊万里の皿が出土していることから、17世紀前半には埋められたと推測される。また、溝状遺構4との位置関係から溝状遺構3上部の石列もこの頃につくられた可能性が考えられる。溝状遺構8では、17世紀初頭～前半の肥前系陶器皿が出土しており、この上部では寛永通寶が出土していることから、17世紀前半以降に埋没したと考えられる。

4区東側の柱列22は胎土目跡のある肥前系陶器皿などが伴うもので17世紀初頭のものと考えられる。4区東側遺構群の南東部には、4－SK28・31のように17世紀前半の土坑も存在する。溝状遺構14・15は、形成時期は不明であるが、覆土中の遺物から17世紀後半に埋没したとみられる。

墓31は、埋土中で出土した肥前系磁器皿から17世紀後半かそれよりやや下ると考えられ、近接する墓30・32～38もこれに前後する時期のものと推測される。

②遺物の時期別・種類別分布状況

次に遺物の時期別・種類別の分布状況から集落の変遷について考えてみたい。

第149・150図に貿易陶磁（白磁・青磁・中国青花）の時期ごとの分布と、瓦質土器、近世陶磁器の分布状況を示したものである。貿易陶磁は、C～G期までは大宰府編年に基づいて時期区分しており、これ以降は14世紀後半～15世紀前半をH期、15世紀中頃～15世紀後半をI期、15世紀末～16世紀中頃をJ期、16世紀中頃～17世紀前半をK期に区分している[5]。瓦質土器は14～16世紀の、近世陶磁器は17世紀以降の集落のあり方を反映するものとして分析対象とした。

これら分布状況から、以下の点が指摘される。

a．1～3区は各時期を通じて一定量の貿易陶磁が見られる地点であり、瓦質土器も数多く出土している。特に2区（溝状遺構3周辺から南側）では全時期で遺物量が多く、集落の中心域であった可能性がある。近世陶磁器は、2区のほか1区東側でもある程度出土していることから、これらの地点では17世紀代にも集落が継続していたのかもしれない。

b．4区西側は中世前半（C～F期）の遺物はある程度出土するが、中世後半（G～K期）にはほとんど遺物が見られず、瓦質土器や近世陶磁器も少ない。

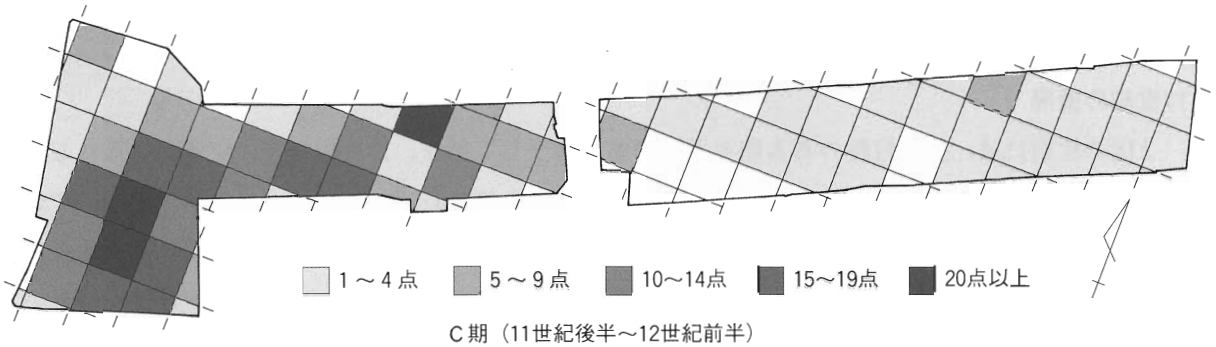
c．4区東側は中世前半の遺物は少ないが、中世後半に遺物が増加する地点で、瓦質土器の出土量も多い。近世陶磁器も南東側を中心にある程度分布している。

遺物の分布状況と先に述べた遺構の変遷とを対比させると両者がうまく対応していることが分る。1～3区は各時期を継続して集落が営まれていたのに対して、4区西側は中世前半を中心とする地点で、4区東側は中世後半～近世前半を主体とする地点であることは明白であろう。

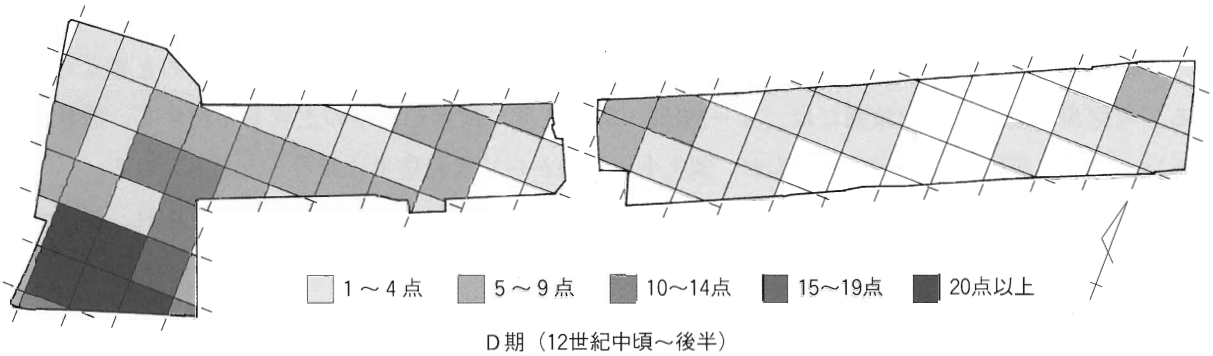
（2）集落の構造

沖手遺跡の集落は、直線状にのびる、あるいは方形に巡る溝状遺構や柵列によって区画されており、複数の屋敷地や遺構空白域が組み合わさって構成されている点で特徴的である。

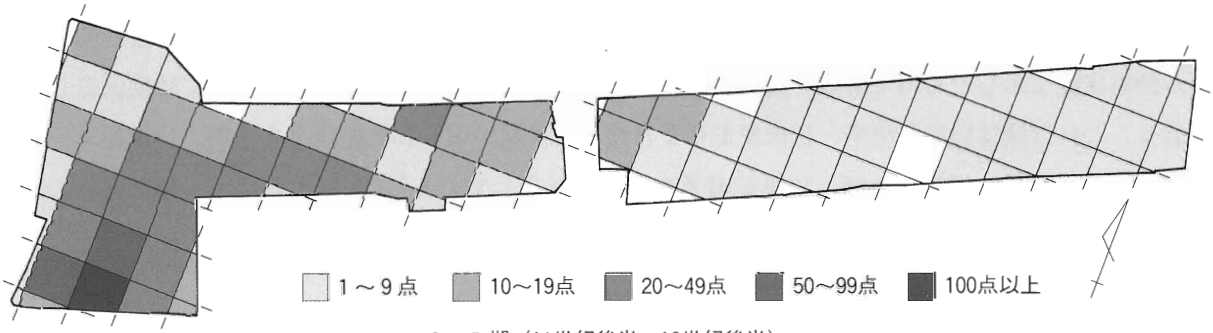
こうした集落構造は、沖手遺跡で本格的に集落が形成される11世紀後半～12世紀前半の段階ですでに成立したものと推測される。4区西側は東西方向に直線的にのびる柱列や、幅の細い溝状遺構



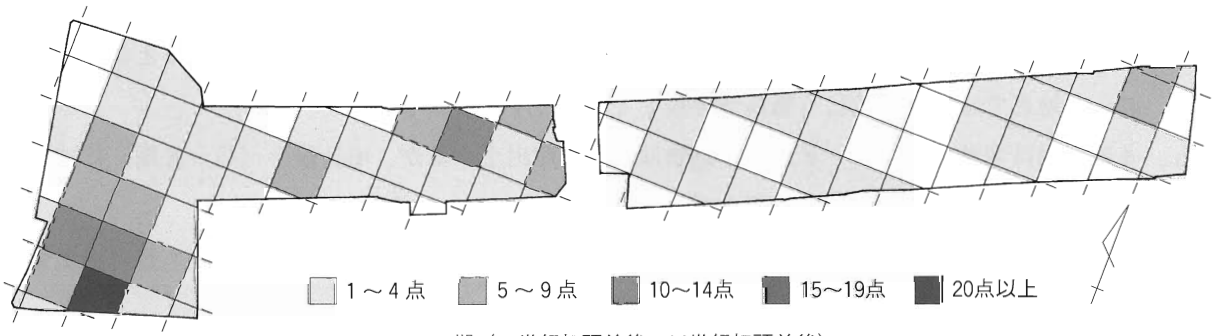
C期（11世紀後半～12世紀前半）



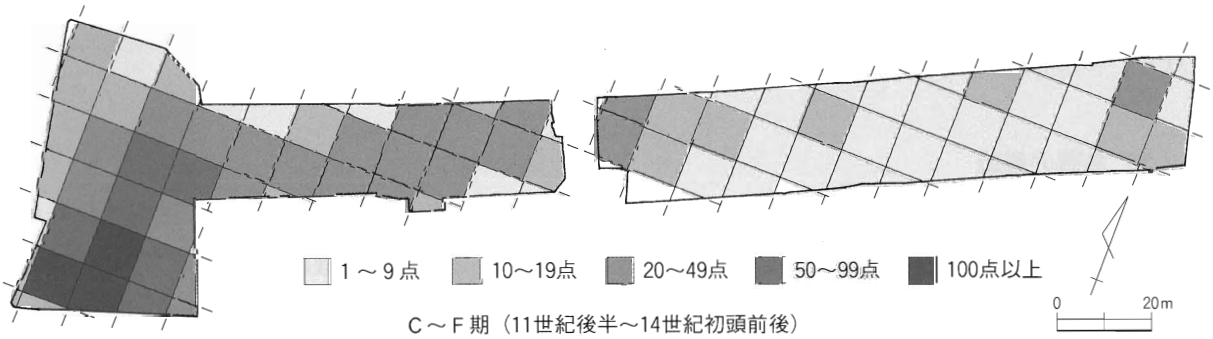
D期（12世紀中頃～後半）



C～D期（11世紀後半～12世紀後半）

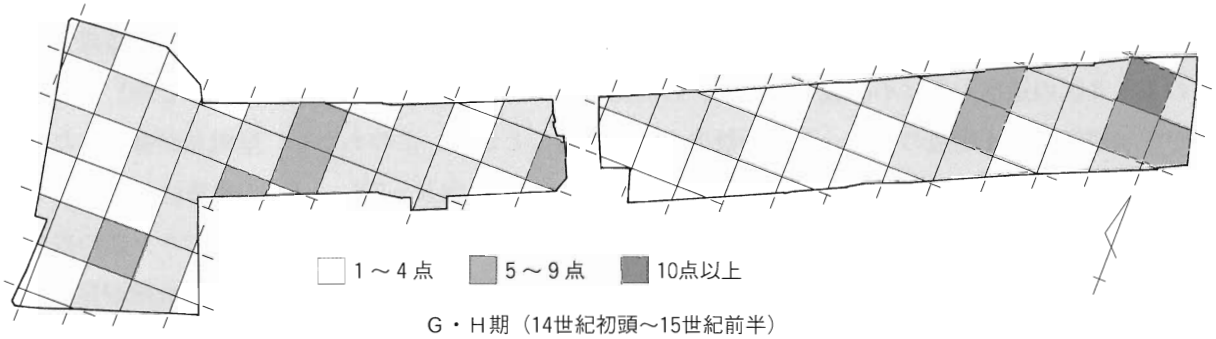


E～F期（13世紀初頭前後～14世紀初頭前後）

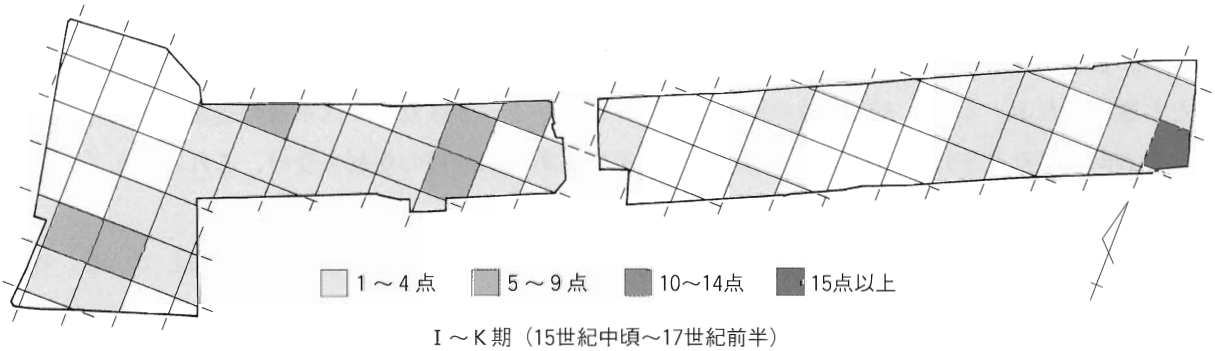


C～F期（11世紀後半～14世紀初頭前後）

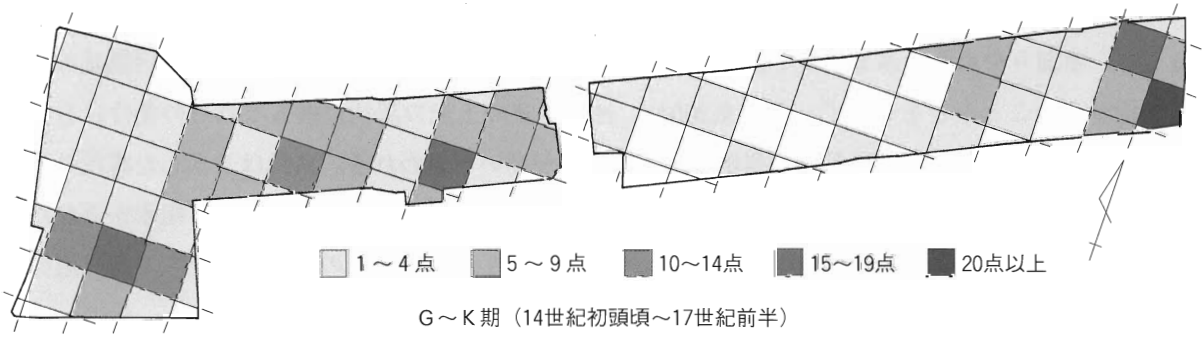
第149図　沖手遺跡１～４区遺物分布図（１）（S＝ 1/1600）



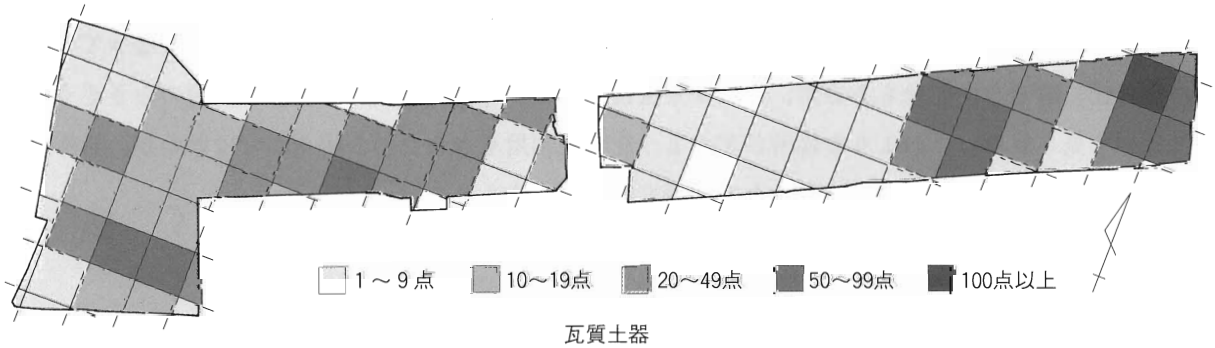
G・H期（14世紀初頭～15世紀前半）



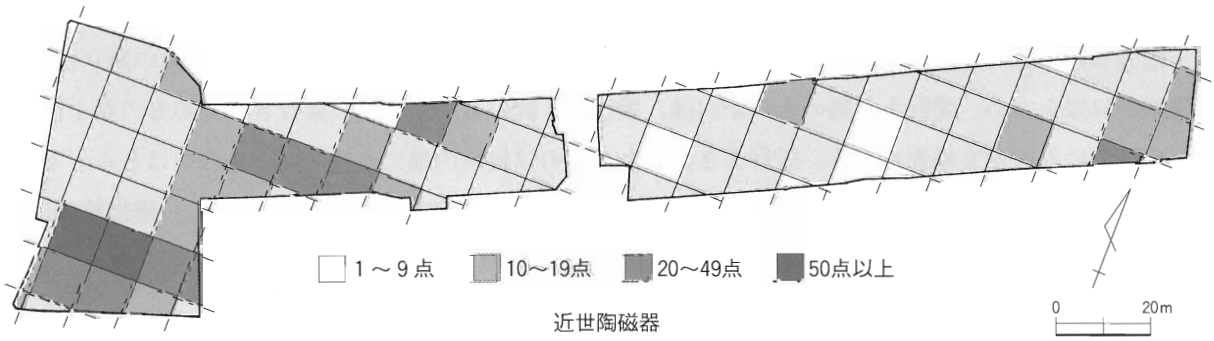
I～K期（15世紀中頃～17世紀前半）



G～K期（14世紀初頭頃～17世紀前半）



瓦質土器



近世陶磁器

第150図　沖手遺跡1～4区遺物分布図（2）（S＝ 1/1600）

によって区画され、その北側には建物群が構成され、南側は遺構空白域となっている。集落成立期の１～３区の遺構配置は不明確であるが、11世紀後半～12世紀後半段階（大宰府編年Ｃ期）の遺物が溝状遺構２～４周辺のグリッドで多数出土していることから、このあたりに屋敷地が存在したと考えられる。また、この時期の遺構である建物跡７（主軸方向Ｎ－73°－Ｅ）、建物跡11（主軸方向Ｎ－12°－Ｗ）は溝状遺構２・３と平行、もしくは直交するかたちで確認されており、この段階で溝状遺構２・３が形成されていたのかどうかは不明であるが、その元となるような地割が存在した可能性がある。４区西側の柱列14～16は、主軸方向がＮ－79°－Ｅ～Ｎ－81°－Ｅで、建物跡７・11とほぼ平行・直交していること、柱列14～16の西側の延長線上には溝状遺構11が延びていることから、個別の屋敷地が独立して営まれたのではなく、集落全体が一定の方向性を意識してつくられたと推測される。なお、４区東側の溝状遺構14・15は、１～３区及び４区東側の地割と比べてやや北東方向に振れたかたちになっているが、この東側にある旧河道の規制を受け、これに対して直交方向の区画が設定されたためではないかと考えられる。

溝状遺構２～４・８・14・15は一定程度の幅・長さがあり、断面形は浅い皿状を呈している。近江俊秀氏は道路遺構の類型の一つに「皿状に浅く掘り窪めるもの」を挙げている（近江1993）が、上記の溝状遺構はこれに当てはまるものである。また、東和幸氏は溝状の道路遺構について検討しており、道跡として認定する条件として、直角に曲がる部分が近道をするためにカーブを切っていること、水溜りやぬかるみを避けて通ることによってバイパスがつくられていること、円弧状の断面を持つもつことなどを挙げている（東2004）。沖手遺跡の上記の溝状遺構もこれらの条件に合致する点があることから、道路として利用された可能性が高いと思われる。東氏はこうした溝状の道跡について、人間が意識して掘り窪めたものではなく、人や牛馬が永年往来したり、雨水が流れた結果、無意識のうちに出来上がったものと考えている。沖手遺跡でもこのようなかたちで溝状遺構（＝道路遺構）が形成されたのかもしれない[6]。

なお、前述したように集落内には柱穴などがほとんど見られない遺構空白域が存在する。こうしたところは、例えば４区東側の旧河道部分や、４区中央部や３区西側のように窪地状になっているため居住に適さない部分もあるが、中には４区西側建物群の南側のように居住に問題のなさそうな部分でも見られる。このような場所がどのような土地利用をされたのか明らかではないが、耕作地や、集落内で共同利用された広場的な空間の可能性が考えられる。

（３）遺構について

次に集落を構成する各遺構についてみてみることとしたい。

建物跡

復元した79棟（建て替えと考えたものを含む）のうち、梁行き１間×桁行き１～５間の掘立柱建物跡が44棟を占め、梁行き２間のものが24棟、梁行き３間のものが６棟、梁行き４間のものが１棟、５間以上のものが２棟存在する。梁行き２間以上のものは建物内部にも柱を持つものがほとんどで、総柱構造のもののほかに、建物跡40・55・62・63のように廂付建物となるものもある。建物跡40は１間×３間の身舎の東西両面に廂の付く掘立柱建物跡で、南西隅には１間×２間の付屋を伴う。梁行き２間以上で、建物内部に柱を持たないものには建物跡34がある。

建物跡の中で注目されることは、建物跡14・63のように床面積が100㎡を超える大型のものが存

在している点である。これらは公的な施設か、集落内の有力者の居宅であった可能性がある。

15世紀以降の建物跡はそれ以前のものと比べ柱穴の掘り込みが大きく、深い傾向がある。また、建物跡72・73・76のようにほぼ同じ場所に柱穴を掘って、建て直しをしている例も多い。このことは、この時期に宅地が固定化していたことを示しているのかもしれない。

井戸

井戸は1区で5基、2区で1基検出された。このうち井戸1・4・6は桶側積み上げ型で、井戸5は桶側積み上げ型と石組を組み合わせたものである。井戸4は井戸が廃棄された後、埋め戻され上部が石で覆われていた。石に混じって14世紀代の擂鉢が2個体出土しており、この時期に廃絶したことが分る。桶側積み上げ型の井戸が出現するのは、草戸千軒町遺跡では15世紀以降である（岩本1993）が、沖手遺跡ではこれよりも遡る。博多では中世の井戸は桶側積み上げ型が主流となっている（常松1988）ことから、沖手遺跡における桶側積み上げ型井戸の出現は北部九州の影響によるものとも考えられる。

墓

38基が確認されている。棺の形態は、箱形棺（推定されるものを含む）が20基、桶棺墓が7基、曲物棺墓が1基、曲物棺もしくは桶棺のものが1基、棺の形態が不明のもの、もしくは棺を持たないものは9基あった。なお、1～4区では火葬墓は確認できなかった。

時期別に見ると、12世紀中頃～後半のものが2基、14世紀前後のものが2基、15世紀後半以降と考えられるものが20基、17世紀まで下るものが9基存在し、15世紀後半以降に増加する傾向が見られる。

12世紀中頃～後半のものは墓14・15で、これらは4区西側遺構群で検出された。墓14は建物跡と柵列、溝状遺構との間につくられており、屋敷墓とみることができる。上部には集石が設けられており、祖先祭祀の場として意識されていたと推測される。推定長が約1.8mの箱形木棺内に白磁皿2点と短刀2点が副葬されており、この集落の有力者・富裕層の墓であったと考えられる。墓15は建物跡との重複はあるものの中世前半の建物群の一角につくられていることから、やはり屋敷墓と考えるのが妥当であろう。長さ1.9mを超える箱形木棺内に龍泉窯系青磁碗1点、同安窯系青磁皿2点、短刀2点が副葬されていたことから、これも有力者・富裕層の墓と推測される。これらの墓の存在から、4区西側遺構群は中世前半期においては有力者の居住地であり、集落の中心的な位置を占めていた可能性がある。

14世紀前後のものは建物跡64の南西隅付近に位置する墓16・17で、これも屋敷墓的な性格を持つものと考えられる。墓16・17は両者とも成人の埋葬であるが、墓壙長は1.05～1.22mで屈葬状態の埋葬と考えられる。墓17では箱形棺の痕跡が確認された。副葬品は墓16で漆器が、墓17で土師器坏が出土したのみである。建物跡64は床面積が83.81㎡と、建物跡14・63に次いで大規模なものであるが、墓16・17は構造や副葬品の内容から他に卓越したものとはいえないように思われる。ただし、1～4区では他に同時期の埋葬は確認されておらず、この時期にどのような人物が集落内の墓に埋葬されたのかということも含めて検討する必要がある。

15世紀後半以降の墓は、建物跡との共存関係は明確にできないが、ほとんどが遺構群や屋敷地の区画の縁辺につくられており、中には溝状遺構と切りあうものもある。このことから、この時期の墓も建物や屋敷地を意識してつくられたと推測される。単独で存在する墓もあるが、多くの場合は

２～４基が１つの群をなしており、副葬された土器を見る限り、この小群は２型式程度の時期幅をもって形成されたようである。なお、前述したように沖手遺跡で桶棺墓が出現するのは15世紀後半頃であるが、これは草戸千軒町遺跡でも同様である。墓７は、桶棺内から成人男性の人骨のほか、副葬品として櫛、銭貨が出土し、棺外には土師器皿、漆器椀、折敷、箸が供献され、桶棺の周囲４か所に卒塔婆が立てられていた。卒塔婆には「[迷故三界]城　一」「[悟故]十方空　二」「本来無[東西]」「[何処有]南北」（以上、[　]内は推定）という偈頌が墨書で記されており、これらは棺の周囲を結界するために用いられたと考えられる（藤澤1998）。これらの遺物はこの墓で一定の作法に基づいて埋葬が行なわれたことを示しており、葬送儀礼をつかさどる聖がこの周辺にいたことが窺わせるものである。

17世紀代まで下ると考えられるものは、墓30～38である。これらは４区東側の溝状遺構15の南側で検出されており、これらも集落の区画を意識してつくられたものと考えられる。ただし、従来と比べて多くの墓が密集し、墓壙の切り合いが見られることから、集団墓地化している様子が窺われるが、継続的に造墓が行なわれなかったため、集団墓地としては未発達な状態で終わっている。この墓群では箱棺墓が７基、桶棺墓が２基確認されている。

以上から沖手遺跡１～４区の墓の変遷については、次のようにまとめることができる。

12 世 紀 代：屋敷地内に単独の埋葬、貿易陶磁の副葬、伸展葬の箱形木棺墓
14 世 紀 代：建物周辺に数基の埋葬、小規模な墓壙・木棺による屈葬
15～16世紀代：屋敷地や建物群の縁辺に数基の埋葬、小型の箱棺墓による屈葬のほか、桶棺墓による坐葬の採用
17 世 紀 ～：集落内の区画の縁辺に造墓、集団墓地化

ただし、当時はこうした集落内の埋葬のほかに、集落から外れた位置での集団墓地のほか、遺構として認知できないような遺棄葬もあったと推測され、沖手遺跡におけるこれらの埋葬の位置づけについて考えるには、この地域における他の墓のあり方などを含め、より多くの調査例から検討していく必要があろう。

（４）出土遺物について

次に出土遺物のあり方について種別ごとに見ていくこととしたい。表４・５・19～31に１～４区の土器・陶磁器の組成を示した[7]。

①古墳時代～古代の土器（表19）

古墳時代～古代の遺物は須恵器が383点、緑釉陶器が１点確認された。本来はこれらのほかに土師器の煮沸具も組成に加わっていたと考えられるが、抽出できなかった。全体に占める割合は、1.3％と少なく、遺構のあり方を含めて考えてれば、この時期には集落は形成されていなかったか、あったとしても小規模なものと推測される。ただし、緑釉陶器片が出土していることから、この周辺に拠点的な集落や、公的な施設が存在したのかもしれない。

②中世土師器・瓦質土器（表20）

中世以降になると遺物量が急増する。これらの大部分は土師器で、推定で破片22,000点余り、全体の3/4程度が出土している。土師器については遺存状態が悪く時期の特定できるものは少ない。土師器鍋や、口縁端部に平坦面をもつ鉢・擂鉢は、防長系瓦質土器が普及する15世紀よりも遡るも

のと考えられる。なお、土師器鍋の中には、口縁部と体部の境付近が厚くつくられた「西長門型鍋」と呼ばれるものが少数ながら出土しており、13～15世紀代のものと考えられる。

瓦質土器は2012点（全体の6.8%）出土している。擂鉢・鉢や、鍋（足鍋）が多く、湯釜も一定量見られる。型式ごとに分類・集計していないため時期的な傾向は分からないが、防長型瓦質土器以外に口縁端部に平坦な面をもつ鉢・擂鉢もあることから、14～16世紀代を中心とするものと考えられる。なお、瓦質土器については胎土分析では、沖手遺跡の試料の多くは、生産地である防府市岩淵遺跡・原遺跡のものと胎土が類似していることが分かり、この方面から沖手遺跡に搬入された可能性がある。ただし、擂鉢の一部などには、岩淵遺跡・原遺跡のものとは成分の異なるものもあり、このほかの地域や在地で生産されたものも存在するのかもしれない。

③中世国産陶器（表21・22）

中世の国産陶器は、東播系須恵器や瓷器系陶器、備前、瀬戸などがあり合計で395点（全体の約1.3%）が出土している。東播系須恵器・瓷器系陶器は中世前半のもので、備前・瀬戸は中世後半を中心とするものと考えられる。

備前焼はⅣ期のものが多く、Ⅴ・Ⅵ期のものは少ない（表21）。こうした傾向は山陰地方で共通しており、ⅤＢ期のものは城館関連遺跡や城下町遺跡で集中し、Ⅵ期のものは石見銀山遺跡や富田川河床遺跡のような特殊な遺跡以外では見られない（重根ほか2008）。沖手遺跡ではわずかながらもⅤＢ・Ⅵ期の遺物が出土しているということを積極的に評価するならば、中世末～近世初頭の益田には都市的な空間（七尾城下町遺跡など）が形成されており、沖手遺跡の集落はそれと何らかの関連をもっていたということがいえるのではないだろうか。

瀬戸は古瀬戸後期～大窯期のものが少量ながら出土している。古瀬戸中期の瓶もあるが、これについては伝世品の可能性もある。

④近世陶磁器（表23・24）

近世陶器は582点、磁器は375点で、合計957点（全体量の3.2%）が出土している。陶器・磁器とも肥前系のものが大半を占めている。肥前系陶器には17世紀前半まで遡るものが多く、皿には胎土目跡を持つものが24点、砂目跡を持つものが4点見られる。17世紀後半以降の遺物は減少するようであり、遺構のあり方から見ても、この頃が集落の最終段階になると考えられる。

⑤貿易陶磁（表5・25～31）

白磁・青磁・中国青花・五彩・中国陶器・朝鮮王朝陶磁をあわせて3283点が出土しており、全体量の約11%を占める。特に白磁が全体の5%、青磁が4%と高い割合で出土している。

表5に貿易陶磁の時期ごとの出土点数を示した。中世前半のものが多く、Ｃ～Ｆ期の集計では2178点となり、Ｃ～Ｋ期の総点数（2603点）の80%を超えている。さらに細かく時期別にみると沖手遺跡の集落開始段階であるＣ期のものが540点、これに次ぐＤ期のものが589点で、これらとＣ～

表4　沖手遺跡土器・陶磁器組成表

	古墳時代～古代			中世土師器	瓦質土器	中世国産陶器						近世陶磁器			貿易陶磁						不明陶器	合計
	須恵器	緑釉陶器	合計			東播系須恵器	瓷器系陶器	備前	備前系	瀬戸	合計	陶器	磁器	合計	白磁	青磁	青花・五彩	中国陶器	朝鮮陶磁	合計		
破片点数	383	1	384	22301	2012	77	15	239	16	48	395	582	375	957	1617	1221	100	255	90	3283	220	29552
出土比率	1.30	0.00	1.30	75.46	6.81	0.26	0.05	0.81	0.05	0.16	1.34	1.97	1.27	3.24	5.47	4.13	0.34	0.86	0.30	11.11	0.74	100.00

※中世土師器の点数は推定

Ｄ期のものを集計すると1274点で、11世紀後半～12世紀代のものがかなり多く、この頃が集落活動の盛行期であったことが窺われる。その後、Ｅ期は175点、Ｆ期は91点と前代よりも減少する傾向が見られる。

中世後半のものは、Ｇ～Ｋ期を集計して420点（Ｈ～Ｋ期では296点）で、中世前半よりもかなり少ない。時期をより細かく見ると、Ｇ～Ｈ期は168点、Ｉ～Ｋ期は138点である。

貿易陶磁の出土量を見る限りでは、中世前半のＣ・Ｄ期にピークがあり、Ｅ期から次第に集落が衰退・縮小し、中世後半以降は停滞しながらも集落が存続している、という見方ができそうに思われる。しかしながら、下関市豊北町内の遺跡でも、Ｃ・Ｄ期に出土量が多く、中世後半には減少していること（山本2007）から、こうした様相は山口県から島根県西部の日本海沿岸部では一般的な傾向と捉えることもでき、出土量以外からも検討する必要がある。

そこで、貿易陶磁のうち高級品、特殊品の類について注目したい。この類に含まれるものとしては、青白磁合子（123－41・42）、青磁水注（64－24）、青磁香炉（65－22、124－45）、青磁小壺（124－44）、中国陶器小壺（14－４、125－19）があり、64－24はＦ期、65－22、124－45はＦ期もしくはＧ期、124－44はＧ期以降のもので、14－４は上限が14世紀前後のものと考えられる[8]。このことから、貿易陶磁の少ないＦ期以降においても、沖手遺跡の集落はこのような特殊品を入手できるような機会に恵まれていた（入手できる有力人物が集落にいた）、と推測される。

⑥生産・生業関連遺物

溶解炉の炉壁や、椀形鍛冶滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物などが出土しており、金属学的な分析から、

表５　貿易陶磁時期別分類表

時期区分	C～F期															E×H	F×G	F×G
	C～D期							E～F期				C～F	D×E	E×F	C～F			
	C	D				C×D	C～D	E	F		E～F							
種別	白磁	白磁	青磁（同安）	青磁（龍泉）	合計	白磁	合計	青磁（龍泉）	白磁	青磁（龍泉）	合計	合計	白磁	青磁（龍泉）	青磁（龍泉）	合計	青磁（龍泉）	白磁	青磁（龍泉）
１区	261	20	65	68	153	66	480	55	28	5	33	88	268	13	0	849	0	0	3
２区	107	21	127	199	347	40	494	55	16	3	19	74	115	36	1	720	1	1	0
３区	86	7	16	24	47	22	155	34	17	0	17	51	113	8	0	327	0	0	0
４区西側	30	4	12	19	35	15	80	11	7	2	9	20	42	4	0	146	0	0	0
４区東側	32	0	7	9	16	5	53	20	7	4	11	31	33	2	0	119	0	0	0
位置不明	24	1	3	3	7	0	31	0	2	0	2	2	2	1	0	36	0	0	0
総　計	540	37	230	322	589	145	1274	175	77	14	91	266	573	64	1	2178	1	1	3

時期区分	G～K																					
	G～	G～H									H～	H～J	I～K								G～K合計
		G			G×H	H				G～H合計			I	I～K	I～J	J			K	I～K合計	
種別	青磁（龍泉）	白磁	青磁（龍泉）	合計	青磁（龍泉）	白磁	青磁（龍泉）	中国青花	合計		青磁（龍泉）	青磁（龍泉）	中国青花	青磁（龍泉）	白磁	中国青花	青磁（龍泉）	中国青花	合計	中国青花		
１区	27	1	0	1	15	28	10	3	41	57	0	3	4	0	20	0	9	5	14	1	35	139
２区	12	3	0	3	3	8	3	0	11	17	0	2	0	0	17	0	2	6	8	0	25	58
３区	8	1	0	1	6	10	1	6	17	24	0	1	0	0	15	4	0	9	9	8	36	87
４区西側	2	0	0	0	2	2	2	0	4	6	0	1	0	1	1	0	1	2	3	0	5	14
４区東側	16	1	6	7	18	12	20	2	34	59	2	4	0	0	13	0	3	11	14	4	31	114
位置不明	0	2	2	0	1	1	1	0	2	5	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	2	8
総　計	65	6	8	14	45	61	37	11	109	168	2	12	4	1	68	4	15	33	48	13	134	420

この遺跡では鋳鉄を用いた鋳造や、鍛錬工程を主体とする鍛冶作業が行なわれたと考えられる。なお、1－P880では鍛造剥片・粒状滓も採取されており、鍛冶炉の可能性もある。ただし、1～4区では鍛冶・鋳造関連遺物は少ないことから、専業の工人が常在していたのではなく、一時的に小規模な操業が行なわれたに過ぎないと考えられる。

このほか、土錘、石錘、ヤスといった漁具が出土しており、河川・潟湖・海での漁撈を生業とする者がいたことが分かる。

（5）集落の性格について

これまで、沖手遺跡の集落の様相について遺構・遺物から検討を行なったが、以下にこの遺跡の特徴を挙げ、集落の性格を考えることとしたい。

この集落は直線的にのびる溝状遺構（＝道路）によって区画された複数の屋敷地によって構成されており、計画性にもとづいて造られていた。集落は、一般集落とは異なる「町」的な景観を示していたと考えられる。

特殊品、珍品の類を含む貿易陶磁が多数出土していることもこの遺跡の特徴である。このことは、この集落が交易活動に密接に関わっており、そうした品々を入手する機会に恵まれていたことを示すものであろう。益田川の河口部に広がる潟湖に近接していたという立地状況から、日本海や益田川の水運を利用して益田平野や内陸部と国内遠隔地とを結ぶ流通の拠点として機能したと推測される。遺跡内に見られる遺構空白域は、広場的な空間で時として市が開かれたのかもしれない。また、大型の建物跡はこうした交易・流通活動に関わった有力者・富裕層の居宅か、あるいは物流を管理する公的な施設であった可能性がある。

この遺跡のもうひとつの特徴としては、集落が長期間継続して営まれていることである。集落は11世紀後半～12世紀前半に形成され、以後17世紀前半まで継続している。ただし、集落の形態や性格は各時代を通じて変遷しているものと考えられる。中世後半には、益田川の対岸で砂丘の後背地に中須西原遺跡が形成される。この遺跡では船着場跡と考えられる礫敷き遺構が確認され、中国・朝鮮陶磁のほか、ベトナムの鉄絵皿も出土している。また、戦国期には今市船着場が成立し、益田氏の貿易の拠点や市場として機能したと考えられる。これら益田平野内にある遺跡の消長と、沖手遺跡の集落の変遷や出土遺物の様相がどのように対応するのか、今後検討していく必要がある。

また、沖手遺跡と、その他の石見地方や、日本海沿岸の遺跡のあり方とを比較することで、当時の日本海交通において本遺跡や益田地域がどのような位置を占めていたのか明らかになるものと考えられる。

註

1　本報告作成時には保存処理が終わっていないため、丸木舟の下面については観察、記録が行なえなかった。
2　丸木舟の上部や周辺で検出された石について、報告で言及されていないものもあるが、今後はこのような石についても注意を払う必要があろう。
3　浜寄地方2D区P1では無文銭とともに土師器皿4点が出土しており（島根県教育委員会2007）、これらはその器形から大内Ⅲ期に並行するものと考えられる。また文献史料の研究から、弘治年間（1555～1558）に益田氏の支配領域で、収納銭として南京銭（無文銭）の使用されたことが明らかとなっている（本多2004）。
4　「1区報告書」では、墓1～6についてはいずれも大内Ⅳ期に比定されているが、遺物の再検討の結果から上記の位置づけが妥当と考えた。
5　時期区分の詳細については、（山本2007）を参照されたい。
6　これらの溝状遺構の底面では、地山に黒色土ブロックが嵌入していた。このようなことは、路面がぬかるんだ状態のときに踏み込まれたことによって生じた可能性があると筆者は考えている。類例を待ちたい。

7　土師器については、2.5cm以上のもののみカウント、残りの小片については全体の重量を計測した後に、そのうちの１/10程度をカウント・重量計測し、重量比から残りの破片点数を推定した。
8　山本信夫氏の御教示による。

参考文献

岩崎仁志　2007　「山陽西部における中世の土製煮沸具－周防・長門を中心に－」『中世土器の基礎的研究』21　日本中世土器研究会
岩本正二　1993　「西日本の井戸　－広島県草戸千軒町遺跡の井戸をめぐって－」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』潮見浩先生退官記念事業会編
近江俊秀　1993　「第５節　道路状遺構の構造に関する検討」『鴨神遺跡』奈良県文化財調査報告書第66集　奈良県立橿原考古学研究所
鹿島町立歴史民俗資料館　2003　『海の記憶－波濤を越えた人々－』
（財）香取郡市文化財センター　1999　『栗山川流域遺跡群　島ノ間遺跡』
木戸雅寿　1993　「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎的研究』Ⅸ　日本中世土器研究会
橘田正徳　2004　「中世前期の墓制－墓地・屋敷墓からみた中世前期の家・集落・社会－」『考古学の語る「中世墓地物語」』第５回大谷女子大学文化財学科公開講座資料
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　2001　『浦入遺跡群』京都府遺跡調査報告書第29冊
古賀信幸　1991　『大内氏遺跡出土土師器の編年』『大内氏館跡Ⅷ　大内氏関連町並遺跡Ⅰ』大内遺跡発掘調査報告書Ⅹ
榊原博英　2001　「浜田・古市遺跡おける中世前半の土器について」『松江考古』第9号　松江考古学談話会
滋賀県教育委員会　1966　『近江八幡市元・水茎町遺跡調査概要』
滋賀県教育委員会　1984　『長命寺湖底遺跡発掘調査概要』
（財）滋賀県文化財保護協会　2007　『丸木舟の時代　びわ湖と古代人』
重根弘和ほか　2008　「山陰地方出土の備前焼」『山陰地方における備前焼』第7回山陰中世土器検討会資料集　山陰中世土器検討会
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989　『大谷川Ⅳ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第20集
島根県教育委員会　2003　『権現山城跡　権現山石切場跡　白石谷遺跡　三田谷Ⅰ遺跡』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書ＸＶ
島根県教育委員会　2007　『浜寄･地方遺跡－１Ｈ・１Ｉ・２Ｂ・２Ｄ・２Ｅ各区の調査－』一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書４
島根大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『島根大学構内遺跡第１次調査（橋縄手地区１）』
清水潤三　1975　「日本古代の船」『日本古代文化の探求　船』社会思想社
出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局　2004　『山陰の出土銭貨』
瀬口眞司　2006　「論考３　暮らしをかえた縄文丸木舟」『丸木舟の時代　びわ湖と古代人』（財）滋賀県文化財保護協会
鳥取県教育委員会　1992　『東桂見遺跡試掘調査報告書』布勢総合運動公園拡張区域にかかる埋蔵文化財試掘調査
（財）鳥取県教育文化財団　1993　『井出胯遺跡』一般国道９号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
（財）鳥取県教育文化財団　1996　『桂見遺跡』主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
（財）鳥取県教育文化財団　2000　『青谷上寺地遺跡』１
（財）鳥取県教育文化財団　2002　『青谷上寺地遺跡』４
常松幹雄　1988　「井戸」『東アジアの国際都市博多』よみがえる中世１　平凡社
永井久美男編　1994　『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
永井久美男編　1996　『中世の出土銭　補遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
中原　斉　1998　「縄文時代の丸木舟」『考古学ジャーナル』№343
中森　祥　2007　「中国地方の様相」『日本の中世墓を探る』中世墓資料集成研究報告会資料集　中世墓資料集成研究会
西尾克己・目次謙一　2004　「島根県下の無文銭について」『中近世移行期の無文銭』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局
西ノ島町教育委員会　2000　『外浜遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
東　和幸　2004　「溝状遺構の一性格」『縄文の森から』第２号　鹿児島県立埋蔵文化財センター
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1996　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書』Ⅴ
浜田市教育委員会　1995　『伊甘土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報』
福井県教育委員会　1983　『鳥浜貝塚』
福部村教育委員会　1989　『栗谷遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
藤澤典彦　1998　「死者のまつり　－『入棺作法』を中心に－」『日本の信仰遺跡』金子裕之編
北条町教育委員会　1983　『島遺跡発掘調査報告書』第１集
本多博之　2004　「中国地方における低品位銭貨について」『中近世移行期の無文銭』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局
三方町教育委員会　1996　『ユリ遺跡』三方町文化財調査報告書第14集
森田　稔　1995　「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
山本信夫　2007　「山陰の出土貿易陶磁と傾向―集落における消費形態及び北部九州と日本海流通に関する基礎的検討―」『波原遺跡　森広遺跡　片山遺跡』下関市教育委員会
（財）米子市教育文化事業団　2003　『鳥取県米子市目久美遺跡』Ⅷ

表６　沖手遺跡建物跡一覧表

遺構名	調査区	グリッド	規　　模	主　軸	面積(㎡)	備　　考
建物跡１	１区	6M	1間(2.70m)×2間(3.63m)	N-80° -E	9.80	井戸４と共存か
建物跡２	１区	6M、7M	2間(7.08m)	N-80° -E	—	柱列とすべきか
建物跡３－１	１区	8L、9L	1間(3.28m)×2間(4.98m)	N-4° -W	16.33	15ｃ～
建物跡３－２	１区	8L、9L	1間(3.46m)×2間(4.98m)	N-7° -W	17.23	
建物跡４	１区	9K、9L	2間(5.70m)×3間(6.90m)	N-3° -W	39.33	15ｃ～
建物跡５	１区	9M、10M	1間(3.54m)×2間(5.40m)	N-80° -E	19.11	
建物跡６	１区	10M	1間(2.96m)×2間(3.74m)	N-6° -W	11.07	
建物跡７	１区	4O、5O	2間(6.32m)×3間(7.12m)	N-73° -E	44.99	12ｃ
建物跡８	１区	4P、5P	1間(2.56m)×2間(3.72m)	N-81° -E	9.52	
建物跡９	１区	5P	1間(1.90m)×2間(3.44m)	N-87° -E	6.53	
建物跡10	１区	5O	2間(4.10m)×2間(4.20m)	N-74° -E	17.22	13ｃ
建物跡11	１区	5O	1間(2.98m)×2間(6.22m)	N-12° -W	22.39	11ｃ後半～12ｃ
建物跡12	１区	4O	1間(2.26m)×2間(4.12m)	N-20° -W	9.31	14ｃ
建物跡13	１区	4M、4N	1間(2.88m)×2間(4.60m)	N-14° -W	13.34	
建物跡14	１区	5N、6N、5O、6O、5P	6間(10.68m)×5間(11.22m)	N-10° -W	117.15	
建物跡15	１区	6O	2間(5.18m)×3間(6.28m)	N-80° -E	22.89	
建物跡16	１区	6O	1間(1.86m)×2間(3.58m)	N-88° -E	6.65	
建物跡17	１区	5N、6N、5O、6O	1間(2.42m)×2間(3.48m)	N-80° -E	8.42	
建物跡18	１区	6O、6P	3間(4.64m)×4間(6.10m)	N-77° -E	28.30	柱列12を切る
建物跡19	１区	5N、6N、5O、6O	1間(3.54m)×2間(5.06m)	N-76° -E	17.84	
竪穴跡20	２区	7O	1間(2.00m)×2間(2.60m)	N-10° -W	5.20	
建物跡21	２区	7O	2間(2.94m)×4間(8.08m)	N-9° -W	11.79	
建物跡22	１区	7O、7P	1間(2.72m)×5間(8.02m)	N-10° -W	21.81	13ｃ中～14ｃ初、建物跡23と柱穴を共有
建物跡23	１・２区	7O	1間～(2.04m～)×3間(5.08m)	N-80° -E	10.58以上	
建物跡24	１区	7O	1間(1.66m)×2間(2.88m)	N-82° -E	4.78	
建物跡25	１・２区	7O	2間(3.34m)×3間(5.24m)	N-81° -E	17.50	14ｃ
建物跡26	２区	5Q、6Q	2間(4.20m)×3間(6.16m)	N-83° -E	25.87	
建物跡27	２区	4Q、5Q	2間(4.24m)×3間(8.08m)	N-85° -E	34.26	
建物跡28	２区	5Q、6Q	1間(2.08m)×2間(3.84m)	N-10° -W	7.98	13ｃ中～14ｃ初
建物跡29	２区	5Q	1間(1.88m)×1間(2.16m)	N-84° -E	4.06	
建物跡30	２区	5Q、6Q	1間(2.38m)×2間(4.46m)	N-87° -W	10.61	
建物跡31	２区	6Q	1間(3.28m)×2間(4.18m)	N-10° -W	13.71	
建物跡32	２区	6P、7P、6Q、7Q	1間(3.86m)×2間(5.64m)	N-8° -W	21.77	
建物跡33	２区	6Q、7Q	2間(3.88m)×3間(7.12m)	N-83° -E	27.63	
建物跡34	２区	7P、8P、7Q、8Q	2間(3.76m)×4間(5.58m)	N-85° -E	20.98	
建物跡35	２区	8P、8Q	2間(2.90m)×2間(3.70m)	N-18° -W	10.73	
建物跡36	２区	7P、8P、7Q	1間(2.28m)×3間(4.76m)	N-76° -E	10.85	
建物跡37	２区	7P、8P、7Q、8Q	2間(4.66m)×2間(5.98m)	N-20° -W	27.86	
建物跡38	２区	7P、8P、7Q、8Q	2間(5.38m)×3間(6.26m)	N-81° -E	19.90	
建物跡39	２区	7P、7Q	1間(1.98m)×1間(2.94m)	N-9° -W	5.82	14ｃ末～15ｃ前半
建物跡40	３区	12J、13J、12K、13K	3間(7.14m)×3間(5.62m)	N-13° -W	47.80	東西２面に廂、南東側に１間×２間の付屋。建物跡42を切る。14ｃ前半
建物跡41	３区	12J、13J、13K	3間(5.20m)×3間(8.64m)	N-78° -E	44.93	
建物跡42	３区	12J、13J、12K、13K	2間(5.72m)×5間(8.52m)	N-14° -W	48.73	建物跡44を切る
建物跡43	３区	13J、14J、13K、14K	2間(5.34m)×5間(9.28m)	N-21° -W	49.56	建物跡40を切る。14～15Ｃ中頃
建物跡44	３区	13K	1間(1.68m)×2間(3.58m)	N-71° -E	6.01	建物跡41を切る
建物跡45	３区	13J、13K	2間(3.58m)×3間(5.04m)	N-13° -W	18.04	
建物跡46	３区	12K、12L	1間(3.70m)×3間(7.80m)	N-7° -W	28.86	南面に廂
建物跡47	４区	15J、16J	2間(6.48m)×3間(6.48m)	N-11° -W	41.99	
建物跡48	４区	15J、16J	1間(3.04m)×1間(2.48m)	N-6° -W	7.54	１間×２間の建物跡の可能性あり
建物跡49	４区	15J、16J	1間(2.92m)×2間(3.9m)	N-74° -E	11.39	１間×３間の建物跡の可能性あり
建物跡50	４・８区	15H、16H、15I、16I	2間(6.40m)×4間(8.26m)	N-15° -W	52.86	
建物跡51	４・８区	15I、16I	2間(3.84m)×3間(6.64m)	N-17° -W	25.49	
建物跡52	４区	16I、17I	2間(3.86m)×2間(5.40m)	N-85° -E	20.84	～12ｃ
建物跡53	４・８区	16H、16I	2間(6.14m)×4間(8.02m)	N-10° -W	49.24	
建物跡54	４・８区	16H、16I	2間(6.48m)×4間(7.75m)	N-11° -W	50.22	
建物跡55	４・８区	16H、17H、16I、17I	3間(7.20m)×4間(6.98m)	N-11° -W	50.25	四面廂、東側に柱列伴う。
建物跡56	４区	17H、18H、17I、18I	2間(6.56m)×4間(6.50m)	N-12° -W	42.64	
建物跡57	４区	17I	1間(1.74m)×1間(2.20m)	N-79° -E	3.82	
建物跡58	４区	17H、18H、17I、18I	3間(6.67m)×4間(7.94m)	N-12° -W	52.95	
建物跡59	４区	18H、19H	4間(5.02m)×4間(6.66m)	N-78° -E.	33.43	北面に廂？
建物跡60	４区	19G、19H	1間(1.52m)×4間(9.32m)	N-15° -W	14.17	
建物跡61	４区	19H、20H	1間(2.10m)×2間(3.10m)	N-74° -E	6.51	
建物跡62	４・８区	18G、19G、18H、19H	3間(7.08m)×3間(5.68m)	N-15° -W	40.21	南北２面に廂
建物跡63	４・８区	17G、18G、19G、17H、18H	5間(14.02m)×6間(9.42m)	N-17° -W	118.52	東西２面に廂
建物跡64	４区	20G、19H、20H、19I、20I	3間(9.46m)×5間(8.86m)	N-13° -W	83.81	墓16に切られる
建物跡65	４区	21F、22F	1間(3.09m)×2間(3.98m)	N-67° -E	12.29	
建物跡66	４区	22F、22G	1間(2.06m)×2間(4.51m)	N-73° -E	9.29	15ｃ～
建物跡67	４区	22F、22G	1間(2.18m)×2間(4.06m)	N-68° -E	8.85	
建物跡68	４区	22F、23F、22G、23G	1間(3.94m)×2間(5.89m)	N-20° -W	23.20	15ｃ後半～
建物跡69	４区	22F、22G	1間(2.57m)×2間(5.87m)	N-22° -W	15.08	
建物跡70	４区	23G、24G	1間(3.40m)×2間(4.30m)	N-30° -W	14.62	
建物跡71	４区	24G	1間(3.02m)×2間(3.80m)	N-62° -E	11.48	
建物跡72Ａ	４区	24E、24F、25F	1間(3.71m)×3間(7.21m)	N-26° -W	26.74	建て替えの可能性。15～16ｃ
建物跡72Ｂ	４区	24E、24F、25F	1間(3.47m)×3間(7.03m)	N-28° -W	24.39	
建物跡73Ａ	４区	24E、25E、25F	2間(4.58m)×2間(5.68m)	N-28° -W	26.01	建て替えの可能性。14ｃ末～15ｃ前半
建物跡73Ｂ	４区	25E、25F	1間(2.22m)×2間(5.68m)	N-24° -W	12.61	
建物跡74	４区	25E、25F	1間(2.50m)×2間(5.36m)	N-64° -E	13.40	15～16ｃ
建物跡75	４区	24E、25E	1間(3.01m)×2間(5.25m)	N-24° -W	15.80	
建物跡76Ａ	４区	25F、25G	1間(2.86m)×4間(7.79m)	N-66° -E	22.27	16ｃ後半
建物跡76Ｂ	４区	25F、25G	1間(3.30m)×2間(3.78m)	N-66° -E	12.47	

表７　沖手遺跡建物跡計測表

建物跡7

規模		梁行き					桁行き				
		6.32m（2間）					7.12m（3間）				
主軸		N-73°-E					面積(㎡)	44.99			
柱穴	番号	1-P277	1-P402	1-P210	1-P327	1-P264	1-P286	1-P316	1-P330	1-P133	1-P144
	上面径(cm)	28×24	30×24	22×20	26×22	26×22	28×24	42×30	30×28	26×18	30×28
	下面径(cm)	18×14	24×20	16×16	18×10	16×12	18×14	18×12	20×12	22×12	24×16
	深さ(cm)	24	22	30	18	18	22	30	26	16	26
	番号	1-P232	1-P1099								
	上面径(cm)	22×16	50×32								
	下面径(cm)	14×12	16×12								
	深さ(cm)	14	28								
柱間距離(m)		1-P277～1-P402	1-P402～1-P210	1-P210～1-P327	1-P264～1-P286	1-P286～1-P316	1-P316～1-P330	1-P133～1-P144	1-P144～1-P232	1-P232～1-P1099	1-P277～1-P264
		2.48	2.52	2.08	2.43	2.48	2.14	2.44	2.46	2.24	3.22
		1-P264～1-P133	1-P402～1-P286	1-P286～1-P144	1-P210～1-P316	1-P316～1-P232	1-P327～1-P330	1-P330～1-P1099			
		3.10	3.20	3.08	3.20	3.10	3.18	3.10			

建物跡8

規模		梁行き					桁行き				
		2.56m（1間）					3.72m（2間）				
主軸		N-81°-E					面積(㎡)	9.52			
柱穴	番号	1-P102	1-P34	1-P92	1-P63	1-P78	1-P19				
	上面径(cm)	38×30	46×24	42×26	30×26	26×22	32×26				
	下面径(cm)	0.8×0.8	38×18	34×18	22×12	14×14	22×18				
	深さ(cm)	20	16	30	32	10	20				
柱間距離(m)		1-P102～1-P34	1-P78～1-P19	1-P102～1-P92	1-P92～1-P78	1-P34～1-P63	1-P63～1-P19				
		2.52	2.56	1.70	1.88	1.84	1.90				

建物跡9

規模		梁行き					桁行き				
		1.90m（1間）					3.44m（2間）				
主軸		N-87°-E					面積(㎡)	6.53			
柱穴	番号	1-P51	1-P39	1-P97	1-P35	1-P60	1-P30				
	上面径(cm)	22×18	20×18	22×18	22×20	34×14	20×19				
	下面径(cm)	18×10	18×14	14×0.6	16×12	24×0.6	16×0.8				
	深さ(cm)	12	10	20	16	16	10				
柱間距離(m)		1-P51～1-P39	1-P60～1-P30	1-P51～1-P97	1-P97～1-P60	1-P39～1-P35	1-P35～1-P30				
		1.90	1.86	1.72	1.64	1.68	1.74				

建物跡10

規模		梁行き					桁行き				
		4.10m（2間）					4.20m（2間）				
主軸		N-74°-E					面積(㎡)	17.22			
柱穴	番号	1-P336	1-P339	1-P348	1-P176	1-P183	1-P197	1-P229	1-P234	1-P218	
	上面径(cm)	30×18	23×20	30×20	30×24	32×22	32×24	20×16	40×16	26×22	
	下面径(cm)	12×0.8	18×14	20×10	18×16	12×10	12×10	10×0.6	16×0.8	18×10	
	深さ(cm)	20	22	28	18	10	32	28	10	20	
柱間距離(m)		1-P336～1-P339	1-P339～1-P348	1-P176～1-P183	1-P183～1-P197	1-P229～1-P234	1-P234～1-P218	1-P336～1-P176	1-P176～1-P229	1-P339～1-P183	1-P183～1-P234
		1.90	2.12	1.90	2.20	1.90	2.28	2.06	2.04	2.02	2.02
		1-P348～1-P197	1-P197～1-P218								
		1.98	2.02								

建物跡11

規模		梁行き					桁行き				
		2.98m（1間）					6.22m（2間）				
主軸		N-12°-W					面積(㎡)	22.39			
柱穴	番号	1-P354	1-P362	1-P341	1-P375	1-P226	1-P223				
	上面径(cm)	26×24	28×22	26×24	28×20	30×24	30×22				
	下面径(cm)	16×12	18×12	20×14	22×10	26×22	14×12				
	深さ(cm)	34	14	26	14	10	20				
柱間距離(m)		1-P354～1-P362	1-P226～1-P223	1-P354～1-P341	1-P341～1-P226	1-P362～1-P375	1-P375～1-P223				
		2.98	3.06	2.36	3.84	2.30	3.94				

建物跡12

規模		梁行き					桁行き				
		2.26m（1間）					4.12m（2間）				
主軸		N-20°-W					面積(㎡)	9.31			
柱穴	番号	1-P280	1-P304	1-P285	1-P311	1-P246	1-P170				
	上面径(cm)	24×20	28×26	24×16	58×30	28×24	30×26				
	下面径(cm)	16×12	12×0.8	10×0.8	18×16	20×12	22×18				
	深さ(cm)	18	20	20	28	24	10				
柱間距離(m)		1-P280～1-P304	1-P246～1-P170	1-P280～1-P285	1-P285～1-P246	1-P304～1-P311	1-P311～1-P170				
		2.22	2.26	2.24	1.86	2.24	1.86				

建物跡13

規模		梁行き					桁行き				
		2.88m（1間）					4.60m（2間）				
主軸		N-14°-W					面積(㎡)	13.34			
柱穴	番号	1-P540	1-P575	1-P490	1-P569	1-P500	1-P574				
	上面径(cm)	42×30	37×22	32×26	22×18	30×22	20×16				
	下面径(cm)	38×24	18×12	14×12	12×12	20×10	14×12				
	深さ(cm)	28	34	30	24	10	22				
柱間距離(m)		1-P540～1-P575	1-P575～1-P490	1-P569～1-P500	1-P500～1-P574	1-P540～1-P569	1-P490～1-P574				
		2.60	1.98	2.66	2.08	2.78	2.88				

建物跡14

規模		梁行き					桁行き				
		10.68m（6間）					11.22m（5間）				
主軸		N-10°-W					面積(㎡)	117.15			
柱	番号	1-P360	1-P355	1-P358	1-P449	1-P852	1-P859	1-P861	1-P361	1-P365	1-P18
	上面径(cm)	28×22	20×18	30×24	28×24	30×26	22×22	30×22	30×26	24×22	22×20
	下面径(cm)	20×16	16×0.8	24×20	24×20	24×16	16×12	16×12	22×18	20×14	12×12
	深さ(cm)	16	26	12	14	8	22	24	22	22	12
	番号	1-P1109	1-P823	1-P827	1-P830	1-P343	1-P368	1-P14	1-P818	1-P798	1-P758
	上面径(cm)	20×18	34×30	24×22	30×28	24×20	28×26	24×18	24×22	24×20	44×34
	下面径(cm)	18×14	26×20	18×16	20×14	16×14	20×16	22×16	18×16	18×14	16×14
	深さ(cm)	10	10	18	20	18	14	18	6	22	34
	番号	1-P263	1-P224	1-P6	1-P814	1-P809	1-P768	1-P767	1-P196	1-P261	1-P4
	上面径(cm)	54×38	48×32	24×20	32×28	22×20	42×30	28×24	44×30	26×24	24×20
	下面径(cm)	44×30	24×14	16×16	22×14	16×12	20×16	18×12	22×14	18×16	16×12
	深さ(cm)	16	22	20	22	12	32	18	14	22	18
穴	番号	1-P702	1-P706	1-P711	1-P46	1-P260	1-P2	1-P697	1-P688	1-P776	1-P674
	上面径(cm)	26×24	30×22	28×28	30×20	36×28	36×28	26×22	24×22	30×28	28×22
	下面径(cm)	18×16	12×12	26×18	0.4×0.3	18×14	18×12	20×16	12×10	18×10	24×16
	深さ(cm)	6	26	14	14	38	38	8	18	28	10
柱間距離(m)		1-P360～1-P355	1-P355～1-P358	1-P358～1-P449	1-P449～1-P852	1-P852～1-P859	1-P859～1-P861	1-P361～1-P365	1-P365～1-P18	1-P18～1-P1109	1-P1109～1-P823
		1.92	1.82	1.72	1.72	1.86	1.62	1.92	1.76	1.76	1.72
		1-P823～1-P827	1-P827～1-P830	1-P343～1-P368	1-P368～1-P14	1-P818～1-P798	1-P798～1-P758	1-P263～1-P224	1-P224～1-P6	1-P6～1-P814	1-P814～1-P809
		1.84	1.64	1.90	1.72	1.82	1.62	1.90	1.68	1.86	1.68
		1-P809～1-P768	1-P768～1-P767	1-P196～1-P261	1-P261～1-P4	1-P702～1-P706	1-P706～1-P711	1-P46～1-P260	1-P260～1-P2	1-P2～1-P697	1-P697～1-P688
		1.82	1.63	1.88	1.64	1.82	1.68	1.88	1.60	1.88	1.72
		1-P688～1-P776	1-P776～1-P674	1-P360～1-P361	1-P361～1-P343	1-P343～1-P263	1-P263～1-P196	1-P196～1-P46	1-P355～1-P365	1-P365～1-P368	1-P368～1-P224
		1.80	1.64	2.44	2.26	2.10	2.12	1.80	2.40	2.38	2.14
		1-P224～1-P261	1-P261～1-P260	1-P358～1-P18	1-P18～1-P14	1-P14～1-P6	1-P6～1-P4	1-P4～1-P2	1-P852～1-P823	1-P823～1-P818	1-P818～1-P809
		2.04	1.92	2.44	2.34	2.22	2.04	1.86	2.08	2.30	2.34
		1-P809～1-P702	1-P702～1-P688	1-P859～1-P827	1-P827～1-P798	1-P798～1-P768	1-P768～1-P706	1-P706～1-P776	1-P861～1-P830	1-P830～1-P758	1-P758～1-P767
		1.94	2.02	2.64	2.28	2.40	1.64	2.30	2.86	2.06	2.46
		1-P767～1-P711	1-P711～1-P674								
		1.84	2.00								

建物跡15

規模		梁行き					桁行き				
		5.18m（2間）					6.28（3間）				
主軸		N-80°-E					面積(㎡)	22.89			
柱	番号	1-P816	1-P802	1-P759	1-P781	1-P807	1-P770	1-P695	1-P689	1-P777	1-P744
	上面径(cm)	38×24	26×20	20×18	30×26	32×24	26×20	22×18	20×16	26×24	50×34
	下面径(cm)	18×16	18×12	14×14	18×16	14×10	20×16	18×14	14×12	10×8	46×20
	深さ(cm)	10	8	10	14	26	12	16	16	26	28
穴	番号	1-P664									
	上面径(cm)	40×32									
	下面径(cm)	30×12									
	深さ(cm)	18									
柱間距離(m)		1-P816～1-P802	1-P802～1-P759	1-P781～1-P807	1-P807～1-P770	1-P770～1-P744	1-P695～1-P689	1-P689～1-P777	1-P777～1-P664	1-P816～1-P781	1-P781～1-P695
		2.24	2.20	2.20	2.22	1.86	2.18	2.20	1.84	2.30	2.88
		1-P802～1-P807	1-P807～1-P689	1-P759～1-P770	1-P770～1-P777	1-P744～1-P664					
		2.28	2.88	2.26	2.74	2.70					

建物跡16

規模		梁行き					桁行き				
		1.86m（1間）					3.58m（2間）				
主軸		N-88°-E					面積(㎡)	6.65			
柱	番号	1-P769	1-P708	1-P811	1-P705	1-P815	1-P813				
	上面径(cm)	28×22	34×26	24×20	20×16	26×24	28×26				
穴	下面径(cm)	20×18	20×16	18×16	16×12	20×14	14×14				
	深さ(cm)	16	30	10	10	20	14				
柱間距離(m)		1-P769～1-P708	1-P815～1-P813	1-P769～1-P811	1-P811～1-P815	1-P708～1-P705	1-P705～1-P813				
		1.86	1.84	1.80	1.78	1.74	1.86				

建物跡17

規模		梁行き					桁行き				
		2.42m（1間）					3.48m（2間）				
主軸		N-80°-E					面積(㎡)	8.42			
柱	番号	1-P858	1-P824	1-P874	1-P822	1-P447	1-P16				
	上面径(cm)	22×20	24×22	28×26	22×18	30×26	22×20				
穴	下面径(cm)	18×12	16×12	24×24	16×16	26×24	16×12				
	深さ(cm)	6	8	10	4	16	14				
柱間距離(m)		1-P858～1-P824	1-P447～1-P16	1-P858～1-P874	1-P874～1-P447	1-P824～1-P822	1-P822～1-P16				
		2.42	2.20	1.84	1.64	1.70	1.74				

建物跡18

規模		梁行き					桁行き				
		4.64m（3間）					6.10m（4間）				
主軸		N-77°-E					面積(㎡)	28.30			
柱	番号	1-P760	1-P808	1-P768	1-P766	1-P743	1-P700	1-P704	1-P707	1-P683	1-P720
	上面径(cm)	22×16	22×20	40×32	52×26	34×26	22×20	26×18	30×24	20×18	24×22
	下面径(cm)	18×10	10×0.8	22×18	20×16	20×18	16×12	18×12	20×14	14×10	16×14
	深さ(cm)	16	6	34	36	34	24	24	40	24	38
	番号	1-P778	1-P661	1-P622	1-P684	1-P682	1-P671	1-P668			
穴	上面径(cm)	16×20	22×22	22×20	22×20	44×28	26×24	50×32			
	下面径(cm)	10×12	14×14	18×16	16×12	36×20	20×18	32×26			
	深さ(cm)	12	20	14	32	24	32	16			
柱間距離(m)		1-P760～1-P808	1-P808～1-P768	1-P768～1-P766	1-P766～1-P743	1-P700～1-P704	1-P704～1-P707	1-P707～1-P683	1-P683～1-P720	1-P622～1-P684	1-P684～1-P682
		1.40	1.50	1.62	1.58	1.40	1.44	1.62	1.62	1.40	1.38
		1-P682～1-P671	1-P671～1-P668	1-P760～1-P700	1-P700～1-P778	1-P778～1-P622	1-P808～1-P704	1-P704～1-P684	1-P768～1-P707	1-P707～1-P682	1-P766～1-P683
		1.62	1.68	1.88	1.24	1.52	1.88	2.72	1.90	2.68	1.90
		1-P683～1-P671	1-P743～1-P720	1-P720～1-P661	1-P661～1-P668						
		2.64	1.90	1.12	1.50						

建物跡19

規模	梁行き					桁行き				
	3.54m（1間）					5.06m（2間）				
主軸	N-76°-E					面積(㎡)	17.84			
柱穴 番号	1-P448	1-P857	1-P862	1-P821	1-P820	1-P829				
柱穴 上面径(cm)	26×18	26×24	24×22	28×24	24×16	22×20				
柱穴 下面径(cm)	16×14	14×12	14×10	20×18	12×10	12×10				
柱穴 深さ(cm)	34	26	36	32	8	36				
柱間距離(m)	1-P448～1-P857	1-P857～1-P862	1-P821～1-P820	1-P820～1-P829	1-P448～1-P821	1-P862～1-P829				
	2.56	2.50	2.64	2.42	3.46	3.54				

建物跡20

規模	梁行き					桁行き				
	2.00m（1間）					2.60m（2間）				
主軸	N-10°-W					面積(㎡)	5.20			
柱穴 番号	2-P420	2-P378	2-P428	2-P371	2-P438	2-P366				
柱穴 上面径(cm)	30×28	38×26	38×22	30×22	30×24	34×28				
柱穴 下面径(cm)	22×16	26×16	20×16	18×12	22×16	18×12				
柱穴 深さ(cm)	28	26	40	30	25	30				
柱間距離(m)	2-P420～2-P378	2-P378～2-P371	2-P371～2-P366	2-P366～2-P438	2-P438～2-P428	2-P428～2-P420				
	2.00	1.36	1.24	1.98	1.36	1.32				

建物跡21

規模	梁行き					桁行き				
	2.94m（2間）					8.08m（4間）				
主軸	N-9°-W					面積(㎡)	11.79			
柱 番号	2-P408	2-P401	2-P417	2-P1013	2-P426	2-P393	2-P439	2-P363	2-P455	2-P447
柱 上面径(cm)	30×20	32×22	24×18	22×20	26×(22)	20×20	22×18	42×40	26×22	24×22
柱 下面径(cm)	14×10	22×14	16×14	18×14	12×10	12×10	10×0.8	36×28	14×10	18×10
柱 深さ(cm)	12	18	18	8	40	12	34	32	18	14
穴 番号	2-P340									
穴 上面径(cm)	20×18									
穴 下面径(cm)	16×12									
穴 深さ(cm)	18									
柱間距離(m)	2-P408～2-P401	2-P417～2-P1013	2-P426～2-P393	2-P439～2-P363	2-P455～2-P447	2-P447～2-P340	2-P408～2-P417	2-P417～2-P426	2-P426～2-P439	2-P439～2-P455
	1.46	1.44	1.42	1.42	1.38	1.56	2.12	1.88	2.06	2.02
	2-P401～2-P1013	2-P1013～2-P393	2-P393～2-P363	2-P363～2-P447						
	2.12	1.86	2.08	2.02						

建物跡22

規模	梁行き					桁行き				
	2.72m（1間）					8.02m（5間）				
主軸	N-10°-W					面積(㎡)	21.81			
柱 番号	1-P979	1-P1045	1-P967	1-P1043	1-P1028	1-P1042	1-P931	1-P1041	1-P911	1-P1040
柱 上面径(cm)	30×20	26×20	40×24	34×(20)	22×16	36×(20)	30×26	36×(24)	24×16	30×(18)
柱 下面径(cm)	14×(12)	16×12	34×22	12×(10)	12×12	30×(20)	18×14	(24)×22	16×12	20×12
柱 深さ(cm)	14	16	14	18	6	14	14	10	8	10
穴 番号	2-P461	2-P340								
穴 上面径(cm)	26×24	30×(26)								
穴 下面径(cm)	20×14	22×14								
穴 深さ(cm)	10	12								
柱間距離(m)	1-P979～1-P1045	1-P461～2-P340	1-P979～1-P967	1-P967～1-P1028	1-P1028～1-P931	1-P931～1-P911	1-P911～1-P461	1-P1045～1-P1043	J-P1043～1-P1042	1-P1042～1-P1041
	2.72	2.66	1.44	1.70	1.94	1.62	1.80	1.54	1.76	1.78
	1-P1041～1-P1040	1-P1040～1-P340								
	1.66	1.26								

建物跡23

規模	梁行き					桁行き				
	2.04m（1間～）					5.08m（3間）				
主軸	N-10°-W					面積(㎡)	10.58以上			
柱穴 番号	1-P1045	2-P391	1-P1043	1-P1042	1-P1041	2-P363				
柱穴 上面径(cm)	24×20	40×36	36×-	36×-	36×-	42×40				
柱穴 下面径(cm)	16×14	36×32	12×-	28×-	26×-	36×30				
柱穴 深さ(cm)	34	17	20	17	12	31				
柱間距離(m)	1-P1045～2-P391	1-P1045～1-P1043	1-P1043～1-P1042	1-P1042～1-P1041	1-P1041～2-P363					
	2.04	1.54	1.76	1.78	2.14					

建物跡24

規模	梁行き					桁行き				
	1.66m（1間）					2.88m（2間）				
主軸	N-82°-E					面積(㎡)	4.78			
柱穴 番号	1-P985	1-P1047	1-P994	1-P961	1-P966	1-P971				
柱穴 上面径(cm)	(24)×20	30×20	28×20	24×22	30×20	30×18				
柱穴 下面径(cm)	10×0.6	12×0.6	12×10	0.6×0.4	20×12	14×12				
柱穴 深さ(cm)	38	34	30	26	32	30				
柱間距離(m)	1-P985～1-P1047	1-P1047～1-P994	1-P961～1-P966	1-P966～1-P971	1-P985～1-P961	1-P994～1-P971				
	1.46	1.42	1.40	1.50	1.66	1.64				

建物跡25

規模	梁行き 3.34m（2間）					桁行き 5.24m（3間）				
主軸	N-81°-E					面積(㎡)	17.50			
柱穴 番号	1-P987	1-P980	1-P977	2-P398	1-P964	1-P968	1-P957	2-P396	1-P945	1-P948
柱穴 上面径(cm)	36×24	28×24	30×22	30×24	32×26	36×28	30×26	30×26	44×28	30×24
柱穴 下面径(cm)	22×14	10×0.6	36×28	22×18	22×18	26×22	18×14	22×18	16×10	20×16
柱穴 深さ(cm)	36	10	6	32	20	22	24	24	24	18
柱穴 番号	1-P953	2-P424								
柱穴 上面径(cm)	20×18	30×24								
柱穴 下面径(cm)	14×10	18×14								
柱穴 深さ(cm)	10	24								
柱間距離(m)	1-P987～1-P980	1-P980～1-P977	1-P977～2-P398	1-P964～1-P968	1-P968～1-P957	1-P957～2-P396	1-P945～1-P948	1-P948～1-P953	1-P953～2-P424	1-P987～1-P964
	1.68	1.74	1.80	1.64	1.78	1.80	1.58	1.86	1.80	1.46
	1-P964～1-P945	1-P980～1-P968	1-P968～1-P948	1-P977～1-P957	1-P957～1-P953	2-P398～2-P396	2-P396～2-P424			
	1.84	1.46	1.86	1.46	2.00	1.44	1.92			

建物跡26

規模	梁行き 4.20m（2間）					桁行き 6.16m（3間）				
主軸	N-83°-E					面積(㎡)	25.87			
柱穴 番号	2-P700	2-P687	2-P848	2-P845	2-P710	2-P723	2-P583	2-P589	2-P531	2-P530
柱穴 上面径(cm)	22×18	34×32	36×32	26×16	36×28	30×28	38×36	24×22	44×32	34×26
柱穴 下面径(cm)	16×12	22×20	22×18	20×12	20×16	8×6	20×18	10×8	24×20	20×20
柱穴 深さ(cm)	12	36	15	17	16	34	21	43	27	21
柱穴 番号	2-P543	2-P549								
柱穴 上面径(cm)	34×26	32×30								
柱穴 下面径(cm)	18×16	22×16								
柱穴 深さ(cm)	22	28								
柱間距離(m)	2-P700～2-P687	2-P687～2-P848	2-P848～2-P845	2-P710～2-P723	2-P723～2-P583	2-P583～2-P589	2-P531～2-P530	2-P530～2-P543	2-P543～2-P549	2-P700～2-P710
	2.08	2.50	1.64	2.14	2.48	1.66	2.04	2.42	1.70	2.08
	2-P710～2-P531	2-P687～2-P723	2-P723～2-P530	2-P848～2-P583	2-P583～2-P543	2-P845～2-P589	2-P589～2-P549			
	2.00	1.94	2.08	2.08	1.98	2.20	2.00			

建物跡27

規模	梁行き 4.24m（2間）					桁行き 8.08m（3間）				
主軸	N-85°-E					面積(㎡)	34.26			
柱穴 番号	2-P609	2-P651	2-P649	2-P600	2-P625	2-P673	2-P683	2-P692	2-P694	2-P703
柱穴 上面径(cm)	18×16	26×22	20×20	28×22	28×22	40×32	32×30	14×12	28×22	34×24
柱穴 下面径(cm)	12×10	20×18	14×14	10×8	20×16	22×16	18×18	10×10	20×18	22×14
柱穴 深さ(cm)	14	14	8	29	19	35	25	11	22	21
柱穴 番号	2-P724									
柱穴 上面径(cm)	22×18									
柱穴 下面径(cm)	12×8									
柱穴 深さ(cm)	11									
柱間距離(m)	2-P609～2-P651	2-P651～2-P649	2-P600～2-P625	2-P625～2-P673	2-P673～2-P683	2-P692～2-P694	2-P694～2-P703	2-P703～2-P724	2-P600～2-P692	2-P609～2-P625
	2.82	2.70	2.70	2.88	2.76	2.82	2.62	2.64	2.08	2.16
	2-P625～2-P694	2-P651～2-P673	2-P673～2-P703	2-P649～2-P683	2-P683～2-P724					
	2.16	2.04	2.18	2.16	2.10					

建物跡28

規模	梁行き 2.08m（1間）					桁行き 3.84m（2間）				
主軸	N-10°-W					面積(㎡)	7.98			
柱穴 番号	2-P800	2-P792	2-P574	2-P780	2-P551	2-P949	2-P544	2-P775		
柱穴 上面径(cm)	34×30	28×22	20×16	20×18	22×14	22×14	30×24	24×22		
柱穴 下面径(cm)	20×18	16×12	12×0.8	14×10	12×10	12×10	14×10	14×12		
柱穴 深さ(cm)	26	24	8	10	6	6	18	18		
柱間距離(m)	2-P800～2-P792	2-P544～2-P775	2-P800～2-P574	2-P574～2-P551	2-P551～2-P544	2-P792～2-P780	2-P780～2-P949	2-P949～2-P775		
	2.08	1.92	2.00	0.94	0.94	2.04	0.84	0.94		

建物跡29

規模	梁行き 1.88m（1間）					桁行き 2.16m（1間）				
主軸	N-84°-E					面積(㎡)	4.06			
柱穴 番号	2-P718	2-P713	2-P566	2-P535						
柱穴 上面径(cm)	30×20	22×18	30×28	38×34						
柱穴 下面径(cm)	20×14	16×10	20×16	24×20						
柱穴 深さ(cm)	10	14	14	20						
柱間距離(m)	2-P718～2-P713	2-P566～2-P535	2-P718～2-P566	2-P713～2-P535						
	2.04	2.16	1.88	1.86						

建物跡30

規模	梁行き 2.38m（1間）					桁行き 4.46m（2間）				
主軸	N-93°-E					面積(㎡)	10.61			
柱穴 番号	2-P729	2-P879	2-P901	2-P665	2-P852	2-P857				
柱穴 上面径(cm)	46×30	20×14	34×26	46×34	24×20	34×24				
柱穴 下面径(cm)	16×4	8×8	26×16	40×32	14×10	20×10				
柱穴 深さ(cm)	19	12	14	8	21	22				
柱間距離(m)	2-P729～2-P879	2-P879～2-P901	2-P901～2-P857	2-P857～2-P852	2-P852～2-P665	2-P665～2-P729				
	2.08	2.38	2.44	2.20	2.32	2.38				

建物跡31

規模	梁行き					桁行き				
	3.28m（1間）					4.18m（2間）				
主軸	N-10° -W					面積(㎡)	13.71			
柱穴 番号	2-P835	2-P32	2-P811	2-P24	2-P818	2-P236				
柱穴 上面径(cm)	40×38	32×24	32×30	32×20	56×50	38×34				
柱穴 下面径(cm)	26×24	26×16	20×16	16×16	36×34	16×12				
柱穴 深さ(cm)	31	46	31	27	26	27				
柱間距離(m)	2-P835～2-P32	2-P32～2-P24	2-P24～2-P236	2-P236～2-P818	2-P818～2-P811	2-P811～2-P835				
	3.28	2.14	2.04	3.26	2.00	1.96				

建物跡32

規模	梁行き					桁行き				
	3.86m（1間）					5.64m（2間）				
主軸	N-8° -W					面積(㎡)	21.77			
柱穴 番号	2-P325	2-P10	2-P3	2-P278	2-P30	2-P20				
柱穴 上面径(cm)	36×28	38×(32)	36×20	32×28	34×26	52×34				
柱穴 下面径(cm)	12×0.8	14×10	0.8×0.6	22×20	24×18	24×14				
柱穴 深さ(cm)	40	28	18	40	38	38				
柱間距離(m)	2-P325～2-P10	2-P10～2-P3	2-P278～2-P30	2-P30～2-P20	2-P325～2-P278	2-P3～2-P20				
	3.00	2.62	2.52	2.98	3.86	3.82				

建物跡33

規模	梁行き					桁行き				
	3.88m（2間）					7.12m（3間）				
主軸	N-83° -E					面積(㎡)	27.63			
柱穴 番号	2-P837	2-P830	2-P27	2-P8	2-P809	2-P825	2-P20	2-P4	2-P819	2-P817
柱穴 上面径(cm)	40×38	50×32	34×34	56×54	30×28	32×28	52×36	34×30	48×46	50×46
柱穴 下面径(cm)	12×6	12×6	18×14	36×30	22×14	20×18	24×14	20×18	38×34	38×32
柱穴 深さ(cm)	38	60	46	41	25	44	39	44	26	29
柱穴 番号	2-P336									
柱穴 上面径(cm)	28×24									
柱穴 下面径(cm)	20×18									
柱穴 深さ(cm)	(18)									
柱間距離(m)	2-P837～2-P830	2-P830～2-P27	2-P27～2-P8	2-P809～2-P825	2-P825～2-P20	2-P20～2-P4	2-P819～2-P817	2-P817～2-P336	2-P837～2-P809	2-P809～2-P819
	2.10	1.94	3.08	2.10	1.96	3.04	2.00	2.04	2.08	1.80
	2-P830～2-P825	2-P825～2-P817	2-P27～2-P20	2-P20～2-P336	2-P8～2-P4					
	2.18	1.90	2.08	1.96	2.04					

建物跡34

規模	梁行き					桁行き				
	3.76m（2間）					5.58m（4間）				
主軸	N-85° -E					面積(㎡)	20.98			
柱穴 番号	2-P16	2-P116	2-P119	2-P150	2-P143	2-P75	2-P128	2-P64	2-P106	
柱穴 上面径(cm)	30×20	32×28	30×30	26×24	28×26	30×28	30×20	26×24	28×24	
柱穴 下面径(cm)	20×16	22×16	22×18	12×10	20×16	12×8	12×8	20×18	20×14	
柱穴 深さ(cm)	30	23	20	18	28	46	15	46	14	
柱間距離(m)	2-P96～2-P116	2-P116～2-P119	2-P119～2-P150	2-P150～2-P143	2-P64～2-P106	2-P96～2-P75	2-P75～2-P64	2-P143～2-P128		
	1.48	1.52	1.28	1.30	1.58	1.92	1.84	1.72		

建物跡35

規模	梁行き					桁行き				
	2.90m（2間）					3.70m（2間）				
主軸	N-18° -W					面積(㎡)	10.73			
柱穴 番号	2-P153	2-P151	2-P168	2-P112	2-P157	2-P130	2-P108	2-P129	2-P127	
柱穴 上面径(cm)	40×34	42×36	26×22	52×36	24×18	30×30	38×30	22×22	26×-	
柱穴 下面径(cm)	24×20	24×18	18×16	16×8	14×12	18×12	18×16	14×10	16×-	
柱穴 深さ(cm)	60	33	25	61	33	33	45	28	23	
柱間距離(m)	2-P153～2-P151	2-P151～2-P168	2-P112～2-P157	2-P157～2-P130	2-P108～2-P129	2-P129～2-P127	2-P153～2-P112	2-P112～2-P108	2-P151～2-P157	2-P157～2-P129
	1.38	1.52	1.40	1.44	1.32	1.74	2.00	1.70	2.14	1.72
	2-P168～2-P130	2-P130～2-P127								
	2.18	1.84								

建物跡36

規模	梁行き					桁行き				
	2.28m（1間）					4.76m（3間）				
主軸	N-76° -E					面積(㎡)	10.85			
柱穴 番号	2-P210	2-P200	2-P181	2-P173	2-P95	2-P166	2-P154	2-P144		
柱穴 上面径(cm)	18×16	56×24	56×26	30×28	34×26	30×20	32×26	44×30		
柱穴 下面径(cm)	16×12	24×20	36×16	18×18	18×14	20×16	22×16	18×12		
柱穴 深さ(cm)	15	22	24	30	30	14	30	54		
柱間距離(m)	2-P210～2-P200	2-P200～2-P181	2-P181～2-P173	2-P95～2-P166	2-P166～2-P154	2-P154～2-P144	2-P210～2-P95	2-P200～2-P166	2-P181～2-P154	2-P173～2-P144
	1.48	1.84	1.44	1.64	1.56	1.66	2.28	2.48	2.28	2.32

建物跡37

規模	梁行き					桁行き				
	4.66m（2間）					5.98m（2間）				
主軸	N-20° -W					面積(㎡)	27.86			
柱穴 番号	2-P140	2-P125	2-P249	2-P152	2-P110	2-P259	2-P198	2-P82		
柱穴 上面径(cm)	30×28	48×30	28×28	40×36	30×20	34×32	30×28	30×26		
柱穴 下面径(cm)	20×16	20×18	20×0.8	26×22	16×10	26×22	20×18	12×10		
柱穴 深さ(cm)	36	36	16	34	42	28	34	38		
柱間距離(m)	2-P140～2-P125	2-P249～2-P152	2-P152～2-P110	2-P259～2-P198	2-P198～2-P82	2-P249～2-P259	2-P140～2-P152	2-P152～2-P198	2-P125～2-P110	2-P110～2-P82
	2.92	3.06	2.92	3.02	2.94	2.32	2.34	2.32	2.36	2.30

建物跡38

規模		梁行き					桁行き				
		5.38m（2間）					6.26m（3間）				
主軸		N-81°-E					面積(㎡)	19.90			
柱	番号	2-P218	2-P200	2-P180	2-P241	2-P98	2-P116	2-P154	2-P62	2-P67	2-P102
	上面径(cm)	32×28	56×24	24×22	20×16	38×31	32×21	32×26	26×24	30×26	32×26
	下面径(cm)	22×16	24×22	20×18	16×10	20×20	22×16	22×16	20×12	20×12	18×10
	深さ(cm)	30	32	20	18	30	20	30	16	42	42
穴	番号	2-P108									
	上面径(cm)	38×30									
	下面径(cm)	20×14									
	深さ(cm)	44									
柱間距離(m)		2-P218～2-P200	2-P200～2-P180	2-P241～2-P98	2-P98～2-P116	2-P116～2-P154	2-P62～2-P67	2-P67～2-P102	2-P102～2-P108	2-P218～2-P98	2-P241～2-P62
		2.06	2.08	1.98	2.08	2.10	2.02	2.10	2.14	2.22	3.18
		2-P98～2-P67	2-P200～2-P116	2-P116～2-P102	2-P180～2-P154	2-P154～2-P108					
		3.18	2.20	3.18	2.20	3.18					

建物跡39

規模		梁行き					桁行き				
		1.98m（1間）					2.94m（1間）				
主軸		N-9°-W					面積(㎡)	5.82			
柱	番号	2-P213	2-P85	2-P216	2-P87						
	上面径(cm)	20×18	30×28	26×22	28×24						
穴	下面径(cm)	12×0.8	22×14	16×14	14×10						
	深さ(cm)	20	14	32	34						
柱間距離(m)		2-P213～2-P85	2-P216～2-P87	2-P213～2-P216	2-P85～2-P87						
		2.94	2.94	1.98	1.98						

建物跡40

規模		梁行き					桁行き				
		7.14m（3間）					5.62m（3間）				
主軸		N-13°-W					面積(㎡)	47.80			
柱	番号	3-P1477	3-P1551	3-P1414	3-P1347	3-P1470	3-P1480	3-P1511	3-P1439	3-P1552	3-P1486
	上面径(cm)	46×30	34×28	38×30	30×24	30×26	26×26	24×20	26×(22)	30×24	30×28
	下面径(cm)	32×20	22×16	24×18	14×0.6	22×12	14×10	18×12	22×16	18×18	20×18
	深さ(cm)	20	20	18	22	28	18	14	30	24	18
	番号	3-P1433	3-P1567	3-P1453	3-P1494	3-P1447	3-P1562	3-P1558	3-P1429	3-P1237	3-P1230
	上面径(cm)	28×22	18×12	36×34	54×44	26×22	30×24	44×34	26×18	28×22	42×30
	下面径(cm)	18×12	10×0.4	26×22	32×26	18×14	20×14	26×16	18×14	14×12	30×20
	深さ(cm)	22	18	28	28	14	26	46	38	36	26
穴	番号	3-P1206									
	上面径(cm)	28×22									
	下面径(cm)	22×20									
	深さ(cm)	32									
柱間距離(m)		3-P1477～3-P1551	3-P1551～3-P1414	3-P1414～3-P1347	3-P1470～3-P1480	3-P1480～3-P1511	3-P1511～3-P1439	3-P1552～3-P1486	3-P1486～3-P1433	3-P1433～3-P1567	3-P1453～3-P1494
		1.86	3.22	2.60	1.82	3.24	2.80	1.78	3.26	2.10	1.74
		3-P1494～3-P1447	3-P1447～3-P1562	3-P1562～3-P1558	3-P1230～3-P1206	3-P1477～3-P1470	3-P1470～3-P1552	3-P1552～3-P1453	3-P1551～3-P1480	3-P1480～3-P1486	3-P1486～3-P1494
		1.68	1.60	2.12	2.18	1.84	1.88	1.82	1.86	1.88	1.82
		3-P1414～3-P1511	3-P1511～3-P1433	3-P1433～3-P1562	3-P1562～3-P1429	3-P1429～3-P1230	3-P1347～3-P1439	3-P1439～3-P1567	3-P1567～3-P1558	3-P1558～3-P1237	3-P1237～3-P1206
		1.88	1.86	1.80	1.84	1.88	1.90	1.86	1.78	1.70	1.94

建物跡41

規模		梁行き					桁行き				
		5.20m（3間）					8.64m（3間）				
主軸		N-78°-E					面積(㎡)	44.93			
柱	番号	3-P1485	3-P1413	3-P1350	3-P1334	3-P1471	3-P1444	3-P1397	3-P1324	3-P1468	3-P1489
	上面径(cm)	46×38	44×34	30×22	34×32	30×26	30×28	32×26	26×-	28×22	30×26
	下面径(cm)	32×26	28×14	20×18	28×18	20×18	20×16	22×18	18×-	18×14	22×18
	深さ(cm)	32	27	15	23	26	29	30	27	33	23
穴	番号	3-P1524	3-P1379	3-P1553	3-P1446	3-P1418	3-P1401				
	上面径(cm)	26×22	20×18	26×24	28×22	40×30	72×48				
	下面径(cm)	20×14	16×16	20×16	16×14	26×14	56×28				
	深さ(cm)	24	30	24	24	25	29				
柱間距離(m)		3-P1485～3-P1413	3-P1413～3-P1350	3-P1350～3-P1334	3-P1471～3-P1444	3-P1444～3-P1397	3-P1397～3-P1324	3-P1468～3-P1489	3-P1489～3-P1524	3-P1524～3-P1379	3-P1553～3-P1446
		2.72	3.08	2.84	2.76	3.06	2.84	2.76	3.04	2.82	2.78
		3-P1446～3-P1418	3-P1418～3-P1401	3-P1485～3-P1471	3-P1471～3-P1468	3-P1468～3-P1553	3-P1413～3-P1444	3-P1444～3-P1489	3-P1489～3-P1446	3-P1350～3-P1397	3-P1397～3-P1524
		3.04	2.82	1.88	1.76	1.56	1.90	1.76	1.56	1.88	1.76
		3-P1524～3-P1418	3-P1334～3-P1324	3-P1324～3-P1379	3-P1379～3-P1401						
		1.54	1.84	1.72	1.56						

建物跡42

規模		梁行き					桁行き				
		5.72m（2間）					8.52m（5間）				
主軸		N-14°-W					面積(㎡)	48.73			
柱	番号	3-P1483	3-P1481	3-P1367	3-P1477	3-P1442	3-P1370	3-P1469	3-P1580	3-P1395	3-P1451
	上面径(cm)	34×30	30×30	20×16	46×30	28×26	36×26	36×-	24×18	28×22	32×24
	下面径(cm)	22×20	12×10	-	34×22	22×18	24×20	34×-	18×12	18×14	28×22
	深さ(cm)	22	36	-	24	30	15	25	15	22	20
穴	番号	3-P1554	3-P1426	3-P1452	3-P1491	3-P1420	3-P1545	3-P1496	3-P1241		
	上面径(cm)	38×36	46×24	30×28	32×28	18×-	24×24	22×18	32×18		
	下面径(cm)	18×14	24×20	24×18	16×12	14×14	16×12	14×12	18×14		
	深さ(cm)	28	23	32	31	30	25	22	25		
柱間距離(m)		3-P1483～3-P1481	3-P1481～3-P1367	3-P1477～3-P1442	3-P1442～3-P1370	3-P1469～3-P1580	3-P1580～3-P1395	3-P1451～3-P1554	3-P1554～3-P1426	3-P1452～3-P1491	3-P1491～3-P1420
		2.60	3.12	2.62	3.20	2.70	3.10	2.70	3.02	2.62	3.10
		3-P1545～3-P1496	3-P1496～3-P1241	3-P1483～3-P1477	3-P1477～3-P1469	3-P1469～3-P1451	3-P1451～3-P1452	3-P1452～3-P1545	3-P1481～3-P1442	3-P1442～3-P1580	2-P1580～3-P1554
		2.64	3.04	1.45	1.67	1.90	1.60	1.92	1.62	1.60	1.86
		3-P1554～3-P1491	3-P1491～3-P1496	3-P1367～3-P1370	3-P1370～3-P1395	3-P1395～3-P1428	3-P1426～3-P1421	3-P1420～3-P1241			
		1.58	1.86	1.60	1.66	1.80	1.54	1.88			

建物跡43

規模		梁行き					桁行き				
		5.34m（2間）					9.28m（5間）				
主軸		N-21°-W					面積(㎡)	49.56			
柱	番号	3-P1439	3-P1315	3-P1573	3-P1530	3-P1507	3-P1568	3-P1275	3-P1531	3-P1304	3-P1236
	上面径(cm)	24×20	16×14	38×-	22×22	32×24	34×22	34×22	34×16	44×40	18×14
	下面径(cm)	22×16	14×12	22×16	14×10	20×14	14×12	14×14	22×18	16×12	12×10
	深さ(cm)	32	55	55	19	46	36	57	33	61	13
穴	番号	3-P1181	3-P1216	3-P1172	3-P1114	3-P1149	3-P1160	3-P1121			
	上面径(cm)	26×26	36×28	46×32	40×32	40×36	32×24	32×28			
	下面径(cm)	18×18	18×14	18×12	20×14	26×18	26×18	20×16			
	深さ(cm)	22	49	53	56	44	32	47			
柱間距離(m)		3-P1439～3-P1315	3-P1315～3-P1573	3-P1530～3-P1507	3-P1507～3-P1568	3-P1275～3-P1531	3-P1531～3-P1304	3-P1216～3-P1172	3-P1172～3-P1114	3-P1149～3-P1160	3-P1160～3-P1121
		2.80	2.24	2.74	2.40	2.72	2.50	2.84	2.52	2.74	2.60
		3-P1429～3-P1530	3-P1530～3-P1275	3-P1275～3-P1236	3-P1236～3-P1216	3-P1216～3-P1149	3-P1315～3-P1507	3-P1507～3-P1531	3-P1531～3-P1172	3-P1172～3-P1160	3-P1573～3-P1568
		1.20	2.38	1.86	1.80	2.04	1.10	2.42	3.68	2.04	1.14
		3-P1568～3-P1304	3-P1304～3-P1181	3-P1181～3-P1114	3-P1114～3-P1121						
		2.46	1.84	2.00	2.04						

建物跡44

規模		梁行き					桁行き				
		1.68m（1間）					3.58m（2間）				
主軸		N-71°-E					面積(㎡)	6.01			
柱	番号	3-P1428	3-P1530	3-P1378	3-P1421	3-P1403	3-P1391				
	上面径(cm)	42×26	26×22	26×20	(28)×26	22×20	28×20				
穴	下面径(cm)	24×20	24×12	14×12	16×14	18×14	18×16				
	深さ(cm)	22	16	28	30	18	28				
柱間距離(m)		3-P1428～3-P1530	3-P1530～3-P1378	3-P1421～3-P1403	3-P1403～3-P1391	3-P1428～3-P1421	3-P1378～3-P1391				
		1.84	1.74	1.84	1.68	1.68	1.66				

建物跡45

規模		梁行き					桁行き				
		3.58m（2間）					5.04m（3間）				
主軸		N-13°-W					面積(㎡)	18.04			
柱	番号	3-P1416	3-P1398	3-P1544	3-P1519	3-P1383	3-P1434	3-P1564	3-P1503	3-P1439	3-P1279
	上面径(cm)	22×20	34×24	34×26	30×26	30×26	26×22	24×20	34×24	24×22	30×28
	下面径(cm)	18×16	14×12	20×16	16×12	22×22	20×18	18×12	16×16	14×8	18×10
	深さ(cm)	33	48	(16)	(41)	30	36	23	(44)	22	30
穴	番号	3-P1273									
	上面径(cm)	28×26									
	下面径(cm)	18×16									
	深さ(cm)	30									
柱間距離(m)		3-P1416～3-P1398	3-P1544～3-P1519	3-P1519～3-P1383	3-P1434～3-P1564	3-P1564～3-P1503	3-P1439～3-P1279	3-P1279～3-P1273	3-P1416～3-P1544	3-P1544～3-P1434	3-P1434～3-P1439
		2.08	2.06	1.68	1.88	1.78	1.78	1.80	1.86	1.54	1.64
		3-P1398～3-P1519	3-P1519～3-P1564	3-P1564～3-P1279	3-P1383～3-P1503	3-P1503～3-P1273					
		1.84	1.58	1.52	1.42	1.74					

建物跡46

規模		梁行き					桁行き				
		3.70m（1間）					7.80m（3間）				
主軸		N-7°-W					面積(㎡)	28.86			
柱	番号	3-P1041	3-P1048	3-P1045	3-P1050	3-P1027	3-P1166	3-P1029	3-P1460		
	上面径(cm)	28×24	28×22	28×24	30×24	30×24	26×22	18×16	24×22		
穴	下面径(cm)	14×8	10×8	18×8	14×14	12×8	16×14	10×8	16×12		
	深さ(cm)	20	30	25	25	40	29	21	36		
柱間距離(m)		3-P1041～3-P1048	3-P1045～3-P1050	3-P1027～3-P1166	3-P1029～3-P1460	3-P1041～3-P1045	3-P1045～3-P1027	3-P1027～3-P1029	3-P1048～3-P1050	3-P1050～3-P1166	3-P1166～3-P1460
		3.70	3.70	3.70	3.54	2.20	4.10	1.54	2.16	4.02	1.54

建物跡47

規模		梁行き					桁行き				
		6.48m（2間）					6.48m（2間）				
主軸		N-11°-W					面積(㎡)	41.99			
柱	番号	4-P3744	4-P3743	4-P3742	4-P3741	4-P3740	4-P3650	4-P3723	4-P3537	4-P3519	4-P3724
	上面径(cm)	24×20	42×30	24×22	24×20	24×24	26×26	34×22	26×22	20×18	28×26
	下面径(cm)	16×12	36×18	16×14	18×10	16×12	18×14	22×12	18×14	14×12	20×18
	深さ(cm)	11	14	17	17	18	18	21	13	18	14
穴	番号	4-P3526	4-P3518								
	上面径(cm)	22×20	20×18								
	下面径(cm)	12×12	16×12								
	深さ(cm)	19	13								
柱間距離(m)		4-P3744～4-P3743	4-P3743～4-P3742	4-P3741～4-P3740	4-P3740～4-P3650	4-P3723～4-P3537	4-P3537～4-P3519	4-P3724～4-P3526	4-P3526～4-P3518	4-P3744～4-P3741	4-P3741～4-P3723
		3.02	3.22	3.06	3.22	3.20	3.24	3.22	3.26	2.22	2.26
		4-P3723～4-P3724	4-P3743～4-P3740	4-P3740～4-P3537	4-P3537～4-P3526	4-P3742～4-P3650	4-P3650～4-P3519	4-P3519～4-P3518			
		2.00	2.22	2.22	2.02	2.20	2.16	2.06			

建物跡48

規模		梁行き					桁行き				
		3.04m（1間）					2.48m（1間）				
主軸		N-6°-W					面積(㎡)	7.54m			
柱	番号	4-P3720	4-P3690	4-P3727	4-P3726	4-P3538					
	上面径(cm)	34×28	36×32	24×22	30×28	22×20					
穴	下面径(cm)	28×24	28×24	10×8	20×18	16×16					
	深さ(cm)	7	21	16	12	9					
柱間距離(m)		4-P3720～4-P3690	4-P3727～4-P3726	4-P3726～4-P3538	4-P3720～4-P3726	4-P3690～4-P3538					
		2.60	2.48	2.62	3.02	3.04					

建物跡49

規模		梁行き					桁行き				
		2.92m（1間）					3.90m（2間）				
主軸		N-74°-E					面積(㎡)	11.39			
柱穴	番号	4-P3732	4-P3745	4-P3648	4-P3691	4-P3536	4-P3534	4-P3520			
	上面径(cm)	24×20	24×22	20×16	26×20	26×22	30×24	22×16			
	下面径(cm)	14×10	12×10	12×8	16×12	16×12	22×16	14×8			
	深さ(cm)	(12)	(13)	20	11	11	15	21			
柱間距離(m)		4-P3732～4-P3745	4-P3745～4-P3648	4-P3691～4-P3536	4-P3536～4-P3534	4-P3534～4-P3520	4-P3732～4-P3536	4-P3648～4-P3520			
		2.08	1.82	2.18	2.08	1.84	2.96	2.92			

建物跡50

規模		梁行き					桁行き				
		6.40m（2間）					8.26m（4間）				
主軸		N-15°-W					面積(㎡)	52.86			
柱穴	番号	8-P26	8-P305	8-P243	8-P223	8-P557	8-P244	8-P12	8-P230	8-P558	4-P3656
	上面径(cm)	26×24	34×24	38×36	32×30	36×32	36×32	26×20	32×32	30×28	38×32
	下面径(cm)	12×10	22×16	26×24	22×12	26×24	26×24	16×16	26×22	21×20	18×16
	深さ(cm)	32	28	34	24	20	24	22	20	26	34
	番号	4-P3622	4-P3674	4-P3634	4-P3627						
	上面径(cm)	28×26	26×22	34×30	34×30						
	下面径(cm)	22×20	14×12	22×16	14×0.6						
	深さ(cm)	32	26	30	28						
柱間距離(m)		8-P26～8-P305	8-P305～8-P243	8-P223～8-P557	8-P557～8-P244	8-P12～8-P230	8-P230～8-P558	4-P3656～4-P3622	4-P3674～4-P3634	4-P3634～4-P3627	8-P26～8-P223
		3.32	3.08	3.26	3.00	3.22	3.12	3.16	3.14	3.20	1.94
		8-P223～8-P12	8-P12～4-P3674	8-P305～8-P557	8-P557～8-P230	8-P230～4-P3656	4-P3656～4-P3634	8-P243～8-P244	8-P244～8-P558	8-P558～4-P3622	4-P3622～4-P3627
		1.92	4.32	1.96	1.88	2.30	2.80	1.98	1.88	2.26	2.12

建物跡51

規模		梁行き					桁行き				
		3.84m（2間）					6.64m（3間）				
主軸		N-17°-W					面積(㎡)	25.49			
柱穴	番号	8-P5	8-P619	4-P3668	4-P3749	8-P9	8-P618	4-P3760	8-P14	8-P615	4-P3686
	上面径(cm)	26×22	20×18	20×18	20×14	30×24	22×20	14×14	22×18	24×20	22×16
	下面径(cm)	14×12	16×10	14×0.8	12×12	18×14	20×16	10×0.8	12×12	14×14	14×10
	深さ(cm)	20	18	22	8	44	18	8	6	6	18
	番号	4-P3752									
	上面径(cm)	32×18									
	下面径(cm)	24×12									
	深さ(cm)	6									
柱間距離(m)		8-P5～8-P619	8-P619～4-P3668	4-P3668～4-P3749	8-P14～8-P615	8-P615～4-P3686	4-P3686～4-P3752	8-P5～8-P9	8-P9～8-P14	8-P619～8-P618	8-P618～8-P615
		2.22	2.50	1.92	2.14	2.52	1.88	1.60	2.22	1.68	2.00
		4-P3749～4-P3760	4-P3760～4-P3752								
		1.44	2.22								

建物跡52

規模		梁行き					桁行き				
		3.86m（2間）					5.40m（2間）				
主軸		N-85°-E					面積(㎡)	20.84			
柱穴	番号	4-P3609	4-P3599	4-P3584	4-P3614	4-P3603	4-P3594	4-P3616	4-P3605	4-P3651	
	上面径(cm)	30×(24)	22×20	26×22	34×30	24×22	20×(18)	28×24	24×22	22×20	
	下面径(cm)	20×(18)	16×12	16×14	22×16	16×14	(14)×12	16×12	16×14	18×12	
	深さ(cm)	18	30	34	24	22	22	18	26	20	
柱間距離(m)		4-P3609～4-P3599	4-P3599～4-P3584	4-P3614～4-P3603	4-P3603～4-P3594	4-P3616～4-P3605	4-P3605～4-P3651	4-P3609～4-P3614	4-P3614～4-P3616	4-P3599～4-P3603	4-P3603～4-P3605
		2.42	3.02	2.44	3.00	2.46	2.94	1.94	1.90	1.66	1.94
		4-P3584～4-P3594	4-P3594～4-P3651								
		1.82	1.96								

建物跡53

規模		梁行き					桁行き				
		6.14m（2間）					8.02m（4間）				
主軸		N-10°-W					面積(㎡)	49.24			
柱穴	番号	8-P241	8-P250	8-P254	4-P3579	4-P3623	4-P3613	4-P3586	4-P3633	4-SK85	4-P3590
	上面径(cm)	36×32	34×28	30×28	34×30	32×28	32×30	36×34	30×28	72×60	30×30
	下面径(cm)	28×24	14×14	16×14	22×22	20×16	20×18	20×18	20×18	24×20	24×20
	深さ(cm)	20	20	6	32	22	22	32	18	18	22
	番号	4-P3636	4-P3618	4-P3607							
	上面径(cm)	32×30	54×48	32×30							
	下面径(cm)	24×20	0.6×0.4	20×16							
	深さ(cm)	20	42	24							
柱間距離(m)		8-P241～8-P250	8-P250～8-P254	4-P3623～4-P3613	4-P3613～4-P3586	4-P3633～4-SK85	4-SK85～4-P3590	4-P3636～4-P3618	4-P3618～4-P3607	8-P241～4-P3623	4-P3623～4-P3633
		3.10	3.06	3.14	3.00	3.18	3.18	3.22	2.96	4.20	2.00
		4-P3633～4-P3636	8-P250～4-P3613	4-P3613～SK85	4-SK85～4-P3618	8-P254～4-P3579	4-P3579～4-P3586	4-P3586～4-P3590	4-P3590～4-P3607		
		1.80	4.20	2.02	1.98	2.20	2.02	2.02	1.78		

建物跡54

規模		梁行き					桁行き				
		6.48m（2間）					7.75m（4間）				
主軸		N-11°-W					面積(㎡)	50.22			
柱穴	番号	8-P236	8-P248	8-P242	8-P232	8-P246	8-P622	8-P570	4-P3716	4-P3587	4-P3631
	上面径(cm)	32×33	27×28	26×27	35×35	46×50	33×42	26×27	19×26	39×42	48×49
	下面径(cm)	21×22	20×20	7×8	27×29	19×23	18×20	-	16×17	8×16	21×24
	深さ(cm)	23	31	12	22	37	23	-	25	48	31
	番号	4-P3589	4-P3635	4-P3615	4-P3649						
	上面径(cm)	40×42	26×30	19×22	33×38						
	下面径(cm)	18×22	17×18	12×14	21×23						
	深さ(cm)	29	16	28	22						
柱間距離(m)		8-P236～8-P248	8-P248～8-P242	8-P232～8-P246	8-P246～8-P622	8-P570～4-P3716	4-P3716～4-P3587	4-P3635～4-P3615	4-P3615～4-P3649	8-P236～8-P232	8-P232～8-P570
		3.37	3.11	3.35	3.24	3.33	3.09	3.26	3.09	1.79	1.94
		8-P570～4-P3631	4-P3631～4-P3635	8-P248～8-P246	8-P246～4-P3716	4-P3716～4-P3615	8-P242～8-P622	8-P622～4-P3587	4-P3587～4-P3589	4-P3589～4-P3649	
		2.09	1.91	1.80	2.22	3.78	1.81	2.00	1.92	1.95	

建物跡55

規模		梁行き					桁行き				
		7.20m＋0.56m（3間）					6.98m（4間）				
主軸		N-11°-W					面積(㎡)	50.25			
柱穴	番号	8-P255	8-P309	8-P316	8-P642	8-P623	8-P625	4-P3563	4-P3546	4-P3580	4-P3571
	上面径(cm)	26×22	34×28	36×28	30×22	28×26	30×26	28×26	26×22	28×26	34×32
	下面径(cm)	18×16	18×14	24×18	12×10	20×16	20×14	20×16	14×10	18×16	26×20
	深さ(cm)	12	28	24	30	24	24	16	30	20	12
	番号	4-P3565	4-P3548	4-P3585	4-P3574	4-P3569	4-P3567	4-P3556	4-P3596	4-P3583	4-P3573
	上面径(cm)	26×26	26×24	34×32	32×30	30×24	34×30	26×24	34×30	32×28	24×20
	下面径(cm)	22×20	16×14	24×22	24×22	20×14	24×20	14×12	26×20	24×22	14×12
	深さ(cm)	10	28	28	18	24	12	30	22	18	16
	番号	4-P3733	4-P3559	4-P3545	4-P3550	4-P3555	4-P3560				
	上面径(cm)	22×18	24×24	26×24	24×20	30×26	30×28				
	下面径(cm)	12×0.6	16×16	18×14	16×14	18×18	20×18				
	深さ(cm)	18	22	20	16	22	22				
柱間距離(m)		8-P255～8-P309	8-P309～8-P316	8-P316～8-P642	8-P642～8-P623	8-P623～8-P625	8-P625～4-P3563	4-P3563～4-P3546	4-P3580～4-P3571	4-P3571～4-P3565	4-P3565～4-P3583	4-P3583～4-P3574
		2.08	3.04	2.14	2.08	3.04	2.12	2.08	3.06	2.10	2.08	
		4-P3574～4-P3569	4-P3569～4-P3567	4-P3567～4-P3556	4-P3596～4-P3583	4-P3583～4-P3573	4-P3573～4-P3733	4-P3733～4-P3559	4-P3546～4-P3545	4-P3548～4-P3550	4-P3556～4-P3555	
		1.78	1.30	2.08	2.08	1.60	1.44	2.08	0.56	0.56	0.56	
		4-P3559～4-P3560	8-P255～8-P623	8-P623～4-P3580	4-P3580～4-P3585	4-P3585～4-P3596	8-P309～8-P625	8-P625～4-P3571	4-P3571～4-P3574	4-P3574～4-P3583	8-P316～4-P3563	
		0.56	1.40	2.16	1.84	1.58	1.46	2.06	1.90	1.58	1.56	
		4-P3563～4-P3565	4-P3565～4-P3567	4-P3567～4-P3733	8-P642～4-P3546	4-P3546～4-P3548	4-P3548～4-P3556	4-P3556～4-P3559	4-P3545～4-P3550	4-P3550～4-P3555	4-P3555～4-P3560	
		1.92	2.00	1.60	1.62	1.82	2.08	1.62	1.84	2.18	1.72	

建物跡56

規模		梁行き					桁行き				
		6.56m（2間）					6.50m（4間）				
主軸		N-12°-W					面積(㎡)	42.64			
柱穴	番号	4-P3564	4-P3547	4-P3549	4-P3168	4-P3166	4-P3566	4-P3552	4-P3171	4-P3568	4-P3557
	上面径(cm)	40×30	22×22	36×34	20×18	32×32	38×32	40×28	34×28	34×30	30×24
	下面径(cm)	28×22	14×12	26×22	12×10	26×22	26×22	28×22	22×22	22×18	14×12
	深さ(cm)	23	16	23	17	34	24	14	23	10	11
	番号	4-P3173	4-P3576	4-P3562	4-P3175	4-P3577	4-P3578	4-P3176			
	上面径(cm)	42×36	34×30	36×18	26×26	32×30	38×36	34×28			
	下面径(cm)	32×24	20×16	28×22	20×18	20×18	26×22	24×22			
	深さ(cm)	16	23	21	14	25	31	28			
柱間距離(m)		4-P3564～4-P3547	4-P3547～4-P3549	4-P3549～4-P3168	4-P3168～4-P3166	4-P3566～4-P3552	4-P3552～4-P3171	4-P3568～4-P3557	4-P3557～4-P3173	4-P3576～4-P3562	4-P3562～4-P3175	
		1.60	1.40	1.70	1.70	3.04	3.42	3.24	3.40	3.16	3.46	
		4-P3577～4-P3578	4-P3578～4-P3176	4-P3564～4-P3566	4-P3566～4-P3568	4-P3568～4-P3576	4-P3576～4-P3577	4-P3549～4-P3552	4-P3552～4-P3557	4-P3557～4-P3562	4-P3562～4-P3578	
		3.16	3.46	1.62	1.54	1.86	1.46	1.56	1.76	1.74	1.46	
		4-P3166～4-P3171	4-P3171～4-P3173	4-P3173～4-P3175	4-P3175～4-P3176							
		1.48	1.78	1.76	1.50							

建物跡57

規模		梁行き					桁行き				
		1.74m（1間）					2.20m（1間）				
主軸		N-79°-E					面積(㎡)	3.82			
柱穴	番号	4-P3597	4-P3582	4-P3592	4-P3654						
	上面径(cm)	20×16	20×20	16×14	18×16						
	下面径(cm)	12×0.8	14×12	10×0.8	12×10						
	深さ(cm)	32	12	28	12						
柱間距離(m)		4-P3597～4-P3582	4-P3582～4-P3654	4-P3597～4-P3592	4-P3582～4-P3654						
		2.20	2.20	1.74	1.72						

建物跡58

規模		梁行き					桁行き				
		6.67m（3間）					7.94m（4間）				
主軸		N-12°-W					面積(㎡)	52.95			
柱穴	番号	8-P326	8-P433	8-P423	8-P640	8-P582	4-P3155	4-P3152	4-P3150	4-P3167	4-P3164
	上面径(cm)	25×28	30×32	27×28	48×70	26×29	29×34	25×26	30×30	33×35	27×28
	下面径(cm)	14×15	-	15×18	12×17	17×22	15×19	18×19	22×23	15×16	11×15
	深さ(cm)	25	-	20	25	9	28	13	11	42	32
	番号	4-P3121	4-P3149	4-P3553	4-P3170	4-P3161	4-P3558	4-P3173	4-P3160	4-P3158	
	上面径(cm)	23×25	28×28	26×28	25×30	20×27	26×36	30×39	30×40	31×34	
	下面径(cm)	18×19	20×24	19×21	14×17	16×22	8×9	23×29	21×34	22×22	
	深さ(cm)	21	10	6	17	11	16	19	6	19	
柱間距離(m)		8-P326～8-P433	8-P433～8-P423	8-P423～8-P640	8-P582～4-P3155	4-P3155～4-P3152	4-P3152～4-P3150	4-P3167～4-P3164	4-P3164～4-P3121	4-P3121～4-P3149	4-P3553～4-P3170	
		1.82	2.46	1.64	1.73	3.31	1.54	1.76	3.34	1.43	1.95	
		4-P3170～4-P3161	4-P3558～4-P3173	4-P3173～4-P3160	4-P3160～4-P3158	8-P326～8-P582	8-P582～4-P3167	4-P3167～4-P3553	4-P3553～4-P3558	8-P433～4-P3155	4-P3155～4-P3164	
		3.22	2.00	3.25	1.42	1.84	2.08	1.87	2.13	2.26	1.81	
		4-P3164～4-P3170	4-P3170～4-P3173	8-P423～4-P3152	4-P3152～4-P3121	4-P3121～4-P3161	4-P3161～4-P3160	8-P640～4-P3150	4-P3150～4-P3149	4-P3149～4-P3158		
		1.83	2.13	2.18	2.09	1.75	2.11	2.28	1.91	3.98		

建物跡59

規模		梁行き					桁行き				
		5.02m（4間）					6.66m（4間）				
主軸		N-78°-E					面積(㎡)	33.43			
柱穴	番号	4-P3146	4-P3131	4-P3097	4-P3099	4-P3100	4-P3143	4-P3084	4-P3145	4-P3134	4-P3095
	上面径(cm)	32×30	30×28	32×30	30×28	50×36	24×18	26×22	20×18	28×28	30×30
	下面径(cm)	22×20	24×20	28×26	28×22	38×24	18×14	22×20	16×8	22×16	20×18
	深さ(cm)	14	19	6	12	14	15	18	20	13	17
	番号	4-P3093	4-P3089	4-P3140	4-P3734	4-P3092	4-P3087	4-P3137	4-P3136	4-P3091	4-P3090
	上面径(cm)	30×26	40×28	20×16	22×20	24×20	22×18	32×24	30×26	28×28	42×30
	下面径(cm)	24×20	28×22	8×6	14×10	16×12	14×12	24×20	20×16	20×18	22×14
	深さ(cm)	23	18	9	10	20	23	12	23	15	31
	番号	4-P3157									
	上面径(cm)	28×26									
	下面径(cm)	18×16									
	深さ(cm)	25									
柱間距離(m)		4-P3146～4-P3131	4-P3131～4-P3097	4-P3097～4-P3099	4-P3099～4-P3100	4-P3145～4-P3134	4-P3134～4-P3095	4-P3095～4-P3093	4-P3093～4-P3089	4-P3137～4-P3136	4-P3136～4-P3091
		1.66	1.58	1.58	1.82	1.80	1.64	1.56	1.72	1.80	1.72
		4-P3091～4-P3090	4-P3090～4-P3157	4-P3146～4-P3143	4-P3143～4-P3145	4-P3145～4-P3140	4-P3140～4-P3137	4-P3131～4-P3134	4-P3134～4-P3734	4-P3734～4-P3136	4-P3099～4-P3093
		1.64	1.58	1.00	1.00	1.60	1.42	2.08	1.76	1.30	2.12
		4-P3091～4-P3090	4-P3090～4-P3157	4-P3100～4-P3084	4-P3084～4-P3089	4-P3089～4-P3087	4-P3087～4-P3157				
		1.64	1.58	1.18	0.94	1.58	1.50				

建物跡60

規模		梁行き					桁行き				
		1.52m（1間）					9.32m（4間）				
主軸		N-15°-W					面積(㎡)	14.17			
柱穴	番号	4-P3110	4-P3058	4-P3101	4-P3062	4-P3081	4-P3088	4-P3077	4-SK83	4-P3542	
	上面径(cm)	26×20	32×28	40×26	40×34	32×28	28×26	32×30	96×46	42×30	
	下面径(cm)	8×4	20×18	22×18	22×18	22×20	20×18	24×20	90×34	30×20	
	深さ(cm)	17	22	37	29	24	31	30	5	24	
柱間距離(m)		4-P3110～4-P3058	4-P3088～4-P3077	4-SK83～4-P3542	4-P3110～4-P3101	4-P3101～4-P3088	4-P3088～4-SK83	4-P3058～4-P3062	4-P3062～4-P3081	4-P3081～4-P3077	4-P3077～4-P3542
		1.44	1.50	1.52	2.50	4.24	2.60	2.50	2.06	2.16	2.60

建物跡61

規模		梁行き					桁行き				
		2.10m（1間）					3.10m（2間）				
主軸		N-74°-E					面積(㎡)	6.51			
柱穴	番号	4-P3064	4-P3053	4-P3048	4-P3070	4-P3066	4-P3050				
	上面径(cm)	26×24	28×24	28×24	32×28	22×22	30×24				
	下面径(cm)	8×4	12×10	6×4	24×20	14×12	26×22				
	深さ(cm)	26	30	25	21	17	30				
柱間距離(m)		4-P3064～4-P3053	4-P3053～4-P3048	4-P3070～4-P3066	4-P3066～4-P3050	4-P3064～4-P3070	4-P3048～4-P3050				
		1.24	1.86	1.26	1.84	1.96	2.10				

建物跡62

規模		梁行き					桁行き				
		7.08m（3間）					5.68m（3間）				
主軸		N-15°-W					面積(㎡)	40.21			
柱穴	番号	4-P3094	4-P3096	4-P3133	4-P3144	4-P3103	4-P3104	4-P3102	4-P3179	4-P3107	4-P3111
	上面径(cm)	28×26	22×20	24×22	24×24	30×22	18×16	30×24	34×28	32×26	30×22
	下面径(cm)	20×20	20×14	22×18	16×12	28×18	16×14	20×18	28×20	20×18	20×12
	深さ(cm)	10	14	14	20	24	10	22	22	18	42
	番号	4-P3710	4-P3664	4-P3712	8-P638	8-P635	8-P440	8-P421			
	上面径(cm)	26×24	30×22	24×22	24×24	18×16	26×24	28×26			
	下面径(cm)	14×12	20×12	18×12	16×16	14×12	12×12	16×14			
	深さ(cm)	28	28	34	24	32	30	24			
柱間距離(m)		4-P3094～4-P3096	4-P3096～4-P3133	4-P3133～4-P3144	4-P3103～4-P3104	4-P3104～4-P3102	4-P3102～4-P3179	4-P3111～4-P3710	4-P3710～4-P3644	4-P3644～4-P3712	8-P638～8-P635
		1.88	1.94	1.86	1.88	1.90	1.88	1.88	1.86	1.86	1.88
		8-P635～8-P440	8-P440～8-P421	4-P3034～4-P3103	4-P3103～4-P3107	4-P3107～4-P3111	4-P3111～8-P638	4-P3096～4-P3104	4-P3104～4-P3710	4-P3710～8-P635	4-P3133～4-P3102
		1.84	1.88	2.10	1.52	1.60	1.86	2.10	3.50	1.86	2.10
		4-P3102～4-P3664	4-P3664～8-P440	4-P3144～4-P3179	4-P3179～4-P3712	4-P3712～8-P421					
		3.10	1.88	2.10	3.10	1.88					

建物跡63

規模		梁行き					桁行き				
		14.02m（5間）					9.42m（6間）				
主軸		N-17° -W					面積(㎡)	118.52			
柱穴	番号	8-P487	8-P486	8-P500	8-P498	8-P496	8-P581	8-P484	8-P479	8-P492	8-P472
	上面径(cm)	23×25	23×24	31×40	22×23	31×33	17×30	41×43	17×19	28×45	33×42
	下面径(cm)	15×15	14×16	12×12	12×14	11×18	13×19	25×28	6×8	15×26	21×27
	深さ(cm)	31	5	27	6	27	38	23	12	32	27
	番号	8-P442	8-P634	4-P3114	8-P409	8-P407	8-P450	8-P466	8-P468	8-P631	4-P3123
	上面径(cm)	26×28	23×28	35×41	44×45	38×41	30×35	35×41	45×59	21×24	34×36
	下面径(cm)	14×15	14×16	5×9	30×32	20×21	18×22	22×25	29×32	13×22	23×24
	深さ(cm)	32	23	26	36	25	28	31	37	18	26
	番号	8-P402	8-P410	8-P445	8-P438	8-P428	8-SK19	4-P3129	8-P335	8-P337	8-P556
	上面径(cm)	37×40	39×42	42×46	34×42	31×37	63×71	32×32	32×40	36×41	-
	下面径(cm)	14×16	23×25	33×36	34×34	21×22	24×24	15×15	17×24	23×24	8×12
	深さ(cm)	27	37	22	39	38	39	37	30	23	30
	番号	8-P338	8-P435	8-P426	8-P648	8-P365	8-P350	8-P340	8-P334	8-P395	8-P328
	上面径(cm)	41×42		36×38	35×-	27×30	39×41	38×41	34×41	37×39	39×41
	下面径(cm)	21×23	5×8	26×28	26×-	22×25	15×20	19×24	11×17	24×30	23×28
	深さ(cm)	31	43	29	36	32	38	33	35	33	29
柱間距離(m)		8-P487～8-P486	8-P486～8-P500	8-P500～8-P498	8-P498～8-P496	8-P496～8-P581	8-P484～8-P479	8-P479～8-P492	8-P492～8-P472	8-P472～8-P442	8-P442～8-P634
		1.55	1.44	1.58	1.67	1.57	1.54	1.44	1.59	1.65	1.45
		8-P634～4-P3114	8-P409～8-P407	8-P407～8-P450	8-P450～8-P466	8-P466～8-P468	8-P468～8-P631	8-P631～4-P3123	8-P402～8-P410	8-P410～8-P445	8-P445～8-P438
		1.92	1.47	1.56	1.61	1.62	1.43	1.84	1.46	1.55	1.62
		8-P438～8-P428	8-P428～8-SK19	8-SK19～4-P3129	8-P335～8-P337	8-P337～8-P556	8-P556～8-P338	8-P338～8-P435	8-P435～8-P426	8-P426～8-P648	8-P365～8-P350
		1.61	1.48	1.73	1.47	1.54	1.65	1.58	1.56	1.62	1.58
		8-P350～8-P340	8-P340～8-P334	8-P334～8-P395	8-P395～8-P328	8-P487～8-P484	8-P484～8-P409	8-P409～8-P402	8-P402～8-P335	8-P335～8-P365	8-P486～8-P479
		1.46	1.66	1.54	1.61	2.29	2.64	2.65	3.31	2.54	2.11
		8-P479～8-P407	8-P407～8-P410	8-P410～8-P337	8-P337～8-P350	8-P500～8-P492	8-P492～8-P450	8-P450～8-P445	8-P445～8-P556	8-P556～8-P340	8-P498～8-P472
		2.78	2.64	3.33	2.53	2.20	2.65	2.64	3.33	2.52	2.15
		8-P472～8-P466	8-P466～8-P438	8-P438～8-P338	8-P338～8-P334	8-P496～8-P442	8-P442～8-P468	8-P468～8-P428	8-P428～8-P435	8-P435～8-P395	8-P581～8-P634
		2.66	2.64	3.36	2.50	2.11	2.67	2.64	3.35	2.51	1.92
		8-P634～8-P631	8-P631～8-SK19	8-SK19～8-P426	8-P426～8-P328	4-P3114～4-P3123	4-P3123～4-P3129	4-P3129～4-P3713			
		2.68	2.62	3.38	2.49	2.69	2.62	3.39			

建物跡64

規模		梁行き					桁行き				
		9.46m（3間）					8.86m（5間）				
主軸		N-13° -W					面積(㎡)	83.81			
柱穴	番号	4-P3024	4-P3025	4-P3027	4-P1935	4-P1934	4-P3034	4-P1929	4-P3030	4-P3029	4-P3032
	上面径(cm)	32×28	56×36	22×20	32×32	28×22	26×(18)	42×32	46×30	40×26	52×28
	下面径(cm)	24×20	48×24	12×12	22×18	18×16	20×(10)	26×24	26×18	12×0.8	12×10
	深さ(cm)	20	12	16	12	12	26	30	16	28	26
	番号	4-P3037	4-P3162	4-P3072	4-P3075	4-P3044	4-P3045	4-P3051	4-P3067	4-P3086	4-P3078
	上面径(cm)	48×36	52×42	60×34	28×22	48×32	44×40	42×34	44×36	40×32	40×30
	下面径(cm)	38×32	34×24	20×16	16×14	42×22	40×28	34×22	24×16	24×20	30×20
	深さ(cm)	36	30	24	14	18	14	20	46	28	28
	番号	4-P3082	4-P3178	4-P3046	4-P3047	4-P3054	4-P3063	4-P3061			
	上面径(cm)	30×30	50×40	44×28	28×24	52×28	78×42	52×36			
	下面径(cm)	18×16	46×34	32×18	22×22	24×16	30×20	28×26			
	深さ(cm)	16	20	20	12	16	34	28			
柱間距離(m)		4-P3024～4-P3025	4-P3025～4-P3027	4-P3027～4-P1935	4-P1935～4-P3034	4-P3034～4-P1929	4-P3030～4-P3029	4-P3029～4-P3032	4-P3032～4-P3037	4-P3037～4-P3162	4-P3162～4-P3072
		1.42	1.90	1.92	1.70	1.90	1.68	1.86	1.98	1.72	1.80
		4-P3044～4-P3045	4-P3045～4-P3051	4-P3051～4-P3067	4-P3067～4-P3086	4-P3086～4-P3078	4-P3178～4-P3046	4-P3046～4-P3047	4-P3047～4-P3054	4-P3054～4-P3063	4-P3063～4-P3061
		1.64	1.82	2.00	1.72	1.66	1.64	1.82	2.00	1.72	1.58
		4-P3024～4-P3030	4-P3030～4-P3044	4-P3044～4-P3178	4-P3025～4-P3029	4-P3029～4-P3045	4-P3045～4-P3046	4-P3027～4-P3032	4-P3032～4-P3051	4-P3051～4-P3047	4-P1935～4-P3037
		3.08	3.30	2.90	3.54	3.32	2.92	3.08	3.36	2.96	3.00
		4-P3067～4-P3054	4-P3034～4-P3162	4-P3162～4-P3086	4-P3086～4-P3063	4-P1929～4-P3072	4-P3072～4-P3075	4-P3075～4-P3078	4-P3078～4-P3082	4-P3082～4-P3061	
		2.98	3.00	3.42	3.00	2.98	1.72	1.72	1.40	1.62	

建物跡65

規模		梁行き					桁行き				
		3.09m（1間）					3.98m（2間）				
主軸		N-67° -E					面積(㎡)	12.29			
柱穴	番号	4-P3355	4-P3761	4-P3325	4-P2927	4-P2918	4-P2986				
	上面径(cm)	20×26	22×24	28×29	42×44	35×36	40×54				
	下面径(cm)	11×13	17×18	13×14	25×28	15×18	29×30				
	深さ(cm)	27	26	25	39	37	32				
柱間距離(m)		4-P3355～4-P3761	4-P3761～4-P3325	4-P2927～4-P2918	4-P2918～4-P2986	4-P3355～4-P2927	4-P3325～4-P2986				
		1.98	2.00	1.84	2.26	3.09	3.14				

建物跡66

規模		梁行き					桁行き				
		2.06m（1間）					4.51m（2間）				
主軸		N-73° -E					面積(㎡)	9.29			
柱穴	番号	4-P2966	4-P2917	4-P2593	4-P2955	4-P2957	4-P2574				
	上面径(cm)	32×33	38×39	28×29	19×20	33×47	33×36				
	下面径(cm)	9×19	19×21	10×17	8×12	21×25	21×25				
	深さ(cm)	31	42	49	29	43	60				
柱間距離(m)		4-P2966～4-P2917	4-P2917～4-P2593	4-P2955～4-P2957	4-P2957～4-P2574	4-P2966～4-P2955	4-P2593～4-P2574				
		2.05	2.46	2.11	2.55	2.06	2.17				

建物跡67

規模	梁行き					桁行き				
	2.18m（1間）					4.06m（2間）				
主軸	N-68°-E					面積(㎡)	8.85			
柱穴 番号	4-P2925	4-P2912	4-P2592	4-P2944	4-P2900	4-P2580				
柱穴 上面径(cm)	29×30	23×25	50×58	27×29	32×34	34×39				
柱穴 下面径(cm)	14×18	12×14	13×15	16×23	17×18	24×28				
柱穴 深さ(cm)	43	45	37	16	42	31				
柱間距離(m)	4-P2925～4-P2912	4-P2912～4-P2592	4-P2944～4-P2900	4-P2900～4-P2580	4-P2925～4-P2944	4-P2592～4-P2580				
	1.97	2.09	2.18	2.05	2.18	2.17				

建物跡68

規模	梁行き					桁行き				
	3.94m（1間）					5.89m（2間）				
主軸	N-20°-W					面積(㎡)	23.20			
柱穴 番号	4-P2729	4-P2736	4-P2658	4-P2629	4-P2694	4-P2644				
柱穴 上面径(cm)	34×36	33×34	30×34	35×36	32×43	34×38				
柱穴 下面径(cm)	22×29	24×28	25×28	22×27	14×18	23×24				
柱穴 深さ(cm)	31	25	16	31	21	27				
柱間距離(m)	4-P2729～4-P2736	4-P2736～4-P2658	4-P2629～4-P2694	4-P2694～4-P2644	4-P2729～4-P2629	4-P2658～4-P2644				
	2.77	3.12	2.94	2.97	3.94	3.81				

建物跡69

規模	梁行き					桁行き				
	2.57m（1間）					5.87m（2間）				
主軸	N-22°-W					面積(㎡)	15.08			
柱穴 番号	4-P2720	4-P2700	4-P2654	4-P2627	4-P2692	4-P2643				
柱穴 上面径(cm)	18×27	23×30	20×32	26×28	30×35	23×25				
柱穴 下面径(cm)	11×17	13×26	14×16	16×18	21×23	12×14				
柱穴 深さ(cm)	14	33	19	10	30	19				
柱間距離(m)	4-P2720～4-P2700	4-P2700～4-P2654	4-P2627～4-P2692	4-P2692～4-P2643	4-P2720～4-P2627	4-P2654～4-P2643				
	2.82	3.05	2.64	3.30	2.57	2.62				

建物跡70

規模	梁行き					桁行き				
	3.40m（1間）					4.30m（2間）				
主軸	N-30°-W					面積(㎡)	14.62			
柱穴 番号	4-P1815	4-P1793	4-P1829	4-P1830	4-P1903	4-P1807				
柱穴 上面径(cm)	32×28	26×22	32×28	26×22	40×-	32×28				
柱穴 下面径(cm)	18×16	20×12	20×18	20×14	10×-	12×8				
柱穴 深さ(cm)	17	8	19	9	32	21				
柱間距離(m)	4-P1815～4-P1793	4-P1793～4-P1830	4-P1830～4-P1807	4-P1807～4-P1903	4-P1903～4-P1829	4-P1829～4-P1815				
	3.40	2.34	1.96	3.48	1.98	2.24				

建物跡71

規模	梁行き					桁行き				
	3.02m（1間）					3.80m（2間）				
主軸	N-62°-E					面積(㎡)	11.48			
柱穴 番号	4-P1795	4-P1831	4-P1805	4-P1785	4-P1779	4-P1773				
柱穴 上面径(cm)	18×12	24×22	26×22	34×24	40×26	28×28				
柱穴 下面径(cm)	10×6	16×16	18×12	20×12	30×18	20×14				
柱穴 深さ(cm)	10	22	14	13	11	16				
柱間距離(m)	4-P1795～4-P1831	4-P1831～4-P1805	4-P1805～4-P1773	4-P1773～4-P1779	4-P1779～4-P1785	4-P1785～4-P1795				
	1.82	1.98	3.02	1.88	1.82	2.90				

建物跡72Ａ

規模	梁行き					桁行き				
	3.71m（1間）					7.21m（3間）				
主軸	N-26°-W					面積(㎡)	26.74			
柱穴 番号	4-P2084	4-P2116	4-P2024	4-SK51	4-P2004	4-P2032	4-P3764	4-P3413		
柱穴 上面径(cm)	30×39	28×33	41×59	64×72	36×37	32×36	51×61	48×50		
柱穴 下面径(cm)	20×23	18×22	13×18	14×29	9×12	15×21	24×39	34×34		
柱穴 深さ(cm)	42	18	35	32	47	32	32	23		
柱間距離(m)	4-P2084～4-P2116	4-P3764～4-P3413	4-P2084～4-P2024	4-P2024～4-P2004	4-P2004～4-P3764	4-P2116～4-SK51	4-SK51～4-P2032	4-P2032～4-P3413		
	3.71	3.49	2.09	1.85	3.00	1.82	2.16	3.13		

建物跡72Ｂ

規模	梁行き					桁行き				
	3.47m（1間）					7.03m（3間）				
主軸	N-28°-W					面積(㎡)	24.39			
柱穴 番号	4-P2083	4-P2115	4-P2038	4-SK51	4-P2003	4-P2031	4-P3764	4-SK48		
柱穴 上面径(cm)	33×34	29×31	24×27	64×72	47×48	40×45	51×61	54×55		
柱穴 下面径(cm)	19×20	3×4	17×19	14×29	30×38	12×13	24×39	25×27		
柱穴 深さ(cm)	33	28	22	32	27	49	32	35		
柱間距離(m)	4-P2083～4-P2115	4-P3764～4-SK48	4-P2083～4-P2038	4-P2038～4-P2003	4-P2003～4-P3764	4-P2115～4-SK51	4-SK51～4-P2031	4-P2031～4-SK48		
	3.47	3.73	2.31	1.71	3.01	2.09	2.11	3.09		

建物跡73Ａ

規模	梁行き					桁行き				
	4.58m（2間）					5.68m（2間）				
主軸	N-28°-W					面積(㎡)	26.01			
柱穴 番号	4-P2111	4-SK58	4-P2478	4-P2529	4-P2366	4-P2413	4-P1972	4-P2021	4-SK55	
柱穴 上面径(cm)	37×41	53×68	24×40	33×37	29×61	51×73	31×45	31×36	53×81	
柱穴 下面径(cm)	23×30	23×26	14×28	19×27	16×18	16×25	8×9	12×13	17×19	
柱穴 深さ(cm)	38	48	40	37	55	34	53	65	51	
柱間距離(m)	4-P2111～4-SK58	4-SK58～4-P2478	4-P2529～4-P2366	4-P2366～4-P2413	4-P1972～4-P2021	4-P2021～4-SK55	4-P2111～4-P2529	4-SK58～4-P2366	4-P2478～4-P2413	4-P2529～4-P1972
	2.22	2.04	2.38	2.12	2.26	2.26	2.59	3.09	2.38	3.08
	4-P2366～4-P2021	4-P2413～4-SK55								
	3.30	3.12								

建物跡73Ｂ

規模	梁行き					桁行き				
	2.22m（1間）					5.68m（2間）				
主軸	N-24° -W					面積(㎡)	12.61			
柱穴 番号	4-SK58	4-P2497	4-P2363	4-P2413	4-P2020	4-SK55				
柱穴 上面径(cm)	53×68	39×46	24×31	51×73	38×49	53×81				
柱穴 下面径(cm)	23×26	18×19	17×18	16×25	22×24	17×19				
柱穴 深さ(cm)	48	32	19	34	47	51				
柱間距離(m)	4-SK55～4-P2497	4-P2020～4-SK55	4-SK58～4-P2363	4-P2363～4-P2020	4-P2497～4-P2413	4-P2413～4-SK55				
	2.08	1.92	3.26	3.26	2.38	3.14				

建物跡74

規模	梁行き					桁行き				
	2.50m（1間）					5.36m（2間）				
主軸	N-64° -E					面積(㎡)	13.40			
柱穴 番号	4-P1969	4-P2538	4-P2337	4-P3456	4-P2308	4-P2267				
柱穴 上面径(cm)	29×30	28×34	36×37	27×31	41×53	33×48				
柱穴 下面径(cm)	21×25	8×9	17×19	11×19	19×20	9×12				
柱穴 深さ(cm)	52	43	42	17	27	37				
柱間距離(m)	4-P1969～4-P2538	4-P2538～4-P2337	4-P3456～4-P2308	4-P2308～4-P2267	4-P1969～4-P3456	4-P2337～4-P2267				
	2.84	2.61	2.60	2.75	2.50	2.65				

建物跡75

規模	梁行き					桁行き				
	3.01m（1間）					5.25m（2間）				
主軸	N-24° -W					面積(㎡)	15.80			
柱穴 番号	4-P2492	4-P2321	4-P2347	4-P2160	4-P2090	4-P2028				
柱穴 上面径(cm)	21×20	37×22	50×31	32×34	26×9	35×49				
柱穴 下面径(cm)	14×11	14×21	16×14	15×16	13×17	14×17				
柱穴 深さ(cm)	30	42	32	43	13	31				
柱間距離(m)	4-P2492～4-P2321	4-P2321～4-P2347	4-P2160～4-P2090	4-P2090～4-P2028	4-P2492～4-P2160	4-P2347～4-P2028				
	2.63	2.62	2.64	2.60	3.01	3.03				

建物跡76Ａ

規模	梁行き					桁行き				
	2.86m（1間）					7.79m（4間）				
主軸	N-66° -E					面積(㎡)	22.27			
柱穴 番号	4-P1887	4-P1662	4-P1693	4-SK20	4-SK21	4-P1589	4-P1669	4-P1643	4-P1657	4-P1644
柱穴 上面径(cm)	41×53	51×-	45×81	68×78	54×72	27×29	51×78	42×44	55×62	39×40
柱穴 下面径(cm)	22×32	16×19	16×17	23×34	20×21	16×17	11×12	24×26	19×20	5×5
柱穴 深さ(cm)	34	49	51	42	59	36	65	21	52	15
柱間距離(m)	4-P1887～4-P1693	4-P1693～SK21	4-SK21～4-P1669	4-P1669～4-P1657	4-P1662～4-SK20	4-SK20～4-P1589	4-P1589～4-P1643	4-P1643～4-P1644	4-P1887～4-P1662	4-P1657～4-P1644
	1.57	2.38	1.76	2.11	1.68	1.85	2.21	2.15	2.86	2.64

建物跡76Ｂ

規模	梁行き					桁行き				
	3.30m（1間）					3.78m（2間）				
主軸	N-66° -E					面積(㎡)	12.47			
柱穴 番号	4-P1682	4-P1589	4-P1669	4-P1643	4-P1658	4-P1644				
柱穴 上面径(cm)	28×31	27×28	33×79	42×44	46×60	39×40				
柱穴 下面径(cm)	11×15	16×17	16×21	24×26	15×17	5×5				
柱穴 深さ(cm)	42	35	53	21	49	15				
柱間距離(m)	4-P1682～4-P1589	4-P1658～4-P1644	4-P1682～4-P1669	4-P1669～4-P1658	4-P1589～4-P1643	4-P1643～4-P1644				
	3.21	3.19	1.86	2.15	2.20	2.15				

表８　沖手遺跡柱列一覧表

遺構名	調査区	グリッド	規模	主軸	備考
柱列１	１区	4N、5N	３間(5.32m)	N-75° -E	
柱列２	１区	4O、5O、5N	３間(6.82m)	N-79° -E	
柱列３	１区	5O、6O	長軸３間(4.66m)、短軸１間(1.72m)	N-8° -E	11ｃ後半～12ｃ前半
柱列４	１区	5N	３間(5.26m)	N-82° -E	
柱列５	１区	5N、6N	５間(10.78m)	N-73° -E	
柱列６	１区	5P、6P	３間(6.32m)	N-79° -E	
柱列７	１区	6N、6O	２間(4.00m)	N-12° -W	
柱列８	１区	6O	３間(6.04m)	N-7° -W	
柱列９	１区	6N、6O	５間(11.42m)	N-10° -W	
柱列10	１区	5O	５間(9.88m)	N-9° -W	
柱列11	１区	7P	３間(5.34m)	N-83° -E	
柱列12	２区	6Q	２間(4.20m)	N-80° -E	17ｃ初頭
柱列13	３区	11K、11L	４間(12.22m)	N-9° -E	
柱列14	４区	19I	４間(6.10m)	N-79° -E	
柱列15	４区	17I、18I	６間(12.40m)	N-81° -E	
柱列16	４区	15I、16I	６間(12.26m)	N-79° -E	11ｃ後半～12ｃ前半
柱列17	４区	16J、17J	２間(3.10m)	N-71° -E	
柱列18	４区	16K、17K、17J	３間(6.52m)	N-81° -E	
柱列19	４区	16K、17K	２間(4.66m)	N-84° -E	12ｃ代
柱列20	４区	21G、21H	３間(7.90m)	N-24° -W	
柱列21	４区	22H、23H	３間(6.18m)	N-64° -E	
柱列22	４区	25F、26F、25G	４間(7.84m)	N-65° -E	建物跡の可能性あり。17ｃ初頭
柱列23	４区	25G	３間(6.04m)	N-64° -E	

表９　沖手遺跡柱列計測表

柱列１

規模		5.32m（３間）			
主軸		N-75°-E			
柱穴	番号	1-P460	1-P465	1-P464	1-P471
	上面径(cm)	28×24	44×32	24×20	26×24
	下面径(cm)	18×14	32×16	18×18	12×10
	深さ(cm)	18	24	24	14
柱間距離(m)		1-P460～1-P465	1-P465～1-P464	1-P464～1-P471	
		1.70	1.82	1.80	

柱列２

規模		6.82m（３間）			
主軸		N-79°-E			
柱穴	番号	1-P211	1-P352	1-P359	1-P356
	上面径(cm)	28×20	30×20	28×24	32×24
	下面径(cm)	20×18	20×14	20×12	22×18
	深さ(cm)	26	14	30	26
柱間距離(m)		1-P211～1-P352	1-P352～1-P359	1-P359～1-P356	
		2.44	2.14	2.24	

柱列３

規模		長軸：4.66m（３間）、短軸：1.72m（１間）				
主軸		N-8°-E				
柱穴	番号	1-P15	1-P450	1-P817	1-P812	1-P701
	上面径(cm)	30×28	32×28	22×18	22×22	22×20
	下面径(cm)	16×18	16×20	10×4	12×10	16×18
	深さ(cm)	45	18	6	40	8
柱間距離(m)		1-P450～1-P817	1-P817～1-P812	1-P812～1-P701	1-P15～1-P450	
		1.72	1.22	1.34	2.1	

柱列４

規模		5.26m（３間）			
主軸		N-82°-E			
柱穴	番号	1-P469	1-P472	1-P476	1-P477
	上面径(cm)	32×20	30×24	22×20	26×24
	下面径(cm)	24×14	24×16	14×12	20×16
	深さ(cm)	18	14	8	14
柱間距離(m)		1-P469～1-P472	1-P472～1-P476	1-P476～1-P477	
		1.9	1.66	1.7	

柱列５

規模		10.78m（５間）					
主軸		N-73°-E					
柱穴	番号	1-P468	1-P474	1-P478	1-P112	1-P853	1-P864
	上面径(cm)	42×20	28×24	26×20	24×22	44×26	26×18
	下面径(cm)	38×14	22×16	16×14	14×0.8	18×14	10×0.8
	深さ(cm)	17	10	10	10	30	34
柱間距離(m)		1-P468～1-P474	1-P474～1-P478	1-P478～1-P112	1-P112～1-P853	1-P853～1-P864	
		2.3	2.14	2.32	1.66	2.38	

柱列７

規模		4.00m（２間）		
主軸		N-12°-W		
柱穴	番号	1-P867	1-P870	1-P848
	上面径(cm)	22×16	22×20	26×24
	下面径(cm)	0.6×0.2	12×10	14×10
	深さ(cm)	12	24	22
柱間距離(m)		1-P867～1-P870	1-P870～1-P848	
		2.06	1.94	

柱列６

規模		6.32m（３間）			
主軸		N-79°-E			
柱穴	番号	1-P428	1-P617	1-P630	1-P643
	上面径(cm)	32×22	18×16	32×22	38×28
	下面径(cm)	26×18	0.6×0.6	14×10	14×10
	深さ(cm)	28	38	24	24
柱間距離(m)		1-P428～1-P617	1-P617～1-P630	1-P630～1-P643	
		2.28	2.08	2.02	

柱列８

規模		6.04m（３間）			
主軸		N-7°-W			
柱穴	番号	1-P849	1-P746	1-P716	1-P664
	上面径(cm)	34×20	22×20	36×28	42×18
	下面径(cm)	14×12	12×0.8	30×18	20×12
	深さ(cm)	20	18	37	8
柱間距離(m)		1-P849～1-P746	1-P746～1-P716	1-P716～1-P664	
		2.02	2.02	2	

柱列９

規模		11.42m（５間）					
主軸		N-10°-W					
柱穴	番号	1-P866	1-P1108	1-P832	1-P755	1-P765	1-P670
	上面径(cm)	28×22	30×18	34×30	34×26	28×22	24×20
	下面径(cm)	10×0.8	0.6×0.6	14×12	12×10	10×0.8	18×16
	深さ(cm)	18	15	19	25	18	28
柱間距離(m)		1-P866～1-P1108	1-P1108～1-P832	1-P832～1-P755	1-P755～1-P765	1-P765～1-P670	
		2.1	1.68	1.92	1.74	4.06	

柱列10

規模		9.88m（５間）					
主軸		N-9°-W					
柱穴	番号	1-P377	1-P333	1-P332	1-P187	1-P1095	1-P50
	上面径(cm)	21×20	26×24	24×20	30×22	30×26	24×20
	下面径(cm)	18×16	16×14	0.8×0.6	18×14	10×0.8	16×14
	深さ(cm)	8	18	22	8	16	11
柱間距離(m)		1-P377～1-P333	1-P333～1-P332	1-P332～1-P187	1-P187～1-P1095	1-P1095～1-P50	
		1.84	2	1.82	1.76	1.9	

柱列11

規模		5.34m（３間）			
主軸		N-83°-E			
柱穴	番号	1-P903	1-P910	1-P914	1-P917
	上面径(cm)	30×28	22×20	40×20	34×22
	下面径(cm)	14×12	16×12	12×10	18×16
	深さ(cm)	32	26	20	26
柱間距離(m)		1-P903～1-P910	1-P910～1-P914	1-P914～1-P917	
		1.86	1.74	1.74	

柱列12

規模		4.20m（２間）		
主軸		N-80°-E		
柱穴	番号	2-P836	2-P943	2-P230
	上面径(cm)	40×42	28×26	40×34
	下面径(cm)	24×18	18×10	32×26
	深さ(cm)	36	34	28
柱間距離(m)		2-P836～2-P943	2-P943～2-P230	
		2.22	1.98	

柱列13

規模		12.22m（４間）				
主軸		N-9°-E				
柱穴	番号	3-P1549	3-P1043	3-P1546	3-P1023	3-P1053
	上面径(cm)	28×26	34×28	32×22	24×22	24×22
	下面径(cm)	16×14	0.6×0.2	12×10	12×10	14×10
	深さ(cm)	13	26	6	24	38
柱間距離(m)		3-P1549～3-P1043	3-P1043～3-P1546	3-P1546～3-P1023	3-P1023～3-P1053	
		2.88	3.1	2.92	3.32	

柱列14

規模		6.10m（4間）				
主軸		N-79°-E				
柱穴	番号	4-P3039	4-P3040	4-P3038	4-P3707	4-P1928
	上面径(cm)	32×20	32×28	30×28	36×32	34×30
	下面径(cm)	22×20	26×20	22×16	20×18	22×20
	深さ(cm)	20	14	16	22	28
柱間距離(m)		4-P3039～4-P3040	4-P3040～4-P3038	4-P3038～4-P3707	4-P3707～4-P1928	
		1.58	1.7	1.3	1.54	

柱列15

規模		12.40m（6間）						
主軸		N-81°-E						
柱穴	番号	4-P3581	4-P3661	4-P3561	4-P3494	4-P3493	4-P3492	4-P3491
	上面径(cm)	28×32	28×26	28×24	30×36	24×24	30×30	30×36
	下面径(cm)	24×22	24×20	22×20	20×24	18×18	22×22	22×24
	深さ(cm)	14	10	14	18	20	20	20
柱間距離(m)		4-P3581～4-P3661	4-P3661～4-P3561	4-P3561～4-P3494	4-P3494～4-P3493	4-P3493～4-P3492	4-P3492～4-P3491	
		2.14	4.08	1.74	1.38	1.62	1.44	

柱列16

規模		12.26m（6間）						
主軸		N-79°-E						
柱穴	番号	4-P3698	4-P3738	4-P3689	4-P3672	4-P3670	4-P3639	4-P3628
	上面径(cm)	16×18	26×26	24×24	24×24	26×24	20×24	32×28
	下面径(cm)	14×12	16×18	10×12	20×18	18×16	14×14	18×20
	深さ(cm)	6	24	26	22	16	22	30
柱間距離(m)		4-P3698～4-P3738	4-P3738～4-P3689	4-P3689～4-P3672	4-P3672～4-P3670	4-P3670～4-P3639	4-P3639～4-P3628	
		1.8	1.76	2.8	1.72	2.14	2.04	

柱列17

規模		3.10m（2間）		
主軸		N-71°-E		
柱穴	番号	4-P3514	4-P3510	4-P3506
	上面径(cm)	20×19	20×18	20×16
	下面径(cm)	12×10	14×12	12×10
	深さ(cm)	10	12	16
柱間距離(m)		4-P3514～4-P3510	4-P3510～4-P3506	
		1.7	1.4	

柱列18

規模		6.52m（3間）			
主軸		N-81°-E			
柱穴	番号	4-P3530	4-P3513	4-P3507	4-P3504
	上面径(cm)	18×14	22×18	24×22	26×24
	下面径(cm)	12×10	16×14	16×14	14×12
	深さ(cm)	10	4	18	24
柱間距離(m)		4-P3530～4-P3513	4-P3513～4-P3507	4-P3507～4-P3504	
		1.86	2.36	2.3	

柱列19

規模		4.66m（2間）		
主軸		N-84°-E		
柱穴	番号	4-P3512	4-P3508	4-P3502
	上面径(cm)	26×24	42×31	28×26
	下面径(cm)	20×14	30×24	14×10
	深さ(cm)	9	28	22
柱間距離(m)		4-P3512～4-P3508	4-P3508～4-P3502	
		2.2	2.46	

柱列20

規模		7.90m（3間）			
主軸		N-24°-W			
柱穴	番号	4-P2981	4-P2983	4-P3022	4-P2845
	上面径(cm)	28×24	24×20	24×22	20×18
	下面径(cm)	14×10	18×14	18×10	12×10
	深さ(cm)	32	30	27	30
柱間距離(m)		4-P2981～4-P2983	4-P2983～4-P3022	4-P3022～4-P2845	
		2.62	2.52	2.76	

柱列21

規模		6.18m（3間）			
主軸		N-64°-E			
柱穴	番号	4-P2824	4-P2820	4-P2541	4-P2544
	上面径(cm)	44×44	50×44	42×42	46×42
	下面径(cm)	32×34	30×32	30×26	32×28
	深さ(cm)	36	32	34	36
柱間距離(m)		4-P2824～4-P2820	4-P2820～4-P2541	4-P2541～4-P2544	
		2.06	2.04	2.08	

柱列22

規模		7.84m（4間）				
主軸		N-65°-E				
柱穴	番号	4-P1652	4-P1631	4-P1610	4-P1601	4-P1839
	上面径(cm)	26×22	58×50	48×34	74×48	74×32
	下面径(cm)	10×14	24×16	20×18	18×16	56×18
	深さ(cm)	35	36	29	46	36
柱間距離(m)		4-P1652～4-P1631	4-P1631～4-P1610	4-P1610～4-P1601	4-P1601～4-P1839	
		1.98	1.7	2.12	2.04	

柱列23

規模		6.04m（3間）			
主軸		N-64°-E			
柱穴	番号	4-P1645	4-P1632	4-P1611	4-P1602
	上面径(cm)	20×16	22×20	26×26	36×34
	下面径(cm)	12×12	10×12	12×12	6×6
	深さ(cm)	28	48	34	41
柱間距離(m)		4-P1645～4-P1632	4-P1632～4-P1611	4-P1611～4-P1602	
		1.94	1.92	2.18	

表10　沖手遺跡井戸一覧表

遺構名	調査区	グリッド	構造	井側内法寸法（cm）	井筒規模（cm）	掘り方規模（cm）	備考
井戸1	1区	5P	桶側積上げ型	60×57	−	268×236、深さ160	16c
井戸2	1区	4P	−	−	−	直径約150、深さ150	
井戸3	1区	6O	−	−	−	140×121、深さ140	
井戸4	1区	6M、6N	桶側積上げ型	55×48	−	上段152×130、下段80×80、深さ178	14cに廃絶
井戸5	1区	10L	石組＋桶側積上げ型	径60	曲物、径54、深さ53	202×200、深さ200	15〜16c
井戸6	2区	6Q	桶側積上げ型？	−	曲物、径46、深さ37	147×124、深さ172	AD1400-1450（放射性炭素年代）

表11　沖手遺跡墓一覧表

遺構名	調査区	グリッド	墓壙					棺			出土遺物	人骨	時期	備考
			平面形	主軸方向	規模			形態	主軸方向	規模(cm)				
					長(cm)	幅(cm)	深(cm)							
墓1	1区	8N	隅円方形	N-8°-W	62	60	20				土師器皿1	小児（7歳前後）	15c末〜16c前半	
墓2	1区	8M	不整円形	N-56°-E	78	67	60	桶		45×42	土師器皿1	成人　不明	15c後半	
墓3	1区	8M	隅円方形	N-5°-W	106	90	77	箱			土師器皿2		15c末〜16c前半	
墓4	1区	9M	不整形	N-4°-W	87	79	20				土師器皿1	幼児（4歳前後）	15c後半	
墓5	1区	10M	隅円方形	N-78°-E	102	98	30				土師器皿1		15c後半	
墓6	1区	10M	方形	N-78°-E	98	93	40	箱		51×33	土師器皿1	成人　女性	15c末〜16c前半	
墓7	2区	6P	円形		128	101	79	桶		径：55	銭貨7、櫛、漆器椀、土師器皿、箸、折敷、木札	成人　男性	15c後半	
墓8	2区	6P	方形	N-6°-E	74	64	29	箱	N-7°-E	48×39		幼児（4歳）	15〜16世紀？	墓壙上部に集石
墓9	2区	6Q	楕円形	N-4°-E	90	62	33	不明			土師器皿2、銭貨	成人　不明	15c末〜16c前半	
墓10	2区	6P	隅円方形	N-10°-W	87	63	12	不明			土師器皿	幼児		墓壙上部に石、墓壙内に杭跡
墓11	2区	6P,7P	隅円方形	N-12°-W	118	75	31	不明				成人　女性	15〜16世紀？	
墓12	3区	13J	長方形	N-16°-W	111	64	7	不明						
墓13	3区	13J	楕円形	N-10°-E	180	135	45	不明				成人　不明		
墓14	4区	18I	長方形	N-4°-E	183	77	21	箱？			土師器皿3、白磁皿2、鉄小刀2、釘		12c中〜12c後半	墓壙上部に集石
墓15	4区	15I	長方形	N-44°-E	216	107	21	箱	N-44°-E	194×64	青磁碗1・皿2、鉄小刀2	成人　男性	12c中〜12c後半	
墓16	4区	19I,20I	楕円形	N-87°-E	105	61	17	不明			漆器	成人　不明	14c前後	建物跡64に伴うものか
墓17	4区	19H,19I	長方形	N-9°-W	122	71	21	箱	N-9°-W	94×47	土師器	成人　不明	14c前後	建物跡64に伴うものか
墓18	4区	16I,16J	隅円長方形	N-9°-W	98	83	27	箱	N-14°-E	72×42	土師器皿2	成人　不明	15c末〜16c前半	
墓19	4区	16J	円形		116	105	70	桶		径：49	漆器椀、土師器皿2、折敷、木箱、籠？	成人　不明	15c後半	
墓20	4区	23G	長方形	N-6°-W	105	49	15	箱？			釘	成人　不明	15c後半〜？	木質わずかに残存、棺か？
墓21	4区	23G	隅円長方形	N-15°-W	118	84	20	箱？			鉄製品	成人　不明	15c後半〜？	木質わずかに残存、棺か？
墓22	4区	23G	円形		108	93	39	桶		径：46		成人　不明	15c後半〜？	
墓23	4区	25G	隅円方形	N-37°-E	67	65	33	不明				幼児（5歳前後）	15c後半〜？	木質わずかに残存、棺か？
墓24	4区	23G,23H	楕円形	N-65°-E	85	70	27	桶or曲物		径：46	銭貨（無文銭）6	成人　不明	15c末〜	
墓25	4区	22H	隅円方形	N-34°-E	140	85	30	箱	N-32°-E	85×44	釘	成人　男性	15c後半〜？	
墓26	4区	22G	円形		83	80	43	桶		径：36	漆器椀、折敷	幼児（6歳前後）	15c後半〜？	
墓27	4区	23F	隅円方形	N-42°-E	98	78	31	箱	N-43°-E	62×(14以上)				
墓28	4区	23F	楕円形	N-48°-E	71	56	28	箱	N-40°-E	52×28	土錘			
墓29	4区	22F	円形		70	62	15	曲物		径：38		幼児（3〜4歳）		
墓30	4区	25F	方形	N-8°-W	71	56〜		箱？					近世？	
墓31	4区	25F	円形		96	95	82	桶		径：46		成人　男性	17c後半	墓30を切る
墓32	4区	25F	不整円形	N-37°-E	115	113	91	桶		径：46		幼児（9歳前後）	近世？	
墓33	4区	25F	長方形	N-8°-W	114	88	56	箱	N-4°-W	91×62		成人　不明	近世？	
墓34	4区	25F	長方形	N-24°-W	91	81	55	箱	N-4°-W	62×37	櫛	成人　女性	近世？	墓35を切る
墓35	4区	25F	長方形	N-51°-E	123	82	48	箱	N-46°-E	82×(41)		成人　女性	近世？	
墓36	4区	25F,26F	長方形	N-9°-E	121	82	33	箱	N-6°-E	87×59		成人　女性	近世？	
墓37	4区	26F	隅円長方形	N-19°-W	108	76	16	箱	N-6°-W	75×44	釘	幼児（7〜8歳）	近世？	
墓38	4区	25F	長方形	N-29°-E	134	91	63	箱	N-12°-E	91×52	枕状木製品	成人　男性	近世？	

表12　沖手遺跡土器・陶磁器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm) 口径	底径	器高	文様・調整 内面	外面	胎土	色調	備考
14－1	48	建物跡7 1-P210	土師器	柱状高台皿		7.5	4.0	1.9	回転ナデ	回転ナデ、底部 左回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒わずかに含む	浅黄(2.5Y7/3)	底部 焼成前穿孔　1区報告書第62図２と同じ
14－2	50	建物跡7 1-P277	土師器	坏			5.2		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	やや粗　1mm以下の砂粒、2mm以下の赤色粒多く含む	黄橙(10YR8/6)	1区報告書第65図４と同じ
14－3	50	建物跡7 1-P1099	土師器	皿		7.0	5.8	0.9	回転ナデ	回転ナデ	密　0.5mm以下の砂粒少し含む	浅黄橙(10YR8/3)	
14－4	68	建物跡8 1-P92	中国陶器	小壺	上限14C前後	(3.4)			口縁部 施釉（茶褐釉）	施釉（茶褐釉）	密	釉：褐(7.5YR4/3) 露胎：暗灰(N3/0)	茶入れ
14－5	48	建物跡10 1-P197	土師器	坏		(13.2)	6.6	5.0	回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　1mm以下の砂粒少し含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	1区報告書第65図１と同じ
14－6	48	建物跡11 1-P354	土師器	坏		(14.7)	(6.0)	4.2	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒わずかに含む	にぶい黄橙(10YR7/3)	1区報告書第65図10と同じ
14－7	54	建物跡12 1-P280	瓦質土器	擂鉢					ハケ目、擂目（１単位３条以上）	口縁端部 ハケ目	やや密　1.5mm以下の砂粒若干含む	内：浅黄橙(10YR8/4) 外：灰(5Y5/1)	
14－8	50	柱列2 1-P211	土師器	皿		8.5	5.6	1.8	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	1mm以下の砂粒を多く含む	にぶい橙(10YR7/3)	
18－1	50	建物跡18 1-P661	土師器	坏		(14.0)			回転ナデ	回転ナデ	密　0.5mm以下の砂粒を密に含む	にぶい橙(10YR7/3)	1区報告書第65図17と同じ
18－2	63	柱列3 1-P450	白磁	碗	碗Ⅴ類		5.9		施釉	体部上半まで施釉	密	釉：灰白色(10Y8/1) 露胎：灰白色(10Y8/1)	
18－3	48	柱列3 1-P450	土師器	皿		8.8	5.7	1.9	回転ナデ後ナデ	回転ナデ、底部 回転ナデ	密　0.5mm以下の砂粒少し含む	浅黄橙(10YR8/3)	1区報告書第65図11と同じ
24－2	64	建物跡22 1-P1043	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅱａ類	(16.7)			施釉	施釉、片彫蓮弁文（弁の中心には縞なし）	密	オリーブ黄(5Y6/3)	1区報告書第65図25と同じ
24－3	53	建物跡25 1-P948	土師器	鉢		(28.8)			ハケ目、擂目（６条１単位：幅２cm）	ナデ、指頭圧痕	1mm以下の砂粒やや多く含む	淡黄(2.5Y8/3)	赤色顔料が一部残る　1区報告書第65図22と同じ
30－1	64	建物跡28 2-P949 2層	青磁	碗	碗Ⅱｂ類	16.4			施釉	施釉、鎬蓮弁文	密	オリーブ灰(10Y6/2)	
30－2	55	建物跡33 2-P8	瓦質土器	甕					ハケ目後ナデ	ナデ、スタンプ文	やや密　1mm以下の砂粒若干含む	灰白色(7.5Y7/1)	
30－3	59	柱列12 2-P943	近世陶器（肥前系）	皿		12.0	4.4	3.1	施釉	体部上半施釉	2mm大の砂粒を多く含む	釉：灰オリーブ(7.5YR6/2) 外露胎：にぶい黄橙(10YR7/4)	見込み 胎土目跡３ヶ所
35－1	58	建物跡39 2-P216	陶器（瀬戸）	水滴	古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ期	2.3	3.8	3.0		施釉（灰釉）	1mm以下の砂粒わずかに含む	灰白色(7.5Y7/2)	
40－1	53	建物跡43 3-P1275	土師器	鉢			13.0		摩滅のため調整不明	指押さえ、ハケ目	粗　5mm以下の砂礫多く含む	にぶい橙(7.5YR7/4)	
40－2	64	建物跡43 3-P1172	青磁（龍泉窯系）	小碗	小碗Ⅳ×DⅡ類	(9.6)			施釉	施釉、体部上位　２条の沈線	密	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	
47－1	47	溝状遺構3	須恵器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	密	灰(N6/0)	
47－2	50	溝状遺構3	土師器	坏皿			5.8		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	1mm以下の砂粒を含む	橙(7.5YR7/8)	
47－3	50	溝状遺構3	土師器	坏			(6.3)		回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り	密	橙(5YR7/6)	
47－4	50	溝状遺構3	土師器	坏			5.4		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密	橙(7.5YR7/6)	外面 煤付着
47－5	50	溝状遺構3	土師器	坏			6.3		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り？	密	橙(7.5YR7/6)	
47－6	48	溝状遺構3	土師器	坏			6.0		回転ナデ	回転ナデ、底部 摩滅のため調整不明	密	橙(5YR7/8)	
47－7	54	溝状遺構3	瓦質土器	鉢					ナデ？（摩滅のため不明瞭）	ナデ？（摩滅のため不明瞭）	1mm以下の砂粒を少し含む	灰白色(5YR8/1)	
47－8	53	溝状遺構3	瓦質土器	湯釜					ナデ	ナデ	密	内：灰白色(5Y8/1) 外：灰白色(5Y8/2)	
47－9	53	溝状遺構3	瓦質土器	鉢		(27.2)	(13.2)	10.1	ハケ目、使用のため摩滅著しい	ハケ目、ナデ 指頭圧痕あり	密	灰白色	
47－10	54	溝状遺構3 2層	瓦質土器	鉢		26.0			ハケ目	ナデ	粗　1mm以下の砂粒を多く含む	灰(N4/0)	口縁端部 凹面もつ
47－11	55	溝状遺構3	土師器	甕					ハケ目	平行タタキ	1～2mmの砂粒を多く含む	褐灰(7.5YR5/1)	
47－12	57	溝状遺構3	備前	壺			(9.4)		ハケ目	ナデ	やや粗　1mm以下の砂粒を多く含む	内：にぶい橙(2.5YR6/4) 外：赤褐(10R5/4)	
47－13	63	溝状遺構3	白磁	碗	碗Ⅳ類		6.2		施釉	体部施釉、底部削り出し高台	密	釉：灰白色 露胎：灰白色(10Y8/1)	内面１条の沈線
47－14	64･65	溝状遺構3	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ－２類		(6.0)		施釉、体部 片彫の花文	高台内側まで施釉	密	オリーブ灰(10Y6/2)	
47－15	68	溝状遺構3	中国陶器	甕			(18.8)		ナデ	ナデ	粗　2mmほどの砂粒を多く含む	内：灰白色(5Y8/2) 外：灰白色(5Y7/2)	
47－16	69	溝状遺構3	朝鮮・施釉陶器	碗			4.4		施釉	施釉	密	内釉：灰白色 外体部釉：灰白色 底部釉：灰	内面は櫛またはハケ目原体によって生じた凹凸に白土を塗り込む　目跡１ヶ所
47－19	50	溝状遺構4	土師器	坏			(6.6)		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	1mm以下の砂粒を含む	内：灰黄褐(10YR5/2) 外：浅黄橙(10YR8/4)	
47－20	56	溝状遺構4	須恵器	鉢					回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の砂粒を少し含む	灰(N6/0)	
47－21	58	溝状遺構4	陶器（瀬戸）	小天目	大窯４期前半				施釉（灰釉）	施釉（灰釉）	密	淡黄(5Y8/3)	
47－22	59	溝状遺構4	近世磁器（肥前系）	皿	17C後半～	(13.0)	5.3	2.5	施釉、口縁部 圏線１条、兎込み 蛇ノ目		密	灰白色(7.5YR8/1)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
51－1	47	溝状遺構８	須恵器	壷					ハケ目、ケズリ	ハケ目	密	青灰(5PB6/1)	
51－2	47	溝状遺構８	須恵器	甕					同心円当具痕後ハケ目	平行タタキ	１㎜ほどの砂粒を含む	青灰(10BG6/1)	
51－3	47	溝状遺構８	須恵器	甕					同心円当具痕	平行タタキ	１㎜ほどの砂粒を含む	青灰(10BG6/1)	
51－4	50	溝状遺構８	土師器	坏			5.8		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	２㎜大の砂粒を含む	淡黄(5Y8/3)	
51－5	50	溝状遺構８	土師器	皿			(4.0)		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	淡黄(5Y8/3)	
51－6	50	溝状遺構８	土師器	皿			6.0		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	１㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙(10YR8/3)	
51－7	52	溝状遺構８	瓦質土器	鍋	防長型Ⅳａ古				横ナデ、ハケ目	横ナデ、ナデ	密　１㎜以下の石含む	灰	
51－8	52	溝状遺構８	瓦質土器	鍋	防長型Ⅰ				摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密　１㎜以下の石含む	オリーブ黒(10Y3/1)	
51－9	52	溝状遺構８	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ新	(27.0)			ナデ	ナデ	やや粗　１㎜以下の砂粒を多く含む	淡黄(5Y8/4)	
51－10	53	溝状遺構８	瓦質土器	湯釜		(13.0)			横ナデ、ナデ	横ナデ	密　３㎜以下の石含む	暗灰(N3/0)	
51－11	54	溝状遺構８	土師器	鉢					摩滅のため調整不明	ナデ、ハケ目	１㎜ほどの砂粒を多く含む	灰白色(7.5YR8/2)	
51－12	54	溝状遺構８	瓦質土器	擂鉢	防長型				摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	２㎜ほどの砂粒を多く含む	淡黄(2.5Y8/3)	
51－13	54	溝状遺構８	瓦質土器	擂鉢	防長型				ハケ目	ナデ	やや粗　１㎜大の砂粒を多く含む	灰(N5/0)	口縁端部 内側に折り返し肥厚
51－14	56	溝状遺構８	須恵器(東播系？)	鉢					摩滅・器面のあれが著しく調整不明	ナデ	やや粗　１～２㎜の砂粒を多く含む	灰(N6/0)	
51－15	57	溝状遺構８	備前	擂鉢	ⅣＡ期	(28.1)	(14.8)	12.0	回転ナデ、擂目（７条１単位）	回転ナデ	粗　５㎜以下の砂礫を多く含む	にぶい赤橙(10R6/3)	
51－16	59	溝状遺構８	近世陶器(肥前系)	皿			3.5		施釉	体部下位まで施釉	１㎜以下の砂粒を多く含む	灰白色(2.5Y8/1)	
51－17	63	溝状遺構８	白磁	皿	ⅢⅨ類	(10.2)			施釉	施釉	密	内・外釉：灰白色(10Y8/1)	内外面 口禿
51－18	63	溝状遺構８	白磁	皿	ⅢⅨ類	(10.5)	(5.4)	(2.7)	施釉 口縁釉はぎとり	体部施釉	密	灰白色(7.5Y7/1)	口禿
51－19	63	溝状遺構８	白磁	皿	ⅢＤ群	(12.4)	(4.8)	3.1	施釉、見込みの蛇目釉はぎ	口縁～体部畳半に施釉、体部下半～底部は回転ケズリ	密	釉：灰白色(7.5Y8/1) 露胎：灰白色(7.5Y8/2)	体部内面１条の沈線
51－20	66	溝状遺構８	青磁（同安窯系）	皿	ⅢⅠ類	(11.0)	(6.2)	(2.5)	施釉、櫛状工具によるジグザグ文様 筐による文様	体部 下半途中施釉 底部 施釉されず	密	明緑灰(10GY7/1)	
51－21	64	溝状遺構８	青磁（龍泉窯系）	小碗	小碗Ⅰ類		4.6		施釉	施釉 底部釉なし	１㎜ほどの砂粒をわずかに含む	内・外釉：灰オリーブ(7.5Y5/2)	
51－22	68	溝状遺構８	中国陶器	壷	壷Ⅴ×　耳壷ⅩⅢ					施釉	１～２㎜ほどの白色の砂粒を含む	灰黄(2.5Y7/2)	胎土・釉はＡ２群
51－23	69	溝状遺構８	朝鮮・施釉陶器	壷					施釉	施釉、同心円当具痕、指頭圧痕	２㎜大の砂粒を少し含む	灰オリーブ(5Y6/2)	
51－24	69	溝状遺構８	朝鮮・施釉陶器	壷					同心円当具痕後ナデ	横方向の沈線	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	灰白色(5Y8/1)	
55－1	52	井戸６	土師器	鍋	西長門型ａ				摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	粗　２㎜以下の砂礫含む、５㎜大以上のものも少し入る	灰白色(2.5Y8/2)	
55－2	63	井戸６	白磁	碗	碗Ⅱ類				施釉	施釉	密	灰白色(5Y8/2)	
55－3	63	井戸６	白磁	碗	碗Ⅳ類				施釉	施釉	密	灰白色(5Y8/2)	
58－1	48	墓７	土師器	皿		11.6	5.3	2.5	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り	緻密	にぶい黄橙	
59－1	48	墓９	土師器	皿		13.0	5.2	2.8	回転ナデ	回転ナデ、底部摩滅のため調整不明	緻密	黄灰	内面見込みに黒色の付着物、口縁端部に沈線
59－2	48	墓９	土師器	皿		13.8	5.4	3.0	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り	密	にぶい黄橙	口縁端部に沈線
59－3	48	墓10	土師器	皿		7.2	5.4	1.0	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り	粗　３㎜以上の砂粒をやや多く含む	橙	
59－4	68	墓10	中国陶器	鉢	鉢Ⅳ類	(20.0)			回転ナデ	施釉	密	褐(7.5YR4/3)	
65－1	50	2-SK02	土師器	柱状高台皿			4.8		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　１㎜以下の砂粒・赤色粒少し含む	浅黄橙(10YR8/4)	
65－2	54	3-SK16	瓦質土器	擂鉢					ハケ目、擂目（１単位の条数不明）	ナデ	やや粗　１～２㎜の砂粒を多く含む	暗灰(N3/0)	
65－3	52	1-P791	土師器	鍋	西長門型ａ				口縁 横ナデ、体部 ハケ目	口縁 横ナデ、体部 ナデ	１㎜以下の砂粒を多く含む	淡黄(5Y8/4)	外面 煤付着
65－4	50	2-P232	土師器	坏			(7.2)		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	淡黄橙(10YR8/4)	
65－5	70	2-P232	瓦類	丸瓦					ケズリ	ナデ	やや粗　３㎜以下の砂礫含む	表：淡黄(2.5Y8/3) 裏：橙(7.5YR7/6)	
65－6	48	2-P260	土師器	皿		8.4	5.2	1.5	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り	緻密	にぶい黄橙	
65－7	50	2-P298	土師器	皿			6.0		回転ナデ	底部 右回転糸切り	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	橙(7.5YR7/6)	
65－9	50	2-P603	土師器	皿		(7.9)	(4.9)	1.6	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　１㎜以下の赤色粒含む	浅黄橙(10YR8/4)	
65－10	50	2-P645	土師器	皿			4.4		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　２㎜以下の赤色粒含む	浅黄橙(10YR8/3)	
65－11	66	2-P684 ２層	青磁（同安窯系）	皿	ⅢⅠ類		4.5		全面施釉、見込み 筐による文様 櫛状工具によるジグザグ状の点描文	体部施釉、底部ケズリ	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2) 露胎：灰白色(5Y7/1)	
65－12	68	2-P684	中国陶器	壷			7.2		回転ナデ	回転ナデ、底部 板状の圧痕	１㎜以下の白色粒など含む	灰(7.5Y6/1)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
65－14	50	2-P695	土師器	皿		(8.4)	(6.4)	(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	やや粗　1.5mm以下の赤色粒多く含む	にぶい黄橙(10YR6/3)	
65－15	47	2-P695	須恵器	甕					同心円当具痕	平行タタキ	やや粗　1mm以下の砂粒やや多く含む	内：灰(N5/0) 外：黄灰(2.5Y6/1)	
65－16	64・65	2-P695	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ－2a類	(16.2)			施釉、体部片彫蓮花文	施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y5/2) 破面：灰(10Y6/1)	
65－17	64	2-P721	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ－1類	(16.0)			施釉	施釉	密	オリーブ黄(5Y6/3)	
65－18	50	2-P732	土師器	皿		9.5		1.3	回転ナデ	回転ナデ	密　0.5mm以下の雲母含む	にぶい橙(5YR7/4)	
65－19	50	2-P850	土師器	碗			(6.8)		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	1mm以下の砂粒を含む	浅黄橙(7.5YR8/6)	
65－20	50	2-P850	土師器	柱状高台皿			6.0		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密　1mm以下の砂粒を少し含む	浅黄橙(7.5YR8/6)	
65－21	50	2-P988	土師器	坏			5.8		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	浅黄橙(10YR8/3)	
65－22	65	井戸1	青磁（龍泉窯系）	香炉					施釉	施釉	密	釉：オリーブ灰(2.5GY6/1) 胎土：灰白色(N7/0)	
65－24	65	溝状遺構2	青磁（龍泉窯系）	水注					施釉	施釉、体部 蓮弁状の凹凸、把手上面 2条の沈線	密	明緑灰(10GY7/1)	瓜形の器形
87－1	50	建物跡55 4-P3563	土師器	坏		12.6			回転ナデ	回転ナデ	やや粗　1mmほどの砂粒を多く含む	にぶい黄橙(10YR7/3)	
87－2	50	建物跡55 4-P3548	土師器	坏			(5.4)		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	1mm以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙(10YR7/3)	
87－3	50	建物跡56 4-P3562	土師器	皿		6.4	5.2	1.1	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒少し含む	灰白色(2.5YR8/1)	
87－4	49	建物跡62 4-P3179	土師器	坏		(12.8)	7.2	4.4	回転ナデ？	回転ナデ？、底部回転糸切り	密　1mm以下の砂粒を少量含む	内：橙 外：浅黄橙	
87－5	50	建物跡64 4-P3044	土師器	坏		(13.2)			回転ナデ	回転ナデ	密　0.5mm以下の砂粒含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	
87－6	49	建物跡64 4-P3034	土師器	皿		7.8	5.4	1.2	回転ナデ	回転ナデ、底部摩滅のため調整不明	密　雲母など0.5mm以下の砂粒含む	橙(7.5YR7/6)	
87－7	49	建物跡64 4-P3034	土師器	皿		7.3	6.1	1.1	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り後ナデ	密	橙(7.5YR7/6)	
87－8	50	建物跡64 4-P3086	土師器	皿		(7.2)	(6.0)	(1.0)	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	1mm以下の砂粒を多く含む	淡黄(2.5Y8/4)	
87－9	50	建物跡64 4-P3029	土師器	坏			5.4		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	やや粗　1mm以下の砂粒を多く含む	淡黄橙(10YR8/4)	
87－10	50	建物跡64 4-P3032	土師器	坏			5.4		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	やや粗　1mm以下の砂粒を多く含む	浅黄(2.5Y8/3)	
87－11	50	建物跡64 4-P3047	土師器	皿			3.8		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密　1mm大の砂粒を少し含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	
87－12	47	柱列14 4-P3040	須恵器	甕					同心円当具痕	平行タタキ	密　0.5mm以下の砂粒含む	青灰(5PB5/1)	
87－13	50	柱列15 4-P3581	土師器	皿		(7.2)	(5.6)	1.0	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密　0.5mm以下の砂粒含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	
87－14	49	柱列16 4-P3672	土師器	碗		13.5	6.0	4.9	回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密	浅黄(2.5Y7/4)	
87－15	50	柱列19 4-P3508	土師器	皿			3.8		回転ナデ	底部 回転糸切り	やや粗　2mm以下の砂粒を多く含む	明黄褐(2.5Y6/6)	
87－16	51	柱列19 4-P3508	土師器	鍋		28.8			ハケ目	口縁部 横ナデ、頸部指頭圧痕、体部 ハケ目	やや粗　3mm以下の砂礫やや多く含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	
87－17	56	溝状遺構13	備前	擂鉢	Ⅳ B－3期	27.4			回転ナデ、擂目（8条1単位：幅2.7cm）	回転ナデ	やや密　2mmほどの砂粒を少し含む	内：にぶい橙(2.5YR6/4) 外：にぶい橙(2.5YR6/4)	
87－18	56	溝状遺構13	備前	擂鉢	Ⅳ B－1期				回転ナデ、擂目（7条1単位：幅1.9cm）	回転ナデ	1mmほどの砂粒を少量含む	内：にぶい褐(7.5YR5/3) 外：灰褐(5YR5/2)	
88－1	49	墓14	土師器	皿		9.0	7.6	1.2	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒含む	淡黄(2.5Y8/3)	
88－2	49	墓14	土師器	皿		8.5	7.6	1.1	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒含む	灰白色(2.5Y8/2)	
88－3	49	墓14	土師器	皿		8.4	7.8	1.2	回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒含む	淡黄(2.5Y8/3)	
88－4	60	墓14	白磁	皿	ⅢⅧ－2b類	12.6	5.5	2.7	全面施釉、見込みに凹印による草花文、体部立ち上がりに沿って沈線	口縁～体部は施釉、底面は露胎	密	内・外釉：灰白色 露胎：黄白色	内面見込みに茶色の付着物
88－5	60	墓14	白磁	皿	ⅢⅧ－2b類	12.8	5.5	2.7	全面施釉、見込みに草花文の凹印、体部立ち上がりに沈線	口縁～体部は施釉、底面は露胎	密	内・外釉：うす緑おびた灰白色 露胎：灰色	
89－1	61・62	墓15	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ－4a類	16.0	6.0	7.5	全面施釉、櫛刀により5分割され中に飛雲文、見込みには3個の茸状の文様を片彫り	高台畳付け及びその内部は露胎、その他は施釉	緻密	内釉：緑色 外釉：緑色 露胎：灰色	高台内面に「傘」形の記号の墨書
89－2	61・62	墓15	青磁（同安窯系）	皿	ⅢⅠ－2b類	10.3	5.0	2.7	全体に釉、見込みに篦による文様及び櫛状工具によるジグザグ状の点描文	体部下半～底部にケズリ、口縁～体部には施釉、底面は施釉されず	密	内・外釉：やや黄色みおびた淡緑色 露胎：灰色	底面に墨書
89－3	61・62	墓15	青磁（同安窯系）	皿	ⅢⅠ－1b類	10.3	4.7	2.6	全面施釉、見込みに櫛状工具による文様	体部下半にケズリ、口縁～体部上半まで釉、体下半～底は露胎	密	内・外釉：緑色 露胎：淡黄灰色	底面に墨書
90－2	50	墓17	土師器	坏			5.1		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　1mm大の砂粒を含む	浅黄(2.5Y7/3)	
90－3	49	墓18	土師器	皿		(12.8)	5.6	3.1	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	淡黄橙(10YR8/4)	口縁端部 部分的沈線状にくぼむ
90－4	49	墓18	土師器	皿		13.0	5.6	3.1	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り、口縁端部凹面をもつ	密	にぶい橙	口縁端部に沈線
90－5	49	墓19	土師器	皿		11.6	5.6	3.1	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り	緻密	にぶい橙	
90－6	49	墓19	土師器	皿		11.9	5.8	2.8	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り	緻密	にぶい黄橙	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
91－1	56	4-P3610	須恵器	鉢		28.0			回転ナデ	回転ナデ	1㎜以下の白色粒子含む	灰白色(10YR7/1)	片口付
100－2	63	建物跡68 4-P2736	白磁	皿	皿E群	11.4	6.2	3.2	施釉	施釉	密	灰白色(5Y8/1)	
100－4	69	建物跡73 4-P2021 2層	朝鮮・青磁	皿			(5.6)		見込み 目跡 白土の象嵌した３条の圏線		密	オリーブ灰(10Y5/2)	
100－5	50	建物跡73 4-SK58	土師器	皿		(13.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	にぶい黄褐(10YR5/3)	内外面 煤のようなもの付着
100－6	54	建物跡72 4-SK51	瓦質土器	擂鉢	防長型	(24.7)			ハケ目、擂目（８条１単位）	ナデ	密	内：灰色(N5/0) 外：灰白色(5Y7/1)	口縁内側断面三角形の突帯貼り付け、口縁端部は1.3cm弱平坦面
100－7	52	建物跡74 4-P2267	瓦質土器	足鍋					ナデ	ナデ	やや粗　２㎜以下の砂粒やや多く含む	灰(N6/0)	
100－8	47	建物跡76 4-P1657	須恵器	高台付皿			7.6		回転ナデ	回転ナデ	密　１㎜以下の砂粒若干含む	灰白色(5Y7/1)	
100－9	57	建物跡76 4-P1669	備前	徳利	ＶＢ期	(4.0)	(7.6)		回転ナデ	体部上半 回転ナデ、体部下半 ケズリ	やや密　２㎜ほどの砂粒をわずかに含む	内：にぶい赤褐(5YR5/3) 外：灰(N6/0)	D107・D436と同一個体と思われる
101－1	55	柱列22 4-P1631	瓦質土器	甕		(30.0)			ハケ目	横ナデ、胴部 沈線	密　１～２㎜程度の砂粒をわずかに含む	灰(N6/0)	
101－2	59	柱列22 4-P1631	近世陶器 (肥前系)	碗		(11.4)			施釉	施釉	密	内・外釉:灰白色(10Y7/2) 破面：灰白色(7.5Y7/1)	
101－3	59	柱列22 4-P1608	近世陶器 (肥前系)	皿		11.7	5.0	3.1	施釉、見込み 胎土目跡３ヶ所	体部下半まで施釉、体部蛇状工具による沈線	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	釉：浅黄(5Y7/3) 露胎:浅黄(2.5Y7/3)	口縁部 波状
101－4	59	柱列22 4-P1631	近世陶器 (肥前系)	皿			(4.2)		回転ナデ後施釉、胎土目跡	体部回転ナデ、上半部に施釉	密	内・外釉：灰オリーブ(7.5Y6/2) 露胎：浅黄色(2.5Y7/3)	
101－5	59	柱列22 4-P1631	近世陶器 (肥前系)	瓶		(4.6)			施釉、頸部ハケ目？	施釉	密	内・外釉:灰白色(7.5Y8/1)	
101－6	59	柱列22 4-P1608	近世陶器 (肥前系)	鉢		(16.8)			施釉	施釉、底部露胎ケズリ	密	内・外釉:オリーブ黒(7.5Y3/2)～灰白(10Y7/1) 露胎：灰黄褐(10YR6/2)	
101－7	59	柱列22 4-P1610	近世陶器 (肥前系)	擂鉢			(10.4)		施釉、擂目	器面回転ナデ、底部回転糸切り、体部立ち上がり２ヶ所以上指でおさえたような跡	密	内釉：灰色(2.5Y7/1) 外：にぶい黄橙(10YR6/3)	
102－1	50	溝状遺構14	土師器	坏			(8.7)		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	にぶい黄橙(10YR7/4)	
102－2	52	溝状遺構14	瓦質土器	鍋	防長型ⅥB				摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	やや粗　１～２㎜の砂粒を含む	灰(N6/0)	
102－3	59	溝状遺構14	近世陶器 (肥前系)	皿		(10.8)			施釉	体部下半まで施釉	密	淡黄(2.5Y8/3)	
102－4	59	溝状遺構14	近世磁器 (肥前系)	皿		(13.8)			施釉、染付による花文様	施釉	密	灰白色(5YR8/2)	被熱している
102－5	70	溝状遺構14	瓦類	丸瓦					布目痕	ナデ	やや密　２㎜以下の砂礫混じる	灰(N5/0)	
103－1	54	溝状遺構15	瓦質土器	擂鉢	防長型	(31.6)			ナデ、擂目（６条１単位）	ナデ	密　１㎜程度の砂粒を含む	灰(N4/0)	
103－2	59	溝状遺構15	近世陶器 (肥前系)	皿			(4.2)		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密	青灰(10BG5/1)	
103－3	59	溝状遺構15	近世磁器 (肥前系)	碗			(5.3)		施釉	全面施釉、染付の文様	密	灰白色(7.5YR8/1)	
103－4	59	溝状遺構15	近世磁器 (肥前系)	皿			(5.3)		施釉、染付の文様	施釉、高台畳付 釉はぎとり	密	灰白色(10YR8/2)	
103－5	69	溝状遺構15	朝鮮・象嵌陶器	碗		(17.8)			施釉、口縁部 白土を象嵌した３条の圏線、体部白土と黒土を象嵌した同心円文	施釉、白土を象嵌した２条の圏線	密	灰白(7.5Y7/2)	
103－6	70	溝状遺構15	瓦類	平瓦					ナデ	ナデ	やや密　３㎜以下の礫まばらに含む	浅黄(2.5Y7/3)	二次的に被熱（煤付着）
108－1	52	墓27	土師器	鍋					ナデ	ナデ	１㎜以下の砂粒を含む.	内：淡黄(2.5Y8/3) 外：灰黄褐.(10YR6/2)	口縁端部 つまみ上げる 外面 薄く煤付着
110－4	57	墓31	備前	壺	ⅣA期				回転ナデ	回転ナデ	やや粗　１㎜以下の砂粒やや多く含む	内：灰黄褐(10YR5/2) 外：灰褐(7.5Y4/2)	
110－5	59	墓31	近世磁器 (肥前系)	皿			(5.0)		施釉、見込み 染付の文様	高台畳付以外 施釉	密	灰白色(7.5Y7/1)	
110－6	63	墓31	白磁	皿	ⅢE群	(11.8)			施釉	施釉	密	灰白色(5GY8/1)	
113－1	55	墓34	瓦質土器	甕					体部 ハケ目、底部 ナデ	ナデ	１㎜ほどの砂粒を含む	灰(N4/0)	
113－2	55	墓34	瓦質土器	甕					口縁部 横ナデ、体部 ナデ	口縁部 横ナデ、体部 ナデ	粗　２㎜以下の砂粒多く含む	灰(N6/0)	
113－3	54	墓35	瓦質土器	擂鉢			(12.8)		擂目（６条１単位）、使用により摩滅	ナデ	１～４㎜の砂粒を含む	灰白色(5Y8/1)	
116－1	70	4-SK26	瓦類	平瓦					ナデ	ナデ	密　２㎜以下の砂礫若干含む	オリーブ黒(10Y3/1)	
116－2	54	4-SK28	瓦質土器	擂鉢				(15.8)	ナデ、擂目（８条１単位）	ナデ、指押さえ、底部板状の圧痕	４㎜大の砂含む	内：橙(2.5YR6/6) 外：にぶい橙(2.5YR7/4)～褐灰(7.5YR7/4)	内外面かなり磨耗 炭素がおちている
116－3	59	4-SK28	近世陶器 (肥前系)	大皿				(7.4)	回転ナデ、施釉	胴部 回転ナデ 上半部一部施釉、高台底面 回転ケズリ	密	内・外釉：にぶい黄(2.5Y6/3) 露胎：にぶい黄橙(10YR6/3)	
116－4	55	4-SK30	瓦質土器	甕					口縁部 横ナデ、体部 ハケ目	口縁部 横ナデ、体部 ミガキ	密　１㎜以下の砂粒若干含む	灰(N4/0)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
116－5	59	4-SK31	近世陶器(肥前系)	甕		(20.0)			回転ナデ、同心円当て具痕	回転ナデ	密	内：赤褐色(10R4/3) 外：褐灰(10YR4/3)	
116－6	59	4-SK31	近世陶器(肥前系)	擂鉢		(28.4)			口縁部施釉、体部回転ナデ、擂目	口縁部施釉、体部回転ナデ	密	釉：黒(7.5Y2/1) 露胎：にぶい褐(7.5Y5/4)	
116－7	56	4-SK62	備前	擂鉢			(14.0)		回転ナデ、擂目（８条１単位）	回転ナデ、底部圧痕	やや粗　２mm以下の砂礫まばらに含む	内：褐灰(10YR4/1) 外：灰褐(7.5YR4/2)	
116－8	54	4-SK75	瓦質土器	擂鉢	防長型	(24.0)			横ナデ、ハケ目、擂目（７条１単位）	横ナデ、ナデ、ハケ目？	密	灰(N5/0)	
116－9	52	4-P1661	土師器	鍋	西長門型ａ				口縁 ナデ、体部 ハケ目後ナデ	ナデ	やや密　１mm以下の砂粒を多く含む	浅黄(5Y7/3)	
116－10	59	4-P1804	近世陶器(肥前系)	碗			5.0		施釉	施釉、高台底面釉なし	密	内・外釉：淡黄(5Y8/3) 破面：淡黄(5Y8/2)	
116－11	50	4-P1845	土師器	坏or皿類			5.4		回転ナデ	底部 回転糸切り	密　0.5mm以下の雲母含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	
116－12	53	4-P2166	瓦質土器	羽釜					ナデ	ナデ	粗　１mm以下、６mmの砂粒も含む	淡黄(5Y8/4)	
116－13	64	4-P2168	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳ×BⅡ類	(16.2)			施釉	蓮弁 輪郭線あり 弁盛り上がる 鎬は入らない	密	灰オリーブ(7.5Y5/3)	
116－14	50	4-P2170	土師器	坏			(7.0)		回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り	密	明黄褐(10YR7/6)	
116－15	50	4-P2173	土師器	坏		(13.7)			回転ナデ	回転ナデ	密　0.5mm以下の雲母含む	にぶい黄橙(10YR7/4)	
116－16	50	4-P2173	土師器	坏			5.3		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　１mm以下の雲母多く含む	にぶい黄橙(10YR6/4)	
116－17	62	4-P2546	白磁	碗	碗Ⅳ類	15.2			施釉	体部上半まで施釉	密	灰白色(7.5Y7/2)	
116－18	69	4-P2660	朝鮮・白磁	皿		(14.0)			施釉	施釉	密	灰白色(2.5GY8/1)	
116－19	50	4-P2663	土師器	皿		(12.1)	(5.1)	2.0	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	淡黄(2.5Y8/3)	
116－20	55	4-P2855	瓦質土器	火鉢		(28.2)			回転ナデ	回転ナデ、沈線文、スタンプ文	密	灰	
116－21	53	4-P2889	瓦質土器	湯釜					ナデ、ハケ目	ナデ	密	灰(N4/0)	体部下半 煤付着
116－22	50	4-P3197	土師器	皿			3.2		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒少し含む	にぶい橙(7.5YR7/4)	凸状の底部をもつ
116－23	50	4-P3324	土師器	皿		7.8	3.9	1.6	回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　１mm以下の砂粒わずかに含む	浅黄橙(10YR8/4)	
116－24	50	4-P3353	土師器	皿		7.6	(6.6)	0.8	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	にぶい橙(7.5YR7/4)	
116－25	52	4-P3391	瓦質土器	鍋	防長型ⅥB	(24.6)			ハケ目後ナデ	ナデ？	やや粗　１mm大の砂粒を多く含む	灰(5Y6/1)	外面 煤付着
116－26	50	4-P3409	土師器	坏		(14.0)	(6.0)	(4.9)	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	やや密　２mm以下の赤色粒含む	橙(5Y7/6)	
116－27	47	4-P3448	須恵器	蓋					回転ナデ後不定方向ナデ	回転ナデ	密　１mm以下の砂粒含む	灰(N6/0)	輪状つまみ
118－1	47	1K　２層	須恵器	坏蓋	古墳後期				回転ナデ	回転ナデ	密	灰(N6/0)	
118－2	47	12L　２層	須恵器	坏	古墳後期	(11.7)			回転ナデ	回転ナデ	密	灰(N6/0)	
118－3	47	12L	須恵器	高台付坏	奈良時代	12.0	8.0	4.8	回転ナデ	回転ナデ	やや粗　0.5mm以下の砂粒密に含む	灰(N6/0)	
118－4	47	12J、13J　２層	須恵器	高台付皿	奈良時代		(11.0)		回転ナデ、ナデ	回転ナデ	密	灰白色(10Y7/1)	
118－5	47	12K　２層	須恵器	瓶		(11.4)			回転ナデ	回転ナデ	密　１mm以下の砂粒少し含む	内：灰白色(10Y7/1) 外：灰白色(10Y8/1)	
118－6	47	4N　１層	須恵器	提瓶	古墳後期				回転ナデ、指頭圧痕	カキ目、粘土塊貼付による把手あり	密　0.5mm以下の砂粒少し含む	灰白色(N7/0)	
118－7	47	17H、26D　２層	須恵器	壺		18.0			回転ナデ	回転ナデ	密	青灰(5B6/1)	
118－8	47	26F　２層	須恵器	壺又は甕					回転ナデ	回転ナデ	密	灰白色(N7/0)	
118－9	47	5Q　２層	須恵器	壺又は甕					回転ナデ	回転ナデ	密	青灰(5PB5/1)	
118－10	47	7P　２層	須恵器	壺又は甕					回転ナデ	櫛描波状文	密	青灰(5B5/1)	
118－11	47	20H　２層	須恵器	壺又は甕					同心円当具痕後回転ナデ	回転ナデ	密	暗青灰(10BG4/1)	
118－12	47	24E　２層	須恵器	高台付壺？			(8.6)		回転ナデ	回転ナデ	密	灰白色(N7/0)	
118－13	47	13J　２層	須恵器	壺					ナデ	ハケ目後ナデ	１mmほどの砂粒を少し含む	青灰(10BG6/1)	
118－14	47	13J　２層	須恵器	甕					同心円当具痕	平行タタキ	密	灰(N6/0)	
118－15	47	19I　２層	須恵器	甕					同心円当具痕	平行タタキ	１mm以下の砂粒を含む	灰白(N7/0)	
118－16	47	11L　２層	須恵器	甕					放射状当具痕	平行タタキ	密	灰(N6/0)	
118－17	47	12K　２層	須恵器	甕					ナデ	平行タタキ	密	灰白(5Y7/1)	
118－18	47	19H　２層	須恵器	甕					ナデ	平行タタキ	密	青灰(5PB5/1)	
118－19	47	6P　２層	須恵器	甕					ナデ	平行タタキ	１～２mmの砂粒を少し含む	灰(N6/0)	
118－20	47	26E　２層	須恵器	甕					ナデ	格子目タタキ	１mm以下の砂粒を多く含む	青灰(5PB5/1)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
118－21	49	24E　2層	土師器	坏		14.0	5.8	4.5	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　1㎜以下の砂粒含む	橙(7.5YR7/6)	
118－22	51	6P　2層	土師器	坏		14.5			回転ナデ	回転ナデ	密　0.5㎜以下の砂粒含む	内：褐灰(10YR5/1) 外：にぶい黄橙(10YR7/3)	
118－23	51	18H　2層	土師器	坏			5.4		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	やや粗　1㎜以下の砂粒多く含む	浅黄橙(10YR8/4)	
118－24	51	5Q　2層	土師器	坏		13.1			回転ナデ	回転ナデ	密	浅黄橙(7.5YR8/6)	
118－25	51	19H	黒色土器	皿		(12.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	内：黒(10YR2/1) 外：橙(2.5YR2/1)	内面 黒色処理
118－26	51	1R8	土師器	坏			6.0		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　0.5㎜以下の砂粒含む	浅黄橙(7.5YR8/4)	
118－27	51	25E　2層	土師器	坏			6.6		回転ナデ	回転ナデ、底部 右回転糸切り	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	浅黄橙(10YR8/4)	
118－28	51	21H　2層	土師器	坏			6.7		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り（摩滅している）	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	灰白色(2.5Y8/2)	
118－29	51	16I　2層	土師器	坏			6.3		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	にぶい黄橙(10YR7/4)	
118－30	51	12J　2層	土師器	皿		11.4	6.2	2.6	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	浅黄橙(10YR8/4)	
118－31	51	13L	土師器	皿		8.8	4.6	1.6	回転ナデ	回転ナデか？	密	淡黄(2.5Y8/3)	
118－32	51	18H　2層	土師器	皿		(14.4)			回転ナデ	回転ナデ	密　1㎜ほどの砂粒を少し含む	内：暗灰黄(2.5Y5/2) 外：灰黄(2.5Y6/2)	
118－33	51	不明	土師器	皿		7.0			回転ナデ	回転ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒若干含む	灰白色(10YR8/2)	
118－34	51	15K	土師器	皿		7.7	5.8	0.9	回転ナデ	回転ナデ	密	浅黄橙(10YR8/3)	
118－35	51	6Q　2層	土師器	皿		7.0	5.6	1.2	回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密　1㎜以下の砂粒少し含む	浅黄橙(7.5YR8/4)	
118－36	51	5Q　2層	土師器	柱状高台皿			5.2		回転ナデ	回転ナデ、底部 回転糸切り	密	淡黄(5Y8/4)	
118－37	51	13K　2層	土師器	柱状高台皿			3.6		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	淡黄(5Y8/4)	底部 穿孔
118－38	51	6Q　2層	土師器	柱状高台皿			3.4		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	密	淡黄(5Y8/4)	底部 焼成後穿孔
118－39	51	20H	土師器	柱状高台皿			5.0			回転ナデ？	1㎜以下の砂粒を少し含む	淡黄(5Y8/3)	
118－40	51	11L　2層	土師器	柱状高台皿					摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	1㎜ほどの砂粒を多く含む	淡黄(2.5Y8/3)	底部 穿孔
118－41	51	不明	土師器	柱状高台皿			5.3			底部 回転糸切り	1㎜以下の砂粒を含む	淡黄(2.5Y8/3)	底部の両端 小さな穿孔
119－1	52	1区	土師器	鍋	西長門型a				ハケ目後ナデ	ナデ	1～3㎜の砂粒を含む	淡黄(2.5Y8/4)	口縁端部 肥厚 外面 煤付着
119－2	52	21H　2層	土師器	鍋					ナデ	口縁 ナデ、体部 ハケ目後ナデ	密　2㎜以下の砂粒少し含む	浅黄橙(10YR8/3)	外面 煤付着
119－3	52	25E　2層	土師器	鍋					ハケ目	ナデ	密	淡黄橙(10YR8/3)	外面 煤付着
119－4	52	25D　2層	土師器	鍋	西長門型a				ナデ	ナデ	やや密	にぶい橙	
119－5	52	25E　2層	土師器	鍋	西長門型b				ナデ	ナデ	やや粗　1.5㎜以下の砂粒やや多く含む	灰白色(2.5Y8/2)	外面 煤付着 口縁からやや下がったところに鍔状に突出
119－6	52	6O　2層	土師器	鍋	西長門型b	(30.0)			摩滅のため調整不明	ナデ	粗　2㎜以下の砂粒を多く含む	灰褐(7.5YR6/2)	口縁部下 鍔状に張り出した部分あり
119－7	52	25E　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ古				横方向ハケ目後横ナデ、横方向ハケ目	横ナデ、縦方向ハケ目	密　1㎜以下の石含む	灰(N5/0)	
119－8	52	22F　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ新				横方向のハケ目残すナデ	ナデ	密　1㎜以下の石含む	内：灰(N4/0) 外：灰(N5/0)	
119－9	52	7Q　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ新				横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	密　2㎜大の石含む	にぶい黄橙色	
119－10	52	6P　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ新	(30.9)			横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	やや粗　2㎜大の砂粒やや多く含む	内：褐灰(10YR5/1) 外：橙(2.5YR6/6)	
119－11	52	25E　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ新	(24.0)			横ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ	密　1㎜以下の石含む	浅黄色	外面 煤・炭化物付着
119－12	52	7P　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅲ新	26.6			ハケ目、口縁 ハケ目後ナデ	ナデ、タタキ目	やや粗　1㎜以下の砂粒多く含む	灰(N6/0)	
119－13	52	22H　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅳ	28.0			横ナデ、ハケ目	横ナデ、格子目タタキ	密　1㎜以下の石含む	灰	
119－14	52	20H　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅳ	30.0			ハケ目後横ナデ、ハケ目ナデ	横ナデ、ナデ、格子目タタキ	密　2㎜以下の石含む	灰(N6/0)	
119－15	52	20G、21G　2層	瓦質土器	鍋	防長型Ⅳ	21.8			ハケ目後ナデ	ナデ、タタキ目	粗　2㎜以下の砂粒多く含む	灰(N6/0)	口縁端部 つまみ下げる
119－16	52	17I	瓦質土器	鍋	防長型ⅥA新				摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	1㎜以下の砂粒を多く含む	灰白色(7.5Y8/1)	
119－17	52	25E　2層	瓦質土器	鍋	防長型ⅥA新	33.4			摩滅のため調整不明	ナデ	粗　5㎜以下の砂礫多く含む	内：オリーブ黒(10Y3/1) 外：灰黄褐色(10YR4/2)	外面 煤付着
119－18	52	22H　2層	瓦質土器	鍋	防長型ⅣB	(25.4)			ナデ	ナデ、ハケ目	やや粗　1㎜ほどの砂粒を多く含む	黄灰(2.5Y6/1)	
119－19	52	25D・26D　2層	瓦質土器	焙烙		(17.4)	(10.6)	(4.0)	回転ナデ、底面ハケ目	回転ナデ、底部板状の圧痕	密　2㎜大の石英含む	灰	口縁内側に断面三角形の突帯貼り付け肥厚
119－20	52	25E　2層	瓦質土器	足鍋						ナデ、指頭圧痕	やや密　1㎜以下の砂粒やや多く含む	暗灰(N3/0)	
119－21	52	21H	瓦質土器	足鍔						ナデ	密　1㎜以下の砂粒少し含む	灰白色(5Y8/2)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
119－22	52	21G　2層	瓦質土器	足鍋						ナデ	密　1㎜以下の砂粒少し含む	暗灰(N3/0)	
119－23	53	不明	瓦質土器	羽釜					横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	密　3㎜以下の石含む	灰(7.5Y6/1)	
119－24	53	12L　2層	瓦質土器	羽釜					ナデ	ナデ	やや粗　3㎜以下の砂粒若干含む	灰白色(7.5Y8/1)	
119－25	53	不明	瓦質土器	羽釜					ナデ	ナデ	1㎜以下の砂粒を少し含む	にぶい橙(7.5YR7/4)	
119－26	53	22H　2層	瓦質土器	湯釜		15.4			横ナデ、横方向ハケ目	ナデ、縦・横方向ハケ目	やや粗　2㎜以下の砂礫まばらに含む	灰(7.5Y6/1)	
119－27	53	14K　2層	瓦質土器	湯釜		(14.3)			横ナデ	横ナデ	やや粗　1.5㎜以下の砂礫多く含む	灰(5Y4/1)	
119－28	53	6P　2層	瓦質土器	湯釜		(13.6)			回転ナデ	回転ナデ	密	灰黄	
119－29	53	5P　2層	瓦質土器	湯釜		(13.8)			横ナデ	横ナデ	1㎜ほどの砂粒を少し含む	灰(5Y6/1)	
119－30	53	21F　2層	瓦質土器	湯釜					摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	やや粗　1㎜以下の砂礫多く含む	黄灰(2.5Y6/1)	
119－31	53	25F　2層	瓦質土器	湯釜					ハケ目、把手の裏側ナデ	ナデ	密	内：灰(N4/0) 外：黒(N2/0)	
119－32	53	12L　2層	瓦質土器	湯釜							密　2㎜大の砂粒を少し含む	灰白色(7.5YR8/2)	
119－33	53	25F　2層	瓦質土器	湯釜					ハケ目	ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒少し含む	灰(7.5Y6/1)	外面 炭化物付着
119－34	53	26E　2層	瓦質土器	湯釜					指でナデ押さえた跡、ハケ目	ナデ、格子目タタキ	密	灰	
120－1	53	25E	土師器	擂鉢		23.6			横方向ハケ目、擂目	ナデ、横・縦方向のハケ目	密　6㎜大の石を含む	灰白色	
120－2	53	7P　2層	土師器	擂鉢		(26.6)			ハケ目、擂目（5条1単位）	ハケ目、ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒若干含む	灰白色(2.5Y8/2)	
120－3	53	23F	土師器	鉢					ナデ？（摩滅のため不明瞭）	ナデ？（摩滅のため不明瞭）	粗　1㎜以下の砂粒を密に含む	灰白色(2.5Y8/2)	
120－4	53	26E　2層	土師器	擂鉢					ハケ目、擂目（5条1単位）	ナデ	やや粗　1㎜以下の砂粒多く含む	灰白色(2.5Y8/2)	
120－5	53	25D　2層	土師器	擂鉢					摩滅、擂目（5条1単位）	摩滅	やや粗　2㎜以下の石英粒などやや多く含む	にぶい褐	内面 コゲ付着
120－6	54	25D　2層	瓦質土器	鉢					ハケ目、ナデ	ナデ	やや密　1㎜大の砂粒含む	灰(N5/0)	口縁端部 凹線
120－7	54	6Q　2層	瓦質土器	鉢					ナデ	ナデ	やや粗　2㎜以下の砂礫まばらに含む	灰(N5/0)	
120－8	54	25E　2層	瓦質土器	擂鉢					ナデ、斜方向ハケ目、擂目（3条1単位）	ナデ、口縁端部凹面もつ 内側丸く肥厚	密　1㎜以下の砂粒少し含む	内：灰(N6/0) 外：灰(N4/0)	
120－9	54	16J　2層	瓦質土器	鉢	防長型				横方向ハケ目、ナデ	ナデ	密　1㎜以下の砂粒少し含む	暗灰(N3/0)	口縁部内側に折り返し断面三角形上に肥厚
120－10	54	5P　2層	瓦質土器	擂鉢	防長型				ハケ目、横ナデ、擂目（6条1単位）	横ナデ、ナデ	やや粗　3㎜以下の白色粒含む	内：灰(7.5Y6/1) 外：灰(N5/0)	口縁部内側 粘土を折り返し肥厚
120－11	54	22F　2層	瓦質土器	擂鉢	防長型	(36.0)			ナデ、ハケ目、擂目（7条1単位）	ナデ	やや密　1㎜ほどの砂粒を少し含む	灰(N5/0)	口縁 内側に折り返し肥厚 端部 幅1㎝ほど平坦面
120－12	54	23G　2層	瓦質土器	擂鉢	防長型	(31.0)			横ナデ、ハケ目、擂目（7条1単位）口縁部端面に1条の沈線	横ナデ	密　1㎜以下の砂粒少し含む	黒(N2/0)	口縁端部内側 粘土を折り返し丸く肥厚
120－13	54	21G　2層	瓦質土器	擂鉢	防長型	(26.4)			口縁 横ナデ、擂目（6条1単位）	ナデ	やや密　1㎜ほどの砂粒を少し含む	暗灰(N3/0)	口縁内側 粘土貼り付け断面三角形に厚く肥厚
120－14	54	7P　2層	瓦質土器	擂鉢	防長型	(33.2)			横ナデ、ハケ目、擂目（5条以上）	横ナデ、ナデ	密　2～3㎜程度の砂粒をわずかに含む	内：オリーブ黒(5Y3/1) 外：灰(5Y6/1)	口縁端部内側 断面台形 粘土を貼り付け肥厚、端部上面 幅広の平坦面
120－15	54	7P　2層	瓦質土器	擂鉢			(17.2)		ナデ、擂目（8条1単位）	ナデ	やや粗　2㎜以下の砂礫まばらに含む	灰白色(7.5Y7/1)	
120－16	55	4R　2層	瓦質土器	甕					ナデ	ナデ	密	黒(10Y2/1)	
120－17	55	13J　2層	瓦質土器	甕					ハケ目後ナデ	ナデ、体部 2条の沈線	密　1㎜以下の砂粒少し含む	灰(10Y6/1)	
120－18	55	7Q　2層	瓦質土器	甕					横ナデ	ハケ目後横ナデ	やや粗　1㎜以下の砂粒やや多く含む	灰(N4/0)	
120－19	55	26D　2層	瓦質土器	甕					ナデ	ナデ、肩部 突帯もしくは段あり	密	灰(N4/0)	
120－20	55	8P　2層	土師器	甕					ナデ	平行タタキ	粗　1㎜以下の砂粒密に含む	橙(5YR7/6)	
120－21	55	9L　2層	瓦質土器	香炉？					横ナデ	ナデ、沈線間に花形のスタンプ文	やや粗　2㎜以下の砂粒少し含む	灰(N5/0)	
121－1	55	16J　2層	瓦質土器	火鉢		31.4			横ナデ	横ナデ、口縁 刺突文	1㎜以下の砂粒を多く含む	灰(N5/0)	
121－2	55	22G　2層	瓦質土器	火鉢		37.2			口縁：横ナデ、体部 ハケ目	横ナデ、肩部 3条の沈線	やや粗　2㎜以下の砂粒やや多く含む	灰(N6/0)	甕形火鉢
121－3	55	7P　2層	瓦質土器	火鉢		(31.6)			横ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ、口縁部沈線1条、胴部沈線 4条	やや粗　1～2㎜程度の砂粒を含む	灰	口縁端部平坦面もつ
121－4	55	7P　2層	瓦質土器	火鉢		(35.2)			回転ナデ、ハケ目	回転ナデ、沈線4条	密　1㎜以下の砂粒を含む	灰	口縁端部平坦面もつ
121－5	55	26D　2層	瓦質土器	火鉢		(27.4)			ナデ	沈線と突線の間 連続する菱形文	密	灰(N5/0)	
121－6	55	12L　2層	瓦質土器	火鉢		(41.4)			ナデ	ナデ、突帯下 花形スタンプ文	密	灰(N5/0)	深型火鉢
121－7	55	12I　2層	瓦質土器	火鉢					ハケ目後ナデ	2条の突帯の間 花形スタンプ文	1㎜以下の砂粒を含む	灰白色(5Y8/1)	
121－8	55	25E　2層	瓦質土器	火鉢			(38.2)			1条の突帯	2㎜ほどの砂粒を少し含む	青灰(5B5/1)	
121－9	55	7P　2層	瓦質土器	火鉢					ナデ	ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒まばらに含む	灰(N6/0)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
121－10	55	21G　2層	瓦質土器	火鉢					ハケ目	ナデ	密　1㎜以下の砂粒少し含む	灰(N6/0)	内面 煤付着
122－1	56	12K　2層	中世須恵器(東播系)	鉢		(27.2)			回転ナデ後ナデ	回転ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒混じる	灰(N6/0)	
122－2	56	12K　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	2㎜ほどの砂粒を少し含む	灰(N6/0)	
122－3	56	5Q　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					回転ナデ	回転ナデ	密	灰(N5/0)	
122－4	56	22F　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					回転ナデ	回転ナデ	やや粗　1㎜未満の砂粒多く含む	灰(N6/0)	
122－5	56	20G　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					回転ナデ	回転ナデ	1㎜以下の砂粒を多く含む	灰白色(10Y7/1)	
122－6	56	23F	中世須恵器(東播系)	鉢					回転ナデ	回転ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒若干含む	灰(N6/0)	片口付
122－7	56	19H　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					回転ナデ	回転ナデ	密	青灰(5BG6/1)	
122－8	56	6Q　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					使用により磨耗	ナデ、底部回転糸切り	やや密　1㎜以下の砂粒を多く含む	青灰(5PB6/1)	
122－9	56	26D　2層	中世須恵器(東播系)	鉢					使用により磨耗	ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒を少し含む	灰白色(N7/1)	
122－10	58	26E　2層	瓷器系陶器(常滑系)	甕					横ナデ	横ナデ	1㎜以下の白色粒子を含む	灰(7.5Y6/1)	
122－11	58	7O　2層	瓷器系陶器(常滑系)	甕					ナデ	肩部 施釉 4条の櫛描沈線が2段巡る	やや粗　2㎜以下の砂粒やや多く含む	内：灰黄褐(10YR5/2) 外：褐(7.5YR4/3) 外釉：灰オリーブ(7.5Y4/2)	
122－12	56	12K	陶器(備前)	擂鉢	ⅣA期				回転ナデ、擂目（7条1単位）	回転ナデ	やや粗　1.5㎜以下の砂礫多く含む	内：青灰(5PB5/1) 外：(10R5/1)	
122－13	56	22H　2層	陶器(備前)	擂鉢	ⅣA期				回転ナデ、擂目（1単位6条以上）	回転ナデ	粗　2㎜ほどの砂粒を多く含む	内：灰(2.5YR6/1) 外：にぶい赤褐(2.5YR5/4)	
122－14	56	26E　2層	陶器(備前)	擂鉢	ⅣA期				回転ナデ、擂目（7条1単位）	回転ナデ	密	内：青灰(5PB5/1) 外：赤灰(5R5/1)	
122－15	56	13K　2層	陶器(備前)	擂鉢	ⅣB－2期				回転ナデ、擂目（1単位5条以上）	回転ナデ	1㎜ほどの砂粒を多く含む	内：灰褐(7.5YR5/1) 外：褐灰(10YR5/1)	
122－16	56	22H　2層	陶器(備前)	擂鉢	ⅣB－1期				回転ナデ、擂目（5条1単位）	回転ナデ	1㎜以下の砂粒を多く含む	内：にぶい橙(2.5YR6/3) 外：褐灰(10YR6/1)	
122－17	56	20I　2層	陶器(備前)	擂鉢	ⅣB－2期	24.6			回転ナデ、擂目（1単位8条以上）	回転ナデ	3㎜大の砂粒を多く含む	灰白	
122－18	56	21G	陶器(備前)	擂鉢	ⅤA期				回転ナデ	回転ナデ	密　1.5㎜以下の砂礫少し含む	内：灰赤(2.5YR5/2) 外：橙(2.5YR6/6)	
122－19	56	15J　2層	陶器(備前)	擂鉢	ⅣB－3期	(29.0)			回転ナデ、擂目（5条1単位）	回転ナデ	1㎜大の砂粒を多く含む	内：青灰(5PB6/1) 外：黄灰(2.5Y5/1)	
122－20	56	25D	陶器(備前)	擂鉢	ⅣB－3期	(31.8)			回転ナデ、擂目（6条1単位）	回転ナデ	密	内：にぶい赤褐(5YR4/3) ～にぶい赤褐(2.5YR5/4) 外：にぶい赤褐(5YR4/3) ～にぶい赤褐(2.5YR5/4)	
122－21	56	13J　2層	陶器(備前)	擂鉢	Ⅵ期				回転ナデ	回転ナデ、口縁　2条の凹線	やや密　1㎜以下の砂粒を若干含む	内：赤褐(10R5/3) 外：灰赤(7.5Y5/2)	
122－22	56	12K　1層	陶器(備前)	擂鉢	ⅤB期				回転ナデ	回転ナデ、2条の凹線	密	内：灰褐(7.5YR6/2) 外：にぶい赤褐(5YR5/3)	
122－23	56	22H　2層	陶器(備前)	擂鉢			(15.0)		擂目（8条1単位：幅2.4cm）	回転ナデ、ナデ	密	内：青灰(5PB6/1) 外：(5Y7/1)	
122－24	58	9M　2層	陶器（備前系）	擂鉢					回転ナデ、擂目（6条1単位）	回転ナデ	1㎜以下の砂粒を含む	褐灰(7.5YR4/1)	備前ⅣA期のものと形態が似るが胎土が異なる
122－25	58	11L　2層	陶器（備前系）	擂鉢					回転ナデ、擂目（7条1単位）	回転ナデ	1～2㎜の砂粒を含む	褐灰(7.5YR4/1)	備前と似るが胎土異なる
122－26	58	1区不明表土	陶器（備前系）	擂鉢					擂目（7条1単位）	回転ナデ	1㎜以下の砂粒含む	褐灰(7.5YR4/1)	備前と似るが胎土異なる
122－27	57	26F　2層	陶器(備前)	壷	Ⅲ期	(12.2)			回転ナデ	回転ナデ、波状文	粗　2㎜以下の砂粒を多く含む	内：暗青灰(5PB4/1) 外：褐灰(7.5YR5/1)	
122－28	57	25E　2層	陶器(備前)	壷	Ⅲ期				回転ナデ	回転ナデ	密	黄灰(2.5Y5/1)	
122－29	57	25D　2層	陶器(備前)	壷			(13.0)		回転ナデ	回転ナデ	粗　1～2㎜大の砂粒を多く含む	内：青灰(5PB6/1) 外：褐灰(10YR5/1)	
122－30	57	4P　2層	陶器(備前)	壷			(8.0)		回転ナデ	回転ナデ	密	青灰	
122－31	57	13J　2層	陶器(備前)	壷			(15.6)		回転ナデ	ナデ	1㎜以下の白砂粒を多く含む	内：赤灰(2.5YR5/1) 外：褐灰(10YR5/1)	
122－32	57	7P　2層	陶器(備前)	甕			(21.4)		回転ナデ	回転ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒まばらに含む	内：灰(N5/0) 外：灰(N5/0)	
122－33	57	5C	陶器(備前)	茶入					回転ナデ	回転ナデ	密　1㎜以下の砂粒を少し含む	内：褐灰(5YR5/1) 外：灰褐(5YR5/1)	
122－34	58	6P　2層	陶器(古瀬戸)	平碗	古瀬戸後期Ⅲ	18.0			施釉（灰釉）	体部下半まで施釉（灰釉）	密	浅黄(5Y7/3)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
122－35	58	5P　2層	陶器(瀬戸)	丸碗	大窯４期前半		(4.1)		施釉（褐釉）	施釉(褐釉)、回転ナデ	やや密　1㎜ほどの砂粒を少し含む	釉：褐(10YR4/4) 露胎：淺黄橙(10YR8/4)	
122－36	58	8P	陶器(瀬戸)	端反皿	大窯１期				施釉（灰釉）	施釉（灰釉）	密	浅黄(7.5Y7/3)	
122－37	58	8M　2層	陶器(瀬戸)	折縁皿	大窯４期前半				施釉（灰釉）	施釉（灰釉）	密	淡黄(5Y8/4)	
122－38	58	6Q　2層	陶器(瀬戸)	丸皿	大窯３期後半		6.6		施釉（灰釉）、見込み 釉はぎとり	施釉（灰釉）	密	灰白色(5Y8/2)	
122－39	58	6P、6Q 2層	陶器(瀬戸)	丸皿	大窯３期後半	(11.6)	(7.0)	1.9	施釉（灰釉）、内禿	施釉（灰釉）	やや粗	淡黄(5Y8/4)	
122－40	58	22H　1層	陶器(瀬戸)	皿	大窯３期後半	(10.2)	(7.2)	1.7	施釉（褐釉）、内禿	施釉（褐釉）	密	内・外釉：一部黒褐を含む茶褐色 露胎：灰白色	口縁部 輪花
122－41	58	5P　2層	陶器(瀬戸)	天目茶碗	古瀬戸後期Ⅰ	(13.2)			施釉	口縁～体部中ほどに施釉	密	内・外釉：暗褐色 露胎：灰白色	
122－42	58	23F　2層	陶器(瀬戸)	天目茶碗	古瀬戸後期Ⅱ		3.6		施釉（褐釉）	施釉（サビ釉）	やや粗	内釉：褐(2.5Y2/1) 外サビ：灰褐(7.5Y4/2)	
122－43	58	26E　2層	陶器(瀬戸)	天目茶碗	大窯４期前半	11.6			施釉	体部上半 施釉	密	釉：褐(7.5YR4/4) 露胎：黄(2.5Y8/6)	
122－44	58	11K　2層	陶器(瀬戸)	小天目	大窯４期前半		2.8		施釉（灰釉）	体部下半まで施釉（灰釉）	密	灰白色(2.5Y8/1)	
122－45	58	8N　2層	陶器(瀬戸)	小天目	大窯４期前半		2.5		施釉（褐釉）	体部上半 施釉（褐釉）	密	釉：黒褐(10YR2/2) 露胎：灰白色(2.5Y8/2)	
122－46	59	9N　2層	近世陶器(肥前系)	碗		(9.5)			施釉	施釉、口縁部 2条の沈線花形スタンプ文、体部 円形スタンプ文を施し白土を埋め込んだ象嵌文様	密	にぶい黄褐(10YR5/3)	
122－47	59	7P　2層	近世陶器(肥前系)	碗			5.1		全面施釉	体部下半まで施釉	やや粗　0.5㎜以下の砂粒多く含む	釉：浅黄(7.5Y7/3) 露胎：浅黄(2.5Y7/3)	
122－48	59	5P　2層	近世陶器(肥前系)	皿		(14.6)	5.6	4.1	全面施釉、鉄絵	体部下半まで施釉	やや密　0.5㎜以下の砂粒多く含む	釉：オリーブ黄(7.5YR6/3) 露胎：オリーブ黄(2.5YR6/4)	見込みに胎土目跡あり
122－49	59	22H、22G 2層	近世陶器(肥前系)	皿		11.5	5.0	3.7	全面施釉	高台外側まで施釉	やや粗　1㎜以下の砂粒多く含む	釉：浅黄(7.5Y7/3) 露胎：淡黄(2.5Y8/3)	見込みに胎土目跡あり
122－50	59	11K　2層	近世陶器(肥前系)	皿		(11.8)	(4.4)	(3.0)	全面施釉	体部途中まで施釉	やや粗　1㎜以下の砂粒を多く含む	灰オリーブ(5Y6/2)	二次的に被熱
122－51	59	25D　2層	近世陶器(肥前系)	皿			4.6		全面施釉	体部下半露胎	密	釉：にぶい黄橙(10YR7/3) 露胎：淡黄(2.5Y8/4)	見込みに砂目痕あり
122－52	59	4P　2層	近世陶器(肥前系)	大皿			(10.0)		全面施釉		密	淡黄(2.5Y8/4)	内面 胎土目跡残る
123－1	63	6Q　2層	白磁	碗	碗Ⅱ類				施釉	施釉	密	釉：淡黄(5Y8/3)	口縁部 小さな玉縁状
123－2	63	24F	白磁	碗	碗Ⅱ類				施釉	施釉	密	釉：灰白色(7.5Y7/2)	
123－3	63	7P　2層	白磁	碗	碗Ⅱ類		4.9		施釉		密	灰白色(5GY8/1)	
123－4	63	6O　3層	白磁	碗	碗Ⅳ－ｂ類	17.4			施釉	体部上半まで施釉	密	灰白色(10Y8/1)	
123－5	63	8O　2層	白磁	碗	碗Ⅳ類	16.0			施釉	施釉	密	釉：灰白色(2.5Y7/1)	玉縁状の口縁
123－6	63	11K　2層	白磁	碗	碗Ⅳ類	(15.5)			施釉	体部途中まで施釉	密	釉：灰白色(10Y7/2)	玉縁状の口縁部
123－7	63	15J　2層	白磁	碗	碗Ⅳ類	14.8			施釉	施釉	密	灰白色(7.5Y7/2)	
123－8	63	7P　2層	白磁	碗	碗Ⅳ－1a類		(6.4)		施釉、底部 沈線		密	灰白色(10YR8/1)	
123－9	63	13L　2層	白磁	碗	碗Ⅳ－1a類		7.4		施釉、底部 1条の沈線	体部下半まで施釉	密	灰白色(10Y8/1)	
123－10	63	26E　2層	白磁	碗	碗Ⅳ－1a類		8.0		施釉、底部 1条の沈線	体部下位まで施釉	1㎜以下の砂粒を多く含む	灰白色(5YR8/2)	
123－11	62・63	12L　2層	白磁	碗	碗Ⅴ－2b類	16.4			施釉	施釉、縦方向の篦描沈線文	密	釉：灰白色(7.5Y7/1)	
123－12	62・63	12K　2層	白磁	碗	碗Ⅴ－2b類	14.8			施釉	施釉、縦方向の篦描沈線文	密	釉：灰白色(7.5YR8/1)	外反口縁
123－13	63	6P　2層	白磁	碗	碗Ⅴ類		(5.9)		施釉	施釉	密	釉：灰白色(7.5Y8/1)	
123－14	62・63	11K　2層	白磁	碗	碗Ⅴ－４類		6.3		施釉、内面 櫛目	体部下位まで施釉	1㎜以下の砂粒を少し含む	釉：灰白色(5Y8/2)	
123－15	63	12K　2層	白磁	碗	碗Ⅷ類？		5.6		施釉、見込み 環状に釉はぎとり		密	灰白色(2.5Y8/2)	被熱している
123－16	63	8M	白磁	碗	碗Ⅷ－１類		6.4		施釉、見込み 環状に釉かきとる		密	灰白色(2.5Y8/1)	
123－17	63	23G	白磁	碗	碗Ⅴ×Ⅵ類		5.8		施釉	体部下位まで施釉	密	明オリーブ灰(5GY7/1)	
123－18	63	6P　2層	白磁	碗	碗 Ⅷ-2×3類		6.3		施釉、見込み 環状に釉はぎとり	体部下半まで施釉	密	釉：灰白色(10Y8/2)	
123－19	63	12K　2層	白磁	碗	碗 Ⅷ-2×3類		6.7		施釉、見込み 環状に釉はぎとり 段がつく		密	灰白色(7.5YR8/2)	
123－20	63	15I　2層	白磁	碗		15.8			施釉	施釉	密	灰白色(10Y7/1)	外反口縁
123－21	63	6O　2層	白磁	碗	碗Ⅹ Ⅱ類		(5.0)		施釉、見込み 外周に段がつく	体部上半まで施釉	密	灰白色(7.5Y8/2)	
123－22	63	5R　2層	白磁	浅形碗		15.2			施釉	体部下位まで施釉	密	釉：灰白色(2.5Y8/1)	広東系
123－23	62・63	9N　2層	白磁	碗					施釉、櫛状工具によるジグザグ文様、二又片刀による沈線	施釉	密	灰白色(7.5Y7/2)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
123－24	63	5O	白磁	小碗	広東系(C期)		3.0		施釉	施釉	密	灰白色(7.5Y8/1)	
123－25	63	7Q　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅡ類	(8.2)			施釉	施釉、回転ナデ	密	内･外釉:オリーブがかった灰白色 露胎：灰白色	
123－26	63	17J　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅢ－１類	10.6			施釉、底部 釉はぎとり	体部途中まで施釉	密	釉：灰白色(10Y8/1)	
123－27	63	12K　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅢ－１類		5.2		施釉、見込み 環状に釉はぎとり	体部下半まで施釉	密	灰白色(2.5Y8/1)	
123－28	63	15J　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅢ－１類		4.9		施釉、見込み 環状に釉はぎとり	体部下位まで施釉	密	灰白色(7.5Y8/1)	
123－29	63	6O　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅢ－１類		(3.8)		施釉、見込み 環状に釉かきとり	体部下位まで施釉	密	灰白色(2.5GY8/1)	
123－30	63	10M　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅢ－２類		5.1		施釉､見込み １条の沈線	体部下位まで施釉	密	灰白色(10Y8/1)	
123－31	63	18H　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅥ類		3.2		施釉		密	灰白色(5Y8/2)	
123－32	63	11K　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅥ－1b類		4.0		施釉	体部下位まで施釉 底部施釉されず	密	灰白色(2.5Y8/1)	
123－33	63	14K　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅨ－1b類	10.2	6.5	2.8	施釉､口縁部 釉はぎとり	全面施釉	密	釉：灰白色(10Y7/1)	
123－34	63	12K　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅨ類	11.2			施釉、口縁端部 釉はぎとり	施釉	密	釉：灰白色(10Y8/2)	
123－35	63	19I　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅨ－ｂ類				施釉、口縁端部 釉はぎとり	施釉	密	灰白色(2.5GY8/1)	
123－36	63	24E　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅨ類				施釉、口縁端部 釉はぎとり	施釉	密	釉：灰白色(10Y8/1)	
123－37	63	8N　2層	白磁	Ⅲ	ⅢⅨ－３類		4.2		施釉､見込み １条の沈線	体部下位まで施釉	密	灰白色(2.5GY8/1)	
123－38	63	19G　2層	白磁	Ⅲ			5.2		施釉	体部下半まで施釉	密	釉：灰白色(7.5Y7/2) 露胎：淡黄(2.5Y8/3)	
123－39	62	10M　2層	白磁	四耳壷	壷Ⅲ類	11.4			施釉	施釉	密	灰(10Y6/1)	
123－40	62	21H	白磁	水注 把手	水注Ⅲ類				施釉	施釉	密	灰白色(7.5Y7/1)	
123－41	62	16I	青白磁	合子 身					体部 施釉、口縁部 露胎	体部 施釉、口縁部 露胎、側面 菊弁文	密	明緑灰(10GY8/1)	
123－42	62	13K　2層	青白磁	合子 蓋		(7.2)		(2.0)		側面 菊弁文、口縁部 縁あり	密	灰白色(7.5Y7/2)	
123－43	62･63	11K　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＢ群		5.1		施釉、見込み 花弁状のくぼみ文様	高台外面まで施釉	密	灰白色(5GY8/1)	
123－44	63	4P　2層	白磁	碗	Ｆ～Ｇ期		6.7		施釉、見込み 環状に釉かきとり	体部下位まで施釉	密	灰白色(5Y8/2)	
123－45	63	4P 1－2層	白磁	碗	碗Ｃ群		(5.2)		施釉	体部上半まで施釉	密	釉：灰白色(7.5Y7/2) 露胎：灰白色(7.5Y8/1)	
123－46	63	26E　2層	白磁	碗	碗Ｃ群				施釉	施釉	密	釉：灰白色(10Y7/1)	
123－47	63	10L	白磁	坏	坏Ｄ群		3.6		施釉	体部上半まで施釉	密	灰白色(10YR8/1)	八角坏
123－48	63	6N　2層	白磁	坏	坏Ｄ群		(5.4)		施釉		密	白色	円盤高台
123－49	63	7P　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＤ群		(4.2)		施釉、重ね焼きの痕跡	体部下半まで施釉	密	灰白色(7.5Y8/1)	高台に孤状のえぐり入る
123－50	63	25E　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＤ類	10.8			施釉	体部上半 施釉	密	灰白色(2.5Y8/2)	
123－51	63	21H	白磁	Ⅲ	ⅢＤ群		3.1		施釉	体部下半まで施釉	密	釉：灰白色(5Y8/2)	
123－52	62	5P　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＤ群		4.1		施釉	体部下位まで施釉	密	灰白色(5Y8/1)	高台内側 墨書「大」朱書「中」の文字
123－53	63	11M　2層	白磁	坏	坏Ｅ群	8.4		3.4	施釉	施釉	密	灰白色(5GY8/1)	
123－54	63	不明	白磁	坏	坏Ｅ群				施釉	施釉	密	灰白色(5GY8/1)	口縁部 稜花
123－55	63	6P　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＥ群	(11.6)	(6.9)		施釉	施釉	密	釉：灰白色(10Y8/1)	
123－56	63	26E　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＥ群	12.0			施釉	施釉	密	釉：灰白色(7.5Y8/1)	
123－57	63	12L　2層	白磁	Ⅲ	ⅢＥ群		2.6		施釉、見込み 環状に釉はぎとり	施釉、縦方向の沈線	密	灰白色(5YR8/1)	菊Ⅲ
123－58	63	11M	白磁	Ⅲ	ⅢＥ群	(7.8)	(2.4)	2.4	施釉、見込み 環状に釉かきとり	高台内外除く全面 施釉、縦方向の沈線で花弁を表現	密	白色	菊Ⅲ
123－59	63	26F　1層	白磁	碗or Ⅲ			(4.5)		施釉、見込み 花弁状の文様	体部～高台外面まで施釉	密	釉：灰白色(5Y8/2)	底部外面 篦描「×」印(焼成後)
124－1	64･65	12J　2層	青磁（同安窯系）	碗	碗Ⅲ－２類		(6.4)		施釉、見込みの蛇目釉はぎ	施釉、回転ヘラケズリ	密	内・外釉：灰オリーブ(7.5Y5/3) 露胎：灰黄(2.5Y7/2)	
124－2	64･65	25E	青磁（同安窯系）	碗	碗Ⅲ－２類		(5.6)		施釉、見込み 釉はぎとり 櫛状工具による施文	体部下位まで施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－3	64･65	25E　2層	青磁（同安窯系）	碗	碗Ⅰ－1b類		5.3		施釉	体部下半 施釉されず、体部 縦方向の櫛目文	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2) 露胎：灰白色(5Y7/1)	
124－4	66	12J　2層	青磁（同安窯系）	Ⅲ	ⅢⅠ－1a類	(10.1)	(5.2)	1.8	施釉	体部上半 施釉	密	釉：明オリーブ灰(5GY7/1) 露胎：灰白色(5Y7/1)	
124－5	66	6P	青磁（同安窯系）	Ⅲ	ⅢⅠ－1b類		5.0		施釉、篦による文様 櫛状工具によるジグザグ状文様	体部上半 施釉	密	釉：明オリーブ灰(5GY7/1) 露胎：灰白色(7.5Y7/1)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
124－6	66	7O　2層	青磁（同安窯系）	皿	皿Ⅰ－2b類		(5.4)		施釉、見込み 箆による文様 櫛状工具によるジグザグ状の文様	体部下位まで施釉、底面 露胎	密	釉：オリーブ灰(5GY6/1) 露胎：灰白色(5Y7/1)	
124－7	64・65	5Q　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ－4b類	(16.6)			施釉、二又片刀による分割施文 飛文文	施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	口縁端部 輪花
124－8	64	7P　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅱb類	16.8			施釉	施釉、鎬蓮弁文	密	釉：灰オリーブ(7.5Y6/2)	
124－9	64	12L　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅱb類				施釉	施釉、鎬蓮弁文	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－10	64・65	13N　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ－2類		6.0		施釉、見込み 片彫の花文	体部～高台畳付まで施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－11	64・65	6Q　1層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ-2～4類		(5.9)		施釉、見込み 片切彫の蓮花文	高台内側まで施釉	密	釉：灰オリーブ(7.5Y6/2)	
124－12	64・65	26F　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ-2～4類		5.6		施釉、片彫の文様	高台外側まで施釉	密	釉：オリーブ黄(5Y6/3)	
124－13	64・65	5Q　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ-2～4類		6.0		施釉、片切彫による文様	高台外側まで施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－14	64・65	6P　1層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ-2～4類		6.0		施釉、見込み 片切彫による文様	高台外側まで施釉	密	釉：明オリーブ灰(2.5GY7/1) 露胎：明オリーブ灰(5Y7/1)	
124－15	64・65	26F　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗ⅡC類		5.2		施釉、見込みに印花文	高台外側まで施釉	密	釉：明オリーブ灰(2.5GY7/1)	
124－16	64	26D　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ×Ⅱ		5.4		施釉	高台外側まで施釉	密	釉：オリーブ灰(5GY6/1)	
124－17	64	5Q　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅰ×Ⅱ		5.0		施釉	高台内側まで施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－18	64	25E　2層	青磁（龍泉窯系）	小碗	小碗Ⅰ×Ⅱ		4.4		施釉	高台外側まで施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y5/2) 露胎：灰白色(10Y7/1)	
124－19	64・65	25D　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅲ－2	14.0			施釉、片彫の草花文	施釉、鎬蓮弁文	密	オリーブ灰(10Y6/2)	
124－20	64・65	4区	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳイ		4.8		全面施釉、見込み 印花文	高台外側まで施釉	密	釉：明オリーブ灰(2.5GY7/1) 露胎：青灰(5B6/1)	
124－21	64・65	25E	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳイ		(5.6)		施釉、見込み 印刻による文様	体部～高台外 施釉 畳付～内側 施釉されず	密	内・外釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－22	64	25F　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳ×DⅡ	16.0			施釉	施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－23	64	11L　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳ×DⅡ	16.0			施釉	施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－24	64	7Q　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳ～DⅡ	14.4			施釉	施釉	密	釉：灰オリーブ(10Y6/2)	
124－25	64	5P　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳ×BⅡ		4.6		施釉	施釉、体部 沈線による運弁文	やや密	釉：明オリーブ灰(5GY7/1)	
124－26	64	25E　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗CⅡ	(15.2)			施釉	施釉、口縁部 雷文帯	密	釉：灰白色(10Y7/2)	
124－27	64	26F　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗BⅣ	14.4			施釉	施釉、細い線描の運弁文	密	黄(5Y7/6)	
124－28	64	21F、21H　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗E		(4.6)		施釉	高台外側まで施釉	やや粗	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－29	64・65	25E　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	碗Ⅳ		(5.6)		施釉、見込み 印文文	高台外側まで施釉	密	釉：明オリーブ灰(5GY7/1)	
124－30	64・65	25D	青磁（龍泉窯系）	碗	H期～		6.0		施釉、体部内面見込み印花文様	全面施釉後外底釉を輪状に削り取る	密	内・外釉：灰オリーブ(7.5Y6/2)	
124－31	64・65	25E	青磁（龍泉窯系）	碗	H期～		(6.6)		施釉、見込み 草花文の印刻	施釉	密	緑色	
124－32	64・65	6N　2層	青磁（龍泉窯系）	碗	H期～		(4.9)		施釉、見込み中央 円形に釉はぎとり	体部～高台畳付まで施釉	やや密	釉：灰オリーブ(7.5Y5/3) 露胎：灰白色(7.5Y8/1)	
124－33	65	10M	青磁（龍泉窯系）	碗（転用品）					施釉		密	明灰オリーブ(2.5GY7/1)	青磁碗底部外周を削り再加工・転用、側縁 筋状工具痕顕著 中央に穿が形成
124－34	66	15I	青磁（龍泉窯系）	坏	坏Ⅲ－3a類	(13.0)			施釉	施釉	密	緑灰(7.5/N5GY6/1)	
124－35	66	20I	青磁（龍泉窯系）	坏	坏Ⅲ類		(5.4)		見込み 魚の貼付文		密	緑灰(7.5Y6/1)	
124－36	66	5R　2層	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅰ類	12.0			施釉	施釉	密	釉：明オリーブ灰(5GY8/1)	
124－37	66	5Q　2層	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅰ類				施釉	施釉	密	釉：オリーブ灰(10Y6/2)	
124－38	66	11K　2層	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅰ－1b類		4.1		施釉	体部 施釉、底部 露胎	密	釉：灰オリーブ(10Y5/2) 露胎：灰白(2.5Y8/2)	内面片彫の花文
124－39	66	26F	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅳ類～	(13.2)			施釉	施釉	密	内・外釉：明オリーブ灰(5GY7/1)	
124－40	66	13K　2層	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅳ類～	(12.0)			施釉	施釉	密	釉：灰オリーブ(7.5Y6/2)	
124－41	66	26E　2層	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅳ類～(G期)		(4.7)		施釉、見込み 円形に釉かきとり	体部～高台外面に施釉	密	オリーブ灰(10Y7/2)	
124－42	66	6P　2層	青磁（龍泉窯系）	皿	皿Ⅳ類～		4.0		施釉、見込み 円形に釉はぎとり	体部～高台外面に施釉	密	釉：灰オリーブ(7.5Y6/2)	
124－43	66	7P　2層	青磁（龍泉窯系）	稜花皿	J期	(11.0)	(5.2)	3.2	全面施釉、口縁 2条の沈線	高台内側まで施釉	密	灰白色(10Y7/1)	
124－44	65	8M	青磁（龍泉窯系）	小壺	G期～	5.2			施釉、口縁端部 釉かきとり	施釉、口縁端部 釉かきとり、肩部 2条の沈線、胴部 運弁状の文様	密	オリーブ灰(10Y7/2)	
124－45	65	5N　2層	青磁（龍泉窯系）	香炉					施釉	施釉	密	釉：緑灰(7.5GY6/1) 胎土：灰白色(N8/0)	
124－46	67	14J、14K　2層	中国青花	碗	碗B群	(15.8)			口縁部 界線、口縁端部 褐色の界線	口縁部 界線、体部 渦文風唐草文	密	灰白色(5YR8/1)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
124－47	67	26F　2層	中国青花	碗	碗Ｃ群	(13.6)			施釉、口縁部　1条の圏線	施釉、口縁部　文様帯	密	灰白色(7.5Y8/2)	潮州窯系
124－48	67	26F　2層	中国青花	碗	碗Ｃ群				施釉、口縁部　界線、見込み　2条の界線	施釉、〇字文	密	灰白(7.5YR8/1)	
124－49	67	26E　2層	中国青花	碗	碗Ｃ群		(4.9)		施釉、見込み　文様	施釉、体部　芭蕉文	密	灰白色(5YR8/1)	
124－50	67	26E　2層	中国青花	碗	碗Ｅ群		5.0		施釉、見込み　染付の文様		密	白色	
124－51	67	7P　2層	中国青花	碗	碗Ｆ群		(5.6)		見込み　草花文様	文様	密	白色	
124－52	67	3区	中国青花	碗			(4.4)		施釉、見込み　染付の文様	高台外側まで施釉	密	灰白色(7.5YR8/2)	潮州窯系
124－53	67	26B　2層	中国青花	皿	皿Ｂ１群	(9.8)	(4.8)	(2.3)	見込み　草花文様	唐草文	密	灰白色(7.5Y8/1)	
124－54	67	12J　1層	中国青花	皿	皿Ｃ群	(11.0)	(3.6)	3.0	口縁部　界線、見込み　稔花	口縁　波涛文帯、胴部　芭蕉葉文、腰部　界線	密	灰白色(7.5YR8/1)	
124－55	67	12K	中国青花	皿	皿Ｃ群		4.0		体部施釉、見込み施釉されず	体部施釉、底部施釉されず	密	内・外釉:灰白色(2.5Y8/2) 露胎：灰白色(2.5Y8/2)	内面１条、外面１条圏線
124－56	67	12L　2層	中国青花	皿	皿Ｅ類		(7.4)		施釉、見込み　2条の圏線内に文様	施釉、高台　2条の圏線	密	灰白色(5YR8/1)	景徳鎮系
124－57	67	12K	中国青花	皿			(6.4)		施釉、見込み　2条の圏線内に文様	施釉、底部　3条の圏線	密	灰白色(5YR8/2)	潮州窯系
124－58	67	11L　2層	中国青花	皿			(6.6)		施釉、見込み　文様あり	施釉、腰部　界線	密	淡黄(5Y8/3)	潮州窯系
124－59	67	11L	中国五彩	皿		(9.8)			口縁部　圏線間に四方襷文、底部付近　2条の圏線	草花文	密	灰白色(10YR7/1)	
125－1	68	7P　2層	中国陶器	盤	盤Ⅱ類				回転ナデ	施釉、回転ナデ	密	外釉：黄褐(10Y4/3) 露胎:灰(5Y6/1)	
125－2	68	12L　2層	中国陶器	鉢	鉢Ⅰ－1b類				回転ナデ	回転ナデ	やや粗　1㎜以下の砂粒を含む	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	
125－3	68	7P　2層	中国陶器	鉢	鉢Ⅰ－1b類	(13.2)			回転ナデ	ナデ	1㎜大の石を含む	内・外：にぶい褐(7.5YR5/3)	内面に突帯をもつ
125－4	68	13J　2層	中国陶器	鉢	鉢Ⅳ－2類				施釉	施釉	やや密　0.5㎜以下の砂粒含む	釉：黒褐(10YR2/2)	内面に突帯をもつ
125－5	68	7N　2層	中国陶器	鉢	鉢Ⅵ類				施釉(黒茶釉)、回転ナデ	施釉（黒茶釉）、回転ナデ	密	褐灰(7.5Y4/1)	
125－6	68	12K　2層	中国陶器	鉢	鉢Ⅰ		(14.0)		使用により磨耗	ナデ	粗　1～2㎜の砂粒を多量に含む	内：灰(N5/0) 外：灰(N5/0)	
125－7	68	12K　2層	中国陶器	鉢	鉢Ⅰ				使用により磨耗	ナデ	粗　2㎜以下の砂粒を多く含む	内：橙(2.5YR7/6) 外：灰(N6/0)	
125－8	68	21G　2層	中国陶器？	鉢					回転ナデ		密	内：にぶい褐(7.5YR5/4) 外：褐灰(10YR5/1)	口縁部　折り返し肥厚　黒褐色～暗褐色の釉かかる　肥前系陶器の可能性もあり
125－9	68	13J、13K　2層	中国陶器	壷		(16.4)			施釉、回転ナデ	施釉、回転ナデ	密　0.5㎜以下の白色砂粒少し含む	灰白色(5Y8/1)	胎土・釉調はＢ群
125－10	68	11M　1層	中国陶器	壷					回転ナデ、黒褐色の釉	回転ナデ、黒褐色の釉　頸部に突帯	密　0.5㎜以下の砂粒少し含む	灰白色(10Y7/1)	胎土・釉調はＣ群
125－11	68	6P　2層	中国陶器	四耳壷又は鉢	Ｂ群		(8.4)		回転ナデ	浅黄色の釉。削り出し高台	密　2㎜ほどの砂粒を少し含む	灰白色(5Y7/1)	
125－12	68	11K　2層	中国陶器	水注	水注Ⅴ類		(6.8)		回転ナデ、黄色の釉かかる	回転ヘラケズリ	1㎜以下の砂粒をわずかに含む	褐灰(5YR5/1)	
125－13	68	6Q　2層	中国陶器	壷又は鉢			9.7				密	青灰(5PB6/1)	
125－14	68	8P　2層	中国陶器	壷			(14.4)		回転ナデ、褐色の釉	回転ナデ、褐色の釉　底外面釉なし	密	にぶい赤褐(5YR5/3)	吉州窯系
125－15	68	25F　2層	中国陶器	甕							粗　1㎜ほどの砂粒を多く含む	灰白色(5Y8/2)	黄白色の釉がかかる
125－16	68	11K　2層	中国陶器？	甕			18.6		回転ナデ	ナデ	粗　2㎜ほどの砂粒を多く含む	内：灰(N7/0) 外：灰白色(5Y7/1)	
125－17	68	12L　1層	中国陶器	天目茶碗			(4.7)		施釉	施釉	密	釉：黒(N1.5/0) 露胎：灰(N6/0)	
125－18	68	26E　2層	中国陶器	天目茶碗			3.4		施釉	ケズリ	精良	内釉：黒色 外：灰	
125－19	68	6P	中国陶器	茶入		(6.0)			施釉	施釉	密	にぶい褐(7.5Y6/3)	
125－20	69	4N　1層	朝鮮・青磁	碗					施釉	施釉、象嵌による花形文様。内側花弁は白土を埋め込み、外郭は黒い線	密	灰オリーブ(7.5Y5/2)	
125－21	69	4L　2層	朝鮮・青磁	碗					施釉、象嵌による圏線　斜線文　印花文	施釉、象嵌による３条の圏線	密	オリーブ灰(2.5GY6/1)	
125－22	69	12L、12M　2層	朝鮮・施釉陶器	碗		16.2			施釉	施釉	やや粗　0.5㎜以下の砂粒多く含む	釉：オリーブ灰(2.5GY6/1)	
125－23	69	9M　2層	朝鮮・施釉陶器	碗			(4.9)		全面施釉、刷毛で白土を塗る	全面施釉、高台に目跡残る	密	釉：灰(7.5Y4/1)	
125－24	69	26E　2層	朝鮮・施釉陶器	碗			4.8		濃い灰色釉を施した後刷毛で白土塗る	濃い灰色釉を施した後刷毛で白土塗る	1㎜以下の砂粒を多く含む	灰白色(5Y8/2)	
125－25	69	21G　2層	朝鮮・施釉陶器	碗			(6.2)		全面施釉	全面施釉	やや粗　1㎜以下の砂粒を多く含む	灰白色(2.5Y8/1)	底部下面　内面見込み　焼成時の目跡残る
125－26	69	11L	朝鮮・施釉陶器	碗			3.6		全面施釉。見込みに目跡６ヶ所	全面施釉、高台畳付　目跡４ヶ所	1㎜以下の砂粒を含む	釉：オリーブ灰(10Y5/2)	
125－27	69	11L	朝鮮・施釉陶器	碗			4.0		全面施釉。見込みに目跡３ヶ所	全面施釉。底部に目跡３ヶ所	1～2㎜大の砂粒を含む	内釉：灰白色(5Y7/1) 外釉:灰(5Y5/1)	
125－28	69	11L　2層	朝鮮・施釉陶器	碗			4.4		施釉、回転ナデ	施釉、回転ナデ	密	内・外釉：灰	見込み　目跡３ヶ所
125－29	69	13J　2層	朝鮮・施釉陶器	碗			(4.0)		全面施釉。見込みに目跡５ヶ所	畳付以外は全面施釉。	密	灰白色(7.5Y8/2)	
125－30	69	11M　2層	朝鮮・白磁	皿			(5.6)		全面施釉。見込みに目跡。	全面施釉。高台に目跡。	密	灰白色(7.5YR8/1)	
125－31	69	9M、9N　2層	朝鮮・施釉陶器	皿		(8.8)			施釉	施釉	密　0.5㎜以下の砂粒含む	灰白色(10Y8/1)	

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
125－32	69	26D　2層	朝鮮陶器	瓶					回転ナデ	回転ナデ	密　1㎜以下の砂粒を少し含む	内：灰白色(5Y7/2) 外：灰黄(2.5Y7/2)	
125－33	69	2区	朝鮮・施釉陶器	瓶					施釉	施釉	1㎜ほどの砂粒を多く含む	釉：淡黄(5Y8/3)	
125－34	69	12L　2層	陶器（肥前又は朝鮮）	瓶			(16.4)		施釉	施釉	密	内釉：灰(10Y4/2) 外釉：オリーブ黒(10Y3/2)	
125－35	69	11L　2層	陶器（肥前又は朝鮮）	瓶			(15.8)		回転ナデ	体部施釉、底部調整不明	密	外釉：灰黄褐(10YR4/2) 露胎：黄灰(2.5Y5/1)	
126－1	70	6G　2層	瓦類	丸瓦					布目痕	ナデ	密　2㎜以下の砂礫少し含む	灰(N4/0)	
126－2	70	12G	瓦類	丸瓦					平行した横筋（コビキB技法）	ナデ	密　2㎜以下の砂粒若干含む	灰(N5/0)	
126－3	70	25E	瓦類	桟瓦							密　0.5㎜以下の砂粒含む	表：灰(N4/0) 裏：淡黄(2.5Y8/3)	
135－1	83	5Q　4層	弥生土器	壷	前期？				ヘラミガキ	ナデ	やや粗　1㎜以下の砂粒を多く含む	橙(7.5YR7/6)	
135－2	83	6Q　4層	弥生土器	壷	Ⅰ－2様式				ナデ	3条の筮描沈線、貝殻腹縁による羽状文	粗　3～4㎜大の砂粒を多く含む	灰白色(10YR8/2)	
135－3	83	5R　7層	弥生土器	甕	Ⅲ－2様式	(13.8)			ナデ	ナデ、口縁上端 肥厚刻目入る	2㎜ほどの砂粒を含む	淡黄(2.5Y8/3)	
135－4	83	6Q　4層	弥生土器	甕	Ⅴ－1様式	(16.0)			ナデ、ケズリ	ナデ、口縁 凹線文	1～2㎜の砂粒を多く含む	黄橙(7.5YR7/8)	
135－5	83	6Q　4層	弥生土器	甕	後期？		(3.8)		ヘラケズリ	摩滅のため調整不明	粗　2～3㎜大の砂粒を多く含む	内：淡黄橙(10YR8/4) 外：橙(5YR7/6)	
135－6	83	5Q　4層	土師器	鉢			3.2		底部 指押さえ	ナデ（摩滅のため不明瞭）	粗　3㎜以下の砂礫多く含む	橙(5YR7/8)	
135－7	83	6Q　4層	弥生土器	甕又は壷	中期		(6.4)		ナデ？	ナデ	やや粗　1～2㎜大の砂粒を多く含む	淡黄(5Y8/3)	
135－8	83	5R　4層	土師器	壷	古墳前期	16.8			摩滅のため調整不明	摩滅顕著、体部 ハケ目	やや粗　3㎜以下の砂礫混じる	内：黄橙(10YR8/6) 外：黄橙(7.5YR8/8)	
135－9	83	4R、5R 4層	土師器	壷	古墳前期	15.4			口縁部 ハケ目後横ナデ、体部 指頭圧痕 ナデ ヘラナデ ハケ目	口縁部 横ナデ、体部 ハケ目	やや粗　2㎜以下の砂礫多く含む	体部内面：黒(N2/0) 外面：橙(5YR7/8)	
135－10	83	5R　4層	土師器	甕	古墳前期	(16.0)			横ナデ	横ナデ	密	内：淡黄橙(10YR8/3) 外：明褐灰(7.5YR8/3)	
135－11	83	4R　4層	土師器	甕	古墳前期	16.0			摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	やや粗　1㎜以下の砂粒多く含む	内：黄灰(2.5Y6/1) 外：淡黄(2.5Y8/3)	
135－12	83	4R　4層	土師器	甕	古墳前期				横ナデ	横ナデ	やや粗　1㎜以下の砂粒を含む	黄橙(10YR6/3)	
135－13	83	4R　4層	土師器	甕	古墳前期	19.0			横ナデ	横ナデ	やや密　1㎜以下の砂粒やや多く含む	灰白色(10YR8/2)	
135－14	83	6P	土師器	高坏					摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	1㎜ほどの砂粒を多く含む	橙(7.5YR7/6)	
135－15	83	5R　4層	土師器	高坏	古墳前期				摩滅のため調整不明	2孔一対の透孔が2方向に穿たれる	やや粗　2㎜ほどの砂粒を多く含む	淡黄(5Y8/4)	
135－16	83	2区 2層？	土師器	高坏	古墳前期						密　1㎜以下の砂粒含む	橙(5YR7/6)	
135－17	83	4R　4層	土師器	高坏	古墳前期		(20.8)		摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	やや密　2㎜大の砂粒を含む	浅黄橙(10YR8/3)	脚部 3方向に透孔
135－18	83	4Q、4R 4層	土師器	器台	古墳前期	17.6			ケズリ後ミガキ（摩滅のため不明瞭）	横ナデ	密　1㎜以下の砂粒若干含む	にぶい黄橙(10YR7/2)	
135－19	83	4Q　4層	土師器	鼓形器台	古墳前期	16.6			摩滅のため調整不明	ナデ	やや粗　2㎜以下の砂粒やや多く含む	浅黄橙(7.5YR8/3)	
137－1	84	3区 4－6層	弥生土器	壷	Ⅲ様式				摩滅のため調整不明	ナデ、ハケ目原体により刺突された貼付突帯	粗　2㎜大の砂粒を多く含む	内：灰褐(7.5YR5/2) 外：浅黄橙(7.5YR8/4)	
137－2	84	11M　4層	弥生土器	壷又は甕	中期		6.2		ナデ	ナデ	粗　2㎜大の砂粒多く含む	黄橙(7.5YR7/8)	
137－3	84	12M　3層	弥生土器	壷又は甕	中期		7.2				粗　2～4㎜大の砂粒を多く含む	浅黄橙(7.5YR8/3)	上げ底状になる
137－4	84	11L　4層	弥生土器	壷又は甕	中期		(8.6)		ハケ目後ナデ	ハケ目	粗　2～4㎜大の砂粒を多く含む	橙(5YR7/8)	
137－5	84	12L　4層	弥生土器	甕	後期末				横ナデ	横ナデ	密	灰白色(2.5Y8/2)	
137－6	84	3区　4層	土師器	壷	後期末				ケズリ	肩部 貝殻腹縁による連続刺突	粗　2～3㎜ほどの砂粒を多く含む	灰白色(2.5Y8/2)	
144－1	84	溝状遺構22	弥生土器	壷					ナデ	ナデ	3㎜以下の砂粒を多く含む	浅黄(2.5Y7/3)	
144－2	84	溝状遺構22	弥生土器	甕	Ⅲ－2様式				横ナデ	横ナデ	密　2㎜以下の砂粒を若干含む	にぶい黄橙(10YR7/2)	
144－3	84	溝状遺構22	弥生土器	甕	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式				ナデ	ナデ、口縁端部 2条の凹線	密　1㎜以下の砂粒を含む	にぶい黄橙(10YR7/2)	
144－4	84	溝状遺構22	弥生土器	甕	中期		(5.7)		ナデ	ナデ	1㎜ほどの砂粒を多く含む	褐灰(10YR5/1)	
144－5	84	溝状遺構22	弥生土器	壷又は甕	中期		(8.4)		摩滅のため調整不明	ハケ目	粗　2㎜ほどの砂粒を多く含む	内：浅黄(2.5Y7/4) 外：灰黄(2.5Y6/2)	
144－6	85	溝状遺構22	弥生土器	壷	Ⅲ－2様式	36.7			ナデ	ナデ、頸部 3条の突帯、胴部中位に3条の突帯	密　2㎜以下の砂粒若干含む	内：黄灰(2.5Y7/2) 外：浅黄(2.5Y7/3)～黄灰(2.5Y4/1)	
147－1	84	11M　8層	縄文土器？	深鉢？					摩滅のため調整不明	条痕	やや粗　2㎜以下の砂粒多く含む	内：灰白色(5Y7/1) 外：灰(7.5Y5/1)	

表13　沖手遺跡土製品観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	器　種	計　測　値					備　　考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	
24－1	71	建物跡22 1-P1028	土錘	5.21	最大径：1.41		0.34	8.57	中央が大きく膨らむ紡錘形
30－4	71	建物跡33 2-P8	土錘	5.20	最大径：1.11		0.39	5.66	中央の膨らみの小さい紡錘形
65－23	71	3-P1217	土錘	4.52	最大径：1.95		0.44	14.09	中央が大きく膨らむ紡錘形
91－2	71	4-P3126	土錘	5.55	最大径：3.52		1.42	56.99	外径・孔径が大きいもの
108－2	71	墓28	土錘	4.33	最大径：1.18		0.31	5.82	中央の膨らみの小さい紡錘形
116－28	71	4-P1708	土錘	(4.65)	最大径：1.38		0.42	7.88	中央の膨らみの小さい紡錘形
126－4	71	5P　1層	不明土製品	3.60	4.90	4.50	0.75	58.64	上面に円孔
126－5	71	不明　表土	紡錘車	径：3.8×3.6		2.60	0.50	34.10	側面中央に斜格子文
126－6	71	21G.	土錘	4.62	最大径：3.12		1.19	44.27	外径・孔径が大きいもの
126－7	71	22H　2層	土錘	4.74	最大径：3.15		1.30	39.70	外径・孔径が大きいもの
126－8	71	12K　2層	土錘	(4.88)	最大径：1.92		0.54	17.00	中央の膨らみの小さい紡錘形
126－9	71	25D　2層	土錘	4.84	最大径：1.35		0.41	8.23	中央の膨らみの小さい紡錘形
126－10	71	4区グリッド不明	土錘	4.96	最大径：1.26		0.40	7.86	中央の膨らみの小さい紡錘形
126－11	71	26F	土錘	4.17	最大径：1.78		0.70	10.04	中央が大きく膨らむ紡錘形
126－12	71	26F　2層	土錘	5.31	最大径：2.02		0.98	14.68	中央の膨らみの小さい紡錘形、孔径大
126－13	71	26F　2層	土錘	3.76	最大径：1.05		0.36	3.77	管状
126－14	71	7P　2層	土錘	(4.09)	最大径：1.16		0.38	5.30	管状

表14　沖手遺跡石製品観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	器　種	石　材	計測値（cm）			重量（g）	備　　考
					長さ	幅	厚さ		
37－1	71	建物跡40 3-P1429	石鍋	滑石				645.11	内面 研磨されている、外面 ノミ状工具痕
47－17	71	溝状遺構３	石鍋	滑石				119.01	内面、きれいに磨かれる。線状の傷あり。外面、ノミ状工具痕、煤付着。
47－18	71	溝状遺構３	石鍋	滑石				386.76	内面、筋状の傷痕・工具痕が一部見られるがよく研磨されている。外面 ケズリ、 煤付着。
47－23	72	溝状遺構３	石錘	青野石（安山岩）	13.5	5.0	4.8	372.09	ノミ状工具痕顕著に認められる
52－25	72	溝状遺構８	茶臼	砂岩	受け皿復元径：34.8			375.82	ノミ状の工具痕見られる
52－26	73	溝状遺構８	砥石	砂岩	(9.0)	(12.9)	(8.2)	1343.82	砥面、筋状の工具痕
65－8	71	2-P591	温石	滑石	8.5	3.9	2.6	145.49	石鍋破片の転用品。破面は丁寧に削られている。
65－13	71	2-P684	石鍋	滑石	復元口径：23.2			168.96	内・外面研磨、外面被熱 、体部に工具痕
100－1	72	建物跡66 4-P2574	石臼	砂岩			5.2～5.9	1393.85	復元径：30.4cm
100－3	72	建物跡69 4-P2654	不明石製品	砂岩				227.80	容器状
100－10	73	建物跡72 4-P2083	砥石	砂岩	18.2	13.0	8.3	1932.24	
100－11	73	建物跡73 4-P2366	砥石	砂岩	12.5	11.2	10.1	1622.14	研磨面３面
117－1	72	4-P2075	砥石	凝灰岩	(10.9)	4.1	4.1	256.37	
117－2	72	4-P2361	砥石	凝灰岩	(11.8)	5.0	3.1	245.20	砥面 刃物による筋状の傷あり
117－3	73	4-P2377	砥石	流紋岩	(9.3)	10.2	8.2	946.94	
117－4	73	4-P2972	砥石	砂岩	20.0	6.1	6.4	1070.37	
117－5	73	4-P3185	砥石	砂岩	14.7	6.9	8.4	1122.80	
117－6	72	4-P2625	不明石製品	砂岩	(6.7)	(8.0)	(2.7)	178.26	穿孔あり
117－7	72	4-P3345	茶臼	砂岩	(8.0)	(5.3)	(4.0)	125.66	受皿の破片。被熱
126－15	71	11L	石鍋	滑石	復元口径：22.0			117.53	内面、細い筋状の工具痕もしくは鼠痕。外面研磨
126－16	71	18I　2層	石鍋	滑石	復元口径：16.8			66.22	内面丁寧に磨かれる。外面筋状の工具痕。
126－17	71	22H　2層	石鍋	滑石				113.36	内面 研磨、外面 ノミ状工具痕。
126－18	71	26E　2層	石鍋	滑石				18.02	内外面・破面に 筋状の工具痕や工具による削痕。破損後工具の砥ぎ出し等に再利用されたものか。外面、煤付着。
126－19	72	4Q　2層	砥石	凝灰岩	(6.7)	3.7	3.0	109.78	
126－20	72	5R　2層	砥石	砂岩	(8.7)	4.5	(4.3)	239.72	上面と右側面、砥面 右側面の使用はわずか
126－21	72	13K　2層	砥石	頁岩	5.7	6.3	1.4	86.25	
126－22	72	5P　2層	叩石・凹石類	デイサイト（青野石）	5.4	9.8	5.0	455.35	表・裏面 中央は使用によりくぼむ。側縁に敲打痕が巡る。
126－23	72	25E　2層	石造物	砂岩	(7.4)	(6.4)	(6.5)	360.71	石塔の差込部分か。ノミ状工具痕顕著。
126－24	72	25E　2層	五輪塔風空輪	砂岩				489.24	ノミ状工具痕顕著。空輪と差込部分は欠損。
135－20	84	２区	石鏃	黒曜石	2.1	2.0	0.4	1.01	凹基無茎
135－21	84	5Q　4層	磨製石包丁	頁岩	4.2	1.9	0.4	3.54	刃部の表面側の一部に剥離による二次調整
135－22	84	5Q　4層	磨製石斧	塩基性片岩	(13.7)	5.8	5.0	619.19	基部側欠損、全体的に敲打調整痕見られ研磨されていない。
144－7	84	溝状遺構22	打製石包丁	頁岩	10.2	7.8	0.9	125.36	
144－8	84	溝状遺構22	磨製石斧	塩基性片岩	(13.0)	5.5	4.8	516.35	

表15　沖手遺跡出土木製品観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	器　種	計　測　値　(cm)			樹　種	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
55－4	77	井戸6	木簡状木製品	16.2	2.3	0.4	スギ	一部焦痕が認められる
55－5	77	井戸6	曲物底板	18.0	6.6	0.7	スギ	
55－6	76	井戸6	加工材	(9.3)	6.7	1.6		井側の桶材か？
55－7	76	井戸6	加工材	(15.0)	9.1	2.5		井側の桶材か？
55－8	76	井戸6	加工材	(15.6)	7.9	3.2		井側の桶材か？
55－9	76	井戸6	加工材	(16.2)	8.5	2.8		井側の桶材か？
55－10	76	井戸6	加工材	15.6	6.7	2.1		井側の桶材か？
55－11	76	井戸6	加工材	13.2	4.7	2.6		
55－12	76	井戸6	加工材	14.6	3.0	1.2		
56－13	76	井戸6	加工材	(34.9)	5.4	2.4		井側の桶材か？
56－14	76	井戸6	加工材	(40.3)	9.4	2.6		井側の桶材か？
56－15	76	井戸6	丸太材	43.4	15.8	14.0		一部焦痕が認められる
56－16	77	井戸6	曲物枠	外径:48.3、内径:45.9、高:37.6			ヒノキ	井筒として使用
58－2	77	墓7	漆器椀	口径：10.4、器高：3.4			クリ	外面 朱漆による斜線文３条
58－3	78	墓7	箸状木製品	10.8	0.7	0.6	広葉樹	
58－4	78	墓7	折敷	30.1		高さ:3.3	スギ	
58－5	77	墓7	櫛	7.9	4.4	0.7	イスノキ	
58－6	78	墓7	卒塔婆	10.35	1.95	0.5	スギ	上部欠、墨書あり
58－7	78	墓7	卒塔婆	11.2	1.75	0.3	スギ	上部欠、墨書あり
58－8	78	墓7	卒塔婆	16.2	2.3	0.7	スギ	下部欠、墨書あり
58－9	78	墓7	卒塔婆	10.25	2.3	0.35	スギ	上下欠、墨書あり
90－7	79	墓19	漆器椀	口径：14.6、器高：5.9			ケヤキ？	内・外面：光沢のある黒漆塗布
110－7	80	墓32	桶蓋	直径：45.9		6.4	イヌマキ	
113－4	79	墓38	枕状木製品	13.2	7.9	8.1	マツ属	芯持ち材
113－5	79	墓34	櫛	4.2	5.5	0.5	スギ	漆塗、波状の文様
113－6	80	墓34	木棺底板	63.7	39.1	1.7	スギ	下面の四辺に桟
134－1	86	２区下層杭列	杭	40.9	6.0	5.8	イヌガヤ	
134－2	86	２区下層杭列	杭	41.5	7.4	3.5		
134－3	86	２区下層杭列	杭	23.7	5.7	4.3		
142－1	86	溝状遺構22西側杭列	杭	40.7	6.3	4.8	シャンシャンボ	
142－2	86	溝状遺構22西側杭列	杭	14.1	2.2	1.8		
142－3	86	溝状遺構22西側杭列	杭	37.7	9.8	7.1	ヒノキ	
142－4	86	溝状遺構22東側杭列	杭	39.1	9.5	6.4		
142－5	86	溝状遺構22東側杭列	杭	38.0	9.6	7.0		
142－6	86	溝状遺構22東側杭列	杭	41.4	9.5	7.5		
142－7	86	溝状遺構22東側杭列	杭	45.8	14.1	4.1		
142－8	86	溝状遺構22東側杭列	杭	37.0	11.5	6.2	スギ	
142－9	86	溝状遺構22東側杭列	杭	47.6	6.5	4.8		
144－9	87	溝状遺構22	板状木製品	65.2	28.6	2.4	スギ	４か所に方形の穿孔、表面は工具痕顕著
144－10	87	溝状遺構22	加工材	102.8	2.4	1.6		先端尖る
145－11	87	溝状遺構22	用途不明木製品	(38.8)	(16.5)	1.8	スギ	上面に焦痕
145－12	87	溝状遺構22	板状木製品	35.1	10.0	2.6	スギ	左辺は鋸歯状
145－13	88	溝状遺構22	棒状木製品	(53.4)	2.4	2.3	スギ	柄か？
145－14	88	溝状遺構22	棒状木製品	(50.6)	1.2	1.0	スギ	断面形が多角形状になるように面取り加工
145－15	88	溝状遺構22	棒状木製品	(41.0)	2.9	2.3	スギ	
145－16	88	溝状遺構22	棒状木製品	(27.7)	2.5	1.7	スギ	
145－17	88	溝状遺構22	棒状木製品	(25.8)	2.0	1.8	スギ	一方の端部は圭頭状に加工、側面に抉り
145－18	88	溝状遺構22	棒状木製品	(21.9)	2.1	2.0	カツラ	先端、両側面切断し、尖らせる
145－19	88	溝状遺構22	棒状木製品	(12.3)	2.8	2.2	アカガシ亜属	断面方形、中央部に段
145－20	88	溝状遺構22	切断面のある木片	(9.4)	4.7	0.9		両端部に切断痕
145－21	88	溝状遺構22	切断面のある木片	10.7	2.3	0.9		両端部に切断痕
145－22	88	溝状遺構22	切断面のある木片	(13.9)	3.0	1.2		両端部に切断痕
147－2	88	12L　8層	ヤス	(10.6)	0.9	0.8	ヒノキ	

表16　沖手遺跡金属製品観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	計測値（cm）			備考
					長さ	幅	厚さ	
47－24	74	溝状遺構３	鉄製品	釘	(7.7)	(1.3)	(1.4)	
47－25	74	溝状遺構３	鉄製品	釘	8.6	0.8	0.7	
47－26	74	溝状遺構３	鉄製品	釘	7.9	0.9	1.35	
59－５	73	墓８	鉄製品	釘	2.2	1.0	0.7	
59－６	73	墓８	鉄製品	釘	1.9	0.4	0.4	木質付着
88－６	73	墓14	鉄製品	釘	(4.3)	(1.0)	1.1	
88－７	73	墓14	鉄製品	釘	4.8	2.1	1.1	木質付着
88－８	73	墓14	鉄製品	釘	(4.7)	0.8	1.0	木質付着
88－９	73	墓14	鉄製品	釘	(4.4)	(1.5)	(1.0)	
88－10	73	墓14	鉄製品	釘	5.4	0.3	0.3	
88－11	73	墓14	鉄製品	釘	6.8	0.8	0.4	
88－12	73	墓14	鉄製品	釘	6.4	1.0	0.3	木質付着
88－13	73	墓14	鉄製品	釘	7.0	0.5	0.5	
88－14	73	墓14	鉄製品	釘	(4.8)	(0.4)	(0.5)	木質付着
88－15	73	墓14	鉄製品	釘	3.9	(1.0)	(1.1)	木質付着・頭部折り返し
88－16	73	墓14	鉄製品	釘	2.9	1.0	1.0	
88－17A	74	墓14	鉄製品	短刀	30.9	2.7	0.6	完形品。Ｂと錆着している。
88－17B	74	墓14	鉄製品	短刀	(16.9)	(2.6)	0.3	柄の木質残存。糸が巻かれ、その上に黒色の塗料で塗装。
89－４	74	墓15	鉄製品	短刀	14.7	2.7	0.2	木質・人骨付着。切先は欠損。
89－５	74	墓15	鉄製品	短刀	18.3	2.8	(0.6)	人骨が２次的に付着。茎部欠損。
90－１	73	墓17	鉄製品	釘	(2.2)	(0.75)	(0.6)	
100－12	74	建物跡66 4-P2917	鉄製品	ヤス	7.2	3.4	0.5	刺突部は二股に分かれる
100－13	74	建物跡68 4-P2736	鉄製品	鎌	(13.3)	2.8	0.5	柄と刃部が一体でつくられる。
108－３	73	墓20	鉄製品	釘	3.25	0.5	0.6	頭部折り返し
108－４	73	墓20	鉄製品	釘	(1.9)	(0.4)	(0.3)	
108－５	73	墓20	鉄製品	釘	(3.2)	(0.6)	(0.6)	頭部折り返し
108－６	73	墓20	鉄製品	釘	2.1	0.3	0.3	
108－７	74	墓21	鉄製品	不明	6.8	(3.8)	(1.6)	108-7～9は同一のもの
108－８	74	墓21	鉄製品	不明	-	-	-	
108－９	74	墓21	鉄製品	不明	径2.5×2.4		0.7	環状の把手もしくは吊手が付く。
108－10	73	墓25	鉄製品	釘	4.1	2.6	1.1	
108－11	73	墓25	鉄製品	釘	2.95	1.8	1.5	木質付着、棺に使用か？頭部折り返し。
108－12	73	墓25	鉄製品	釘	15.5	0.8	0.5	
108－13	73	墓25	鉄製品	釘	(2.4)	(0.8)	(0.3)	木質付着
108－14	73	墓29	鉄製品	釘	3.7	0.7	0.8	頭部は扁平な面
110－１	73	墓30	鉄製品	釘	3.2	(0.9)	(0.6)	頭部折り返し
110－２	73	墓30	鉄製品	鉄	(1.6)	(0.6)	(0.3)	木質付着
110－３	73	墓30	鉄製品	釘	(3.3)	(0.3)	(0.3)	
117－８	74	4-P2929	鉄製品	小刀	11.2	1.4	0.3	
127－１	74	25E　２層	鉄製品	釘	8.1	1.2	1.0	
127－２	74	12L　２層	鉄製品	楔	4.9	1.1	1.3	
127－３	74	11K　２層	鉄製品	楔	4.7	1.0	0.5	
127－４	74	5P　２層	鉄製品	楔	4.5	1.1	0.9	
127－５	74	11L　２層	鉄製品	楔	(4.7)	1.7	0.8	
127－６	74	4Q　２層	鉄製品	楔	4.6	1.4	1.2	
127－７		21H	鉄製品	楔	6.3	1.5	0.7	
127－８	74	12L　２層	鉄製品	楔	5.9	2.0	1.1	
127－９	74	26E　２層	鉄製品	楔	5.7	1.5	1.4	完形品。頭部は叩かれて潰れている
127－10	74	24E　２層	鉄製品	楔	7.2	1.1	0.7	
127－11	74	6Q　２層	鉄製品	楔	7.4	1.8	1.5	
127－12	74	5R　２層	鉄製品	鑿	7.6	1.9	2.1	
127－13	74	22G　２層	鉄製品	短刀	(9.1)	2.1	0.3	
127－14	74	5Q　２層	鉄製品	短刀？	(6.2)	1.5	0.4	茎部の破片か？
127－15	74	16J　２層	鉄製品	不明	(3.2)	(2.2)	高(2.4)	先端部が３つに別れた鳥足状の鉄製品
127－16	74	6Q　２層	鉄製品	鏃	13.2	4.8	0.9	
127－17	74	7P　２層	鉄製品	鋤先	(4.6)	(10.1)	(0.7)	
127－21	75	6P　１層	銅製品	甲冑金具	3.4	1.2	0.35	２か所に円孔
127－22	75	7P　２層	銅製品	不明	5.1	0.8	0.75	薄い銅版を巻いて管状に加工。一方の端部は3つの環がつながった形になっている。
128	75	12M　２層	銅製品	湖洲六花鏡	面径12.8		0.65	逆文字で「湖州石家□銅照子」の銘

表17　沖手遺跡出土銭貨観察表

銭径・内径・銭厚：mm

挿図番号	写真図版	出土位置	銭名	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目(g)	書体	初鋳年	備考
30－5	75	建物跡32 2-P31	景祐(元寶)	-	2.42	-	2.0	0.15	1.4	行書	1034	
58－10	75	墓７	祥符通寶	2.25	2.27	1.8	1.8	0.14	2.3	行書	1009	
58－11	75	墓７	洪武通寶	2.25	2.22	1.9	1.8	0.16	2.7	行書	1368	
58－12	75	墓７	洪武通寶	2.12	2.13	1.9	1.9	0.15	2.2	行書	1368	
58－13	75	墓７	(不明)	2.18	2.15	1.9	1.9	0.11	2.4			
58－14	75	墓７	洪武通寶	2.18	2.18	1.9	1.9	0.14	2.2	行書	1368	
58－15	75	墓７	元祐通寶	2.56	2.56	1.8	1.9	0.12	2.2	行書	1086	
58－16	75	墓７	祥符通寶	2.28	2.28	2.2	2.2	0.11	2.4	行書	1009	
59－7	75	墓９	開元通寶	2.57	-	2.0	-	0.17	1.6		845	
59－8	75	墓９	皇宋通寶	-	-	-	-	0.15	0.8	篆書	1038	
87－19(表)	75	建物跡55 4-P3585	紹聖元寶	2.44	2.43	2.0	2.0	0.32	(6.0)	篆書	1094	２枚が錆着
(裏)			熙寧元寶	2.43	2.41	1.8	1.9			行書	1068	
87－20(表)	75	建物跡55 4-P3585	元祐通寶	2.47	2.46	1.8	1.8	0.28	(5.1)	篆書	1086	２枚が錆着
(裏)			元祐通寶	2.46	2.46	1.8	1.8			行書	1086	
91－3(表)	75	4-P3521	元符通寶	2.25	2.25	1.8	1.8	0.57	(12.4)	行書	1098	５枚が錆着
(裏)			(不明)	-	-	-	-			-	-	
100－14	75	建物跡66 4-P2917	無文銭	2.06	-			0.16	1.1			
108－15	75	墓24	無文銭	2.13	(2.10)	1.8		0.17	1.4			
108－16	75	墓24	無文銭	1.92	1.86			0.11	0.8			
108－17	75	墓24	無文銭	2.10	2.12			0.09	1.4			
108－18(表)	75	墓24	無文銭	1.83	1.82			0.29				２枚が錆着
(裏)		墓24	無文銭	2.24	2.20				2.7			
117－9	75	4-P1838	熙寧元寶	2.45	2.44	2.1	2.1	0.1	1.6		1068	
127－18(表)	75	12K ２層	洪武通寶	(2.01)	2.04	(1.8)	1.8	0.47	6.5	行書	1368	４枚が錆着
(裏)		12K ２層	洪武通寶	2.14	2.13	1.8	1.8			行書	1368	
127－19	75	13J ２層	元豊通寶	2.37	-	1.8	-	0.14	2.3	篆書	1078	
127－20	75	14K ２層	寛永通寶	2.41	2.41	1.9	1.9	0.15	2.5	行書		新寛永銅一文銭

※ 計測方法は（永井編1994）を参照のこと

表18　沖手遺跡鍛冶・鋳造関連遺物観察表

構成No.	遺物名	地区名	グリッド・遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考
1-P880-1	椀形鍛冶滓	1区	1-P880	4.2	2.7	1.6	20.85	3	なし	小型～中型の椀形鍛冶滓。下面は整った椀形で、木炭痕が散在する。
1-P880-2	椀形鍛冶滓	1区	1-P880	4.6	3.8	2.6	43.03	5	なし	分析資料No.１　詳細観察表参照。
1-P880-3	含鉄鉄滓	1区	1-P880	2.8	2.0	1.2	5.80	4	錆化(△)	外見上での平面形は楕円形状の含鉄鉄滓もしくは錆化の進んだ鉄塊系遺物と考えられる。外面は、酸化土砂が著しく付着するが、破面を見ると長さ1.2cm以上、厚さ２㎜くらいの鉄部が認められる。
1-P880-4	含鉄鉄滓	1区	1-P880	3.3	2.9	2.2	23.76	6	錆化(△)	不定形な小塊状の含鉄鉄滓。上面は全体として丸みをもってふくらみ、下面は椀形になっている。
1-P880-5	粒状滓	1区	1-P880							分析資料No.２　詳細観察表参照。
1-P880-6	鍛造剥片	1区	1-P880							分析資料No.３　詳細観察表参照。
1	炉壁	4区	26D2層	3.2	3.7	3.3	28.45	2	なし	壁外面は生きている。内面は黒色ガラス質に滓化。その外側は被熱により赤褐色～橙色に酸化状態。胎土は２㎜以下の白色礫などを多く含み、スサもわずかながら含む。
2	炉壁	4区	4-SK35	5.5	3.8	3.7	47.00	2	なし	内面及び外面は生きている。内面は黒色に滓化し、そこから外側へは灰色の還元被元、橙色の酸化被熱状態となっている。胎土中には２㎜以下の礫を多く含み、スサもわずかながら見られる。
3	炉壁	1区	井戸１	9.9	8.8	5.9	406.11	2	なし	内側は生きている。断面の内側と中央に、黒色ガラス質に滓化した部分が２層認められる。一度操業を終えたあとで、内側に土を貼り足して炉壁を補修、再度操業したことが分かる。
4	炉壁	4区	26F	14.6	8.1	3.7	482.78	4	M(◎)	分析資料No.４　詳細観察表参照。
5	炉壁	4区	21G	5.3	5.2	2.6	53.62	1	なし	炉壁のコーナー部分と考えられるものの破片。２㎜以下の砂礫を含み、スサも多く入る。外面には植物の圧痕のようなものが残る。
6	羽口	4区	25E2層	3.9	3.3	3.1	27.33	1	なし	断面形が方形もしくは隅丸方形の羽口と考えられる。復元孔径は3.5cm。右端は被熱のため灰色に還元した状態。胎土は２㎜以下の砂礫をやや多く含む。
7	羽口	4区	15J2層	7.0	6.7	5.4	147.21	4	なし	断面、隅丸方形の羽口。羽口先端部の上面から右側面にかけての隅の部分が残る。羽口の先端部は斜方向に面をもつようにして溶損しており、黒色ガラス質に滓化している。胎土は２㎜以下の礫を含み、スサも少し混じる。

構成No.	遺物名	地区名	グリッド・遺構名	計測値（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	備考
				長さ	幅	厚さ				
8	椀形鍛冶滓	1区	7M2層	4.7	6.0	2.9	102.22	6	なし	側面のほとんどが破面であるが、厚さから中型の椀形鍛冶滓と考えられる。上面には木炭痕が見られる。下面には炉床土が付着している。
9	椀形鍛冶滓	1区	9N2層	3.9	2.8	1.7	20.76	5	錆化（△）	分析資料No.5　詳細観察表参照。
10	椀形鍛冶滓	1区	溝状遺構2	3.2	2.8	1.8	17.36	6	H（○）	小型の椀形鍛冶滓。上面はやや流動状の質感をもつ。
11	椀形鍛冶滓	3区	13K2層	5.0	4.3	2.5	53.80	6	H（○）	流動状の質感をもつ椀形鍛冶滓。上面の下手から右にかけて、側縁は土手状に高くなっている。下面は木炭痕が見られ、凹凸が目立つ。
12	椀形鍛冶滓	3区	溝状遺構8	5.9	3.8	2.1	61.03	5	H（○）	中型の椀形鍛冶滓。下面に炉床土が付着。滓質は緻密で、結晶が発達している。
13	椀形鍛冶滓	2区	2-P591	9.7	8.9	3.6	280.12	6	H（○）	中型からやや大型の椀形鍛冶滓。上面中央がくぼんだ形になっている。下面は木炭痕が見られるほか、こぶ上の凹凸が目立つ。
14	椀形鍛冶滓	3区	11L2層	7.6	8.9	4.5	333.25	9	H（○）	中型からやや大型の椀形鍛冶滓。上・下面とも木炭痕や木炭のかみこみが顕著に見られる。
15	椀形鍛冶滓	2区	2-P484	13.0	9.8	5.7	866.10	5	H（○）	分析資料No.6　詳細観察表参照。
16	椀形鍛冶滓	1区	9M2層	5.8	4.6	2.3	62.05	8	M（◎）	分析資料No.7　詳細観察表参照。
17	鍛冶滓	1区	1-P860	3.8	3.2	1.7	19.22	3	なし	木炭痕が顕著に見られる鍛冶滓。椀形鍛冶滓から遊離して、粉炭にはさまれた状態で生成したものか。
18	鍛冶滓	1区	1-P791	3.7	2.7	1.5	14.77	4	錆化（△）	不定形な小型の鍛冶滓。椀形鍛冶滓から遊離して生成したものか。
19	鍛冶滓	1区	1-SK23	5.4	3.2	2.6	26.31	6	H（○）	平面形がいびつなひょうたん形の鍛冶滓である。左側は黒色のガラス質の滓で、この部分は羽口先の溶融物と思われる。全体的に表面に大きな凹凸が見られる。
20	鍛冶滓	1区	6P2層	3.7	3.3	2.5	45.35	6	M（◎）	平面、不整楕円形の鍛冶滓。下面は丸みをもっており、小型の椀形鍛冶滓とすべきものかもしれない。
21	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	50	3.2	2.7	2.5	22.64	6	錆化（△）	小さな塊状の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。錆化のためメタル部は残っていないが、上面から側面にかけて錆がはがれた部分を見る限りでは、鉄を主体とするものであったと推測される。
22	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	6O2層	4.1	3.3	2.4	36.46	6	錆化（△）	小さな塊状の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。表面の大部分が錆に覆われているため詳細は不明だが、右側面の錆のはがれた部分から、鉄主体の資料の可能性も考えられる。
23	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	4区	18I2層	3.0	2.8	2.4	21.74	7	H（○）	平面、不整多角形の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。錆のため詳細は不明だが、その形状から、鍛冶原料として、もしくは鍛冶作業の途中で小割りされた鉄塊の可能性も考えられる。
24	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	4P2層	3.7	2.8	1.8	21.04	7	H（○）	平面、不整三角形の含鉄鉄滓、もしくは鉄塊系遺物。下面はやや丸みをもち、側面は直線的に途切れたような面をもつことから、小割りされた銑鉄塊であった可能性も考えられる。
25	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	6N2層	5.0	3.1	1.5	27.15	6	H（○）	左から右へと流れ出したような形状をした資料。鍛冶原料として搬入された銑鉄塊の可能性もある。
26	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	10L	3.6	3.7	2.4	29.05	7	H（○）	小さな塊状の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。鍛冶原料もしくは鍛冶工程途上の鉄塊の可能性もあり。
27	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	4区	17I2層	5.1	3.4	2.6	57.08	6	H（○）	分析資料No.8　詳細観察表参照。
28	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	4区	22G2層	3.3	2.7	1.5	16.67	5	M（◎）	小さな塊状の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。上面から下面にかけては丸みを帯び、右側縁に向かってすぼまっている。右側面は直線的に途切れた形になっており、破面かもしれない。銑鉄塊を小割りしたものの可能性がある。
29	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	50	4.2	3.2	2.3	39.13	7	M（◎）	不定形な塊状の含鉄鉄滓、もしくは鉄塊系遺物。上面は平坦で、下面は丸みをもった形である。上手側と左側面は、やや直線的な面になっており、破面かもしれない。小割りされた鉄塊の可能性もある。
30	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	6N2層	4.9	3.8	2.7	69.43	9	M（◎）	平面、楕円形のもの。上面は平坦で、側面から下面は丸みをもつ。
31	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	溝状遺構2	5.4	4.2	3.5	74.18	7	M（◎）	不定形な塊状の資料。ほぼ全面で錆や酸化土砂に覆われているが、錆のはがれ落ちた部分を見る限りは滓部は見られず、鉄を主体とするようである。
32	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	3区	12L1層	7.6	4.6	3.1	90.75	9	M（◎）	分析資料No.9　詳細観察表参照。
33	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	2区	溝状遺構3	2.8	2.3	1.0	11.83	6	L（●）	小型の鉄塊系遺物。上面と下面にわずかに滓の付着が見られる。鍛冶原料となる製錬系の鉄塊、もしくは鍛冶工程途中で生じた滓中に含まれていたものであろうか。
34	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	4区	16I2層	2.7	2.6	2.2	22.64	6	L（●）	小さな塊状の資料。上面は若干の凹凸はあるものの平坦気味で、側面から下面は丸みをもつ。左側面は直線的な途切れたような面で、破面かもしれない。形状から小割りされた銑鉄塊の可能性もある。
35	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	4区	4-P2677	4.0	3.5	2.5	30.03	6	L（●）	平面形、三角形の資料。全体が錆や酸化土砂に覆われているため詳細は不明だが、錆のはがれた部分から判断すれば、やや滓を含む資料のように思われる。
36	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	4区	18J2層	3.5	2.9	2.6	40.05	6	L（●）	分析資料No.10　詳細観察表参照。
37	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	6O2層	5.6	3.5	2.4	46.05	7	L（●）	分析資料No.11　詳細観察表参照。
38	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	1区	6M2層	7.4	4.6	4.0	136.06（割れ32.03）	7	L（●）	不整形な塊状の資料。上面は平坦で、側面・下面は凹凸はあるものの丸みをもっている。破面では鉄部を主体とし、一部に滓が入り込んでいるように見える。
39	鉄塊系遺物	1区	11M2層	5.0	3.5	2.3	59.19	11	L（●）	分析資料No.12　詳細観察表参照。

表19　古墳時代～古代遺物分類表

遺物 / グリッド	須恵器																		緑釉陶器
	古墳時代					奈良・平安時代					古墳～奈良・平安時代							合計	奈良・平安
													甕				不明		
	坏蓋	坏	坏蓋 or 坏	高坏	甑	坏蓋	坏	坏 or 皿	高台付皿	高台付坏	壷	壷 or 甕	外:平行 内:同心円	外:平行 内:放射	外:平行 内:ナデ消	外:格子目 内:ナデ消			坏・皿
1　区	1	0	0	0	1	4	15	15	0	2	8	2	3	0	7	1	60	119	0
2　区	0	0	1	2	0	3	0	0	0	2	2	2	3	0	17	0	21	53	1
3　区	3	1	1	0	0	6	7	0	3	1	11	0	10	1	24	2	20	90	0
4区西側	0	2	2	1	0	4	5	0	0	0	12	1	14	0	6	0	17	64	0
4区東側	0	0	0	1	0	6	1	0	1	0	2	0	8	0	8	4	24	55	0
位置不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0
総　計	4	3	4	4	1	23	28	15	4	5	36	5	38	1	62	7	143	383	1

表20　中世土師器・瓦質土器分類表

遺物 / グリッド	中世土師器										瓦質土器												
	坏・皿	高台付坏	柱状高台皿	鉢	擂鉢	鍋	甕	壷	不明	合計	鉢	擂鉢	壷・甕	鍋	足鍋	羽釜	湯釜	鍋 or 釜	火鉢	焙烙	香炉?	不明	合計
1　区	1560	9	3	12	15	5	0	0	154	1758	76	121	8	41	20	3	14	11	11	0	1	325	631
2　区	573	5	2	26	8	4	8	3	165	794	26	23	23	18	1	0	15	14	5	0	0	94	219
3　区	385	1	1	10	2	4	1	0	140	544	34	34	8	13	4	0	18	10	18	0	0	83	222
4区西側	395	0	1	4	0	7	0	0	90	497	11	10	0	15	2	0	4	3	2	0	0	38	85
4区東側	449	1	0	24	14	19	0	0	147	654	86	126	19	96	17	1	67	73	17	1	0	338	841
位置不明	20	0	1	1	1	0	0	0	7	30	1	1	0	3	0	2	0	1	0	0	0	6	14
総　計	3382	16	8	77	40	39	9	3	703	4277	234	315	58	186	44	6	118	112	53	1	1	884	2012

※ 土師器については2.5cm角以上の破片のみカウント

表21　国産陶器・産地不明陶器分類表

遺物 / グリッド	東播系須恵器	瓦器系陶器	備前													備前系(模倣)	瀬戸								不明陶器						
			擂鉢							壷・甕					徳利	小物	合計														
										壷			体部																		
	鉢	壷・甕	ⅣA	ⅣB	ⅤA	ⅤB	Ⅵ	不明	合計	Ⅲ	ⅣA	ⅣB	不明	合計				擂鉢	碗	皿	小天目・天目	瓶	水滴	盤	不明	合計	坏・皿	瓶	壷・甕	鉢	擂鉢	不明	合計
1　区	10	0	6	6	0	0	0	25	37	0	0	0	25	25	0	0	62	13	3	2	7	2	0	0	1	15	2	4	12	1	0	8	27
2　区	20	11	0	0	0	0	0	6	6	0	0	0	23	23	0	1	30	1	1	7	1	1	1	0	1	12	0	1	17	1	0	37	56
3　区	19	0	3	1	0	1	1	17	23	0	0	0	4	4	0	0	27	1	2	2	6	2	0	0	2	14	1	1	18	0	0	10	30
4区西側	16	0	0	5	0	0	0	4	9	0	0	0	5	5	0	0	14	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	13	0	0	12	25
4区東側	8	4	8	4	1	1	0	34	48	4	1	1	43	49	4	0	101	1	1	1	3	0	0	0	1	6	1	0	61	2	3	14	81
位置不明	4	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	1	1	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
総　計	77	15	17	16	1	2	1	90	127	4	1	1	101	107	4	1	239	16	7	12	17	5	1	1	5	48	4	6	122	4	3	81	220

表22　沖手遺跡瀬戸製品組成表

器種		古瀬戸						大窯								総計
		中Ⅰ～Ⅱ期	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期 古段階	後Ⅳ期 新段階	第1段階 前半	第1段階 後半	第2段階 前半	第2段階 後半	第3段階 前半	第3段階 後半	第4段階 前半	第4段階 後半	
天目茶碗	天目茶碗		1	1	1			1						1		14
				1										1		
			5					2								
	小天目													3		3
碗	丸碗							1						1		3
														1		
	平碗				3											4
			1													
小皿類	端反皿							2								2
	丸皿													1		1
	内禿皿												7			8
												1				
	折縁皿													1		1
盤類	盤		1													1
壷・瓶類	瓶類	5														5
	水滴			1												1

表23　近世陶器分類表

遺物／グリッド	肥前系陶器															陶器（肥前系以外及び産地不明）									合計
	～17Ｃ前半					17C後半～		鉢	瓶	壷・甕	擂鉢	その他	不明	陶胎染付		碗	皿	瓶	壷・甕	土瓶・水注	鉢	擂鉢	その他	不明	
	碗	皿・大皿			不明	碗	皿							碗	その他										
		胎土目	砂目	不明																					
１　区	6	5	2	40	0	15	7	0	6	7	13	1	26	9	0	9	3	2	1	0	6	2	3	70	233
２　区	14	6	1	25	1	10	3	0	5	4	3	1	18	2	1	9	1	0	1	3	6	5	0	36	155
３　区	4	2	0	14	0	2	0	0	7	0	1	0	3	2	0	1	0	1	2	1	0	0	0	12	52
４区西側	1	0	0	5	0	2	2	0	2	2	2	0	2	0	2	1	0	2	0	0	0	1	0	4	28
４区東側	5	10	1	31	2	16	2	8	6	1	4	0	5	1	0	0	1	3	0	0	3	0	0	8	107
位置不明	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	7
総　計	30	24	4	115	3	46	14	8	26	14	24	2	55	14	3	21	5	8	4	4	15	8	3	132	582

表24　近世磁器分類表

遺物／グリッド	肥前系磁器								肥前系以外の磁器（産地不明含む）					合計
	碗	皿	小坏	蓋	瓶	鉢	紅皿	不明	碗	皿	坏・小坏	瓶	不明	
１　区	8	8	1	0	5	0	1	66	1	0	0	1	2	93
２　区	50	30	2	0	5	4	0	63	4	1	2	0	2	163
３　区	15	3	0	0	4	1	1	25	1	1	2	1	1	55
４区西側	1	0	0	2	1	0	0	11	0	1	0	0	2	18
４区東側	13	9	0	0	1	0	0	9	0	2	1	1	3	39
位置不明	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	7
総　計	90	50	3	2	16	5	2	176	6	5	5	3	12	375

表25　白磁分類表（大分類）

時期	C期														C×D期					D期			
器種	碗・小碗							皿					不明	合計	碗				合計	皿	碗	皿	合計
分類	Ⅱ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅳ～Ⅵ類	XⅡ×XⅢ類	－	Ⅱ類	Ⅳ類	Ⅵ類	Ⅶ類	－	－		Ⅳ～Ⅷ	中世前半				Ⅲ類	Ⅷ類	Ⅷ類	
備考	広東系					広東系	広東系	広東系		広東系	広東系	広東系	広東系			直口縁	外反口縁	屈折口縁					
１　区	25	146	17	1	6	1	8	1	3	9	0	16	28	261	7	28	18	13	66	2	10	8	20
２　区	8	71	5	1	1	2	0	1	1	1	0	0	16	107	2	16		10	28	3	2	16	21
３　区	3	61	14	0	1	0	0	1	0	3	1	1	1	86	4	10	5	3	22	3	2	2	7
４区西側	0	18	3	0	1	0	4	0	0	2	0	1	1	30	1	4	6	4	15	2	1	1	4
４区東側	5	13	2	1	5	0	1	0	0	1	0	2	2	32	1	2	1	1	5	0	0	0	0
不　明	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	11	8	24	0	0	0	0	0	0	1	0	1
総　計	42	312	41	3	14	3	13	3	4	17	1	31	56	540	15	60	30	31	136	10	16	27	53

時期	C～F期						F期				F・G期	G期			H期	I期～	時期不明					合計
器種	碗	皿	壷・水注	青白磁	不明	合計	碗	皿	碗or皿	合計	碗	碗	碗・坏	合計	皿・坏	皿・坏	碗	小碗	皿	不明	合計	
分類	中世前半		Ⅲ	合計	中世前半		Ⅸ類	Ⅸ類	Ⅸ類		福建	C群	B群		D群	E群	不明					
備考									Ⅸ													
１　区	72	5	3	5	183	268	1	24	3	28	0	1	0	1	28	20	0	0	0	66	66	758
２　区	22	5	9	5	74	115	1	15	0	16	1	1	2	3	8	17	2	0	2	3	7	323
３　区	33	1	0	2	77	113	0	17	0	17	0	0	1	1	10	15	0	0	0	3	3	274
４区西側	11	1	0	3	27	42	0	6	1	7	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3	3	104
４区東側	11	0	1	1	20	33	0	7	0	7	0	1	0	1	12	13	0	1	0	14	15	118
不　明	0	0	0	0	2	2	0	2	0	2	0	0	0	0	1	2	0	0	0	8	8	40
総　計	149	12	13	16	383	573	2	71	4	77	1	3	3	6	61	68	2	1	2	97	102	1617

表26　白磁分類表（細分）

器種	碗																小碗	碗							
大分類	Ⅱ類（広東系）					Ⅳ類				Ⅴ類							Ⅴ類	Ⅵ類			Ⅳ～Ⅵ類				
細分類	－	Ⅱ-1	Ⅱ－3×4	Ⅱ-5	合計	－	Ⅳ-1	Ⅳ-1a	合計	－	Ⅴ-2b	Ⅴ-3	Ⅴ-4c	Ⅴ-2b×4c	Ⅴ-4b×c	合計	2b	－	Ⅵ-2b	合計	Ⅳ～Ⅵ	Ⅳ×Ⅴ	Ⅴ～Ⅵ	Ⅴ～Ⅵ	合計
１　区	5	15	1	4	25	133	11	2	146	7	2	2	0	5	0	16	1	0	1	1	2	0	1	3	6
２　区	4	4	0	0	8	58	10	3	71	2	1	0	0	2	0	5	0	1	0	1	1	0	0	0	1
３　区	3	0	0	0	3	53	7	1	61	4	4	2	1	3	0	14	0	0	0	0	0	0	0	1	1
４区西側	0	0	0	0	0	11	7	0	18	2	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	1
４区東側	1	4	0	0	5	9	3	1	13	1	1	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	1	1	3	5
位置不明	0	1	0	0	1	2	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総　計	13	24	1	4	42	266	39	7	312	16	8	4	1	10	1	40	1	2	1	3	4	1	2	7	14

器種	碗														碗or皿	碗							碗	小碗	碗
分類	Ⅷ類				Ⅳ～Ⅷ							Ⅸ類			Ⅸ類	Ⅺ～Ⅻ類（広東）				中世前半			中世前半		
	－	Ⅷ-1	Ⅷ－2×3	合計	Ⅴ～Ⅶ	Ⅴ～Ⅷ	Ⅴ～Ⅶ	Ⅴ×Ⅷ	Ⅵ～Ⅷ	Ⅶ×Ⅷor同安	合計	－	Ⅸ－2b	合計	Ⅸ	Ⅺ	Ⅻ？	Ⅺ×Ⅻ	合計	直口縁	外反口縁	屈折口縁	広東系		広東以外
1　区	2	7	1	10	1	1	4	0	0	1	7	0	1	1	3	1	0	0	1	28	18	13	7	1	72
2　区	0	1	1	2	0	0	2	0	0	0	2	1	0	1	0	0	1	1	2	16	12	10	0	0	22
3　区	1	0	1	2	1	0	0	1	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	10	5	3	0	0	33
4区西側	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	4	6	4	4	0	11
4区東側	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	1	0	11
位置不明	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総　計	4	9	3	16	2	1	8	1	1	2	15	1	1	2	4	1	1	1	3	60	42	31	12	1	149

器種	Ⅲ																							
大分類	Ⅱ類			Ⅲ類			Ⅳ類					Ⅵ類（広東系）					Ⅶ類（広）	Ⅷ類					
細分類	－	Ⅱ-1b	合計	Ⅲ-1	Ⅲ-2	合計	Ⅳ-1	Ⅳb	Ⅳ-2	Ⅳ-2b	合計	－	Ⅵ-1	Ⅵ-1a	Ⅵ-1b	合計	－	－	Ⅷ-1	Ⅷ-1b	Ⅷ-2b	Ⅷ-2	合計
1　区	1	0	1	1	1	2	1	1	0	1	3	3	0	6	0	9	0	3	1	3	1	0	8
2　区	0	1	1	3	0	3	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	14	0	0	0	2	16
3　区	1	0	1	3	0	3	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	1	2	0	0	0	0	2
4区西側	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1
4区東側	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
位置不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
総　計	2	1	3	9	1	10	1	1	1	1	4	5	3	7	2	17	1	19	1	3	1	3	27

器種	Ⅲ													壷・水注		不明	
大分類	Ⅸ類											中世前半		Ⅲ		中世前半	
細分類	Ⅸ類	Ⅸ類？	Ⅸ－1	Ⅸ－1a	Ⅸ－1b	Ⅸ－1c	Ⅸ－2	Ⅸ－2b	Ⅸ－3	Ⅸ－b	Ⅸ－c	合計	広東	広東以外	広東以外	広東	広東以外
1　区	10	2	2	0	0	0	4	1	1	3	1	24	16	5	3	28	183
2　区	11	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	15	0	5	9	16	74
3　区	8	1	5	0	1	0	1	1	0	0	0	17	1	1	0	1	77
4区西側	3	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	6	1	1	0	1	27
4区東側	4	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	7	2	0	1	2	20
位置不明	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	11	0	0	8	2
総　計	38	3	13	1	1	0	6	2	1	5	1	71	31	12	13	56	383

器種	碗	碗	坏	合計	碗	Ⅲ	坏	合計	Ⅲ	坏	合計	碗	小碗	Ⅲ	不明	合計	青白磁								
分類	（福建）F・G期	B群			C群	D群			E群			時期不明					碗	Ⅲ	坏	合子 身	合子 蓋	小壷	壷蓋	不明	合計
1　区	0	0	0	0	1	24	4	28	19	1	20	0	0	0	66	66	1	1	0	0	2	0	0	1	5
2　区	1	1	1	2	1	8	0	8	17	0	17	2	0	2	3	7	0	1	0	1	1	1	1	0	5
3　区	0	1	0	1	0	8	2	10	15	0	15	0	0	0	3	3	0	0	0	0	2	0	0	0	2
4区西側	0	0	0	0	0	2	0	2	1	0	1	0	0	0	3	3	0	0	0	1	2	0	0	0	3
4区東側	0	0	0	0	1	10	2	12	13	0	13	0	1	0	14	15	0	1	0	0	0	0	0	0	1
位置不明	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	2	0	0	0	8	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総　計	1	2	1	3	3	53	8	61	67	1	68	2	1	2	97	102	1	3	0	2	7	1	1	1	16

表27　青磁分類表（大分類）

時期	D											D×E	E	E×F	E×H	F				F×G		
生産地	同安							龍泉			D期同安龍泉合計	龍泉	龍泉	龍泉	龍泉	龍泉			F期合計	龍泉		F×G合計
器種	碗	碗	碗	碗	碗	Ⅲ	碗・Ⅲ	碗	Ⅲ	碗・Ⅲ		碗・小碗	碗	碗	碗	碗	坏	水注		小壷	香炉	
分類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	合計	Ⅰ	合計	Ⅰ	Ⅰ	合計	合計	Ⅰ×Ⅱ	Ⅱ類	Ⅱb×Ⅲ-2c	Ⅱa×BⅡ	Ⅲ類	Ⅲ類	F期				
1　区	34	1	0	1	36	29	65	67	1	68	133	13	55	0	0	4	0	1	5	1	2	3
2　区	16	0	0	2	18	109	127	195	4	199	326	36	55	1	1	1	0	2	3	0	0	0
3　区	10	0	1	0	11	5	16	21	3	24	40	8	34	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4区西側	2	0	1	2	5	7	12	18	1	19	31	4	11	0	0	1	2	0	3	0	0	0
4区東側	4	0	0	0	4	3	7	9	0	9	16	2	20	0	0	3	0	0	3	0	0	0
位置不明	1	0	1	0	2	1	3	3	0	3	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総　計	67	1	3	5	76	154	230	313	9	322	552	64	175	1	1	9	2	3	14	1	2	3

時期	G	G～				G×H				H	H～	Ⅱ～Ⅰ	Ⅰ	J			D～J	時期不明				青磁合計
生産地	龍泉	龍泉			G～合計	龍泉			G×H合計	龍泉	龍泉	龍泉	龍泉	龍泉	龍泉	J期合計	合計	碗	Ⅲ	壺	器種不明	合計	
器種	碗	碗	坏×Ⅲ	Ⅲ		碗	Ⅲ	その他		碗	碗	碗	碗	碗	稜花Ⅲ・盤							
分類	Ⅳ	Ⅳ～	Ⅳ～	Ⅳ～		Ⅳ×上田Ⅱ	Ⅳ×DⅡ	坏Ⅳ～上田Ⅱ		上田Ⅱ	上田Ⅱ～	E	Ⅲ	BⅣ								
1　区	0	24	1	2	27	14	1	0	15	10	0	3	0	7	2	9	273	52	1	0	38	91	364
2　区	0	11	0	1	12	3	0	0	3	3	0	2	0	1	1	2	444	39	3	0	22	64	508
3　区	0	7	0	1	8	6	0	0	6	1	0	1	0	0	0	0	98	6	0	0	8	14	112
4区西側	0	2	0	0	2	1	0	1	2	2	0	1	1	0	1	1	58	9	1	1	3	14	72
4区東側	6	10	0	6	16	18	0	0	18	20	2	4	0	2	1	3	110	28	2	0	7	37	147
位置不明	2	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	12	3	0	0	3	6	18
総　計	8	54	1	10	65	43	1	1	45	37	2	12	1	10	5	15	995	137	7	1	81	226	1221

表28　青磁分類表（細分）

生産地	同安窯系																		
器種	碗											Ⅲ							総計
大分類	Ⅰ類					Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ-2	Ⅲ類	不明	Ⅰ～Ⅲ合計	Ⅰ類							
細分類	-	Ⅰ-1a	Ⅰ-1b	Ⅰ-1c	合計		-		合計			-	Ⅰ-1	Ⅰ-1a	Ⅰ-1b	Ⅰ-2a	Ⅰ-2b	Ⅰ-b	合計	
1　区	6	1	26	1	34	1	0	0	0	1	36	8	7	2	6	0	5	1	29	65
2　区	3	0	13	0	16	0	0	0	0	2	18	50	14	8	18	2	16	1	109	127
3　区	2	0	8	0	10	0	1	0	1	0	11	1	1	1	1	0	1	0	5	16
4区西側	0	1	1	0	2	0	1	0	1	2	5	4	1	0	1	1	0	0	7	12
4区東側	0	0	4	0	4	0	0	0	0	0	4	1	0	0	1	0	1	0	3	7
位置不明	0	0	1	0		0	0	1		0		0	0	0	1	0	0	0		0
総　計	11	2	53	1	67	1	2	1	3	5	76	64	23	11	28	3	23	2	154	230

生産地	龍泉窯系															
器種	碗										小碗		碗・小碗	Ⅲ		
大分類	Ⅰ類										Ⅰ類		Ⅰ類	Ⅰ類		
小分類	-	Ⅰ-1	Ⅰ-1b	Ⅰ-2	Ⅰ-2～4	Ⅰ-2b	Ⅰ-4	Ⅰ-4b	Ⅰ-6a	浅形碗？	-	Ⅰ-1b	合計	-	Ⅰ-b	合計
1　区	9	1	1	7	41	1	4	0	2	0	0	1	67	1	0	1
2　区	95	2	1	4	84	0	7	1	0	0	1	0	195	4	0	4
3　区	2	0	1	3	11	0	2	0	1	1	0	0	21	1	2	3
4区西側	11	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	0	18	0	1	1
4区東側	6	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0
位置不明	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
総　計	123	3	3	16	144	2	14	2	3	1	1	1	313	6	3	9

生産地	龍泉窯系																
器種	碗	小碗	碗・小碗	碗					碗	碗	碗			坏			水注
大分類	Ⅰ×Ⅱ	Ⅰ×Ⅱ	Ⅰ×Ⅱ	Ⅱ類					Ⅱa×BⅡ	Ⅱb×Ⅲ-2c	Ⅲ類			Ⅲ類			体部瓜形
小分類	-	-	合計	-	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	合計			-	Ⅲ-2c	合計	Ⅲ-3a	Ⅲ-3c	合計	薄胎・厚釉
1　区	12	1	13	3	2	49	1	55	0	0	3	1	4	0	0	0	1
2　区	35	1	36	5	0	50	0	55	1	1	1	0	1	0	0	0	2
3　区	7	1	8	3	4	27	0	34	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4区西側	4	0	4	0	0	11	0	11	0	0	1	0	1	1	1	2	0
4区東側	1	1	2	1	1	17	1	20	0	0	0	3	3	0	0	0	0
位置不明	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総　計	60	4	64	12	7	154	2	175	1	1	5	4	9	1	1	2	3

生産地	龍泉窯系																-
器種	碗																
大分類	Ⅳ類			Ⅳ～	Ⅳ×上田Ⅱ			上田Ⅱ					上田Ⅱ～	E	上田Ⅲ	上田Ⅳ	不明
細分類	-	Ⅳイ	合計	-	Ⅳ×BⅡ	Ⅳ×DⅡ	合計	BⅡ	CⅡ	DⅡ	DⅡ´	合計			BⅢ	BⅣ	合計
1　区	0	0	0	24	4	10	14	2	3	3	2	10	0	3	0	7	52
2　区	0	0	0	11	1	2	3	0	0	2	1	3	0	2	0	1	39
3　区	0	0	0	7	2	4	6	0	0	0	1	1	0	1	0	0	6
4区西側	0	0	0	2	0	1	1	1	0	1	0	2	0	1	1	0	4
4区東側	5	1	6	10	3	15	18	1	2	7	10	20	2	4	0	2	28
位置不明	1	1	2	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	3
総　計	6	2	8	54	10	33	43	4	5	14	14	37	2	12	1	10	137

生産地	龍泉窯系											-		
器種	Ⅲ		坏×Ⅲ	稜花Ⅲ・盤			香炉	小壺	坏	Ⅲ	壺	不明		
大分類	Ⅳ×DⅡ	Ⅳ～	Ⅳ～	Ⅲ	盤	合計	F×G	F×G	Ⅳ×上田Ⅱ	不明	不明	不明		
細分類										合計	合計	合計		
1　区	1	2	1	1	1	2	2	1	0	1	0	38		
2　区	0	1	0	1	0	1	0	0	0	3	0	22		
3　区	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8		
4区西側	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	3		
4区東側	0	6	0	1	0	1	0	0	0	2	0	7		
位置不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
総　計	1	10	1	3	2	5	2	1	1	7	1	81		

表29　中国青花・五彩分類表

遺物 / グリッド	中国青花																			五彩	合計
	景徳鎮系												潮州窯系								
	碗				皿						碗or皿	合計	碗		皿			不明	合計	皿	
	B群	C群	E群	不明	B１群	B２群	C群	E群	F群	不明	B群		C群	不明	B１群	C群	不明				
１　区	3	3	0	8	0	0	2	1	0	0	4	21	0	0	0	0	4	1	5	0	26
２　区	0	4	0	0	0	0	1	0	0	1	0	6	0	1	0	1	0	0	2	0	8
３　区	6	0	3	5	1	2	6	2	1	3	0	29	0	2	3	3	2	5	15	1	45
４区西側	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
４区東側	2	6	2	1	0	1	0	1	0	0	0	13	5	1	0	0	0	0	6	0	19
位置不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総　計	11	15	5	14	1	3	9	4	1	4	4	71	5	4	3	4	6	6	28	1	100

表30　中国陶器分類表

胎土	A群						B群				C群			その他								合計
	A-2	A-2	A-2	A-2	A-2	A-2																
器種	鉢Ⅳ－１	鉢Ⅳ－２	鉢	水注Ⅴ	壷・水注	不明	壷・水注・耳壷	鉢Ⅲ	鉢Ⅵ	不明	壷	盤	不明	甕Ⅲ	甕？	鉢Ⅰ－１b	鉢Ⅰ	鉢？	天目茶碗	小壺（茶入）	壷	壷・水注	
１　区	0	0	0	0	0	0	5	0	3	9	2	1	0	1	8	0	4	0	13	2	4	4	56
２　区	2	0	0	0	0	6	7	0	0	35	2	1	3	0	28	1	3	1	3	1	5	0	98
３　区	0	1	0	1	1	2	3	1	0	7	4	2	0	0	4	3	5	2	3	0	31	0	70
４区西側	0	0	0	0	0	0	4	1	0	3	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	11
４区東側	1	0	1	0	1	0	4	0	0	2	4	0	0	1	1	0	0	1	2	0	0	0	18
位置不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
総　計	3	1	1	1	2	8	23	2	3	56	12	4	5	2	41	4	13	4	21	4	40	5	255

表31　朝鮮王朝陶磁分類表

遺物 / グリッド	白磁			施釉陶磁						象嵌陶磁				合計
	碗	皿	合計	碗	皿	瓶	壷・甕	不明	合計	碗	皿	瓶	合計	
１　区	5	0	5	19	10	0	0	1	30	1	1	0	2	37
２　区	1	0	1	4	1	0	0	1	6	0	0	0	0	7
３　区	0	0	0	7	1	3	2	0	13	0	0	1	1	14
４区西側	0	0	0	1	0	1	0	1	3	0	0	1	1	4
４区東側	0	1	1	8	7	1	0	1	17	5	0	3	8	26
位置不明	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	2
総　計	6	1	7	39	20	6	2	4	71	6	1	5	12	90

表32　瓦・土製品・石製品分類表

遺物 / グリッド	瓦					土製品			石製品								
	丸瓦	平瓦	桟瓦	不明	合計	土錘	その他	合計	石鍋	砥石	石錘	石臼	茶臼	石造物	叩石・凹石類	不明	合計
１　区	3	15	0	1	19	96	0	96	6	1	0	0	0	0	0	0	7
２　区	8	26	0	1	35	29	1	30	8	3	1	0	0	0	1	0	13
３　区	1	11	0	0	12	29	0	29	6	3	0	0	1	0	0	0	10
４区西側	0	5	0	0	5	17	0	17	3	1	0	0	0	0	0	0	4
４区東側	6	26	1	0	33	57	0	57	3	8	0	1	1	2	0	2	17
位置不明	0	1	0	0	1	6	1	7	0	1	0	0	0	0	0	0	1
総　計	18	84	1	2	105	234	2	236	26	17	1	1	2	2	1	2	52

表33　鍛冶・鋳造関連遺物分類表

（単位：g）

遺物 / グリッド	羽口	炉壁	ガラス質溶融物	鍛冶滓				椀形鍛冶滓				含鉄鉄滓or鉄塊系遺物				合計
				なし	(△)	H(○)	M(◎)	なし	(△)	H(○)	M(◎)	(△)	H(○)	M(◎)	L(●)	
１　区	0.0	406.1	58.4	429.8	187.7	68.5	78.4	466.6	402.5	185.9	282.6	406.8	549.5	420.3	273.3	4216.5
２　区	0.0	19.1	4.7	41.0	22.9	75.7	0.0	282.9	0.0	2103.8	0.0	3.7	0.0	0.0	11.8	2565.5
３　区	0.0	40.1	0.0	93.6	31.9	5.7	0.0	0.0	0.0	807.2	0.0	0.0	97.7	90.8	0.0	1166.9
４区西側	147.2	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	70.0	24.0	0.0	0.0	88.9	0.0	62.7	395.4
４区東側	27.3	817.2	278.9	109.8	54.8	51.9	0.0	0.0	49.8	399.2	0.0	11.4	57.2	28.5	30.0	1915.9
総　計	174.5	1282.4	344.5	674.2	297.4	201.8	78.4	749.5	522.3	3520.2	282.6	421.9	793.3	539.5	377.9	10260.3

第 4 章　専光寺脇遺跡

第 1 節　調査の概要

1　遺跡の概要

専光寺脇遺跡は、益田道路の建設計画がされる以前に既に専光寺脇古墳群として周知された遺跡で、今回の発掘調査箇所から南東に尾根を登った位置に円墳が２基存在していた（現在は墓地が営

第 151 図　専光寺脇遺跡調査区位置図（S＝ 1/2,500）

まれている)。その後、島根県教育委員会によって益田道路建設予定地内の遺跡分布調査が平成10年度に行なわれ、このときに益田道路建設予定地にも遺構が存在する可能性が考えられたため、この部分は新たに専光寺脇古墳群の範囲に含められることとなった。

平成18年度には益田道路建設に伴う発掘調査が実施され、古墳ではなく、弥生時代の方形貼石墓１基（１号墓)、弧状の貼石列を伴う貼石墓１基（２号墓)、木棺墓・土坑墓などが確認された。このため、本報告にあたって専光寺脇古墳群の名称では遺跡の時代・性格について混乱が生じると考え、当初の専光寺脇古墳群の範囲をも包括するかたちで、遺跡名称を専光寺脇遺跡に変更することとした。

２　調査組織

調査組織は下記のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成18年度　現地調査

［事務局］　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長)、坂本憲一（同総務グループ課長)、
宮澤明久（同調査第２グループ課長)

［調査員］　東山信治（同文化財保護主任)、谷徹（同教諭兼文化財保護主任)、
渡辺　聡（同調査補助員)

平成19年度　報告書作成

［事務局］　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長)、坂本憲一（同総務グループ課長)、
丹羽野裕（同調査第４グループ課長)

［調査員］　東山信治（同文化財保護主任)、竹下浩充（同教諭兼文化財保護主任)

発掘作業員の雇用など現地での発掘作業については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は以下のとおりである。

社団法人中国建設弘済会島根支部

平成18年度

［現場担当］　藤井敏治（技術員)

［事務担当］　池野真由美（事務員)

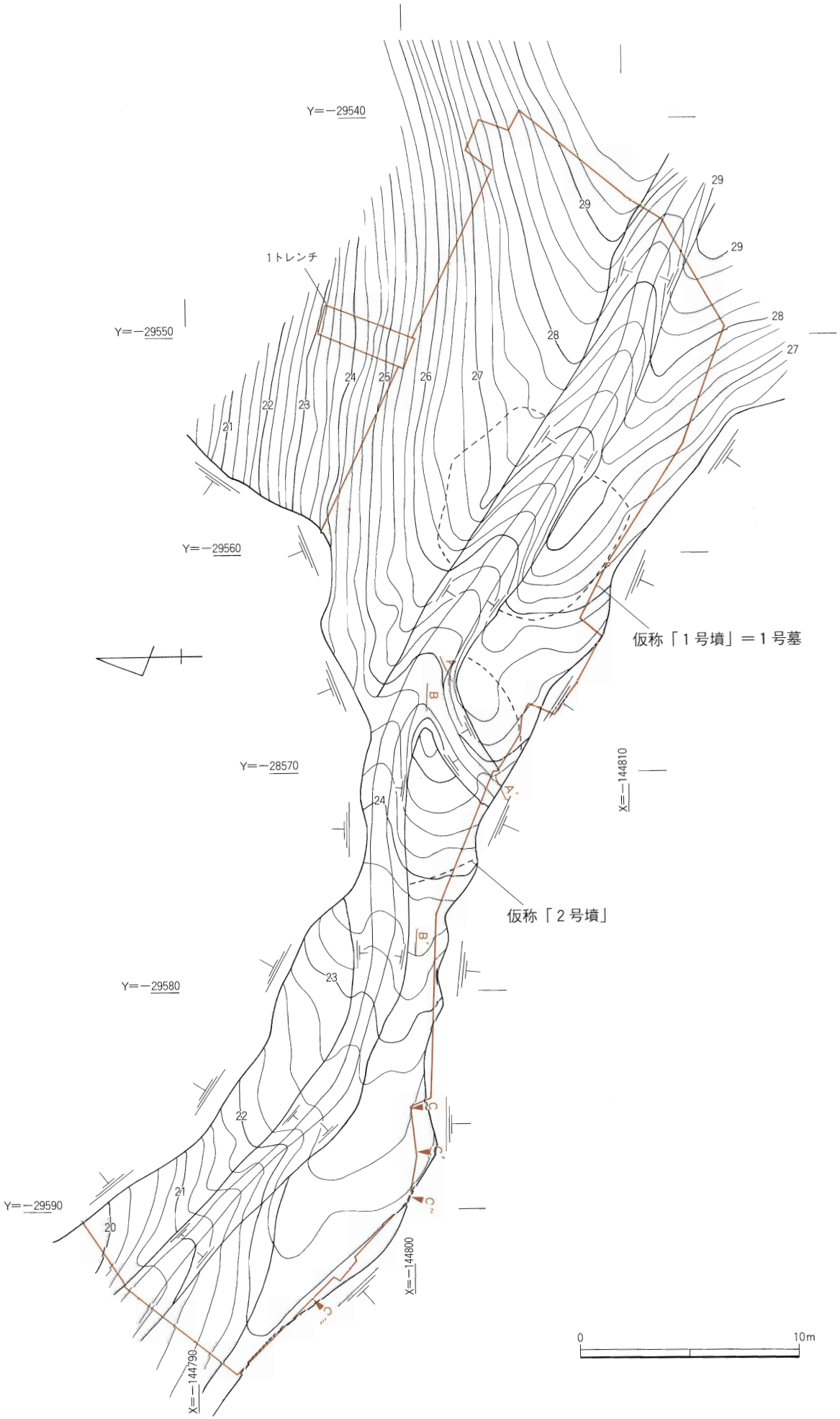
３　調査の経過

平成18年度に益田道路建設に伴い発掘調査を実施した。

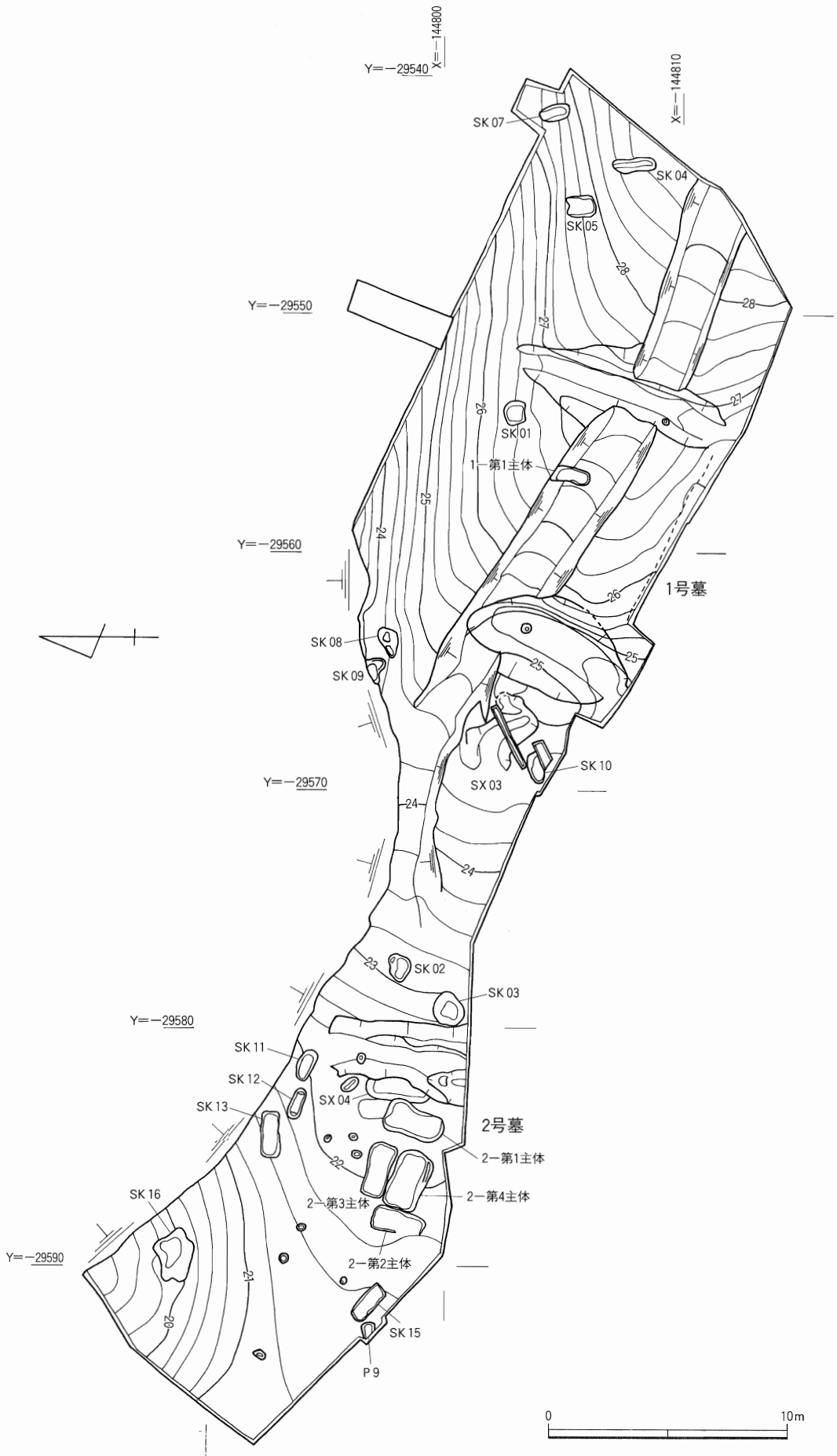
発掘調査範囲は丘陵尾根上の標高約20～30ｍの部分で、尾根の北側と南側の斜面は地崩れによって大部分で本来の地形が失われており、また、地崩れの影響を受けていなかった北東側の斜面に１トレンチを設定したが、遺構・遺物は確認できなかったため調査の対象から外した。

地表面の観察から墳丘状の高まりが認められたため、立木の伐採後、５月15～19日にかけて平板測量を行ない、25㎝間隔で等高線を記録した。

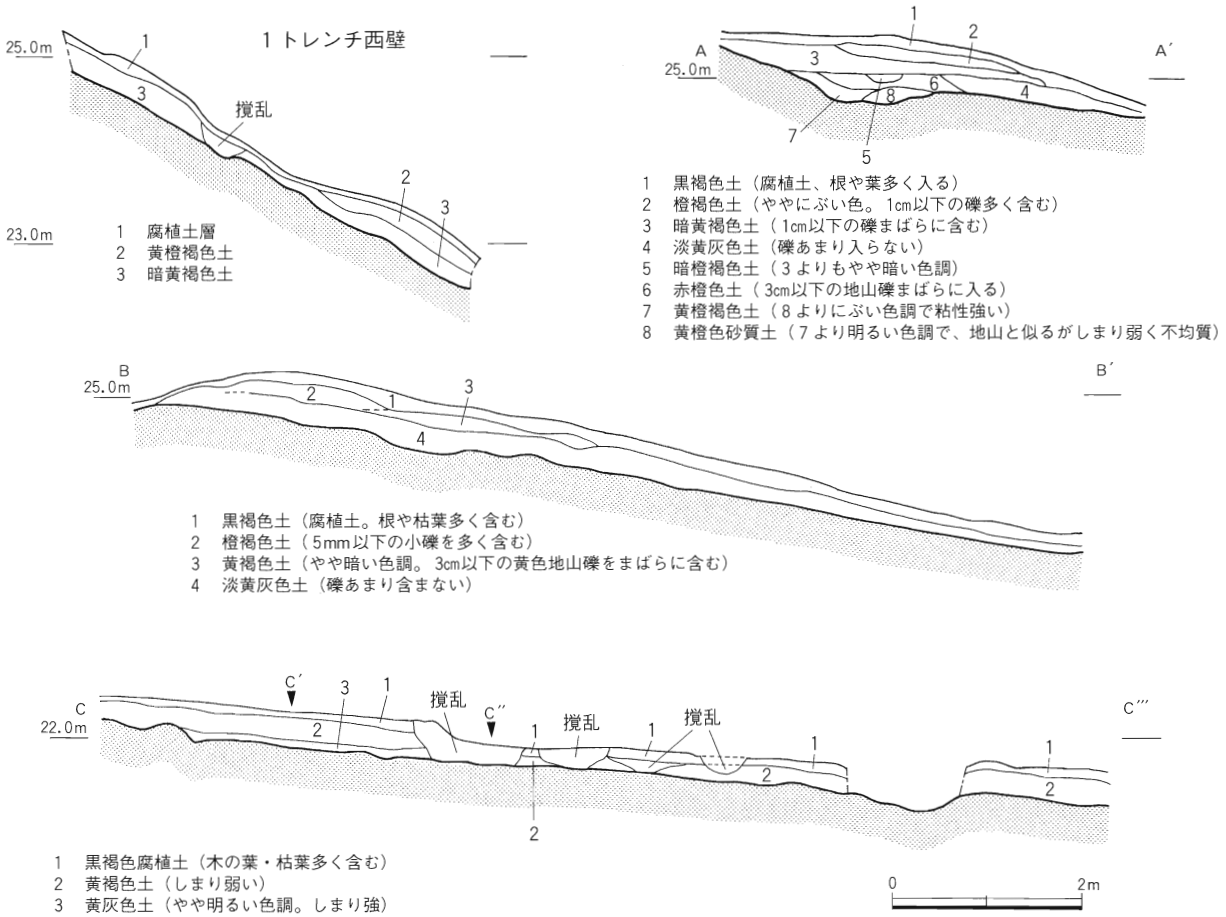
その後、５月23日から表土掘削を開始したが、木の根や切り株が多いうえに、遺跡の地形の制約から人力で排土処理を行なったため、掘削作業はやや難航した。５月下旬に１号墓の南斜面で貼石



第 152 図　調査前地形測量図（S＝ 1/250）



第 153 図　調査後地形測量図（S＝ 1/250）



第154図　調査区土層図（S＝ 1/80）

の一部が見つかり、その後、１号墓の東側や西側でも貼石や溝が確認されたため、これらの検出・掘削・記録作業を行なった。また、７月上旬に当初設定した調査区の西端付近で、石列を伴う溝（のちに２号墓と判明）などが認められたため、調査区を西側に拡張した。

８月17日には渡邊貞幸氏（島根大学法文学部教授）、仁木聡氏（島根県立古代出雲歴史博物館）から、８月23日には藤田憲司氏（大阪府立近つ飛鳥博物館副館長）から現地調査の指導を受けた。

現地説明会を９月２日に開催し、約110人の参加者があった。９月８日には調査区の空中写真撮影を行ない、その後、１号墓と２号墓の貼石を取り外し、１号墓の盛土や残った遺構の埋土を掘削し、これらと並行して遺構の記録・測量をした。９月21日に現地調査を終了した。

最終的な発掘調査面積は約500㎡で、検出された遺構は、方形貼石墓１基、弧状の貼石列を伴う貼石墓１基、土坑墓・木棺墓４基などがある。

平成19年度には、遺構図の整理、トレース、図版作成、原稿執筆など、報告書作成作業を行なった。

なお、調査箇所現地は発掘終了後、道路建設工事が行なわれたため、遺構は残存していない。

第２節　調査の結果

１　調査前の地形（第152図）

丘陵尾根上に道が通っており、尾根の北側と南側の斜面は地崩れによって本来の地形が失われており、遺跡の遺存状態はあまりよくないように思われた。しかし、発掘調査前の地表面の観察では墳丘状の高まりが２か所確認された。

１か所は丘陵尾根上の標高26～27mの部分で、規模は約7.5mと推測されたが、中央部が道によって切断されているため、墳形は定かではなかった。「１号墳」と仮称することとした。

もう１か所は、「１号墳」の西側にある標高24～25.5mの部分で、規模は約10mと推測したが、二又に分かれた山道によって「墳丘」が分断され、さらに道の北側は地崩れによって元の地形が失われている。「２号墳」と仮称した（のちに２号墓と呼ぶ部分とは別の地点である）。

２　発掘調査後の地形（第153・154図）

発掘調査の結果、「１号墳」と仮称した部分で、尾根筋の上下を溝によって切断して造り出された方形の墳丘が確認された。墳丘は貼石を伴っていたことから、古墳ではなく弥生時代の方形貼石墓の可能性が高いと考え、１号墓と呼ぶこととした。

一方、「２号墳」と仮称した部分は、東側は１号墓との間にある溝によって画されていたものの、西側では溝などによる区画は存在せず、墳丘の立ち上がりを捉えることができなかった。第154図のＡ－Ａ'ライン、Ｂ－Ｂ'ラインでも墳丘の盛土と判断される土層は確認できなかった。なお、この部分ではSX03という不定形の遺構が検出されたが、その性格は不明である。

１号墓から約20m西側では、貼石列や溝によって区画された４基の墓壙が確認されたため、この部分を２号墓と呼ぶこととした。また、２号墓の北側や西側でも墓壙が４基、土器埋納遺構１基が検出された。このほか調査区全体で土坑が10基確認された。

３　１号墓

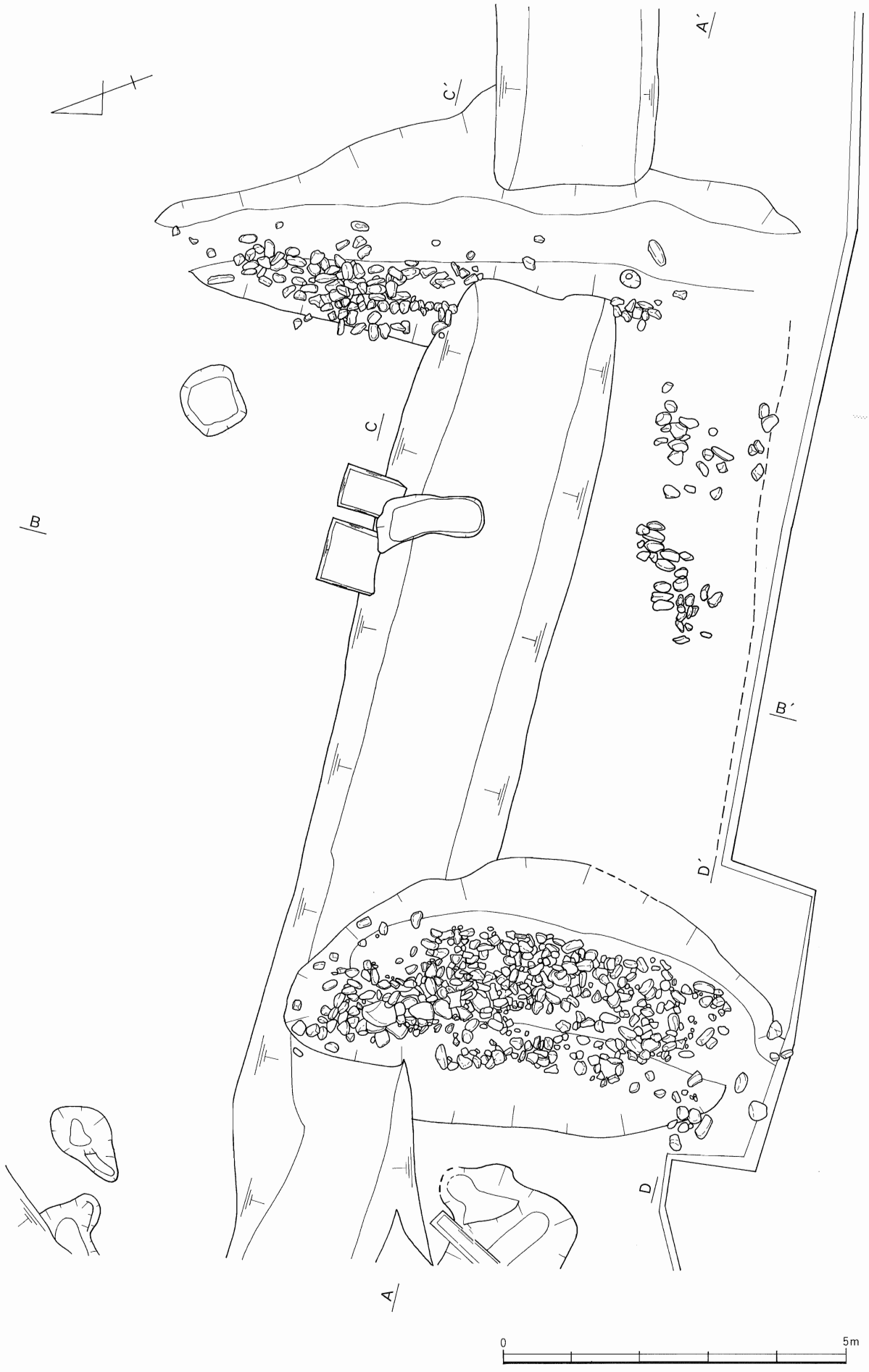
（１）墳丘の規模・形態（第155～157・159図）

１号墓は調査区東側の丘陵尾根上に位置しており、尾根筋の上下を溝によって切断して、墳丘が造られている。墳丘の規模は長さ9.6m、幅8.8m（東側の墳裾で計測）で、高さは西側の墳裾から墳丘の最高所で約２m、東側の墳裾から墳丘の最高所で約0.5mとなっており、墳丘には厚さ20cm程度の盛土が盛られている。ただし、墳丘の中央部が尾根筋上にのびる道によって大きく削られていることから、本来はこれよりもさらに墳丘が高かったと考えられる。

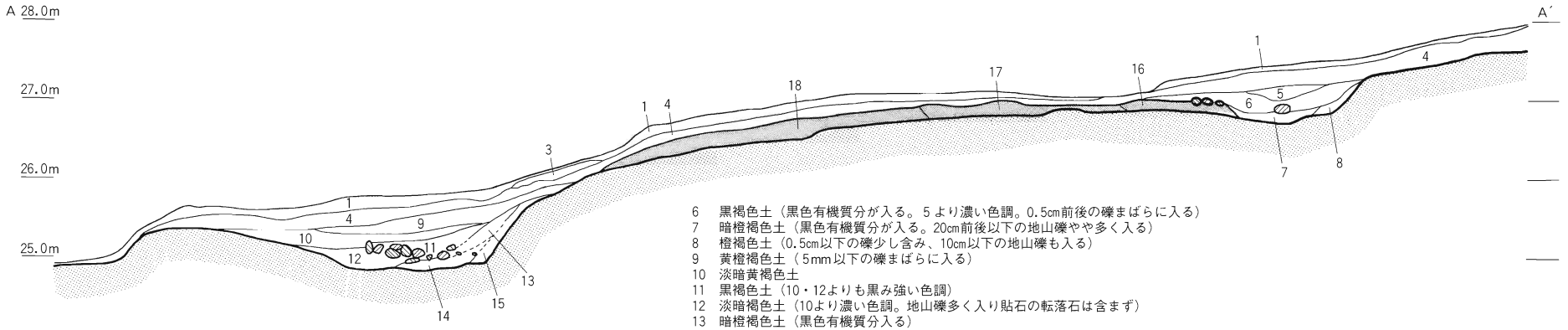
１号墓の東溝は尾根筋を完全に断ち切っていたが、西溝は墳丘の北西側を掘り残しており、しかも西側の墳端が弧状になるように掘られていた。このため、１号墓の南西隅は外側に突出するかたちとなっている。西側の墳丘の立ち上がりは50°で、東側のそれと比べてかなり急である。

（２）貼石（第158図）

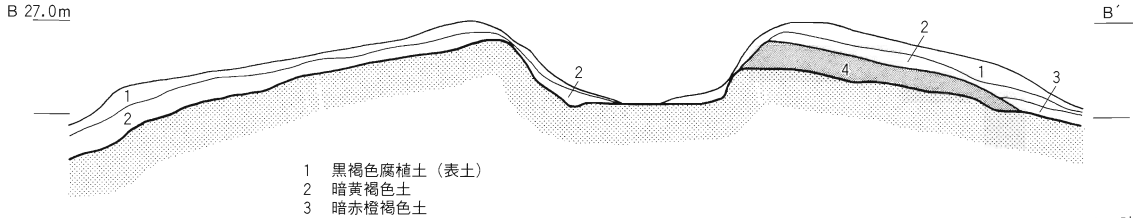
墳丘の東側斜面と南側斜面で貼石が確認された。東側斜面の貼石は４列が残っており、長さ20cm



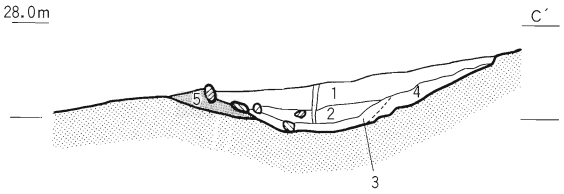
第 155 図　１号墓貼石検出状態（転落石含む）（S＝ 1/80）



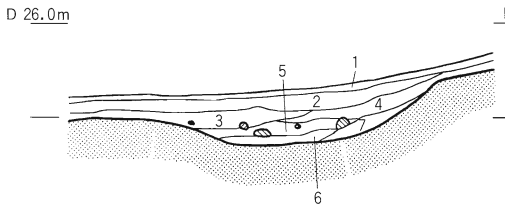
1　黒褐色腐植土（表土。木の葉や根多く入る）
2　赤橙色土（2cm以下の赤色や黄色の地山礫・石英多く入る）
3　黄橙色土（2cm以下の黄色地山礫多く入る）
4　淡暗黄褐色土（しまり弱い。0.5cm前後の礫まばらに含む）
5　暗褐色土（黒色有機質分が入る。0.5cm前後の礫まばらに含む）
6　黒褐色土（黒色有機質分が入る。5より濃い色調。0.5cm前後の礫まばらに入る）
7　暗橙褐色土（黒色有機質分が入る。20cm前後以下の地山礫やや多く入る）
8　橙褐色土（0.5cm以下の礫少し含み、10cm以下の地山礫も入る）
9　黄橙褐色土（5mm以下の礫まばらに入る）
10　淡暗黄褐色土
11　黒褐色土（10・12よりも黒み強い色調）
12　淡暗褐色土（10より濃い色調。地山礫多く入り貼石の転落石は含まず）
13　暗橙褐色土（黒色有機質分入る）
14　黒褐色土（黒色有機質分が濃く入る）
15　橙褐色土（地山に似るがややにぶい色調で、しまり弱い。砂っぽく、ほとんど含まない）
16　褐色土（17より濃くやや赤みおび、やや暗い色調。礫ほとんど含まない）
17　淡褐色土（5cm以下の地山礫やや多く含む。赤褐色土や黄褐色土まだらに入る）
18　淡黄色土（5cm以下の地山礫まばらに含む）



1　黒褐色腐植土（表土）
2　暗黄褐色土
3　暗赤橙褐色土
4　淡黄色土（墳丘盛土）

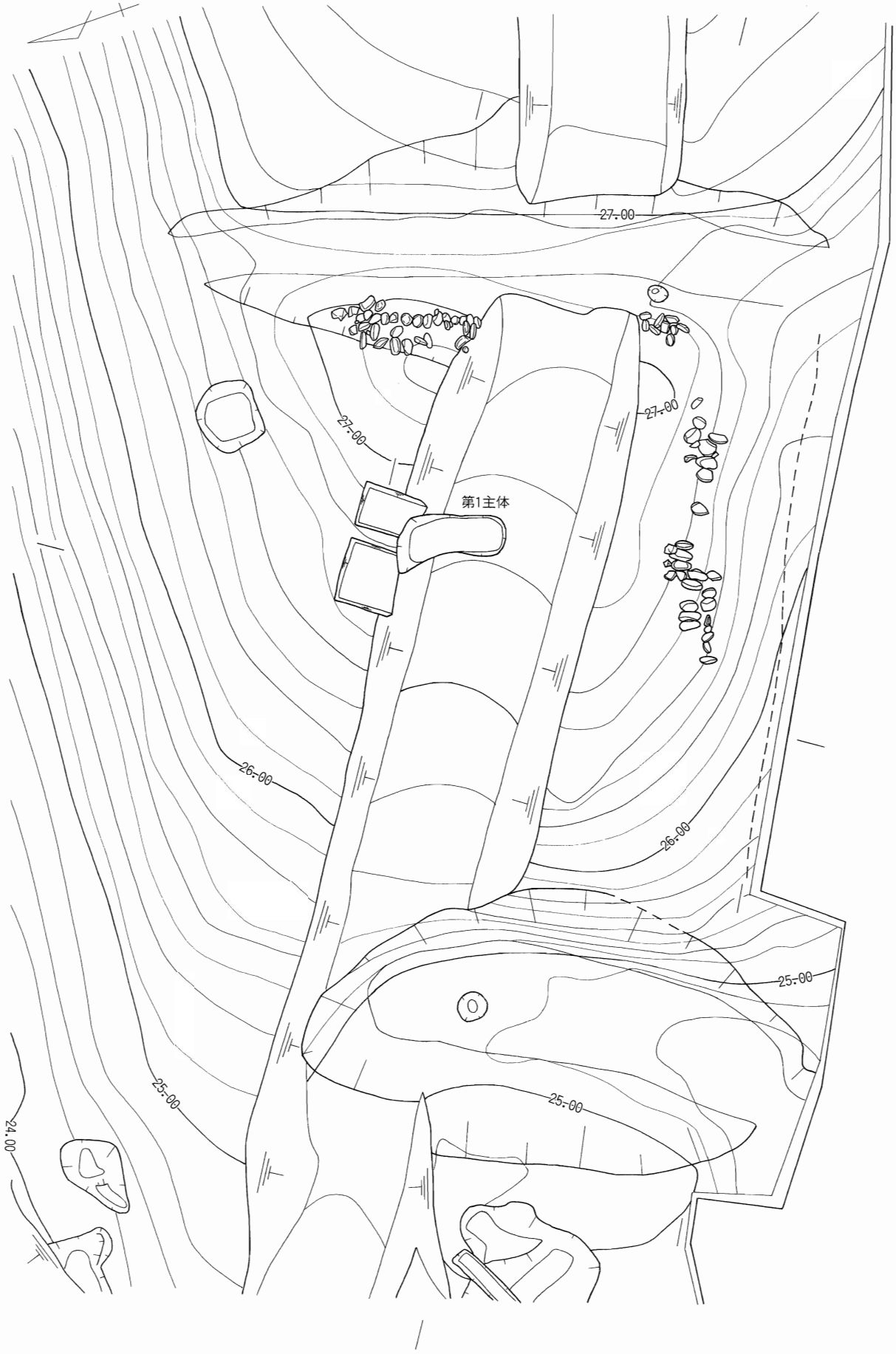


1　暗褐色土（やや黄色みおびる。0.5cm前後の礫まばらに入る）
2　黒褐色土（黒色有機質分が濃く入る。3cm前後の地山礫や5mm大の小礫含む。焼土塊や2cm以下の炭を含む）
3　暗橙褐色土（5cm以上の黄色地山礫をやや多く含む。焼土や2cm以下の炭を含み、4よりしまり弱い。部分的に黒みをおびた部分がまだらに入る）
4　橙褐色土（地山に似るがややにぶい色調でしまりやや弱い。5cm以上の黄色地山礫をやや多く含む）
5　褐色土（貼石の置き土。やや暗い色調で礫あまり含まない）



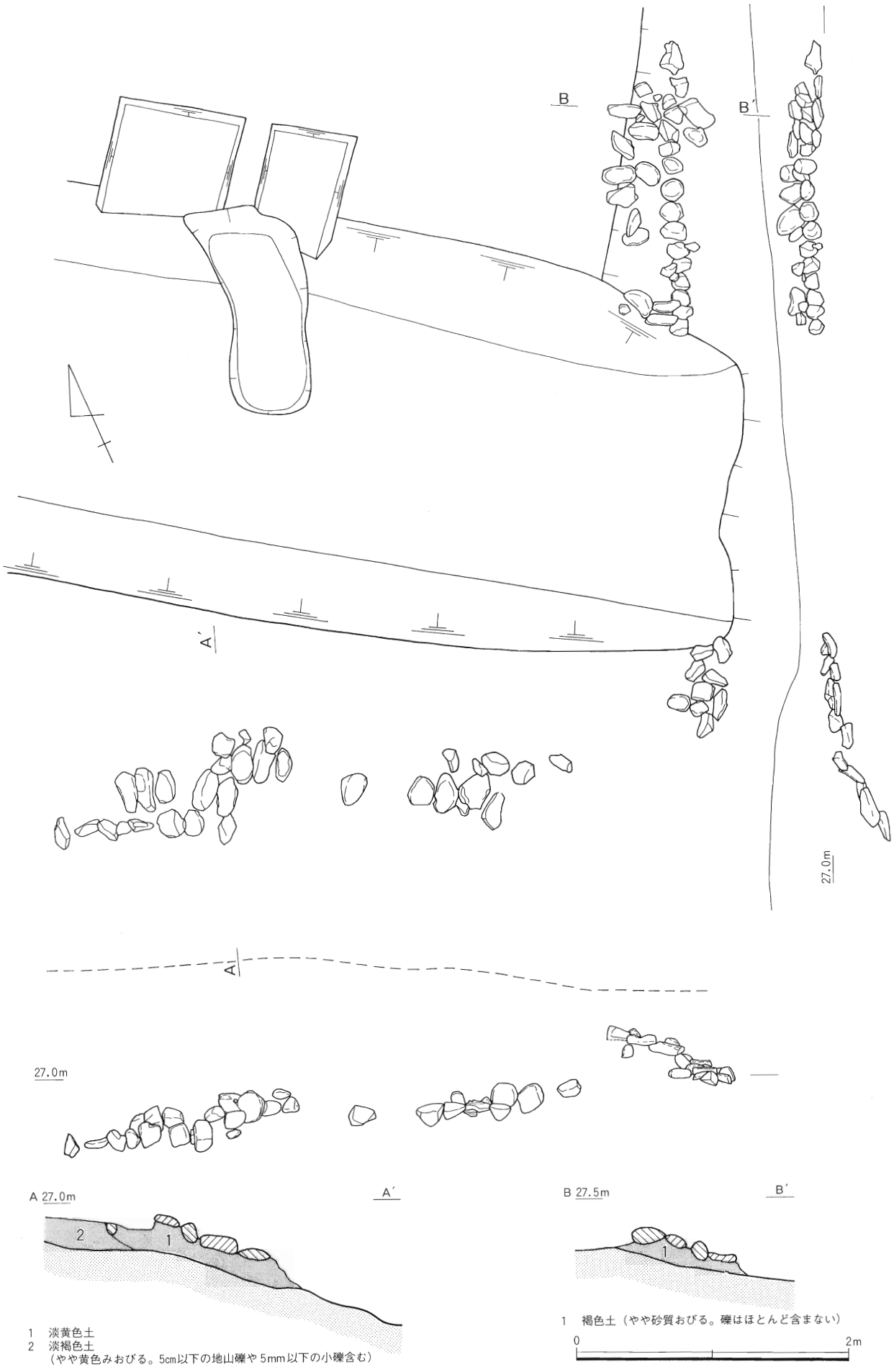
1　黒褐色腐植土（根・葉多く入る）
2　淡黄褐色土（ややにぶい色調。しまり弱）
3　暗黄褐色土（黒色有機質分含む。礫多く含む）
4　黄橙褐色土（2より濃い色調）
5　暗褐色土（貼石転落石と思われる人頭大の礫多く入る。黒色有機質分が濃く入る）
6　暗褐色土（貼石転落石は含まず、上面に石が入る。10cm大の黄色地山礫を多く含む。5より黒みはうすい）
7　橙褐色砂質土（地山に似るがややにぶい色調、やや砂っぽい）

第156図　1号墓土層図（S＝ 1/80）

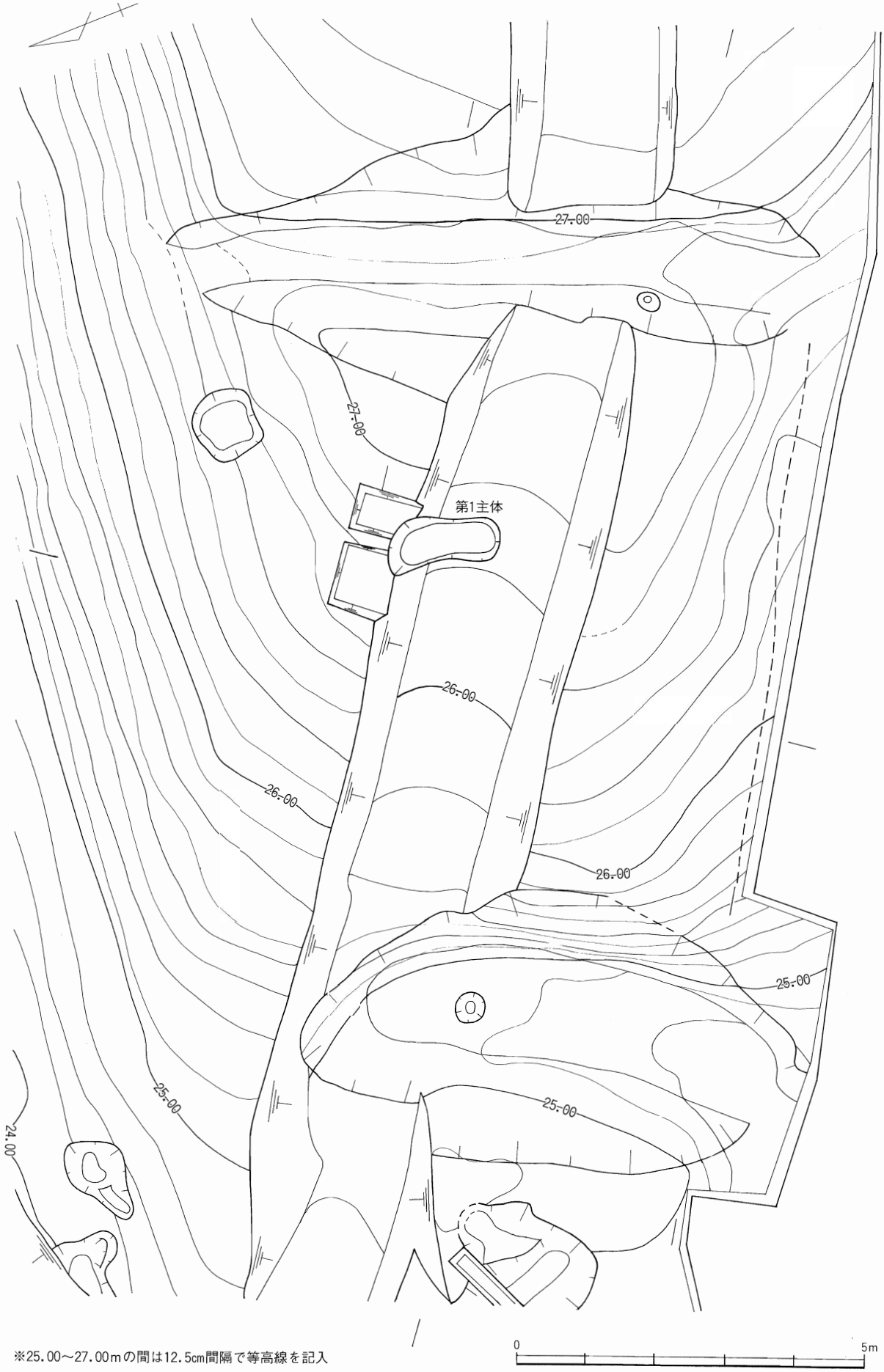


※25.00～27.00ｍの間は12.5㎝間隔で等高線を記入

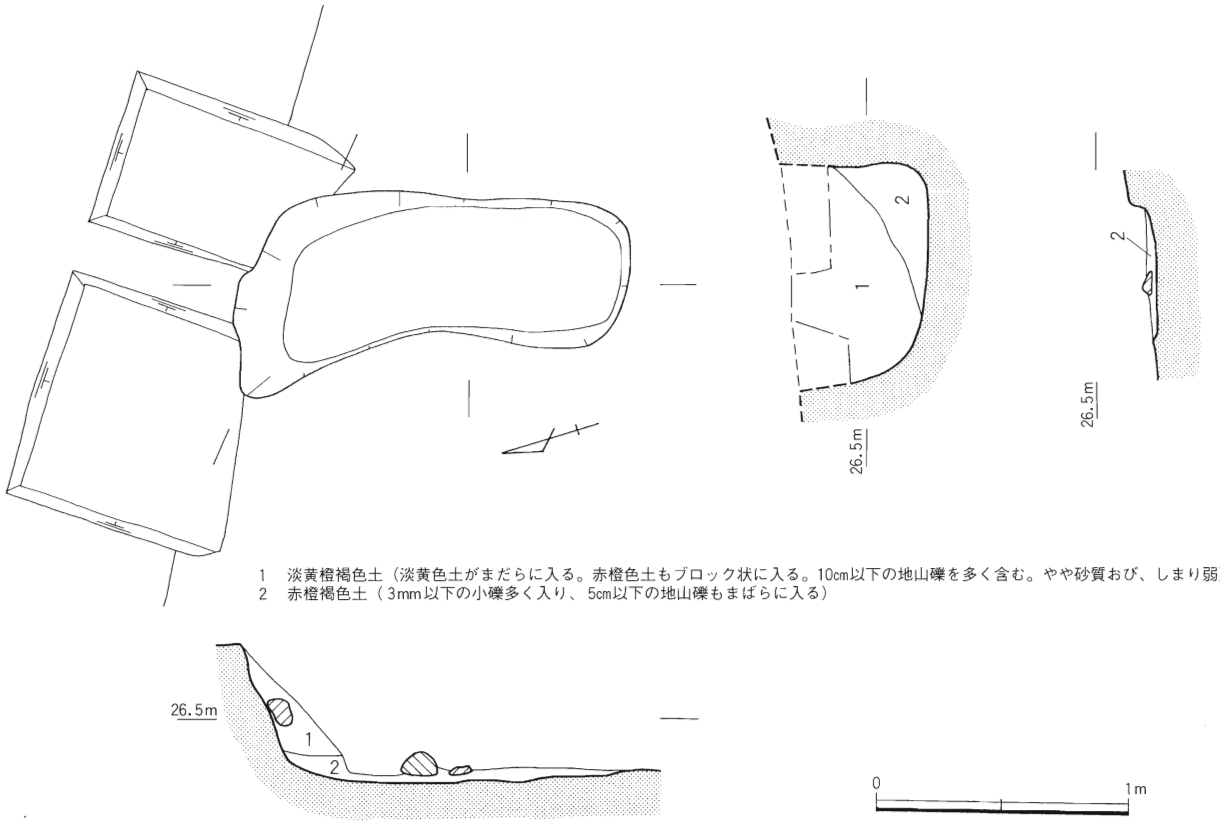
第 157 図　１号墓墳丘測量図（S＝ 1/80）



第158図　1号墓貼石実測図（S＝ 1/40）



第 159 図　１号墓墳丘測量図（貼石・盛土除去後）（S＝ 1/80）



第160図　１号墓第１主体（S＝ 1/30）

前後の川原石を墳丘斜面に対して縦長に置き、横方向に目地をそろえるようにして並べられていた。南側斜面では長さ30cm程度と東側斜面と比べ一回り大きい川原石が用いられており、こちらも石を縦長に置き、横方向に目地をそろえるように並べられていた。東側・南側斜面とも貼石が残存していたのは墳丘斜面の中腹よりも上であり、墳裾には貼石が存在しなかったようである。なお、貼石は地山の直上ではなく、10cm程度盛土（置土）がされた上に施されていた。

墳丘西側斜面には貼石が残存していなかったが、西溝には貼石の転落したものと考えられる石が多数認められた。ただし、石の検出状況を見ると、石が溝の底面から浮いた位置でほぼ水平に堆積していること、石が墳端から外側へ離れた位置に見られることなど、１号墓の墳丘から転落したと考えるには不自然な点もある。

（３）主体部（第160図）

墳丘中央部からやや東寄りの位置で主体部の可能性のある土坑が１基（第１主体）確認された。第１主体は現存長150cm、幅65cm、深さ54cmの長方形のものであるが、北端部を除いて上部が道によって削れられており、道の部分は深さ４cm程度しか残存していない。長軸は見かけ上、尾根筋に対して直交方向を向いているが、本来は長軸が尾根筋と平行しており、道に削られたため、主体部の東側の短辺のみが残存している可能性も考えられる。

（４）時期

１号墓は、墳丘の形態や貼石のあり方から弥生時代の方形貼石墓の可能性が考えられるが、その時期を特定できる遺物は出土していない。なお、西溝で採取された炭化物３点の放射性炭素年代測定を実施したが、分析結果にばらつきが見られ、有効なデータは得られなかった。

4　２号墓

（１）２号墓の形態と外部施設（第154・161～163図）

２号墓は調査区の西側の丘陵尾根上で、標高22m前後のところに位置する貼石墓である。主体部とみられる４基の土坑（第１～４主体）があり、この東側は溝や貼石列によって区画されているが、墓域の西側と北側では、溝などの区画施設は存在しない。

２号墓の東溝は、調査区南壁から北方向にのびる長さ5.6m以上、幅2.4mの溝で、尾根筋を切断するかたちで掘られている。この溝の埋土中には貼石列が認められ、また、溝の西側はSX04と切りあっている。第163図Ｂ－Ｂ’・Ｃ－Ｃ’ラインの土層をみると、SX04の埋土（５・６層）を切るかたちで東溝が掘り込まれており、東溝の埋土である３・４層の上に貼石列が設けられていることが確認できる。このことから、東溝はSX04よりも新しくつくられたものと理解され、また、平面的に把握することはできなかったが、土層から貼石列以前に掘り込まれた古段階のものと、貼石列を伴う新段階のものに分けることができる。貼石列は、古段階の溝の埋没後に新段階の溝が掘りなおされてから貼られたものか、あるいは、古段階の溝の一部を埋め戻した後に設けられたものと推測される。なお、第163図Ａ－Ａ’ラインでは、貼石列の西側で古段階と新段階の溝を掘り込んだ落ち込み（５～７層）が見られるが、この部分の性格や１号墓とどのように関連したものかは不明である。

貼石列は、長さ3.9mの弧状のもので、中央部が東側に向かってやや張り出したかたちになっている。石の並びは、上面を水平にして並べられた上段と、溝の斜面に面をそろえて貼り付けられた下段の２段に分けられ、石の重なり方から上段の後に下段が並べられたと考えられる。石は、川原石のほかに地山に含まれる円礫も用いられており、大きさは拳大のものから長さ30cmを超える大形のものが見られる。

発掘調査では２号墓に明確な墳丘は確認できなかった。ただし、主体部が検出された標高は21.80～22.25mであるのに対し、貼石列の上面の標高は約22.5mであることから、発掘調査時の遺構検出面よりも本来の遺構面はかなり高いレベルにあったと推測され、小規模な墳丘をもっていた可能性も想定される。第154図Ｃ－Ｃ’ラインの３層については、土層の広がりが２号墓の範囲内に収まることから２号墓の盛土とも考えられる。

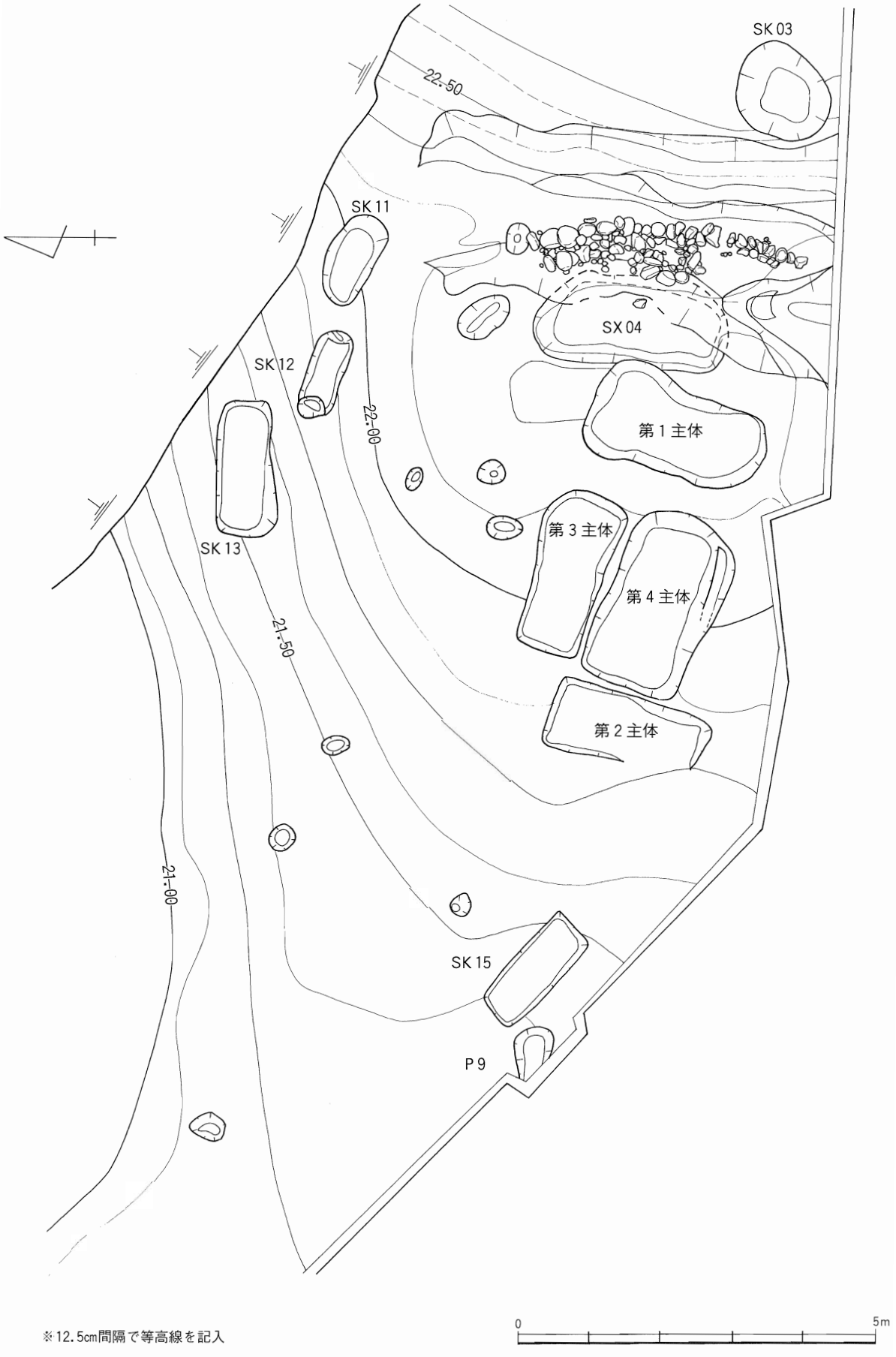
（２）主体部

第１主体（第164図）

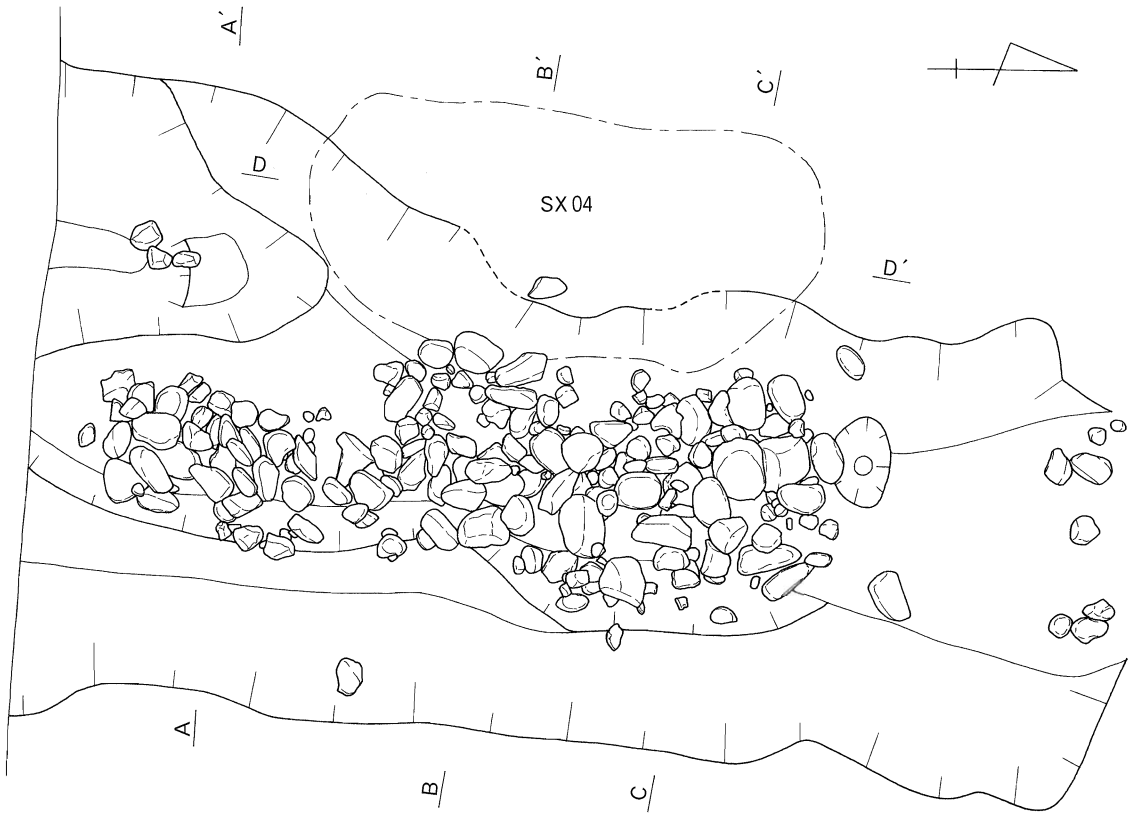
長さ246cm、幅138cm、深さ12cmの隅円方形の墓壙を持つものであるが、深さは本来これよりもあったと考えられる。主軸方向はＮ－16°－Ｅで、尾根筋の方向に対して直交している。墓壙の北東隅はSX04を切っている。遺構検出面よりもやや高いレベルで弥生土器の壷（１）が出土した。算盤玉形の体部をもつ直口縁の壷で、頸部に１条の貼付突帯がめぐり、外面に赤色顔料が塗布されている。底部側は欠損しているが、器形から台付壷の可能性もある。弥生時代中期中葉から後葉のものと考えられる。

第２主体（第165図）

長さ219cm、幅96cm、深さ６cmの長方形の墓壙をもつものであるが、南西側はほとんど立ち上がりが残っていない。ただし、貼石列上面をもとに考えれば、本来の墓壙の掘り込み面はこれより高

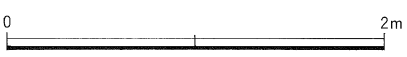


第 161 図　2 号墓周辺遺構図（S＝ 1/80）

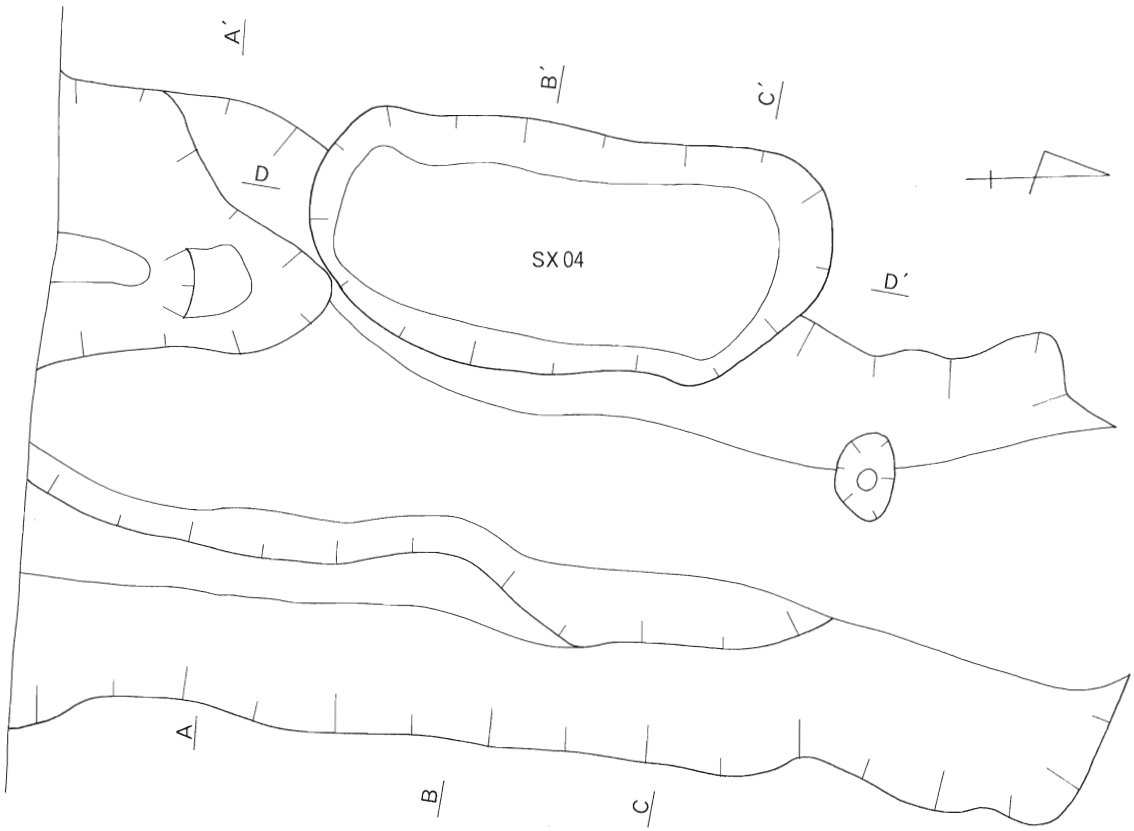


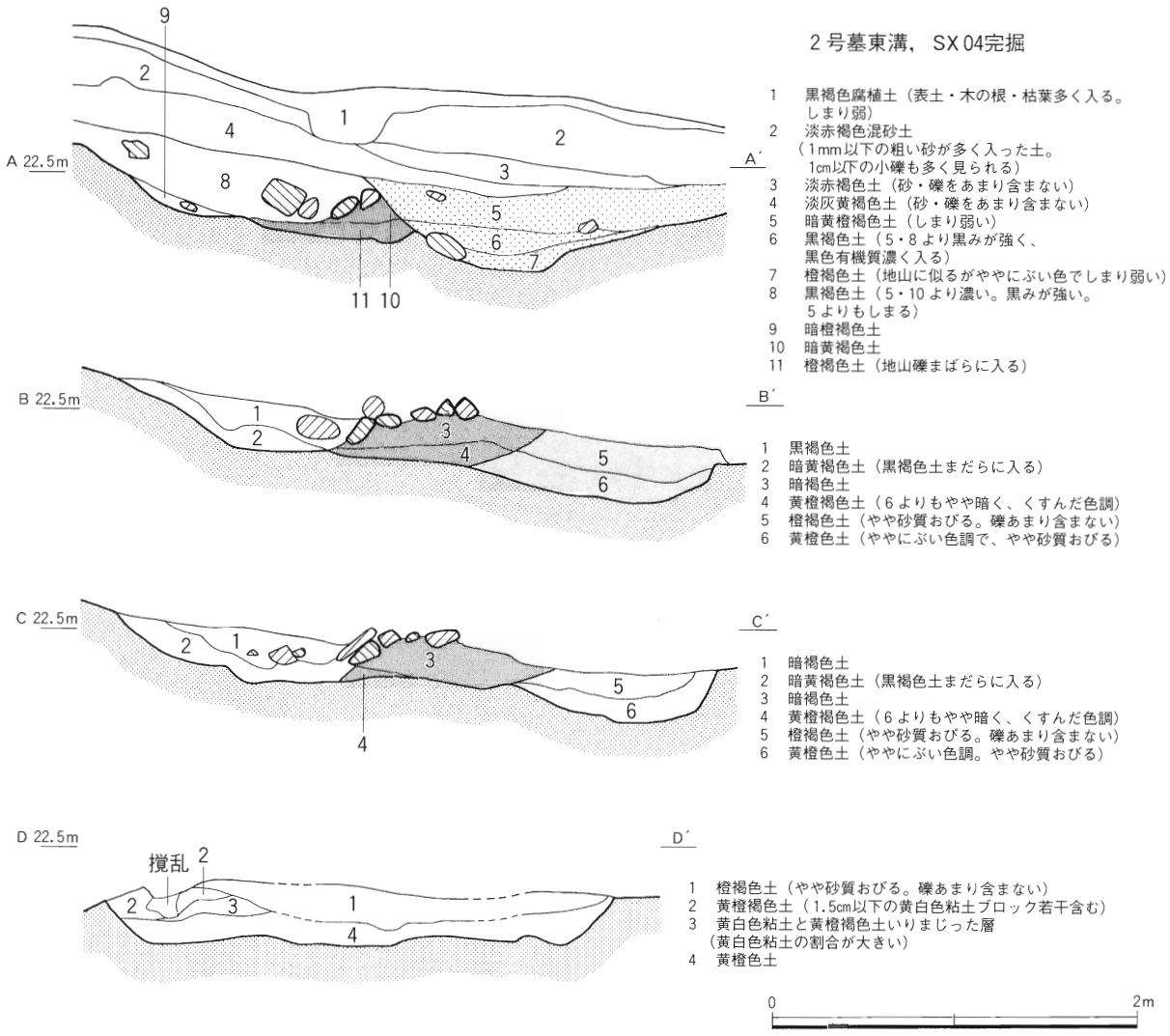
２号墓東溝，貼石列（転落石含む）

２号墓東溝，貼石列（転落石含む）



第 162 図　２号墓東溝，貼石列，SX04（１）（S＝ 1/40）





1　黒褐色腐植土（表土・木の根・枯葉多く入る。しまり弱）
2　淡赤褐色混砂土（1mm以下の粗い砂が多く入った土。1cm以下の小礫も多く見られる）
3　淡赤褐色土（砂・礫をあまり含まない）
4　淡灰黄褐色土（砂・礫をあまり含まない）
5　暗黄橙褐色土（しまり弱い）
6　黒褐色土（5・8より黒みが強く、黒色有機質濃く入る）
7　橙褐色土（地山に似るがややにぶい色でしまり弱い）
8　黒褐色土（5・10より濃い。黒みが強い。5よりもしまる）
9　暗橙褐色土
10　暗黄褐色土
11　橙褐色土（地山礫まばらに入る）

1　黒褐色土
2　暗黄褐色土（黒褐色土まだらに入る）
3　暗褐色土
4　黄橙褐色土（6よりもやや暗く、くすんだ色調）
5　橙褐色土（やや砂質おびる。礫あまり含まない）
6　黄橙色土（ややにぶい色調で、やや砂質おびる）

1　暗褐色土
2　暗黄褐色土（黒褐色土まだらに入る）
3　暗褐色土
4　黄橙褐色土（6よりもやや暗く、くすんだ色調）
5　橙褐色土（やや砂質おびる。礫あまり含まない）
6　黄橙色土（ややにぶい色調。やや砂質おびる）

1　橙褐色土（やや砂質おびる。礫あまり含まない）
2　黄橙褐色土（1.5cm以下の黄白色粘土ブロック若干含む）
3　黄白色粘土と黄橙褐色土いりまじった層（黄白色粘土の割合が大きい）
4　黄橙色土

第163図　2号墓東溝，貼石列，SX04（2）（S＝ 1/40）

い位置にあったと推測される。主軸方向はＮ－16°－Ｅで、尾根筋に対して直交し、第1主体とはほぼ平行している。

第３主体（第165図）

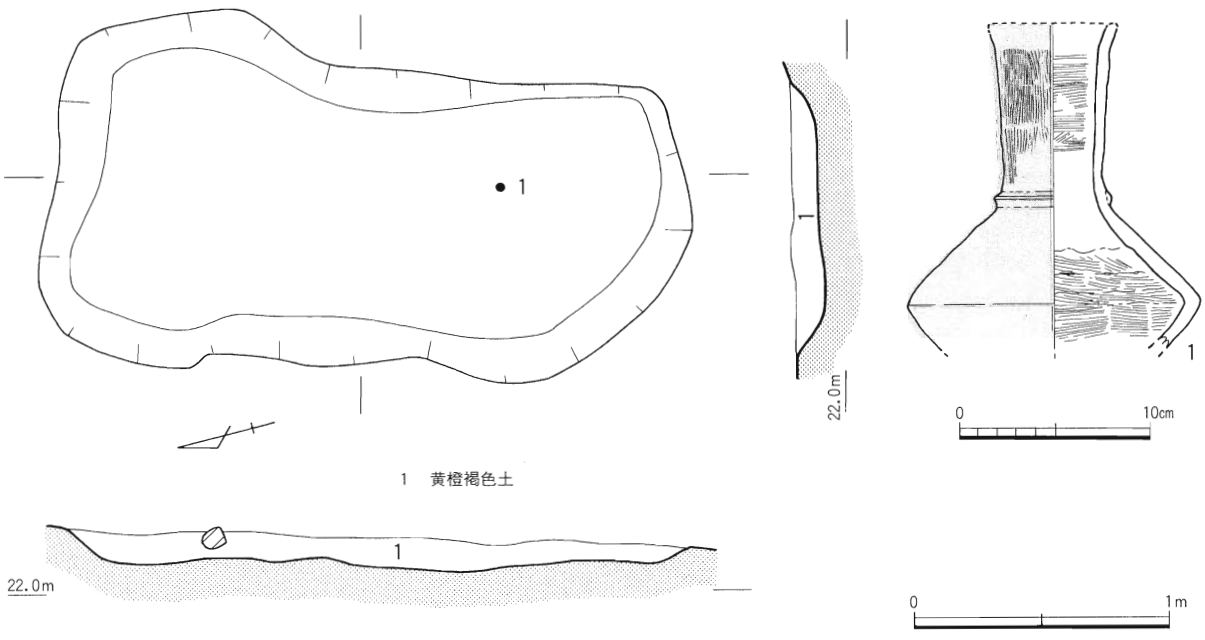
長さ231cm、幅107cm、深さ17cmの長方形の墓壙をもつものであるが、深さは本来これよりもあったと考えられる。主軸方向はＮ－74°－Ｗで、尾根筋の方向と平行に配置されている。墓壙検出面よりも上部で、墓壙中心部からやや南西寄りの位置で長さ25cm、幅10cmの石が立った状態で検出され、これは標石として置かれた可能性がある。この石に使用痕は見られなかった。このほか黒曜石の砕片が１点出土した。

第４主体（第165図）

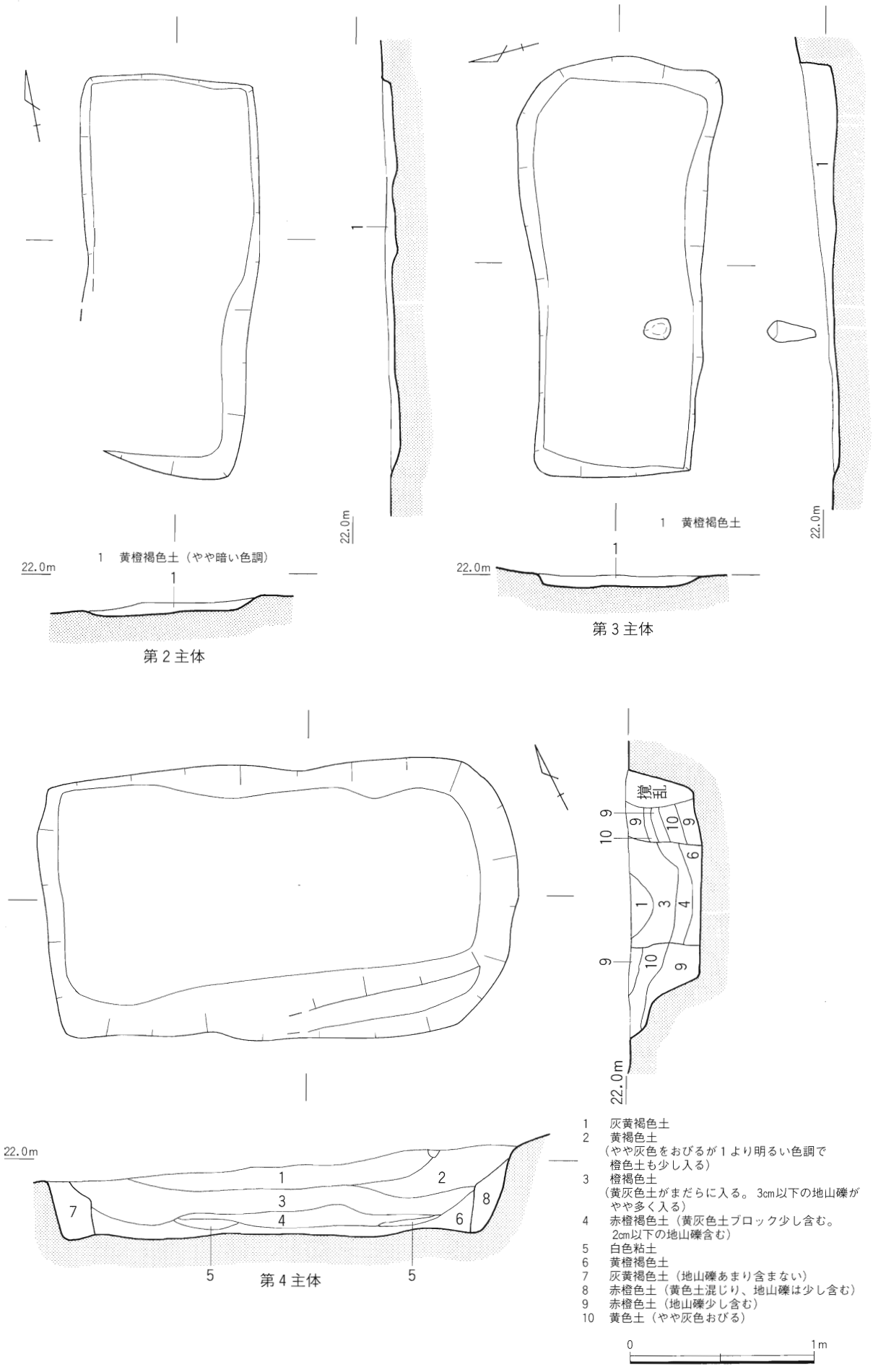
長さ257cm、幅148cm、深さ43cmの長方形の墓壙をもつもので、深さは本来これよりもあったと考えられる。２号墓の主体部の中で最も規模が大きく、２号墓の中心に位置していることから、２号墓の中心主体と考えられる。主軸方向はＮ－65°－Ｗで、尾根筋の方向と平行している。墓壙の南長辺の東側には幅15cm、高さ10cm程度の段が認められ、西側にものびていた可能性があるが掘り過ぎたために続きが分からなくなっている。なお、平面的には検出できなかったが、土層断面から長さ205cm、幅55cmの木棺が使用されたと推測される。木棺の覆土には部分的に白色粘土も入っていた。第４主体に伴う遺物は確認されていない。

（３）時期

第１主体の上部で弥生時代中期中葉から後葉の土器が出土していることから、この時期のものと考えられる。なお、東溝から採取された炭化物について、放射性炭素年代測定を行なったところ、補正^{14}Ｃ年代で2120±40yrBP（暦年代BC340～40）という結果が得られた。この炭化物が２号墓に直接関連するものとすれば、土器の年代観と大きな矛盾はないと思われる。



第164図　２号墓第１主体（S＝ 1/30，遺物：S＝ 1/４）



第165図　２号墓第２～４主体（S＝ 1/30）

5　２号墓周辺の遺構

SX04（第163図）

長さ276cm、幅136cm、深さ30cmの長楕円形の土坑で、主軸方向はＮ－７°－Ｅである。２号墓の東溝や、第１主体に切られており、２号墓以前につくられたものと判断される。遺構の性格については不明であるが、遺構の規模や形状から土坑墓の可能性も考えられる。

SK11（第166図）

SK11～13は墓壙の可能性のあるもので、２号墓の北側で、尾根上からやや下がったところに位置し、東西方向に主軸をそろえるようにして並んだ状態で検出された。

SK11は長さ130cm、幅72cm、深さ14cmの長楕円形の土坑で、主軸方向はＮ－66°－Ｗである。SK12・13よりも東側に位置している。遺物は、黒曜石の砕片が１点出土している。

SK12（第166図）

長さ129cm、幅54cm、深さ18cmの隅円長方形の土坑で、主軸方向はＮ－68°－Ｗである。長軸方向の両端部は一段深く掘り込まれていたことから、小口板が下方に突出し、墓壙底に埋め込まれる形態の木棺が用いられたと考えられる。

SK13（第166図）

長さ196cm、幅86cm、深さ34cmの長方形の墓壙をもつもので、主軸方向はＮ－46°－Ｗである。平面的に検出することはできなかったが、土層断面で長さ152cm、幅48cmの木棺の痕跡が確認された。墓壙の中央付近で、墓壙底面から10cm程度の高さで６個の石がかたまった状態で検出された。これらの石は、標石として墓壙上に置かれた可能性が考えられるものであるが、明瞭な使用痕は認められなかった。なお、このほかに遺物として、剥離調整が施された黒曜石の剥片（２）が１点出土している。

SK15（第166図）

２号墓の西側に位置する、長さ163cm、幅68cm、深さ12cmの長方形の土坑で、規模や形状から土坑墓と推測される。主軸方向はＮ－47°－Ｗである。覆土中から弥生土器片（３）が出土した。３条の櫛描き平行沈線の下に、斜線が施されたもので、弥生時代中期中葉～後葉頃の壷と考えられる。

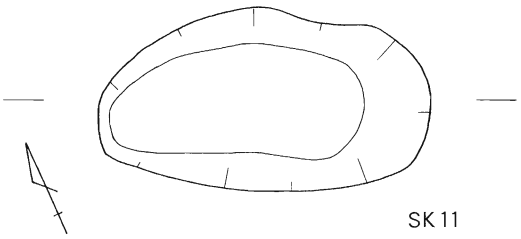
Ｐ９（第166図）

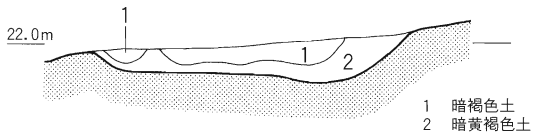
２号墓の西側に位置し、SK15の南西側と近接している小土坑で、弥生土器の壷が横倒しにした状態で埋納されていた。ただし、この部分は木の根が激しく入り込んでおり、土器の焼成も軟質であったため、取り上げ時に土器が細片化し、接合が困難になってしまった。このため底部のみ図化・掲載した（４）。

6　その他の遺構（第167～169図）

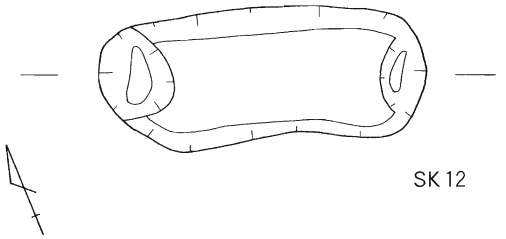
SK01は１号墓の北西側の斜面に位置する、長さ91cm、幅87cm、深さ40cmの方形の土坑である。

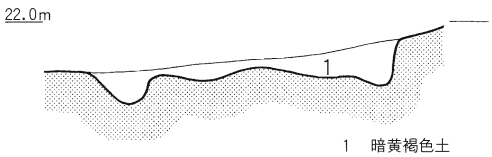
覆土中には炭化物が密に入り、焼土ブロックも含まれていた。土坑の壁面は一部がわずかに被熱している程度であった。土坑の底面には方形の石組みが存在するが、石は被熱していない。覆土中から、縁の断面が方形の銅製品（５）が出土しており、鏡の破片の可能性がある。この遺構から採取した炭化材２点について放射性炭素年代測定を行なったところ、２点とも13世紀後半～14世紀頃の年代が得られた。



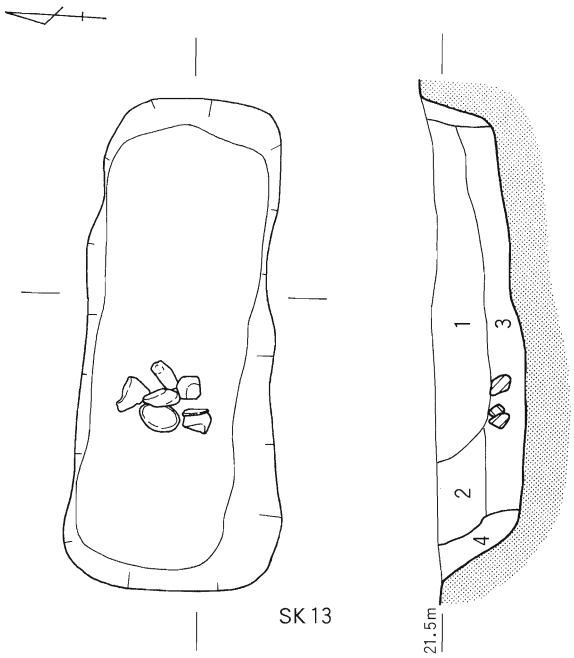


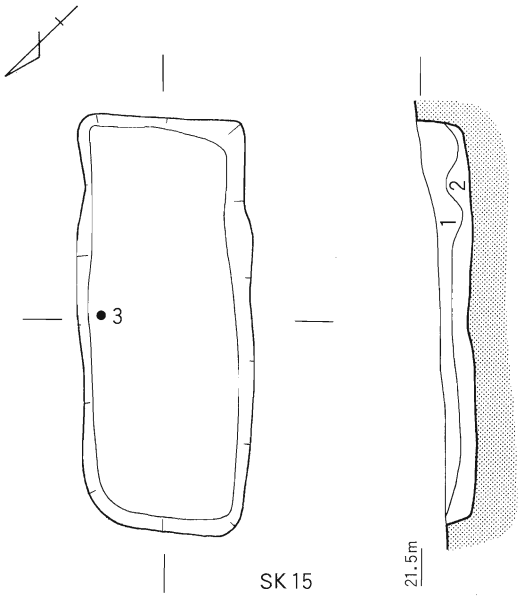
1　暗褐色土
2　暗黄褐色土

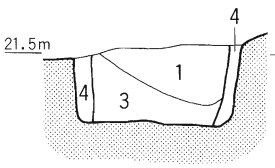




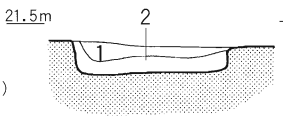
1　暗黄褐色土



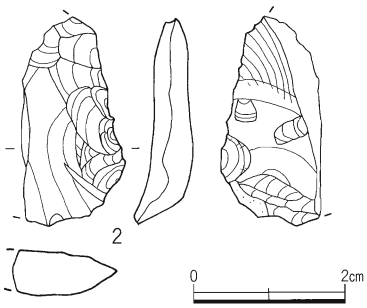


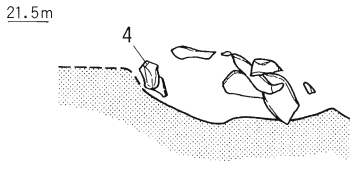


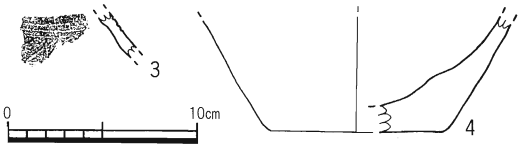
1　暗黄褐色土（黄褐色土、黒褐色土がまだらに入る）
2　暗灰褐色土
3　暗黄灰色土（やや砂質おびる）
4　暗褐色土



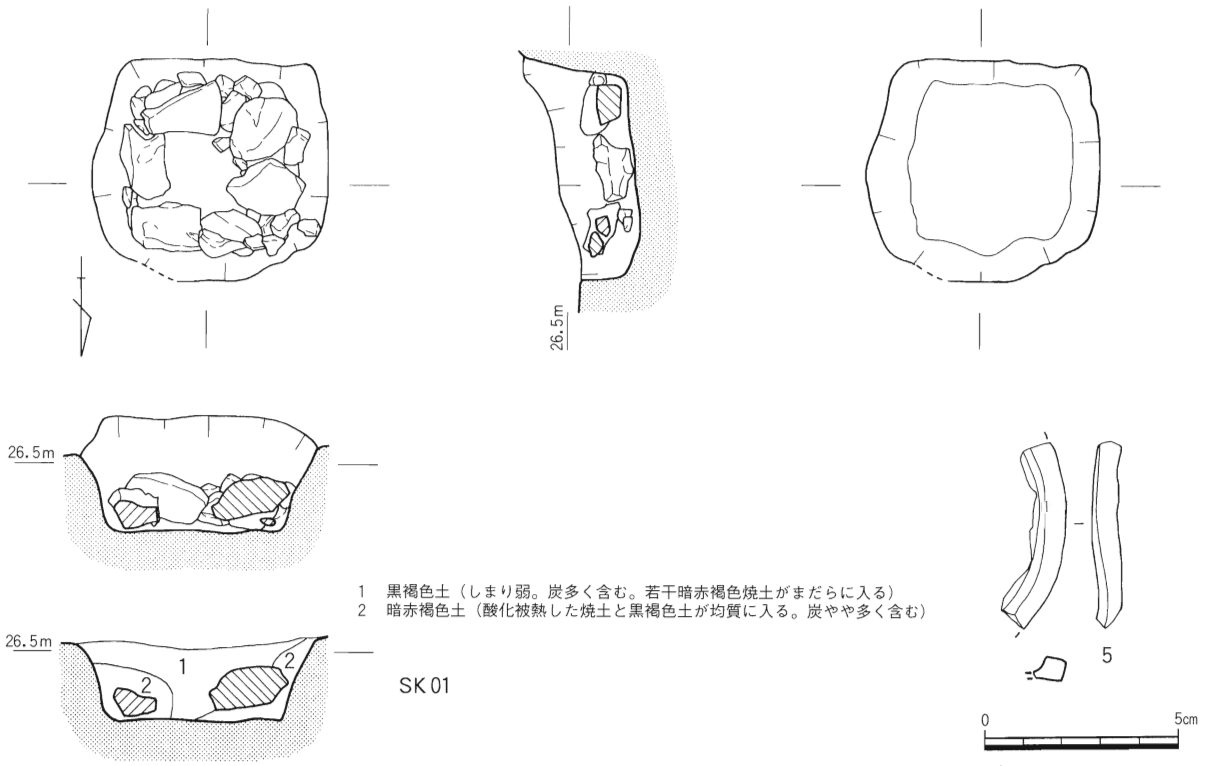
1　暗褐色土
2　黄橙褐色土
（黄色地山礫まばらに含む）

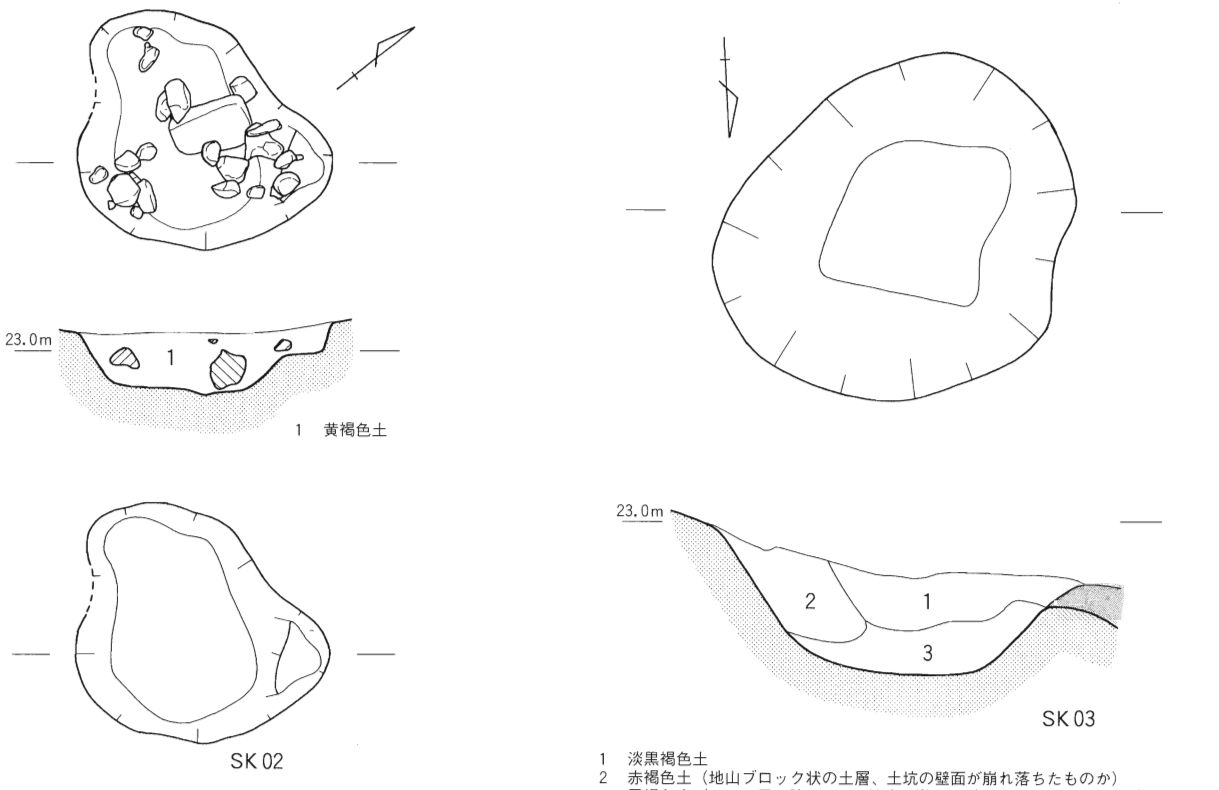




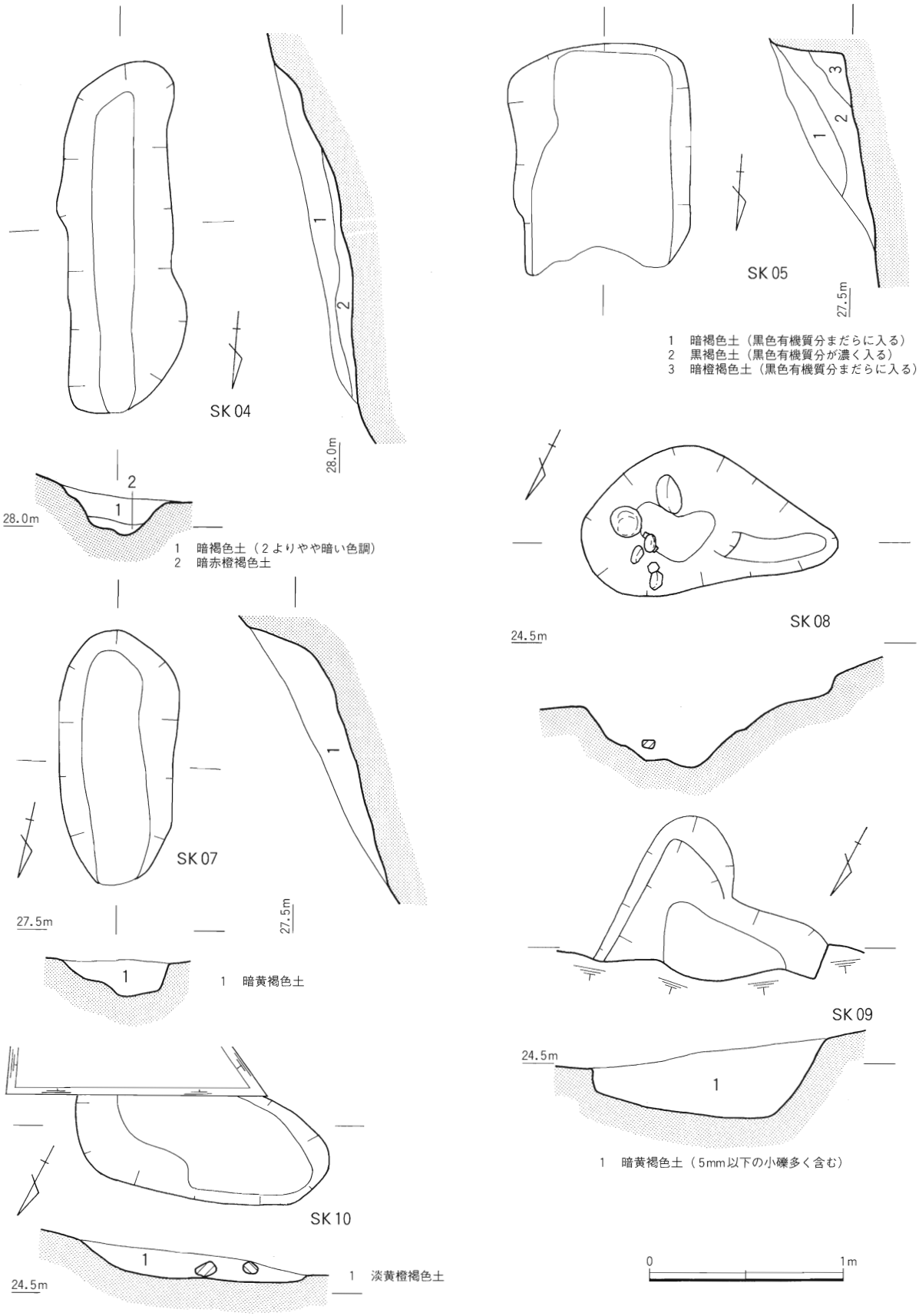


第166図　SK11～13・15（S＝ 1/30），P 9（S＝ 1/20）（遺物　2：S＝ 1/1，3・4：S＝ 1/4）





第 167 図　SK01～03（S＝ 1/30，遺物：S＝ 1/2）



第 168 図　SK04・05・07～10（S＝ 1/30）

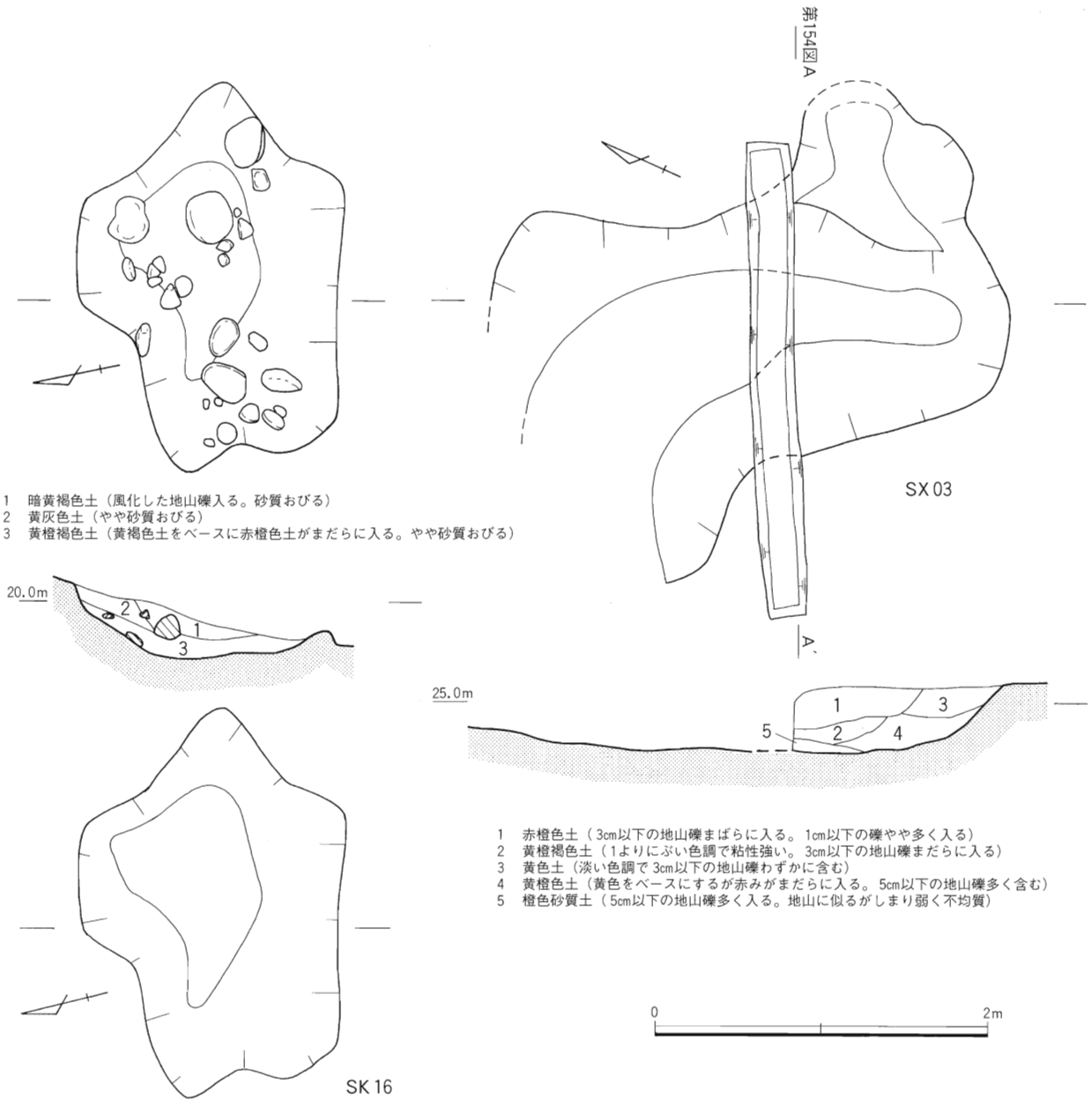
SK02は２号墓の東側の尾根上に、SK08は１号墓の北西側の斜面に、SK16は調査区の北西隅の斜面に位置している。これらは不整形な土坑で、埋土中には地山にも含まれる風化した礫が入っていた。遺構の時期や性格は不明である。

SK03は不整円形の土坑で、２号墓東側の尾根上に位置しており、２号墓東溝の覆土を掘り込んでいた。埋土中には赤褐色の地山土のブロックも含まれていた。遺構の時期や性格は不明である。

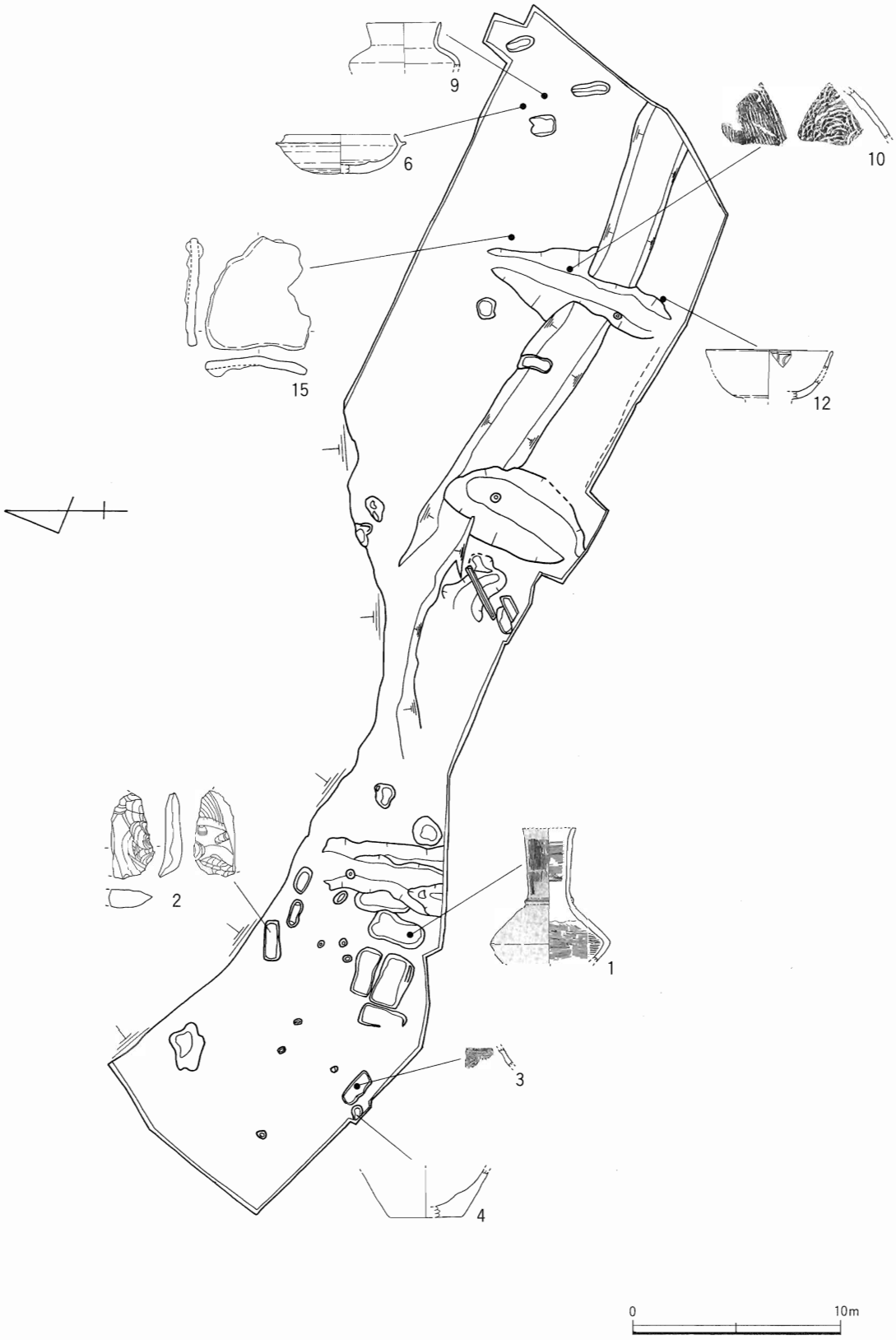
SK04・05・07はいずれも調査区北西側の斜面に位置している。平面形は、SK04は細長い形状で、SK05は長方形、SK07は楕円形のものである。これらは、北側の壁面の立ち上がりが見られないが、斜面の下側であるため流失してしまった可能性も考えられる。

SK09は不整形な土坑で、１号墓の北西側の斜面に位置しており、遺構の北側は地崩れによって失われている。

SK10・SX03は、１号墓の西側の尾根上に位置する。SK10は長さ126cm、幅53cm、深さ12cmの楕



第169図　SK16，SX03（S＝ 1/40）



第 170 図　専光寺脇遺跡遺物分布状況（S＝ 1/300）

円形の土坑である。SX03は発掘調査前に「２号墳」と仮称した部分で検出されたもので、南北312㎝、東西292㎝、深さ36㎝の不整形な遺構である。遺構の時期・性格は不明である。

７　遺構に伴わない遺物（第170・171図）

遺構外では、須恵器（６～10）、中世もしくは近世の土師器（11）、青磁（12）、銭貨（13）、鉄製品（14・15）といった遺物が検出された。このうち須恵器は調査区の北東側を中心に出土している。10・12は１号墓の付近で出土しているが、いずれも表層土から出土したもので１号墓に伴うものではない。

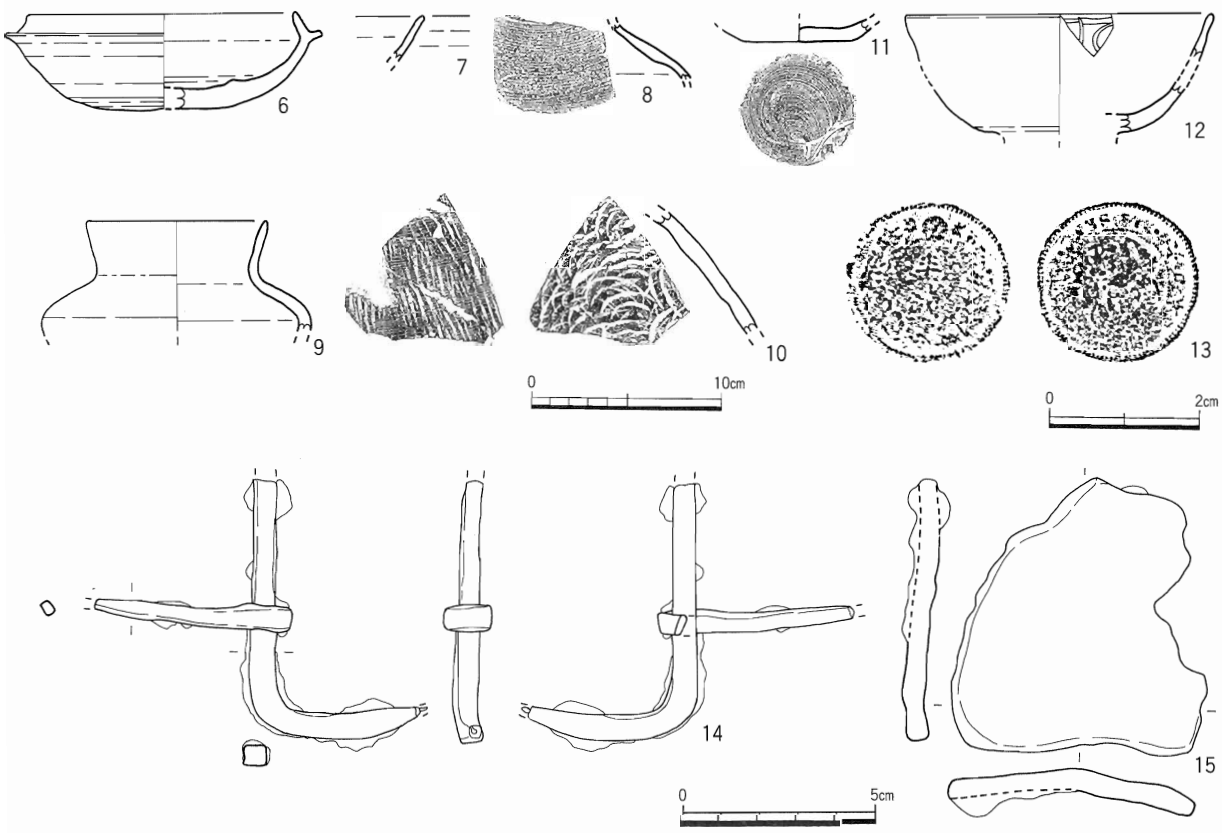
６は古墳時代後期の坏、７は奈良～平安時代の坏である。８・９は短頸壷で、古墳時代後期のものである。10は甕の胴部片で、外面には平行タタキ目が、内面には同心円当具痕が見られる。

11は土師器の坏もしくは皿で、底部には回転糸切り痕が残る。

12は龍泉窯系青磁碗で、口縁部の破片には内面に片彫りによる文様が施されている。Ⅰ類のものである。

13は明治時代の半銭銅貨で、表面の中央には「半銭」、裏面の外縁には右回りで「大日本　明治□□年」（□は判読不能）、左回りで「１／２SEN」の文字が見られる。なお、この遺物は道から出土したものであり、このことから道は明治時代頃にはすでに存在したと考えられる。

14は、Ｌ字状の部材と、それに直角方向に取り付けられた部材からなる鉄製品であるが、用途は不明である。15は板状の鉄製品であるが、これについても用途は特定できない。



第171図　遺構に伴わない遺物（６～12：S＝ 1/4，13：S＝ 1/1，14・15：S＝ 1/2）

第３節　総　　括

今回の調査では、方形貼石墓１基（１号墓）、弧状の貼石列を持つ貼石墓１基（２号墓）のほか、木棺墓・土坑墓４基からなる弥生時代の墓域を確認することができた。以下にこれらの位置づけについて検討することとしたい。

（１）１号墓について

東西9.8m、南北8.8mの方形貼石墓である。墳丘は、尾根の上下を切断する溝によって区画されていたが、尾根の下側の溝（西溝）は尾根を完全には断ち切っておらず、墳丘の北西隅を掘り残していた。また、西側の墳端は弧状を呈しており、墳丘の南西隅が突出するかたちになっている。このことから、墳丘の北西・南西の両隅部は尾根の下側から墳丘へ至る墓道の可能性がある。四隅突出型墳丘墓の突出部が墓道を起源とする考え方に基づくならば、１号墓と四隅突出型墳丘墓との間に関連性を見出すことが可能である。方形貼石墓の中には、洞ノ原２号墓（中期末）のように１か所の隅に大型の石を置くものや、鳥取県宮内１号墓（後期中葉）のように墳丘の隅部で周溝が途切れたものも存在しており、こうしたものが四隅突出型墳丘墓とどのような関わりを持っていたのか注目される[1]。

貼石は列石や立石を伴わないもので貼石構造のⅠ類（松本2003・仁木2007）に分類される。石は墳丘斜面に対して縦長の方向に貼り付けられ、横方向に目地をそろえるようにして並べられていた。出雲市青木遺跡４号墓や隠岐の島町大城遺跡などと類似するものであり、弥生墳丘墓の貼石のあり方を示している。

１号墓の所属時期は、出土遺物がないために特定できないが、後述する２号墓との関連性・連続性を考えるならば、弥生時代中期後半頃に属するものと推測される。

（２）２号墓とその周辺の埋葬について

２号墓は、東側に区画溝と弧状の貼石列を伴う貼石墓である。北側と西側では区画・外表施設が見られず、現状では墳丘は存在しないが、等高線の状況や、２号墓の周辺埋葬との位置関係から、貼石列から西へ約10m弱までが２号墓の範囲であったと推測される。２号墓は貼石列の形状から、円形を志向して造られた可能性も考えられるが現状では判断できない。なお、山陰地方で弥生時代の円形貼石墓の事例としては青木遺跡10号墓があり、築造時期は後期初頭頃と考えられている。仮に２号墓が円形貼石墓であるとすれば、いかなる背景で（どのような地域の影響を受けて）成立したのか、方形貼石墓とはどのような関わりをもっていたものか、新たな課題が生じる[2]。

２号墓上では４基の埋葬施設が確認されており、第１・２主体は主軸を尾根筋に対して直交させ、３・４主体は主軸を尾根筋に対してする平行するように配置されていた。位置関係や、墓壙の規模や深さから、第４主体が中心埋葬と判断できるが、副葬品などは持たず、他の埋葬との格差はまだ大きくないように思われる[3]。

第１主体上部には胴部が算盤玉形の壷が出土した。埋葬施設上の供献土器と理解されるもので、これによりこの墓は中期後半頃（Ⅲ－２～Ⅳ－２様式）に位置づけられる。墓壙に１個体程度の供

献土器が伴う例としては、ほぼ同時期の波来浜A区2号墓があり、石見地方において共通した土器供献儀礼が存在した可能性が窺われる。また、第3主体では墓壙上部中央に長径25㎝、短径10㎝の礫が立った状態で検出され、標石として置かれたものと考えられる。

2号墓の北側ではSK11～13が、2号墓の南側ではSK15が検出され、2号墓の周辺埋葬と捉えられるものである。いずれも主軸を尾根筋に対してほぼ平行させており、SK11～13は縦列状に並んでいる。このことから、2号墓およびその周辺の埋葬は弥生時代前期以来の列状配置を基本とするものであったのかもしれない[4]。SK13では、墓壙覆土中から6個の石がかたまって検出されており、2号墓第3主体のものと同様に、標石として置かれたものと考えられる。このように、墓壙上部に1個ないし数個の標石を置くものは弥生時代後期～古墳時代前期に多く存在するが、本遺跡は中期にまで遡る事例として注目される。SK11・12は墓壙規模が小さく、未成人の埋葬と推測される。また、SK15の南西には土器を埋置した小土坑、P9が存在しており、墓域の中に位置することから小児を埋葬した土器棺墓の可能性も考えた。しかし、弥生時代中期の山陰地方には土器棺墓が確認されておらず（岩橋2007）、他の性格・用途も含めて検討すべきであろう。

2号墓及びその周辺の埋葬については、集団内における成員の埋葬のあり方を示す一例として注目される資料であり、今後、他の遺跡の様相も踏まえたうえで弥生時代の社会構造について検討すべきと考える。

（3）方形貼石墓の分布

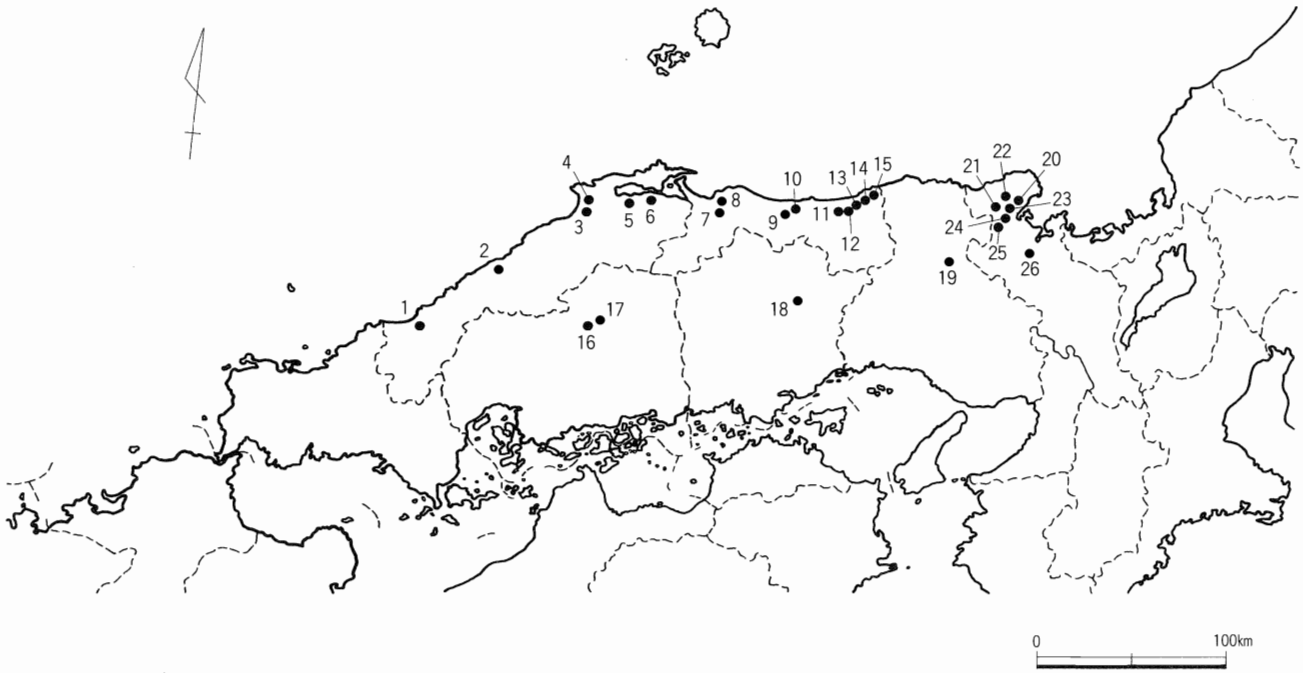
方形貼石墓は丹後地方から石見地方にかけての日本海側沿岸及び中国山地に分布している。1号墓の発見は方形貼石墓の分布の西端となるものであり、この墓制が西日本の日本海沿岸地域に広く受容されたことを示すものである。方形貼石墓の築造は、弥生時代中期～後期に見られるが、今回、方形貼石墓を集成した結果（第172図・表34）、そのあり方は地域によって異なることが明らかとなった。以下に、地域ごとの様相について述べたい。

丹後・但馬　丹後地域の方形貼石墓の初現は、中期中葉新段階の日吉ヶ丘遺跡SZ01で、以後、中期後葉にかけて築造され、後期には方形貼石墓は消滅する。墳丘長は6m程度のものから30mを超えるものまで格差が見られることから、代表首長以下の階層にも受容されたと考えられている（加藤2005）。但馬地域では、中期後葉ないし後期初頭に築造された粟鹿遺跡E地区SX01の1基のみ確認されている。

因幡　後期初頭の新井三嶋谷墳丘墓がこの地域の初現例である。以後、後期前半から中葉にかけて築かれ、西桂見墳丘墓のような大型の首長墓にも採用されている。なお、この地域では後期末の糸谷1号墓以外では四隅突出型墳丘墓は築造されておらず、方形貼石墓と並存しない（松井2006）。

東伯耆　中期末に梅田萱峯弥生墳丘墓が築造される。後期中葉の宮内1号墓[5]は鉄刀・鉄剣など優れた副葬品を持っており、この地域の有力首長墓として注目される。なお、後期前葉～中葉には四隅突出型墳丘墓の阿弥大寺墳墓群が造営されており、方形貼石墓と四隅突出型墳丘墓は同時期に並存したと考えられる。

西伯耆　中期末に洞ノ原2号墓などが存在する。後期のものは事例が少ないが、後期中葉に仙谷3号墓が築かれている。洞ノ原墳墓群では中期末～後期初頭頃に四隅突出型墳丘墓が出現しており（1号墓）、この地域でも四隅突出型墳丘墓と方形貼石墓は並存する。



第172図　方形貼石墓分布図（S＝ 1/4,000,000）

表34　方形貼石墓一覧表

番　号	遺　跡　名	所　在　地	時　期	墳丘規模（m）
1	専光寺脇１号墓	島根県益田市	中期後半？	9.8×8.8
2	波来浜Ａ１号墓	島根県江津市		0.94×0.4
	波来浜Ａ２号墓	島根県江津市	中期中葉	4.0×5.0
	波来浜Ａ３号墓	島根県江津市		2.2×3.5
	波来浜Ａ４号墓	島根県江津市		2.5×2.0
	波来浜Ａ５号墓	島根県江津市		2.0×1.4
	波来浜Ｂ１号墓	島根県江津市	後期前葉	6.0×5.3～
	波来浜Ｂ２号墓	島根県江津市	後期前葉	5.5×？
	波来浜Ｂ３号墓	島根県江津市	後期中葉	4.1×2.7
	波来浜Ｂ４号墓	島根県江津市		7.5～×？
	波来浜Ｂ５号墓	島根県江津市		
	波来浜Ｂ６号墓	島根県江津市		4.2×3.5
	波来浜Ｂ７号墓	島根県江津市		
3	中野美保２号墓	島根県出雲市	中期中葉	
4	青木５号墓	島根県出雲市	後期前葉～後葉	７×６～
	青木６号墓	島根県出雲市	中期中葉～後期中葉	３～×２～
	青木７号墓	島根県出雲市	後期前葉～中葉	6.5
	青木11号墓	島根県出雲市	後期初頭	3.2×2.5
5	三成２号墓	島根県松江市宍道町	中期後葉	５×５
6	友田Ｂ区１号墓	島根県松江市	中期中葉～中期後葉	12.5×9.8
	友田Ｂ区２号墓	島根県松江市	中期中葉～中期後葉	12.0×5.9
	友田Ｂ区３号墓	島根県松江市	中期中葉～中期後葉	11.3×9.1
	友田Ｂ区４号墓	島根県松江市	中期中葉～中期後葉	12.25×9.25
	友田Ｂ区５号墓	島根県松江市	中期中葉～中期後葉	13.15×9.75
	友田Ｂ区６号墓	島根県松江市	中期中葉～中期後葉	9.0×6.0
7	洞ノ原２号墓	鳥取県米子市淀江町	中期末	8.4×6.9
	洞ノ原６号墓	鳥取県米子市淀江町	中期末	2.16×1.9
	洞ノ原14号墓	鳥取県米子市淀江町	中期末	1.45×1.4
	洞ノ原15号墓	鳥取県米子市淀江町		1.7×1.25～
8	仙谷３号墓	鳥取県西伯郡大山町	後期中葉～後葉	12.6×9.7
9	梅田萱峯弥生墳丘墓	鳥取県東伯郡琴浦町	中期末	11×８
10	宮内１号墳丘墓	鳥取県東伯郡湯梨浜町	後期中葉	17.0～×9.25～
11	西桂見墳丘墓	鳥取県鳥取市	後期前半	長辺40m～
12	桂見弥生墳丘墓	鳥取県鳥取市	後期中葉	12×11
13	布勢鶴指奥墳丘墓	鳥取県鳥取市	後期前葉	17.8×10.6
	布勢鶴指奥２号墓	鳥取県鳥取市	後期中葉	長辺５m～
14	滝山猿懸平１号墓	鳥取県鳥取市	後期中葉	6
	滝山猿懸平３号墓	鳥取県鳥取市		6.9
15	新井三崎谷墳丘墓	鳥取県岩美町	後期前葉	23×17
16	花園１号墓	広島県三次市	中期後葉～後期後葉	31.3×19.8
	花園２号墓	広島県三次市	後期中葉	14.1×9.0
17	四拾貫小原遺跡	広島県三次市	中期後葉	８×５
18	門の山第１号墓	岡山県津山市		11×８
19	栗鹿遺跡Ｅ地区SX01	兵庫県朝来市山東町	中期末～後期初頭	13.2×9.3～
20	難波野１号墓	京都府宮津市		
	難波野２号墓	京都府宮津市		
21	小池12号墓	京都府京丹後市大宮町	中期後葉	
	小池13号墓	京都府京丹後市大宮町	中期後葉	6.6×3.5
22	奈具岡１号方形貼石墓	京都府京丹後市弥栄町	中期後葉？	7.2×9.0
	奈具岡２号方形貼石墓	京都府京丹後市弥栄町	中期後葉？	15×？
23	千原遺跡	京都府与謝郡与謝野町岩滝	中期後葉	
24	寺岡遺跡SX56	京都府与謝郡与謝野町野田川	中期後葉	32.5×17.6
25	日吉ヶ丘遺跡SZ01	京都府与謝郡与謝野町加悦	中期中葉新段階	32.0×20
26	志高１号墓	京都府舞鶴市	中期後葉	6.3＋α
	志高２号墓	京都府舞鶴市	中期後葉	15.5×？
	志高３号墓	京都府舞鶴市	中期後葉	6.2＋α

出雲　中野美保２号墓が中期中葉に出現し、中期後葉には友田遺跡、青木遺跡などでも築造されている。後期については青木遺跡で確認されるのみであるが、後期初頭～後期中葉の間に７・11号墓が築造されている。後期後葉以降については存在するか不確かである[6]。この地域は後期後葉になると四隅突出型墳丘墓の築造が顕著となり、大型の首長墓も造営される。

石見　中期中葉の波来浜Ａ２号墓がこの地域の初現で、専光寺脇１号墓もこれとほぼ同じか、やや下る時期に築造されたものと考えられる。波来浜遺跡では後期前葉～中葉にかけて継続して造られるが、規模は最も大きいものでも7.5m程度であり、他の墳墓に対して卓越した規模のものではないようである。江の川上流域では後期中葉に四隅突出型墳丘墓である順庵原１号墓が築かれており、四隅突出型墳丘墓と方形貼石墓は並存したと推測される[7]。

以上をまとめると、中期中葉～中期後葉の間に各地域で方形貼石墓が築造されるが、丹後・但馬では後期前葉以降存在しない。また、その他の地域では後期以降も造られるものの、因幡地域を除けばその数は中期よりも減少し、後期後葉以降はほとんど見られなくなるようである。

また、方形貼石墓の内容についてみた場合、中期の丹後や後期の因幡・東伯耆では、大型の墳丘や優れた副葬品をもつ代表首長とでもいうべきようなものにも採用されているのに対し、出雲・石見地方では他の墳墓に対して卓越している様子はない。

方形貼石墓は弥生時代中期の西日本の日本海沿岸部で広く分布しており、その背景にはこれらの地域間に共通の埋葬儀礼や信仰が存在したと推測することもできる。しかし、その後の展開は地域によって異なっており、方形貼石墓の位置づけについては、四隅突出型墳丘墓など、他の墓制との関連も視野に入れて検討する必要がある。

（４）１・２号墓築造の背景

１・２号墓の位置する丘陵下の平地では、沖手遺跡で弥生時代中期中葉の溝状遺構が確認されている。この遺構の性格については前章でも検討したが、稲作に関わる水路であった可能性が考えられ、沖積平野の形成とともに耕地が開発されていった様子が想像される。この地に１・２号墓が築造された背景には弥生時代中期以降に平野部の開発が進められたことと無縁ではなかろう。

久城地区周辺では弥生時代中期の集落については様相が明らかではないが、近年の益田道路建設等に伴う発掘調査によって弥生時代後期の集落、住居跡が確認されており、今後の調査の進展によっては当該期の集落が確認されるかもしれない。今後、墳墓のほか集落･生産域のあり方も含めて、益田平野における弥生時代像を考える必要があろう。

註

1　仁木聡氏は、隅部の配石構造の変遷から、四隅突出型墳丘墓は弥生時代中期の方形貼石墓の系譜を引くものと考えている（仁木2007）。１号墓では各隅部の貼石は残存しておらず、どのような処理がされていたのかは不明である。

2　山陰地方以外では、播磨地域を中心とする近畿地方西部で円形周溝墓の存在が知られており、播磨地方では円形周溝墓の出現は前期末まで遡る。また、方形周溝墓と混在する事例があること、円形周溝墓の中に貼石をもつものが存在することも指摘されている（岸本2008）。

3　岩橋孝典氏は、弥生時代中期の墓壙規模について、長さ２m前後が標準的で、墳丘墓においても2.5m程度までしか拡大しないと指摘している。また、前期から中期後半にかけての墓壙の長大化は階層化の進展というよりも、仰臥屈葬から伸展葬への転換が進展したこと示すもの、と推測している（岩橋2007）。

4　池淵俊一氏は、山陰地方の弥生時代中期中葉～後葉の区画墓について、原則的には前代の列状墓の埋葬原理を踏襲したものと理解している（池淵2007）。

5　宮内１号墓については四隅突出型墳丘墓とする見方もある（松井2006ほか）。
6　この集成には加えていないが、青木遺跡では後期初頭の11号墓に付加するかたちで古墳時代初頭の方形貼石遺構である12号墓が造られていた。こうしたものの存在から、弥生時代後期全般にわたって方形貼石墓が継続的に築造された可能性は否定できない。
7　なお、未発掘で詳細が不明であるため集成に加えていないが、邑南町中山古墳群Ｃ地区SX04は外表の観察から、方形の墳丘を持ち、３辺に石が巡るものと確認されており、同Ｄ地区SK08は12ｍ×10ｍの長方形の墳丘をもつもので、ボーリングステッキの探査から西辺に石列の存在が推定されている（石見町教育委員会1994）。

参考文献

池淵俊一　2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
岩滝町教育委員会　1988『千原遺跡第３次』京都府岩滝町文化財調査報告第11集
岩美町教育委員会　2001『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書第22集
石見町教育委員会　1994『中山古墳群－平成５年度実態調査概要報告書－』石見町文化財調査報告書第５集
大谷晃二　1994「第Ⅱ部　千年比丘古墳群の調査」『波佐《島根県那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査》』金城町教育委員会
大宮町教育委員会　1984『小池古墳群』大宮町文化調査報告第３集
加藤晴彦　2005「丹後の弥生時代中期の墓制の概観と日吉ヶ丘遺跡SZ01の歴史的位置付け」『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文化財調査報告第33集　加悦町教育委員会
加悦町教育委員会　2005『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文化財調査報告第33集
岸本一宏　2008「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』第９回播磨考古学研究集会実行委員会
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989『志高遺跡』京都府遺跡調査報告書第12冊
江津市教育委員会　1973『波来浜遺跡発掘調査報告書－第１・２次緊急調査概報－』
近藤義郎・中尾寿雄　1952「門の山第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市
西郷町文化振興財団・隠岐島後教育委員会　1999『西郷町運動公園整備事業に伴う大城遺跡発掘調査報告書』
四拾貫小原発掘調査団　1969『四拾貫小原』
島根県教育委員会　2004『中野美保遺跡』一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書４
島根県教育委員会　2006『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会　2000　『妻木晩田遺跡発掘調査報告』
(財)鳥取県教育文化財団　1996『宮内第１遺跡　宮内第４遺跡　宮内第５遺跡　宮内２・63～65号墳』
(財)鳥取県教育文化財団　1992『鳥取市東桂見遺跡　鳥取市布勢鶴指奥墳墓群』
鳥取県埋蔵文化財センター　2007　『梅田萱峯遺跡現地説明会資料』
鳥取市教育委員会　1981『西桂見遺跡』
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団　1984『桂見墳墓群』
(財)鳥取市教育福祉振興会　1999『滝山猿懸平墳墓群』－上野地区農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－
仁木　聡2007「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
丹羽野裕1999「宍道町　三成墳墓群について」『宍道町歴史叢書』４　宍道町教育委員会
野田川町教育委員会　1988『寺岡遺跡』京都府野田川町文化財調査報告第２集
兵庫県教育委員会　2007『粟鹿遺跡』一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅱ
松井　潔　2006「弥生時代後期の地域社会」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』１　鳥取県埋蔵文化財センター
松江市教育委員会　1983『友田遺跡』松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
松本岩雄　2003「出雲の四隅突出型墳丘墓」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
三次市教育委員会　1980『史跡花園遺跡－調査と整備－』
弥栄町教育委員会　1986『奈具岡遺跡第３次発掘調査報告書』
淀江町教育委員会　2000『妻木晩田遺跡』

表35　専光寺脇遺跡遺構計測表

遺構名	平面形	主軸方向	規模			備考
			長(cm)	幅(cm)	深(cm)	
１号墓第１主体	長方形	N-18° -E	154	65	54	
２号墓第１主体	隅円長方形	N-16° -E	246	138	12	上部に弥生土器壷
２号墓第２主体	長方形	N-16° -E	219	96	6	
２号墓第３主体	長方形	N-74° -W	231	107	17	上部に礫
２号墓第４主体	長方形	N-65° -W	257	148	43	206×55cmの木棺痕跡
ＳＸ０４	長楕円形	N-7° -E	276	136	30	２号墓東溝に切られる
ＳＫ１１	長楕円形	N-66° -W	130	72	14	
ＳＫ１２	隅円長方形	N-68° -W	129	54	18	木棺小口板の痕跡
ＳＫ１３	長方形	N-46° -E	196	86	34	152×48cm　木棺痕跡。覆土中に礫。
ＳＫ１５	長方形	N-47° -W	163	68	12	
Ｐ９		N-78° -W	58	46	16	弥生土器壷を埋置
ＳＫ０１	方形	N-89° -E	91	87	40	底面に石組、覆土中に炭多く含む
ＳＫ０２	不整形	N-33° -E	100	92	25	
ＳＫ０３	不整円形	N-87° -W	134	132	40	
ＳＫ０４	長楕円形	N-5° -W	179	60	17	
ＳＫ０５	長方形	N-4° -W	118	91	33	
ＳＫ０７	長楕円形	N-12° -W	131	57	23	
ＳＫ０８	不整形	N-64° -E	130	74	54	
ＳＫ０９	不整形	N-64° -E	(127)	(69)	36	
ＳＫ１０	長楕円形	N-64° -E	126	53	12	
ＳＫ１６	不整形	N-13° -E	164	116	21	

表36　専光寺脇遺跡土器・陶磁器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	型式・時期	計測値(cm)			文様・調整		胎土	色調	備考
						口径	底径	器高	内面	外面			
164-1	109	２号墓第１主体	弥生土器	壷	Ⅲ～Ⅳ様式	-	-	-	口縁上部　ヨコナデ 口縁中位　ヨコ方向のハケ目 口縁下位～胴部上位　ナデ 胴部中位～下位　ハケ目	口縁上部　ヨコナデ 口縁中～下位　タテ方向のハケ目 胴部ミガキ？（磨滅のため不良） 外面　赤色顔料塗布	やや粗　2mm以下の砂礫まばらに含む。	外:橙(5YR7/8) 内:橙(5YR7/8)	外面、赤色顔料塗布
166-3	109	SK15	弥生土器	壷	Ⅲ～Ⅳ様式	-	-	-	ナデ	３条の平行沈線　左下がりの沈線	やや密　1.5mm以下の礫長石などまばらに含む	内・外:明黄褐色 (10YR　6/6)	
166-4	109	P9	弥生土器	壷		-	9.0	-	磨滅のため不明	ナデ？ （磨滅のためはっきりしない）	粗　5mm以下の砂礫多く含む	外:橙(7.5YR　7/6) 内:黄橙(10YR　8/6)	
171-6	109		須恵器	坏		(14.2)	-	5.0	回転ナデ	回転ヘラケズリ	密	青灰	
171-7	109	北斜面	須恵器	坏		-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	密	青灰	
171-8	109	北斜面東　側	須恵器	壷		-	-	-	回転ナデ	カキ目	密　1mm以下の砂粒を含む	青灰	
171-9	109		須恵器	短頸壷		(9.5)	-	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ	密	暗灰色	
171-10	109	１号墓東溝上面	須恵器	甕or壷		-	-	-	同心円当て具痕	平行タタキ　カキ目	密	灰	
171-11	109		土師器	坏or皿		-	5.8	-	回転ナデ	回転ナデ　底部　右回転糸切り	密　0.5mm以下の砂粒少し含む	内・外:橙 (25YR　7/8)	
171-12	109		青磁	碗	龍泉窯系　Ⅰ類	-	-	-	片切彫の劃花文		密	オリーブ灰 (2.5GY　6/1)	

表37　専光寺脇遺跡石器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	器種	石材	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
166－２	109	SK13	剥片	黒曜石	3.7	1.3	0.8	2.3	剥離調整あり

表38　専光寺脇遺跡金属製品観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	計測値(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
167－５	109	SK01	銅製品	不明銅製品	(4.8)	(1.8)	0.65	鏡の外縁部の破片か？
171－13	109		銅製品	銭貨	2.1		-	明治期の半銭銅貨
171－14	109		鉄製品	用途不明鉄製品	7.0	9.3	1.4	
171－15	109		鉄製品	板状鉄製品	6.7	7.3	1.3	

第 5 章　自然科学分析

第 1 節　沖手遺跡出土瓦質土器の胎土分析

白石　　純（岡山理科大学　自然科学研究所）
東山　信治

1．分析の目的

今回の分析では、沖手遺跡出土瓦質土器の自然科学的な胎土分析を実施することによって、その生産地を推定すること、中国地方西部における瓦質土器の流通のあり方についてその一端を解明することを目的としている。産地推定のためには生産地・消費地のデータを数多く集め、比較する必要があるため、沖手遺跡出土資料（86点）のほかに、島根県西部及び山口県内の９遺跡の出土資料（合計131点）を比較試料として分析することとした。以下に、分析対象遺跡と分析試料の概要をまとめた。

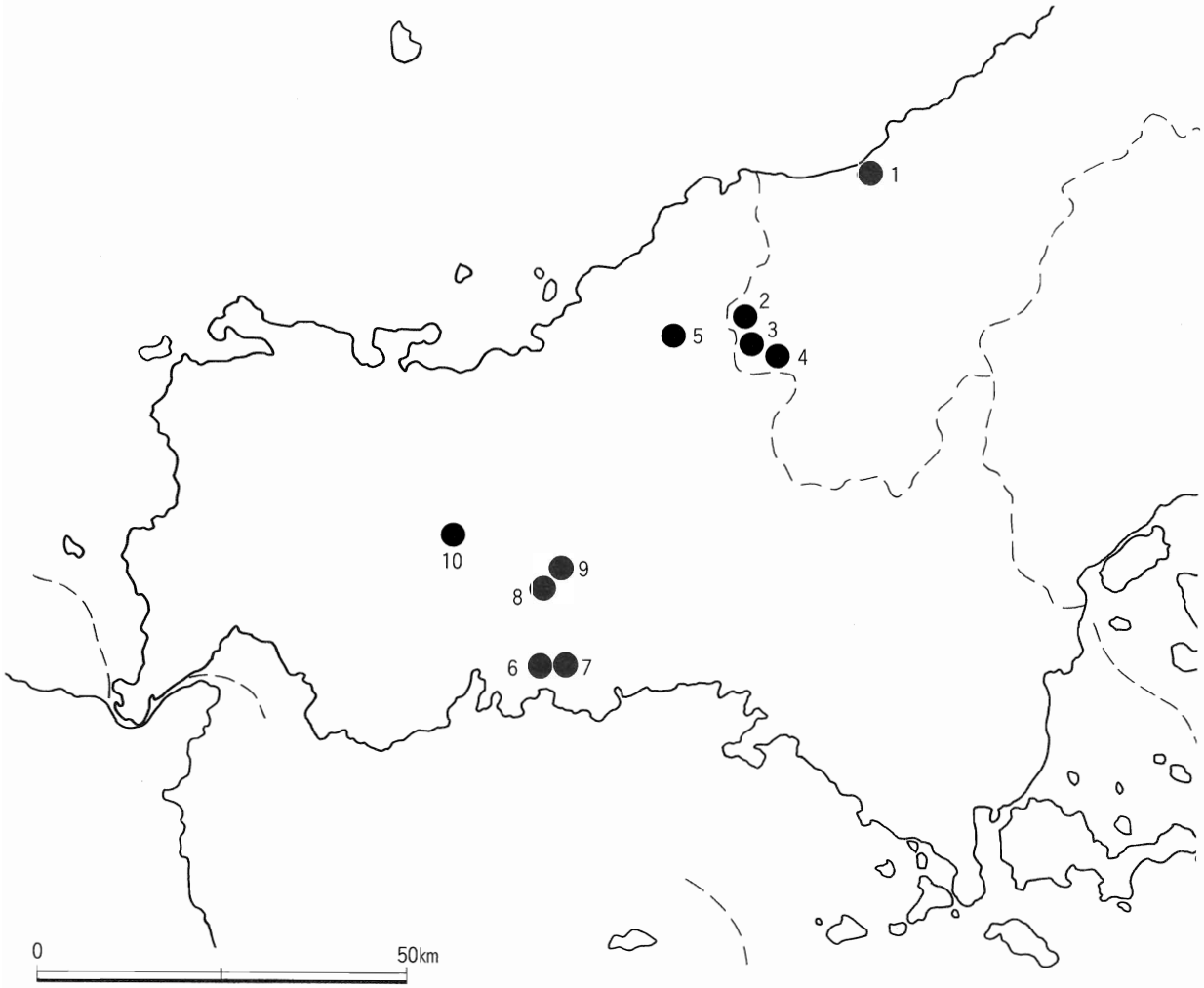


図１　瓦質土器胎土分析試料の出土遺跡

1　沖手遺跡　　2　土居丸館跡　　3　有福寺遺跡　　4　高田遺跡　　5　岡田・江良遺跡
6　岩淵遺跡　　7　原遺跡　　8　神郷大塚遺跡　　9　大内氏館跡・大内氏関連町並遺跡
10　岡の台遺跡

２．分析対象遺跡と分析試料

（１）沖手遺跡（島根県益田市久城町）

11世紀後半～17世紀前半の大規模な集落遺跡である。本書第３章を参照されたい。

29～33は土師器鍋で、30・31は短い口縁部をもち、口縁部と体部の境が肥厚するもので西長門型鍋ａに、32・33は口縁部外側に鍔状の段を持つ西長門型鍋ｂに分類される。６～８・34～45は防長型の瓦質土器鍋である。６は短く外反する口縁部をもつもので、形態としてはⅠ型式に分類されるが、岩崎の分類ではⅠ型式は瓦質のものであることから防長型とは別系統のものかもしれない。35はⅢ型式古段階、７・34・36～38・42はⅢ形式新段階、39～41はⅣ型式、８はⅥＡ型式古段階、43・44はⅥＡ型式新段階、28・45はⅥＢ型式に分類される。

15・47～49は足鍋、46は焙烙である。25・50・51は羽釜で、口縁部の立ち上がりは大きく、いずれも周防型のものとは形態が異なる。９・27・52～60は湯釜である。

３～５・10～14・19・21・22・24・61～72は鉢もしくは擂鉢で、このうち10・61・62は土師器である。鉢・擂鉢の口縁部形態は大きく見て、①端部が丸みをもつもの（62・63）、②面取りされるもの（３～５・13・61・64）、③口縁端部が小さく肥厚するもの（65）、④端部を折り返したり、粘土を貼り付けたりして口縁部内側を肥厚させるもの（11・14・21・24・65～69）、⑤口縁部内面に粘土を貼り付けて、幅の広い平坦面を持つもの（12・70・71）に分類される。これらのうち、④・⑤は防長型擂鉢の範疇に含まれる。

１・16～18・23・83～86は甕と考えられるものである。16は肥前系陶器碗を伴い、17世紀後半以降のものと推測される。26・72～82は火鉢である。73～76は甕形火鉢で、このうち73～75には肩部に沈線が見られる。

（２）土居丸館跡（島根県鹿足郡津和野町）

15世紀頃の地方武士の居館跡である。

１・２・５は、口縁部が内側に肥厚する防長型の擂鉢である。４・５は防長型瓦質土器の鍋で、４はⅢ型式古段階、５はⅢ型式新段階に分類される。３は浅鉢型の火鉢である。

（３）有福寺遺跡（島根県鹿足郡津和野町）

小規模な河川跡から12～15世紀代の土師器・瓦質土器・白磁・青磁・陶器などがまとまって出土しており、周辺に集落が展開していたと考えられる。

１は周防型羽釜、２は防長型瓦質土器鍋でⅡ型式に分類される。３は焙烙である。

（４）高田遺跡（島根県鹿足郡津和野町）

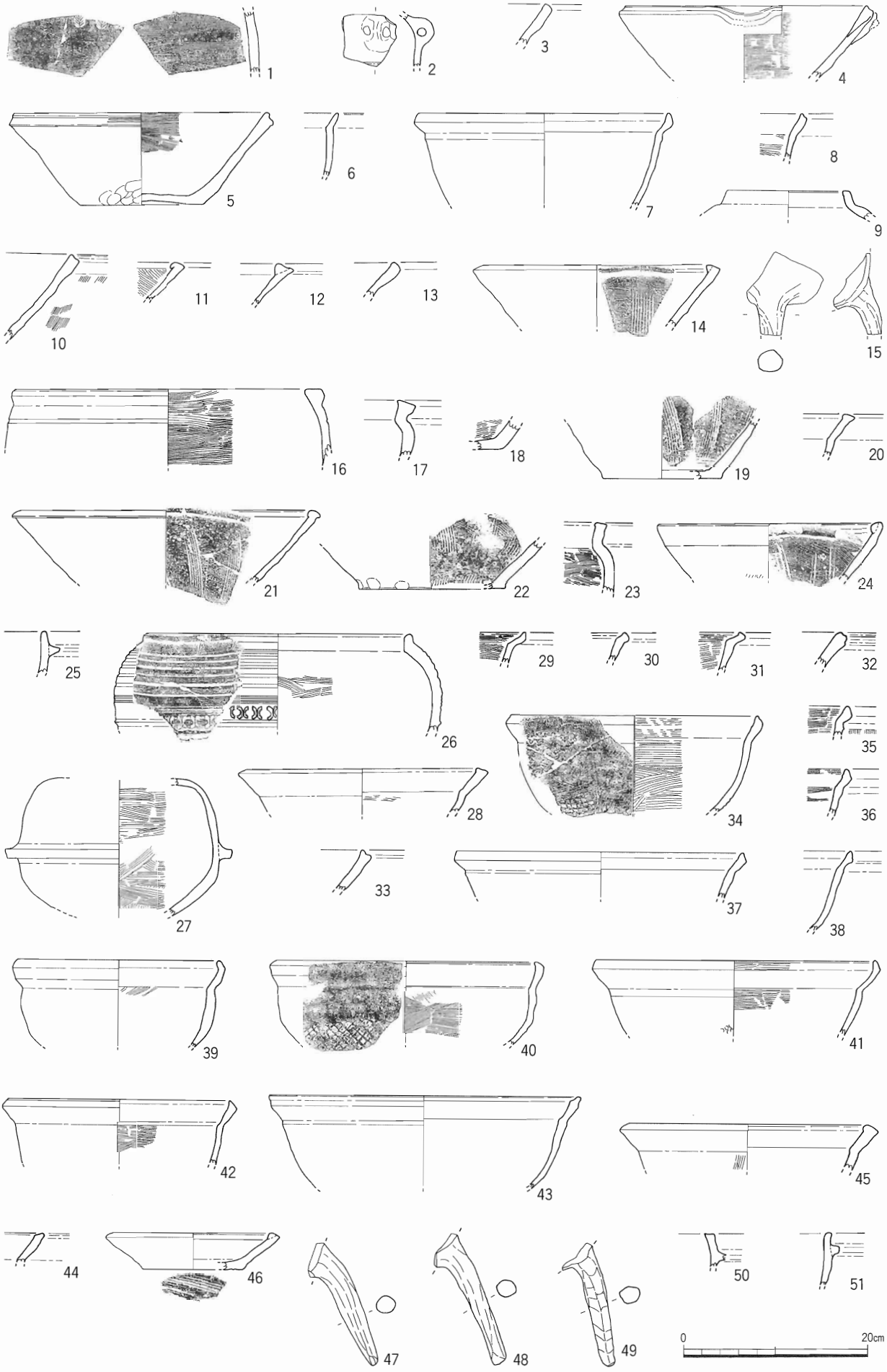
トレンチ調査によって弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されており、該期の集落跡が存在したと推測される。

１は周防型羽釜、２・９は防長型瓦質土器鍋で、２はⅢ型式古段階、９はⅥＡ型式古段階に位置づけられる。４は土師器鉢で、口縁端部は面取りされている。３は口縁部が小さく肥厚するもの、６・10は口縁端部を折り返し、もしくは粘土を貼り付けて肥厚させたもので、防長型擂鉢と考えられる。５・７・８は火鉢である。

（５）岡田・江良遺跡（山口県萩市（旧むつみ村））

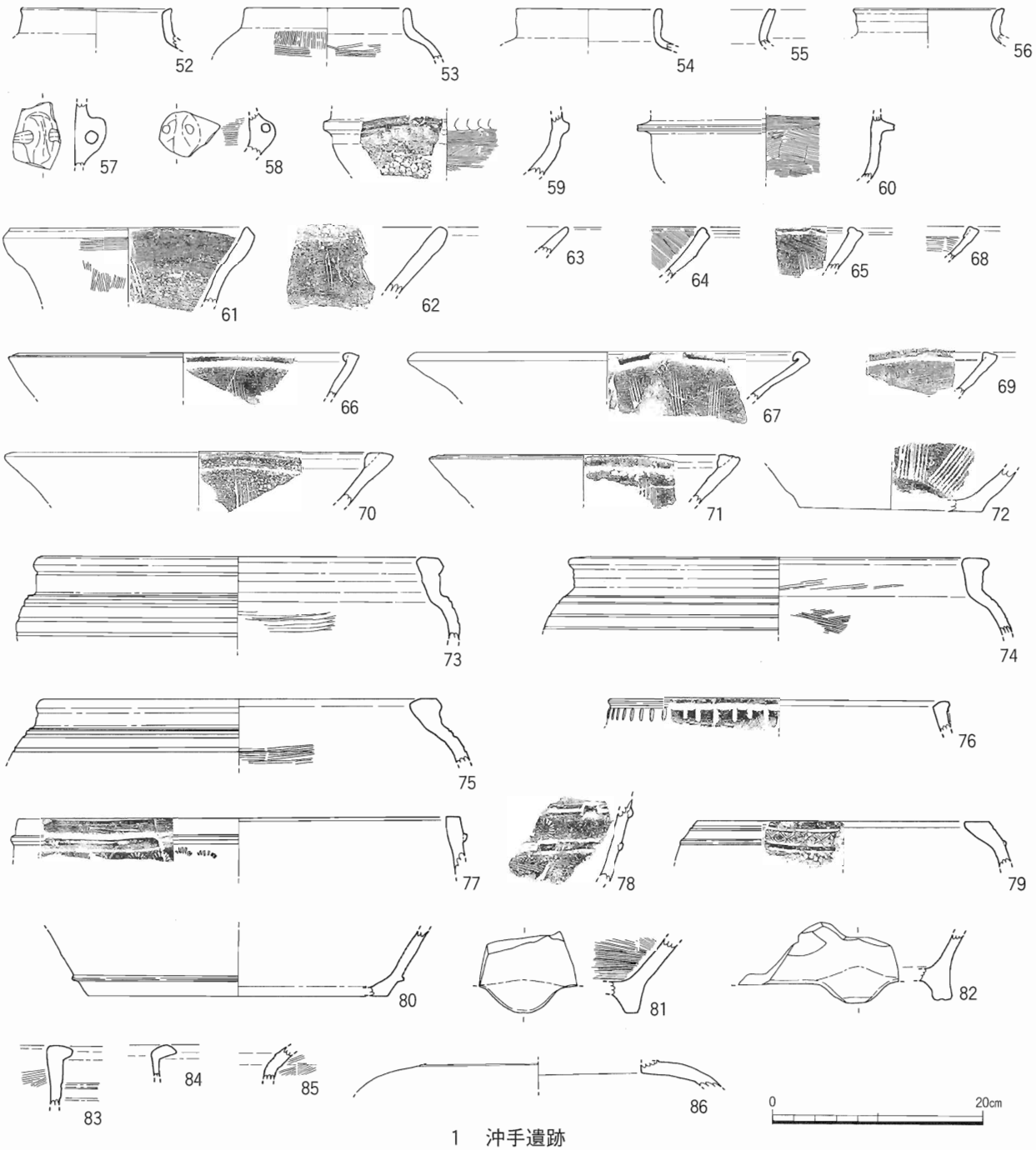
13～16世紀の集落跡で、また、集落を見渡せる位置では有力武士の館の堀が確認されている。

１～11は防長型瓦質土器鍋で、３はⅢ型式古段階、１・２・４～７はⅢ形式新段階、８～11はⅥ



1　沖手遺跡

図２　胎土分析試料（１）（S＝ 1/6）



1　沖手遺跡

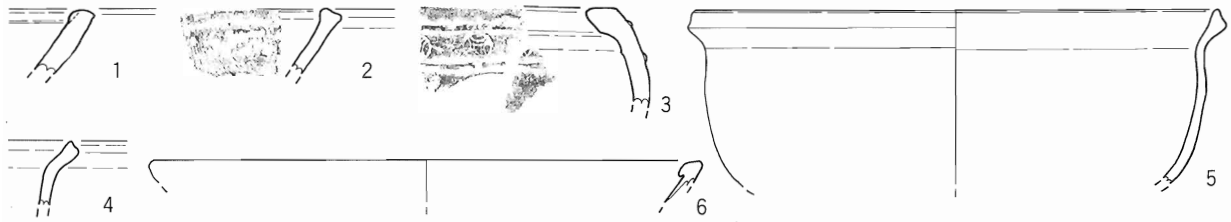
図３　胎土分析試料（２）（S＝ 1/6）

Ｂ型式に分類される。12・13は湯釜である。14は土師器鉢、16は瓦質土器鉢で、ともに口縁端部は弱く面取りされている。15は瓦質土器擂鉢で口縁端部は丸みをもつ。17～22は、口縁部が内側に肥厚するもので、防長型の擂鉢と考えられる。23は備前焼の擂鉢とみられるものである。24は風炉で、肩部に印花文が施されている。

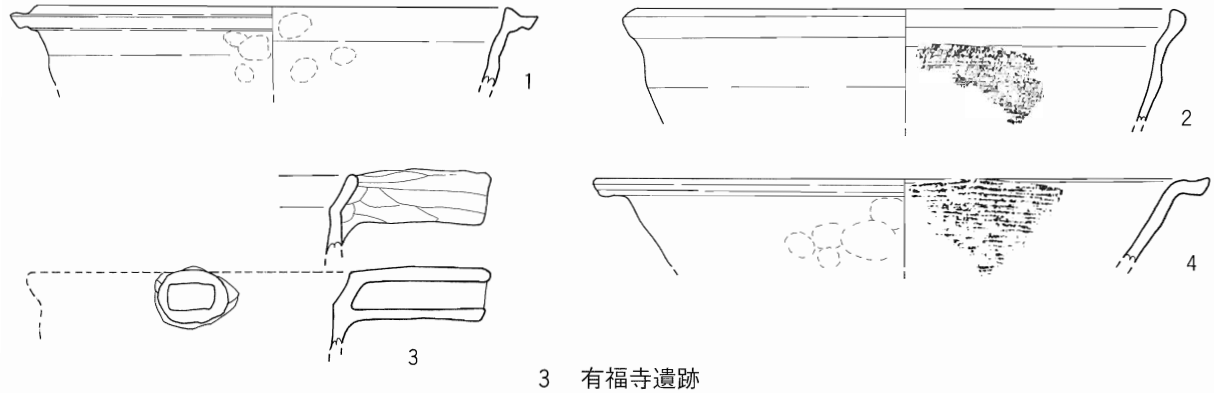
（６）岩淵遺跡（山口県防府市）

中世の集落跡で、瓦質土器焼成窯跡も４基確認されており、瓦質土器が生産されたことが明らかとなっている。窯跡は13～14世紀代のものと、15～16世紀代のものが存在する。

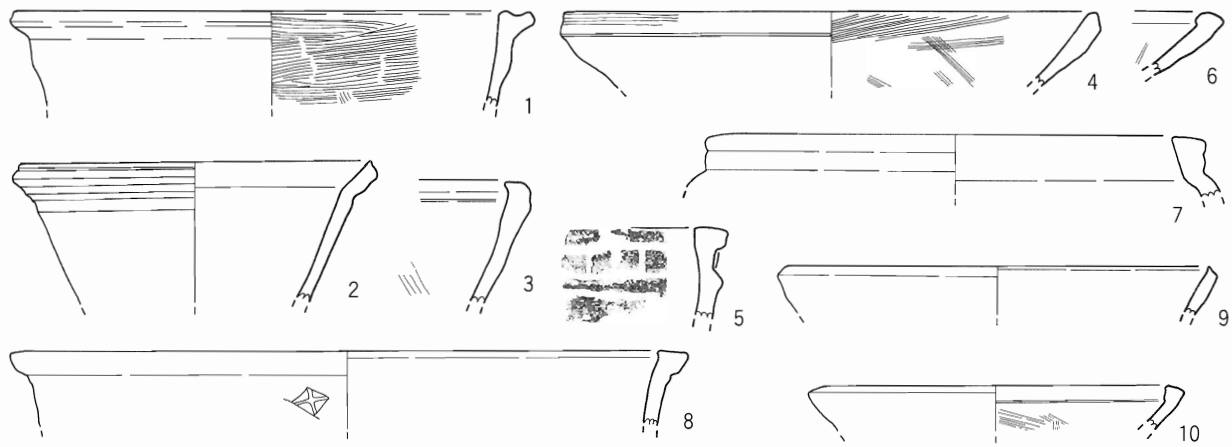
１～９は防長型の鍋で、２はⅡ型式～Ⅲ型式古段階、１・３・４・７はⅢ型式古段階、６はⅢ形式新段階、８はⅣ型式に位置づけられる。９～15は周防型羽釜、16～22は擂鉢である。16・17・19・



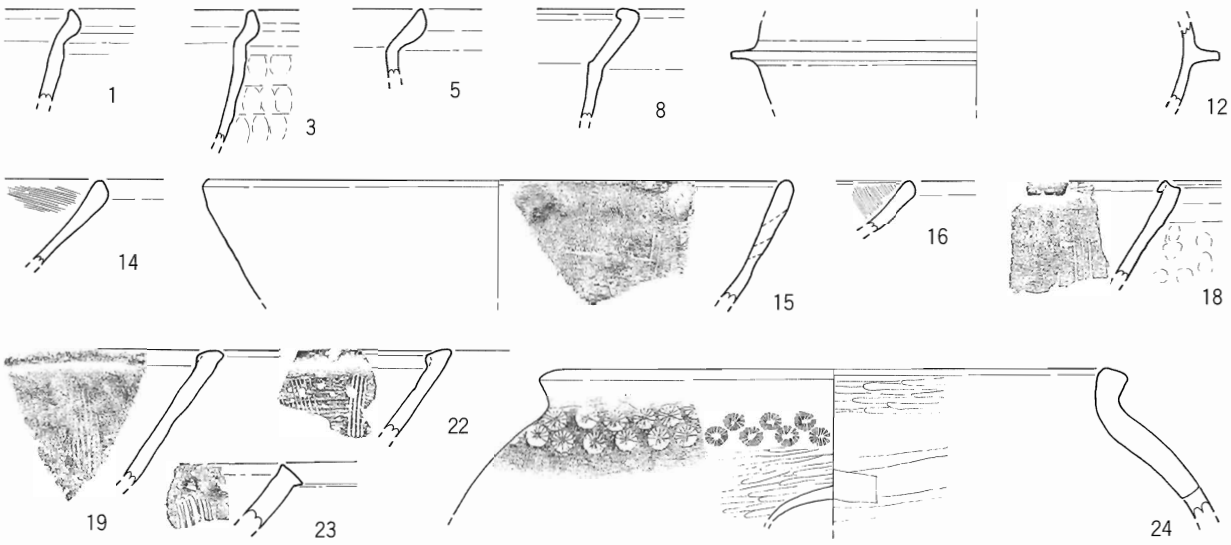
2　土居丸館跡



3　有福寺遺跡

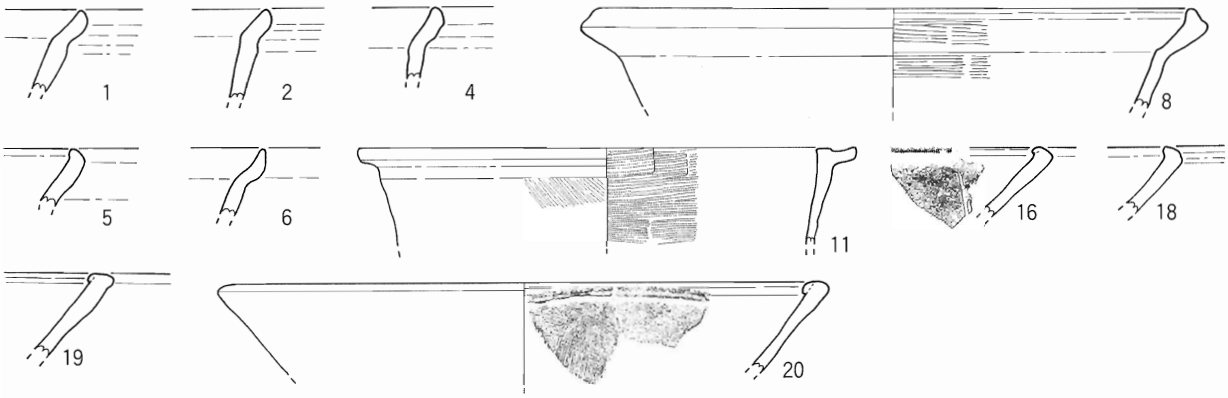


4　高田遺跡

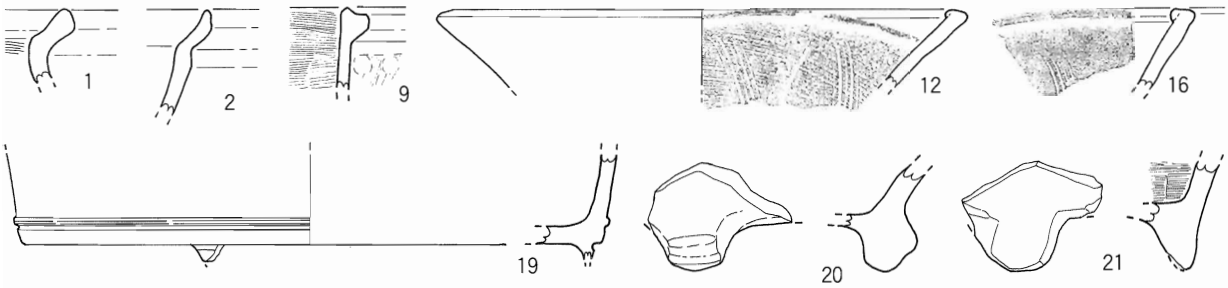


5　岡田・江良遺跡

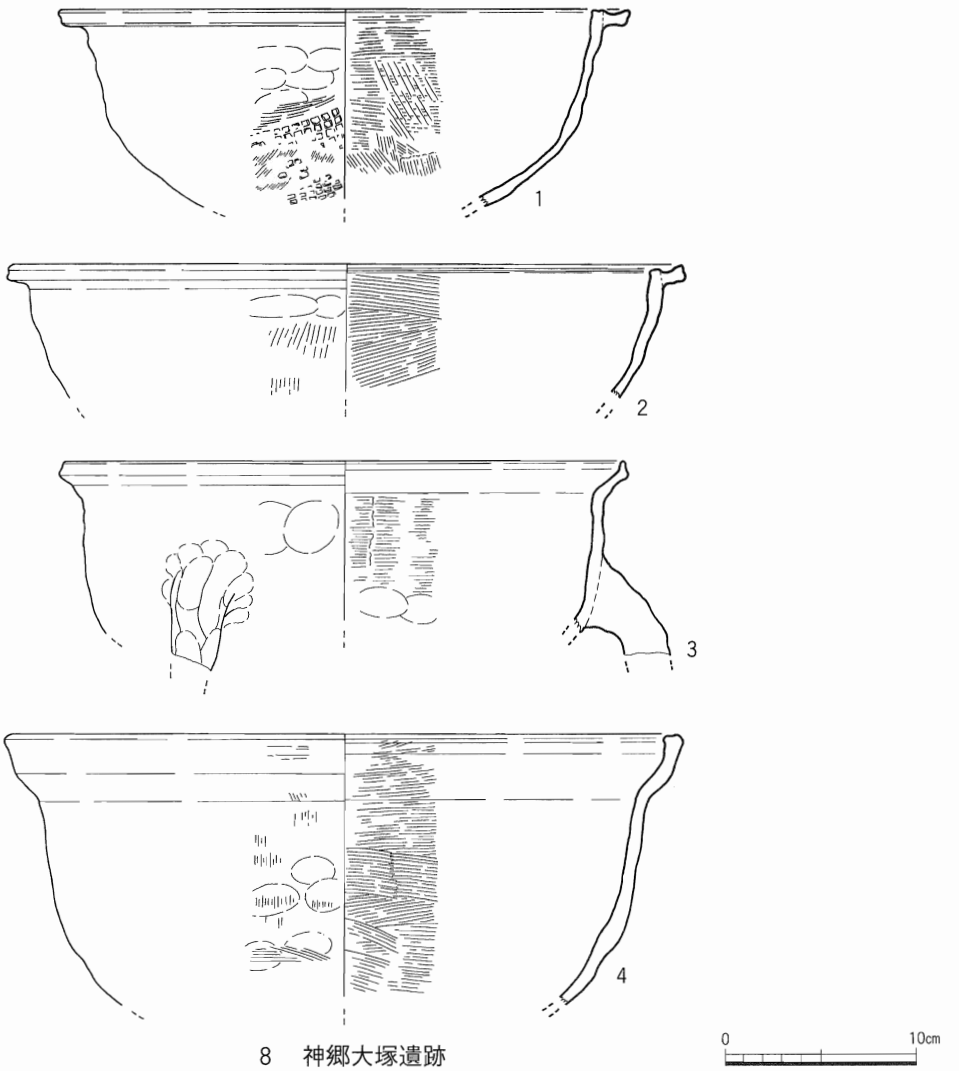
図４　瓦質土器胎土分析試料（３）（S＝ 1/4）



6　岩淵遺跡

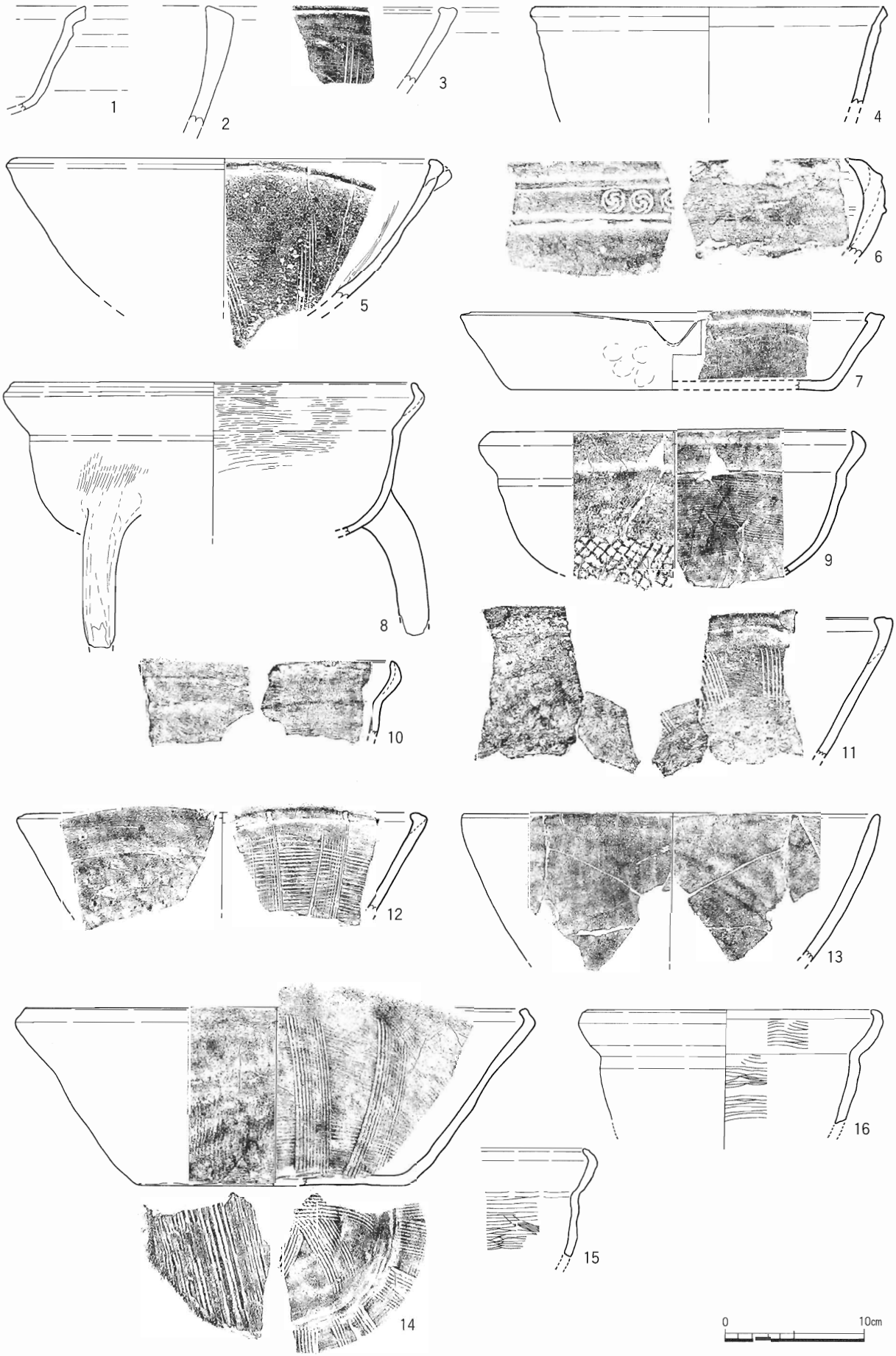


7　原遺跡



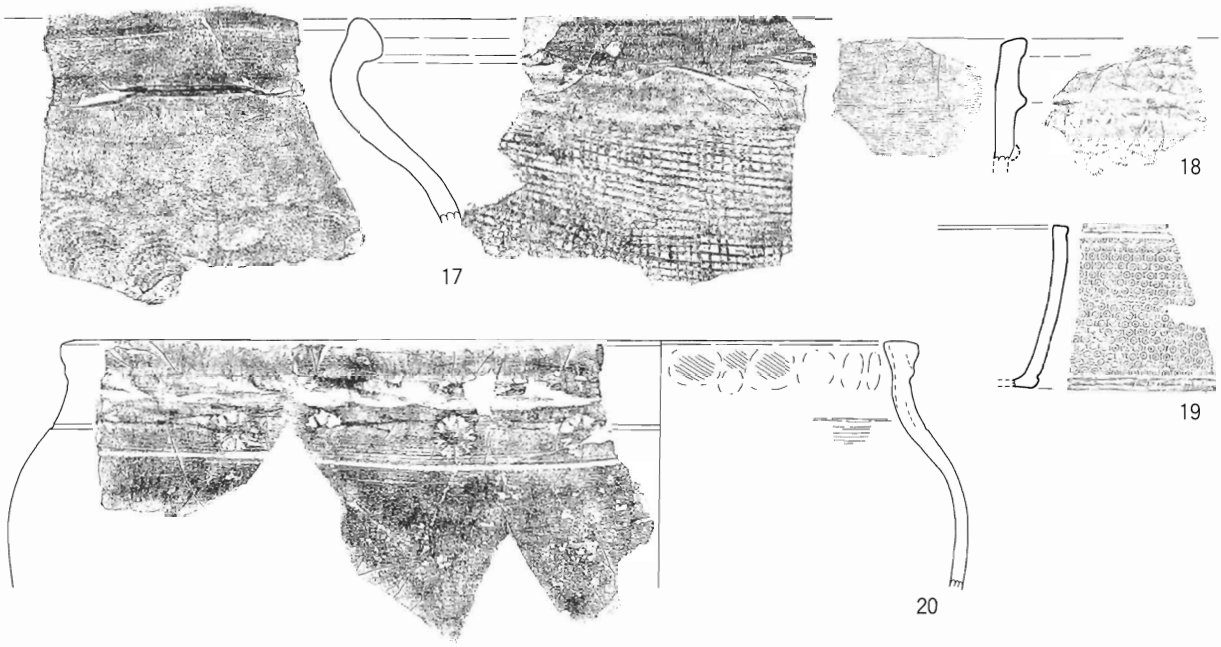
8　神郷大塚遺跡

図５　瓦質土器胎土分析試料（４）（S＝ 1/4）



9　大内氏館跡・大内氏関連町並遺跡

図６　瓦質土器胎土分析試料（５）（S＝ 1/4）



9　大内氏館跡・大内氏関連町並遺跡

図７　瓦質土器胎土分析試料（６）（S＝ 1/4）

20は口縁部が折り返し、あるいは粘土の貼付によって内側に肥厚し、18は口縁端部が内側へ小さく立ち上がるもので、これらは防長型のものである。

（７）原遺跡（山口県防府市）

室町時代を中心とする集落跡である。14～16世紀代の瓦質土器焼成窯跡が４基確認されており、この遺跡で瓦質土器が生産されたていたことが明らかとなった。

１～９は防長型の鍋で、１はⅢ型式古段階、２～８はⅢ形式新段階に分類される。９～11は周防型羽釜、12～18は防長型擂鉢、19～21は火鉢である。

（８）神郷大塚遺跡（山口県山口市）

溝で区画された13～14世紀代の屋敷跡が確認されている。１～４は、第７次調査の井戸１から一括出土したものである。１・２は周防型羽釜、３は土師質の足鍋、４は瓦質土器の鍋である。

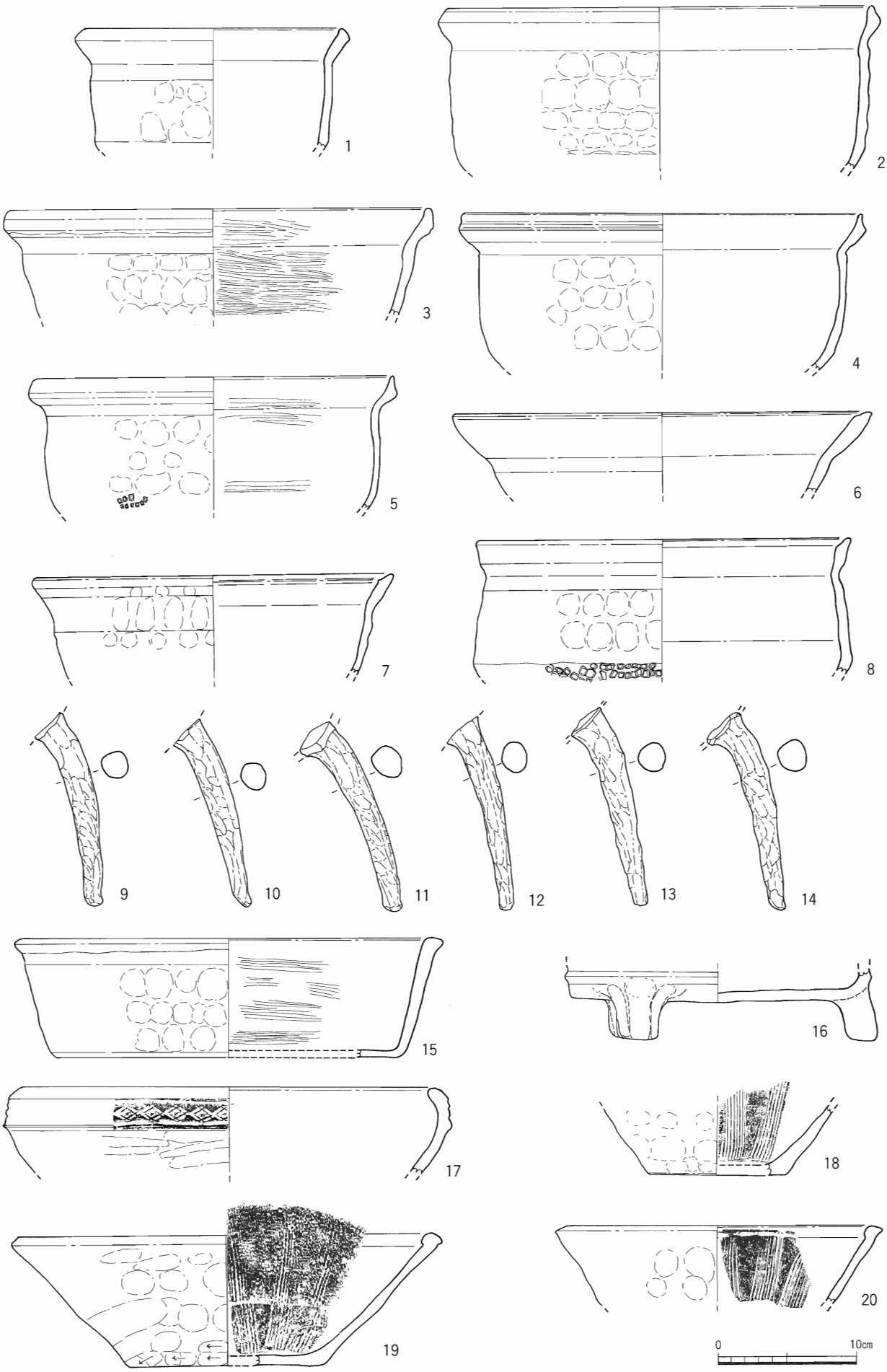
（９）大内氏館跡・大内氏関連町並遺跡（山口県山口市）

長門・周防の守護大名大内氏の居館跡とそれ関連する町並跡である。分析試料は、遺構から一括出土した、時期の特定できるものから選ばれている。

１～３は第24次調査土坑11の、５・６は第10次調査溝１の一括出土資料で、これらは大内Ⅱ期（15世紀後半）に位置づけられる。１・４は防長型の鍋でⅢ型式のものである。２は鉢、３・５は防長型擂鉢である。

６～８は第30次調査土坑２、９・10は第30次調査土坑10、11は第30次調査土坑21から出土したもので、大内Ⅲ期（15世紀末～16世紀初頭）に位置づけられる。６は火鉢、７は焙烙、８～10は防長型Ⅳ型式の鍋、11は防長型擂鉢である。

12～14は第30次調査土坑１から、15・16は第４次調査土坑15から、17は第13次調査ⅣＦ－４区土器溜から、18・19は第45次調査溝３から出土したもので、大内Ⅳ期（16世紀前半～中頃）のものである。12・14は防長型擂鉢で口縁端部が内側に屈折する。13は口縁端部が丸みをもつ鉢、15・16は



10　岡の台遺跡

図８　瓦質土器胎土分析試料（７）（S＝ 1/4）

Ⅳ型式の防長型鍋、17は甕、18・19は火鉢である。

20は第13次調査ⅣＦ－４区で表採された火鉢で、17世紀頃のものと考えられる。

（10）岡の台遺跡（山口県美祢郡美東町）

奈良・平安時代から中世の遺構が多数確認されており、この中には瓦質土器焼成窯跡も１基存在する。このことから瓦質土器の生産がされたことが分かる。

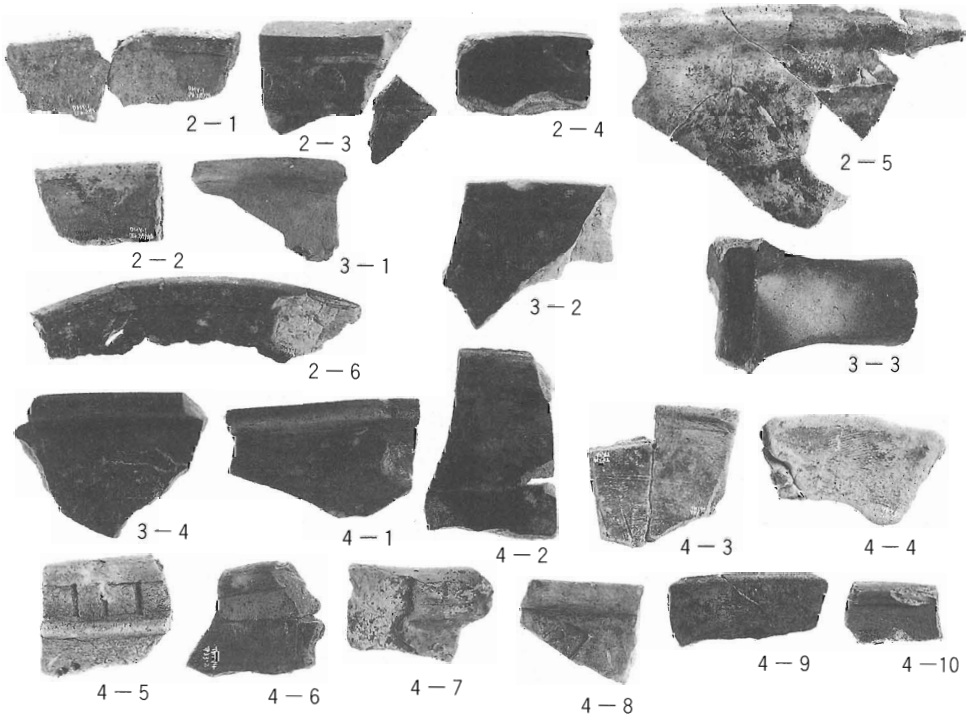
１～８は防長型瓦質土器鍋で、１～５はⅢ型式の新段階、６～８はⅥＡ型式新段階に分類される。９～14は足鍋、15～17は火鉢、18～20は擂鉢である。19・20は口縁部内側を折り返し、もしくは粘土の貼付によって肥厚させており、防長型の特徴を持つものである。　（東山信治）

表１　瓦質土器胎土分析資料一覧

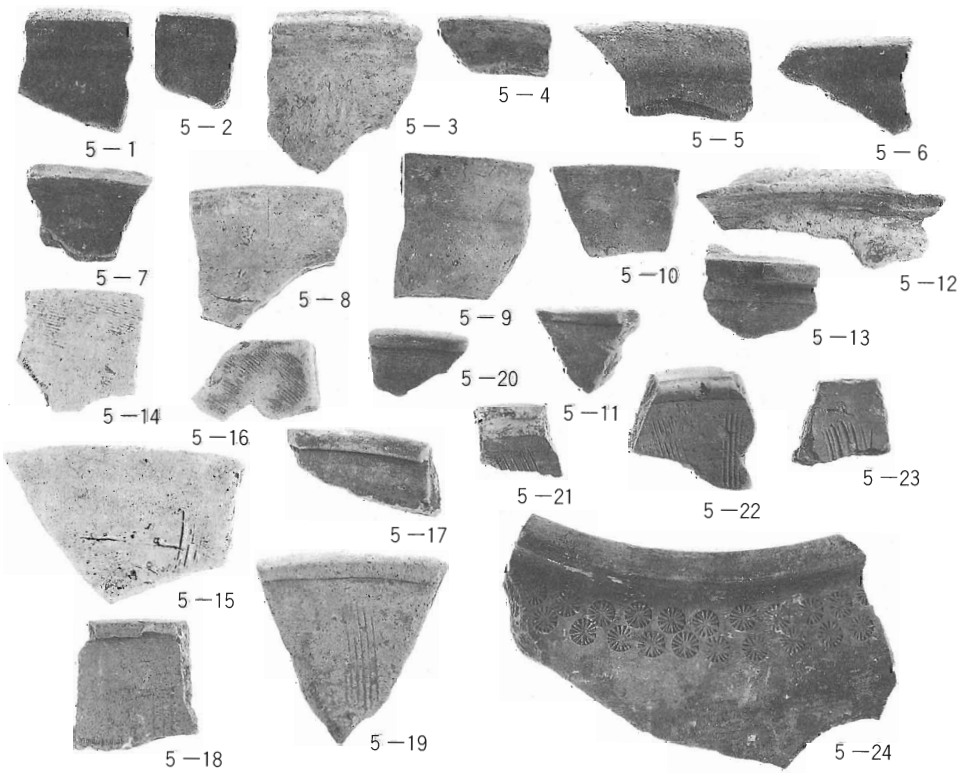
試料No.	遺　跡　名	出土位置等	器　種	備　　考	挿図番号
１－１	沖手遺跡	建物跡33	甕		本書　30－２
１－２	沖手遺跡	溝状遺構３	湯釜		本書　47－８
１－３	沖手遺跡	溝状遺構３	鉢	13～14ｃ	本書　47－７
１－４	沖手遺跡	溝状遺構３	鉢	13～14ｃ	本書　47－10
１－５	沖手遺跡	溝状遺構３	鉢	13～14ｃ	本書　47－９
１－６	沖手遺跡	溝状遺構８	鍋	防長型Ⅰ？、14Ｃ後半～15Ｃ前半	本書　51－８
１－７	沖手遺跡	溝状遺構８	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　51－９
１－８	沖手遺跡	溝状遺構８	鍋	防長型Ⅵａ古、16Ｃ前半～末	本書　51－７
１－９	沖手遺跡	溝状遺構８	湯釜		本書　51－10
１－10	沖手遺跡	溝状遺構８	鉢	土師器、13～14ｃ	本書　51－11
１－11	沖手遺跡	溝状遺構８	擂鉢	防長型、15ｃ～16ｃ	本書　51－13
１－12	沖手遺跡	溝状遺構８	擂鉢	防長型、16ｃ末～17ｃ初	本書　51－12
１－13	沖手遺跡	３－SK16	擂鉢	13～14ｃ	本書　65－２
１－14	沖手遺跡	建物跡72	擂鉢	防長型、15ｃ～16ｃ	本書　100－６
１－15	沖手遺跡	建物跡74	足鍋		本書　100－７
１－16	沖手遺跡	柱列22	甕		本書　101－１
１－17	沖手遺跡	墓34	甕		本書　113－２
１－18	沖手遺跡	墓34	甕？		本書　113－１
１－19	沖手遺跡	墓35	擂鉢		本書　113－３
１－20	沖手遺跡	溝状遺構14	鍋	防長型ⅥＢ、16Ｃ前半～後半	本書　102－２
１－21	沖手遺跡	溝状遺構15	擂鉢	防長型、15～16ｃ	本書　103－１
１－22	沖手遺跡	４－SK28	擂鉢		本書　116－２
１－23	沖手遺跡	４－SK30	甕		本書　116－４
１－24	沖手遺跡	４－SK75	擂鉢	防長型、15ｃ～16ｃ	本書　116－８
１－25	沖手遺跡	４－P2166	羽釜		本書　116－12
１－26	沖手遺跡	４－P2855	火鉢		本書　116－20
１－27	沖手遺跡	４－P2889	湯釜		本書　116－21
１－28	沖手遺跡	４－P3391	鍋	防長型ⅥＢ、16Ｃ前半～後半	本書　116－25
１－29	沖手遺跡	25E　２層	鍋	土師器、13～14ｃ	本書　119－３
１－30	沖手遺跡	25D　２層	鍋	土師器、西長門型ａ	本書　119－４
１－31	沖手遺跡	撹乱	鍋	土師器、西長門型ａ	本書　119－１
１－32	沖手遺跡	60　２層	鍋	土師器、西長門型ｂ	本書　119－６
１－33	沖手遺跡	25E　２層	鍋	土師器、西長門型ｂ	本書　119－５
１－34	沖手遺跡	7P　２層	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－12
１－35	沖手遺跡	25E　２層	鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	本書　119－７
１－36	沖手遺跡	22F　２層	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－８
１－37	沖手遺跡	6P　２層	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－10
１－38	沖手遺跡	7Q　２層	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－９
１－39	沖手遺跡	21G　２層	鍋	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	本書　119－15
１－40	沖手遺跡	22H　２層	鍋	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	本書　119－13
１－41	沖手遺跡	20H　２層	鍋	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	本書　119－14
１－42	沖手遺跡	25E　２層	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－11
１－43	沖手遺跡	25E　２層	鍋	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	本書　119－17
１－44	沖手遺跡	17I	鍋	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	本書　119－16
１－45	沖手遺跡	22H　２層	鍋	防長型ⅥＢ、16Ｃ前半～後半	本書　119－18
１－46	沖手遺跡	26D　２層	焙烙		本書　119－19
１－47	沖手遺跡	21G　２層	足鍋		本書　119－22
１－48	沖手遺跡	21H	足鍋		本書　119－21
１－49	沖手遺跡	25E　２層	足鍋		本書　119－20
１－50	沖手遺跡	12L　２層	羽釜		本書　119－24
１－51	沖手遺跡	不明	羽釜		本書　119－23
１－52	沖手遺跡	5P　２層	湯釜		本書　119－29
１－53	沖手遺跡	22H　２層	湯釜		本書　119－26
１－54	沖手遺跡	6P　２層	湯釜		本書　119－28
１－55	沖手遺跡	21F　２層	湯釜		本書　119－30
１－56	沖手遺跡	14K　２層	湯釜		本書　119－27
１－57	沖手遺跡	12L　２層	湯釜		本書　119－32
１－58	沖手遺跡	25F　２層	湯釜		本書　119－31

試料No.	遺　跡　名	出土位置等	器　種	備　　考	挿 図 番 号
1－59	沖手遺跡	26E　2層	湯釜		本書　119－34
1－60	沖手遺跡	25F　2層	湯釜		本書　119－33
1－61	沖手遺跡	25E	擂鉢	土師器、13～14ｃ	本書　120－1
1－62	沖手遺跡	25D　2層	擂鉢	土師器、13～14ｃ	本書　120－5
1－63	沖手遺跡	6Q　2層	鉢		本書　120－7
1－64	沖手遺跡	25D　2層	鉢		本書　120－6
1－65	沖手遺跡	25E　2層	擂鉢		本書　120－8
1－66	沖手遺跡	23G　2層	擂鉢	防長型、15～16ｃ	本書　120－12
1－67	沖手遺跡	22F　2層	擂鉢	防長型、15～16ｃ	本書　120－11
1－68	沖手遺跡	16J　2層	鉢	防長型、15～16ｃ	本書　120－9
1－69	沖手遺跡	5P　2層	擂鉢	防長型、15～16ｃ	本書　120－10
1－70	沖手遺跡	7F　2層	擂鉢	防長型、16ｃ末～17ｃ初	本書　120－14
1－71	沖手遺跡	21G　2層	擂鉢	防長型、16ｃ末～17ｃ初	本書　120－13
1－72	沖手遺跡	7P　2層	擂鉢		本書　120－15
1－73	沖手遺跡	7P　2層	火鉢		本書　121－3
1－74	沖手遺跡	7P　2層	火鉢		本書　121－4
1－75	沖手遺跡	22G　2層	火鉢		本書　121－2
1－76	沖手遺跡	16J　2層	火鉢		本書　121－1
1－77	沖手遺跡	12L　2層	火鉢		本書　121－6
1－78	沖手遺跡	12I　2層	火鉢		本書　121－7
1－79	沖手遺跡	26D　2層	火鉢		本書　121－5
1－80	沖手遺跡	25E　2層	火鉢		本書　121－8
1－81	沖手遺跡	21G　2層	火鉢		本書　121－10
1－82	沖手遺跡	7P　2層	火鉢		本書　121－9
1－83	沖手遺跡	13J　2層	甕		本書　120－17
1－84	沖手遺跡	4R　2層	甕		本書　120－16
1－85	沖手遺跡	7Q　2層	甕		本書　120－18
1－86	沖手遺跡	26O　2層	甕		本書　120－19
2－1	土居丸館跡	F6・2層	鉢	防長型、15～16ｃ	
2－2	土居丸館跡	E6・2層	鉢	防長型、15～16ｃ	
2－3	土居丸館跡	E6・1層、F7・2層	浅鉢形火鉢		
2－4	土居丸館跡	F6・4層	鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
2－5	土居丸館跡	E6・4層	鍋	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	
2－6	土居丸館跡	SX6	鉢	防長型、15～16ｃ	
3－1	有福寺遺跡	B-3G、M区	羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	文献1　7－53
3－2	有福寺遺跡	B-2G、2層	鍋	防長型Ⅱ、14Ｃ末～15Ｃ中葉	文献1　7－57
3－3	有福寺遺跡	B-2G、2層	焙烙		文献1　7－61
3－4	有福寺遺跡	B-2G、2層	鍋	防長型Ⅱ、14Ｃ末～15Ｃ中葉	文献1　7－62
4－1	高田遺跡	90-TP9、3層	羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	文献2　12－53
4－2	高田遺跡	91-TP7、4層	鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	文献3　11－6
4－3	高田遺跡	94-TP1	擂鉢		文献4　7－33
4－4	高田遺跡	94-TP4	鉢	土師器、13～14ｃ	文献4　10－52
4－5	高田遺跡	94-TP16	火鉢		文献4　17－67
4－6	高田遺跡	94-TP33	鉢	防長型、15～16ｃ	文献4　33－139
4－7	高田遺跡	94-TP38	火鉢		文献4　40－183
4－8	高田遺跡	94-TP43	火鉢		文献4　44－188
4－9	高田遺跡	94-TP53	鍋	ⅥA古、16ｃ前半～末	文献4　53－214
4－10	高田遺跡	95-TP15	鉢	防長型、15～16ｃ	文献5　30－25
5－1	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－2	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－3	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
5－4	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－5	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－6	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－7	岡田・江良遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－8	岡田・江良遺跡		鍋	防長型ⅥB、16ｃ前半～後半	
5－9	岡田・江良遺跡		鍋	防長型ⅥB、16ｃ前半～後半	
5－10	岡田・江良遺跡		鍋	防長型ⅥB、16ｃ前半～後半	
5－11	岡田・江良遺跡		鍋	防長型ⅥB、16ｃ前半～後半	
5－12	岡田・江良遺跡		湯釜		
5－13	岡田・江良遺跡		湯釜		
5－14	岡田・江良遺跡		鉢	土師器、	
5－15	岡田・江良遺跡		擂鉢		
5－16	岡田・江良遺跡		鉢		
5－17	岡田・江良遺跡		鉢	防長型、15～16ｃ	
5－18	岡田・江良遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
5－19	岡田・江良遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
5－20	岡田・江良遺跡		鉢	防長型、15～16ｃ	
5－21	岡田・江良遺跡		鉢	防長型、15～16ｃ	
5－22	岡田・江良遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
5－23	岡田・江良遺跡		擂鉢	備前焼（14ｃ後半）	
5－24	岡田・江良遺跡		風炉		
6－1	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－2	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅱ～Ⅲ古、14ｃ末～15ｃ中葉	
6－3	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－4	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－5	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	
6－6	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
6－7	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－8	岩淵遺跡		鍋	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	

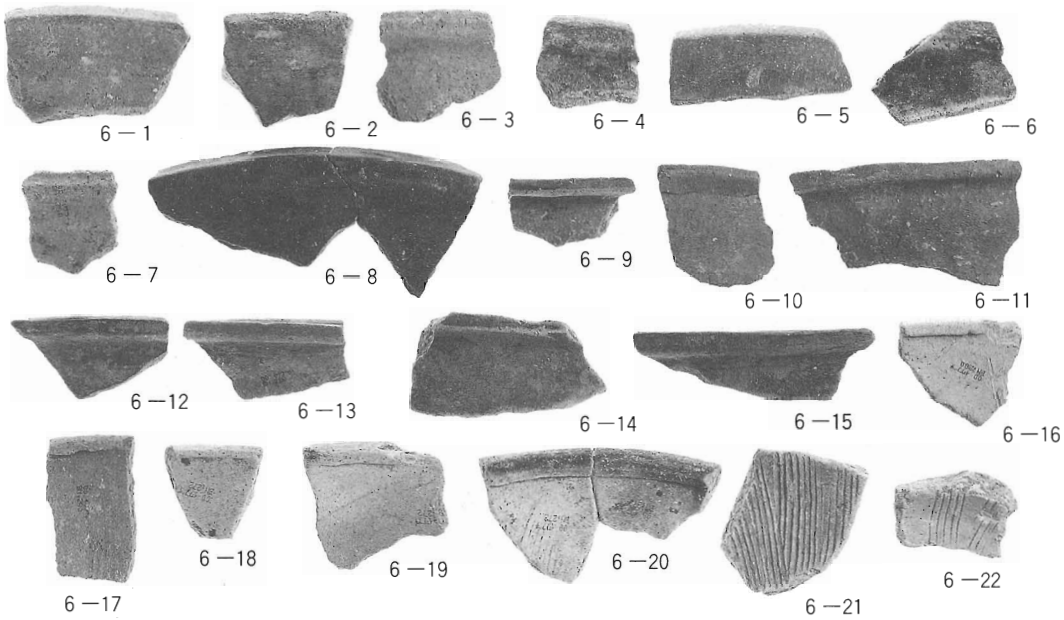
試料No.	遺　跡　名	出土位置等	器　種	備　　考	挿 図 番 号
6－9	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－10	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－11	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－12	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－13	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－14	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－15	岩淵遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－16	岩淵遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
6－17	岩淵遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
6－18	岩淵遺跡		鉢	防長型、16ｃ	
6－19	岩淵遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
6－20	岩淵遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
6－21	岩淵遺跡		擂鉢		
6－22	岩淵遺跡		擂鉢		
7－1	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
7－2	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－3	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－4	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－5	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－6	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－7	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－8	原遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－9	原遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
7－10	原遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
7－11	原遺跡		羽釜	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
7－12	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－13	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－14	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－15	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－16	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－17	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－18	原遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	
7－19	原遺跡		火鉢		
7－20	原遺跡		火鉢		
7－21	原遺跡		火鉢		
8－1	神郷大塚遺跡	第７次－井戸１	羽釜	大内Ｉ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－４
8－2	神郷大塚遺跡	第７次－井戸１	羽釜	大内Ｉ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－６
8－3	神郷大塚遺跡	第７次－井戸１	足鍋	大内Ｉ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－10
8－4	神郷大塚遺跡	第７次－井戸１	鍋	大内Ｉ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－11
9－1	大内氏館跡	第24次－土坑11	鍋	大内Ⅱ期（15ｃ後半）、防長型Ⅲ	文献10　24－21
9－2	大内氏館跡	第24次－土坑11	鉢	大内Ⅱ期（15ｃ後半）	文献10　24－24
9－3	大内氏館跡	第24次－土坑11	擂鉢	大内Ⅱ期（15ｃ後半）	文献10　24－25
9－4	大内氏館跡	第10次－溝１	鍋	大内Ⅱ期（15ｃ後半）、防長型Ⅲ	文献11　23－160
9－5	大内氏館跡	第10次－溝１	擂鉢	大内Ⅱ期（15ｃ後半）、防長型	文献11　23－171
9－6	大内氏館跡	第30次－土坑２	火鉢	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）	
9－7	大内氏館跡	第30次－土坑２	焙烙	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）	
9－8	大内氏館跡	第30次－土坑２	足鍋	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型Ⅳ	
9－9	大内氏館跡	第30次－土坑10	鍋	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型Ⅳ	
9－10	大内氏館跡	第30次－土坑10	鍋	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型Ⅳ	
9－11	大内氏館跡	第30次－土坑21	擂鉢	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型	
9－12	大内氏館跡	第30次－土坑１	擂鉢	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型	
9－13	大内氏館跡	第30次－土坑１	鉢	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型	
9－14	大内氏館跡	第30次－土坑１	擂鉢	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型	
9－15	大内氏館跡	第４次－土坑15	鍋	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型Ⅳ	文献12　44－16
9－16	大内氏館跡	第４次－土坑15	鍋	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型Ⅳ	文献12　44－17
9－17	大内氏館跡	第13次-ⅣF-４区土器溜	甕	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）	文献13　23－２
9－18	大内氏関連町並遺跡	第45次－溝３	火鉢	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）	文献14　24－39
9－19	大内氏関連町並遺跡	第45次－溝３	火鉢	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）	文献14　24－40
9－20	大内氏館跡	第13次-ⅣF-４区表採	火鉢	17ｃ	文献13　23－１
10－1	岡の台遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－１
10－2	岡の台遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－７
10－3	岡の台遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－８
10－4	岡の台遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－９
10－5	岡の台遺跡		鍋	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－10
10－6	岡の台遺跡		鍋	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	文献15　70－13
10－7	岡の台遺跡		鍋	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	文献15　70－15
10－8	岡の台遺跡		鍋	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	文献15　70－17
10－9	岡の台遺跡		足鍋		文献15　71－19
10－10	岡の台遺跡		足鍋		文献15　71－22
10－11	岡の台遺跡		足鍋		文献15　71－23
10－12	岡の台遺跡		足鍋		文献15　71－27
10－13	岡の台遺跡		足鍋		文献15　71－28
10－14	岡の台遺跡		足鍋		文献15　71－33
10－15	岡の台遺跡		火鉢		文献15　71－38
10－16	岡の台遺跡		火鉢		文献15　71－40
10－17	岡の台遺跡		火鉢		文献15　71－41
10－18	岡の台遺跡		擂鉢		文献15　71－43
10－19	岡の台遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	文献15　71－44
10－20	岡の台遺跡		擂鉢	防長型、15～16ｃ	文献15　71－45



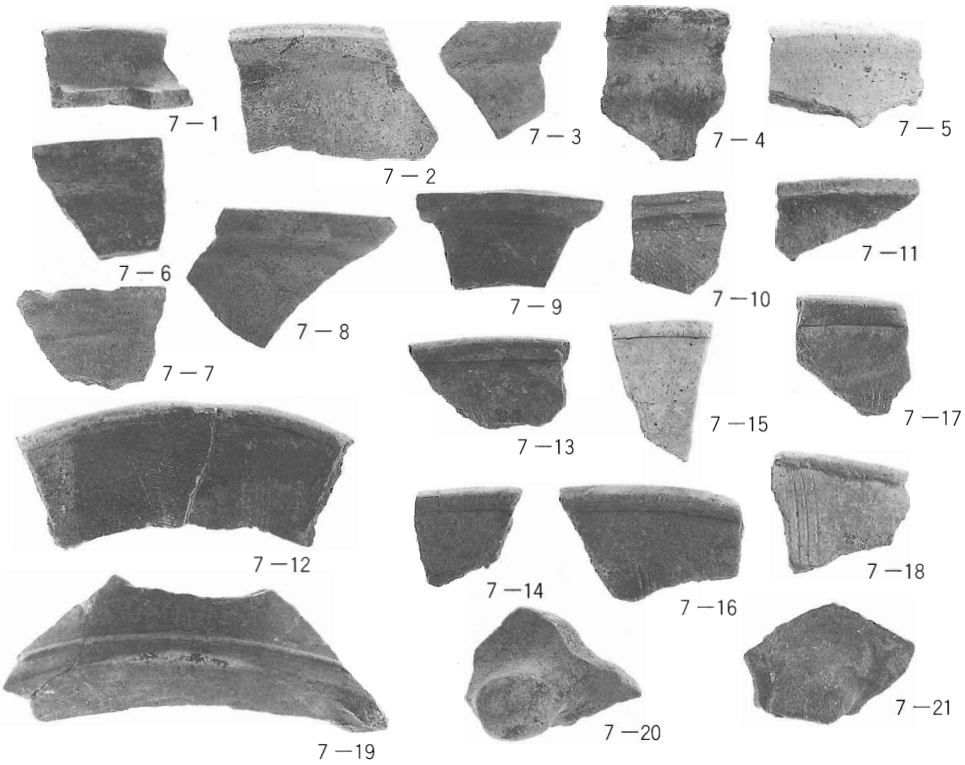
2　土居丸館跡　　3　有福寺遺跡　　4　高田遺跡



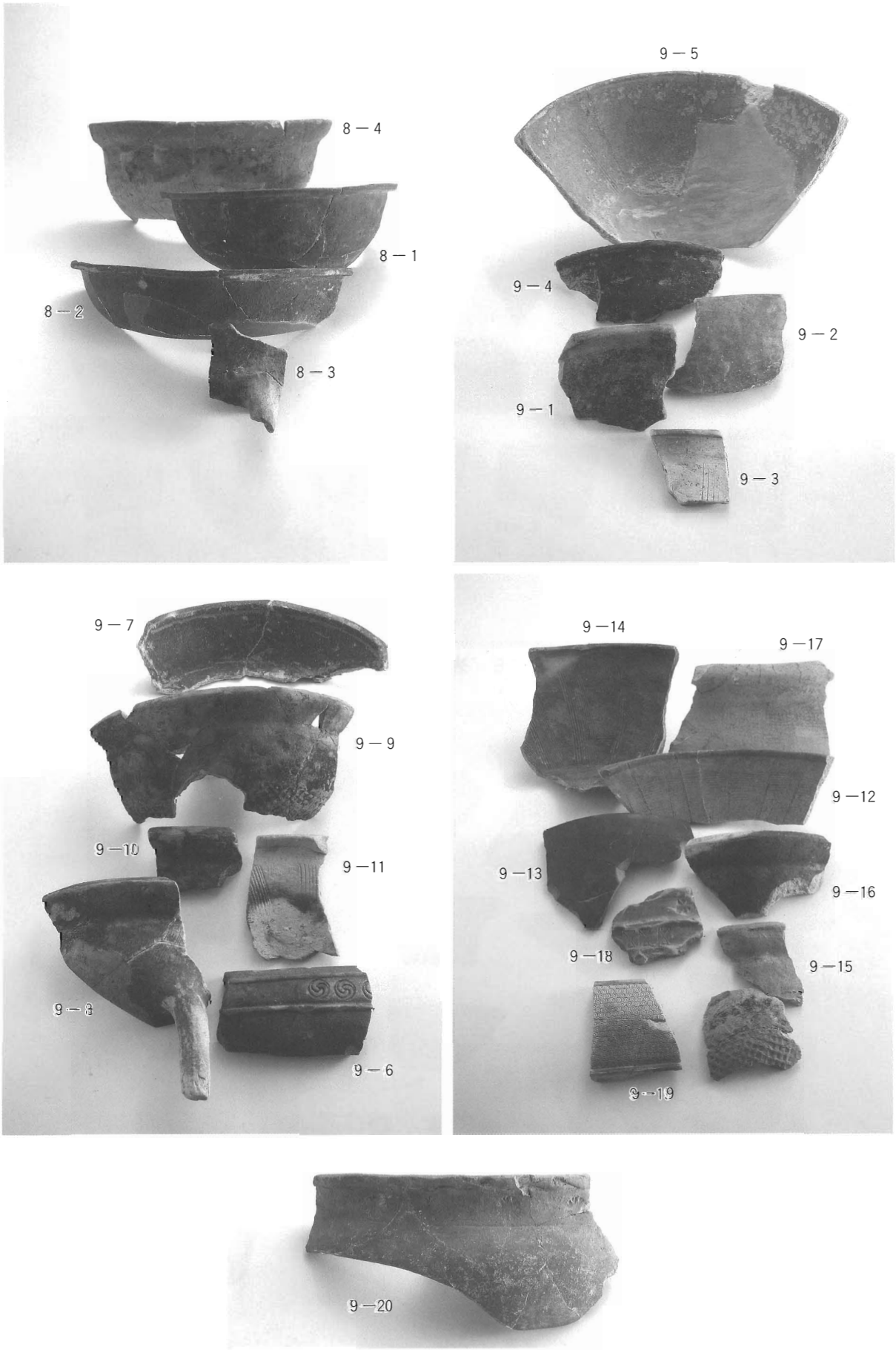
5　岡田・江良遺跡


6－1
6－2
6－3
6－4
6－5
6－6
6－7
6－8
6－9
6－10
6－11
6－12
6－13
6－14
6－15
6－16
6－17
6－18
6－19
6－20
6－21
6－22

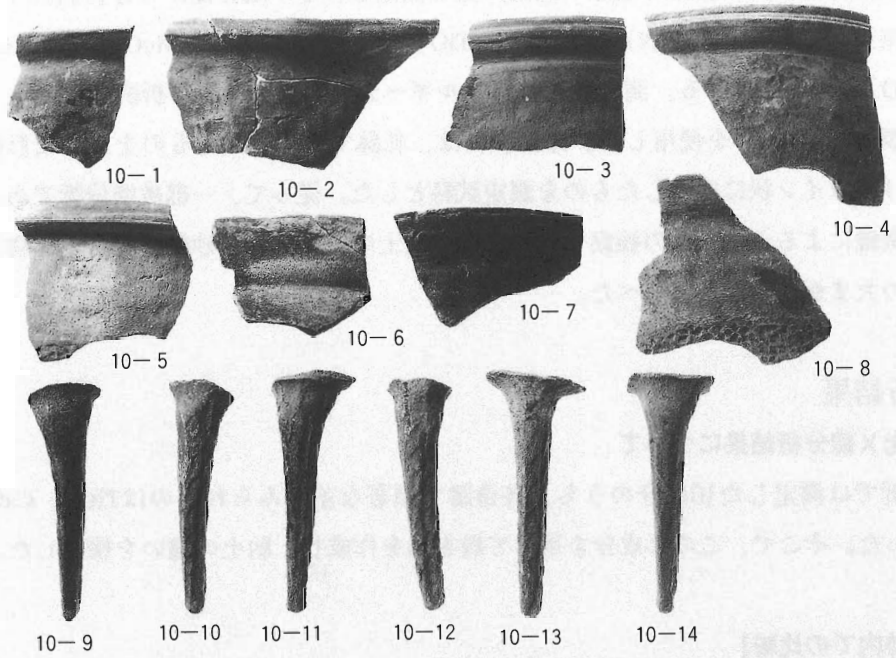
6　岩淵遺跡

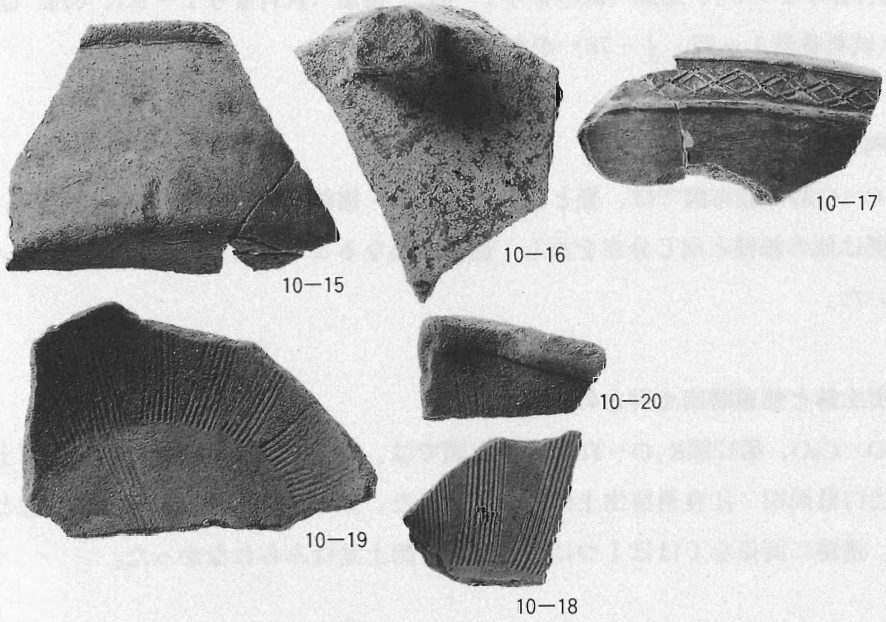

7－1
7－2
7－3
7－4
7－5
7－6
7－7
7－8
7－9
7－10
7－11
7－12
7－13
7－14
7－15
7－16
7－17
7－18
7－19
7－20
7－21

7　原遺跡



8　神郷大塚遺跡　　9　大内氏館跡・大内氏関連町並遺跡


10－1
10－2
10－3
10－4
10－5
10－6
10－7
10－8
10－9
10－10
10－11
10－12
10－13
10－14


10－15
10－16
10－17
10－19
10－20
10－18

10　岡の台遺跡

３．分析方法

分析方法は、蛍光Ｘ線分析法と実体顕微鏡による土器表面の胎土観察の２つの方法で検討した。

蛍光Ｘ線分析法では、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分（酸化物）は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約15^{トン}の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさなどの大まかな含有量を調べた。

４．分析結果

（１）蛍光Ｘ線分析結果について

この分析では測定した10成分のうち、各遺跡で顕著な差がみられたのはTiO_2、CaO、K_2Oの３成分であった。そこで、この３成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

【沖手遺跡内での比較】

第９図K_2O－CaO散布図では、沖手遺跡内から出土した全器種の瓦質土器を比較した。すると第９図では擂鉢や鍋がおもに分布するK_2O量が約1.3％～2.6％、CaO量が約0.3％～0.75％の範囲に分布し、一部の試料を除いて一定の範囲内にまとまる傾向がみられた。

なお、この分布域に入らない試料として、甕（試料番号１－85・１－86）、擂鉢（試料番号１－19）、鍋（試料番号１－６）、足鍋（試料番号１－47）、湯釜（試料番号１－９）、羽釜（試料番号１－25）、火鉢（試料番号１－77・１－78）がある。

【沖手遺跡内での甕の比較】

第10図K_2O－CaOの散布図では、甕と他の器種（鉢・擂鉢・鍋）の比較を実施した。その結果、ほとんどの甕は他の器種と同じ分布を示し、胎土が異なることはなかった。ただ、１－85の甕のみが異なっていた。

【沖手遺跡出土鉢と他遺跡出土鉢との比較】

第11図K_2O－CaO、第12図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の鉢と津和野町土居丸館跡・高田遺跡、山口県岡田・江良遺跡出土の鉢と比較した。その結果、沖手遺跡出土の鉢とほかの遺跡出土の鉢は、遺跡に関係なくほぼ１つにまとまり、胎土差はみられなかった。

【沖手遺跡出土擂鉢と他遺跡出土擂鉢との比較】

第13図K_2O－CaO、第14図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の擂鉢と津和野町高田遺跡、山口県岡田・江良遺跡、岩淵遺跡、原遺跡、岡の台遺跡の擂鉢と比較した。その結果、沖手遺跡のものは、岩淵および原遺跡の分布域に入るものと、そうでないものに分かれた。岩淵遺跡、原遺跡の分布域に入らない擂鉢は試料番号１－13・１－14・１－24・１－62・１－66・１－67の６点であ

る。なお、生産地遺跡の岩淵、原、岡の台は岩淵・原と岡の台のあいだで胎土が異なり識別できた。

【沖手遺跡出土鍋と他遺跡出土鍋との比較】

第15図K_2O－CaO、第16図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の鍋と津和野町土居丸館跡・有福寺遺跡・高田遺跡、山口県岡田・江良遺跡、岩淵遺跡、岡の台遺跡出土の鍋と比較した。なお岩淵遺跡、岡の台遺跡は生産地遺跡である。その結果、沖手遺跡出土の鍋は一部のものを除いて岩淵遺跡の分布域に入る結果となった。なお、試料１－６はどの分布域にも入らなかった。また津和野町土居丸館跡、有福寺遺跡・高田遺跡の鍋も同じ結果であった。また、生産地遺跡である岩淵遺跡と岡の台遺跡はK_2Oの違いで分布域が異なり識別できた。

【沖手遺跡出土足鍋と他遺跡出土足鍋との比較】

第17図K_2O－CaO、第18図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の足鍋と山口県岡の台遺跡出土の足鍋を比較した。その結果、沖手遺跡の足鍋は岡の台遺跡のそれとは胎土が一致しなかった。

【沖手遺跡出土羽釜と他遺跡出土羽釜との比較】

第19図K_2O－CaO、第20図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の羽釜と津和野町有福寺遺跡・高田遺跡、山口県岩淵遺跡、原遺跡出土の羽釜を比較した。その結果、沖手遺跡の羽釜は岩淵遺跡、原遺跡出土の羽釜とは胎土が一致しなかった。また津和野町の有福寺遺跡の羽釜も同様であった。ただ、高田遺跡の羽釜は岩淵・原遺跡出土の羽釜と胎土が一致した。

【沖手遺跡出土湯釜と他遺跡出土湯釜との比較】

第21図K_2O－CaO、第22図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の湯釜と山口県岡田・江良遺跡の湯釜を比較した。その結果、沖手遺跡の湯釜は岡田・江良遺跡出土の湯釜と胎土が一致した。

【沖手遺跡出土火鉢・風炉・焙烙と他遺跡出土火鉢・風炉・焙烙との比較】

第23図K_2O－CaO、第24図K_2O－TiO_2の散布図では、沖手遺跡出土の火鉢・風炉・焙烙と津和野町土居丸館跡・有福寺遺跡・高田遺跡、山口県岡田・江良遺跡、原遺跡、岡の台遺跡出土の火鉢・風炉・焙烙を比較した。その結果、沖手遺跡の火鉢は原遺跡と胎土が一致するものと、一致しないものがあった。一致しないものは試料番号１－77、１－78である。また沖手遺跡の風炉および焙烙は同じ沖手遺跡の火鉢と胎土が類似していた。なお、原遺跡の火鉢は２つの胎土に分類できた。そのうちのCaO量が少ない火鉢に、土居丸館跡の火鉢が類似していた。また、原と岡の台の火鉢は胎土が異なっていた。

【大内氏館跡出土鉢と他遺跡出土鉢との比較】

第25図K_2O－CaOの散布図では、山口県大内氏館跡出土の鉢と山口県岡田・江良遺跡出土鉢を比較した。その結果、大内氏館の鉢２点のうち試料番号９－２は、岡田・江良遺跡と類似しているが、試料番号９－13は胎土が異なっていた。

【大内氏館跡出土擂鉢と他遺跡出土擂鉢との比較】

第26図K_2O－CaOの散布図では、山口県大内氏館跡出土の鉢と山口県岩淵遺跡、原遺跡、岡の台遺跡出土擂鉢を比較した。その結果、大内氏館出土の擂鉢は岩淵遺跡、原遺跡の分布域に入った。

【大内氏館跡出土鍋・足鍋と他遺跡出土鍋・足鍋の比較】

第27図K_2O－CaOの散布図では、山口県大内氏館跡出土の鍋と山口県岡田・江良遺跡、岩淵遺跡、岡の台遺跡出土擂鉢を比較した。その結果、大内氏館出土の鍋は岩淵遺跡の分布域に入った。

【神郷大塚遺跡出土羽釜と他遺跡出土羽釜の比較】

第28図K_2O－CaOの散布図では、山口県神郷大塚遺跡出土の羽釜と山口県岩淵遺跡、原遺跡出土羽釜を比較した。その結果、神郷大塚出土の羽釜は岩淵遺跡、原遺跡の分布域に入った。

【大内氏館跡出火鉢・焙烙と他遺跡出土火鉢・焙烙の比較】

第29図K_2O－CaOの散布図では、山口県大内氏館跡出土の火鉢・焙烙と山口県原遺跡、岡の台遺跡出土火鉢を比較した。その結果、大内氏館出土の火鉢は原遺跡、岡の台遺跡の両分布域には入らなかった。また、大内氏館出土の焙烙は、単独で分布した。

（２）実体顕微鏡観察結果について

沖手遺跡、島根県津和野町（土居丸館跡、有福寺遺跡、高田遺跡）、山口県（岡田・江良遺跡、岩淵遺跡、原遺跡、神郷大塚遺跡、大内氏館跡、岡の台遺跡）の胎土を観察した結果、以下のような４種類の特徴ある胎土に分類された。

１類　……　石英が多く含まれ、少量の長石がみられるもの（第30図、写真１・５）。

２類　……　石英・長石・雲母がみられるもの（第30図、写真２）。

３類　……　石英・長石・雲母・火山ガラスがみられるもの（第30図、写真３・６）。

４類　……　石英が含まれ、黒色粒がみられるもの（第30図、写真４）。

生産地遺跡である山口県の岩淵遺跡、原遺跡、岡の台遺跡の胎土は、各遺跡とも砂粒構成に特徴があり、ある程度の判別が可能であった。それは、岩淵遺跡、原遺跡の土器には、２・３類の胎土の土器が多く、岡の台には１類の胎土の土器が多くみられた。

以上の観察結果から、沖手遺跡出土の瓦質土器には、岩淵および原遺跡の胎土に類似したものがみられた。また津和野町内の各遺跡（土居丸館跡、有福寺遺跡、高田遺跡）、大内氏館跡も同様の観察結果であった。

５．考　察

蛍光Ｘ線分析法と実体顕微鏡観察法による瓦質土器の胎土分析では、以下のことが推定された。

（１）蛍光Ｘ線分析による沖手遺跡出土の瓦質土器の分析では、一部の試料を除いてほとんどが１つにまとまり、胎土に明確な違いはみられなかった。そして、山口県内で確認された瓦質土器の窯跡出土（岩淵遺跡、原遺跡、岡の台遺跡）との比較では、各器種別に胎土を比較した。その結果、ほとんどの瓦質土器が岩淵、原遺跡と類似していた。また、津和野町

内の各遺跡（土居丸館跡、有福寺遺跡、高田遺跡）出土の土器も、岩淵遺跡、原遺跡と類似していた。

大内氏館跡出土の瓦質土器も同様に、岩淵、原遺跡と類似していた。

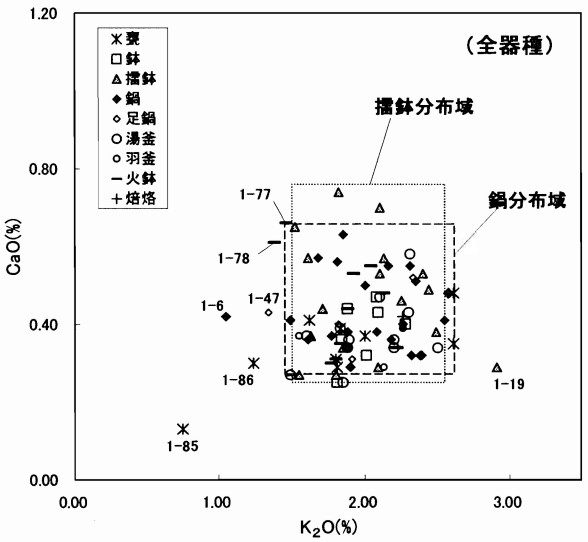
（２）実体顕微鏡による砂粒観察でも、沖手遺跡出土の瓦質土器は、岩淵遺跡、原遺跡の土器は砂粒構成が類似していた。また、津和野町内（土居丸館跡、有福寺遺跡、高田遺跡）、大内氏館跡も同様の結果であった。

以上のように蛍光Ｘ線分析と実体顕微鏡による砂粒観察の２つの胎土分析法から、沖手遺跡出土の瓦質土器は、ほとんどが山口県の生産地遺跡である岩淵、原遺跡の胎土と類似していた。なお、器種によっては、分析試料点数により多少の違いがあり定量的な比較が十分でないものもあった。また岩淵遺跡、原遺跡出土の土器は、砂粒分類２・３類の胎土であることがわかったが、これらの遺跡の周辺粘土や地質基盤層など詳細な検討を加えていないことから、不十分な生産地推定となった。今後試料の蓄積をして再検討する必要がある。　（白石　純）

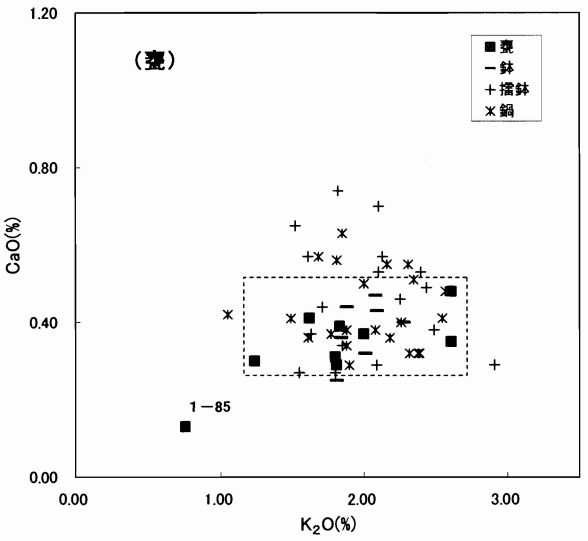
今回の分析調査では、津和野町教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、山口市教育委員会、美東町教育委員会より分析試料を提供していただいた。また、岩崎仁志氏（山口県教育委員会）より多くのご教示を得た。末筆ではありますが記して感謝いたします。

引用・参考文献

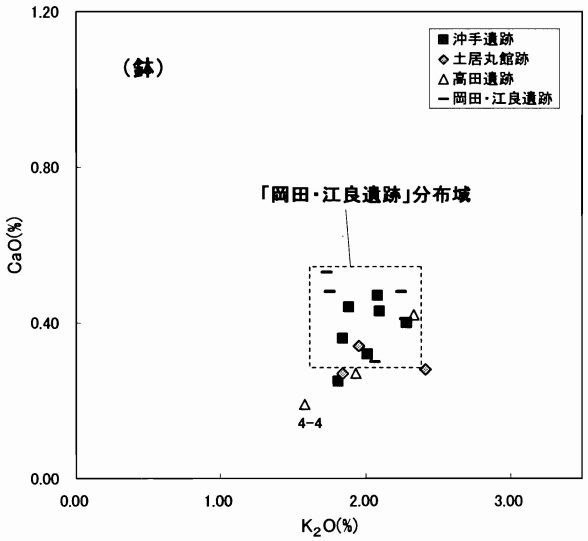
（１）津和野町教育委員会　1994　『有福寺遺跡発掘調査概要報告書』
（２）津和野町教育委員会　1991　『高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書』
（３）津和野町教育委員会　1992　『高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書Ⅱ』
（４）津和野町教育委員会　1995　『高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書Ⅲ』
（５）津和野町教育委員会　1996　『高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書Ⅳ』
（６）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター　1998　『岡田・江良遺跡』
（７）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター　2001　『岩淵遺跡』
（８）山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター　2001　『原遺跡』
（９）山口市教育委員会　2007　『神郷大塚遺跡Ⅳ』
（10）山口市教育委員会　2006　『山口市埋蔵文化財年報５』
（11）山口市教育委員会　1991　『大内氏館跡Ⅷ』
（12）山口市教育委員会　1982　『大内氏館跡Ⅳ』
（13）山口市教育委員会　2007　『山口市埋蔵文化財年報６』
（14）山口市教育委員会　2003　『大内氏関連町並遺跡Ⅲ』
（15）美東町　2004　『美東町史』資料編



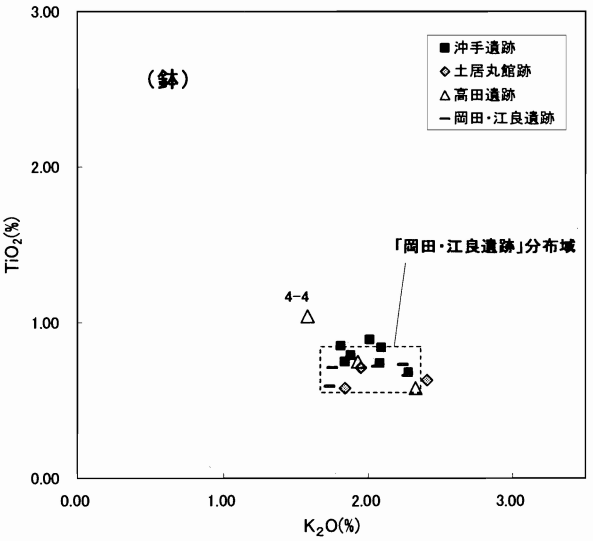
第９図　沖手遺跡出土土器の胎土比較（K_2O－CaO散布図）



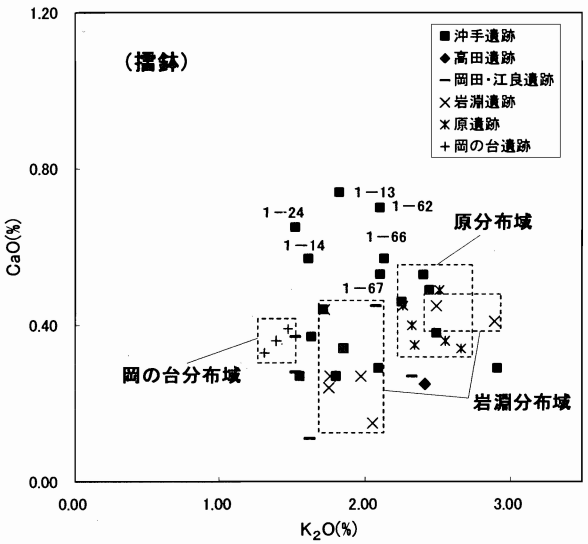
第10図　沖手遺跡出土「甕」の胎土比較（K_2O－CaO散布図）



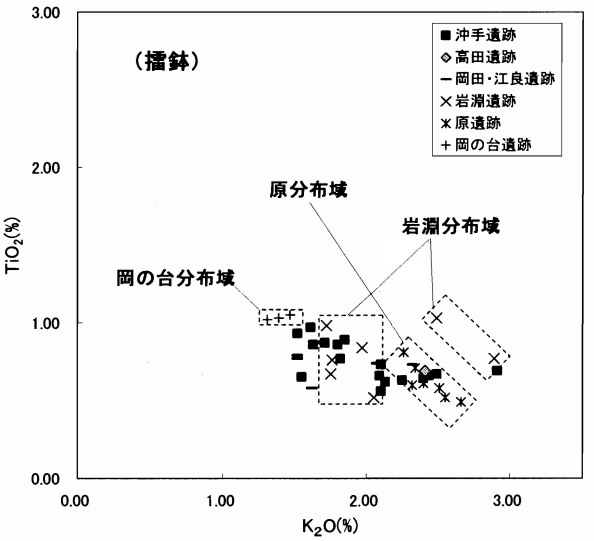
第11図　沖手遺跡出土「鉢」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



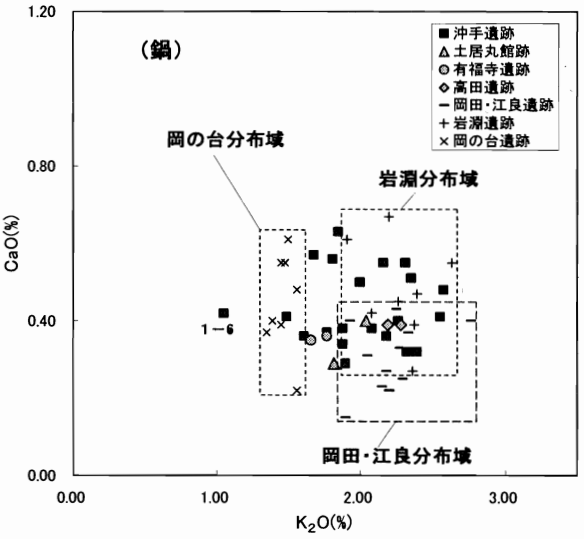
第12図　沖手遺跡出土「鉢」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



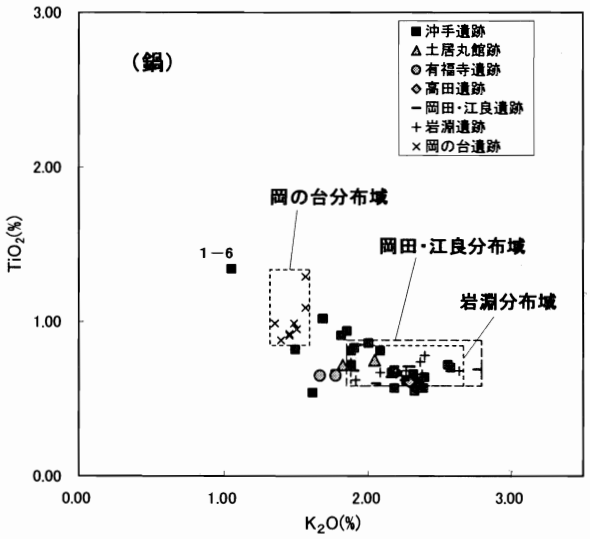
第13図　沖手遺跡出土「擂鉢」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



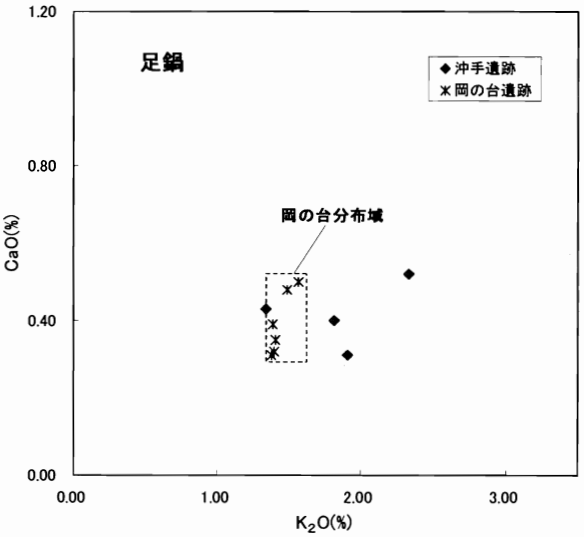
第14図　沖手遺跡出土「擂鉢」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



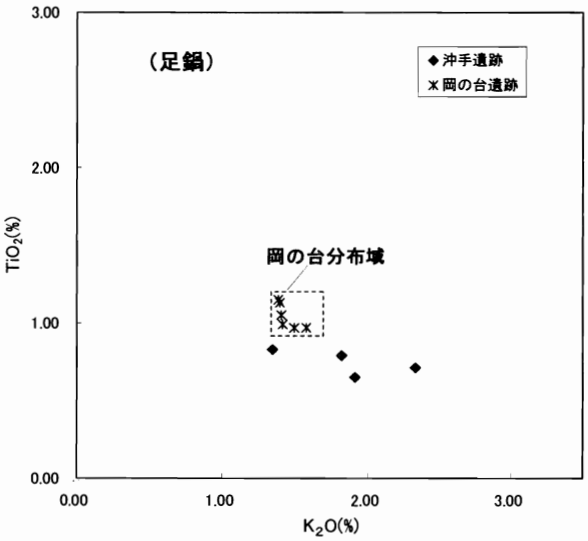
第15図　沖手遺跡出土「鍋」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



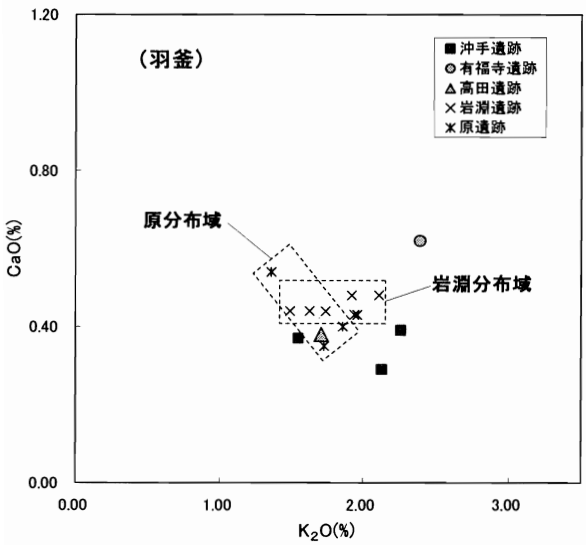
第16図　沖手遺跡出土「鍋」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



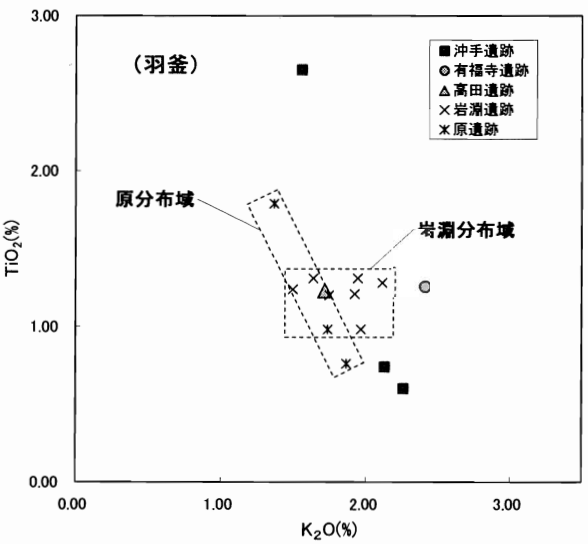
第17図　沖手遺跡出土「足鍋」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



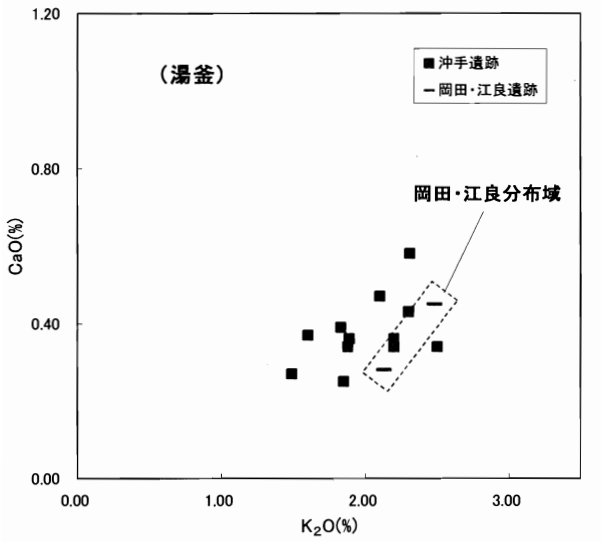
第18図　沖手遺跡出土「足鍋」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



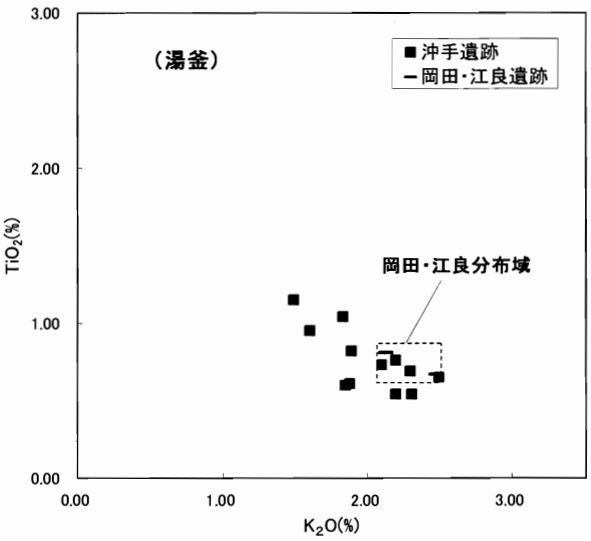
第19図　沖手遺跡出土「羽釜」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



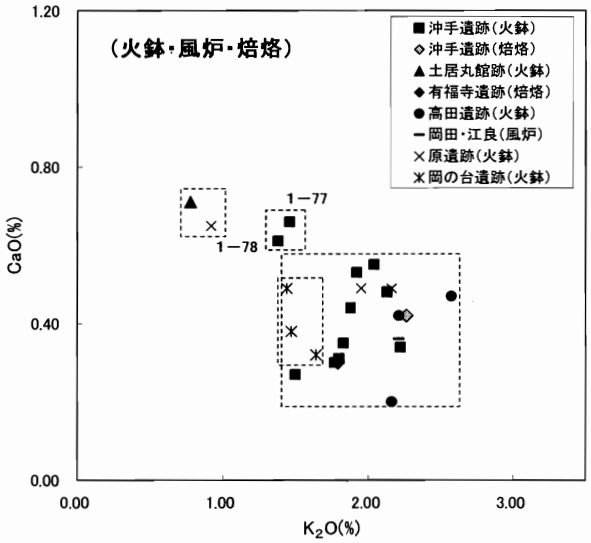
第20図　沖手遺跡出土「羽釜」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



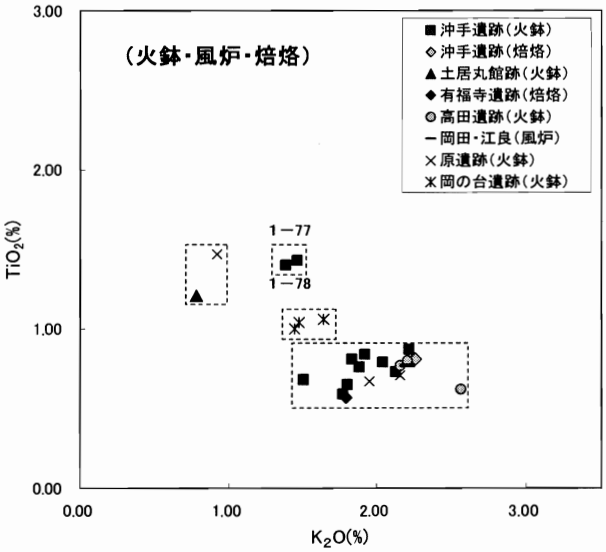
第21図　沖手遺跡出土「湯釜」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



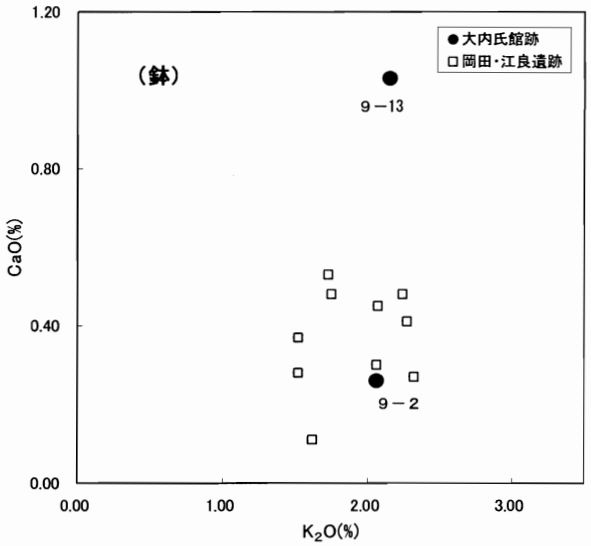
第22図　沖手遺跡出土「湯釜」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



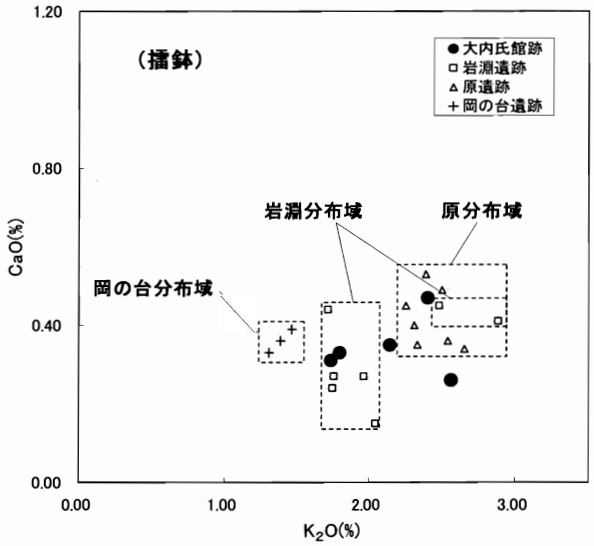
第23図　沖手遺跡出土「火鉢・風炉・焙烙」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



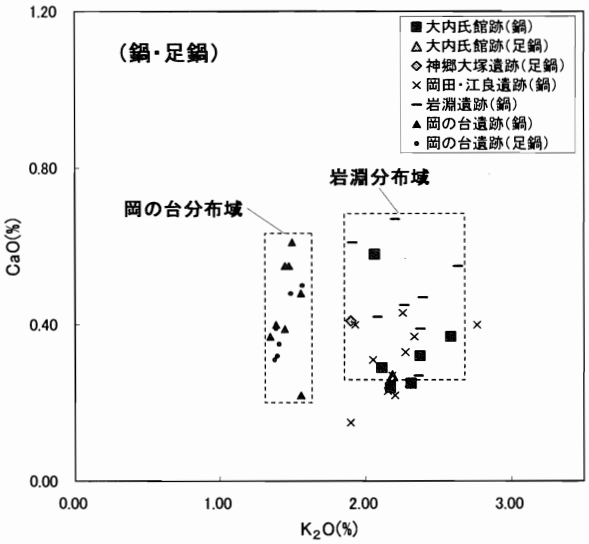
第24図　沖手遺跡出土「火鉢・風炉・焙烙」の産地推定（K_2O－TiO_2散布図）



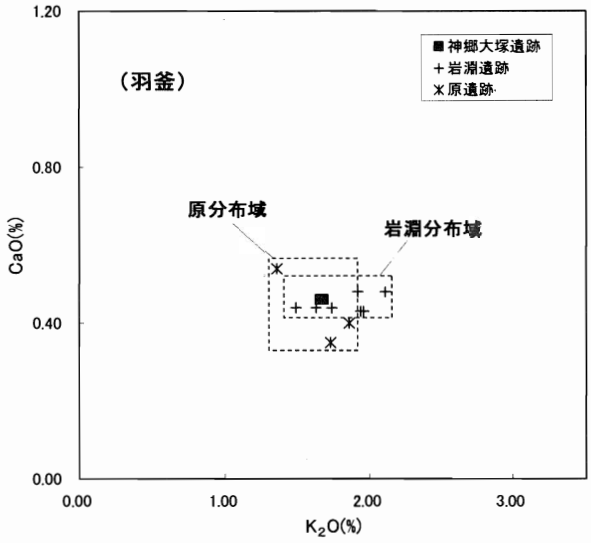
第25図　大内氏館跡ほか出土「鉢」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



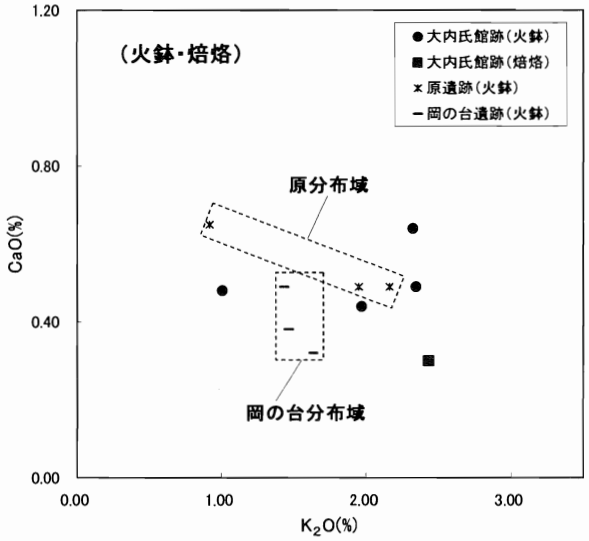
第26図　大内氏館跡ほか出土「擂鉢」の産地推定（K_2O－CaO散布図）



第27図　大内氏館跡ほか出土「鍋・足鍋」の産地推定（K_2O-CaO散布図）



第28図　大内氏館跡ほか出土「羽釜」の産地推定（K_2O-CaO散布図）



第29図　大内氏館跡出土「火鉢・焙烙」の産地推定（K_2O-CaO散布図）

表２－１　瓦質土器胎土分析資料一覧

単位：SiO_2～P_2O_5(%)、Rb～Zr(ppm)

試料No.	遺　跡　名	出土位置等	器　種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	備　　考	挿図番号
1－1	沖手遺跡	建物跡33	甕	74.48	0.95	15.23	4.75	0.05	1.27	0.29	0.87	1.81	0.11		本書　30－2
1－2	沖手遺跡	溝状遺構3	湯釜	66.52	0.54	20.05	3.87	0.06	2.54	0.34	3.54	2.20	0.15		本書　47－8
1－3	沖手遺跡	溝状遺構3	鉢	62.91	0.68	23.84	4.60	0.11	1.71	0.40	3.00	2.28	0.26	13～14ｃ	本書　47－7
1－4	沖手遺跡	溝状遺構3	鉢	62.96	0.89	23.72	4.10	0.09	1.70	0.32	2.67	2.01	1.32	13～14ｃ	本書　47－10
1－5	沖手遺跡	溝状遺構3	鉢	61.99	0.79	25.70	4.44	0.09	1.69	0.44	2.67	1.88	0.09	13～14ｃ	本書　47－9
1－6	沖手遺跡	溝状遺構8	鍋	63.00	1.34	20.27	6.77	0.09	1.45	0.42	2.73	1.05	2.50	防長型Ｉ？、14Ｃ後半～15Ｃ前半	本書　51－8
1－7	沖手遺跡	溝状遺構8	鍋	65.51	0.70	19.78	5.42	0.07	1.49	0.48	1.87	2.57	1.92	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　51－9
1－8	沖手遺跡	溝状遺構8	鍋	68.82	0.55	20.32	3.07	0.03	1.58	0.32	2.73	2.32	0.07	防長型Ⅵａ古、16Ｃ前半～末	本書　51－7
1－9	沖手遺跡	溝状遺構8	湯釜	69.54	1.15	18.35	3.75	0.05	1.48	0.27	2.35	1.49	1.39		本書　51－10
1－10	沖手遺跡	溝状遺構8	鉢	60.05	0.74	24.17	6.51	0.09	1.66	0.47	2.54	2.08	1.21	土師器、13～14ｃ	本書　51－11
1－11	沖手遺跡	溝状遺構8	擂鉢	67.30	0.67	19.17	4.61	0.04	1.64	0.38	3.33	2.49	0.16	防長型、15ｃ～16ｃ	本書　51－13
1－12	沖手遺跡	溝状遺構8	擂鉢	68.17	0.87	18.10	3.94	0.05	2.62	0.44	2.85	1.71	1.05	防長型、16ｃ末～17ｃ初	本書　51－12
1－13	沖手遺跡	3－SK16	擂鉢	59.30	0.77	23.85	6.39	0.08	1.76	0.74	2.73	1.82	2.10	13～14ｃ	本書　65－2
1－14	沖手遺跡	建物跡72	擂鉢	68.31	0.97	17.84	6.17	0.12	1.63	0.57	2.48	1.61	0.13	防長型、15ｃ～16ｃ	本書　100－6
1－15	沖手遺跡	建物跡74	足鍋	67.85	0.71	20.46	3.46	0.05	1.23	0.52	0.23	2.33	3.02		本書　100－7
1－16	沖手遺跡	柱列22	甕	73.43	0.85	15.14	4.16	0.07	1.70	0.37	2.02	2.00	0.11		本書　101－1
1－17	沖手遺跡	墓34	甕	67.61	0.64	21.01	2.95	0.04	1.63	0.35	2.84	2.61	0.14		本書　113－2
1－18	沖手遺跡	墓34	甕？	71.78	1.01	15.88	4.61	0.08	1.65	0.39	2.42	1.83	0.16		本書　113－1
1－19	沖手遺跡	墓35	擂鉢	69.23	0.69	20.21	3.00	0.06	1.45	0.29	1.88	2.91	0.13		本書　113－3
1－20	沖手遺跡	溝状遺構14	鍋	67.48	1.02	17.08	6.77	0.11	1.69	0.57	2.59	1.68	0.83	防長型ⅥＢ、16Ｃ前半～後半	本書　102－2
1－21	沖手遺跡	溝状遺構15	擂鉢	66.19	0.66	21.14	5.68	0.10	1.40	0.29	1.90	2.09	0.39	防長型、15～16ｃ	本書　103－1
1－22	沖手遺跡	4－SK28	擂鉢	65.43	0.63	22.86	3.79	0.04	1.43	0.46	2.03	2.25	0.92		本書　116－2
1－23	沖手遺跡	4－SK30	甕	68.00	0.76	21.24	3.30	0.05	1.38	0.48	1.86	2.61	0.16		本書　116－4
1－24	沖手遺跡	4－SK75	擂鉢	69.56	0.93	17.41	5.24	0.11	1.79	0.65	2.49	1.52	0.12	防長型、15ｃ～16ｃ	本書　116－8
1－25	沖手遺跡	4－P2166	羽釜	67.97	2.65	16.29	6.92	0.18	1.35	0.37	1.61	1.55	0.82		本書　116－12
1－26	沖手遺跡	4－P2855	火鉢	71.49	0.76	16.66	4.21	0.05	1.50	0.44	1.91	1.88	0.16		本書　116－20
1－27	沖手遺跡	4－P2889	湯釜	71.01	0.82	16.90	4.56	0.06	1.71	0.36	2.31	1.89	0.18		本書　116－21
1－28	沖手遺跡	4－P3391	鍋	69.63	0.94	17.07	4.93	0.09	1.71	0.63	2.42	1.85	0.56	防長型ⅥＢ、16Ｃ前半～後半	本書　116－25
1－29	沖手遺跡	25E2層	鍋	60.64	0.66	24.87	6.48	0.10	1.64	0.37	3.23	1.77	0.11	土師器、13～14ｃ	本書　119－3
1－30	沖手遺跡	25D2層	鍋	58.83	0.91	23.77	8.45	0.21	1.36	0.56	2.11	1.81	1.80	土師器、西長門型ａ	本書　119－4
1－31	沖手遺跡	攪乱	鍋	64.46	0.82	24.40	3.55	0.05	2.51	0.41	2.39	1.49	0.74	土師器、西長門型ａ	本書　119－1
1－32	沖手遺跡	6Q2層	鍋	61.27	0.81	24.76	5.01	0.09	1.51	0.34	2.95	1.88	1.19	土師器、西長門型ｂ	本書　119－6
1－33	沖手遺跡	25E2層	鍋	62.78	0.83	24.31	4.96	0.06	1.81	0.29	2.79	1.90	0.08	土師器、西長門型ｂ	本書　119－5
1－34	沖手遺跡	7P2層	鍋	67.21	0.62	20.81	3.65	0.06	1.57	0.40	3.04	2.26	0.19	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－12
1－35	沖手遺跡	25E2層	鍋	67.00	0.81	16.51	7.32	0.14	1.90	0.38	3.55	2.08	0.09	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	本書　119－7
1－36	沖手遺跡	22F2層	鍋	68.67	0.72	17.39	5.23	0.07	2.83	0.38	2.40	1.88	0.28	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－8
1－37	沖手遺跡	6P2層	鍋	68.23	0.61	19.36	4.11	0.06	1.42	0.51	2.01	2.35	1.06	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－10
1－38	沖手遺跡	7Q2層	鍋	63.98	0.66	21.93	3.59	0.03	1.66	0.55	2.93	2.31	2.03	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－9
1－39	沖手遺跡	21G2層	鍋	67.14	0.64	18.48	6.55	0.08	1.60	0.32	2.47	2.39	0.12	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	本書　119－15
1－40	沖手遺跡	22H2層	鍋	67.80	0.57	20.94	3.92	0.05	1.42	0.36	2.47	2.18	0.05	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	本書　119－13
1－41	沖手遺跡	20H2層	鍋	70.00	0.72	19.83	3.90	0.05	1.19	0.41	0.92	2.55	0.11	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	本書　119－14
1－42	沖手遺跡	25E2層	鍋	65.50	0.67	22.05	4.47	0.06	1.71	0.55	2.26	2.16	0.41	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	本書　119－11
1－43	沖手遺跡	25E2層	鍋	64.09	0.57	21.14	5.24	0.11	1.51	0.32	2.67	2.38	1.62	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	本書　119－17
1－44	沖手遺跡	17I	鍋	59.24	0.54	23.11	9.41	0.11	2.62	0.36	2.08	1.61	0.71	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	本書　119－16
1－45	沖手遺跡	22G2層	鍋	74.25	0.86	15.40	3.37	0.05	1.67	0.50	1.60	2.00	0.17	防長型ⅥＢ、16Ｃ前半～後半	本書　119－18
1－46	沖手遺跡	26D2層	焙烙	73.86	0.81	15.24	3.85	0.05	1.51	0.42	1.64	2.26	0.14		本書　119－19
1－47	沖手遺跡	21G2層	足鍋	68.74	0.83	18.73	4.27	0.07	2.81	0.43	2.49	1.34	0.14		本書　119－22
1－48	沖手遺跡	21H	足鍋	60.78	0.79	23.55	7.73	0.09	1.81	0.40	2.49	1.82	0.37		本書　119－21
1－49	沖手遺跡	Pno.580	足鍋	63.61	0.65	21.19	6.85	0.48	1.71	0.31	2.54	1.91	0.51		本書　119－20
1－50	沖手遺跡	12L2層	羽釜	69.36	0.60	19.32	3.03	0.05	1.63	0.39	3.00	2.26	0.18		本書　119－24
1－51	沖手遺跡	不明	羽釜	72.77	0.74	16.17	3.57	0.05	1.53	0.29	2.34	2.13	0.27		本書　119－23
1－52	沖手遺跡	5P2層	湯釜	66.02	0.60	22.12	3.54	0.09	2.62	0.25	2.49	1.85	0.25		本書　119－29
1－53	沖手遺跡	22H2層	湯釜	64.69	0.76	23.51	3.87	0.06	1.46	0.36	2.67	2.20	0.25		本書　119－26
1－54	沖手遺跡	6P2層	湯釜	67.71	0.69	19.40	4.10	0.07	1.57	0.43	2.74	2.30	0.79		本書　119－28
1－55	沖手遺跡	21F2層	湯釜	63.63	0.54	19.08	6.81	0.11	1.43	0.58	2.91	2.31	2.25		本書　119－30
1－56	沖手遺跡	14K2層	湯釜	63.80	0.73	22.94	3.34	0.10	1.72	0.47	3.11	2.10	1.50		本書　119－27
1－57	沖手遺跡	12L2層	湯釜	70.81	1.04	16.57	3.78	0.06	1.67	0.39	2.87	1.83	0.74		本書　119－32
1－58	沖手遺跡	25F2層	湯釜	64.07	0.61	22.24	5.25	0.17	2.57	0.34	2.11	1.88	0.62		本書　119－31
1－59	沖手遺跡	26E2層	湯釜	67.99	0.95	16.10	9.04	0.46	1.47	0.37	1.60	1.60	0.09		本書　119－34
1－60	沖手遺跡	25F2層	湯釜	69.59	0.65	18.30	4.03	0.04	1.40	0.34	2.72	2.50	0.15		本書　119－33
1－61	沖手遺跡	25E	擂鉢	68.08	0.66	20.11	3.39	0.04	1.60	0.49	2.88	2.44	0.10	土師器、13～14ｃ	本書　120－1
1－62	沖手遺跡	25D2層	擂鉢	62.17	0.73	22.83	5.10	0.22	1.57	0.70	2.51	2.10	1.73	土師器、13～14ｃ	本書　120－5
1－63	沖手遺跡	6Q2層	鉢	73.37	0.85	16.12	3.87	0.05	1.44	0.25	1.84	1.81	0.22		本書　120－7
1－64	沖手遺跡	25D2層	鉢	63.65	0.84	23.42	5.17	0.09	1.64	0.43	2.40	2.09	0.10		本書　120－6
1－65	沖手遺跡	25E2層	擂鉢	66.63	0.86	17.20	7.62	0.69	1.97	0.37	1.99	1.63	0.76		本書　120－8
1－66	沖手遺跡	23G2層	擂鉢	65.86	0.62	22.05	4.17	0.07	1.62	0.57	2.57	2.13	0.08	防長型、15～16ｃ	本書　120－12
1－67	沖手遺跡	22F2層	擂鉢	65.77	0.56	22.15	4.10	0.07	1.64	0.53	2.75	2.10	0.11	防長型、15～16ｃ	本書　120－11
1－68	沖手遺跡	16J2層	鉢	64.52	0.75	23.79	4.24	0.05	1.63	0.36	2.54	1.84	0.11	防長型、15～16ｃ	本書　120－9
1－69	沖手遺跡	5P2層	擂鉢	67.39	0.64	20.93	4.57	0.08	1.11	0.53	1.96	2.40	0.15	防長型、15～16ｃ	本書　120－10
1－70	沖手遺跡	7P2層	擂鉢	70.91	0.86	15.59	6.12	0.11	1.78	0.27	2.27	1.80	0.11	防長型、16ｃ末～17ｃ初	本書　120－14
1－71	沖手遺跡	21G2層	擂鉢	71.23	0.89	16.43	4.50	0.07	1.80	0.34	2.39	1.85	0.24	防長型、16ｃ末～17ｃ初	本書　120－13
1－72	沖手遺跡	7P2層	擂鉢	70.72	0.65	16.29	4.85	0.07	2.73	0.27	2.71	1.55	0.01		本書　120－15
1－73	沖手遺跡	7P2層	火鉢	71.80	0.81	16.28	4.07	0.13	1.68	0.35	2.53	1.83	0.33		本書　121－3
1－74	沖手遺跡	7P2層	火鉢	71.90	0.87	16.42	3.99	0.06	1.64	0.34	2.29	2.22	0.12		本書　121－4
1－75	沖手遺跡	22G2層	火鉢	74.85	0.65	14.52	2.81	0.03	1.59	0.31	3.20	1.80	0.09		本書　121－2
1－76	沖手遺跡	16J2層	火鉢	63.49	0.73	23.87	4.95	0.08	1.52	0.48	1.83	2.13	0.73		本書　121－1
1－77	沖手遺跡	12L2層	火鉢	65.67	1.43	20.47	5.67	0.08	1.58	0.66	2.72	1.46	0.10		本書　121－6
1－78	沖手遺跡	12I2層	火鉢	63.96	1.40	21.23	6.70	0.11	1.59	0.61	2.53	1.38	0.28		本書　121－7
1－79	沖手遺跡	26D2層	火鉢	66.82	0.84	20.13	5.32	0.06	1.52	0.53	2.65	1.92	0.03		本書　121－5
1－80	沖手遺跡	25E2層	火鉢	67.77	0.79	19.26	4.95	0.06	1.77	0.55	2.49	2.04	0.11		本書　121－8
1－81	沖手遺跡	21G2層	火鉢	72.50	0.59	15.91	3.54	0.04	2.61	0.30	2.52	1.77	0.09		本書　121－10
1－82	沖手遺跡	7P2層	火鉢	72.79	0.68	16.01	3.55	0.04	2.83	0.27	2.08	1.50	0.11		本書　121－9
1－83	沖手遺跡	13J2層	甕	73.26	0.84	16.02	3.42	0.04	1.58	0.31	2.34	1.80	0.22		本書　120－17
1－84	沖手遺跡	4R2層	甕	62.76	0.62	22.66	7.64	0.09	1.75	0.41	2.06	1.62	0.07		本書　120－16
1－85	沖手遺跡	7Q2層	甕	66.06	0.59	21.26	5.35	0.05	2.58	0.13	2.97	0.75	0.15		本書　120－18
1－86	沖手遺跡	26D2層	甕	58.30	1.17	22.53	11.61	0.14	1.88	0.30	2.23	1.24	0.21		本書　120－19
2－1	土居丸館跡	Ｆ６・２層	鉢	64.26	0.71	22.01	6.17	0.11	1.48	0.34	1.90	1.95	0.89	防長型、15～16ｃ	
2－2	土居丸館跡	Ｅ６・２層	鉢	65.58	0.63	23.11	2.48	0.05	1.61	0.28	2.58	2.41	1.08	防長型、15～16ｃ	
2－3	土居丸館跡	Ｅ6・1層､Ｆ7・2層	浅型火鉢	66.86	1.21	21.10	4.22	0.05	2.55	0.71	2.05	0.78	0.29		
2－4	土居丸館跡	Ｆ６・４層	鍋	64.10	0.72	22.87	4.31	0.06	1.63	0.29	2.89	1.82	1.05	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
2－5	土居丸館跡	Ｅ６・４層	鍋	68.74	0.75	21.11	3.61	0.05	1.49	0.40	1.37	2.04	0.18	防長型Ⅲ新、15Ｃ中葉～16Ｃ前半	
2－6	土居丸館跡	SX6	鉢	66.58	0.58	21.70	3.20	0.04	2.70	0.27	2.84	1.84	0.08	防長型、15～16ｃ	
3－1	有福寺遺跡	Ｂ－３Ｇ、Ｍ区	羽釜	58.43	1.25	24.36	7.39	0.12	1.35	0.62	1.91	2.39	2.02	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	文献１　7－53
3－2	有福寺遺跡	Ｂ－２Ｇ、２層	鍋	65.05	0.65	23.98	3.72	0.05	1.59	0.36	2.21	1.77	0.38	防長型Ⅱ、14Ｃ末～15Ｃ中葉	文献１　7－57
3－3	有福寺遺跡	Ｂ－２Ｇ、２層	焙烙	66.70	0.57	21.74	3.19	0.04	2.57	0.30	2.74	1.79	0.24		文献１　7－61
3－4	有福寺遺跡	Ｂ－２Ｇ、２層	鍋	62.22	0.65	24.78	5.11	0.07	1.63	0.35	2.18	1.66	1.09	防長型Ⅱ、14Ｃ末～15Ｃ中葉	文献１　7－62
4－1	高田遺跡	90－TP9、3層	羽釜	63.65	1.23	22.40	5.96	0.08	1.83	0.38	2.49	1.71	0.12	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	文献２　12－53
4－2	高田遺跡	91－TP7、4層	鍋	64.95	0.61	23.03	4.14	0.06	1.50	0.39	2.57	2.28	0.28	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	文献３　11－6
4－3	高田遺跡	94－TP1	擂鉢	64.70	0.69	25.46	3.36	0.04	1.36	0.25	1.51	2.41	0.06		文献４　7－33
4－4	高田遺跡	94－TP4	鉢	67.25	1.04	21.36	2.98	0.03	2.54	0.19	2.69	1.58	0.16	土師器、13～14ｃ	文献４　10－52
4－5	高田遺跡	94－TP16	火鉢	65.37	0.77	23.29	3.63	0.06	1.68	0.20	2.51	2.16	0.13		文献４　17－67
4－6	高田遺跡	94－TP33	鉢	65.65	0.75	23.26	3.94	0.05	1.50	0.27	2.26	1.93	0.23	防長型、15～16ｃ	文献４　33－139
4－7	高田遺跡	94－TP38	火鉢	64.19	0.62	23.61	4.66	0.07	1.57	0.47	1.98	2.57	0.08		文献４　40－183
4－8	高田遺跡	94－TP43	火鉢	60.69	0.80	24.49	6.49	0.08	1.68	0.42	2.91	2.21	0.06		文献４　44－188
4－9	高田遺跡	94－TP53	鍋	66.59	0.67	21.92	4.77	0.06	1.42	0.39	1.54	2.19	0.12	ⅥＡ古、16ｃ前半～末	文献４　53－214
4－10	高田遺跡	95－TP15	鉢	66.16	0.58	22.43	3.60	0.05	1.52	0.42	2.59	2.33	0.11	防長型、15～16ｃ	文献５　30－25

表２－２　瓦質土器胎土分析資料一覧

単位：SiO_2～P_2O_5(%)、Rb～Zr(ppm)

試料No.	遺跡名	出土位置等	器種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	備考	挿図番号
5－1	岡田・江良遺跡		鍋	69.14	0.71	21.03	2.93	0.02	1.38	0.25	1.97	2.29	0.14	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－2	岡田・江良遺跡		鍋	68.69	0.64	21.42	2.75	0.01	1.47	0.23	2.29	2.15	0.19	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－3	岡田・江良遺跡		鍋	66.99	0.63	22.44	3.52	0.05	1.32	0.37	1.88	2.33	0.19	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
5－4	岡田・江良遺跡		鍋	65.08	0.68	23.29	4.91	0.06	1.51	0.15	2.17	1.90	0.09	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－5	岡田・江良遺跡		鍋	69.19	0.71	21.24	2.87	0.03	1.45	0.27	1.76	2.18	0.15	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－6	岡田・江良遺跡		鍋	69.08	0.65	21.38	2.91	0.02	1.45	0.22	1.71	2.20	0.18	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－7	岡田・江良遺跡		鍋	67.85	0.85	21.08	3.62	0.03	1.52	0.40	2.38	1.93	0.16	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
5－8	岡田・江良遺跡		鍋	65.69	0.69	22.73	3.59	0.04	1.45	0.40	2.38	2.76	0.12	防長型ⅥＢ、16ｃ前半～後半	
5－9	岡田・江良遺跡		鍋	61.73	0.60	24.04	5.81	0.07	2.52	0.31	2.82	2.05	0.04	防長型ⅥＢ、16ｃ前半～後半	
5－10	岡田・江良遺跡		鍋	62.95	0.71	23.60	6.25	0.08	1.35	0.33	2.21	2.27	0.06	防長型ⅥＢ、16ｃ前半～後半	
5－11	岡田・江良遺跡		鍋	63.09	0.62	24.22	4.73	0.06	1.58	0.43	2.74	2.25	0.08	防長型ⅥＢ、16ｃ前半～後半	
5－12	岡田・江良遺跡		湯釜	65.20	0.81	23.15	3.75	0.04	1.55	0.28	2.77	2.13	0.18		
5－13	岡田・江良遺跡		湯釜	67.93	0.67	19.76	3.40	0.04	1.46	0.45	3.10	2.48	0.46		
5－14	岡田・江良遺跡		鉢	64.12	0.71	24.29	3.66	0.06	1.69	0.48	2.95	1.75	0.11	土師器	
5－15	岡田・江良遺跡		擂鉢	65.82	0.58	22.41	3.52	0.03	2.70	0.11	2.93	1.62	0.16		
5－16	岡田・江良遺跡		鉢	64.81	0.59	24.05	3.76	0.06	1.49	0.53	2.60	1.73	0.17		
5－17	岡田・江良遺跡		鉢	63.47	0.72	24.01	4.93	0.05	1.52	0.30	2.64	2.06	0.09	防長型、15～16ｃ	
5－18	岡田・江良遺跡		擂鉢	66.31	0.74	22.30	3.27	0.05	1.60	0.45	2.77	2.07	0.14	防長型、15～16ｃ	
5－19	岡田・江良遺跡		擂鉢	65.42	0.73	22.52	4.49	0.05	1.40	0.27	2.41	2.32	0.20	防長型、15～16ｃ	
5－20	岡田・江良遺跡		鉢	62.85	0.73	24.47	4.96	0.07	1.38	0.48	2.57	2.24	0.09	防長型、15～16ｃ	
5－21	岡田・江良遺跡		鉢	66.35	0.66	22.94	2.96	0.04	1.62	0.41	2.38	2.27	0.16	防長型、15～16ｃ	
5－22	岡田・江良遺跡		擂鉢	61.93	0.79	24.02	6.44	0.08	2.73	0.28	2.05	1.52	0.05	防長型、15～16ｃ	
5－23	岡田・江良遺跡		擂鉢	66.90	0.77	19.14	6.61	0.08	1.74	0.37	2.54	1.52	0.13	備前焼（14ｃ後半）	
5－24	岡田・江良遺跡		風炉	65.59	0.77	22.31	4.13	0.05	1.51	0.36	2.72	2.21	0.18		
6－1	岩淵遺跡		鍋	62.77	0.67	23.57	4.72	0.17	1.79	0.67	3.14	2.20	0.12	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－2	岩淵遺跡		擂鉢	63.80	0.62	24.78	4.56	0.10	1.38	0.61	1.93	1.91	0.14	防長型Ⅱ～Ⅲ古、14ｃ末～15ｃ中葉	
6－3	岩淵遺跡		鍋	69.03	0.78	20.10	2.88	0.04	1.49	0.47	2.43	2.39	0.20	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－4	岩淵遺跡		鍋	66.11	0.74	22.86	4.21	0.20	1.30	0.27	1.63	2.36	0.19	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－5	岩淵遺跡		鍋	66.62	0.66	21.94	3.95	0.14	1.43	0.39	2.12	2.37	0.14	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	
6－6	岩淵遺跡		鍋	63.21	0.68	23.73	4.44	0.48	1.53	0.45	2.83	2.26	0.14	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
6－7	岩淵遺跡		鍋	68.02	0.68	19.99	4.45	0.08	1.49	0.55	1.71	2.63	0.24	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
6－8	岩淵遺跡		鍋	63.48	0.67	23.03	5.26	0.18	1.53	0.42	2.83	2.08	0.24	防長型Ⅳ、15Ｃ後半～16Ｃ後半	
6－9	岩淵遺跡		羽釜	67.01	1.31	18.98	6.23	0.09	1.40	0.44	2.51	1.63	0.16	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－10	岩淵遺跡		羽釜	67.38	1.31	19.56	5.41	0.08	1.44	0.43	2.10	1.94	0.17	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－11	岩淵遺跡		羽釜	67.33	1.28	18.95	5.91	0.10	1.48	0.48	2.02	2.11	0.16	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－12	岩淵遺跡		羽釜	65.19	1.21	21.73	4.81	0.06	1.63	0.48	2.56	1.92	0.22	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－13	岩淵遺跡		羽釜	66.19	1.20	20.33	6.36	0.08	1.57	0.44	1.71	1.74	0.19	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－14	岩淵遺跡		羽釜	65.08	0.98	21.77	5.19	0.07	1.53	0.43	2.62	1.96	0.16	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－15	岩淵遺跡		羽釜	66.08	1.24	21.43	5.40	0.06	1.51	0.44	0.90	1.49	1.31	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
6－16	岩淵遺跡		擂鉢	64.92	0.98	21.94	5.71	0.09	1.49	0.44	2.39	1.72	0.15	防長型、15～16ｃ	
6－17	岩淵遺跡		擂鉢	65.10	0.52	22.51	3.82	0.05	2.66	0.15	2.86	2.05	0.15	防長型、15～16ｃ	
6－18	岩淵遺跡		擂鉢	64.30	0.76	22.99	4.54	0.06	1.66	0.27	3.34	1.76	0.16	防長型、16ｃ	
6－19	岩淵遺跡		擂鉢	68.17	1.03	21.10	2.71	0.18	1.44	0.45	1.73	2.49	0.45	防長型、15～16ｃ	
6－20	岩淵遺跡		擂鉢	63.78	0.67	23.91	5.12	0.24	1.48	0.24	2.44	1.75	0.16	防長型、15～16ｃ	
6－21	岩淵遺跡		擂鉢	65.04	0.84	22.94	4.78	0.10	1.62	0.27	2.08	1.97	0.18		
6－22	岩淵遺跡		擂鉢	65.59	0.77	22.03	4.21	0.06	1.60	0.41	2.06	2.89	0.21		
7－1	原遺跡		鍋	66.04	0.57	21.66	3.87	0.06	1.61	0.34	3.02	2.45	0.17	防長型Ⅲ古、15Ｃ前半～末	
7－2	原遺跡		鍋	68.26	0.61	21.93	2.91	0.03	1.49	0.36	1.90	2.21	0.13	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－3	原遺跡		鍋	64.61	0.65	23.18	4.26	0.05	2.53	0.35	2.24	1.84	0.11	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－4	原遺跡		鍋	67.01	0.81	22.52	3.19	0.03	1.33	0.35	2.20	2.14	0.24	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－5	原遺跡		鍋	64.71	0.55	24.30	2.96	0.05	2.65	0.26	2.36	1.91	0.14	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－6	原遺跡		鍋	63.49	0.75	23.39	5.50	0.06	1.46	0.48	2.45	2.07	0.10	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－7	原遺跡		鍋	66.40	0.68	22.39	3.51	0.02	1.44	0.31	2.64	2.19	0.23	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－8	原遺跡		鍋	64.29	0.73	23.25	5.58	0.08	1.33	0.45	1.77	2.17	0.13	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	
7－9	原遺跡		羽釜	64.37	0.76	24.31	3.57	0.04	1.67	0.40	2.73	1.86	0.10	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
7－10	原遺跡		羽釜	64.32	1.79	19.26	7.63	0.12	1.44	0.54	3.19	1.36	0.18	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
7－11	原遺跡		羽釜	68.60	0.98	20.14	5.50	0.09	1.29	0.35	0.99	1.73	0.17	周防型、13ｃ後半～14ｃ後半	
7－12	原遺跡		擂鉢	66.91	0.52	22.17	3.16	0.05	1.34	0.36	2.51	2.55	0.24	防長型、15～16ｃ	
7－13	原遺跡		擂鉢	65.90	0.71	22.19	3.61	0.03	1.63	0.35	2.83	2.34	0.22	防長型、15～16ｃ	
7－14	原遺跡		擂鉢	64.96	0.58	22.70	3.36	0.06	1.74	0.49	3.27	2.51	0.18	防長型、15～16ｃ	
7－15	原遺跡		擂鉢	66.65	0.49	22.14	2.77	0.05	1.63	0.34	2.91	2.66	0.22	防長型、15～16ｃ	
7－16	原遺跡		擂鉢	65.35	0.61	23.27	3.53	0.04	1.49	0.53	2.46	2.40	0.15	防長型、15～16ｃ	
7－17	原遺跡		擂鉢	64.15	0.81	22.94	4.47	0.05	1.48	0.45	3.04	2.26	0.17	防長型、15～16ｃ	
7－18	原遺跡		擂鉢	66.64	0.60	21.27	4.37	0.07	1.47	0.40	2.44	2.32	0.18	防長型、15～16ｃ	
7－19	原遺跡		火鉢	68.50	1.47	19.66	4.49	0.06	1.44	0.65	2.47	0.92	0.14		
7－20	原遺跡		火鉢	61.94	0.71	22.98	7.84	0.09	1.45	0.49	1.71	2.16	0.45		
7－21	原遺跡		火鉢	59.90	0.67	22.22	10.28	0.15	1.56	0.49	2.50	1.95	0.06		
8－1	神郷大塚遺跡	井戸１(SE1)	羽釜	62.39	1.24	23.54	5.72	0.10	1.81	0.46	2.68	1.66	0.19	大内Ⅰ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－4
8－2	神郷大塚遺跡	井戸１(SE1)	羽釜	62.94	1.35	21.65	7.31	0.11	1.40	0.46	2.59	1.68	0.33	大内Ⅰ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－6
8－3	神郷大塚遺跡	井戸１(SE1)	足鍋	66.67	0.81	22.31	3.74	0.04	1.51	0.41	2.04	1.90	0.42	大内Ⅰ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－10
8－4	神郷大塚遺跡	井戸１(SE1)	鍋	62.69	1.64	21.16	7.78	0.13	1.62	0.33	2.93	1.40	0.13	大内Ⅰ期に先行（13～14ｃ）	文献９　11－11
9－1	大内氏館跡	土坑11(SK11)	鍋	66.48	0.73	22.26	3.71	0.04	1.47	0.25	2.15	2.31	0.46	大内Ⅱ期（15ｃ後半）、防長型Ⅲ	文献10　24－21
9－2	大内氏館跡	土坑11(SK11)	鉢	63.46	0.76	24.12	5.04	0.06	1.39	0.26	2.54	2.06	0.14	大内Ⅱ期（15ｃ後半）	文献10　24－24
9－3	大内氏館跡	土坑11(SK11)	擂鉢	67.47	0.74	21.64	2.33	0.03	1.58	0.26	2.90	2.57	0.28	大内Ⅱ期（15ｃ後半）	文献10　24－25
9－4	大内氏館跡	溝１(SD1)	鍋	67.98	0.89	20.71	2.96	0.04	1.33	0.24	2.14	2.17	1.31	大内Ⅱ期（15ｃ後半）、防長型Ⅲ	文献11　23－160
9－5	大内氏館跡	溝１(SD1)	擂鉢	65.81	0.64	23.07	4.28	0.04	1.69	0.31	2.06	1.74	0.13	大内Ⅱ期（15ｃ後半）、防長型	文献11　23－171
9－6	大内氏館跡	土坑２(SK2)	火鉢	66.56	1.16	19.41	6.06	0.08	1.54	0.44	2.04	1.97	0.55	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）	
9－7	大内氏館跡	土坑２(SK2)	焙烙	68.65	0.71	21.07	2.16	0.02	1.52	0.30	2.76	2.43	0.22	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）	
9－8	大内氏館跡	土坑２(SK2)	足鍋	67.13	0.71	21.58	3.99	0.05	1.43	0.27	2.37	2.18	0.15	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型Ⅳ	
9－9	大内氏館跡	土坑10(SK10)	鍋	65.65	0.61	22.78	3.66	0.05	1.64	0.29	2.79	2.11	0.22	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型Ⅳ	
9－10	大内氏館跡	土坑10(SK10)	鍋	65.30	0.63	21.90	5.29	0.06	1.49	0.58	2.00	2.06	0.52	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型Ⅳ	
9－11	大内氏館跡	土坑21(SK21)	擂鉢	64.96	0.69	21.90	5.13	0.06	1.53	0.47	2.45	2.41	0.24	大内Ⅲ期（15ｃ末～16ｃ初）、防長型	
9－12	大内氏館跡	土坑１(SK1)	擂鉢	63.97	0.89	21.95	6.09	0.08	1.59	0.33	2.83	1.80	0.17	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型	
9－13	大内氏館跡	土坑１(SK1)	鉢	61.43	1.06	22.24	6.76	0.09	1.73	1.03	2.53	2.15	0.77	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型	
9－14	大内氏館跡	土坑１(SK1)	擂鉢	64.97	0.49	23.08	3.65	0.05	2.69	0.35	2.26	2.15	0.14	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型	
9－15	大内氏館跡	土坑15(SK15)	鍋	66.75	0.66	22.21	3.41	0.04	1.52	0.32	2.29	2.37	0.21	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型Ⅳ	文献12　44－16
9－16	大内氏館跡	土坑15(SK15)	鍋	69.04	0.58	20.98	3.14	0.05	1.36	0.37	1.44	2.58	0.20	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）、防長型Ⅳ	文献12　44－17
9－17	大内氏館跡	IVF－４区土器溜	甕	66.69	0.60	21.98	3.56	0.04	1.49	0.27	2.60	2.30	0.22	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）	文献13　23－2
9－18	大内氏周連町並遺跡	溝３(SD3)	火鉢	65.58	0.62	21.25	4.42	0.06	1.60	0.64	2.19	2.32	1.05	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）	文献14　24－39
9－19	大内氏周連町並遺跡	溝３(SD3)	火鉢	67.25	1.22	21.11	4.88	0.07	1.51	0.48	2.02	1.01	0.25	大内Ⅳ期（16ｃ前半～中頃）	文献14　24－40
9－20	大内氏館跡	IVF－４区表採	火鉢	65.93	0.57	21.38	3.63	0.06	1.67	0.49	3.55	2.34	0.21	17ｃ	文献13　23－1
10－1	岡の台遺跡		鍋	69.93	0.91	17.13	4.85	0.07	1.59	0.55	3.10	1.45	0.21	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－1
10－2	岡の台遺跡		鍋	66.44	1.29	22.53	5.05	0.06	1.39	0.22	1.18	1.56	0.12	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－7
10－3	岡の台遺跡		鍋	70.14	0.88	17.02	5.25	0.08	1.60	0.40	2.87	1.39	0.23	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－8
10－4	岡の台遺跡		鍋	69.27	0.99	18.45	4.85	0.08	1.61	0.55	2.23	1.48	0.23	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－9
10－5	岡の台遺跡		鍋	70.76	0.95	17.98	3.72	0.08	1.46	0.61	2.54	1.50	0.16	防長型Ⅲ新、15ｃ中葉～16ｃ前半	文献15　70－10
10－6	岡の台遺跡		鍋	71.43	1.09	17.58	5.90	0.10	1.11	0.48	0.28	1.56	0.26	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	文献15　70－13
10－7	岡の台遺跡		鍋	68.99	0.99	19.27	5.22	0.07	1.49	0.37	1.84	1.35	0.22	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	文献15　70－15
10－8	岡の台遺跡		鍋	69.61	0.92	17.33	5.14	0.08	1.75	0.39	2.91	1.45	0.21	防長型ⅥＡ新、16Ｃ中葉～末	文献15　70－17
10－9	岡の台遺跡		足鍋	67.20	1.05	19.62	6.62	0.08	1.77	0.32	1.54	1.40	0.09		文献15　71－19
10－10	岡の台遺跡		足鍋	65.39	1.15	20.97	5.68	0.06	1.48	0.31	3.34	1.38	0.08		文献15　71－22
10－11	岡の台遺跡		足鍋	67.76	0.99	19.49	5.55	0.07	1.45	0.35	2.67	1.41	0.11		文献15　71－23
10－12	岡の台遺跡		足鍋	68.86	0.97	18.88	4.86	0.07	1.42	0.50	2.45	1.57	0.20		文献15　71－27
10－13	岡の台遺跡		足鍋	69.14	0.97	18.62	5.16	0.08	1.44	0.48	2.27	1.49	0.15		文献15　71－28
10－14	岡の台遺跡		足鍋	66.21	1.13	19.49	6.19	0.09	1.76	0.39	3.02	1.39	0.16		文献15　71－33
10－15	岡の台遺跡		火鉢	67.55	1.04	19.61	6.18	0.07	1.31	0.38	2.03	1.47	0.15		文献15　71－38
10－16	岡の台遺跡		火鉢	65.64	1.06	22.41	4.80	0.08	1.45	0.32	2.21	1.64	0.12		文献15　71－40
10－17	岡の台遺跡		火鉢	68.10	1.00	19.74	4.81	0.07	1.52	0.49	2.47	1.44	0.17		文献15　71－41
10－18	岡の台遺跡		擂鉢	67.00	1.05	20.07	6.19	0.06	1.31	0.39	2.05	1.47	0.19		文献15　71－43
10－19	岡の台遺跡		擂鉢	68.71	1.03	18.54	6.07	0.08	1.28	0.36	2.25	1.39	0.12	防長型、15～16ｃ	文献15　71－44
10－20	岡の台遺跡		擂鉢	68.20	1.02	18.90	6.24	0.10	1.42	0.33	2.17	1.31	0.14	防長型、15～16ｃ	文献15　71－45

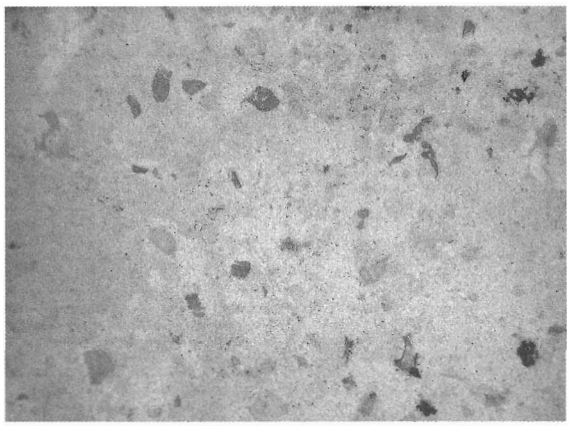


写真１．原遺跡（生産地試料）７－15（擂鉢）

写真２．原遺跡（生産地試料）７－19（火鉢）

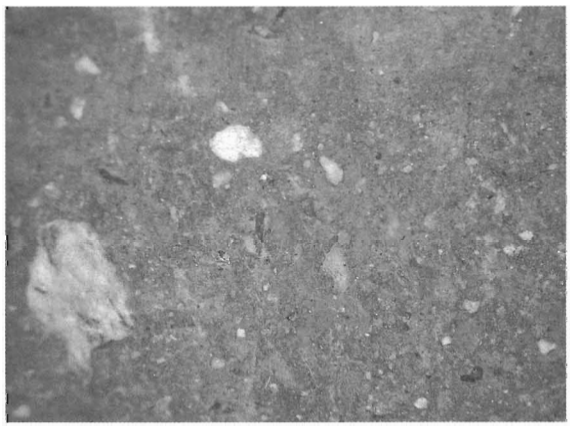


写真３．岩淵遺跡（生産地試料）６－１（鍋）

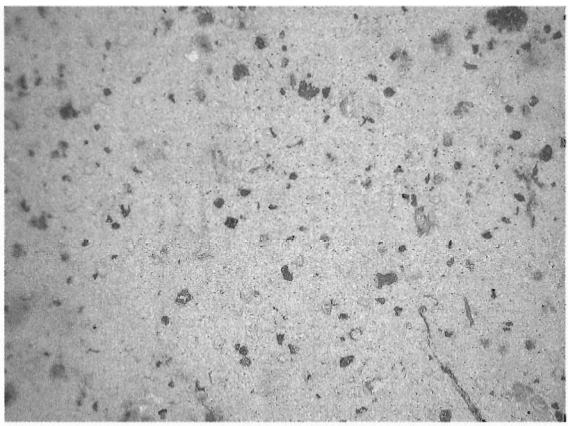


写真４．沖手遺跡１－25（羽釜）

写真５．沖手遺跡１－70（擂鉢）

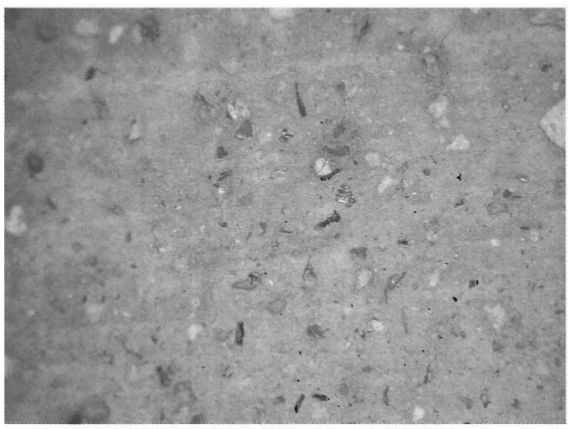


写真６．沖手遺跡１－54（湯釜）

図30　実体顕微鏡写真

0　2 mm

第２節　沖手遺跡出土の中・近世人骨

松下　孝幸※

【キーワード】：島根県、中世人骨、近世人骨、桶棺、箱棺、四肢骨

はじめに

島根県益田市久城町に所在する沖手遺跡の発掘調査が益田道路建設に伴って、2005年（平成17年）におこなわれ、島根県埋蔵文化財調査センターが調査をおこなった調査区からは合計27箇所の遺構から27体の人骨が検出された。この遺跡の中には中世としては珍しい桶棺が含まれており、この遺構からも人骨が検出された。出土人骨の大部分は中世人骨である。

筆者が調査や鑑定をおこなった島根県の中世人骨は少なく、津和野町の高田遺跡と喜時雨遺跡（松下、2000ｂ）の他に旧美濃郡美都町（現益田市）の東仙道土居遺跡の例ぐらいしかない。東仙道土居遺跡からは２個の壷からそれぞれ１体分の火葬骨が検出された。

その他に島根県では、油坪古墳群（安来市）、清水大日堂裏古墓（安来市）、二反田古墓（松江市）、中竹矢遺跡（松江市）、谷ノ奥遺跡（八雲村）、烏坊古墓群（玉湯町）、蔵小路西遺跡（出雲市）、姫原西遺跡（出雲市）、坂灘遺跡（仁摩町）、殿屋敷遺跡（匹見町）、白枝本郷遺跡（出雲市）から中世人骨が出土している。

人骨の保存状態は決していいものではなかったが、大部分は現場で、人骨の検出や人骨の観察・同定をおこない、埋葬姿勢などを確認した。取り上げることのできた人骨については人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資　料

本遺跡からは合計27基の墓坑から27体の人骨が検出された。表１に示すとおり、27体のうち成人骨は20体で、残りの７体は幼小児骨である。成人骨のうち、男性骨は５体、女性骨は４体で、その他に性別を明らかにできなかったものが11体あった。各人骨の性別・年令などは表２のとおりである。なお、年齢区分に関しては表３を参考にされたい。

表１　資料数（Table 1. Number of materials）

成　人			幼小児	合　計
男性	女性	不明		
5	4	11	7	27

この27体の人骨は、考古学的所見から中世に属する人骨群で、大部分は15～16世紀に属するが、１体（墓15）は12世紀中頃から13世紀前半に、１体（墓31）は17世紀に、また７体は近世人骨ではないかと推測されている。人骨の保存状態は著しく悪く、計測や観察ができたのは少ない。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木（1963）と松下ら（1983）の方法で計測した。

＊ Takayuki　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

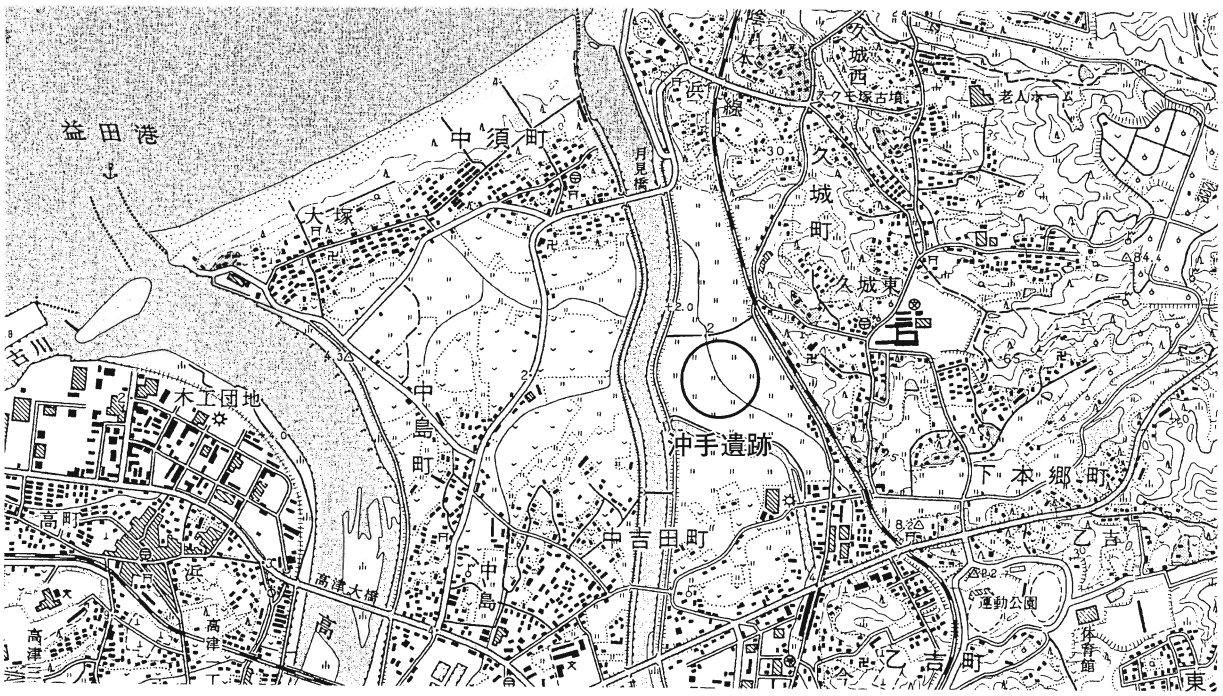


図１　遺跡の位置（1/25000）

（Fig. 1　Location of the Okite site, Masuda City, Shimane Prefecture）

表２　出土人骨一覧（Table２. List of skeletons）

調査区	人骨番号	性別	年齢	埋葬遺構	備考	副葬品	時代・時期
２区	墓７	男性	不明	桶棺		銭貨、櫛、漆器椀、土師器皿、箸、折敷、木札	15ｃ後半
２区	墓８	－	幼児	箱棺	４歳		15～16世紀？
２区	墓９	不明	不明(成人)	不明		土師器皿	15ｃ末～16ｃ前半
２区	墓10	－	幼児	不明		土師器皿	
２区	墓11	女性	不明	不明			15～16世紀？
３区	墓13	不明	不明(成人)	不明			
４区	墓15	男性	不明	箱棺		青磁碗１・皿２、鉄小刀２	12ｃ中～12ｃ後半
４区	墓16	不明	不明(成人)	不明	歯冠のみ	漆器	14ｃ前後
４区	墓17	不明	不明(成人)	箱棺		土師器	14ｃ前後？
４区	墓18	不明	不明(成人)	箱棺		土師器皿	15ｃ末～16ｃ前半
４区	墓19	不明	不明(成人)	桶棺		漆器椀、土師器皿、折敷、木箱、籠？	15ｃ後半
４区	墓20	不明	不明(成人)	箱棺？	歯冠のみ		15ｃ後半～？
４区	墓21	不明	不明(成人)	箱棺？	歯冠のみ		15ｃ後半～？
４区	墓22	不明	不明(成人)	桶棺			15ｃ後半～？
４区	墓23	－	幼児	桶棺？	５歳前後		15ｃ後半～？
４区	墓24	不明	不明(成人)	桶or曲物棺		銭貨（無文銭）	15ｃ末～
４区	墓25	男性	不明	箱棺			15ｃ後半～？
４区	墓26	－	小児	桶棺	６歳前後	漆器椀、折敷	15ｃ後半～？
４区	墓29	－	幼児	曲物棺	３～４歳		
４区	墓31	男性	不明	桶棺			17ｃ後半
４区	墓32	－	小児	桶棺	９歳前後		近世？
４区	墓33	不明	不明(成人)	箱棺	歯冠のみ		近世？
４区	墓34	女性	不明	箱棺		櫛	近世？
４区	墓35	女性	不明	箱棺			近世？
４区	墓36	女性	不明	箱棺			近世？
４区	墓37	－	小児	箱棺	７～８歳		近世？
４区	墓38	男性	不明	箱棺		枕状木製品	近世？

人骨の発掘調査は、筆者の他に当館の職員の磯部美枝子、松下玲子、中野江里子、松下真実がおこない、人骨の整理・復元・計測値の計算などは、磯部美枝子、松下玲子、中野江里子が担当した。

表３　年齢区分（Table 3. Division of age）

年齢区分		年　　齢
未成人	乳児	１歳未満
	幼児	１歳～５歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成　人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

Ⅰ　人骨の出土状況

墓７

埋葬遺構は桶棺（早桶）である。桶の現存直径は約55cm。現場で確認できた骨は、頭蓋、左右の大腿骨と左脛骨であるが、人骨を取り上げる際に、桶底に左側の橈骨と尺骨を確認することができた。その他、上腕骨や腓骨が残っていたが、保存状態がきわめて悪く、左右の判別もできなかった。このように保存状態が悪い人骨は、海面質が泥化した様態で、かろうじて人骨と推測できる状態であった。頭蓋は桶の東側に右を下にして残っていた。大腿骨は左右とも後面が上になっており、左脛骨は左大腿骨に直交するような状態で検出されている。大腿骨が両側とも後面を上にしているのは不自然である。このような状態になるのは、立膝（坐葬）状態で埋葬され、軟部が腐食した際、棺内に空間がまだ保たれていた状態の時、何かのはずみで両側の大腿骨が裏返しになった場合と、腐乱状態なった下肢を後面を上にして埋納した場合であろう。桶棺という埋葬遺構の特殊性（空間ができる）を考慮すれば、前者の可能性が高いようである。従って、埋葬姿勢は、坐位と思われる。

副葬品としては、棺内から洪武通宝３枚、元祐通宝１枚を含む銭貨が合計７枚、棺外から漆器椀、土師器皿などが検出された。

墓13

埋葬遺構は不明である。人骨の保存状態は著しく悪い。現場で確認できた骨は、頭蓋、歯、左側鎖骨、左側上腕骨、右側の橈骨と尺骨、右側の大腿骨と脛骨、右側距骨であるが、その他に左側の大腿骨もしくは脛骨と思われる骨体の一部が残存していた。埋葬の姿勢は、仰臥で、肘関節は両側とも強屈しており、膝関節については、右側は強屈し、脛骨を下にした状態（正坐）であった。左側も膝関節は屈曲していたと思われるが、どれぐらい曲げていたかは不明である。

頭蓋は右側を下にした状態で、右側に倒れていた。頭蓋は脆弱化しており、骨の輪郭は定かではない。四肢骨はいずれも骨体の一部がかろうじて残存しているといった程度の残り具合である。埋葬姿勢は下肢を正座させて、上半身を仰臥状態にした少し奇妙な姿勢であった。副葬品は存在しなかった。

墓15

埋葬遺構は箱棺。棺材は残っていない。墓坑はかなり広い。青磁碗１個と青磁皿２枚、鉄小刀２振りが副葬されていた。埋葬姿勢は仰臥。膝関節は伸展状態であるが、肘関節の様態は、橈骨、尺骨が残存していなかったので、不明である。頭位は北東。残存量は少なく、頭蓋、左右の上腕骨、左右の大腿骨と右側の脛骨の一部が残存していた。いずれも保存状態が悪く、頭蓋は痕跡的で、四肢骨も泥化が進行している。人骨は取り上げることができなかったが、現場で観察したところ、大腿骨は長そうである。

墓19

埋葬遺構は桶棺。棺材が残存。埋葬姿勢は坐葬。顔は北東を向いていたようである。残存していたのは、四肢骨片と頭蓋片のみである。四肢骨片のなかには大腿骨片を確認したが、その他は骨種を同定することができなかった。

墓22

埋葬遺構は桶棺。顔は北向き。人骨の残存量は少ない。埋葬姿勢は坐葬と思われる。残存していたのは左右の大腿骨のみである。取り上げる際に大腿骨頭を確認できた。

墓25

埋葬遺構は箱棺、棺材が一部残存。頭位は北東。今回出土した人骨ではもっとも保存状態はよかったが、それでも取り上げは困難であった。埋葬姿勢は仰臥。肘関節は両側とも伸展状態だった。右側の膝関節は折りたたんだ状態で脛骨を下にした状態で、左側は膝関節を強屈した状態で右側に倒れていた。棺桶の長さが短かったので、膝を曲げても上半身が入りきらなかったようで、上半身は棺の妻板に沿って埋葬されたために頭蓋は腐敗の過程で、棺の中央に近い位置まで転げたようである。現場では全身の骨をほぼ確認することができたが（頭蓋、左右の上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨、腓骨、肋骨）、取り上げることができなかった。観察したところ、大腿骨と脛骨の径はやや大きい。

墓31

埋葬遺構は桶棺（早桶）である。保存状態はよくないが、残存量は多い。埋葬姿勢は坐位である。頭は本来北東にあって、顔は南を向いていたようである。現場で確認できた骨は、頭蓋、上腕骨、前腕の骨、大腿骨、脛骨、腓骨であるが、椎骨も塊として確認することができた。

墓32

埋葬遺構は桶棺（早桶）である。残存量は少なく、頭蓋、左右の腓骨および前腕の骨が残っていたに過ぎない。埋葬姿勢は坐位で、頭蓋は本来北にあったと思われ、顔は南を向いていたようである。

被葬者は９歳前後の小児である。

墓34

埋葬遺構は方形の箱棺である。人骨の保存状態は悪い。現場で確認できた骨は、頭蓋片、左右の上腕骨、左右不明の前腕の骨、左右の大腿骨と脛骨である。埋葬の姿勢は、おそらく仰臥であろう。肘関節も膝関節も屈曲していた。櫛が副葬されていた。

墓35

埋葬遺構は箱棺、床材が残存。頭位は北東。姿勢は仰臥。残存していたのは頭蓋、右側上腕骨と前腕の骨（橈骨か尺骨かは不明）、右側大腿骨のみ残存。頭蓋は、頭蓋冠が逆さまになった状態で、木棺の隅で検出された。この墓は別の墓坑によって切られているので、その際に頭蓋が攪乱されて移動したものと考えられる。保存状態が悪く、骨はほとんど取り上げることができないが、観察したところ大腿骨の径は小さい。

墓36

埋葬遺構は方形の箱棺である。人骨の残存状態は著しく悪い。現場で確認できたのは遊離歯と左右の脛骨体の一部のみである。

墓37

埋葬遺構は方形の箱棺と思われるが、径はやや小さい。棺材は残っていなかった。歯と下顎骨の一部が残存していたに過ぎない。

墓38

埋葬遺構は方形の箱棺である。残存量はやや多いが、保存状態はよくない。現場で確認できた骨は、頭蓋、下顎骨、鎖骨、肩甲骨、上腕骨、右側大腿骨と脛骨である。膝関節は屈曲していたが、肘関節の様態は不明である。なお、頭蓋は頭頂骨の上面が下になって、ひっくりかえっており、また大腿骨の位置が棺桶の上半身側に寄りすぎていることから、被葬者は上半身を棺桶の壁板にもたれかけるような状態で埋葬されたようである。腐敗する過程で頭蓋が落ちて逆さまになったと思われる。頭部には枕に用いられたと思われる木製品が残っていた。

Ⅱ　人骨所見

墓７人骨（男性、年齢不明）

現場で確認できた骨は、頭蓋、左右の大腿骨と左脛骨、左側の橈骨と尺骨、上腕骨や腓骨を確認することができた。上腕骨は両側の骨体が残っていたが、腓骨は左右の判別ができなかった。

１．頭蓋

頭蓋は脆くほとんど原形を留めていない。下顎骨の一部が残存していた。下顎には歯が釘植していたようである。遊離歯と歯槽の状態は次のとおりである。

／／／５　４／２／	１　２　３／／／／／
／／６／／③②１	／２　３／５　６／／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔１：中切歯，２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

２．四肢骨

（１）上肢骨

両側の上腕骨と左側の橈骨と尺骨を取り上げることができた。上腕骨はほとんど計測できないが、骨体はあまり大きくない。また、橈骨と尺骨は一部計測が可能であった。両者とも骨体は大きくはないが、骨間縁の発達は良好である。

（２）下肢骨

両側の大腿骨と左側の脛骨体の一部を取り上げることができた。

①大腿骨

左右とも骨体が残存していた。計測値は、骨体中央矢状径が28㎜（右）、26㎜（左）、横径は28㎜（右）、27㎜（左）で、骨体中央断面示数は100.00（右）、96.30（左）となり、右側は左側よりも粗線や骨体両側面の後方への発達が示数値以上に良好である。骨体中央周は87㎜（右）、82㎜（左）で、右側骨体は太い。また、上骨体断面示数は75.86（左）となり、左側の骨体上部は扁平である。

②脛骨

左側の骨体中央部が残存していた。径はやや小さく、骨体の断面形はヘリチカのⅢ型を呈している。計測値は、中央最大径が24㎜（左）、中央横径は19㎜（左）で、中央断面示数は79.17（左）となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は71㎜（左）で、骨体は細い。

３．性別・年齢

大腿骨体の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は不明である。

墓８人骨（４歳・性別不明）

残存していたのは永久歯の歯冠片のみである。同定できたのは上顎右側の側切歯と第一大臼歯の歯冠であるが、いずれも形成過程で、完成していない。歯冠の形成状態から年齢を４歳と推定した。

墓９人骨（性別・年齢不明）

取り上げられていたのは永久歯の歯冠片のみであるが、細片なので、歯種は同定できない。咬耗の跡が認められるので、成人であろう。性別、年齢は不明である。

墓10人骨（幼児）

遊離歯冠片が数点残存していた。同定ができたのは上顎右側第二乳臼歯のみである。年齢を絞り込めなかったが、被葬者は幼児であろう。

墓11人骨（性別・年齢不明）

左右の脛骨と思われる骨が残存していたが、残存状態は著しく悪い。残存部分から推測すれば、脛骨体の径はかなり小さいようである。このことから性別を女性と推定した。年齢は不明である。

墓13人骨（性別・年齢不明）

人骨の保存状態は著しく悪い。現場で、頭蓋、歯、左側鎖骨、左側上腕骨、右側の橈骨と尺骨、

右側の大腿骨と脛骨、右側距骨を同定した。その他に左側の大腿骨もしくは脛骨と思われる骨体の一部が残存していた。そのほかに下記に示す遊離歯が残存していた。

8	7	6	5	4	3	2	1	／	2	3	4	5	／	／	／
8	7	6	5	4	3	／	1	1	／	3	4	5	6	7	8

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの１度（咬耗がエナメル質のみ）である。

保存状態が悪く、性別・年齢を推測することができなかった。

墓15人骨（男性、年齢不明）

残存量は少なく、頭蓋、左右の上腕骨、左右の大腿骨と右側の脛骨の一部が残存していた。いずれも保存状態が悪く、頭蓋は痕跡的で、四肢骨も泥化が進行している。人骨は取り上げることができなかったが、現場で観察したところ、大腿骨は長そうである。大腿骨が長いことから、性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

墓16人骨（性別・年齢不明）

本例も永久歯冠の細片のみである。成人と思われるが、性別・年齢は不明である。

墓17人骨（性別・年齢不明）

永久歯の歯冠片が残存していた。下顎左側第三大臼歯と思われる歯冠を確認したが、ほかは細片状態で歯種を同定することができない。第三大臼歯には咬耗が認められることから、被葬者は成人であるが、性別・年齢は不明である。

墓18人骨（性別・年齢不明）

永久歯冠の小片と頭蓋片が残存していた。歯冠の同定はできないが、咬耗が認められる。また、頭蓋はほとんど形状を留めていない。被葬者は成人と思われるが、性別・年齢は不明である。

墓19人骨（性別・年齢不明）

残存していたのは、四肢骨片と頭蓋片のみである。残存部分が少なく、同定できたのは左右不明の橈骨片と大腿骨片のみである。性別・年齢は不明である。

墓20人骨（性別・年齢不明）

永久歯冠の細片が残存していたにすぎない。成人と思われるが、性別・年齢は不明である。

墓21人骨（性別・年齢不明）

本遺構からも永久歯冠の細片のみが検出された。歯種は同定できない。成人と思われるが、性別・年齢は不明である。

墓22人骨（性別・年齢不明）

残存していたのは左右の大腿骨のみである。成人骨であるが、性別・年齢は不明である。

墓23人骨（幼児、５歳前後）

永久歯の歯冠片が３片残存していたにすぎない。上顎右側犬歯と上顎と下顎の第一大臼歯の歯冠片と思われる。歯冠の形成状態から年齢を５歳前後の幼児と推定した。

墓24人骨（性別・年齢不明）

歯冠が残存していた。大部分は細片状態で歯種を同定できないが、上顎右側第三大臼歯と上顎左側第一小臼歯の２個を同定することができた。２本とも咬耗がみられ、前者はBrocaの１度（咬耗がエナメル質のみ）で、後者は咬耗度はBrocaの２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。歯の咬耗状態から被葬者は成人であるが、性別・年齢は不明である。

墓25人骨（男性、年齢不明）

今回出土した人骨ではもっとも残存量が多かった。ほぼ全身の骨が残っていたが、保存状態は悪く、取り上げることはできなかった。現場で観察したところ、大腿骨と脛骨の径はやや大きい。遊離歯も次のとおり、多数残存していた。

8 7 ／ 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
／ 7 6 5 4 3 ／ 1	1 2 3 4 ／ 6 7 ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの１～２度である。

大腿骨と脛骨の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は不明である。

墓26人骨（幼小児、６歳前後）

永久歯冠２個が残存していた。この歯冠は保存良好な下顎の左右の第一大臼歯である。歯冠はほぼ完成しているが、咬耗が認められないので、年齢を６歳前後と推定した。

墓29人骨（幼児、３～４歳）

乳歯と永久歯の歯冠が残存していたが、保存状態は良好である。残存歯は次のとおりである。

≪乳歯≫

／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ Ⅳ Ⅴ
Ⅴ Ⅳ ／ ／ ／	／ ／ ／ Ⅳ Ⅴ

（Ⅰ：乳中切歯、Ⅱ：乳側切歯、Ⅲ：乳犬歯、Ⅳ：第一乳臼歯、Ⅴ：第二乳臼歯）

≪永久歯≫

／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ 6 ／ ／
／ ／ 6 ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ 6 ／ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

乳歯、永久歯の歯冠の形成状態から年齢を３～４歳（幼児）と推定した。

墓31人骨（男性・年齢不明）

現場で確認できた骨は、頭蓋、上腕骨、前腕の骨、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、椎骨などで、残存量は多かった。取り上げることができた骨は図２に示した。

１．頭蓋・歯

頭蓋は少ない。下顎骨はよく残っており、その径は大きい。下顎骨の歯槽の状態と遊離歯は次のとおりである。

／	／	／	／	／	3	2	／	／	／	／	／	／	／	／	／
⑧	⑦	⑥	5	④	3	②	①	①	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの３度（咬耗が象牙質まで及ぶ）である。

２．四肢骨

（１）上肢骨

①上腕骨

両側の遠位端と右側骨頭が残存していた。遠位端の径はそれほど小さくなく、骨頭は大きい。

②橈骨・尺骨

左右の橈骨と尺骨が残存していた。橈骨の長さは長く、骨間縁の発達も良好で、左側近位部の径はやや大きい。また、尺骨体も小さくはない。

（２）下肢骨

①大腿骨

両側の近位半が残存していた。骨体の計測はできないが、左側は骨頭と頸部の計測ができた。大腿骨の径はやや小さく、上骨体断面示数は67.86（左）となり、骨体上部はかなり扁平である。

②脛骨

右側骨体が残存していた。計測はできないが、径はあまり大きくはなさそうである。

３．性別・年齢

大腿骨の諸径は小さいが、下顎骨と上腕骨頭が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は不明である。

墓32人骨（９歳前後、小児）

頭蓋、左右の腓骨および前腕の骨が残っていたに過ぎないが、遊離歯冠はよく残っていた。頭蓋は左側頬骨と上顎骨の左側部の歯槽突起の一部が残存していた。頭蓋と四肢骨の径はかなり小さい。遊離歯冠は次のとおりである。永久歯冠のほかに下顎右側第二乳臼歯と下顎左側乳犬歯の歯冠も残存していた。

／	／	6	／	／	／	／	／	／	／	3	4	／	／	7	／
／	7	／	5	4	／	2	1	／	2	／	／	5	6	7	／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

上顎左側犬歯と第一小臼歯は歯槽内に埋伏している状態が観察できた。歯冠や歯根の形成状態から被葬者の年齢を９歳前後と推定した。

墓33人骨（性別・年齢不明）

中切歯などの永久歯冠が４片残存していた。咬耗が認められるので、成人と思われるが、性別・年齢は不明である。

墓34人骨（女性・年齢不明）

現場で確認できた骨は、頭蓋片、左右の上腕骨、左側橈骨、左右の大腿骨と脛骨であったが、取り上げて観察できたのは頭蓋片、上腕骨、橈骨のみである。頭蓋壁は薄い。上腕骨と橈骨はかなり小さい。四肢骨が細いことから、性別を女性と推定した。クシが副葬されていた。

墓35人骨（女性、年齢不明）

残存していたのは頭蓋、右側上腕骨と前腕骨（橈骨か尺骨かは不明）、右側大腿骨が残存していたにすぎない。保存状態が悪く、骨はほとんど取り上げることができなかったが、観察したところ大腿骨の径は小さい。大腿骨体が細いことから性別を女性と推定した。年齢は不明である。

墓36人骨（女性、年齢不明）

人骨の残存状態は著しく悪く、残存していたのは遊離歯と左右の脛骨体の一部のみである。脛骨体の径は著しく小さい。残存していた遊離歯は次のとおりである。

8 7 ／ 5 4 3 2 ／	／ ／ 3 4 5 ／ 7 ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ 6 ／ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度はBrocaの１～２度である。脛骨体の径が著しく小さいことから、未成人骨を疑ったが、永久歯冠には咬耗が認められることから、成人である。歯の径が小さいことと脛骨体が著しく小さいことから、性別を女性と推定した。年齢は不明である。

墓37人骨（小児、７～８歳）

歯と下顎骨の一部が残存していたにすぎない。残存していた遊離歯は次のとおりである。

≪乳歯≫

Ⅴ Ⅳ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／
Ⅴ Ⅳ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／

（Ⅰ：乳中切歯、Ⅱ：乳側切歯、Ⅲ：乳犬歯、Ⅳ：第一乳臼歯、Ⅴ：第二乳臼歯）

≪永久歯≫

／ ／ 6 5 4 3 ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／
／ ／ 6 ／ ／ 3 ／ ／	／ ／ ／ ／ 5 ／ ／ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕
〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

第一大臼歯はすでに萌出完了して、咬合している。犬歯や小臼歯の歯冠の形成状態から、年齢を７歳～８歳と推定した。

墓38人骨（男性、年齢不明）

残存していたのは頭蓋、下顎骨、鎖骨、肩甲骨、上腕骨、右側大腿骨と脛骨であるが、保存状態は著しく悪く、計測はできない。頭蓋も計測はできないが、観察したところでは、径は大きく、頭型は長頭型に傾いているようである。脳頭蓋の径と大腿骨頭の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は不明である。

考　察

計測ができた男性の大腿骨と脛骨について検討をおこなっておきたい。

１．大腿骨

本例では骨体中央周の計測ができたのはわずか１例しかない。この１例の骨体中央周は87㎜（右）、82㎜（左）で、右側骨体は太い。中世人の大きさは鎌倉材木座か、由比ヶ浜の例を平均的な大きさと考えておけばいいが、中には骨体中央周が90㎜を超えるような太くて長い大腿骨をみかけることがある。例えば、山口県下関市豊北町の宮ノ下遺跡（ST-001）、豊浦町中ノ浜遺跡（ST-01）、同じく防府市原遺跡、同じく萩市見島、萩城跡（ST-118）、福岡県北九州市の小倉城代米御蔵跡（２号人骨）、同じく小倉城二の丸（１号人骨）、広島県寄倉遺跡、助平遺跡（１号人骨）などである。副葬品や埋葬施設の種類から推測すれば、この大柄な人物はその地域の領主的、頭領的性格の持ち主が想起され、一般庶民とは考えにくい。

表４は男性大腿骨の計測値比較表である。中世人大腿骨の骨体中央周の平均値的な大きさは、愛媛県七反地の84.00㎜（２例）、神奈川県鎌倉市由比ヶ浜の84.90㎜（81例）、材木座の84.50㎜（64例）のように、だいたい84㎜前後である。本例は小倉城代米御蔵跡K-3、広島県の月見城と一致し、吉母浜の平均値に近く、どちらかといえば、骨体がやや大きい大腿骨である。また、上骨体断面示数は墓７が75.86（左）、墓31（近世人）が67.86となり、骨体上部は扁平である。墓31の上骨体断面示数は土井ヶ浜1402、高野1BST080、月見城と大差なく、著しく扁平であり、墓７も示数値としては小さく、本例の大腿骨体上部は扁平である。

２．脛骨

表５は男性脛骨の計測値比較表である。本例の骨体周は表５では最小値となり、骨体はかなり細い。中央断面示数は79.17（左）であるが、この値は表５では最大値となり、骨体には扁平性はまったく認められない。

要　約

島根県益田市久城町にある沖手遺跡の発掘調査が益田道路建設に伴って、2005年（平成17年）におこなわれ、合計27箇所の遺構から27体の人骨が検出された。人骨の保存状態はかなり悪かったが、人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

１．27基の墓坑から27体の人骨が出土した。成人骨は20体で、残りの７体は幼小児骨である。成人骨のうち、男性骨は５体、女性骨は４体で、残りの11体は性別不明である。

２．この人骨は、考古学的所見から、大部分は中世・近世に属する人骨である。

３．埋葬遺構には、箱棺（寝棺）と桶棺（坐棺）の２種類がみられた。

４．かなり広い面積を調査しても検出される中世墓の数は少なく、屋敷墓と考えられることが多いが、本遺跡では墓坑が多数検出されており、この地は墓地として機能していたようである。
５．男性の大腿骨体はやや大きい方（太い方）である。また、骨体上部は扁平である。
６．男性の脛骨体はかなり細く、骨体にはまったく扁平性は認められない。
７．近年の発掘調査によって中世墓の検出例が次第に増加してきた。調査された面積の広さの割には検出される中世墓の数が少ないことから、これら墓は屋敷墓と考えられている。今回調査された沖手遺跡からは多数の中世墓が出土しているが、造墓の時期、墓の配置、副葬品などの検討の結果、これらの墓も屋敷墓もしくは屋敷墓的性格を有する墓と推測されている。埋葬遺構の種類も箱棺や桶棺がみられるなど、多様性が認められるので、被葬者の形質的差異が観察できないかと期待をもって調査をおこなった。しかし、保存状態が悪く、中世人の特徴である「長頭性」「鼻根部の扁平性」「歯槽性突顎」の有無を確認することすらできなかったが、本中世人は、中世人の平均値的大きさからは、男性大腿骨は大きい方へ、男性脛骨は細い方へ寄っていた。

謝　辞

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた島根県埋蔵文化財調査センターの皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

（山口県の中世人骨）
（１）松下孝幸・他、1983ａ：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第７次調査報告概報（豊北町埋蔵文化財調査報告２）：19-30.
（２）松下孝幸・他、1983ｂ：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第70集）：147-148.
（３）松下孝幸・他、1986：山口県豊浦町汐汲遺跡出土の古墳時代・中世人骨。汐汲遺跡（豊浦町埋蔵文化財調査報告第７集）：75-102.
（４）松下孝幸・他、1988ａ：宇部市末信遺跡出土の中世人骨。末信遺跡（宇部市文化財資料第10集）：20-25.
（５）松下孝幸・他、1988ｂ：山口市瑠璃光寺遺跡出土の中世人骨。瑠璃光寺跡遺跡－中世墳墓の調査。（山口市埋蔵文化財調査報告第28集）：397-436.
（６）松下孝幸・他、1988ｃ：東隆寺経塚出土の人骨。東隆寺一字一石経塚（伝南嶺和尚墓）（宇部市文化財資料第９集）：33-36.
（７）松下孝幸・他、1992：山口県下関市市場遺跡第Ⅱ地区出土の中世人骨。市場遺跡Ⅱ・宮添遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第149集）：23-25.
（８）松下孝幸、1996：土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世・弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集）：24-50.
（９）松下孝幸、1997：山口県美東町植畠遺跡出土の中世人骨。植畠遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第183集）：38-40.
（10）松下孝幸、1998：土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査出土の弥生時代・中世人骨。土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査報告書（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第14集）：付1-39.
（11）松下孝幸、1999ａ：山口県豊浦町高野遺跡出土の中世人骨。高野遺跡（南地区）（平成７・８・９年度県営

ほ場整備事業にともなう発掘調査報告書）（豊浦町の文化財第15集）：226-233.
（12）松下孝幸、1999ｂ：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世人骨。吉永遺跡（Ⅲ-西地区）（平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書）（豊浦町の文化財第16集）：21-25.
（13）松下孝幸、1999ｃ：山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世火葬人骨。吉永遺跡（Ⅲ－東地区）（平成10年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告）：51-54.
（14）松下孝幸、2000ａ：山口県豊浦町川棚条里跡出土の中世人骨。川棚条里跡１（大浦・台地区）（平成11年度経営ほ場整備事業に伴う発掘調査概報）（豊浦町の文化財第17集）：64-68.
（15）松下孝幸、2001ａ：山口県防府市原遺跡出土の中世人骨。原遺跡（山口県埋蔵文化財調査センター調査報告第23集）：41-56.
（16）松下孝幸、2001ｃ：山口県三隅町湯免遺跡出土の中世人歯冠。湯免遺跡（三隅町埋蔵文化財調査報告第１集）：付篇
（17）松下孝幸・他、2003ｂ：山口県豊北町中平尾遺跡出土の中世人骨。中平尾遺跡・上今宮遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第23集）：160-163.
（18）松下孝幸、2003ｃ：山口県豊北町神田口遺跡出土の中世人骨。土井遺跡群　二刀遺跡・丸山遺跡・神田口遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第24集）：85-87.
（19）松下孝幸、2004ａ：山口県豊北町東正寺遺跡出土の中世人骨。東正寺遺跡・浴ノ迫遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第25集）：29-31.
（20）牛島陽一・他、1960：山口県阿武郡見島村出土の中世時代の人骨について。人類学研究、７（３～４）：52-56.
（21）中橋孝博・他、1985：人骨（山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨）。吉母浜遺跡：154-225.
（島根県の中世人骨）
（22）松下孝幸、2000ｂ：島根県津和野町喜時雨遺跡出土の中世人骨。喜時雨遺跡（津和野町埋蔵文化財報告書）：46-47.
（23）松下孝幸、2006：益田市沖手遺跡出土の中世人骨。沖手遺跡－１区の調査－（一般国道９号号線（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３）：117-122.
（広島県の中世人骨）
（24）池田次郎、1980：帝釈寄倉岩陰遺跡出土の中世人骨について。広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅲ：99-105.
（25）松下孝幸・他、1985：東広島市大槙３号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大槙遺跡群（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集）：117-122.
（26）松下孝幸、1987：広島県月見城出土の中世人骨。月見城遺跡（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集）：97-106.
（27）松下孝幸、1997：広島県豊平町地徳古墓出土の中世人骨。国営広島北部土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第152集）：51-59.
（その他の中世人骨など）
（28）香原志勢、1956：四肢骨特に大腿骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、岩波書店：149-154.
（29）Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttgart：429-597.
（30）松下孝幸、2000：愛媛県松山市七反地遺跡出土の中世人骨。道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡（一般国道196号松山北条バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅱ）（埋蔵文化財発掘調査報告書第86集）：391-422.
（31）松下孝幸、2001：小倉城御普請所跡出土の中世人骨。小倉城御普請所跡－街路事業城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－（北九州市埋蔵文化財調査報告書第258集）：139-143.
（32）松下孝幸、2002ａ：神奈川県鎌倉市由比ヶ南遺跡出土の中世人骨。神奈川県・鎌倉市由比ヶ南遺跡〈第３分

冊・分析編Ⅱ〉：1-99.

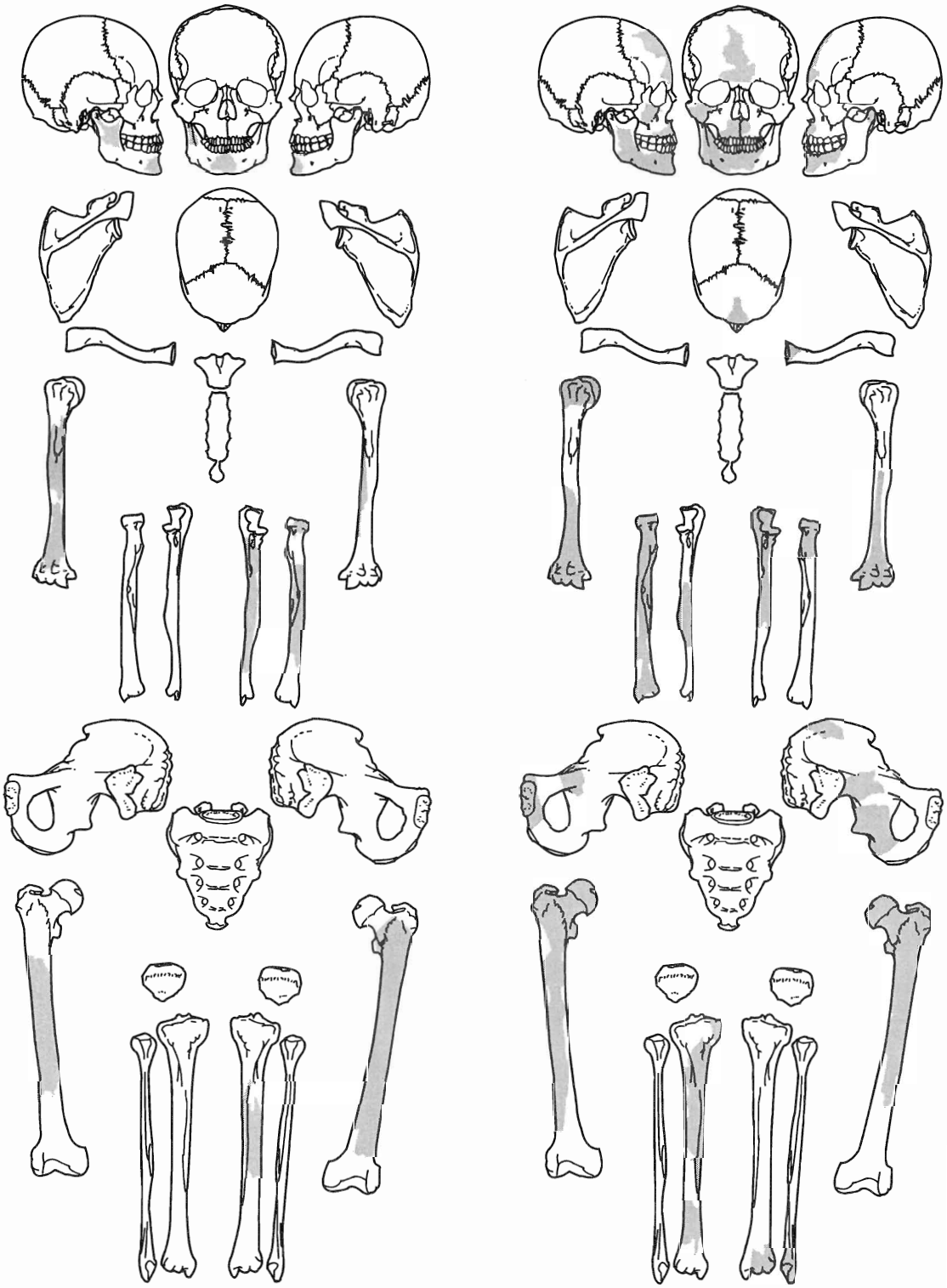
(33) 松下孝幸、2002b：鎌倉市由比ヶ南遺跡集骨墓出土人骨の埋葬と個体数および受傷人骨。神奈川県・鎌倉市由比ヶ南遺跡〈第３分冊・分析編Ⅱ〉：101-134.

(34) 松下孝幸、2003：北九州市小倉城代米御蔵跡出土の中世人骨。小倉城代米御蔵跡Ⅲ（北九州市埋蔵文化財調査報告書第293集）：109-136.

(35) 松下孝幸、2004ｂ：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444-454. 朝倉書店

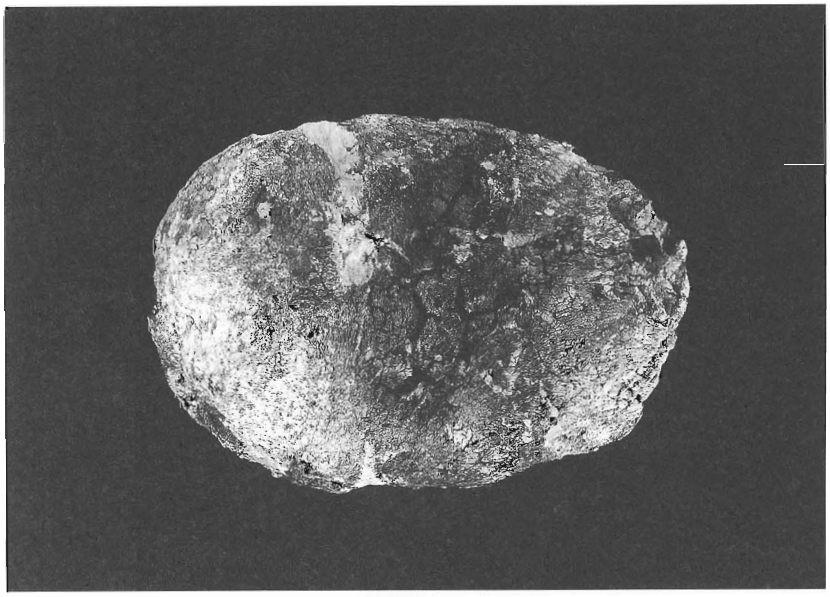
(36) 鈴木尚・他、1956：頭骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨：75-148. 岩波書店、東京。

(37) 鈴木尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。

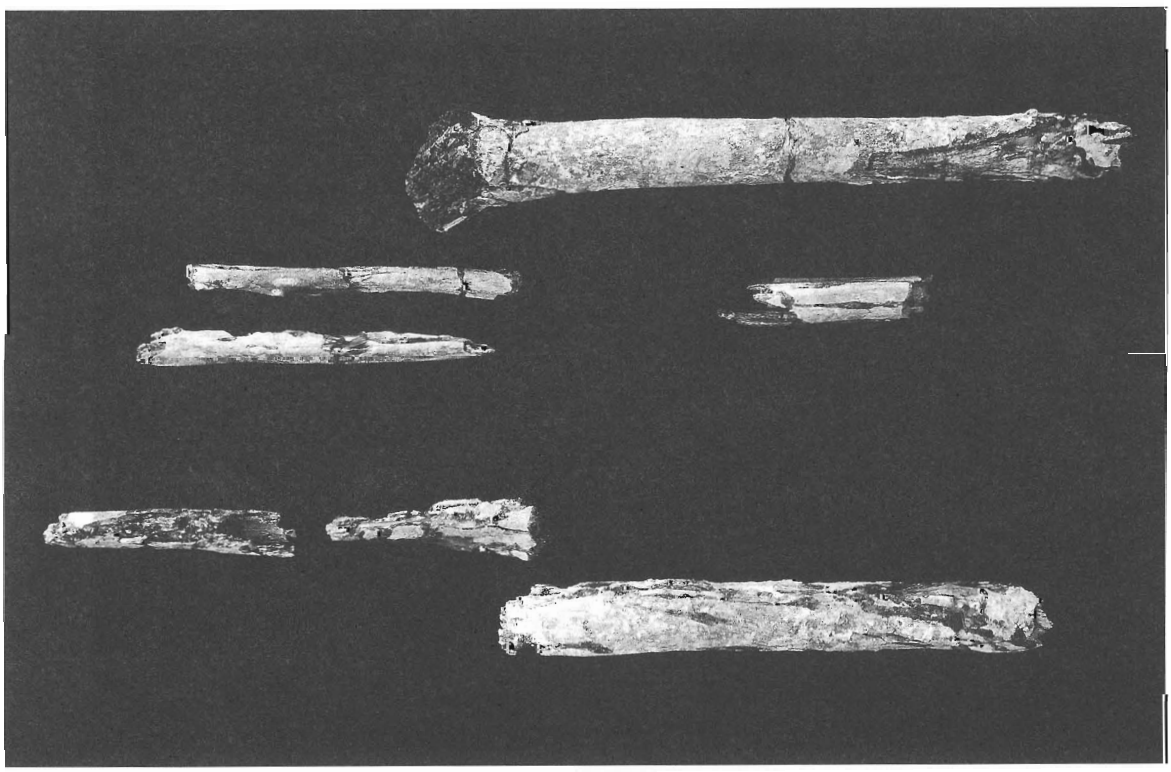


沖手遺跡・墓７（男性）　　沖手遺跡・墓31（男性）

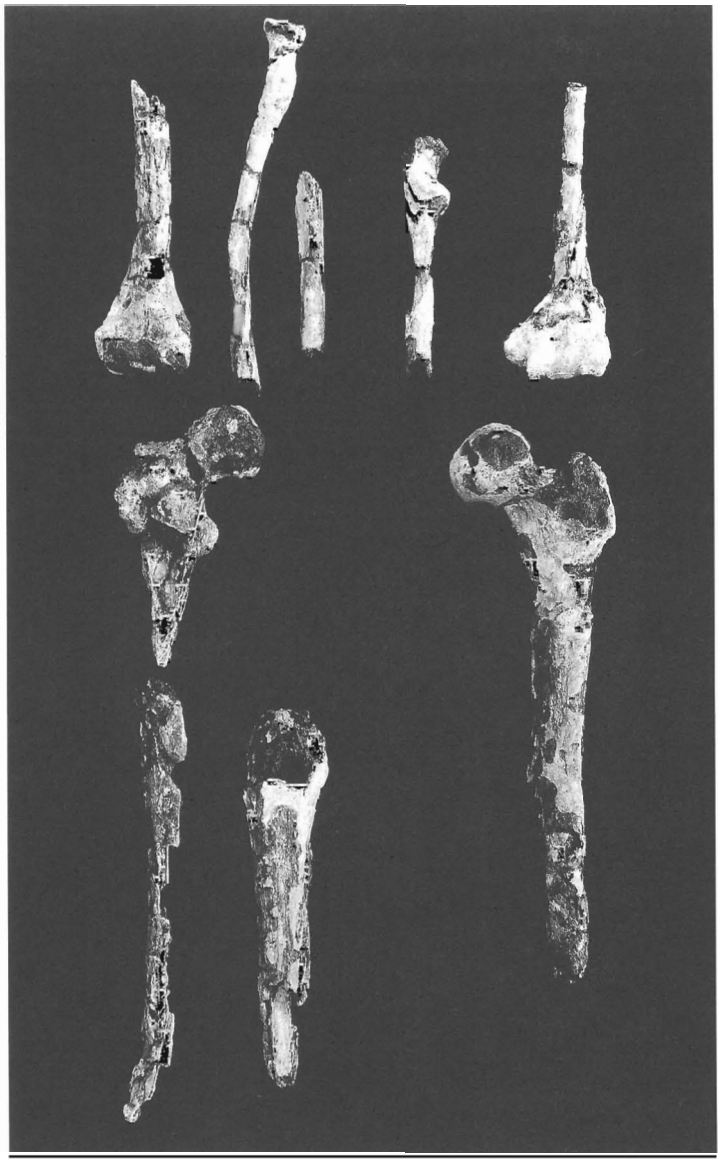
図２　人骨の残存図（アミかけ部分）
（Fig. 2　Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved）



頭蓋上面（Superior view of the Skull）
沖手　墓38（男性）
（The Okite Burial-38, male）



四肢骨（The limb bones）
沖手　墓７（男性）
（The Okite Burial-7, male）



四肢骨（The limb bones）

頭蓋（The Skull）

沖手 墓31（男性）
（The Okite Burial-31, male）

表４－１　大腿骨計測値比較表(男性、右、mm)(Table4-1. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		沖手 中世人 島根県 益田市 (松下)		小倉城代米御蔵跡 中世人 福岡県 北九州市 (松下)				小倉城二の丸 中世人 福岡県 北九州市 (松下)		萩城跡 中世人 山口県 萩市 (松下)	吉母浜 中世人 山口県 下関市 (中橋・他)		中ノ浜 中世人 山口県 豊浦町 (松下)	土井ヶ浜 中世人 山口県 豊北町 (松下)
		墓7	墓31	1号	2号	K－2	K－3	1号	2号	ST－118	n	M	ST－01	1402
6.	骨体中央矢状径	28	－	25	30	26	26(左)	30	28	29(左)	19	27.7	28(左)	24
7.	骨体中央横径	28	－	22	28	27	30(左)	26	26	31(左)	19	27.5	29(左)	26
8.	骨体中央周	87	－	73	90	85	87(左)	89	85	95(左)	19	87.5	89(左)	79
9.	骨体上横径	29 (左)	28 (左)	26	31	30	31(左)	32	30	35(左)	19	32.1	－	33
10.	骨体上矢状径	22 (左)	19 (左)	22	25	23	26(左)	26	24	27(左)	19	24.6	－	23
8/2.	長厚示数	－	－	－	22.78	－	－	20.84	－	－	14	21.1	－	19.70
6/7	骨体中央断面示数	100.00	－	113.67	107.14	96.30	86.67(左)	115.38	107.69	93.55(左)	19	100.6	96.55(左)	92.31
10/9	上骨体断面示	75.86(左)	67.86(左)	84.62	80.65	76.67	83.87(左)	81.25	80.00	77.14(左)	19	76.5	－	69.70

表４－２　大腿骨計測値比較表(男性、右、mm)(Table4-2. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		見島 中世人 山口県 (牛島・他)	高野 中世人 山口県 豊浦町 (松下)	瑠璃光寺 中世人 山口県 山口市 (松下・他)		原 中世人 山口県 防府市 (松下)	寄倉 中世人 広島県 (池田)		月見城 中世人 広島県 広島市 (松下)	助平 中世人 広島県 東広島市 (松下・他)	七反地 中世人 愛媛県 松山市 (松下)		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)		鎌倉材木座 中世人 神奈川県 鎌倉市 (香原)	
		No.1	1BST080	n	M	ST1	n	M	SK3	1号人骨	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	28.0	25	6	29.50	34	1	29	29(左)	31	2	27.00	81	27.32	65	27.27
7.	骨体中央横径	31.0	28	6	27.00	27	1	28	27(左)	28	2	26.00	81	26.27	65	26.50
8.	骨体中央周	95.0	84	5	88.60	97	1	91	87(左)	93	2	84.00	81	84.90	64	84.50
9.	骨体上横径	35.0	32	5	31.80	－	1	36	33	－	2	29.50	80	31.01	57	31.31
10.	骨体上矢状径	26.0	22	5	24.40	27	1	27	22	－	2	22.50	80	23.95	57	24.20
8/2.	長厚示数	(23.87)	－	－		－	1	22.4	－	－	2	20.20	26	20.59	9	21.89
6/7	骨体中央断面示数	90.32	89.29	5	109.88	125.93	1	103.6	107.41(左)	110.71	2	103.71	81	104.49	65	104.94
10/9	上骨体断面示	74.29	68.75	5	77.16	－	1	75.0	66.67	－	2	76.27	79	77.68	57	77.86

表５－１　脛骨計測値比較表(男性、右、mm)(Table5-1. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		沖手	小倉城代米御蔵跡		小倉城二の丸		萩城跡	土井ヶ浜	吉母浜		高野	瑠璃光寺	
		中世人	中世人		中世人		中世人	中世人	中世人		中世人	中世人	
		島根県	福岡県		福岡県		山口県	山口県	山口県		山口県	山口県	
		益田市	北九州市		北九州市		萩市	豊北町	下関市		豊浦町	山口市	
		(松下)	(松下)		(松下)		(松下)	(松下)	(中橋・他)		(松下)	(松下・他)	
		墓7	2号	Y－1	1号	2号	ST－118	1402	n	M	1BST080	n	M
8.	中央最大径	24 (左)	30	29	31(左)	28(左)	-	29	20	29.4	29	4	29.75
8a.	栄養孔位最大径	-	33	35	37	-	35(左)	35	20	34.1	-	3	34.67
9.	中央横径	19 (左)	20	21	21(左)	19(左)	21(左)	19	20	21.5	19	4	21.00
9a.	栄養孔位横径	-	22	24	26	-	25(左)	23	20	23.9	-	3	23.67
10.	骨体周	71 (左)	80	77	83(左)	75(左)	-	75	20	80.2	75	4	81.00
10a.	栄養孔位周	-	89	93	102	-	95(左)	90	20	90.8	-	3	91.33
10b.	最小周	-	74	70	76(左)	71(左)	75(左)	68	20	74.2	-	2	73.00(左)
9/8	中央断面示数	79.17(左)	66.67	72.41	67.74(左)	67.86(左)	-	65.52	20	73.3	65.52	4	70.58
9a/8a	栄養孔位断面示数	-	66.67	68.57	70.27	-	71.43(左)	65.71	20	70.1	-	3	68.25

表５－２　脛骨計測値比較表(男性、右、mm)(Table5-2. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		原	寄倉		七反地		由比ヶ浜南	
		中世人	中世人		中世人		中世人	
		山口県	広島県		愛媛県		神奈川県	
		防府市			松山市		鎌倉市	
		(松下)	(池田)		(松下)		(松下)	
		ST1	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	33	1	33	2	28.50(左)	73	29.26
8a.	栄養孔位最大径	-	1	36	1	32	70	33.34
9.	中央横径	22	1	22	1	19(左)	73	21.05
9a.	栄養孔位横径	-	1	26	1	23	70	23.50
10.	骨体周	87		-	1	76(左)	73	79.63
10a.	栄養孔位周	-		-	1	86	70	89.93
10b.	最小周	76		-	1	69	68	72.88
9/8	中央断面示数	66.67	1	66.7	1	65.52(左)	73	72.12
9a/8a	栄養孔位断面示数	-	1	72.2	1	71.88	70	70.65

表６　上腕骨(mm)(Humerus)

		沖手墓31男性右
1.	上腕骨最大長	-
2.	上腕骨全長	-
3.	上端幅	-
3(1).	横上径	-
4.	下端幅	-
5.	中央最大径	-
6.	中央最小径	-
7.	骨体最小周	-
7(a).	中央周	-
8.	頭周	-
9.	頭最大横径	43
10.	頭最大矢状径	48
11.	滑車幅	-
12.	小頭幅	-
12(a).	滑車幅および小頭幅	-
13.	滑車深	-
14.	肘頭窩幅	-
15.	肘頭窩深	-
6/5	骨体断面示数	-
7/1	長厚示数	-

表８　大腿骨(mm)(Femur)

			沖手墓7男性	沖手墓31男性
1.	最大長	(右)	-	-
		(左)	-	-
2.	自然位全長	(右)	-	-
		(左)	-	-
3.	最大転子長	(右)	-	-
		(左)	-	-
4.	自然位転子長	(右)	-	-
		(左)	-	-
6.	骨体中央矢状径	(右)	28	-
		(左)	26	-
7.	骨体中央横径	(右)	28	-
		(左)	27	-
8.	骨体中央周	(右)	87	-
		(左)	82	-
9.	骨体上横径	(右)	-	-
		(左)	29	28
10.	骨体上矢状径	(右)	-	-
		(左)	22	19
15.	頚垂直径	(右)	-	-
		(左)	-	23
16.	頚矢状径	(右)	-	-
		(左)	-	27
17.	頚周	(右)	-	-
		(左)	-	85
18.	頭垂直径	(右)	-	-
		(左)	-	41
19.	頭横径	(右)	-	-
		(左)	-	40
20.	頭周	(右)	-	-
		(左)	-	129
21.	上顆幅	(右)	-	-
		(左)	-	-
8/2	長厚示数	(右)	-	-
		(左)	-	-
6/7	骨体中央断面示数	(右)	100.00	-
		(左)	96.30	-
10/9	上骨体断面示数	(右)	-	-
		(左)	75.86	67.86

表７　橈骨(mm)(Radius)

			沖手墓7男性	沖手墓31男性
1.	最大長	(右)	-	-
		(左)	-	-
1b.	平行長	(右)	-	-
		(左)	-	-
2.	機能長	(右)	-	-
		(左)	-	-
3.	最小周	(右)	-	-
		(左)	35	-
4.	骨体横径	(右)	-	15
		(左)	-	-
4a.	骨体中央横径	(右)	-	15
		(左)	14	-
4(1).	小頭横径	(右)	-	20
		(左)	-	-
4(2).	頚横径	(右)	-	12
		(左)	-	-
5.	骨体矢状径	(右)	-	11
		(左)	-	-
5a.	骨体中央矢状径	(右)	-	11
		(左)	10	-
5(1).	小頭矢状径	(右)	-	20
		(左)	-	-
5(2).	頚矢状径	(右)	-	14
		(左)	-	-
5(3).	小頭周	(右)	-	66
		(左)	-	-
5(4).	頚周	(右)	-	42
		(左)	-	-
5(5).	骨体中央周	(右)	-	41
		(左)	39	-
5(6).	骨下端幅	(右)	-	-
		(左)	-	-
3/2	長厚示数	(右)	-	-
		(左)	-	-
5/4	骨体断面示数	(右)	-	73.33
		(左)	-	-
5a/4a	中央断面示数	(右)	-	73.33
		(左)	71.43	-

表９　脛骨(mm)(Tibia)

		沖手墓7男性左
1.	脛骨全長	-
1a.	脛骨最大長	-
1b.	脛骨長	-
2.	顆距間距離	-
3.	最大上端幅	-
3a.	上内関節面幅	-
3b.	上外関節面幅	-
4a.	上内関節面深	-
4b.	上外関節面深	-
6.	最大下端幅	-
7.	下端矢状径	-
8.	中央最大径	24
8a.	栄養孔位最大径	-
9.	中央横径	19
9a.	栄養孔位横径	-
10.	骨体周	71
10a.	栄養孔位周	-
10b.	最小周	-
9/8	中央断面示数	79.17
9a/8a	栄養孔位断面示数	-
10b/1	長厚示数	-

第３節　沖手遺跡の鍛冶・鋳造関連遺物（分析資料）の考古学的観察

１　調査の手順

鍛冶・鋳造関連遺物については、遺構の機能や工程を的確に把握するため、強力磁石と小型特殊金属探知機による抽出、及び肉眼観察による考古学的な分類を行なった。この中から、遺跡における作業内容や工程を代表すると考えられる資料を金属学的分析が必要なものとして抽出し、遺物観察表と実測図の作成、写真撮影を行なった。

２　遺物観察表の見方

遺物観察表は、新潟県北沢遺跡[1]・島根県板屋Ⅲ遺跡[2]における製鉄関連遺物の検討で採用された様式を基本とし、分析項目などを加えた様式を用いている。主な項目の見方は以下のとおりである。

①遺物種類　金属学的分析を行なう前に、考古学的観察によって判定した遺物の種類である。

②計 測 値　各遺物の長さ、幅、厚さ、重量を計測したものである。

③磁 着 度　製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」を用いて、６㎜を１単位として資料の反応の程度を数字で表したものである。

④遺 存 度　資料が完形か破片かを記す。

⑤破 面 数　資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。

⑥メタル度　埋蔵文化財専用に製準された小型特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のとおりである。

Ｈ（○）：最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。

Ｍ（◎）：標準感度でＨの倍以上の金属鉄が残留することを示す。

Ｌ（●）：低感度でＭの倍以上の金属鉄が残留することを示す。

⑦分　　析　どのような分析をどのような部分について行なうかを○印で示す。

⑧所　　見　外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、及び付着物やその他の状況について記す。

⑨分析部位　資料のどのような部分をどのような目的で、調査・分析するのか記す。なお、図１の実測図の網掛け部分は、分析に供した資料の採取位置を示す。

⑩備　　考　資料がどのような場所で、どのように生成されたと予想されるかなどについて記している。

1　新潟県豊浦町教育委員会　1992　『北沢遺跡群』

2　島根県教育委員会　1998　『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５

沖手遺跡鍛冶・鋳造関連遺物分析一覧表

（滓：メタル又は胎土）

資料番号	地区名	遺構名	構成No.	遺物種類	重量（g）	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	検鏡	硬度	EPMA	X線回折	化学分析	耐火度	カロリー	放射化分析	断面樹脂	分析位置指定	採取方法	観察	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	前含浸	X線透過
1	1区	P880	1-P880-2	椀形鍛冶滓	43.0	5	なし	滓部を		○	○			○					長軸端部 1/3	直線状に切断	○	○	○		○	−	
2	1区	P880	1-P880-5	粒状滓（５点）	−	−	なし	粒状滓として	○	○									必要品	選択	○		○			−	
3	1区	P880	1-P880-6	鍛造剥片（７点）	−	−	なし	鍛造剥片として	○	○									必要品	選択	○		○			−	
4	4区	26F	4	炉壁	482.8	4	M(◎)	炉壁として	○	◎	○			○	○			○	長軸端部 3/7	直線状に切断	○	○	○		○	−	
5	1区	9N2層	9	椀形鍛冶滓	20.8	5	錆化(△)	滓部を		○	○			○					長軸端部 2/5	直線状に切断	○	○	○		○	−	
6	2区	P484	15	椀形鍛冶滓	866.1	5	H(○)	滓部を中心に	○	◎	○	○		○				○	長軸端部 1/8	直線状に切断	○	○	○		○	−	
7	1区	9M2層	16	椀形鍛冶滓	62.1	8	M(◎)	滓部を中心に	○	◎	○			○				○	長軸端部 1/4	直線状に切断	○	○	○		○	−	
8	4区	17I2層	27	鉄塊系遺物	57.1	6	H(○)	メタル部を中心に	○	◎	○							○	長軸端部 2/5	直線状に切断	○	○	○		○	−	
9	3区	12L1層	32	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	90.8	9	M(◎)	メタル部を中心に	○	◎	○							○	長軸端部 1/4	直線状に切断	○	○	○		○	−	○
10	4区	18J2層	36	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	40.1	6	L(●)	メタル部を中心に	○	◎	○							○	長軸端部 1/2	直線状に切断	○	○	○		○	−	○
11	1区	602層	37	含鉄鉄滓or鉄塊系遺物	46.1	7	L(●)	メタル部を中心に	○	◎	○	○		○				○	長軸端部 1/3	直線状に切断	○	○	○		○	−	
12	1区	11M2層	39	鉄滓系遺物	59.2	11	L(●)	メタル部を	○	○	○	○						○	長軸端部 3/5	直線状に切断	○	○	○		○	−	

資料番号１

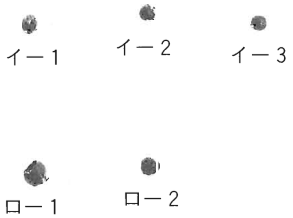
出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	Ｐ880－２			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	１区　Ｐ880		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		
試料記号	検　鏡：OKT-1 化　学：OKT-1 放射化：　—	計測値	長さ　4.7cm 幅　3.8cm 厚さ　1.7cm 重量　43.03ｇ	色調	表：暗赤色～オリーブ黒色 地：オリーブ黒色	遺存度	ほぼ完形 破面数　3		検鏡 硬度 EPMA	○ ○	
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓			磁着度	5	前含浸	—		X線回折 化学 耐火度	○	
				メタル度	なし	断面樹脂	—		カロリー 放射化 X線透過		
観察所見	平面、不整楕円形の小型の椀形鍛冶滓。図の右下手側に小さな破面がみられるが、ほぼ完形のものである。上面の左右２か所に瘤状に高くなっており、左側の瘤状の高まりには、羽口先端の溶融物と思われる黒色ガラス質のものが付着している。また、この高まりの下手側には長さ１cm程度の白色礫が固着している。側面から下面にかけては整った椀形になっている。滓質は緻密で、気孔がまばらに見られる。										
分析部分	長軸端部１/３を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。										
備　考	本遺跡で出土した椀形鍛冶滓の中では、小型の部類に分類される。１区Ｐ880は被熱した浅いくぼみ状の遺構で、覆土中から鍛冶滓や、粒状滓、鍛造剥片が確認された。これらの分析をふまえて、この遺構の性格について考えることとしたい。										

資料番号２

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	Ｐ880－５			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	１区　Ｐ880		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ	○	
試料記号	検　鏡：OKT-2 化　学：　— 放射化：　—	計測値	長さ　— cm 幅　— cm 厚さ　— cm 重量　— ｇ	色調	—	遺存度	—		検鏡 硬度 EPMA	○	
遺物種類（名称）	粒状滓（５点）				—	破面数	—		X線回折 化学 耐火度		
				磁着度	—	前含浸	—		カロリー 放射化		
				メタル度	なし	断面樹脂	—		X線透過		
観察所見	１区Ｐ880で採取した土砂から検出したものである。資料の選定にあたっては、2.5㎜以下の大きさの個体のうち、磁石で強弱に２分した上で、大小の最大幅を考慮して選択した。										
分析部分	必要品を選択し、粒状滓として分析に用いる。残材返却。										
備　考	１区Ｐ880の覆土中から検出された粒状滓（様の遺物）は全部でわずか７点で、本資料はその中でもより粒状滓の可能性が高いと思われるものを選択した。										

分析資料No.２　　粒状滓

番号	直径（㎜）	色調	形状及び表面	磁着	気孔
２－イ－１	1.7	黒　色	ややいびつな球形。小さな突起１か所あり。光沢あり。	弱	あり
２－イ－２	1.6	黒褐色	ややいびつな球形。小さな突起１か所あり。光沢なし。	弱	あり
２－イ－３	1.3	黒褐色	きれいな球形。小さな突起１か所あり。光沢あり。	弱	なし
２－ロ－１	2.1	黒褐色	ややいびつな球形。小さな突起１か所あり。光沢なし。	強	なし
２－ロ－２	1.5	黒褐色	ややいびつな球形。光沢なし。	強	あり



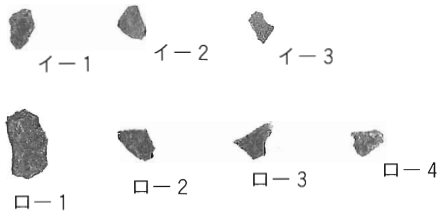
資料番号２

資料番号３

出土状況	遺跡名	沖手遺跡			遺物No	P880－6			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	１区　P880			時期：根拠	中世：出土土器				マクロ	○	
試料記号	検　鏡：OKT-6 化　学：　— 放射化：　—	計測値	長さ　—　cm 幅　—　cm 厚さ　—　cm	色調	—	遺存度	—			検鏡 硬度 EPMA	○	
					—	破面数	—			X線回折 化学 耐火度		
遺物種類（名称）	鍛造剥片（７点）		重量　—　g	磁着度	—	前含浸	—			カロリー 放射化		
				メタル度	なし	断面樹脂	—			X線透過		
観察所見	１区Ｐ880で採取した土砂から検出したものである。資料の選定にあたっては、6.3㎜以下の大きさをもつ個体のうち、磁石で強弱に２分した上で、厚さの最大幅を考慮して、0.1㎜前後、0.2㎜前後、0.3㎜前後、0.4㎜前後のものをそれぞれ選択した。											
分析部分	必要品を選択し、鍛造剥片として分析に用いる。残材返却。											
備考	１区Ｐ880は被熱した浅いくぼみ状の遺構であるが、遺構の形状からは鍛冶炉とは考えづらい。ただし、粒状滓や鍛造剥片など鍛冶作業工程に伴う微小遺物が分析によって確認できれば、この付近で鍛冶作業が行われたことの傍証になるといえよう。											

分析資料No.３　鍛造剥片様遺物

番号	計測値(㎜)			色調	表	裏	磁着	気孔
	長軸	短軸	厚さ					
３－イ－１	3.8	2.4	0.18	青黒色～黒褐色	やや凹凸あり。やや光沢あり。	やや凹凸あり。光沢なし。	弱	なし
３－イ－２	3.3	2.3	0.18	青黒色～黒褐色	平滑である。やや光沢あり。	平滑である。光沢ややあり。	弱	あり
３－イ－３	2.9	1.8	0.10	青黒色～黒褐色	平滑である。光沢あり。	平滑である。光沢なし。	弱	なし
３－ロ－１	6.3	3.3	0.30	青黒色～黒褐色	やや凹凸あり。光沢あり。	やや凹凸あり。光沢なし。	強	あり
３－ロ－２	4.0	2.5	0.40	青黒色～黒褐色	やや凹凸あり。光沢あり。	やや凹凸あり。光沢なし。	強	あり
３－ロ－３	4.1	2.4	0.12	青黒色～黒褐色	平滑である。光沢あり。	ゆるやかな波状。やや光沢あり。	強	あり



資料番号３

資料番号４

出土状況	遺跡名	沖手遺跡			遺物No	4			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	４区　26Ｆ			時期：根拠	中世：出土土器				マクロ	○	
試料記号	検　鏡：OKT-4 化　学：　— 放射化：　—	計測値	長さ　14.6cm 幅　8.1cm 厚さ　3.7cm	色調	表：青黒色	遺存度	破片			検鏡 硬度 EPMA	◎ ○	
					地：青灰色	破面数	６以上			X線回折 化学 耐火度	○	○
遺物種類（名称）	炉壁（溶解炉）		重量　482.78ｇ	磁着度	4	前含浸	—			カロリー 放射化		
				メタル度	M（◎）	断面樹脂	○			X線透過		
観察所見	鋳造に使用された溶解炉の炉壁片と考えられる。内面は生きているが、全側面及び外面側はすべて破面である内面には上方から下方へ垂れ落ちた銑鉄塊が４か所認められる。銑鉄塊の大きさは、0.5～1.5cm大で、メタル度はM（◎）レベルのものまである。縦断面は、下から1/3までは斜め方向に上がり、そこから屈折して上方へ垂直に立ち上がるかたちとなっている。このことから溶解炉の基底部付近から立ち上がり部分にかけての破片と推測される。横断面は、ゆるやかな弧状になっていることから、炉の内形は、円形もしくは楕円形であったと考えられる。炉の内面側は被熱によって厚さ１cm程度が黒色ガラス質に滓化し、その外側は青灰色に還元している。胎土には、３㎜以下の石英や白色礫を多く含み、スサはわずかに見られる程度である。											
分析部分	長軸端部3/7を直線状に切断し、炉壁として分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。											
備考	本遺跡では鍛冶関連遺物のほか、鋳造関連と見られる遺物も出土している。本資料の内面には銑鉄塊が付着しているが、分析にあたっては、この部分についても顕微鏡観察を行うこと。											

資料番号５

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	9			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	１区　９Ｎ２層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		
試料記号	検　鏡：OKT-5 化　学：OKT-5 放射化：　—	計測値	長さ　3.9cm 幅　2.8cm 厚さ　1.7cm 重量　20.76ｇ	色調	表：オリーブ黒色	遺存度	ほぼ完形		検鏡 硬度 EPMA	○ ○	
					地：黒色	破面数	1		X線回折 化学 耐火度	○	
遺物種類（名　称）	椀形鍛冶滓			磁着度	5	前含浸	—		カロリー 放射化		
				メタル度	錆化（△）	断面樹脂	—		X線透過		

観察所見　平面、不整楕円形の小型の椀形鍛冶滓。側面の一部に小破面が見られるがほぼ完形のものである。上面はほぼ平坦で、側面から下面にかけては整った椀形をしている。滓質はやや緻密であるが、２㎜大の気孔も散見される。

分析部分　長軸端部２/５を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。

備　考　本資料は、分析資料№１と同様の小型の椀形鍛冶滓である。本遺跡の椀形鍛冶滓には、これらと比較して、分析資料№７のような中型のものや、分析資料№６のような大型のものもある。こうした大きさの違いは、鍛冶作業における原料や工程などの差を表すものなのか、注目される。

資料番号６

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	15			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	２区　Ｐ484		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ	○	
試料記号	検　鏡：OKT-6 化　学：OKT-6 放射化：　—	計測値	長さ　13.0cm 幅　9.8cm 厚さ　5.7cm 重量　866.10ｇ	色調	表：褐色、暗青灰色	遺存度	破片		検鏡 硬度 EPMA	◎ ○ ○	
					地：オリーブ黒色	破面数	５以上		X線回折 化学 耐火度	○	
遺物種類（名　称）	椀形鍛冶滓			磁着度	5	前含浸	—		カロリー 放射化		
				メタル度	Ｈ（○）	断面樹脂	○		X線透過		

観察所見　平面、不整楕円形の大型の椀形鍛冶滓である。側面は、右端部を除いて全てが破面である。上面は中央がやや窪み、右下手側には瘤状の高まりが１か所見られる。下面は整った椀形をしており、１㎝以下の木炭痕が散見される。外面は全体的に褐色の酸化土砂が付着しているが、下面では部分的に土砂が付着せず、暗青灰色の滓部表面が観察できる。磁石に対しては、全体的に若干反応するものの、資料中に鉄部のまとまりが存在するのか不明である。

分析部分　長軸端部１/８を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備　考　本遺跡では最も大型の椀形鍛冶滓である。

資料番号７

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	16			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	１区　９Ｍ２層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ	○	
試料記号	検　鏡：OKT-7 化　学：OKT-7 放射化：　—	計測値	長さ　5.8cm 幅　4.6cm 厚さ　2.3cm 重量　62.05ｇ	色調	表：褐色、暗赤褐色～オリーブ黒色	遺存度	破片		検鏡 硬度 EPMA	◎ ○	
					地：オリーブ黒色	破面数	2		X線回折 化学 耐火度	○	
遺物種類（名　称）	椀形鍛冶滓			磁着度	8	前含浸	—		カロリー 放射化		
				メタル度	Ｍ（◎）	断面樹脂	○		X線透過		

観察所見　平面、不整形の椀形鍛冶滓である。上手側の側面は破面である。上面は流動状の質感を持ち、色調はやや紫色をおびた暗赤褐色である。右端部と手前側には流れ出したようにも見える突出部が存在する。下面は整った椀形をしており、色調はオリーブ黒色である。滓質は緻密で、破面中には気孔はあまり見られない。資料の左側半分が磁石に対して強く反応することから、こちらに鉄部のまとまりがあるかもしれない。

分析部分　長軸端部１/４を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。

備　考　上手側の側部が大きく失われているが、資料の厚みなどから見て、中型の椀形鍛冶滓と考えられる。ただし、上面に流動状の質感があることから、製錬炉に伴う流動滓、あるいは精錬鍛冶工程で生じた流動滓の可能性も残される。

資料番号８

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No.	27			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	４区　17Ｉ２層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		○
試料記号	検　鏡：OKT-8 化　学：　— 放射化：　—	計測値	長さ　5.1cm 幅　3.4cm 厚さ　2.6cm 重量　57.08ｇ	色調	表：褐色 地：黒褐色	遺存度 破面数	ほぼ完形? 1		検鏡 硬度 EPMA		◎ ○
遺物種類（名称）	鉄塊系遺物			磁着度	6	前含浸	—		X線回折 化学 耐火度		
				メタル度	Ｈ（○）	断面樹脂	○		カロリー 放射化		
									X線透過		○

観察所見　錆膨れや酸化土砂の付着により、外見では平面形が不整台形状となる鉄塊系遺物である。しかし、透過Ｘ線像によれば、本来は直角三角形状のものであったと推測される。右側端部では酸化土砂や錆が剥がれ落ち、鉄部が姿を現している。この部分から判断するなら、鉄部の厚さは1.5cm程度で、断面形は台形状になるようである。遺物の形状や錆化の具合から鍛造されたものの可能性があるが、鉄製品とすれば何になるのか判断しづらい資料である。

分析部分　長軸端部２/５を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。

備　考　鍛錬された鉄塊系遺物の可能性が考えられるが、鉄器とは断定できない資料である。鍛錬工程途上の未成品（半製品）ということも考えられるのではないだろうか。

資料番号９

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No.	32			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	３区　12Ｌ１層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		○
試料記号	検　鏡：OKT-9 化　学：OKT-9 放射化：　—	計測値	長さ　7.6cm 幅　4.6cm 厚さ　3.1cm 重量　90.75ｇ	色調	表：褐色 地：暗褐色	遺存度 破面数	ほぼ完形 2		検鏡 硬度 EPMA		◎ ○
遺物種類（名称）	含鉄鉄滓or 鉄塊系遺物			磁着度	9	前含浸	—		X線回折 化学 耐火度		
				メタル度	Ｍ（◎）	断面樹脂	○		カロリー 放射化		
									X線透過		○

観察所見　平面、不整形な含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。表面は錆に覆われているが、全体的に滑らかな丸みをもっており、流動した状態で形成されたものと推測される。メタル度はＭ（◎）レベルで、とりわけ大きくはないものの、銑鉄系の鉄塊になる可能性も考えられる。左側上面は瘤状に膨らんでいるが、酸化土砂の付着によるものとみられる。透過Ｘ線像では資料中に気孔が入っているようである。

分析部分　長軸端部１/４を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。

備　考　鍛冶・鋳造原料として用いられた銑鉄塊の可能性の考えられるものである。もし、この推測が正しければ、この時期における鍛冶・鋳造原料の流通形態の一端を示す資料となる。

資料番号10

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No.	36			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	４区　18Ｊ２層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		○
試料記号	検　鏡：OKT-10 化　学：　— 放射化：　—	計測値	長さ　3.9cm 幅　2.9cm 厚さ　2.6cm 重量　40.05ｇ	色調	表：褐色 地：黒褐色	遺存度 破面数	破片 4以上		検鏡 硬度 EPMA		◎ ○
遺物種類（名称）	含鉄鉄滓or 鉄塊系遺物			磁着度	6	前含浸	—		X線回折 化学 耐火度		
				メタル度	Ｌ（●）	断面樹脂	○		カロリー 放射化		
									X線透過		○

観察所見　平面、不整四角形の含鉄鉄滓、もしくは鉄塊系遺物である。表面は褐色の錆に覆われているが、錆化のため放射状にひび割れが入り、側面から下面にかけて錆や鉄部の一部が剥がれ落ちている。破面を見る限りでは、黒褐色の鉄部が見られるのみで、滓部は確認できない。このことから鉄塊系遺物とした方がよいかもしれない。

分析部分　長軸端部１/２を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。

備　考　本遺跡では、この資料のほかにも不定形な小塊状の含鉄鉄滓、もしくは鉄塊系遺物が多く見られる。これらは鍛冶・鋳造の原料として搬入されたもの、あるいは鍛冶工程途中のものと考えられる。金属学的な分析を通じて、これらの位置づけを考えることとしたい。

資料番号11

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	37			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	4区　18Ｊ２層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		○
試料記号	検　鏡：OKT-11 化　学：OKT-11 放射化：　—	計測値	長さ　5.6cm 幅　3.5cm 厚さ　2.4cm 重量　46.05ｇ	色調	表：褐色	遺存度	ほぼ完形?		検鏡 硬度 EPMA		◎ ○ ○
					地：赤褐色	破面数	5		X線回折 化学 耐火度		○
遺物種類（名　称）	含鉄鉄滓or 鉄塊系遺物			磁着度	7	前含浸	—		カロリー 放射化		
				メタル度	L（●）	断面樹脂	○		X線透過		
観察所見	不整形な形状で、表面が褐色の錆で覆われていることから、含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物とした。銹化によって放射状のひび割れが入り、錆が剥落した部分も見られる。こうした部分を見る限りでは、赤黒色の鉄部が見られるのみで、滓部は確認できない。このことから鉄塊系遺物の可能性の方がより高いと考えられる。										
分析部分	長軸端部１/３を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。										
備　考	不定形な含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物で、分析資料No10と同様に、鍛冶・鋳造原料として搬入されたものか、鍛冶工程途上のものと考えられる。										

資料番号12

出土状況	遺跡名	沖手遺跡		遺物No	39			分析	項目	滓	メタル
	出土位置	1区　11M２層		時期：根拠	中世：出土土器				マクロ		○
試料記号	検　鏡：OKT-12 化　学：OKT-12 放射化：　—	計測値	長さ　5.9cm 幅　3.5cm 厚さ　2.2cm 重量　59.19ｇ	色調	表：灰黄色	遺存度	ほぼ完形?		検鏡 硬度 EPMA		○ ○ ○
					地：黒色	破面数	3以上		X線回折 化学 耐火度		
遺物種類（名　称）	鉄塊系遺物			磁着度	11	前含浸	—		カロリー 放射化		
				メタル度	L（●）	断面樹脂	○		X線透過		
観察所見	平面、不整四角形状の鉄塊系遺物である。上下面、及び左右側面と上手側面は、灰黄色の錆や酸化土砂に覆われている。下手側の錆や酸化土砂が剥がれ落ちた部分から、厚さ1.5cm程度の厚板状のものと判断される。上面は平坦気味ではあるが、やや丸みをもって膨らんでいる。上下面と側面の間には明瞭な稜線が認められるが、側面の断面形は丸くなっている。左下手側の隅部も丸みをおびている。一見、鍛錬された割鉄状の鉄塊のようにも見えるが、銑鉄塊の可能性も考えられる。										
分析部分	長軸端部３/５を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面樹脂塗布。残材返却。										
備　考	形状から銑鉄塊、もしくは鍛錬工程途上の鉄塊、あるいは半製品の可能性がある。分析結果をふまえて判断したい。										

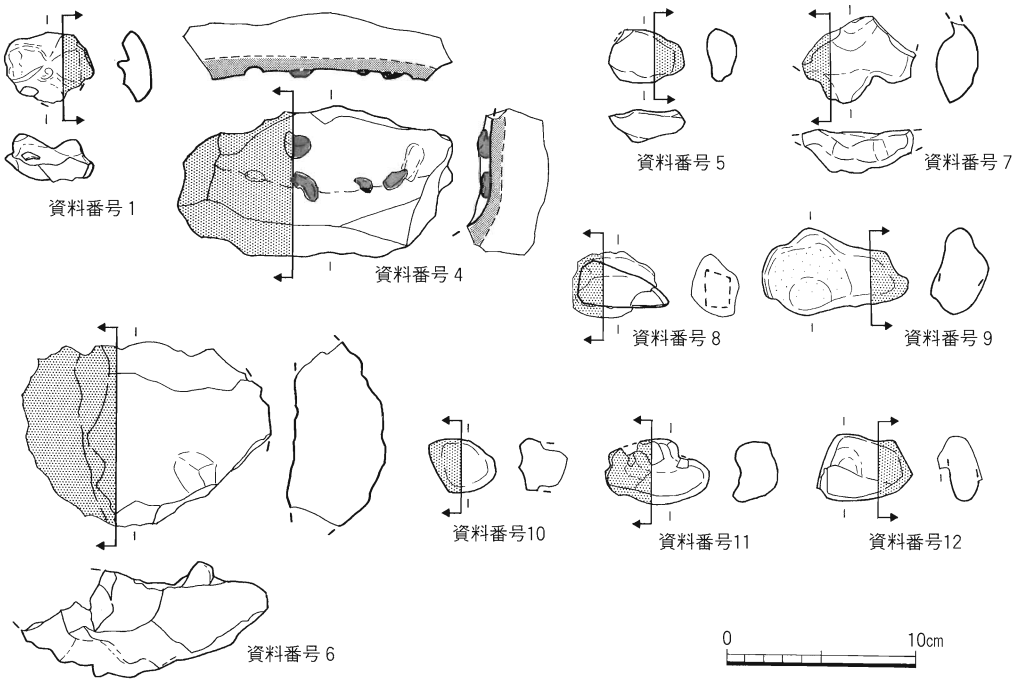
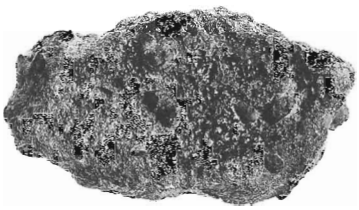
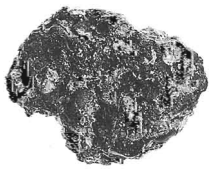


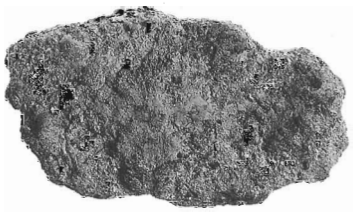
図１　鍛冶・鋳造関連遺物分析資料切断位置（S＝ 1/4）

資料番号１（表）

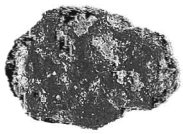

資料番号４（表）

資料番号６（表）


資料番号１（裏）


資料番号４（裏）

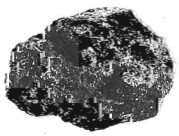
資料番号６（裏）


資料番号５（表）

資料番号７（表）

資料番号８（表）

資料番号10（表）


資料番号５（裏）

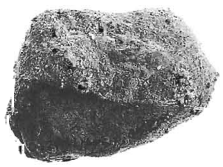
資料番号７（裏）

資料番号８（裏）

資料番号10（裏）

資料番号９（表）

資料番号11（表）


資料番号12（表）

資料番号９（裏）

資料番号11（裏）

資料番号12（裏）

沖手遺跡鍛冶・鋳造関連遺物分析資料

第 4 節　沖手遺跡の鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的分析調査

JFEテクノリサーチ株式会社
分析・評価事業部
埋蔵文化財調査研究室

１．はじめに

島根県益田市久城町に所在する沖手遺跡から出土した鉄関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土鉄滓の化学成分分析、外観観察、ミクロ組織観察等にもとづき、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

２．調査項目、考古学的観察、試験方法

遺構の機能や工程を把握するため各資料について永久磁石と小型金属探知器により着磁度測定と遺存金属の検知を行なう。加えて、考古学的な観察も併せて遺物の種類を推察し、資料の採取位置などを決定した。観察には写真撮影も含めている。

（１）調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表１に示す。

（２）外観観察

資料の各種試験用試料を採取する前に、外観を㎜単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。観察は全体形状、完形か、破片か、破面や断面の状況、気孔の有無、木炭などの痕跡、付着物、錆化鉄の状況などを観察する。資料の種別等は提供された資料と観察結果を併せて判断した。資料の出土位置は提供資料に準拠した。

（３）調査方法

（ｉ）着磁力調査

直径30㎜のリング状フェライト磁石を使用し、６㎜を１単位として35㎝の高さから吊した磁石が動き始める位置を着磁度として数値で示した。

（ii）金属検知

遺物内の残存金属の有無は金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5㎜φｘ1.5㎜Ｈ、2.0㎜φｘ2.0㎜Ｈ、５㎜φｘ５㎜Ｈ、10㎜φｘ10㎜Ｈ、16㎜φｘ16㎜Ｈ、20㎜φｘ20㎜Ｈ、30㎜φｘ30㎜Ｈ）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

（iii）化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

・全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
・金属鉄（M.Fe）：臭素メタノール分解－EDTA滴定法。
・酸化第一鉄（FeO）：二クロム酸カリウム滴定法。
・酸化第二鉄（Fe_2O_3）：計算。　・化合水（C.W.）：カールフィッシャー法。
・炭素（C）、イオウ（S）：燃焼－赤外線吸収法。

・ライム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マンガン（MnO）、酸化ナトリウム（Na_2O）、珪素（Si）、マンガン（Mn）、リン（P）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、アルミニウム（Al）、ヴァナジュム（V）、チタン（Ti）：ICP発光分光分析法。
・シリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化リン（P_2O_5）、酸化カリウム（K_2O）：ガラスビード蛍光Ｘ線分析法。但しCaO，MgO，MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光Ｘ線分析法を選択。
・酸化ナトリウム（Na_2O）：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe_2O_3、シリカSiO_2、アルミナAl_2O_3、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa_2O、酸化カリウムK_2O、二酸化チタンTiO_2、酸化マンガンMnO、酸化リンP_2O_5、コバルトCo、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

羽口・胎土成分は、13成分（全鉄T.Fe、酸化鉄FeO、シリカSiO_2、アルミナAl_2O_3、ライムCaO、マグネシアMgO、化合水C.W.、灼熱減量Ig.Loss、二酸化チタンTiO_2、酸化マンガンMnO、酸化ナトリウムNa_2O、酸化カリウムK_2O、炭素C、）を化学分析している。なお、粘土については産地検討のためルビジュウムRb　とストロンチュウムSrについても分析した。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

（ⅳ）顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬・鍛造工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイタール（５％硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および 400倍で撮影を行う。必要に応じてマクロ観察、実体顕微鏡（５倍～20倍）による観察もする。

（ⅴ）ＥＰＭＡによる観察

電子線プローブマイクロ分析（Electron Probe Microanalysis）では、複雑な鉱物組織の微小域の元素分布・定性分析による組織同定を目的としている。

真空中で試料面（顕微鏡観察の試料を併用）の直径１～200μm程度の範囲に高速度（５～30kV）の電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を波長分散型分光器（WDX）で検出して、定性的な画像および標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行うことができる。複合化合物の解析に有効であり、試料表面の微小部分（200μm程度以下の範囲）に存在する元素の濃度分布を測定でき、光学顕微鏡による視野（100～500倍、500μm）を同時に観察する。

測定装置には島津製作所製ＥＰＭＡ－1600を用い、測定条件：加速電流15kV、試料電流0.01μA

で、電子線像（SE）と各元素（Fe，O，Si，Ti，Al，Ca，Mg）などのマッピングを画像出力する。

（vi）耐火度試験

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R 2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）及びJIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

遺物資料を粉砕し、規定（量的に少量であるから寸法は第２種の小型：幅７㎜、高さ27㎜）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分５℃で加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度とする。

３．調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて326頁～328頁に示す。表１に調査資料と調査項目をまとめた。表２、表３に資料の化学成分分析結果を、表４に耐火度測定結果を示す。

資料の切断位置を329頁に、マクロ写真、顕微鏡ミクロ組織、硬度測定圧痕を330頁～344頁に示す。EPMAのポイント分析結果を345頁～351頁に、成分分布（マッピング）を352頁～354頁に、鉱物組織の英文、化学式は一括して５.参考に示した。

各資料の調査結果をまとめ、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料の番号順に述べる。

資料OKT.１　椀形鍛冶滓、着磁度：４、メタル反応：２㎜大

外観観察：Photo.１①に示す。扁平で小型のやや楕円気味の椀型鍛冶滓である。上面の２カ所が盛り上がり暗赤色を呈している。左面の左下には白色の礫が固着し、下面には最大５㎜の礫が多数固着している。滓そのものは黒色緻密で、小さな気泡が観察される。

マクロ組織：Photo.12①に見られるように比較的均質でウスタイト（Wustite：FeO）が十分発達した組織である。

顕微鏡組織：組織の大部分（Photo.１②、③）は凝集状のウスタイト（FeO）とその背後に沈むように見える灰色のやや濃いわずかなファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）からなるが、④、⑤のようにややファイヤライトが多い部分も観察される。精錬鍛冶末期から鍛錬鍛冶初期の滓に見られる組織である。

ビッカース硬度：ウスタイト（FeO）の硬度測定圧痕をPhoto.１③に示す。硬度は448Hvでウスタイト（FeO）の通常の測定範囲の450Hv～500Hvのやや低い側にある。

EPMA調査：ポイント分析チャート１に繭玉状のウスタイトと判断される部分の分析結果を示す。FeOが98.０％でわずかにTiO_2が0.88％、SiO_2が1.14％含まれるのみでウスタイト（FeO）単相であることが確認される。チャート２、チャート３に板状ファイヤライト（2FeO・SiO_2）と微細なファイヤライト組織の分析結果を示す。化学式通り板状ファイヤライトではFeO、SiO_2が主要構成成分で、FeOが61.７％、SiO_2が35.５％でほかに少量の酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マンガン（MnO）が分布する。化学式で示されるファイヤライト（2FeO・SiO_2）に比べ酸化鉄が少なく酸化珪素が多い。微細なファイヤライトはFeOが52.２％、SiO_2が38.６％でその他の成分であるAl_2O_3やCaOなども比較的多く含有している。ポイント分析チャート４にガラス質部分の分析結果を示す。通常のガラス質と同様にSiO_2、Al_2O_2、CaO

を主要構成成分として結晶相に溶解しがたいアルカリ成分などが固溶されている。SiO_2は43.9％、Al_2O_3は23.4％、CaOは7.5％、K_2Oは6.36％などである。本資料は成分面からもウスタイト（FeO）とファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が主要鉱物相である。

化学成分：化学成分分析結果を表２に示す。全鉄（T.Fe）56.9％に対して金属鉄（M.Fe）は0.14％で金属鉄がわずかに遺存している。酸化第１鉄（FeO）は49.5％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は26.1％でFeOとFe_2O_3の比は65：35である。酸化珪素（SiO_2）は17.4％で酸化アルミニウム（Al_2O_3）は2.38％含まれている。結合水は0.40％で、ゲーサイト（Goethite：α-FeOOH）などの錆化鉄はあまり含まれないと思われる。砂鉄の指標となる二酸化チタン（TiO_2）は1.37％含まれ、始発原料は砂鉄と判断できる。塩基性成分である酸化カルシウム（CaO）と酸化マグネシウム（MgO）は0.85％と0.37％である。ガラス質成分量（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は22.00％で精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界付近の値である。酸化マンガン（MnO）は0.18％、銅（Cu）は0.002％とわずかである。硫黄（S）は少なく0.007％である。精錬鍛冶末期から鍛錬鍛冶初期の成分系である。

図１、２、３はこれまで蓄積してきた600点以上の調査結果に基づき、鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図である。図１は二酸化チタン（TiO_2）含有量と全鉄（T.Fe）の関係、図２造滓成分量（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）と全鉄（T.Fe）の関係、図３は$MnO/TiO_2$と$TiO_2$/T.Feの関係を示す。図１では鍛錬鍛冶滓の境界に近い精錬鍛冶滓の領域にある。図２では造滓成分量が多く精錬鍛冶滓に類別される位置にある。図３では精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界付近の位置づけにある。

以上の結果を総合的にみると、本資料は精錬鍛冶工程の末期から鍛錬鍛冶工程の初期に生成した滓と推察される。

資料OKT２－イ－１　粒状滓、着磁：弱、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.１⑥に示す。光沢のある黒色でややいびつな球状である。小突起がある。

マクロ組織：Photo.１⑦に示す。試料全体は激しく発泡し、外周部は風化している。弱磁着の理由と思われる。

顕微鏡組織：Photo.１⑧～⑩に示す。白色粒状のウスタイト（Wustite：FeO）とガラス質主体の組織である。試料には鍛造剥片も巻き込まれている。ウスタイト主体であるが一部にはマグネタイトも観察される（⑩）鍛錬鍛冶工程で生成したことを示している。

資料OKT２－イ－２　粒状滓、着磁：弱、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.２①に示す。光沢のない黒色でわずかにいびつな球状を呈し、小突起が見られる。

マクロ組織：Photo.２②に示す。試料全体は激しく発泡し、内部は比較的稠密だが外周側1/3は風化し疎な状態である。弱磁着の理由と思われる。

顕微鏡組織：Photo.２③～④に示す。ガラス質もなくほとんどウスタイト（Wustite：FeO）相のみで、鉄だけが酸化した様相を呈している。鍛錬鍛冶工程の中期以降に生成したと推察される。

資料OKT２－イ－３　粒状滓、着磁：弱、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.２⑤に示す。光沢のある黒褐色でほぼ球状で表面には皺が生じている。角張った小突起が見られる。

マクロ組織：Photo.２⑥に示す。内部に0.３～0.４㎜の気泡が２ヶ見られる。内部は比較的稠密だが外周側１/５は風化している。

顕微鏡組織：Photo.２⑦～⑧に示す。発泡の程度はやや少ないが資料２－イ－２と同質である。ガラス質もなく風化により周縁は疎であるが凝集ウスタイト（FeO）相のみである。鍛錬鍛冶工程の中期以降に生成したと推察される。

資料OKT２－ロ－１　粒状滓、着磁：強、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.２⑨に示す。光沢のある暗褐色で一部が削り取られたいびつな球状で気孔が見られる。

マクロ組織：Photo.２⑩に示す。内部は大きく空洞化し、半分は薄皮状の肉厚で支えられている。外縁は風化している。

顕微鏡組織（Photo.３①～②）ガラス質は少なく凝集ウスタイト（FeO）相と巻き込まれた鍛造剥片が観察される。鍛錬鍛冶工程の中期以降に生成したと推察される。

資料OKT２－ロ－２　粒状滓、着磁：強、メタル度：なし

外観観察：実態顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.３③に示す。光沢のない黒褐色でややびつな球状で、大きな孔が見られる。

マクロ組織：Photo.３④に示す。内部は大きく空洞化し、0.２～0.３㎜程度のは薄皮状の肉厚で支えられている。外縁は風化している。

顕微鏡組織（Photo.３④～⑥）ガラス質は少なく外周側は粗になり骸晶状マグネタイト（Fe_3O_4）が発達している。強磁性の理由であろう。鍛錬鍛冶工程の中期以降に生成したと推察される。

資料OKT３－イ－１　鍛造剥片、着磁：弱、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.３⑦に示す。青黒～黒褐色で表裏面ともに凹凸があり。表はやや光沢を持ち、裏面は光沢がない。

マクロ組織：Photo.３⑧に示す。厚手で平坦度を保つ鍛造剥片である。

顕微鏡組織：Photo.３⑨～Photo.３⑩に示す。王水腐食により３層分離型が確認される。微厚白色のヘマタイト（Fe_2O_3）の外層、やや明度の高い中間層のマグネタイト（Fe_3O_4）層、暗灰色のウスタイト内層みられる。ウスタイト層は凝集しているが結晶粒の痕跡を残している。鍛打中間段階の生成物と見られる。

資料OKT３－イ－２　鍛造剥片、着磁：弱、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto.４①に示す。青黒～黒褐色で表裏面ともに平滑で表面はやや光沢を持つが裏面には光沢はない。

マクロ組織：Photo. 4 ②に示す。厚手で厚みにやや偏りが見られる平坦な鍛造剥片である。
顕微鏡組織：Photo. 4 ③～Photo. 4 ④に示す。３層分離型の鍛造剥片で、外層と中間層のヘマタイト（Fe_2O_3）とマグネタイト（Fe_3O_4）層はあわせても10μm程度できわめて薄い。内層ウスタイト（FeO）は凝集・非晶質気味であるが結晶粒の痕跡を残している。王水に比較的腐食されにくい。風化の影響であろう。鍛打中間段階の生成物と見られる。

資料OKT３－イ－３　鍛造剥片、着磁：弱、メタル度：なし
外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto. 4 ⑤に示す。青黒～黒褐色で表裏面ともに平滑だが小さな粒状に荒れた面である。表面はやや光沢を持つが裏面には光沢はない。
マクロ組織：Photo. 4 ⑥に示す。やや薄手の平坦な鍛造剥片である。
顕微鏡組織：Photo. 4 ⑦～Photo. 4 ⑧に示す。かろうじて３層構造が確認される。風化により外層と中間層のヘマタイト（Fe_2O_3）とマグネタイト（Fe_3O_4）が不明瞭になったためであろう。ヘマタイトとマグネタイトあわせて10μm程度のきわめて薄い。弱磁性はこのためであろう。内層のウスタイト（FeO）層は凝集気味であるが結晶粒の痕跡を残している。鍛打中間段階の生成物と見られる。

資料OKT３－ロ－１　鍛造剥片、着磁：強、メタル度：なし
外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto. 4 ⑨に示す。２片に割れている。青黒～黒褐色で表裏面ともに凹凸があり、薄い酸化皮膜が剥離し内側の暗褐色層が露出している。表裏面ともにやや光沢を持つ。
マクロ組織：Photo. 4 ⑩に示す。厚手で平坦度を保つ鍛造剥片である。
顕微鏡組織：Photo. 5 ①～Photo. 5 ②に示す。王水腐食により３層分離型が確認される。微厚白色のヘマタイト（Fe_2O_3）の外層、やや明度の高い中間層のマグネタイ（Fe_3O_4）ト層、暗灰色のウスタイト（FeO）内層みられ、ウスタイト層は凝集している。鍛打中間段階の生成物と見られる。

資料OKT３－ロ－２　鍛造剥片、着磁：強、メタル度：なし
外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto. 5 に示す。青黒～黒褐色で表裏面ともにわずかな凹凸があり、薄い酸化皮膜が剥離し内側の黒色層が露出している。表裏面ともにやや光沢を持つ。
マクロ組織：Photo. 5 ④に示す。厚手で平坦度を保つ鍛造剥片である。表裏面とも風化が進んでいる。
顕微鏡組織：Photo. 5 ⑤～Photo. 5 ⑥に示す。王水腐食により３層分離型が確認される。微厚白色のヘマタイト（Fe_2O_3）の外層、やや明度の高い中間層のマグネタイト（Fe_3O_4）層、暗灰色のウスタイト（FeO）内層がみられ、ウスタイト（FeO）層は凝集している。鍛打中間段階の生成物と見られる。

資料OKT３－ロ－３　鍛造剥片、着磁：強、メタル度：なし
外観観察：実態顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto. 5 ⑦に示す。青黒～黒褐色で表面は裏面とも薄い酸化皮膜が剥離し内側の暗褐色層が露出し、黄色の付着物が見られる。表裏面ともにやや光沢を

持つ。

マクロ組織：Photo. 5⑧に示す。やや薄手の平坦な鍛造剥片で内外面は腐食気味である。

顕微鏡組織：Photo. 5⑨～Photo. 5⑩に示す。王水腐食によっても３層構造は不明瞭である。風化により外層と中間層のヘマタイト（Fe_2O_3）とマグネタイト（Fe_3O_4）が不明瞭になったためであろう。内層のウスタイト（FeO）層は非晶質化気味である。鍛打工程の中間から後半にかけての生成物と見られる。

資料OKT３－ロー４　鍛造剥片、着磁：強、メタル度：なし

外観観察：実体顕微鏡で撮影した拡大外観をPhoto. 6①に示す。青黒～黒褐色で表裏面ともに凹凸があり、表面は皺が寄ったように見える。わずかにさび色の褐色も見られ、光沢はあまりない。

マクロ組織：Photo. 6②に示す。やや薄手で厚みに変化のある鍛造剥片である。

顕微鏡組織：Photo. 6③～Photo. 6④に示す。王水腐食によって層構造が確認できる。内層のウスタイト層は非晶質化している。鍛打工程の後半段階での生成物と推察される。

資料OKT４　炉壁、着磁度：４～５、メタル反応：10㎜よりやや大

外観観察：Photo. 6⑤に示す。溶解炉の炉壁片で断面の湾曲の仕方から炉底部からの立ち上がりにかけての破片の可能性がある。側面はすべて破面で内面と側面には錆化した1.5㎝位の小さな鉄塊が固着している。内面は発泡ガラス化し、外面は還元雰囲気に曝されたためか青灰色を呈する。胎土には小さな礫や白色化した礫が観察される。左側破面には10㎜大よりやや大きいメタル反応がある。この部分では着磁度は５である。胎土部分をミクロ観察と耐火度測定に供し、メタル部分はミクロ・マクロ観察、分析に供する。

マクロ組織（炉壁胎土）：Photo.12③に示す。苅痕などの構造補強材は練り込まれていない。写真右側の内面から約３/４は未溶融の粒子も見られるが熱影響により素地は半溶融に近い状態である。左１/４は元の胎土を残し、石英（Quartz：SiO_2）や長石類粒子が胎土中に観察される。左下には線状にメタルが差し込んでいる（白色に見える）。また右側１/３の位置にはメタル粒も観察される。

マクロ組織（金属鉄）：Photo.12②に示す。写真中央にはねずみ鋳鉄や亜共晶白鋳鉄が観察され、写真右から下部にかけての周辺は脱炭されたフェライト組織が観察され写真上部ではパーライトの素地に粒界にフェライトが析出している。炭素濃度範囲の広い鉄が炉壁に侵入している。おそらく鋳鉄組成の粒鉄が炉壁に侵入し、これが脱炭されたものと思われる。

顕微鏡組織（胎土）：溶融が起こっていない部分では粘土質の素地に石英（Quartz：SiO_2）など粒子が観察される（Photo. 6⑥～⑦）、一方、中央付近の溶融が起こり始めており部分的では亀裂の入った未溶融の石英粒などが観察され（Photo. 6⑧）、内面近傍の溶融部では気泡のみとなり全体は均質化している（Photo. 6⑨）。写真には示していないが微粒の金属鉄が散見される。内面側近傍の溶融部には鍛冶滓や製錬滓が全く見られず、鉄の鋳造用の溶解炉炉壁片であった可能性が高い。

顕微鏡組織（金属鉄）：資料中央付近には片状黒鉛が晶出する亜共晶ねずみ鋳鉄（Photo. 6⑩、Photo. 7①）、亜共晶白鋳鉄（Photo. 7②～⑤）などが観察され、周辺は脱炭が進みフェライト単相が観察される。Photo. 7⑥は脱炭相との境界付近である。下側は脱炭が進みフェライト相になり、上側は脱炭途中のフェライトとパーライトの組織となっている。顕微鏡組織的には亜共晶鋳鉄が脱

炭を受けている状態である。

ビッカース硬度：白鋳鉄のレデブライト部（Photo. 7 ③、⑤）で588Hv、572Hvである。同じ写真のパーライト部では205Hv、167Hvでいずれも組織に見合った値である。また、片状黒鉛部（Photo. 6 ⑩）のセメンタイトとパーライトはそれぞれ787Hv、197Hvでいずれも組織に見合っている。

化学成分：化学成分分析結果を表３に示す。Ｃは0.67％で亜共析鋼（C＜0.8％）の炭素濃度で顕微鏡観察に比べ低い印象を受ける。脱炭相が顕微鏡観察以上の比率で存在するものと思われる。

耐火度：耐火度は1000℃である（表４）。相当低い耐火度で正常な値ではなく、微粒の金属鉄や酸化鉄の存在によるものと思われる。本来の耐火度はもっと高いと考えられる。

以上から本資料は鋳鉄を溶解した溶解炉の炉壁片と推察される。

資料OKT５　椀形鍛冶滓、着磁度：４～５、メタル反応：3.8㎜よりやや小

外観観察：Photo. 7 ⑦に示す。小型で上面がやや平らな楕円型の椀形鍛冶滓である。上下面とも錆や酸化土砂に覆われているが素地は黒色緻密で重量感がある。破面には小さな気孔が多く観察される。3.8㎜よりもやや小さなメタル反応があり、着磁度はこの部分で４～５である。

マクロ組織：Photo.13①に示す。気孔が多く見られ、素地は多少の濃淡は見られるものの乳白色のウスタイト（Wustite：FeO）が十分発達した組織である。濃淡はファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）あるいはガラス質の多寡によるものである。

顕微鏡組織：Photo. 7 ⑧、⑨はマクロ組織で乳白色の濃いウスタイト（FeO）が多いと見られる部分の組織で凝集状に近いウスタイト組織である。ウスタイトの背後に沈むようにやや褐色の濃い短冊状のファイヤライト（2FeO・SiO_2）が観察される。これに比べ白色がやや薄いマクロ写真右側の組織（Photo. 7 ⑩、Photo. 8 ①）ではウスタイト（FeO）に比べ短冊状、棒状のファイヤライト（2FeO・SiO_2）が多くなっている。精錬鍛冶末期から鍛錬鍛冶の初期に多く見られる組織である。

ビッカース硬度：ウスタイト（FeO）の硬度測定圧痕をPhoto. 7 ⑨に示す。硬度は404Hvでウスタイト（FeO）の通常の測定範囲の450Hv～500Hvのやや低い側にある。

化学成分：化学成分分析結果を表２に示す。全鉄（T.Fe）55.4％に対して金属鉄（M.Fe）は0.17％で金属鉄がわずかに遺存している。酸化第１鉄（FeO）は47.0％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は26.7％でFeOとFe_2O_3の比は64：36である。酸化珪素（SiO_2）は16.1％で酸化アルミニウム（Al_2O_3）は3.53％含まれている。結合水は2.19％含まれており、ゲーサイト（Goethite：α-FeOOH）などの錆化鉄が存在すると見られる。始発原料の指標となるTiO_2は0.24％とわずかで、始発原料は砂鉄か判断できない。塩基性成分である酸化カルシウム（CaO）と酸化マグネシウム（MgO）は1.30％と0.91％である。ガラス質成分量（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋Na_2O＋K_2O）は22.91％で精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界付近の値である。酸化マンガン（MnO）は0.18％、銅（Cu）は0.006％とわずかである。硫黄（Ｓ）は少なく0.072％である。精錬鍛冶末期から鍛錬鍛冶初期の成分系である。図１、２、３は鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図である。図１、図３では鍛錬鍛冶滓の領域にある。図２の造滓成分量に関しては精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界付近にある。

以上の結果を総合すると、本資料は鍛錬鍛冶工程の初期に生成した鍛冶滓と推察される。

資料OKT６　椀形鍛冶滓、着磁度：３、メタル反応：なし

外観観察：Photo.８②に示す。上面中央部がやや窪んだ大型の椀形鍛冶滓で、上面は錆が染み茶褐色を呈する。１ヶ所を除き側面はすべて破面である。破面で見ると素地は黒色で大きな気泡も認められる。下面はきれいに湾曲しており、数カ所に最大で10㎜大の木炭痕が認められる。メタル反応はなく、着磁度は３以下である。

マクロ組織：（Photo.13②）に示す。気孔に偏りはあるが、素地は全体的に均質で乳白色のウスタイト（Wustite：FeO）が十分発達した組織である。資料OKT５の乳白色の薄い部分と同程度のミクロ組織と想定される。

顕微鏡組織：Photo.８③、④に示す。全体に均質で乳白色の繭玉状や樹枝状のウスタイト（FeO）が主体で、これに崩れた板状のファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する鉱物組織である。資料OKT５と同質の組織である。

ビッカース硬度：ウスタイト（FeO）の硬度測定圧痕をPhoto.８④に示す。硬度は495Hvでウスタイト（FeO）の通常の測定範囲の450Hv～500Hvのにあり、組織に見合った硬度である。

EPMA調査：ポイント分析チャート５にウスタイト（FeO）と判断される部分の分析結果を示す。FeOが99.1％でわずかにAl_2O_3が0.90％含まれのみでウスタイトと確認される。ポイント分析チャート６にファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）と判断される組織の分析結果を示す。化学式通りFeO、SiO_2が主要構成成分で、FeOが63.9％、SiO_2が32.9％で、ほかに少量の酸化アルミニウム（Al_2O_3）が1.54％、酸化カルシウム（CaO）が0.71％、酸化マグネシウム（MgO）が0.72％、酸化カリウム（MnO）が0.30％含まれる。化学式で示されるファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）に比べ酸化鉄が少なく酸化珪素が多い。ポイント分析チャート６にガラス質部分の分析結果を示す。通常のガラス質と同様にSiO_2、Al_2O_3、CaOを主要構成成分として結晶相に溶解しがたいアルカリ成分などが固溶されている。SiO_2は40.3％、Al_2O_3は21.2％、CaOは10.4％、K_2Oは8.53％、Na_2Oは3.03％などである。ガラス質部にはP_2O_2が3.04％と比較的多く含まれている。面的に化学成分を分析した結果を２次電子線像（SE象）とともにマッピング分析結果１に各成分の分布を示す。鉄（Fe）は化学式に示されるようにはウスタイト（FeO）とファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）に分布し、ガラス質にはほとんど存在しない。珪素（Si）はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）とガラス質に分布する。アルミニウム（Al）は基本的にはガラス質に分布するが鉄とも結合してわずかにウスタイトにも分布しているように見える。カルシウム（Ca）とカリウム（K）ガラス質に分布する。本資料は成分的にもウスタイト（FeO）とファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）を主要鉱物相としている。

化学成分：化学成分分析結果を表２に示す。全鉄（T.Fe）63.5％に対して金属鉄（M.Fe）は0.28％で金属鉄がわずかに遺存している。酸化第１鉄（FeO）は64.0％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は19.3％でFeOとFe_2O_3の比は77：23である。酸化珪素（SiO_2）は11.0％で酸化アルミニウム（Al_2O_3）は2.43％含まれている。結合水は0.70％で、ゲーサイト（Goethite：α-FeOOH）などの錆化鉄は余り多くないと見られる。始発原料の指標となるTiO_2は0.16％とわずかで、始発原料は砂鉄か判断できない。塩基性成分である酸化カルシウム（CaO）と酸化マグネシウム（MgO）は0.61％と0.30％である。ガラス質成分量（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は14.86％と少なく鍛錬鍛冶滓の値である。酸化マンガン（MnO）は0.06％、銅（Cu）は0.002％とわずかである。硫黄（S）は少なく0.047％である。鍛錬鍛冶初期の成分系である。

図１、２、３は鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図である。図１、図２、図３では鍛錬鍛冶滓に位置づけられるの領域にある。

以上の結果を総合すると、本資料は鍛錬鍛冶工程の初期に生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。

資料OKT７　椀形鍛冶滓、着磁度：５、メタル反応：3.8㎜大相当

外観観察：Photo.８⑤に示す。小型の椀形鍛冶滓の破片で、上面は平らである。側面の破面で見ると滓の素地は黒色だが、上面の露出部は光沢のある暗赤褐色である。下面はきれいな椀形の局面を持ち凹部には泥土が侵入している。滓は緻密で気孔は余り認められない。暗赤褐色部に3.8㎜大相当のメタル反応があり、着磁度は５である。

マクロ組織：（Photo.13③）に示す。素地は全体的に均質でウスタイト（FeO）とファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が全面に発達している。左側上部の周縁部に見られる白色組織はゲーサイトなどの錆化鉄である。鍛冶滓に見られる組織である。OKT６の素地と同程度かややファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）の比率が高いミクロ組織と想定される。

顕微鏡組織：島状に乳白色のウスタイト（FeO）が凝集に近い状態で晶出し、その背後に沈むように棒状のファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出している（Photo.８⑥～⑧）。マクロ写真の白色のゲーサイトの周りではウスタイトが樹枝状に晶出し、ファイヤライトが多くなった組織も観察される（Photo.８⑨～⑩）。資料OKT５、６、７と同質の鍛冶系の滓である。

ビッカース硬度：ウスタイト（FeO）の硬度は398Hvで、ウスタイト（FeO）の通常の測定範囲の450Hv～500Hvよりも相当に低い。

化学成分：化学成分分析結果を表２に示す。全鉄（T.Fe）57.4％に対して金属鉄（M.Fe）は0.22％で金属鉄がわずかに遺存している。酸化第1鉄（FeO）は30.1％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は48.3％でFeOとFe_2O_3の比は38：62である。酸化珪素（SiO_2）は13.5％で酸化アルミニウム（Al_2O_3）は2.04％含まれている。結合水は2.89％と多く含まれ、ゲーサイト（Goethite：α-FeOOH）などの錆化鉄が多く含まれると見られる。始発原料の指標となるTiO_2は0.24％とわずかで、始発原料は砂鉄か判断できない。塩基性成分である酸化カルシウム（CaO）と酸化マグネシウム（MgO）は0.68％と0.43％である。ガラス質成分量（SiO_2＋Al2O_3＋CaO＋MgO＋Na_2O＋K_2O）は17.26％とやや少なく鍛錬鍛冶滓の値である。酸化マンガン（MnO）は0.12％、銅（Cu）は0.008％とわずかである。硫黄（Ｓ）は0.089％である。鍛錬鍛冶初期の成分系である。

図１、２、３は鉄滓の化学成分の特徴から製鉄工程の位置づけを検討する図である。図１、図２、図３では鍛錬鍛冶滓に位置づけられるの領域にある。

以上の結果を総合すると、本資料は鍛錬鍛冶工程の初期に生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。

資料OKT８　鉄塊系遺物、着磁度：５、メタル反応：５㎜よりやや大

外観観察：Photo.９①に示す。錆膨れにより多数の亀裂が入ったやや台形気味の鉄塊系遺物で、右側は錆が剥離し、鉄部が露出している。元の鉄は1.5㎝位の厚板状で製品化途上の遺物のように思われる。外観に比べメタル反応は５㎜大相当しかなく、遺存金属は小さく錆化が相当進んでいると見られる。着磁度は５である。

マクロ組織：（Photo.14①）に示す。中央にメタルが遺存し、周囲はゲーサイトなどの錆化鉄であ

る（下側半分の錆化鉄は試料採取時に崩壊し撮影できていない）。層状に錆化が進んだ様子や放射亀裂などが観察される。残存金属にはやや灰色の濃い炭素の高い帯状部分が左下と中央上部の２ヶ所に観察される。全体には炭素の低い組織であるが、炭素の高い部分が層状に平行して存在する。マクロ的には非金属介在物は見られない。

顕微鏡組織：パーライトの素地に初析のフェライトが粒界と粒内に析出している組織（Photo. 9 ③、④）やこれよりも炭素量が多くパーライトが多い組織（Photo. 9 ④～⑥）組織などが観察される。顕微鏡観察では非金属介在物は認められず、鍛錬などの加工痕跡も認められない。また、鉄滓は見られず含鉄鉄滓と言うよりも鉄塊系の遺物に分類されよう。顕微鏡観察では折り返し鍛錬などで見られる酸化鉄系の介在物はみられないが炭素濃度の高い帯状部が低炭素の部分を挟んで平行していることは鍛打のような圧縮の加工を受けたと推察される。しかし、結晶粒が圧縮変形しておらず再加熱を受けたも可能性がある。

ビッカース硬度：パーライト部のビッカース硬度は153Hv（Photo. 9 ⑦）、フェライト部位の硬度は115Hv（Photo. 9 ⑦）、128Hv（Photo. 9 ④）である。フェライト、パーライトともに組織見合いの硬度である。

以上の結果を総合すると、本資料は鍛打などで厚板状に加工された鉄素材もしくは製品化途上の鉄塊系遺物と推察される。

資料OKT－９　含鉄鉄滓または鉄塊系遺物→錆化鋳鉄塊、着磁度：８、メタル反応：3.8㎜大相当

外観観察：Photo. 9 ⑧に示す。丸みのある不定型な含鉄鉄滓のように思われる。鉄塊系遺物の可能性もある。全体に鉄錆で覆われ錆化膨張による放射割れも観察される。左下部に瘤状のふくらみが見られ、亀裂が生じていることから錆瘤と思われる。下面側全体に3.8㎜大のメタル反応がある。着磁、メタル反応ともにない。

マクロ組織：（Photo.14②）に示す。錆化が著しく進んでおり、中央は空洞に近い状態である。元々の金属組織を示す痕跡はマクロ的には認められない。

顕微鏡組織：Photo. 9 ⑨、⑩のように 完全に錆化せず一部金属鉄を残した状態で錆化したレデブライトの鋳鉄組織が観察される。また、完全に錆化しているが白鋳鉄の組織を明瞭に残す部分（Photo.10①）や完全に錆化しているがねずみ鋳鉄の組織を明瞭に残す部分（Photo.10②）が観察される。鉄滓は観察されず、周囲はゲーサイトなどの錆化鉄と酸化土砂のみである。

以上から、本資料はほとんど錆化した鋳鉄塊と推察される。

資料OKT－10　鉄塊系遺物、着磁度：６、メタル反応：６～７㎜大相当

外観観察：Photo.10③に示す。全体に無数の亀裂が走るブロック状の鉄塊系遺物と思われる資料で、片面は錆化鉄の褐色を呈するが反対面は錆化鉄が剥落して黒褐色を呈し、数㎜大から５㎜大の錆化鉄の集合体の様相を呈している。６～７㎜大相当のメタル反応がある。着磁、メタル反応ともにない。

マクロ組織：（Photo.14③）に示す。全体が錆化している鉄塊系遺物で金属鉄が島状に遺存し、周囲はすべて錆化鉄である。マクロ的には鉄滓は確認できない。

顕微鏡組織：深く切れ込んだ 窪みの中にわずかな滓と木炭が検出されるのみでほとんどはメタル

と錆化鉄であり、含鉄鉄滓と言うよりは鉄塊系遺物と考えられる。

金属鉄組織をPhoto.10④～⑥に示す。素地はパーライトで、結晶粒界に初析のセメンタイトが、粒内に針状のセメンタイトが析出する過共析鋼（Ｃ＞0.8％）組織である。付着していた滓と木炭の組織をPhoto.10⑦～⑨に示す。黒色のガラス質に灰白色で繭玉状のウスタイトと破損した板状のファイヤライトが晶出する精錬鍛冶後半の組織である。木炭は導管の配列などから広葉樹と推察される。

ビッカース硬度：硬度測定圧痕をPhoto.10⑥に示す。素地のパーライトで227Hv、セメンタイトで742Hv、いずれも組織に見合った硬度である。

以上から、本資料は精錬鍛冶工程の後期に生成した炭素量が0.8％よりもやや多い過共析鋼組成の鉄塊系遺物と推察される。

資料OKT－11　鉄塊系遺物、着磁度：５、メタル反応：５㎜大相当

外観観察：Photo.10⑩に示す。不定形で多数の亀裂が入った鉄塊系遺物と思われる。上下面ともに鉄錆の茶褐色を呈し、錆の剥落部は暗褐色の黒錆が露出している。資料右側に５㎜大相当のメタル反応があり、この部分で着磁度は５である。

マクロ組織：（Photo.15①）に示す。資料OKT10とよく似た金属鉄の遺存状況の鉄塊系遺物である。周囲はすべて錆化鉄で金属鉄は小さく分断された島状に遺存する。マクロ的には鉄滓は確認できない。

顕微鏡組織：Photo.11①～③に示す。すべて金属鉄とその錆化物で鉄滓は全く検出されない。金属鉄組織はほとんど全面がパーライト組織である。②に示すやや薄いピンクがかったセメンタイトがわずかに検出され、共析点（Ｃ＝0.8％）を超えた過共析鋼の炭素含有量と推察される。

ビッカース硬度：層状組織のパーライト部分で171Hv（Photo.11③の大きな方の圧痕）、層状構造が明瞭でない部分で331Hv（③の小さな圧痕）である。写真には示していないが②のような明らかにセメンタイトと見られる針状組織の硬度は563Hv、592Hvでセメンタイトであることが確認できる。

化学成分：化学成分分析結果を表3に示す。炭素（C）は1.20％で過共析鋼の範囲にある。マンガン（Mn）は0.001％以下、銅（Cu）は0.013％と少なく、始発原料が鉱石の可能性は低い。珪素（Si）0.016％、アルミニウム（Al）は0.007％、チタニウム（Ti）とバナジウム（V）は0.004％と0.002％で少なく、始発原料を砂鉄と判断するのは難しい。

以上から、本資料は炭素を1.20％含む過共析鋼組成の鉄塊系遺物と推察される。外観、滓を全く伴っていないことなどから鍛冶工程で生成した可能性が高いように思われる。

資料OKT12 鉄塊系遺物、着磁度：10、メタル反応：５㎜大相当

外観観察：Photo.⑪４に示す。錆や酸化土砂に覆われた鉄塊系遺物である。錆の剥落部から見ると厚さ1.5㎝程度の厚板状と見られ、鍛打などの加工を受けた可能性がある。上面の一部は強固に固着した酸化土砂で膨らみ、側面には亀裂が走っている。左下に５㎜大相当のメタル反応があり、着磁度は比較的大きく８である。

マクロ組織：（Photo.15②）に示す。中央に板状の金属鉄が遺存し、周囲はすべて錆化鉄である。錆化が層状に進行し、放射亀裂が観察される。金属鉄は左側と上側で炭素量が低く、右側と下側が

灰色も濃く炭素濃度が高い。資料中央最下部から右側に非常に細く伸びた非金属介在物が観察され、鍛打を受けたことを示す。

顕微鏡組織：Photo.11⑤～⑩に示す。素地はほとんど共析鋼（Ｃ＝0.8％）のパーライト組織で、わずかに結晶粒界に初析フェライトが観察される。炭素濃度は0.8％よりもわずかに少ない程度である。長く伸びた非金属介在物が観察され（⑥～⑩）マクロ写真の上下方向に加工されたものと考えられる。介在物中には数種の鉱物組織が観察されるがEPMA観察の項で詳述する。

ビッカース硬度：ビッカース硬度は247Hvと222Hvでパーライト組織に見合う硬度である。測定圧痕はPhoto.11⑥に示す。

EPMA調査：ポイント分析チャート８、９、10に非金属介在物中に観察される鉱物相のポイント分析結果を２次電子線像（SE像）とともに示す。チャート８の角張った鉱物相には75.2％と非常に高濃度の酸化チタン（TiO_2）が含まれ、Al_2O_3が12.5％、FeOが2.74％、MgOが7.85％含まれる。チャート９も同じ角張った鉱物相の分析結果である。同様にTiO_2が非常に高く74.7％含まれ、Al_2O_3が12.9％、FeOが3.01％、MgOが7.71％含まれる。ルチル（Rutile：TiO_2）に近い鉱物相と推察される。分析チャート10は介在物のガラス質と見られる部分でSiO_2が40.1％、Al_2O_3が23.2％、CaOが16.1％含まれ、通常のガラス質と異なり10.8％の高濃度のTiO_2を含んでいる。これらの高濃度にTiO_2を含む鉱物相が確認でき始発原料は砂鉄であったと推察される。介在物１の面的分析結果をマッピング分析結果２に２次電子線像（SE像）とともに各成分の分布を示す。介在物中の結晶相にはTiが高濃度に含まれている。素地のガラス質にはシリコン（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）などが分布し、AlとMgは化合物を形成しているように見受けられる。

ポイント分析チャート11、12、13、14に別な非金属介在物中に観察される鉱物相のポイント分析結果を２次電子線像（SE像）とともに示す。やや灰色が濃い角張った結晶相は酸化アルミニウム（Al_2O_3）が69.8％と高濃度で、酸化チタン（TiO_2）が15.6％、酸化カルシウム（CaO）が7.73％、酸化マグネシウム（MgO）が5.41％含まれ、アルミナにこれら成分が固溶した結晶と見られる。分析チャート12、13はルチルと見られる鉱物相でいずれも74.2％、62.9％のTiO_2を含有している。分析チャート14はガラス質部分の分析値でSiO_2、Al_2O_3、CaOが主体である。これらの結晶相とガラス質は介在物１と同質である。介在物２の面分析結果をマッピング分析結果２に２次電子線像（SE像）とともに各成分の分布を示す。介在物中の中央上の短冊状介在物はポイント分析にも見られたようにAl_2O_3を主成分とし、その他の結晶相にはTiO_2が高濃度に含まれる。また、ガラス質にはSi、Ca、Kなどが溶解している。

これらの介在物の結晶相にはTiが高濃度に含まれて始発原料は砂鉄であったことを示している。以上の結果を総合すると、本資料は砂鉄を始発原料とし、Ｃが0.8％程度に調整された鉄素材の可能性が高いと考えられる。

４．まとめ

（１）遺跡の性格

個別資料に示したように本調査では溶解炉用の炉壁を除き、資料１、資料10のみが精錬末期～鍛錬鍛冶の初期に生成したと見られ、他の資料は鍛錬鍛冶関連もしくは素材と見られるものであった。

この結果は本遺跡では鍛錬鍛冶が行われていたことを示している。また、精錬鍛冶に明瞭に係わることを示す資料はなく、鍛錬鍛冶のみが行われていた可能性も考えられるが結論づけるにはさらに調査が必要であろう。

資料４は明らかに鋳鉄の小塊を巻き込んでおり鋳鉄の溶解炉壁と推察でき、本遺跡では鋳造もなされていた可能性を示すものと言える。

（２）始発原料

資料１は1.37％のTiO_2を含有し、始発原料は砂鉄であったと推察される。また、資料12はルチル（TiO_2）と思われる高濃度にTiO_2 を含む非金属介在物検出されTiO_2の高い砂鉄が始発原料であった可能性が考えられた。その他資料については始発原料は不明である。

（３）個別資料

地区	No	遺構	調　　査　　結　　果
１区	1	１－Ｐ880	精錬末期～鍛錬初期に生成した鍛冶滓、始発原料は砂鉄
	2	１－Ｐ880	鍛錬中期以降に生成した粒状滓
	3	１－Ｐ880	鍛錬中期以降に生成した鍛造剥片
	5	９Ｎ２層	鍛錬初期に生成した鍛冶滓
	7	９Ｍ２層	鍛錬初期に生成した鍛冶滓
	11	６Ｏ２層	成分調整された鉄塊、鍛冶工程で生成？
	12	11Ｍ２層	鉄素材の可能性、始発原料は砂鉄
２区	6	２－Ｐ484	鍛錬初期に生成した鍛冶滓
３区	9	12Ｌ１層	鋳鉄塊、ほとんど錆化
４区	4	26Ｆ	鋳鉄の溶解炉壁
	8	17Ｉ２層	鉄素材もしくは製品化途中の鉄塊
	10	18Ｊ２層	精錬鍛冶から生成した鉄塊、

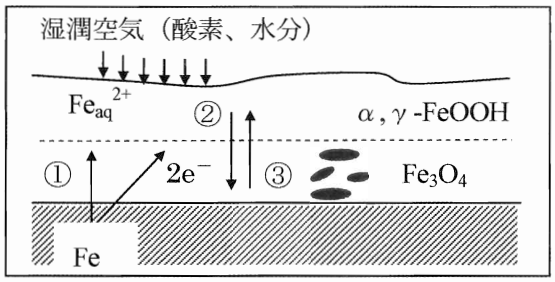
５．参考

（１）鉄滓の顕微鏡組織について：　鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表Ａ１のような鉱物組織がある。酸化鉄（Fe_2O_3、Fe_3O_4、FeO）、二酸化ケイ素（シリカ: SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）および二酸化チタン（TiO_2）を組み合せた化合物（固溶体）が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、Ｘ線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相（非晶質）を形成することがあり、Ｘ線回折では検出されない。

表Ａ１　　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名（和）	鉱物名（英）	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	α-Fe_2O_3	赤褐色～赤紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2FeO \cdot SiO_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	$2FeO \cdot TiO_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$FeO \cdot TiO_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイトイト	Pseudobrookite	$FeO \cdot 2TiO_2$	白色、針状の結晶
ハーシナイト	Hercynite	$FeO \cdot Al_2O_3$	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
ゲーサイト	Goethite	α-FeOOH	白～黄色、リング状が多い。
レピドクロサイト	Lepidocrocite	γ-FeOOH	
石英（シリカ）	Silica	α-SiO_2	白色～半透明
クリストバライト	Cristobalite	β-SiO_2	白色

（２）鉄さびの経年過程



（鉄さび層内の電気化学的酸化還元サイクル）

γ-FeOOH還元反応　（$2FeOOH = Fe_2O_3 \cdot H_2O$）

①$Fe \rightarrow Fe^{2+} + 2e^-$

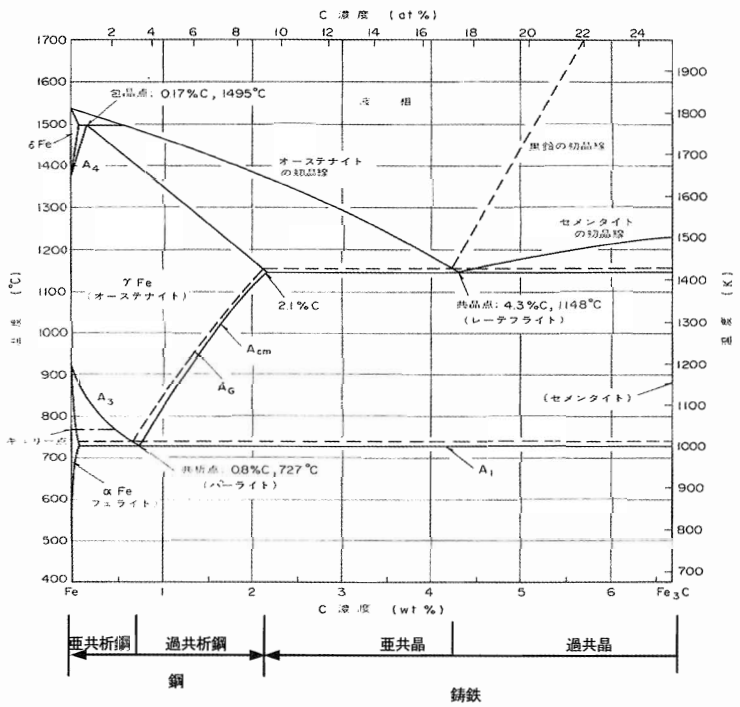
②$Fe^{2+} + 8\gamma\text{-}FeOOH + 2e^- \rightarrow 3Fe_3O_4 + 4H_2O$

Fe_3O_4再酸化反応

③$3Fe_3O_4 + 3/4O_2 + 9/2\ H_2O \rightarrow 9(\alpha, \gamma)FeOOH$

水と接触した金属鉄は水酸化鉄（$Fe(OH)_2$）またはよりアルカリ性水溶液ではオキシ水酸化鉄FeOOH（化学式$Fe_2O_3 \cdot H_2O$）（α-FeOOH、β-FeOOH、γ-FeOOH）として（③式）、沈殿する可能性がある。鉄水酸化物の水への溶解度、空気中酸素との反応によって、それらの安定性が異なる。安定なゲーサイト（Goethite: α-FeOOH）が遺物中に残存し、観察されることが多く、化合水を数％含む。オキシ水酸化鉄（γ-FeOOH：レピドクロサイト: lepidocrocite）が還元される（①②式）とマグネタイト（magnetite :Fe_3O_4）になる。X線回折では、ゲーサイトとマグネタイトが共存して検出（回折）される。また、ゲーサイト（α-FeOOH）は約200℃で脱水して、ヘマタイト（hematite:赤鉄鉱 α-Fe_2O_3）になる。上の図・式に、鉄さびの経年過程を示す。

（３）鉄ー炭素系平衡状態図



６．図表・写真

表１　調査資料と調査項目

資料No.	地区名、遺構名	資料種別	着磁度	MC反応	外観写真	マクロ組織	組織写真	化学成分	硬度測定	EPMA	耐火度
1	1－P880	椀形鍛冶滓	○	○	○	○	○	○	○	○	
2	1－P880	粒状滓（５点）	○	○	○	○	○				
3	1－P880	鍛造剥片（７点）	○	○	○	○	○				
4	4区　26F	炉壁	○	○	○	○	○	○	○		○
5	1区　9N2層	椀形鍛冶滓	○	○	○	○	○	○	○		
6	2－P484	椀形鍛冶滓	○	○	○	○	○	○	○	○	
7	1区　9M2層	椀形鍛冶滓	○	○	○	○	○	○	○		
8	4区　17I2層	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○		○		
9	3区　12L1層	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○		○		
10	4区　18J2層	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○		○		
11	1区　6O2層	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○	○	○		
12	11M2層	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○		○	○	

表２　鉄滓の化学成分分析結果（%）

資料No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	比率（%）	
											FeO	Fe_2O_3
1	56.9	0.14	49.5	26.1	17.4	2.38	0.85	0.37	0.83	0.17	65.4	34.6
5	55.4	0.17	47.0	26.7	16.1	3.53	1.30	0.91	0.68	0.39	63.7	36.3
6	63.5	0.28	64.0	19.3	11.0	2.43	0.61	0.30	0.41	0.11	76.9	23.1
7	57.4	0.22	30.1	48.3	13.5	2.04	0.68	0.43	0.50	0.11	38.4	61.6

表２　つづき

資料No.	TiO_2	MnO	P_2O_5	Co	C.W.	C	V	Cu	S	TiO_2/T.Fe	MnO/TiO_2	造滓成分
1	1.37	0.18	0.144	0.004	0.40	0.03	0.055	0.002	0.007	0.024	0.131	22.00
5	0.24	0.18	0.381	0.003	2.19	0.24	0.004	0.006	0.072	0.004	0.741	22.91
6	0.16	0.06	0.376	<0.001	0.70	0.04	0.023	0.002	0.047	0.003	0.375	14.86
7	0.24	0.12	0.268	0.005	2.89	0.55	0.006	0.008	0.089	0.004	0.500	17.26

C.W.＝化合水、造滓成分＝ SiO_2＋ Al_2O_3＋ CaO＋ MgO＋ Na_2O＋ K_2O

表３　金属鉄成分（％）

資料No	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
4 － 1	0.67	0.087	<0.001	0.072	0.016	0.010	0.041	0.16	0.040	0.003	0.003	0.018	0.004
11	1.20	0.016	<0.001	<0.002	0.040	0.013	0.021	0.018	0.007	0.002	0.004	0.002	<0.001

表４　耐火度試験結果

資料番号	耐火度（SK）	色調	膨張・収縮	試験錐の状況
OKT4	05a　1000℃	黒	普通	アバタ状
試験方法：耐火煉瓦の耐火度の試験方法（JIS　R2204）に準拠 試験条件：酸素プロパン炉法 耐火温度：ゼーゲルコーン溶倒温度比較表による				

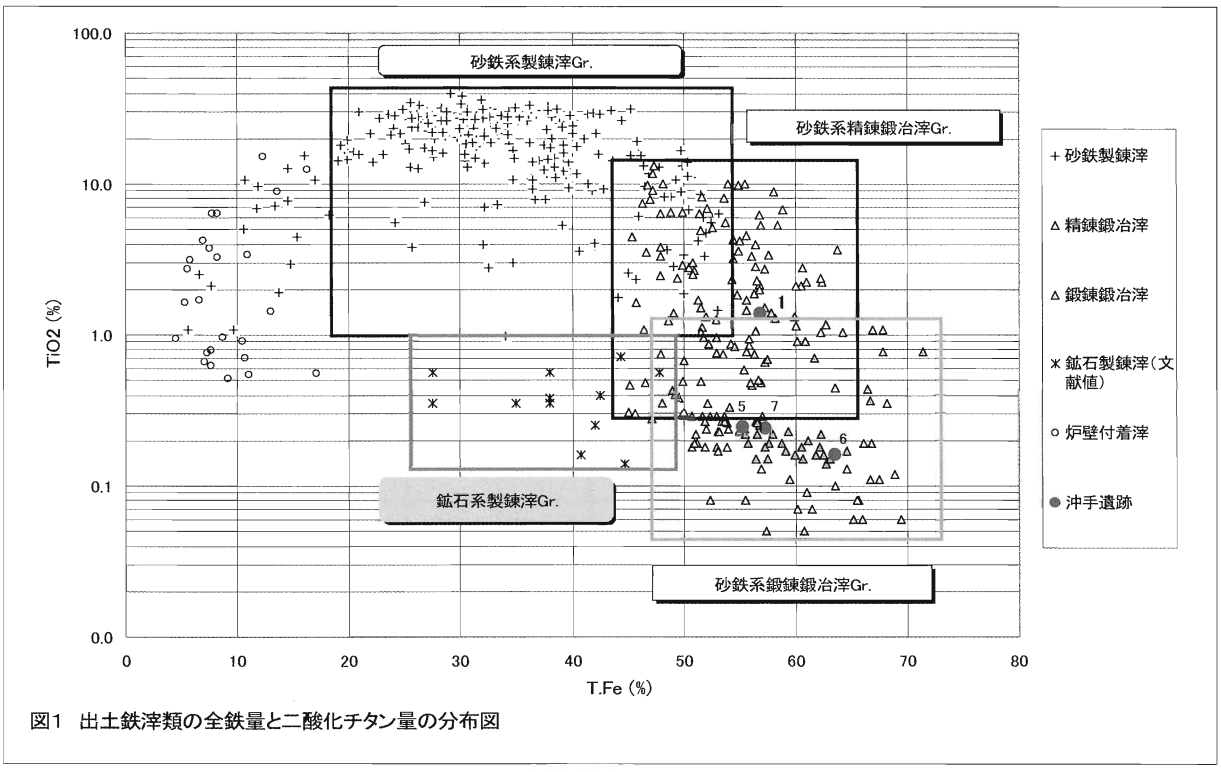


図1　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

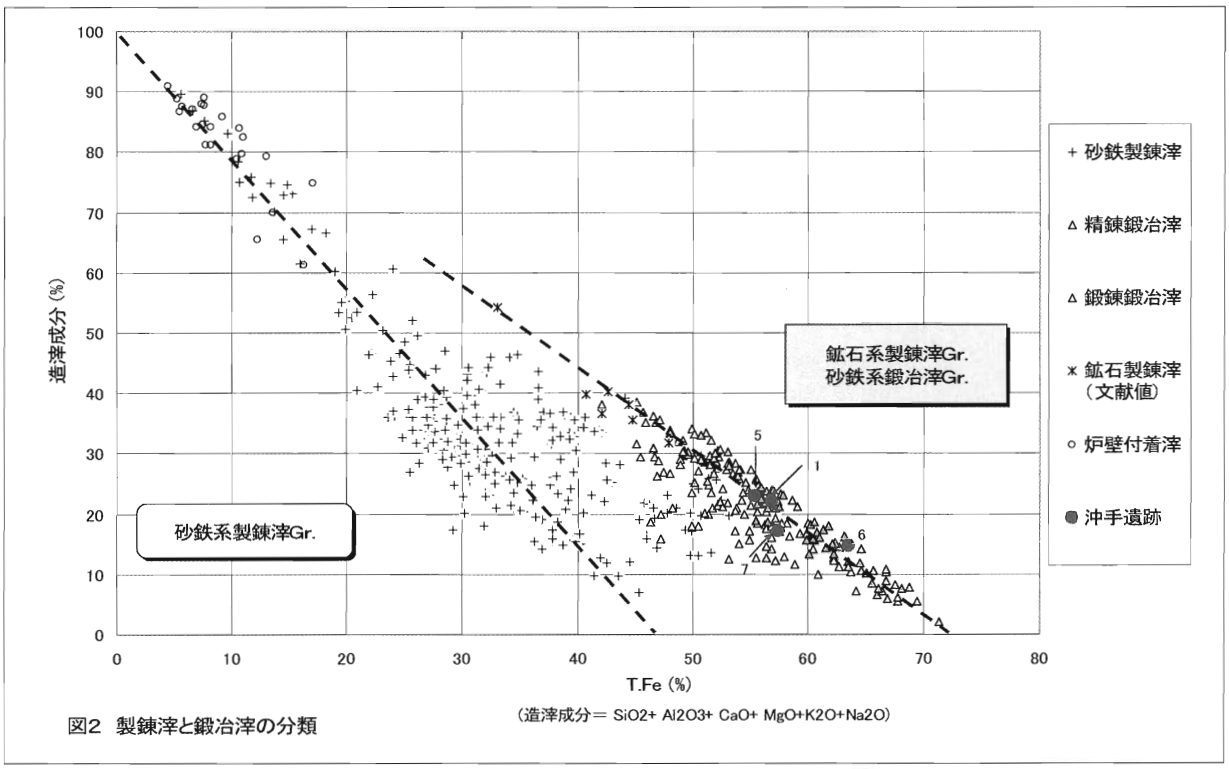


図2　製錬滓と鍛冶滓の分類

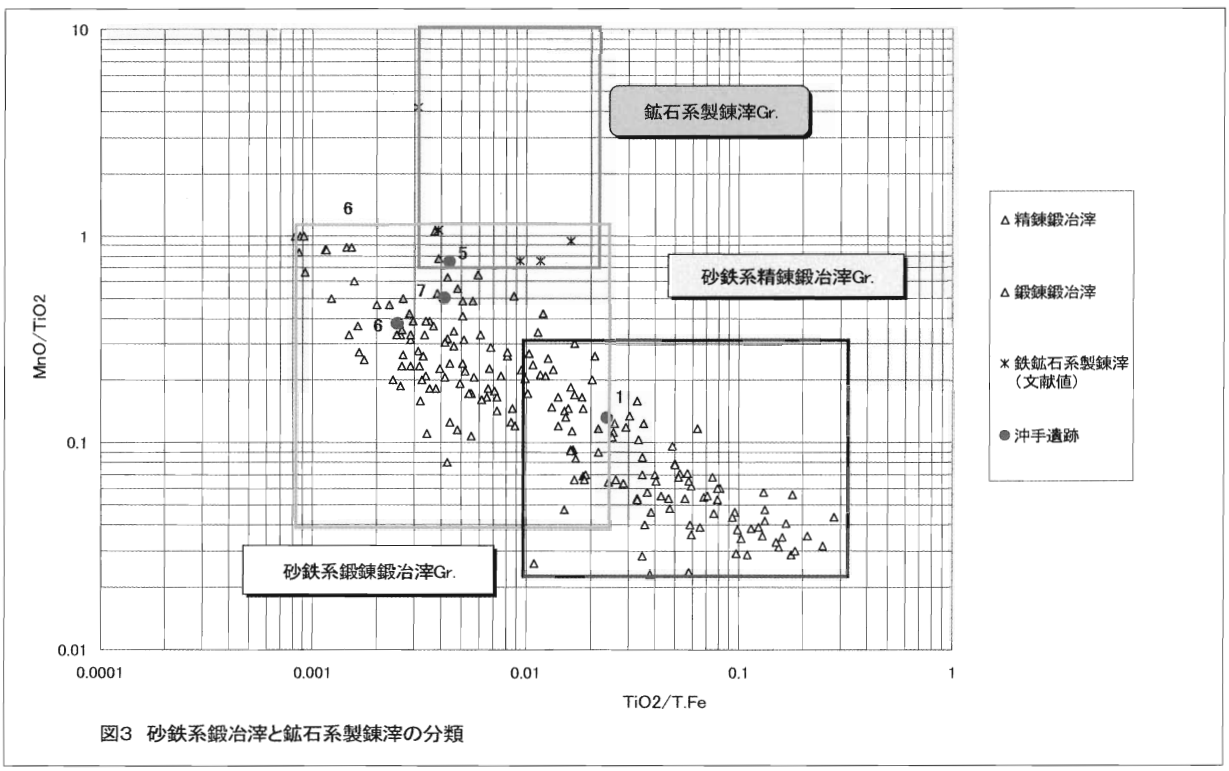
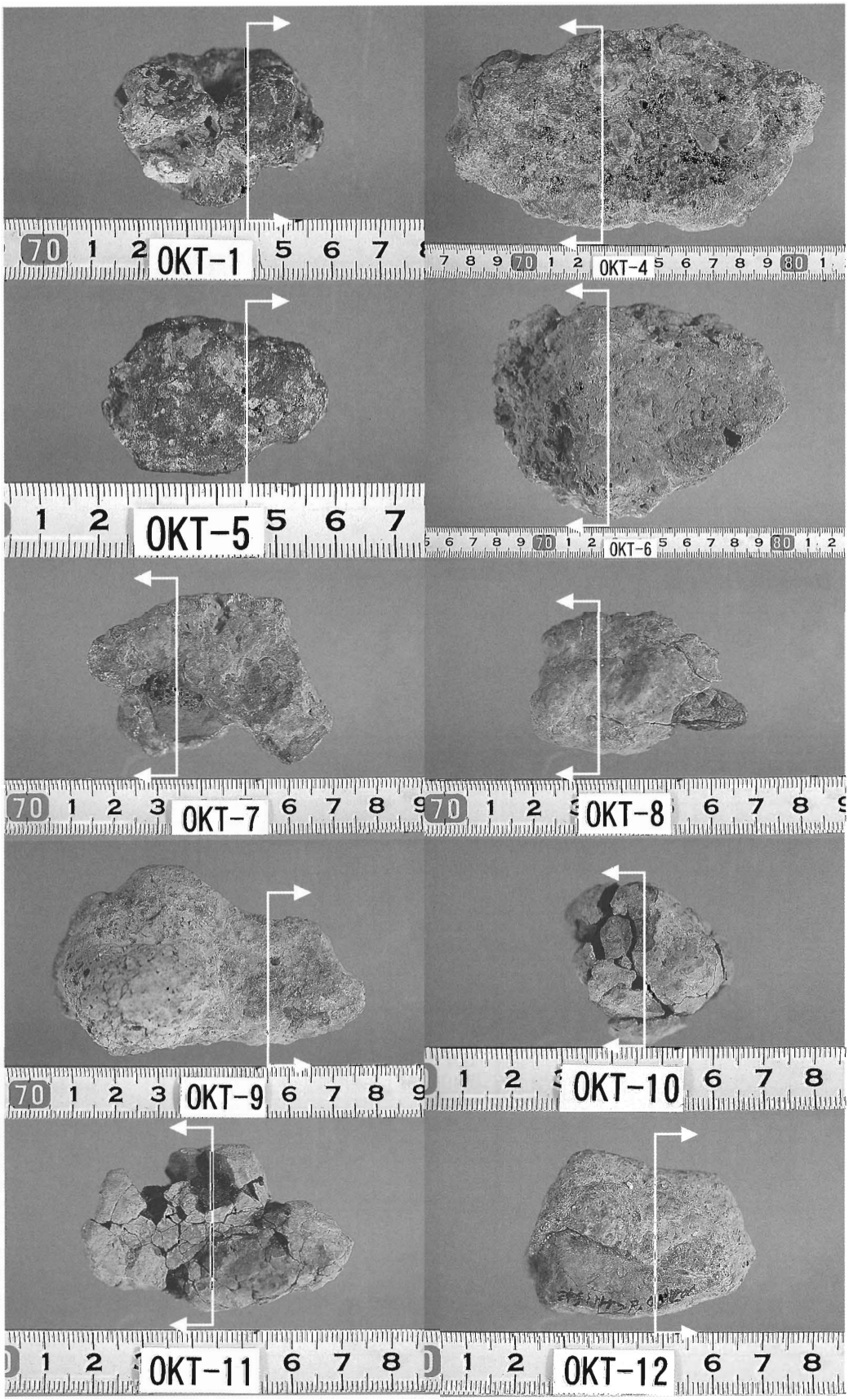


図3　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

資料切断採取位置



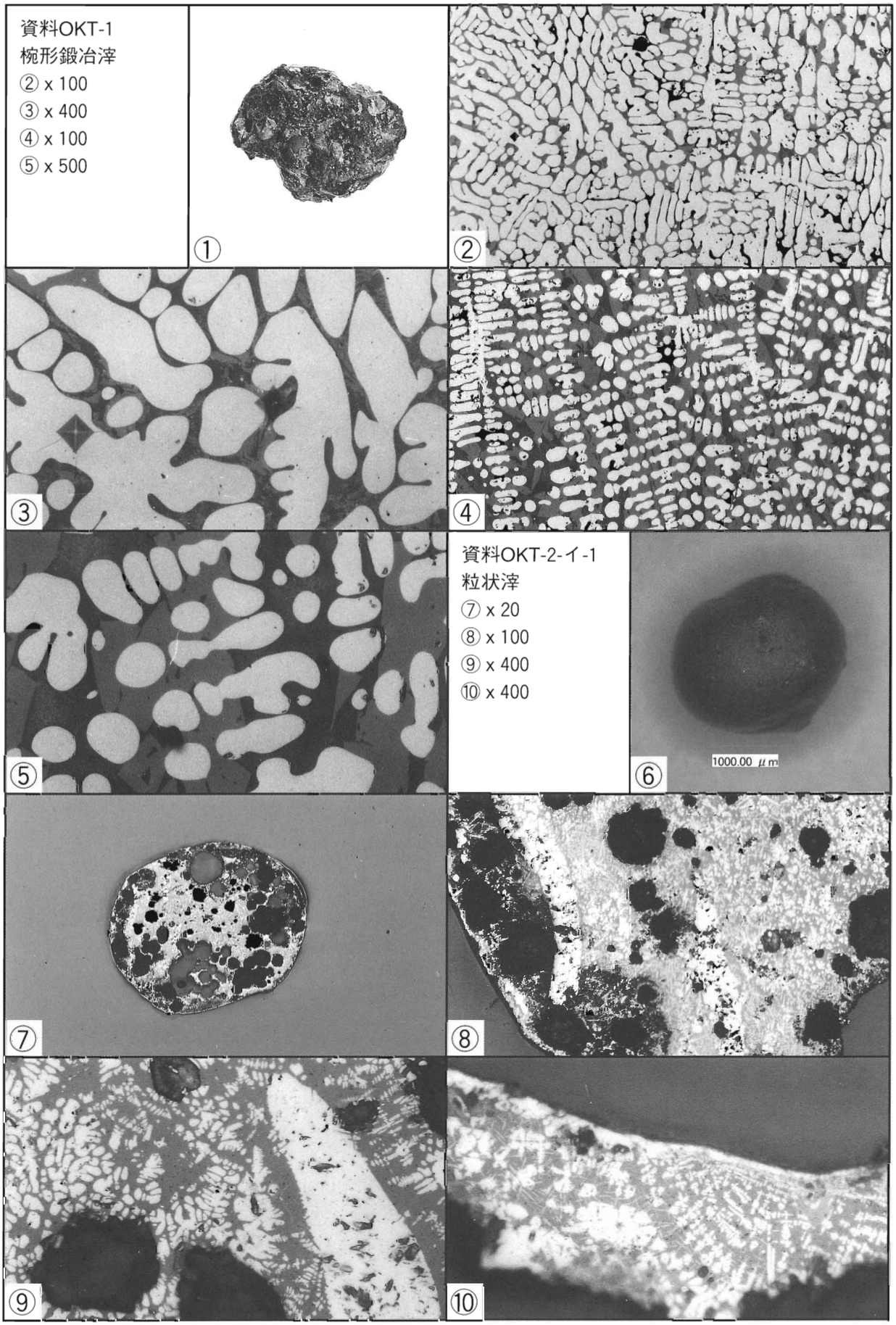

資料OKT-1
椀形鍛冶滓
② x 100
③ x 400
④ x 100
⑤ x 500
①
②
③
④
資料OKT-2-イ-1
粒状滓
⑦ x 20
⑧ x 100
⑨ x 400
⑩ x 400
1000.00 μm
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

Photo.1